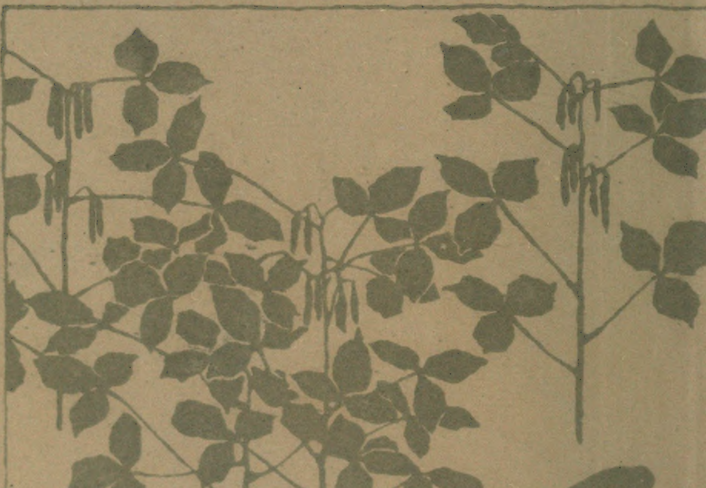




大正四年三月二十日印刷
大正四年三月廿三日發行

有朋堂文庫
修紫田舍源氏上
（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

用ひぬ故に眼病を、さいはひとしてわが心を、宥めんとての僞ならん。よし僞になきにもせよ、必ずたりし故、彼が母の花桐が、怨ならんと推量り、去頃も夫となく、御身が諫めたりしかど、雨強く降り空亂れ、物恐しき夜なんどは、おもひなしにて種々の、夢を見るのはある習、必ずともに輕々しく、驚くまじき事なり」ト、聞え給へば重ねて言はん、言葉もなくて義尙公、すごすご退き給ひけり。

氣色を、見まくほしとは思へども、もし高直が漏聞いて、中空のみかは朝霧まで、わが心つけ居たりしをと、心の底に怨みやせんと、さまぐ〜思し廻らされて、父宗入が娘を勸め、此方へ送らば高直に、よし聞えても言紛らす、かたもあらんと思せども、女は前にも言ふ如く、なかなかにやんごとなき、際の人より思ひあがり、輕々しくは出立たず、此方へ忍びておはするか、我許より送るかと、にらめ競べに打過ぎけり。

其年に京にては、山名の合戰のみにもあらず、物騒がしき事多かり。まづ室町へ雷落ち、富徽の前の御患、義尙公も御眼を煩ひ、痛堪へがたう惱み給へど、其身の病は何とも思さず、母の病氣の日に添ひて、重りまさらせ給ふを歎き、父義正に此程より、夢の中に花桐を、度々見ると宣ひしを、思ひ出でて、富徽の前の、臥し給ふ枕に近づき、僞りて宣ふ樣、「過ぎつる彌生に雷閃き、雨風烈しき其夜の夢に、いつくしき女の近く、わが傍へ步み寄るを、誰ぞやと問へばかの女、見忘れ給ふか妾こそ、此世を逝りし花桐なれ。義理ある弟の光氏君を、何とて放遣り給ふと、はたと睨むに我も亦、負けじと目と目を見合せしと、思ふ折しも曉の、鐘に目覺めて次の日より、此眼を煩ひ今に治せず。父君に聞え上げ、何卒彼を呼戾し、給ひてんや」ト宣へば、富徽の前は打笑ひ、「妾が思はず雷の、火に觸れてより惱めるは、光氏が咎を言立て、都を退け

の程を、且は悔み且は又、果敢なき者を世にありと、知召されて戯れにも、尋ね給ひし嬉しさに、涙ぐまれて身を顫はし、泣く心根を推してや、腰元千鳥が差出でて、「すべて戀路といふものは、親の目顔を忍ぶが常、夫に引換へ光氏君と、縁を結んで此家へ、止めましたいは豫てより、入道様のお願なれば、まづ押晴れての御夫婦同然、卑下あそばすも程がある。心を御籠め遊ばした、この御文をたゞに見捨て、御返もなされずは、若いに似合はぬいとあまりに、くすみ過ぎたうまれぢやと、却つて人の笑の種、ちやつとお書き遊ばせ」ト、料紙硯を持出でて、「早う〳〵」ト責め言はれて、朝霧やう〳〵筆を執り、香の薫を焚しめたる、紫の紙に墨附、濃く薄く紛はして、

　聞惱む人はあらじな田長鳥

とは我身を田舎人なりと、例の卑下して言ひたるなるべし。使歸りて光氏は、是を披いて見給ふに、手のさまも書きざまも、やんごとなき人にも劣らず、館の上臈めきたれば、京の事を思ひいで、いとをかしと思ひながら、なほ打しきりて文を遣らんも、父の許しゝ中にもせよ、流石に人目のつゝましく、二三日隔てつゝ、徒然なる夕まぐれ、物哀れなる曙なんどに、人知れず書交し、試み給ふに文に應じ、似げなからざる應答、心深く思ひ上り、都人にも恥ぢざる

古めきたれど書様の、拙からず思はるゝは、宗入が筆にてあり。娘に代りし此發句、我と同じ思ひとは、實にすき〴〵しき言ひ樣かなと、目ざましう見給ひながら、不圖惟吉が女の小袖を、肩に懸けしに目をとゞめ、「夫は何ぞ」ト問ひ給へば、すこし前へ進出で、「されば候その御返、受取りて立たんとする時、腰元女と思しき者、これを持出で御使に、たまもを祿け侍らんと、言ひつゝ肩に投懸けたり」ト申上ぐれば點き給ひ、「沖の玉藻をかづくなんど、歌にも詠めば其身を卑しき、蜑に比へて賜の、のの字を省きていひたるも、海邊にはいと便あり。都歸りの其時に、手巻へ土産にせよかし」ト、打戯れて其日は暮し、又の日に此度は、いと美しき薄様に、文の言葉は多からず、

只仰書は見るにかひなし、

と記してその奥に、

ほとゝぎす心に物を腦むかな

夜すがらに鳴明せど、やよやいかにと問ふ人も、浪の音のみいぶせくて、楫を枕の獨寢を、思遣り給ひね。

と、いと麗はしく書いて送れり。朝霧も御文に、見惚れて心はときめけど、くらべがひなき身

言へるを含めし文章なるべし。惟吉件の文を持ちて、かの住居へ行きて見るに、入道も君よりの、御音信のあらんかと、人知れず待つにやあらん、彼所に居たるらしるけれど、元より彼が願にて、これは包み隱すべき、御文にもあらざれば、しか〴〵の由言入るゝに、宗入は大きに喜び、豫て儲の酒肴、何くれと持て出でて、惟吉をさま〴〵饗應し、いとまばゆきまで醉はしつゝ、頓て娘の部屋に入り、「御返の遲なはらば、使の待わびん、はや疾く〳〵」トそゝのかせど、娘は更に聞入れず、「人の御程我身の程、まづ比べても見給へかし。此方は蜑の汐馴衣、彼方は花の香に匂ふ、錦の袖の麗しき、御文のさまに差出でて、書くべき言葉も侍らず」ト、身をかへりみて恥かしう、心地惡しとて枕に倚伏し、重ねて物も言はざれば、宗入は言わびて、せん方なさに御文を、繰返して筆を取り、

いと忝なき御文なれば、田舎模樣の振袖の、袂の中に嬉しさを、包み餘りし故ならん、

更に見分も侍らぬが、恐多さに斯くとなん、

眺むらん同じおもひの若葉時

とも言はんか、いとすき〴〵しや。

と書きたるを、惟吉はとりもて歸り、御前に差出せば、打披いて見給ふに、陸奧紙にいと甚う、

をばいみ〳〵しき、者とて見捨て給はんと、思ひ屈して居たりしが、さあらば導き給ふべきや。心細き獨寢の、慰めに」など言ひさして、扇を顔へ當て給へば、入道は限りなく、嬉しき樣に膝を進め、「思ひあかしのうら寂しさを、御獨寢に知召すとや。まして年月此渚に、友とてもなきやもめ鳥、心の中のいぶせきを、推量らせ給ひね」ト、聞え上ぐるそのけはひ、打わなゝけど人柄の、流石に卑く見做されず。光氏赧らむ顔を上げ、「されども此所の浦馴れたる、人は慰む方もあらん。我は遙々旅衣、うら悲しさに明しかね、夢も結ばぬ草枕」ト投節めきたる小唄を謠ひ、打亂れ給へる樣、愛敬づきてなまめかず、櫻に梅の匂とは、かゝる姿をいふなるべし。

宗入は多年の願、今は數々叶ひしと、心地も清しう思ひ居たるに、光氏も其儘に、打捨置かば却つて主の、思はくもいかゞぞと、又の日の晝つかた、岡部の家に文を遣す。なか〳〵かゝる浦里の、人の知らざる邊にこそ、手書歌詠み心憎き、人もあらめと殊更に、心遣し給ひて、高麗より渡りたる、胡栗色の紙に、えならず引整ひて、

　眺めわび梢をぞ訪ふ若葉時　　思ふには

と其端に、書き給ひしは古き歌に、忍ぶる事ぞ負けにける、色には出でじと思ひしものを、と

ば、夫を頼みにいかにもして、都の高き御方に、奉らんと思ふ心、深きに依りて入道が、身分に應ずる人よりして、聟にならん娶らんと、言ふを承引なさゞるゆゑ、數多の人のそねみを受け、その意趣により辛き目を、見せらるゝ折々の、多くあれども苦しみと、更に思はず打過ぎて、この老法師が命の限りは、狹き袖にも育み置かん、本意を達せぬ其中に、見捨てて果てなば海の底にも、沈んで失せよと豫てより、娘に言聞け置いたる」など、總て草紙の文章には、學ぶべくもあらぬ事ども、打泣き〱聞えたり。光氏も初めの程は、あまりに娘の藝能を、打慢ずるをいとをかしと、耳にもとめず居たりしが、流石にあはれと聞きなす節々、なきにもあらず我とても、物思はしき折なれば、人の歎も身に染みて、終には覺えず涙ぐみ、「斯くの如く某が、知らぬ世界にさまよふは、心からなす事ながら、夫だに何の報かと、思へる時もいと多し。まして御身は都にて、榮えんと云ふ望を失ひ、せん方渚に身退き、ふりをかしげの姫松を、養ひ立てても浦邊には、眺むる人のなきとの、述懷、言葉の端に現れて、いともあはれの物語、この光氏が漂へを、神の惠と斯くさだかに、思ひ知りなば其事を、など今までは告げ給はぬ。都を離れし時より猶、常なき浮世を我も知り、經を讀み珠數を繰るより、外の事なく月日を經るに、心も甚くくづほれし。かゝる祕藏の人ありとは、ほの聞きながらわが如き、いたづら人

いと太う古めきて、押色の音からびて艶なし。「伊勢の海にはあらねども、清き渚に下立ちて、拾ふ貝は何々ぞ」ト惟吉に謡はせて、光氏も拍子を取り、時々聲を添へ給ふを、琴彈さしつゝ宗入は、感に堪へて聞居たり。此日は殊に晴渡り、暑からず寒からず、程能き風の松にわたり、日はうら〳〵と南に廻り、人の心も暢やかに、憂さを忘るゝ程なれば、何をがなとて珍らしき、御果物を奉り、御側の人々にも、酒を甚く強ひなどして、又宗入は席を進み、まづ此浦に住初めし、心遣を初めとして、將後の世を勤むる樣の、物語ども殘りなく、聞ゆる果は又例の、朝霧が身の上を、問はず語りに移り行き、「憚り多き事なれど、我君の斯く覺えなき、浦邊にさまよひ在したるは、もし年頃老法師の、祈りし神や佛の憐み、暫くの中御心を、惱したるかと覺え候。其故は住吉の、神を頼め初めしより、十八年になり侍りぬ。娘が未だ幼き、其頃よりして某が、思ふ仔細のある間、年々の春秋毎に、かの御社へ朝霧を、詣らせて今に絶えず。晝夜六時の勤にも、我後の世に蓮の上に、生れん願ひは捨置きて、たゞ此人を位高く、なさしめ給へと念じ候。斯く口惜き山賤と、成下れるは前の世の、契拙き故にこそ。父は都に住居して、人に知られし者なるに、我は田舍の民となる。斯くの如くに孫彦と、次第々々に劣りなば、いかなる身にかなるべきと、悲しく思ひ侍るを、娘は生れし其時より、奇瑞の事どもありしか

ん。忍びて君の御聞に、入れたし」なんど言ひつゝも、打わなゝきて涙ぐむ、宗入の顔色を、光氏見遣りて心に點き、「さほどに琴を好ける人、ありとも知らで我儘に、調べたりしぞ恥かしき。さて最前も言ふ如く、琴は女の彈くこそ宜けれ。されば昔は大内の、官女を初め遊女までも、上手に彈きしものありしが、その筋を取立てて、傳ふる人の無くなりて、唯今の世に名を取る人々、心は至りて手は廻らず、搔撫でるのみにてあり。その知義は必定、昔の、傳を受けし人ならん。殊にわが母花桐の、父にてあれば名を聞くさへ、床しき人に手遣の、似通ひしとはいと興あり。定めし夫は女ならん、いかにしてかは聞くべき」ト、宣へば打笑ひ、「君が聞召されんには、御前に召されても、何の憚り候べき。白樂天が江州へ、流されし其時に、商人の女房が、彈ぜし琵琶を聞いたる例、引くのは恐れ多けれど、君も申さば御漂へ、賤しき女の緣竹を、聞召すのも御心慰め。琵琶はとりわけ眞の心を、彈しづむる人いにしへも、難き事に言ひたるが、彼は好める道ゆゑか、滯ふる事もなく、いと懷しき手なんどを、人に違ひて彈ずるが、あの荒き浪の聲に、交るは悲しう思ひながら、又歎かしき折々の、物紛れにはなり候」ト、琴のみならず琵琶にまで、朝霧が達したる、由を言はんと樂天が、古事をさへ言出でしを、をかしと思して琵琶と琴を、取換へて宗入が、前に押遣り給ひければ、躊躇ふ色なく搔彈く手遣、

只しどけなう彈くこそ宜けれ」ト宣へば宗入は、もし朝霧が琴を能く、調ぶる由を知召し、斯く宣ふかと打笑みて、「君が遊ばす御姿より、猶懐しき樣なる女は、絶えて世界にあるべからず。一節切を吹くべき若衆は、此所らに見えず候間、この入道が琵琶法師に、なりて御目に懸くべし」トいとをかしう珍らしき、手を二ツ三ツ彈出でたり。光氏は興に入り、「御身は文武の道のみならず、遊藝にも賢しと、豫て噂に聞きたるが、果して世にも稀なる巧手、なみ／＼の琵琶法師の、及ぶべき處にあらず」ト、賞し給へば琵琶を彈さし、「物の音は折により、所に寄るとの仰なれど、ひとつは器の善惡に、よつて上手も下手と聞え、下手も上手と聞ゆべし。今彈じたる此琵琶は、延喜帝の御手に觸れ、宇多法師と名づけし名器、傳へ／＼て丹波の郡領、間島知義が寶となる。彼は元より絲竹の、道にくはしき者なる故、宇多法師の名器を得てより、なほ旦暮に心を凝し、自然と妙を極めたりしが、かの知義は我母の、伯父なりし縁に依り、琴琵琶笛の弟子となり、年月學びて終にこの、祕藏の琵琶までゆづり受けぬ。今は年老い其上に、拙き我身をかへりみて、都を離れ世の事は、皆捨果てて何事も、忘れ果ては候へど、あまりに心結ぼれし、その折々は掻鳴し、侍りぬるを聞取りて、怪しう學ぶ者のあり。不思議や彼が調ぶる手遣、自然と間島知義に、能く似通ひしと思へるも、濱松風のみ常に聞く、わが僻耳にや侍ら

て悲しうて、思はず涙の飜れるは、確に君の御爪音。あのまア御聲の美しさ」ト、まだうら若く心ある、者は取分け身に染みて、聞居る館の構の外面、通り懸りし柴賣る老父、琴と云ふ名も知らざれど、立止りて振歸り、「何やらあぢな音がする、襟元からぞつとして、あゝ濱風を引いた樣な。くさめ〳〵」ト打過る。入道は三昧堂に、心を澄し居たりしが、不圖琴の音の耳に入り、佛を供養し奉る、法も撓みていそがはしく、再び御前に罷出で、「浮世を離れし身ながらも、いと珍らしき御手弄、承はつてその昔、都に住みて月花に、遊びし事を思ひ出で、且わが願ふ極樂の、歌舞の菩薩の音樂も、斯くやとばかり感に堪へ、老の涙は止めあへず」ト、泣く〳〵申せば琴を押遣り、「物の音は折により、所によりてさも無きに、をかしう聞ゆるものにてあり。所はあれ〳〵遙々と、滯りなき海面なり、折はなか〳〵春の花、秋の紅葉の盛りより、そこはかとなう繁れる蔭も、何となう媚かしう、夜は水鷄の打敲き、誰が門閉してと哀げに、覺ゆる時にあんなれば、いと〳〵幼きわが調も、心凄く聞えしならん」ト、物語り給ふ中に、岡邊の家に人を走らせ、此所に見えざる御遊の、道具どもを取りに遣り、すゝめ申せば光氏は、一節切を少し吹き、「折と所は前に言ひつ、また絲竹も人の程に、似合ふあり似合はぬあり。まづ琵琶は法師なるべし、一節切は若衆に能きか、琴は女の懐しき、樣にて深く心を用ひず、

二十編　下

「夫に居るのは惟吉ならずや、いつの間に來りし」ト、問はせ給へば頭を下げ、「手卷が申上げたる如く、山名の寄手は一人も殘らず、波に取られて重ねて寄する、體も無ければ調太夫と、申し談じて御留守には、彼を殘して私は、御遊の具御手道具、それかれを船に積み、たゞ今罷越したり」ト申上ぐれば、「夫こそ能けれ、此家の主の心遣、調度に不足はなけれども、手馴れし物は懐しょ。皆この座敷へ取寄せよ」ト、言捨てて只一人、二階へ上り欄干に、肱を凭せて眺むれば、今日は殊更のどやかに、海の面の陰なく、見え渡れるも住馴れし、かの嵯峨の池水に、思ひまがへて戀しさに、心も消ゆる淡路島、たゞ目の前にぞ見やらるゝ。此時に惟吉は、持たせ來りし種々の、御遊の具を運びければ、久しう手も觸れ給はぬ、琴を光氏手づからに、袋より取出し、まづ試にいと果敢なく、搔鳴し給ひけるが、御側の人々も、哀れに思へる樣なれば、氣を引立てんと調子を直し、華やかなる手のある限り、彈澄し給ふ程に、岡部の家にも聞付けて、朝霧が腰元ども、耳を澄して餘念もなく、「松の響や浪の音、夫に打あふ糸の音色、面白う

朝霧が、縫ひしとやらん承はる。御召悪く候はん」ト、言ひつゝ時計の響に驚き、六時の勤行のはや時刻、行ひ果てなばゆる〳〵と、又御目見を願はん」ト、立行く跡に光氏は、件の衣服を脱更へて、手本もなしに縫ひたるが、我身に行丈能く合ひしは、いつぞや須磨にて朝霧に、送りし小袖に較べけんと、心にをかしく突揃ふる、袂の中に縫付けて、密書と書きたる一通あり、披き見れば名も宛名も、記さゞれども千鳥の手蹟、何事のしらせかと、口の中にて讀了り、ふつと後をかへりみて、

いふ事を聞く度々、氣が揉るのはこれ千鳥、其方が皆した事ぢやと、そのお怨で御座りませう。夫程までに思召す、あなたの優い御心ばせ、御有様もなみ〳〵ならぬ、事までも誰が告げしか、彼方へ疾くに漏聞え、君にも床しう思されぬ、事はなけれど見懸とは、違うて堅い御生付。ところを私が才覺で」ト聲を潛むる此方より、「娘は何所に何して」ト、言ひつゝ出づる母眞柴、千鳥はびつくり口に袖、目交で別れ物言はぬ、山吹散りて咲かゝる、卯花月と程なくなりぬ。

朔日の朝の程、更衣に候へば、御心には叶はずとも、御著用願ふ由を、入道御前に申述べ、御羽織御袷、いろ〳〵を取揃へ、小袖の臺に堆く、積重ねて持出づれば、光氏は其體を見遣り、此頃よりして某に、宗入が侍く樣、昵近普代の家臣の如く、差控へずに事を計ひ、剰さへ今取次の、侍をも賴まずして、更衣の此衣服、うちつけに持出でしは、あまりに我を輕しめたる、振舞なりと思ひしが、不圖此頃も言出でし、朝霧の事胸に浮み、寔に是も夜の鶴、千代も明石の松ケ枝に、巢を結べよと子を思ふ、心よりなす事ならんと、思ひ許して近く取寄せ、「よしある樣に仕出でたる、色といひ綾といひ、都も及ばぬ此物好、いざ脫更へて若やがん」ト、仰を聞いて笑を含み、「若き時より武骨の拙僧、年老いたれば猶更に、いかなる物を此頃は、召させらるるか心もとめず、かゝる田舍に育ちても、女こそは知るらめと、娘に萬打任せ、人手を借らず

へば、宗入いよ〳〵恐入り、「老の僻言御耳に觸れ、君こそ嘸かし御退屈。さあらば御暇給はらん」ト引退きて夫より直樣、家内の者の移り住む、岡部の宿に急ぎ行き、妻の眞柴を側へ近付け、「今日は取分け光氏君の、御懇の仰を受け、昔今の御物語、馴々しげなる事までも、申上げしがいと氣高う、位備る御有樣、近く見上げ申す程、自然と心の改り、初め言ひたる事さへも、後には反つて恥かしく、豫てよりしてわが思ふ、娘の事も水中の、月にたとへてほのめきながら、心の儘に打出でて、聞え上げぬが今となり、口惜し」ト相語ひて、ひそ〳〵歎くを漏聞く朝霧、田舎に育つ果敢なさは、なみ〳〵の人だにも、顏やかたちの打揃ひ、醜からぬは見ぬものが、花の都の御所櫻、種の飜れて咲出でし、君が若木の御姿を、餘所に眺めし其日より、枕を取れば夢見草、覺めても現幻の、影身に添ひて親達の、もしや推して其樣に、心に懸けて給はるか、世に有難き事ながら、嵯峨に聞えし殿造、明石の浦に果敢なき苫屋、似合はぬ緣は是非なしと、心に悔みつゝくりと、物哀れ氣に彳みしが、思ひ餘りて「これ千鳥、私は其方が怨めしい」ト、突轉されて喫驚し、「見れば御目に涙を浮め、後先もおつしやらず、あの私には何お怨、と言はねばならぬ處なれど、大方は知れてある。殿樣と奥樣の、今小聲での御物語は、光氏君のたしかお噂。私が御勸め申し、蜑の姿に扮させまし、あなたの御目に掛けた故、あゝ

舍に住まふ悲しさは、聟に取るべき者のなし。土民はさておき氏も無き、諸士に添はせんより、寡でおくのがわが望。娘も同じ心にて、今日までも緣邊の、事をば嘗て言出でず。たま〱聟にと思ふ人、無きにもあらねど水の月、目に見るばかりに手に取られず。思ふ心を叶へんと、佛神をいよ〱念じ、奉れども驗も無し。あゝ儘ならざるこそ浮世なれ」ト、聞にくきまで好き折と、洩し憂へ聞ゆるに、君も去る年高直に、をかしと聞置き給ひし人、いつぞや蜑に打交り、須磨の浦へは來りしが、その時は羞らひて、差俯いて居たりしかば、姿は見れど顏をば知らず、思ひがけなく今此所へ、廻り〱て來りしも、さるべき契のあるにやと、思ひながらに罪を受け、我は流され人なれば、世の靜謐を祈るより、外に心はよも移さじ。且は嵯峨に殘りし人の、思はん事も恥かしう、氣色立ちてその答はなさず。老人なればいにしへの、事をも見知りてあらんかと、話をわきへ散しつゝ、さま〲昔の物語、せさせてつら〱聞き給ふに、思の外に徒然の、紛れともなり且は又、浮世の事に暇なく、さしも聞置き給はざる、世の古事ども遠慮もなく、打摧いて聞ゆるにぞ、かゝる所へ漂へ來て、かゝる人にも近付かずば、是等の事をば聞くまじと、最興ありと思す事まで、打交て言續け、はや黄昏となりければ、光氏は立上り、「御物語の珍らしさに、今日のみ永き日と覺えず。用もあらんに心なく、引留置きし」ト宣

いよ〳〵心を安んじて、又三五日送りつゝ、或夕暮の寂しきに、庭へ立出で池を廻り、山へ登りて思はずも、三昧堂へ入りて見るに、宗入は今行を、仕果てて退く體なりしが、光氏の來りしを、見るより大いに打驚き、席を讓りて引下り、まづ恭しく禮を述べ、「園の内とは申しながら、御近習も連れられず、此所へおはせし勿體無さ。さて朝暮に御顏を、見上げ度は候へど、老いたる者が御前へ出でなば、御氣詰と存ずる故、物隔りたる下の家に、引下りてある間、繁々には御機嫌を、窺はざるも怠ならず」ト恐入りて手をつくを、つく〴〵と見給ふに、年は六十ばかりながら、いと淸げにきたなからず、かの御佛を深く信じ、行に窶れしか、肥太りしと聞きたるに、さも無くて人柄の、打上りて宗全よりも、氣高く見ゆるは氏ある母の、血筋に依れるものならんと、心に思ひて光氏も、いと〳〵親しく言葉を懸け、「言はるゝ如く此程より、對面はせざれども、此所にて經文を、讀誦の聲は朝夕聞く。法師も及ばぬ常の行、いみじう思ひ澄されたる、心の中の床しさよ」ト、仰に少し面を上げ、「執權の望を失ひ、引籠りたる我儘者と、御征伐もあるべき處、義正公の寛仁大度、先祖は武功の家なりとて、そのまゝ所領を下し給ひ、何不足なく世を送れど、讓り與へん男子無し、是も前世の宿業と、思ひ諦め御佛に、仕へて餘念はあらざれど、只々絆は娘一人、持て煩ひたる氣色を見て、他人は笑ひ候へど、田

不思義のひとつと、言へば片攬調太夫、扇を開いて立上り、花を流すは芳野川、紅葉を流すは立田川、鎧の威は韓紅、風に散行く木の葉武者、流すは須磨の浦浪と、謠ひ奏て颯々の、聲をさまりし松の風、浪の音さへ靜まりて、はや用心には及ばねども、勝つて兜の緒を締めよと、諺にも言ふなれば、惟吉は御留守を、離れ難く候間、私が夫の名代、此事おしらせ申さんと、身裝ひする折能くも、君より度々下され物、其外御恩を請けたる蜑ども、來かゝりて樣子を聞き、さあらば船にて送らんと、言ふを幸ひ彼者等の、姿にやつして一走り。この勢にて都へ戻り、嵯峨への御返奉らん」ト、伺ひ申せば光氏は、前に認め置きたりし、紫への文渡し給ひ、「暫しの名殘を惜ませんと、今日まで須磨に留置きしが、歸りの遲きを都にて、心元なく思ふべし。我も惟吉引連れて、遠からぬ中歸洛せん、夫を賴みに日を送れ。良清は心利きたる、人を選んでこの手卷を、京の住居へ送らせよ」ト、此所へ來りし蜑どもには、反物卷絹さまぐに、例の祿を賜りければ、打喜びて聲を揃へ、「海の事なら此方が得もの、さいはひに追風は好し、大船に乘換へて、大江の岸まで送つて進じよ。姉さまござれ」ト手を取るを、力に手卷は立上り、君をはじめ人々に、別を告げて見かへりく、名殘惜しげに歸りけり。光氏豫て聞きしに違はず、此家の主は佛のみ、朝夕拜みて兄の非道に、與する體も見えざれば、

邊へ獵船とも、見えざる船を數多漕寄せ、苫反退けて立出づるは、所に似合はぬ鎧武者、隱し持ちし旗押立て、陣鐘太鼓は打つ浪の、音にまがへてどつと押寄せ、そも〳〵我々は宗全が、羽翼と頼める兵なり。光氏君に申すべき、事のありて向ふたり、疾く〳〵對面あられよと、大音揚げて呼ばはるにぞ、御留守に侍ひたる、片攪の調太夫、見越の松が枝踏占めて、其身輕げに塀の屋根、突立上つて遙に見下し、君に御目見願ひなば、烏帽子素襖、或は上下、身の程程に隨ひて、衣服を改め謹みて、申入れべき事なるに、仰々しき其出立、禮を知らざる蠅蟲ども、泥臑御門へ蹈込みなば、一人にても活けては歸さじ。光氏君ははや疾くに、明石へ移らせ給ひしかど、敵寄せ來らば斯く爲せと、豫ての御下知手配備へ、はや疾く來つて刀の切味、試よと打笑へば、寄手は小首打傾け、道々噂に聞きしに違はず、はや宗入が光氏を、迎取りしと覺えたり、彼は主人の弟ながら、兄の心に背けるしれもの、たやすくは光氏を、渡すまじとは思へども、打捨てても置き難し、一先明石へ赴かんと、取つて返すその處へ、高潮どつと打揚げて、寄手の大勢浪に漂ひ、底の水屑となり行くを、惟吉遙に打見やり、去し朔日御祓に事寄せ、怨敵退散なさしめ給へと、君が手づから形代を、海に打入れ給ひしに、其の樣違はぬ彼等の身の果。元より直なる御心にて、御祈念ありしを神の感應、あれ海上はもとの如く、凪渡りしも

子の、顔をも見ずして死ぬるかと、嘯きたる臆病者、ありても用に立たざれば、無くても更に事缺けず、夫故に召寄せたり。疾く〳〵是へ」ト目通へ、呼出してそれかれへの、御文を渡し給ひ、「汝等は是を持ち、はや〳〵都へ歸るべし。重ねて來るに及ばず」ト、物多く賜りければ、彼者どもは大いに喜び、三拜なして立歸る。跡に良清聲を潛め、「その御机に見えたるは、内君への御返事なるべし、さぞ待兼て在すべきに、何とて夫のみ殘し置き、給へるならん」ト尋ぬれば、光氏は打微笑み、「彼等に是を屆けなば、手卷が遙々下りたる、詮はあらじと歎くべし、されば手卷も諸共に、歸しやらんと思へども、絶えて久しき夫に逢ひ、物語る事あるべしと、心を察して暫しの猶豫。皆それ〳〵に故郷へ、言傳あらば暇を取らせし、侍どもに言遣れ」ト、宣ひながら立上り、向ふを遙々見渡せば、小歇なかりし空の氣色、名殘なく澄渡り、網を下し釣する蜑ども、心地よげに漕廻る、舟も手に取るばかりに見ゆ。光氏は後に控へし、良清が方を振向き、「須磨はいと心細く、蜑の岩屋も希なりしが、此所は夫には引換へて、人の繁きはうるさけれど、眺は彼所に遙に優り、哀れなる事をかしき事、多くて萬思ひ慰む、便はあり」など宣ふ折節、庭先へ群り來る、蜑の中に打交り、「御注進」ト呼ばはるは、思ひがけなき手卷なり。「そも何事の知らせぞ」ト、問はせ給へば手をつかへ、「夜もほの〴〵と明行く頃、須磨の浦

は珍らしく、蘇る樣など聞え、其外に睦しき、人々へも此程の、有樣詳しく言遣らんと、大方認め給ひしが、かの嵯峨よりして哀れなりし、文の返ははか〴〵しく、書きもやらずに打置き打置き、目を押拭ひて躊躇ふを、人も怪しと見咎めんと、やう〳〵心を取直し、

都さへも烈しき雨風、なほ此邊は高潮の、辛き目を見盡しつ。そも〳〵何の報にか、今は世を思ひ離れ、このまゝ影を隱さんかと、度々思ひ侍れど、命に換へてと宣ひし、その俤の離るゝ時無く、覺束なくもながらへて、

春を知らじ浦より遠の浦傳ひ

夢の中なる心地して、なほ覺めやらぬ程なれば、いかに僻言多からん。

トそこはかとなく書亂り、給へる處へ良清は、いそがはしけに來りしが、御涙を浮めさせられ、何事をか書き給ふと、いと見まほしく差覗き、御志いと深き、御文章は確に嵯峨の、内君への御返ならん、思し出す事どもの、さぞ多からんと推量り、倶に涙に暮れんとして、氣を取直して手をつかへ、「須磨へ殘し置かれたる、御近習の侍ども、仰に隨ひ召寄せたる、姓名是に」ト一片の、書附を差出せば、光氏取つてちらりと見、「此者どもは雷に恐れ、高潮揚るといふ噂を、聞怖なして憂ひ悶え、そも我々はいかなれば、父にも母にも遠く離れ、いとしと思ふ妻や





仄に見奉るより、老も忘れて我齢も、延ぶる心地に打笑まれ、諸人の靡き隨ふも、道理なるかな類無く、天然柔和の御顔、是に刃向ふ兄宗全、爭でか其身の安穩ならん。己も一味する時は、法師首を梟さるべきを、不思議の靈夢を蒙りて、此所へ迎へ參らするは、是住吉の御神の、助なりと心の中に、數々拜み奉り、月日の光を手に得たる、心地して御先に立ち、設けの一間に請じ參らせ、まづ有難き御入の事ども、懇に述べ終り、「さて此頃の高潮に、おぢ怖れて娘などは、岡部の宿と呼慣はす、少し離れて小高き家へ、移し住ませ候へば、此濱館に居る者は、某が召使ふ、男ばかりに侍れば、御心安く在しませ」ト、酒御果物數々を、盡して饗應大方ならず。既に前にも記したれば、山の姿のをかしげなる、渚の隈なく打晴れたる、所の樣は更にも言はず、館の造も夫に劣らず、深く心を用ひけん、立石木立物古りたる、庭に入江の水清き、その有樣を畫くとも、心の至らぬ畫師なんどは、寫し得んとも思はれず。かの須磨の假住より、此所はこよなく明かにて、屏風褥手道具など、えならぬ物を取揃へ、御座所のしつらひ設けの結構、實に都のやんごとなき、所々に異ならず、麗しく目ばゆき樣は、昔に聞えし館にも、却つて優るばかりなれば、佗しかりし須磨に引換へ、光氏は我住居へ、戻りし樣に思ひなされ、打寛いで日を重ね、いよ〳〵心鎭まりて、京へ文を送らんと、机に凭れ硯をならし、藤の方へ

二十編上

須磨より明石の其間は、たゞ這渡る程なれば、常も舟にて通ふには、片時の間に行くなれど、是は猶怪しきまで、見ゆる風の心なり。彼所へ著きて眺むるに、磯馴松のふりをかしく、砂は玉を散すに似て、濱の樣いと異なり。須磨の浦より人繁く、一見ゆるのみなん靜なる、所を願ひし光氏の、心には背きける。此邊は入道の、總て領ずる所なれば、海に連る磯邊のわたり、少し隔たる山隱れ、其所にも此所にも春秋の、時々につけ興を催す、一事を旨とし渚の苫屋の、侘たるなんども風雅にしなし、山より傳ふ眞清水の、清き流にいかめしき、堂を建てしは佛を置き、三昧を行ひて、後の世は安樂世界に、生れんの設にて、林隱れに稻の藏、幾棟か見えたるは、秋の田の實を刈收め、齡と共に積重ね、此世を安く樂まん、備なるべく思はれて、折々につけ所につけ、見所ありて仕集めたり。此時に宗入は、御船著きしと知らせを聞き、御乘物を奉れど、斯く見所あるわたりなれば、徒にて行かんと光氏は、彼方此方を遊び步き、既に館へ近付き給へば、衣服を改め入道は、御迎に出づる程、日やう〳〵差上り、かの淸らなる御姿を、

修紫田舍源氏第二十編序

忠臣藏の五段目は、猪におそれて定九郎が、迯こむとたんに鐵炮の、響ばかりで幕となし、はゝア勘平はやまりしの、鄉右衛門が詞まで、定九郎がうたれしは、隱む趣向にありしかど、腹切が重りて、見物の氣がめいるが故、惡の報を目の前に、心地よくこそ見せしとなん。須磨明石も繪册子に、なほすと眠氣のさす事多し。是はならぬと巳の日の祓、果は我身にかゝるとも、白木綿かけし山伏の、祈りの段の冷みに移り、打通りぬべく鐵炮雨、落ちかゝりぬべく震動電、あはやと見送る白糸が、ふすぶりかへつて死したるは、鐵炮疵に似たらんかと、かの定九郎が例により、見給ふ人を飽せじと、又此編も手卷が早うち、筆へ乘地のくる間もなく、近く暮の門神樂、獅子より先へいつさんに、賣出しを急がれて、最倉卒に稿を脱す。

柳亭種彦記

此おろまやがしの渡し場を左りへとつて馬場をよこ切りさつそく相知れまろすべき新宅に

はさながら飛ぶ様に、明石の浦に著き給ひぬ。めでたし〳〵。

したるも道理、彼こそ即ち宗入が、祕藏娘の朝霧なり。さて片貝も播磨の生、國に老いたる母ありて、甚く煩ふ由を聞き、我根引して看病の、爲にと國へ下しゝ處、程無く母の病も全快、夫より彼に密事の趣、文にて細々言送り、千鳥と名を更へ山名の館へ、仕へさせて置きつる故、朝霧を勸め拵へ、蜑の姿につくりなし、我許へ誘ひしと、推量なして彼へは別に、上著の小袖を取らせしが、差俯いて居たりしかば、我も顏をばさだかに見ず。かの宗入が行は、人目の關の隙を窺ひ、夜々毎に須磨の浦に、通ふ千鳥の文にて知る。遊女ながらも、彼は元より、心正しく怜き生、人質としてわが母を、調太夫が許へ送り、今も彼所へ留置けば、よも詐は言越すまじ。まだ其上に宗入が、我を慕ひて二心無き、確な證據もあんなれど、その事は故ありて、あからさまには言ひ難し。良清は供致せ、惟吉は此所に止り、明石よりして紫への、返事を某認めて、送越しなば手卷へ渡し、人を添へて都へ歸し、「其後來よ」ト宣へば、兩人はつと恐入り、良清はまづ御先へ、船に馳行き仰の趣、斯樣々々と述べけるにぞ、むかへの武士は大に喜び、さあらば兎角取急ぎ、夜明けぬ前に御船に、乘せ奉れと犇く處へ、光氏は睦しき、侍四五人引連れて、悠然と來りければ、宗入よりの迎への武士、砂に頭を摺付けて、設けの御座へ案内に、つれて皆々乘移る。時に不思議や風直り、かの怪しき追手吹出で、御船

に、隱るゝ隈も侍るやと、言ひしと告げよ。著換の衣服、惟吉持て」ト裝を改むれば良清は、御受もなさず座も立たず、いと心得ぬ顏色にて、少し前に進出で、「某所領の遺恨より、宗入を惡しざまに、申すにはあらねども、當時音川勝元と、合戰なしてその實は、室町をも傾けんと、邪智深き宗全が、弟にて候へば、彼にも心はゆるし難し。その館へ輕々しき、御座を遷し給はん御心、何とも愚意に解け難し」ト言ふに惟吉言葉を添へ、「去頃赤松高直より、入道の娘へ艷書を、送りし時も何とやらん、嘲弄したる宗入が、言葉にも顯れたる、人を人と思はぬしれもの、今良清が申す如く、迂濶に肌はゆるし難し。何の故にかあわたゞしう、彼所へ遷らせ給ふぞ」ト、窺ふ隙に光氏は、衣紋を改め靜に坐し、「良清は始末を知らず、惟吉が若き心に、さ思ふも道理ながら、宗入は宗全に、一味すべき氣色なく、度々加勢の催促にも、從はずして去る頃より、佛道を深く尊み、佛を拜し娘に侍く、夫より外に所在もなければ、彼が膝を枕として、眠るとも心安し。夫を又いかにして、知りしと疑ひ思はんが、朝霧が腰元女、千鳥といふは其昔、六條の遊女にて、片貝といひし者、其頃に惟吉は、逢ひたる事もあんなれど、姿貌の變りし故、見忘れたるかいつぞや是へ、來りし蜑の其中に、打交りて在りしかど、彼が事をば言はずして、我琴に拍子を合せ、膝を打つて居たりし女、人品能きのみ咎めしが、汝が不審

じと、指を折りて待つ程に、今日十三日に雨風の、少し靜になりたる體、かの示しに聊か違はず。唐土にも夢を信じ、國をたすけし類も多し、光氏君には用ひさせ、給はぬまでもこの告の、日を過さずして件の由を、聞え上げ候はんと、船を出し侍りつるに、怪しき風細う吹きて、此浦に著きたるは、實に神の導なるべし。光氏君にももし思ひ、合せ給ふ事もあらんか、いとも憚り多けれど、此由申し給へ」ト言ふ。良淸歸つて忍びやかに、傳へ申せば光氏も、つく〴〵思ひ合するに、此頃よりして夢現、さま〴〵に靜ならず、浪に恐れて逃げたりと、世の人の聞傳へ、後の誹も安からねど、母の敎を背きなば、是より優りてなほ人に、笑はるゝ目をや見ん。宗入ははや宗全に、與する心の絕えたれば、捨置きたりとも害とはならず、求めて行くにも及はずながら、彼は齡も長けたる者、身を任せんに恥ならず。退きて咎なしと、昔の人も言置きたれば、一先此所を去るに如じ。間者を入れて聞置きたるに、割符を合す夢の告、何事をか疑はんと、思ひ定めて、「いかに良淸、汝再び船に行き、迎への武士に面會し、去年の春より光氏は、知らぬ世界に彷徨ひて、風に浪に珍らしき、憂の限り見つれども、絕えて都の方よりは、言問越す人もなく、たゞ行方なき空の月日の、光ばかりを故鄕の、友と眺めて暮しゝに、濡れたる袖を漁火に、干せよと蜑の釣舟を、寄せられたるぞいと嬉しき。明石の浦には靜やか

氏が前に立出で、「今しか〴〵の事のあり、その昔は父にて候、喜代之助も播磨を領し、某もかの入道とは、年頃相識る中なりしが、境論より私に、相怨むる事候ひしを、東山殿聞召され、伊豫の國にて徳分の、つくべき知行を父に賜り、彼所へ移りし其後は、文通もせず久しくなりぬ。此日頃雨風烈しき、波の紛れに船を寄せ、いかなる謀をするやらん」ト、眉に皺寄せ言ひければ、光氏はかの夢の告、思ひ合せて「その使に、はや逢へ」ト宣ふにぞ、良清急ぎ渚に至り、まづ其體を打見やり、去頃ほどにはあらざれど、昨日も今日もまだ烈しき、この波風の厭ひなく、かの者どもはいつの間に、船出しつらん怪しやと、心の底に思ひながら、舟に行きて逢ひたり。使者の武士も禮をなし、「主人宗入去頃より、夢の中にその樣見馴れぬ、いつくしき上臈來り、光氏君を迎へ申せ、必ず行末幸あらんと、告知らする事度々なり。此日頃御入を、心に願ひて居る故に、思ふ事を夢見るならん、いかでかいぶせき茅屋へ、招きたりとも渡らせ給ふ、いはれは無しと思ひ諦め、其儘に過去りしが、又去る朔日の、午睡の夢にかの上臈、常よりも親しげに、入道の側に寄り、十三日にはあらたなる、驗を見せん船を艤ひ、必ず雨風靜まらば、此浦に漕寄せよと、重ねて告のありしに依り、夢覺めて後試みに、船を艤ひ設けし處、いかめしき風吹立ち、雨降出でて雷の、驚かしもありしかば、根無事の夢にもあら

は、磯打つ波の風情を殘し、屏風に畫く山吹も、たゞ御姿の其儘に、此所に止まれる心地して、更に夢とも思はれず、振仰のけば空の雲、いと哀れに棚引けり。年頃は夢の中にも、お顏を見奉らで、戀しう思ひし御有樣を、仄なれども今さだかに、見上げたりしもかゝる浦邊へ、漂へ來りて雨風烈しく、高濤寄せなば我身を捨てんと、既に心を定めしを、助け給はん故なれば今はなか〳〵危き目を、見たるも此身の幸ひなり。深き恩に比へたる、海をも磯をも厭ひなく、驅りておはせし勿體なさ。果散なき夢の中なれば、御答だにしかぐ〳〵聞えず、中上ぐべき事どもは、殊更多きを御顏を、見し嬉しさに打紛れ、只一言を言出でず、殘惜しや口惜しやと思ひ焦れて胸塞り、又もや夢に見えさせ給ふ、こともあらんと枕を取り、寢入らんと思ふ程、生憎に目も合はず、曉方になりにけり。

かゝる折から向ふの渚に、ちひさやかなる舟寄せて、二三人ばかりの武士、光氏が此宿を指して、急ぎ來るを此方の侍、怪しみて出迎へ、「何者なるか」ト咎むるに、かの武士ども小腰を屈め、「我々は宗入が、家隷どもにて候が、明石の浦より潮路の御船、艤ひて參りしなり。仁木藏人良清殿の、侍ひ給はゞ對面して、事の由を申すべし」ト、言入れて乘來りし、舟に皆々立歸れば、此方の侍良清に、此段を告げけるが、何事ならんと良清は、心の中に驚き怪しみ、光

は、此須磨を去り給ふ時、既に來りしを、告げ參らせん爲なるぞ」ト、叉手を取りて引立てられ、光氏は訝しく、「此邊には我に親しき、人とては侍らず、たま〳〵あるも富徽の前に、聞えんかとて音づれぬに、何國へ誘ひ給へるか」ト問はれて花桐につこと打笑み、「蓮臺寺にて細やかに、告げしを忘れ給ひしや。かの明石の宗入に、度々奇瑞を見せしかば、去りし頃より佛道を、深く尊み宗全に、與すべき心は無く、たゞ娘のみ寵愛して、直なる人となりたれば、御身を是へ任せ給へ。その娘の朝霧が、君に深く」ト言懸けて、袖を以て口を覆ひ、「彼所に移り給ひなば、磯山櫻咲初めて、御心の慰めに、少しはならん。あれ〳〵見給へ、君を迎へに明石より」ト指す方を眺むれば、實に母の言ふ如く、帆を十分に引上げて、此方を目掛けて來る船あり。光氏は小膝を打ち、「それよ〳〵去年の春、御目に懸りし其時に、宗入が迎へを待ち、明石へ移らば何事も、心の儘になりなんと、仰ありしを事に紛れ、今日までは思ひも出さず。さあらば彼所へ赴かん」ト立上れば花桐も、褄搔寄せて姿を改め、「甚く道には疲れたれど、かゝる序に東山へ、申さん事のある間、急ぎ上らんさらばや」ト、言捨てて立去り給ひぬ。飽かず悲しく御供に、參りなんと泣入るわが聲、わが耳に入るに驚き、夢打覺めて見上ぐれば、月の顏のみきら〳〵と、邊に人の影もなし。迎へ船と見えたるは、釣花活の櫻花、枝もたわゝに散かゝる

其夜さり光氏は、紫への返しの發句、打案じて只一人、机に倚り居給へるに、障子を開く音もせず、影の如くに氣高き女、目の前に彳めり。昨夜蟇目の法を施し、妖術を破りしに、いかなる者の來りしかと、灯を掲げてつく〴〵見れば、思ひがけなや過去きし、母花桐のたゞ此世に、在しましゝ樣ながら、悠然と立ち給ひて、「など斯く怪しき所には、住ませ給ふものならん、住吉の御神の、導かせ給ふまゝに、はや船出して此浦を、疾く〳〵去りね」ト手を取りて、引立て給ふにいと嬉しく、「母君にいと幼き時、別れ奉りしより以來、成人るに隨ひて、さま〴〵悲しき事のみ多く、安き隙も侍らねば、今は此渚に、身を捨てんと覺悟極めし」ト聞え給へば頭振を振り、「大事の御身を輕々しく、いとあるまじき事にこそ。そも〳〵君が今までの、辛苦は妾が世に在りし、その昔貴顏はじめ、義正君の御寵愛を、嫉む者いと多かりし、恨みの數々その子に罹り、女の念のなす事にて、末は通らぬ聊かな、物の報に依りてなれば、世も治まりて御心の、儘になるのも近きにあり。去年の春も言ひつる如く、妾が追善供養を營み、怠り給はぬ功德に因り、花の臺にゆたかに座し、此世をかへりみざりつれど、都は修羅の街となり、又此所に雷の、火に高潮の水嵩增り、二河白道も目の前なれば、武勇智謀に逞しき、君も此頃いみじき愁に、沈むを見るに堪へ難くて、紫の雲を離れ、海に入り渚に上り、遙々此所へ來りし

ながら、はかぐ\しくもあらぬ使が、頑しう語りなすさへ、京の方の事と思へば、懐しうて呼出し、それかれ問ふも度々なり、ましてや女の事といひ、何かは苦しかるべきぞ、留め置きてゆるぐ\聞かん。さて斯く言へば我身の孝を、誇るに似たれど是を見よ」ト、綾の袖の半ばかり、火に焦げたるを取出で給ひ、「富徽の前の某を、憎み給ふは實の母、花桐を父上の、あまりに寵愛されたる名殘、夫に附入り白糸はじめ、心歪める者どもの、讒言ゆゑにてあんなれば、いつぞは曇無き旨を、申し開きて舊の如く、御側に仕へんと、朝夕思ひて聊かも、此方に恨むる心は無し。指屈り見れば四日以前、此假住にも雷落ちぬ、其夜の夢に御身が今、語りし如く白糸が、雷に打たれしその炎、富徽の前の袖に移るに、あはやと驚き走り寄り、引ちぎりしと思ひ寢の、夢は覺めても其袖は、正しく我手に殘りてあり。雷も實にをちこちの、人集れば見られじと、手箱に袖は押隱し、今日まで近習の武士にも語らず。さては實にわが魂、都に通ひて富徽の前の、危急を助けまゐらせしか。よし御腹に宿らずとも、母と頼みし其人を、子として疎んじ申さうやと、此所に言うても屆かぬ愚痴。惟吉笑ふな手卷も都へ、歸りて人に語るなよ。はや日も暮れぬ紫への、返事は夜明けて後に書かん。今宵はゆるぐ\打休み、疲をはらせ」ト兩人に、暇を取らせ給ひけり。

さあらば雷の落ちてより、大内君の惱ませ給ふ、事どもは我君へ、御目通の上其方より、密に申上げてくれ、妾が文には此頃中、雨風の烈しければ、夫のみ尋ね奉らんと、お筆を染められさら〳〵さつと、降來る雨をも厭はゞこそ、此簑笠に顔を隱し、下男の姿に出立ち、夫より直に下りしは、仰の如く夫を慕ふ、未練の心に侍らず、惟吉の叱らぬ樣、能く仰せ給はれ」ト包む袱紗も紫の、文取出せば光氏も、心急かれて取る手も遲しと、直に披いて打見れば、

淺ましく小歇なき、此頃の景色には、いとゞ空さへ我胸さへ、閉づる心地に、眺めやる方も無くなん。

浦風やいかに袖さへ浪の寄る

あはれに悲しき事どもを、書集め給ひしかば、引開くるより御目にも、潮滿ち來れば御心を、察して手卷は顔を背け、「道すがらに聞き侍れば、此所には高潮上り、海も渚も荒れける由、都にも此雨風、いと〳〵怪しき事なりと、社に寺に仰を給ひ、祈念をせさせ給へども、麗かなる日は今に無く、猶其上に合戰止まず、道行く人の絕ゆるばかり、花の都の樣はなし。稻舟姫を初めとし、御痛しき方々」ト言出づるを惟吉は、打驚いて袖を引き、「內君の仰の趣、申上げたらそれで宜い、退つて居よ」ト隔つれば、光氏は打笑ひ、「何事をか言出でしと、心配も道理

氣色なるに義尙君、御心に思し歎き、御枕の邊に近付き、弟ながら光氏は、信義正しき者にてあり、實に犯す罪なきを、さがなき人の言ひたるを、用ひ給ひて見も知らぬ、浦邊に沈め置くならば、必ず報あるべきに、はや呼返し給ひてんと、度々仰ありけれど、富徽の前は聞入れ給ふ、御景色更になく、罪に落ちて都を去る者、三年をだにも過さずして、免されん例なし、さする時には輕々しき、計なりと世の人の、言傳へん事疑ひなし、其上に光氏は、わが過を我と知り、身退きしにあんなれば、我を怨まん道理はなしと、言放ち給ふにぞ、義尙君も思し憚り、かくて月日の重ならば、御惱ども次第々々に、重りまさらせ給はんと、口の中にて宣ひながら、御前を退らせられし由。是等の事は水原が親しく、見奉り聞き奉り、紫の上まで密に、申し送りたりしかば、此事君に聞えんと、さま〲思し廻らせども、御筆にては落散りて、人の目にも懸らんか、且此頃は山名と音川、合戰いよ〱止む時なく、兎にも角にも宗全親子、君を恐れて此浦に、音川よりの注進を、あらせじものと其所此所へ、關を構へて津の國の、方へは猥に人を通さず、是にほと〱御當惑と、聞くより嵯峨の御殿へ上り、紫様の御目に懸り、妾は女の事なれば、合戰の早打とは、山名の家來も思ふまじ、關所へ懸らば口に任せ、言拔けてお文は確に、君へ屆け參らせんと、申上げたりしかば、内君は御喜びの、御樣子にて仰の樣、

前をも憚らず、疾く歸らずや」ト追返すを、光氏は押止め、「たとひ卑しき賤の男なりとも、睦まじう思へるは、かゝる閑居の習慣なり。さなせそ」ト宣ふを、惟吉猶も聞入れず、「此女は手卷とて、某が妻にてあり。文の便もすべからずと、出立の節くれ〴〵も、申聞かせて置きつるに、女の身づから是まで下り、もし朋輩の目に懸り、夫と知る者ある時は、御供先へ我儘に、女房を呼下すは、道に外れし行と、笑はれんは必定なり。物に狂ふかたはけ者」ト、撃ちも敲かん有樣なれば、光氏はいよ〳〵制し、自ら庭に下立ちて、「此方へ來よ」ト恐るゝ手卷の、袂を取つて身近く呼寄せ、「さては糸路が姉なりしか。亂れし髮もそのまゝに、化粧もなさず姿さへ、やつ〳〵しくて下りしは、夫を慕ふのみにはあるまじ、語れ聞かん」の御諚にはつと、砂に手をつき顏振上げ、「四日以前夕暮より、神鳴る事夥しく、夜に入りてなほ烈しかりしが、子の刻ばかりに室町の、細殿へ落ち候、その樣炎の柱の如し。物に動ぜぬ富徽の前、香を嗅きて居給ふ御前に、立出でんとせし白糸が、襟元へかの雷、眞一文字に迸り、身の中總て燻りかへり、白糸變じて黑糸と、なつて果敢なく失せたりけり。猶その炎燃廣がり、富徽の前の御袖に、移りて御身も危かりしが、自からに其御袖、引ちぎれて舞揚り、西の空へ飛行きて、御身に恙はなけれども、夫よりして富徽の前、そこはかとなく煩ひ給ひて、程經らば弱り給はん、御

法を行ふ山伏、我と共に來りし由も、密に申上げしかば、何事をかするならん、その幻術も試し見ん、連來れとの御內意ゆゑ、御祓に事寄せ御前へ同道。夫とも知らず龍女と化し、色を以て御心を、蕩かさんとは愚なり。汝も心を改めて、仁あり德ある我君に、仕へんと思ひなば、はやく申せ共々に、願うて見ん」ト言ひければ、鬼得院につこと笑ひ、「邪は正道に勝たずとやら、宗全に一味して、行正しき光氏君を、失はんとなしたるは、過なりと知りながら、汝とは事變り、我は山名の知行所にて、成人たる者なれば、邪にもせよ今更に、夫を捨てては道立たず。便あらば事を仕損じ、此所にて果てしと告げ給へ。さらば」と言捨て矢を拔取り、ふえ搔切つてぞ失せにける。光氏は淚を浮め、「惡にもせよ領主の恩を、知つて命を捨てたるは、感ずべき事にこそ。須磨寺へ死骸を送り、葬りてとらせよ」ト取片付させ給ふ程に、夜は白々と明離れ、又村雨の降出でて、風さへ殊に騷がしゝ。かゝる處へ破れたる笠、亂れたる簑を纏ひ、人か案山子か見分くべくもあらず、いとく怪しき姿にて、雨にそぼちて來る者あり。光氏折節緣先に、外面を見遣りて居たりしが、何心なく笠の中を、差覗けば女なり。あら訝しと暫く考へ、「御身はそれよ桂樹の、側に仕へし糸路ならずや。眉を拂ひし故ならん、年もふけて見違へし。何とて是へ來りし」ト仰の中に惟吉が、傍より走り出で、「あら見苦しき姿にて、御

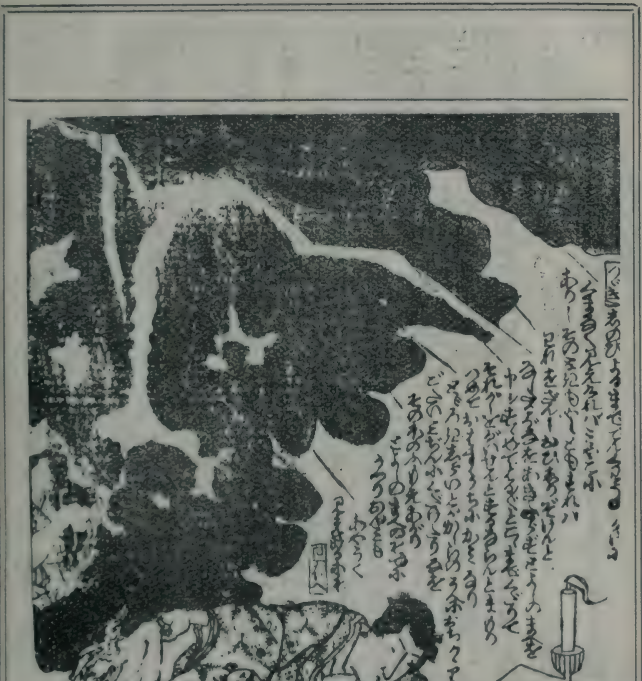
たれたりとしたり顔に、山名へ注進なしたるが、その石堂も淀川にて、舟より見れば健かなり、川次郎は水に落入り、やう〳〵に我一人、逃げて歸りは歸りながら、旁言譯無き故に、此上は須磨へ赴き、光氏を討取らんと、言出でし其時に、山名親子言葉を揃へ、なか〳〵汝一人の、力には及ぶまじ、彼が差圖を受けよとて、添へられたるが鬼得院。共に當地へ下りしが、まづ我一人の手柄を顯し、彼奴めに鼻をあかせんと、去年の秋の雨上り、月はあれども叢雲に、影ほの暗き夜半に紛れ、此所へ忍込み、琴を彈きて在したる、御油斷を窺ひ、只一討と思ひしに、御姿の優方に、見えさせ給ふに引換て、光氏君の御力、殊に御手練敵し難く、やみ〳〵と生捕られ、惟吉殿に命じ給ひ、調太夫とかいふ人に、預けられてはや首を、刎られんと思ひの外、繩をも懸けず御前に召され、問はずと知れし山名の間者、我を討たんと謀るのも、其身を立てん爲なるべし、今より心を改めて、この光氏に隨ひなば、飢ゑざる程は祿をも取らせん、いかに〳〵と寛仁大度の、仰に歸伏の體にもてなし、心の底は折を見合せ、討止めて山名より、恩賞を請くべしと、初めの程は思ひしが、雪の夜明の寒椿、是にて切れと御佩刀を、我に渡して置きながら、背差向けて悠然と、旭に向ひて何やら御祈念、我に害心有るか無きか、試させ給ふものならん、あら恐しと心の角を、其時折つて實に歸伏。鬼得院と呼びなして、怪しき

十九編 下

「此者は元山名の頃地に、久しく住める山伏なるが、何者よりか傳へ受けけん、幻術に妙を得たるを、宗全聞いて呼上せ、密に我を殺さんと、去頃當地へ下しゝなり。一矢ながらも急所を射たれば、はや身體は自由ならず、捨置いて皆休め」ト、弓立寄せて座に直れば、鬼得院は目を開き、苦しげなる息を吐き、「仰の如く宗全に、一味の者に候が、何とて斯くまで拙僧が、素性を知召されけん」ト いと訝しげに問ひける時、恐る〳〵下部の浪内、次の間より末座に這出で、「其事は審かに、己が言上したりと言はゞ、流石下郎の淺ましき、心なりと蔑まれんが、光氏君を害せんとは、とても及ばぬ事なりと、おもひ切つて身の上の、懺悔の序に殘らず白狀。良清様にもいづれにも、御聞の爲に繰返す、己が素性の物語、といふ程もなき元より下司、むかしの名は馬刀助とて、統清が草履取、稻舟姫へ通はれし、雪の夜さりも氷を踏み、供に隨ひ參りし者。さて其後に頓五郎と、いふ侍と我と二人、內意を受けて光氏君へ、近付く爲に石堂へ、奉公なして謀る〳〵と、思ひの外に謀られて、奪ひし玉兎の鏡は贋物、馬之丞は何者にか、討

清密に言ひけるは、「龍の都に迎へんと、君を誘ひに來るこそ、心得難き女なれ。浦島太郎の草紙には、龍王の乙の姫と、契りし由を記したれど、夫は跡なき昔語、眼前見るは初めてなり。何樣仔細のある事なるべし。今宵は手配なし置きて、かの女を引捕へ、樣子を尋問ふべし」ト、聞いて光氏打笑ひ、「元より變化の事なれば、力を以てはたはやすくは、捕ふる事は難かるべし。我仕樣こそあるなれ」ト、人々に囁き置き、其夜はわざと宿直を遠ざけ、常より殊に打解けし、風情にもてなし只一人、熟睡してありければ、例の如くに唐紙を、さら〳〵と押開き、側近くかの女、歩み寄る其處を、光氏がばと起上り、屏風の後に隱し置きし、弓に矢手早く打番へ、へうふッと射たりしかば、蟇目の法に幻術破れ、かの女は肩先を、篦深に射られて堪り得ず、その儘かつぱと倒れ伏す。豫て合圖の弦音に、遠く控へし侍ども、一時に馳集り、手ん手に手燭を指付けて、火影に屹度打まもり、今までさしも愛らしき、女なりしが忽ちに、變じて怪しの男の姿。「それよ〳〵此者は、君が御祓の其時に、風を起し雨を降らせ、行方を隱しよ山伏の、鬼得院とかいひし者。さては此奴も敵の餘類」ト立騷ぐを光氏は、「あら仰々し」ト押止め、



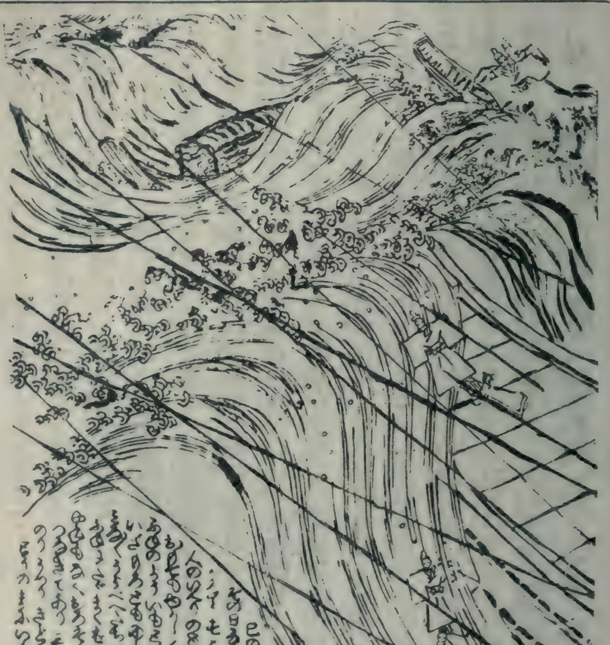


砂きらめきて、猶その名殘の浪は荒し。かの怪し氣なる蜑どもは、貴き方の此所に、在します由豫て聞き、常に來馴し事なれば、今の騒はいかにぞと、尋ね參りて「此風の、今暫しふき止まずば、高潮上りて家も人も、殘る所は無からまし。雷は落ちたれど、其儘風の直りしは、神の助にありける」など、聞きも知り給はぬ事を、囀り合ふも珍らかにて、打聞きて居給ひければ、御前近く來れども、侍どもが追ひも拂はず。斯く騒がしくむさくろしき、所にてあんなれば、夜更けたれども眠られず、脇息に倚懸り、心を鎭め居たる折しも、かの前の夜に宿直の武士が、龍女ならんといひたるに、同じ樣なる怪しの女、光氏の側に寄來、「此頃濤立ち騒がしきは、和田津海の底なる都へ、君を迎へん爲なるを、など神々に願を懸け、風をば鎭め給ひたる。いざ諸共に」ト手を取りて、引立てんとなしければ、光氏其手を振拂ひ、つら／＼と打まもるに、年は二八の程なるべし、此方に向ひて打笑みたる、その面の美しさ、花とも月とも紅葉とも、たとへて言ふべき言葉もなし。なみ／＼の人ならば、心亂れて其儘に、浮れも出でん風情なれど、實は色に溺れざる、光氏の性質なれば、目を押眠りて居る程に、曉近き須磨寺の、鐘の幽に響く頃、かの女は見えずなりぬ。夫よりして夜毎々々、光氏の枕の邊へ、此女つと寄來、附纒ひていざ／＼と、同じ事のみ打言ひて、片時も去りやらねば、宿直の武士ども大に怪しみ、良

申し勸めて遙々と、此所まで下りて某を、害せんとするならんと、まもり詰めて在する中に、雷轟き白糸が、頭の上に落かゝり、五體微塵に碎けたり。猶その炎燃上り、富徽の前の袖に移り、御身も危く見えけるにぞ、光氏驚き走り出で、消さんとするに消えやらねば、其袖を引きちぎり、助けいたはり參らすると、思ふは假寢の夢なれど、光氏が居間續きに、雷は正しく落ちたる、その響にて驚き覺め、かの方をかへりみれば、炎燃えて廊下は燒けぬ。かの言がひなき例の者は、心魂更になく、耳を塞ぎ臍を押へ、打轉んで起きも上らず、忠義無二の侍は、君の邊を打圍み、かひ〴〵しく立廻り、兎角して後の方の、臺所へ移し參らせ、上下となく立込みて、何事を言ふやらん、鳴りどよむ聲雷にも劣らず。斯くてやう〳〵風直り、雨の足の音もなく、星の光も見ゆるに、人々の心落付き、この移し參らせたる、所々をつく〴〵見渡すに、御後には竈あり、御上には引窓あり、薪を積み俵を重ね、檽木擂鉢盆何やかや、取散してありければ、いと珍らかに見給ふらんと、恐れ多くて元の所へ、還し移し申さんと、思へど今の騷にて、燒殘りたる邊さへ、人々の踏轟かし、襖も破れ簾なども、皆吹散してきたな氣なれば、とりつくろはんと犇くを、今宵は是にて明さんと、光氏は制し止め、柴の戸を押開けて、遙に向ふを眺れば、月の影隈なくさし、近く潮の滿ちたるが、今は遠く引きたるならん、渚の

事か」ト、歎くには引替り、良清惟吉は更にもいはず、少し物を覺ゆる限りは、我命をばかへりみず、御身ひとつを救はんと、船路を守り給ふなれば、まづ住吉の神を拜し、「我君は室町の、御所にて成人り給ひ、義正公の御寵しみ、深きに依つていろ〳〵の、樂み奢り給ふに似たれど、實は世の爲人の爲、此御蔭にて命を助かり、世を送る者少からず。然るに何の報にて、此横さまなる浪風に、溺れて此所に果て給ふか、そも天道は有りや無しや」ト、思はずどよみて諸聲に、神佛を念ずるに、光氏も漏れ聞いて、實に彼等が言ふ如く、世を平かに治めんと、罪なくて罪に沈み、官位に望も懸けず、家を離れ境を去りて、旦暮安き空もなく、心を千々に碎く身が、前世の業か此世にて、思はず犯せる罪ゆゑか、我のみならず隨ひきたる、者さへ悲しく恐しき、目を見て命も盡きんとす。神佛さへ明かに、在まさばこの憂、止め給へとさまざまに、願を立て給へども、雨風いよ〳〵烈しくて、軒端へ礫を打つが如く、ばらめく音に打紛れ、さだかには聞えねど、雨戸の外に何やらん、打語ふは女の聲なり。訝かしさに不圖耳へ入り、戸の隙間より差覗けば、思ひもかけぬ富徽の前、今一人は白糸なり。篠突く雨に濡るゝも厭はず、「仰畏み候」ト、懷劒を拔そばめ、忍び寄るまで電光の、影に隈なく見えければ、都に在りし其時も、やゝともすれば我を讒し、追退けんとなしたるが、猶飽足らず富徽の前を、

り難し。たとへば數萬の大敵が、攻來るとも御武略にて、防ぐには易かるべけれど、怒れる濤の寄來るは、更にせん方無かるべし、一先京へ歸らせ給ひ、然るべく候はん」ト、謹みで述べければ、光氏は打點き、「聞も馴れざる濤の音に、夜もとげて眠られず、心細さは彌增れど、父の不興を請けたる身が、その許されもなき中に、都へ歸らばいよ〳〵人に、笑はるゝ事こそ增らめ。猶是よりも山深き、奥を求めて跡を隱し、住居を轉んと思ふにも、武士たる者が浪風に、騷がれてなど世の人の、語り傳へて後の世まで、輕々しき名や流さんと、思ひ亂れて言葉に出さず。たゞ此渚に命を捨てんと、今は心を定めたれば、此後諫むる事なかれ」ト讀かけし背に打向ひ、悠然として居たりしかば、良清はせん方なく、御前を退きしが、其日は殊に騷がしく、かの高潮は次第〳〵に、家の間近く打寄せて、雨は盆を傾くるが如く、神鳴る事暫しも止まず、空は黑を磨りたる樣にて、永き日もはや暮れにけり。かの言がひなき者どもは、一所に打集り、「鬼得院こそ怪しき奴なれ、彼が祓をなしてより、俄に風立ち雨降出で、十日餘り降止まず、何地へ行きしか其後は、姿を隱して見せざるは、これ世に所謂天狗なるべし。一昨日より昨日は強く、昨日より今日は烈し。なう怖しの雷や。あら物凄の濤の音や。我はいかなる罪を犯し、斯くは悲しき目を見るらん。父にも母にも引離れ、いとしと思ふ妻や子の、顏をも見ずして死ぬ





す處は、神力にも及び難し。夫等の事は捨置きて、龍の宮より召さるれば、はや疾く來りて自らと、夫婦となりて限りなき、壽を保ち給へ」ト、跳り走くを見るに驚き、目を開けば幽に殘る、燈火のみにて影もなく、夢かと思へど次の間の、宿直の武士の見たりけん、「海の中の龍王は、甚う物愛するものなれば、色好き衣を著し者なんどは、船には乘らざるものといふ、さては今の怪しき姿は、龍女とかいふ者にて、我君の淸らなるに、見入れて迎へに來りしなるべし。俄に浪風騷がしく、危ふかりしも此故ならん」ト、語合ふを聞召し、物むづかしき此住居も、はや堪へ難く思しなりぬ。

須磨の巻をはり

明石の巻

猶雨風止まず、雷靜らで雲間も無く、明け暮るゝ日數を重ぬるに、いと侘しき事限り無し。斯くしつゝ世は盡きぬるにやと、思ふに又の日の曉より、殊に風一入吹き、潮高う滿ちて、浪の音荒き事、巖も山も打碎いて、殘るまじき氣色なれば、仁木良淸御前に罷出で、「地の底まで通るばかり、火降りしといふ昔は知らず、又類なき今度の天變。夏のあつさの烈しき時だに、斯く雷の日を重ねて、鳴轟く事はなし。雨は次第に降增る、空の亂れに都より、出立ち參る人もなく、此方の者も打屈り、たゞ日を送るのみにして、頭差出すべくもあらず。されば斯くて在しなば、音川山名の合戰の、有樣を知る由なく、又高潮の打揚げて、過あらんも圖

ど、船を岸に漕返し、御歸りを催せども、今までうらゝかなりしかば、御傘なんどの用意もなし、世に類なき大風なれば、萬の物を吹散し、浪巖しう立ち來るにぞ、人々の足は空なり。海の面は金襖を張りたる樣に光滿ち、雷閃き頭の上に、落懸る心地して、言がひなき供人なんど、あわて惑ふその處へ、片攬の調太夫、御迎に來りければ、辛うじて御供し、皆々家に辿り著き、良清惟吉其他も、物々しき武士は、更に動ずる風情もなく、御機嫌を伺ひて、御次の間に控ゆれど、言がひなき者どもは、色青ざめて打慄き、「不思議なる日を見るものかな。風など吹くにはその景色、必ず前に知るれども、是は俄の事にてあり。今暫く彼所に在らば、浪に引かれて入りぬべし。高潮とか海嘯とか、いふ物の寄來れば、人損ふとは聞きしかど、かゝる事はまだ知らず」ト、打擧りて言合へり。風いよ〳〵吹きまさり、雨の足の當る所は、打透りぬべくばらめきて、かくては世も盡きぬるやと、心細く思ひ惑ふに、光氏は何とも思はず、のどやかに經文を、打誦じて居る程に、暮れぬれば雷の、音も次第に遠ざかり、少し靜になりながら、猶風は夜も吹く。曉方にやう〳〵と、宿直の者も休みけん、物音もせずなりければ、光氏もまくらを取り、いさゝか寢入ると覺えしが、その樣確ならざれど、唐めきたる衣を著たる、美しき上臈來り、「君は御祓に擬へて、宗全親子を調伏し、世をしづめんとし給へども、天變の爲

倍道満、播摩に居住なしたる時、拙僧が遠祖、かの法師より傳を請け、今の世に至りても、其法を守りて捨てず。御用の筋は何事か」ト、謹んで問ひければ、光氏はにつこと打笑み、「御祓の祓は押なべて、今は六月晦日なれども、古は三月の、初の巳の日を用ひしとか。今日は即ち其日なり。身に思ある者なんどは、必ず御祓爲給へと、生賢しき人の言へり。長閑に霞み渡りたる、海の面も床しくて、さらば祓に出立たんと、船の用意も整へさせ、人形も作りて置きつ。いざ諸共に」ト ありければ、畏まつて御供し、皆々浦邊へ立出づるに、さまで大きからざる船に、たゞ幕ばかりを引廻らし、雨覆ひの屋根もなく、疎かなる設けなるが、五六艘繋ぎてあり。三五人づつ引分れ、件の舟へ乗移り、鬼得院は光氏と、同船なして胴の間に、嚴しく座を構へ、笹に幣を切懸けて、珠數を鳴し祓を讀み、事々しき人形を、浪に打入れ流すを見つゝ、舷に肱を凭せ、悠然たる光氏の、顔ばせは凪渡る、海よりも猶うらゝかなり。されども心に人知らぬ、辛苦を疊めばすぎこし方、後先思ひ續げられて、

罪なきを神も憐れめわが巳の日

と吟じながらに殘りたる、かの人形を取上げて、はらはらと打流せば、不思議や俄に風吹き荒れ、空も見るみるかきくれて、袖笠雨のあわたゞしく、降出づるに驚かれ、まだ祓は仕果てね

惟吉が、反物卷物取出し、それ〴〵配り與ふる時、光氏は聲を懸け、「遙後に引下り、恥らふ樣に面も上らぬ、まだいと若きあの蜑には、別に取らする物あり」ト、自ら上にはおりたる、小袖を取つて投遣れば、かの蜑はつと押戴き、實に生ける詮ありと、喜べる色面に顯れ、皆打連れて行く影を、惟吉つく〴〵打眺め、「今御琴を遊ばしたる、其時に蜑どもは、只うつかりと口を開き、心にしめて聞入れる、者とては無かりしに、只御小袖を祿けさせ、給ひたる女一人、感にたへて膝を擊つ、その拍子更に違はず。差俯向いて居たりしかば、面は確に認めねども、爪はづれいと清く、なか〳〵賤しき樣にあらず。御心つかれしや」ト申上ぐればほく〳〵と、打點きて居給ふ折、仁木良清罷出で、「某はまだ見馴れぬ、浪内とか申す下部、申上げ候は、仰に任せ此國に、陰陽師の候にかと、さま〴〵尋ね探せども、さる者は絕えて無く、たゞ鬼得院と名乘る山伏、陰陽道に精しき由、承つて彼を召連れ、罷歸り候と、遙彼方に控へて在り、いかゞ計ひ申さん」ト、聞いて光氏心づき、「その浪内は當國にて、近頃抱へし者なるが、所の事は詳しからんと、豫て言付置きたるが、蜑の囀り珍らしく、聞とれて忘れたり。その山伏を是へ呼べ」ト仰に良清心得て、誘出づる鬼得院の、有樣を見給ふに、兜巾を頂き鈴懸の、露を結んで肩に懸け、手に苛高の數珠を持ち、りゝし氣に出立ちて、まづ恭しく禮をなし、「遙むかし安

口々わめきて入來るを、「此方へ來よ」ト光氏は、近々と呼出でて、まづ怪しげなる姿を見渡し、「活るが如き海の魚を、料らせて喰ふ興は、都も此所には及び難し。網引潜ぎ漁なんど、常々歌には詠みつれど、蜑のさる手をうちつけに、其樣見たることはなし。此等の物はいかにして、おんみ等はとるものぞ」ト、問はせ給へば打笑ひ、「京の人は私等が、身の上を面白さうに、歌とやらに作れども、もう〳〵蜑の境界ほど、苦しい物は外になし。都の女中は姿形と、嗜むのに荒くれしい、繩を卷くやら簑著るやら、衣紋が少し亂れても、肌の見ゆるが恥かしさ、繕ふが女の性、夫を素裸で海の底、腰に浮桶手には鎌、岩に吸付く此鮑を、獲る中鯛が餌と間違へ、乳を吸ふやら腋の下へ、烏賊が潜つてこそぐるやら、お臀をふつつり蟹が抓る、しやうども浪のうき沈み、風が荒くて舟休み、內に寢まつてゐる暇にも、網を綴くる繩をなふ、目ざしといへる此籠を、下げては濱に磯菜摘む、蜑のまでかた右左、汲取る桶の汐よりも、いと〳〵辛き世渡に、侍るなり」トさま〴〵に、安き暇なき身の憂さを、そこはかとなく囀れば、光氏は傍の、筑紫琴を搔鳴し、「我ばかり、憂きを身に積む柴舟の、漕がれ〳〵て行末は、定めなき身と思ひしが、世の憂き事は白浪に、住むも心の行末は」ト琴彈さして、「あゝ同じ事なるかな、哀れの身や。それ惟吉、魚も貝も皆取入れ、何ぞ彼等が喜ぶべき、代を遣れ」ト宣へば、はつと立つて

十九編上

年返りて日永く、徒然なるに植ゑし若木の、櫻ほのかに咲初めて、空の氣色うらゝかなるに、つけても心はうらゝかならず。去年の春京を別れ、出立つ時に紫はじめ、名殘を惜みて人々の、心苦しかりし樣など、戀しさ遣らん方も無く、あゝ今頃は室町の、櫻も盛になりぬらん、一年の花の宴に、東山の御景色、兄義尙に正則が、參らせしいと淸らなる、袴を我と一對に、引懸け給ひし其姿、萬の事を思ひ出でられ、吐息つく〴〵四方の景色を、打眺めて居たりけるが、風に煙のいと近く、時々に靡き來るを、是やかの須磨の浦に、蜑の汐燒くなるらんと、思ひ遣るにさにては無く、わが住む後の山の端に、柴を燻る煙なり。そのしば〳〵に見も知らぬ、下々の上の樣を、間近く見るも珍らしき、心地せられて緣の端へ、猶立出でて在すれば、前の海にて漁りし、折に逢ひたる櫻鯛、めじか鰹は夫を戀ふ、名に似たれども片思ひ、鮑榮螺や海松若布、さま〴〵の海の物、籠に提げて桶にて頂き、蜑ども大勢打連立ち、「丁度御膳の御支度頃、間に合ふ樣にと一走り。今日は三月お朔日、日出度日なれば取分けて、御召なされて下さりませ」ト、

天保丙申春發行

柳亭種彦







偐紫田舎源氏第十九編序

此編十葉稿なりし刻、予故ありて源氏の巻の、數に齊しく五十餘年、住なれし下谷を離れ、淺草に居をトす。須磨より明石に光氏の、移る條に當りしも、頗る奇遇といふべき歟。たゞ這ひわたる程なれど、上野のひときは隔りしも、彼越かたの山は霞遙にてと、書る詞を目前に、古鄕ゆかしくは思ひながら、此所には樓めく物ありて、月を見るに宜しければ、池水に映る影を眺め、是あがための石山と、後十葉を綴り添しが、角ふりわけよ蝸牛の、舍には秋のたのみを納むる、藏町なんどもあらばこそ、たゞ年頃の住ひよりは、こよなく明なるばかりは、巻の詞に似通ひたり。まづ南は馬場へいづる、小路を隔て竹の林の、緣なるはつれより、富士の高根の彌白く、雨降山は青やかなり。湯島の宮居は右に遠く、榧寺の佛閣は左に近しと、いひつゞくれば樓上の、詠の自讃のやうなれど、偐紫が紫の一本の茂睡が墓ある、金龍寺の門の竝び、森の下道南の方、丁字街へ乙未の、秋の末移りたる、所書のかはりに記す。

心をとゞめ哀れなる、手など彈いて遊び給ふに、惟吉やう〳〵歸り來り、「明石へ赴き御文を、差出して候へども、娘よりは返事もせず、父の入道我を呼び、高直殿に對面し、聞ゆべき事のあり、是へと申させ給ふべしと、不興の體にて候」ト、聞いて高直頭を搔き、「承引く心のなき故に、父に文を見せたるなるべし。其所へ迂濶に行懸り、空しく歸るは恥の恥。是へ尋ねて來りなば、頭痛に惱みて高直は、歸りし由を傳へ給へ」ト、言へば君にも笑はせ給ひ、又盃を取上げて、月頃の物語に、夜もすがらまどろまず、曉近くなりし頃、高直の言ひける樣、「絶えて久しき御顏を、見上げたさに室町へ、願も立てず御咎も、顧みずして下りしが、心緩みし故やらん、今となりては世の聞えも、何とやらんつゝましゝ。春は父こそ參らめ」ト、座をさがらんとなしける時、光氏それと差圖して、いと美しき驪の駒、庭前へ牽出させ、「雪まだ解けず、道もぬからん、是に乘りて歸るべし。こはわが取分け祕藏ゆゑ、此所へ連れて下りしが、胡馬北風に嘶ふとやらん、東風吹く度に戀し氣なる、都を駒にも見すべきなり」ト、いと有難き仰に高直、又も涙にかきくれて、躊躇ふ中に日もやう〳〵、あがれば心あわたゞしく、あまたたび禮をなし、かへりみがちに出行くを、いつ又對面なすべしと、思へばいとゞ光氏も、心細げに見送りけり。

がましう申すのも、恐れながら朝霧様は、何事も内端なお生、たとへ御勸め申したとて、夫は思ひも寄らぬ事、どうか斯う才覺して、その嬋妍な御姿を、御目に懸けたら自から、お髪を剃らうの海へ御身を、投げ様のといふ御述懐は、止んで目出度御輿入、御顔を御直し遊ばせ」ト、鏡臺取出すその處へ、一人の腰元走り來り、「只今須磨より御使が」ト半分聞いて皆々が、「そりやこそ彼方から御文が來た」ト、又立騒ぐを又しづめ、乳母の立浪文箱を取上げ、「何方より何方への、御文といふ事聞いてか」ト、問はれて件の腰元が、「去りし年は宗入殿、御目を廻され、龍王湯は痞にきくとの御口上、御名は長くて覺えにくさ、書いて貰うて參りました」ト、取出せば訝しげに、朝霧が押披き、「足利昵近の侍、赤松左衞門正則の嫡子、同苗太郎高直とは、豫て聞いたる名なれども、妾へ文の來る筈は」ト暫し案じて膝を打ち、「こりや父君へ密の用、目立たぬ樣に女の文箱、彼方へ持て」ト言ひければ、はいと座敷を立浪の、跡に千鳥は引殘り、もしや夫はと思へども、聲立てかねてうつとりと、小首傾け居たりけり。

須磨にてはその夕暮、仁木良清歸り來り、「畠山重篤と、讃岐の國まで便船し、伊豫の領地へ村荻を、送り届けて候」ト、聞え上ぐれは光氏喜び、「今日はいと珍らしき、人の集る日にてあり」ト、再ひ赤松太郎を呼出し、盃を賜りて、例の琴を取出し、良清に唄はせ、高直は横笛吹き、

君は見下し給ふまじ」ト、猶何やらんいと甚く、囁きてこそ居たりけれ。

此娘優れたる、形といふにはあらねども、懐しう嬋妍に、心ばせある樣などぞ、都に住みて勢ある、國司の姫君にも、をさ〳〵劣るまじかりける。今此所へ來かゝりしが、父と母との物語は、我身の上の事なれば、次の一間に立忍び、首尾を打聞きて、そのまゝ部屋へ立戻り、涙に暮るゝを乳母の立浪、腰元千鳥が打眺め、「見ては猶更見ぬ人さへ、戀渡る光氏君、夫をあなたの聟君にと、唯今のお話を、承はつてどうぞ早うと、私どもさへ喜んで、須磨へ是からお迎に、參りたい程氣が急くに、なぜにお泣き遊ばす」ト、問はれて朝霧目を押拭ひ、「身の有樣の口惜さ、思ひ知りての此涙。父上は當國には、御領地もいと廣く、これ此樣に都にも、劣らぬ館の構ながら、引籠りてのみおはすれば、妾は猶更都の風俗、いつ見習ひし事も無し。今母上の仰の通り、姿怪しき山賤の、娘を花の都人は、物の數ともし給ふまじ。さらばとて又身に應じ、程に從ふ田舍人を、夫よと呼びて世を送るも、生きたる詮は更に無し。もしもや命長うして、父にも母にも後れなば、尼にやならん海にや入らん」ト、聲を忍んで歎くにぞ、女どもは持餘し、「是は又あんまりな、さうさきの事ばかり、くよ〳〵御案じ遊ばさずと、便求めて光氏樣へ、御文を御上げ遊ばせ」ト、ざゝめき立つを押止め、千鳥は少し前へ出で、「新參の私が、差出

霧をも年にふたゝび、住吉詣を必ずさせし、神の靈驗の正夢を、必ず疑ふ事なかれ。田舍育も人に依れ、眩きまでにしつらひ侍き、藝能もそれ〲に、躾置いたる娘朝霧、京上﨟にもいかでか劣らん。光氏君は言はずと知れし、東山殿の御胤、此上の聟やはある。序を求めて迎へ申さん、その用意したまへ」と、言放つもいとかたくなし。妻の眞柴は聞入れず、「宣ふ如く此上なき、貴き君には侍れど、罪に沈みて流されて、おはせし人を心懸け、給ふも快からねば、此事思ひ止りて、人も聞かんに戯れにも、言出し給ふな」ト、言へば宗入目に角立て、「そもそも罪に當る事、唐土にも我邦にも、その例いと多し。菅相丞をめとして、近くは諸宗の祖師上人、遠き國遠き島へ、流し遣られ給ひしも、人に勝れし世猶、才智學問長けたる人に、必ず是はある事なり。光氏君を産み給ひし、花桐の御方は、わが母上の叔父なりし、間島知義の娘なり、美人の聞え高きに依つて、室町へ召呼ばれ、義正公の御不便深く、ときめかし給ふ事、更に類の無かりければ、人のそねみ人の怨、御身に罹りし故なるか、若くて失せられたりしかど、世に愛でらるゝ光氏君を、遺し置かれ給ひしは、長生をして諸侍の、妻となるよりいみじき果報。されば女は心を高く、君を撰んで仕ふべし。宗全は兄ながら、妾腹にて光氏君に、ゆかりは無けれど今言ふ如く、己は遠く緣を引けり。此事密に申しなば、田舍人とて某を、

二十歳を越すまで朝霧を、嫁にも迭らず聟をも迎へず、末はいかにし給ふと、常々御身が歎をも、今まで聞捨置いたるが、待てば甘露も降るとやら、さても娘は果報者、かゝる序に光氏君に、奉りなば某が、兄宗全と合體せざる、事の由も詳しく知れ、我家は萬代不易。近きに彼所へ罷出で、まづ御目見をなすべし」ト、喜ぶ言葉を眞柴は打消し、「夫は思ひもかけぬ事、京の人の語るを聞けば、其君には内君初め、皆はでやかな女を撰び、愛妾の側室のと、いと多く持ち給うて、まだ其上に御兄上、義尙公に參らせんと、富徽の前の祕藏の姪御を、奥局まで忍び忍びに、過ち給うて御所を騷がせ、その御咎にあれへさすらへ。田舍育の朝霧に、何とて心をとめ給はん。お目見に出しなば、彼はあやしの山賤の、娘かなんどとお笑種、思はぬ恥を見せられん」ト言へば宗入腹立ちて、「御身の知らざる事のあり、夫故我とは心も違はん。去頃夢に美しき、御所風の上臈一人、枕の邊に歩み寄り、宗全都に謀叛を企て、汝をも語ふべし、夫に與せば家は絶えなん、身を愼みて居る時は、好き孫數多まうくべしと、宣ふと見る其中に、兄より急の書狀なりと、近習の武士が搖覺し、差出すを披き見れば、果して此度叛逆に、一味せよとの事にてあり。心の中に驚き恐れ、夫より度々催促あれど、加勢の人數も今に上せず。はた好き孫を擧けんとの、告は正しく此君を、迎取れとの知らせならん。これ住吉を年頃信じ、朝

さん」ト、手本の如く書終り、文箱に納めて差置けば、光氏再び惟吉を、近々と招き寄せ、「宗入方へ是を持行き、千鳥といへる腰元を、密に呼出し當館の、姫朝霧へ是を參らせ、御返事取りて給はれと、懇に頼むべし。何方よりと尋ねなば、去りし年宗入殿の、御目に懸りて龍王の、使なりと戲れしが、實は室町昵近の、武士の中にも隱れなき、赤松左衛門正則が嫡子、太郎高直が艷書にて候と、一番鎗の其時に、名乘るが如く立派に申せ。道は馬にてはや〳〵行け。高直はさぞ疲れつらん、まづ引下つて休息せよ。日暮れて後にまた逢はん」ト、奧へ入らせ給ひけり。

かの山名宗入は、兄宗全とは事變り、邪智を廻し奸計を、企てべき器量も無く、榮華に耽り心高う、思へる生にありける故、初めの程は執權に、なるべき望もありけれど、其事叶はざりける間、都へ出でて腰を屈め、頭をさぐるも懶くなり、播磨は大概領地なれば、國の中の者どもは、入道殿〳〵と、擧つて恐れ敬ふに、いよ〳〵誇りて明石へ引込み、都にも恥ぢぬばかり、家居廣く造りなし、花より雨より朝霧を、眺むるを樂しみに、年月を經たりけるが、光氏かくて在すと聞きて、奧方眞柴に語らうやう、「花桐のおん腹の、光る君と世に名高き、東山の御愛子、御勘氣を蒙られしと、いふにもあらねど我とわが、御身を退き去る頃より、須磨の浦に御假住、

からん。此所へ迎へ給ふとも、押晴れての御本妻、誰かは誹り申すべき」ト、聲打潜めて言ひければ、頭痛きや光氏は、拳に額を打ちながら、「さればよ久しうなる儘に、此所へ呼ばんかと、思ひし事の無きにもあらねど、我だに宿世の淺ましき、報にかゝる目や見ると、覺ゆるばかりの此住居、彼にはいよ／＼つきなからんと、思ひ返して其事は、言ひも出でずに打過ぎたり。まづ夫よりは差當り、急に言ふべき事のあり、此方へ來よ」トかの海を、見渡す廊下へ誘ひつ、「知つての如く此須磨より、あれ／＼明石のあの浦は、只這渡る程なれば、かの入道の娘の事、思ひ出でん」ト宣へば、高直暫し打案じ、「さて御覺の能き事かな。夫は山名宗入が、掌の中の珠と傅き、未に緣につかずと聞く、かの朝霧が事ならん。むかし雨夜の物語、よく無き事を御耳に觸れ、ほと／＼後悔仕る」ト、恐入れば笑はせ給ひ、「思ふ仔細の有る間、汝まづ試みに、朝霧に文を送れ。かの宗入は宗全が、弟ながらも邪に、與する者にあらざる由は、是へ來て後間者を以て、大概は探り知れり。されども肉身分けたる兄弟、迂濶に心は許されず、猶も樣子を探るべき、是もたくみのひとつなり。下書は我して取らせん。惟吉料紙硯を持て」ト、さらさらと書下し、渡し給へば高直は、押戴いて筆執上げ、「主君の仰は是非なけれど、既に先年承引かぬ、氣色を悟つて種々に、言賺つて歸りし某、夫と知りなば此文は、手にだに觸れず投返

けていたはしきは、嵯峨の内君、紫の上にてあり。かの御館は西東と、ふたつに分けて置かれけるが、君の住ませ給ひたる、東の方に侍ひし、女中を殘らず紫の、上の渡らせ給ふなる、西の亭へ送り遣られ、其後是へ御下向。かの女中の其中には、折々毎に御不便を、懸けられし者もありとか、よしさなくとも今までは、御目見なしたる事も無き、内君に仕ふるは、快からず澁々に、初の程は移りしが、御年若に在しながら、思遣深う在まし、萬の事に行渡り、いと深切なる御心ばへ、見もせぬ中は陰言に、譏りし女中も懷しき、御有樣に惚々と、仕へ馴るゝに隨ひて、世にあり難き御情深さ、殊に優れて我君の、御寵愛なされしも、道理なりと褒めののめき、皆々傅き敬ひて、御暇願ふ者はなし。東山より杉生も、度々御文の御使、氣合の惡い其時は、内君を見上げ申すと、とんと病を忘るゝとて、御用のないにも行通ひ、はや内々にて藤の方に、御對面もありしとやらん。さて某も御機嫌を、窺はんため繁々參上、御有樣を見奉るに、君の御座所を在すが如く、しつらひ置かれて内君の、御手づから御配膳、御褥ばかりに打向ひ、御機嫌を窺はれ、行儀亂さず作法を崩さず、恐れながら又外に、類あらざる御發明。是へ下る由を申し、御文をとも存ぜしが、二葉の上にゆかりの者と、御心置もあらんかと、差扣へて申上げず。あの儘嵯峨に差置かれ、浮々と程經らば、御痛はしや内君の、思し慰む折も無

御膳を進めなんどして、日も南に廻る頃、惟吉が罷出で、「思ひがけ無き太郎高直、罷下りて候」ト、言葉の中に續いて立出で、遙此方に平伏す。光氏は御覽じて、「常に戀しく覺えしが、父の不興を受けたる某、わざ〳〵此所へ呼下さば、汝が爲も宜からじと、思ひはかりて打過ぎつ」ト仰に高直打濕む、口をしばたゝきて面を上げ、「珍らしき尊顏を、拜して思はぬこの落涙、昔の歌に嬉しきにも、ひとつ涙ぞ飜れけるとは、かゝる事をや詠みつらん」ト、又差俯きて言葉も無し。光氏小首を打傾け、「案内もなく俄の下りは、合戰の有樣を、直に語らん爲なるべし、人には包む密事もあらん。惟吉は次へ立て。高直是へ」ト宣へば、御側へ近く摺寄り、「よりよりく密書に認めて、豫て御覽に入れたれば、君にも知召す如く、山名昔川私の、合戰のみにて室町へは、未だ宗全馳向はず。されどいづれも油斷なく、御所を固めて候へば、まづ御心安かるべし。某此度下りしは、其事にては候はず、都に殘し置かれたる、方々の御有樣を、申上げん爲にてあり。夕霧君は日に添ひて、見かはすばかりの御成長、とはいへ幼く在ませば、御辨へは確に無く、まだ父上は御歸なきか、御迎に早う行けと、御むづかるのをさま〴〵に、賺し申せば又夫に、紛れて御遊び遊ばすを、老父老母は見上げ參らせ、御機嫌が能きにも泣き、惡い時には素より泣き、二葉の上の御事を、夫につけ是につけ、言出さぬ日とては無し。又取分

入らせ給ひけり。

是よりは記すべき、事も無くて冬になりぬ。雪降りあれて空の景色、殊に凄く見えたるが、夕暮方より雲散りて、月いと明う差入りて、果敢なき旅の住所は、奥まで隈なく床の上に、夜深き空もいと能く見ゆ。入方の月物凄く、こし方の事行末を、思ひ續けて例の如く、まどろまれぬ曉の、空に千鳥の哀れに鳴く。

たのもしや寐覺の床の友千鳥

と返す〴〵獨ごちて、打寢み給ひけるが、明けぬと告ぐる須磨寺の、鐘の響に枕を欹て、次の一間を差覗けど、未だ起きたる人もなし、驚かさんも心無しと、自ら雨戸を押開き、手を淸めんとて手水鉢の、氷を碎き給ふを聞付け、「御看經に候はゞ、淸き水を奉らん」ト、庭の柴垣打廻り、水もて來るは浪内とて、此頃抱へし下部なり。「能くこそ心づきたれ」ト、光氏嗽手水して、「序に汝に用のあり、雪を厭はぬ寒椿、潔く咲いたるを、御佛に捧ぐべし、西に指したる一枝を、是にて切つて參れよ」ト、枕刀を浪内に、渡して其方へ背差向け、朝日を拜して居給ふ中、件の枝を切取つて、雪に手をつき差出せば、「ヲヽよし〳〵」ト瓶に插し、座敷へ戻りて經文を、靜に讀誦し給ふ御聲の、耳に入りて侍ども、驚き起きて御座所をつくろひ、

路に在り。夫へと初は思ひしかど、山名へ一味の者どもの、彼所にあれば紈清へ、洩れもやせんと身寄も無き、伊豫へ下すを情無き、計なりと村荻が、我を怨みて唐土の、王昭君が胡の國へ、送り遣らるゝ心地にて、歎き明さん不便やな。夫は馬是は船、夫は琵琶是は琴、胡角一聲霜後夢」ト、かの大江の朝綱が、昭君を作りたる、詩を打吟じて東の方を、振返りて見給へば、月いと華やかに差出でたり。「それよ今宵は八月十五夜、田舍の心安きに紛れ、夫さへも忘れたり。室町の御遊は、猿樂をや召されけん、嵯峨には何と眺むらん。二千里外故人心」ト、樂天が言ひたるも、思ひ出で給ふにつけ、月の顏のみ打まもられ、藤の方のしめぐゝと、心より著し濡衣の、此儘朽ちも果てなんと、宣はせしも頻りに戀しく、浮む涙を振拂ひ、まづ式日の御禮を、申上げんと身を淸め、そのむかし菅相丞、天子よりの賜を、恩賜の御衣とて左遷の時、持ち下られし例に傚ひ、父の小袖を一襲、朝夕まことの身を放たず、傍に置きたるを、屛風に掛けて禮を述べ、

濡るゝかな尾花の袖の左右

いと懷しげに義正の、物語などし給ひし、その御形の目に浮み、鬱々として脇息に、打凭れつつ寢もやらず、月を眺めて在せしが、はや夜も更けぬと宿直の、侍聞ゆるに驚かれ、寢所へ

き調の句、御覽に入れし御返しの、來るまで暫待たせて」ト、言ふに心は急きながら、せん方渚に良清も、躊躇ふ中に兎角して、使の侍歸り來り、「君には何か打微笑み、御覽ありての御返」ト、文差出せば村　は、恥かしげに押開き、

月ゆゑにたゆたふか須磨の浦の浪

と口の中にて吟ずる折、琴の調の風につれ、遙に此所へ聞えけり。さなきだに哀れなる、所の樣に物の音の、心細さを取集め、御面影も目の前に、浮むばかりに思はれて、村荻更に正體なく、恥も忘れて聲を揚げ、磯邊にかつぱと泣倒れ、起上らねば良清も、あはれと思へど舟よりは、此方に向ひて扇をあげ、打招かれていよ〳〵急立ち、「押して御目見顯ひなば、却つて御不興蒙らん、ひと先國に身を隱し、折を待つよりせん方無し。人に怪しみ受けぬ中、涙拂うていざ來れ」ト、妹の手を取りさま〴〵に、おどしつ賺しつやう〳〵に、乘移らする通ひ舟、結びもとめず徒らに、切行く緣の綱手繩、引過るのも口惜き、村荻が心の中、思ひ遣るさへ哀れなり。

光氏は琴彈きさし、海の面を打見やれば、その船ならん追風にきほひ、さながら雲を凌ぐが如く、浪を分けつゝ遠ざかれば、何とやらん心細う、猶端近く立出でて、伸上り〳〵、「彼が父は伊勢

は知れたる結構、夫に變りて此所は、唐畫に書きたる樣なる御住居、竹を編みて垣を爲渡し、階は石を組み、松の柱茅の軒、疎かには見ゆるものから、流石に風雅は捨て給はず、侘びたる體も珍らかに、いと面白き御座所の樣も、庭よりあらはに見入れられ、御手道具も白木にて、取繕はず雙六盤、碁盤の類は置かるれども、御厨子黑棚二重棚、螺鈿蒔繪に粧ひし、物とては更に無し。御有樣も山賤めき、紅の褪せて黃勝なる、袷のみにて打窶れ、まことの田舍人のごと、もてなし給へど淸らなる、御姿はなほ夫に榮え、見上げ申せば我知らず、打笑まれて御側を、離れがたなく思ふなり。そも〳〵何の故ありて、戀渡る方々を、都に殘し此浦に、移り住まはせ給ふならん」ト、御有樣を詳しく語るに、娘達を初めとして、ありあふ人々泣きみちたり。かゝる折から舟子ども、追風よきにはや船を、出さんなんどとざゞめくにぞ、「君の仰を父上に、申上げん」ト小六郎、前に進めば女ども、「此所にいつまで居たとても、御顏も拜めぬ光氏樣、楫を枕の假寢して、今宵の夢に見るより外、仕樣がない」ト打戲れ、通ひ舟に乘移り、漕戾させて磯端に、殘りし者は村荻一人。良淸これに心もとめず、續いて艫先へ片足を、踏懸けながら後をかへりみ、打驚いて立戾り、泣伏す妹の背打敲き、「御身の歎も道理ながら、乘遲れては便無きに、早く〳〵」ト急立てられ、村荻やう〳〵顏をあげ、「前に使を打賴み、君に拙

亂れを搔揚げ、汗に雲立つ仙女香、粧ひ直してばら〳〵と、打連れ濱邊に下立つて、此所より光る御姿の、見えもやすると伸上り、心ももぬけの空衣、其夜の夢を思ひ出づる、村荻は取分けて、其方の方のみ打眺め、思ひ餘りてはら〳〵と、落つる涙に紅筆を、しめして延の鼻紙へ、

　月待ちて引止められつ綱手繩

　此方より聞ゆるは、差過したる樣なれど、哀れなる折からと、許して御覽ぜよかし。

と書認めて侍の、心安きを密に賴み、「是を君に捧げてたべ」ト、走らする程も無く、小六郎と打連立ち、良淸も立歸り、村荻を小陰に呼び、「御身を同道なしたる段、言上に及びし處、御愼の中なれば、女に對面おもひも寄らず、直樣伊豫へ連下れと、嚴しき仰詮方なし。はや〳〵船へ」ト言ひければ、はつとばかりに雙袖を、顏に押當て言葉も無し。他所の歎は氣のつかぬ、かの若き娘ども、小六郎に打向ひ、「見上げ申した事は無けれど、世に隱れなき光る君、都においでの其中は、多くの女に侍かれ、何の不足も無い御身が、此所は男ばかりとやら、荒くれしうて御寢起も、さぞ事の足らぬがち、其上前は遙々海、後の方は山つゞき、御淋しうて堪へられまい。まあどの樣な御住居ぞ」ト、寄集ひて問ひければ、小六郎打點き、「光氏君には室町の、御所にて度々御目見、まだ嵯峨の御館へ、罷出でたる事はなけれど、御構の外から見ても、大方

た候讃岐へ赴き候。國より出でし其時は、君が此所まで御下りとは、ゆめ／＼知らず罷過し、久しぶりにて御目見致し、まづは都の御物語も、承はらんと思ひの外、嵯峨の御殿は御留守と、初て聞いて驚入る。今さいはひに御宿の、間近く船は寄せながら、都よりは送りの者、本國よりは迎への人數、彼是混雜致すに依つて、まづ此儘に國へ引取り、御代靜謐になりて後、わざ／＼是まで罷出で、尊顏拜し奉らんと、御目見の名代には、恐れながら汝參れと、拙者を差越し候」ト申上れば點き給ひ、「むかし親しき人々を、相見る事も難うのみ、成行きたるに斯くわざと、立寄りて音づれしは、嬉しと己が答へし段、重篤に能く傳へよ。良清はまだ行かずや、汝ち父が待兼ん」ト、小六郎にも其儘に、御暇を賜りければ、直に御前を下りけり。そも／＼此畠山靱負之丞重篤は、勢ある武士にて、一家族多く親類廣く、男子は此小六郎、一人にてありながら、娘がちにて夫に隨ふ、女どもも數多なれば、徒路は混雜なるべしと、奥方は船にて下る。浦傳ひを彼方此方、遊びつゝ來る程に、須磨の邊は外よりも、面白き所なれば、心とまりて通ひ舟に、取乘り／＼磯端近く、漕寄せさせて四方の景色を、打眺めて居たりけるが、光氏君のこの邊に、浮世を離れて在すると、聞けば媚いたる腰元はした、さては若き娘達は、彼所よりは見えもせぬ、船の中さへ恥かしう、懷鏡懷中紅、手に／＼取出で濱風に、吹かれし髮の

十八編下

村荻を密に伊豫へ、連下らせん爲なるが、彼をばいかゞなしたる」ト、仰に良淸猶摺寄り、「其事にて候なり、畠山靱負之丞重篤、此度義尙公の命に依りて、是も亦西國を押へのため、讃岐の豐田へ下り船、幸ひ彼も妻や娘を、伴ひ行くと承はり、彼を賴みて村荻をも、腰元女の姿につくり、召加へさせ候ふ間、難無く都を連れて立退き、かの磯端に待たせ候。御言葉をも下されなば、是へ誘ひ申さんや」ト言へば光氏頭振を振り、「富徽の前の宣う如く、父の勘當受けたる某、愼深き身を以て、いかでか女に面を合さん。直樣伊豫へ誘ひて、汝は再び立歸れ。はやく〱行け」ト傍の、琴引寄せて掻鳴し、重ねて言葉も無かりければ、はつと答へて良淸は、立上らんとなす處へ、靱負之丞の一子、小六郎重員といへる若者、捧物を取持たせ、御前に手をつかへ、「父の申上候、拙者久しく病氣に依りて、本國讃岐に在りけるが、此度都の大亂を、承はつて上京致し、御所へ罷出でたる處、汝は此所に在らんより、取つて返して西國武士、山名へ一味の者あらば、討止めよとの御内意にて、豫て都に殘し置く、妻子をも引倶して、ま

給ふを、見奉りて左衛門夫婦、乳母は更なり心無き、下司婢に至るまで、「泣かぬ日とてはなしとの噂。藤の方は春若君の、御後見と頼みたる、君漂泊となり給へば、我よりはまづ若君の、行末心元なしと、夫にかこちて御歎、其故やらん御心地も、勝れさせ給はぬとか。御兄弟は申すに及ばず、御目に懸けられ睦ましき、夫も是も我君の、事のみを語出で、世の中擧りて戀慕ひ、参らするを又例の、富徽の前は聞召し、父君に勘當を、受けたる人は何事も、心に任せぬ住居して、身を愼むが道なるを、須磨とやらん景色ある、所を撰んで面白き、家を造らせ世の中を、誹りて人を人とせず、かの唐土の我儘者、鹿を指して馬と言へば、さなりと答ふる追從に、等しく彼に心を通はす、しれもの多しと世の取沙汰、これ世を亂す端ならんと、悪し樣に宣ふから、その聞えを煩はしと、人々の憚り給ひ、御音信の絶えたるなるべし。亂を起さん我君の、御企とのたとへ事、あまりと言へば」ト言ひ懸くるを、「これ」ト押止め聞かず顔、作りて光氏打微笑み、一言ふべき事を忘れたり、汝を都に上せしは、〔直ちに下の條に接續す〕





數を爪繰り、「南無釋迦牟尼佛」ト、ゆるやかに稱へ給ふ、御聲の尊さは、此世の人とは思はれず。其日は浪も靜にて、小さき鳥の浮べるを、見渡すも心細きに、雁の列ねて鳴く聲の、楫の音にまがへるを、打聞き給ひて都戀しく、御涙の飜るゝにや、かき拂ひ給ふ御手の、黑き珠數になほ榮えて、岩に碎くる浪より白し。沖の方には船歌を、謠ひのゝしり舟子どもの、漕行くなども能く聞ゆ。光氏は扇を翳し、細やかに目をとゞめ、近習の武士を顧み給ひ、「あれ磯端に漕寄せたるは、大船の通ひ船、商人の類かと、「思ひの外に乘りしは女、その間遙に隔たれど、衣の色合 姿形、たしかに都上﨟なり。櫻と共に都を散り、「花を見るのは初めてぞ。そも〳〵何者なるべき」ト、仰に皆々高欄に、手を打懸けて伸上り、「此方に五人彼方に三人、しかも町の風俗ならず。あら訝し」トいふ折から、旅の姿を其儘に、「仁木良淸京地より、只今歸り候」ト、自ら名乘りて廊下口、入來るを見給ひて、「やれ珍らしや懷しや。忍び〳〵に合戰の、注進は來れども、いかなる事か兄君弟の、其外ゆかりの者どもより、初の程は詩を作り、又句を吟じ哀れなる、文を書きて送りしが、此頃絶えて音信なし。世の風說は聞かざるや」ト仰に良淸聲を潜め、「都にては月と日の、立行くに隨ひて、いよ〳〵君を戀ひしと思す、方々多きその中に、夕霧君は御智惠の、つかせらるれば猶以て、常々思し出で給ひ、父君の御許へ、我を連れてと泣き

と、思ひ直して琴をすこし、掻鳴し給ひけるが、我ながらいと物凄う、聞ゆる音色に小首を傾け、「あな心得ぬ此調子、人を打たんと忍び寄る、曲者あるに疑なし」ト言ひも果てぬに屏風の陰より、面を包みし怪しの男、ずつと出でて言葉も無く、刀拔かんとする小手を、光氏すかさず左に押へ、右には琴の彈さしを、又引寄せて掻鳴す。かの曲者は氣を苛立ち、引外して打込むを、光氏開いて力も用ひず、扇の要にしんの當、うんと一聲倒るゝ音。惟吉驚き馳來るを、「密にせよ」ト光氏制し、「幸ひ宿直の者ども、は眠りこけて知る者なし、其奴は其儘縛めて、調太夫に預け置け。必ず人に沙汰するな」ト、再び琴を引寄せて、「戀佗びて、泣く音にまがふ浦浪は、思ふ方より吹く風か。身にしみ〳〵と汐木樵る、峯につれなきひとつ松」ト謠ひ給へる御聲の、いと目出度に近習の武士は、眠も覺めて聞とれしながら、却つて此所へ曲者の、忍入りしを惟吉に、搦めさせ給ひたる、其事どもはまどろみし、夢の中にて知らざりけり。

斯くて日かずを經るまゝに、園の草花いろ〳〵に、咲亂れて面白ければ、光氏は近う馴れ、仕ふる者を四五名ばかり、引連れて海の面を、見やらるゝ廊下のわたりへ、白き綾のなよやかなるに、紫苑色の單を引懸け、帶しどけなく打亂れし、姿を更につくろはず、不圖立出で給ひけるが、ゆゝしう淸らなる樣の、常に優れて見え給ふは、所がらに依るにやあらん。袖の内に珠

れ、召下されて試みに、これらの體を寫させ給へ、恐らくは皆つくり繪と、いふものになり行きて、斯くの如くの眞景は、心許無く候」ト、申せば君も笑はせ給ひ、「わが繪の好きにはあらざれど、海の面山の姿、朝な夕なの日に馴れて、繪のみを手本とせし時より、少しは見所あらんも知らず。都のさまで遠からぬ、名所にては須磨明石に、また越す眺は無しといふ、常々人の物語、聞きしに違はず目かれぬ絶景。さにてはなきか」ト機嫌能く、總て斯樣の遊にて、兎角紛らし居給へども、夜は御前の人も少く、皆打寢めばねながらに、物語する相手も無く、光氏一人目を覺し、やをら枕を欹てて、四方の嵐を聞き給ふに、浪はたゞ此許に、立來る心地にとげても寢難く、風に瞬く燈火の、影に透して彼方を見れば、流石に宿直の侍は、寢ぶたげながら袴も取らず、次の一間に舉り寄り、何やらん打さゝやき、忍びて鼻をかむもあり。あゝ我ゆゑに彼等まで、親と隔たり片時も、離れがたなき妻子に別れ、家をも捨てて見も知らぬかゝる浦邊に惑ひ來つ、賴みとするは我ばかり。夫さへ辛苦に浮立たぬ、顏をまもらばいとゞ猶、心細しと思ふらん。鷹狩漁獵の勇ましき、遊に暮して人々の、氣を引立てんと思へども、世の評論を祈りの立願、精進勝にて夫も叶はず。惟吉はじめ侍ども、さぞ便無く思はんと心の底に打泣きて、涙落つとも覺えぬに、枕は浮きて流るゝばかり、床を浸せばせんなき愚痴

にあぢき無きものはなし。戰場に望む時は、更に命は無きものなり、我身果敢無く成行かば、御身はいかに思さるべき。近しき須磨の別ほど、悲しと思ひ給ふまじと、思へば夫が怨めし」ト、いと懷しき有樣にて、實に哀れと思ひ入る、顏色見えていふにつけ、ほろ〳〵零れて桂樹が、淚に袖を絞るを見遣り、「そも須磨か此所か、夫はいづれに落つるにか」ト、くねり言葉の怨言、いふ中近づく陣鐘太鼓、「馬曳けやつ」ト桂樹が、差出す太刀を取るより疾く、表を指して馳出でけり。

須磨の浦にはいとゞ猶、心盡しの秋風に、海に少し遠けれど、かの行平の中納言が、旅人の袂涼しくなりにけり、關吹越ゆると詠じたる、浦波の音よる〳〵は、實にいと近く聞えつゝ、又なく哀れなるものは、かゝる所の秋なりけり。晝の程は何くれと、戲言など打宣ひ、徒然なるを慰めんと、いろ〳〵なる紙を繼がせ、手習なんどし給ひつ、又或時は珍らしき、唐綾の類の絹へ、さま〴〵の繪を書すさび、屛風の面に押し給ふを、近習の武士は打眺め、「都に渡らせ給ひし時は、たゞ人々の物語に、斯くもあらんと海山の、景色は想ひやり給ふ、のみにてありしが此程は、御目に近く御覽じて、さて御筆を下されたれば、あれ打寄する浪の勢、この荒磯のたゝずまひ、これに似し繪を今まで見ず。近頃上手ともてはやす、土佐にもあれ曾我にもあ

ひければ、疑ひ無きにもあらざるか、物思はしげに差俯向く、桂樹の顔差覗き、「二世の固めの盃は、今宵初めて汲みたれど、元より相識る中なるを、初々しげのもてなしは、いと心得ぬ事にこそ。言葉も無くて在するは、糺の橋にて某が、討たれし由に驚きたる、又勅筆の短冊もて、再び御身に對面したる、それかれ思ひ出でられてか、そは忝なき心なり。兎にも角にも我君の、思ひがけ無く都を振捨て、須磨の浦邊へ下向の後、名のみは花の御所なれど、春も春とは思はれず、月の秋にも光なき、心地に歎くは幾人か、御身もさこそ思ふらめ。夫といふのも憚りあれど、富徽の前の御心の、頑ましきより起りし事、末々は御身に報ひ、いかなる罪をか受け給はん」ト、涙ぐめば桂樹は、おのれが心を引見んと、斯くは夫の言ふならんと、思へばいよ〳〵言葉もなく、苦しさ更に堪へかねたり。かゝる折から近習の武士、いとあわたゞしく走出で、「山名宗全反逆は、極りながら音川と、たゞ私の合戰のみ、御所へは弓をひかざりしが、今宵何とか思ひけん、室町近く陣押の、其體心得難きに依り、おの〳〵固めに出でられたり。君にも早く御出仕」ト、申し述べて退きければ、心得たりと馬之丞、肌著の上に袴を引掛け、「夫鎧櫃はや持て」ト、言ふに桂樹かひぐ〳〵しく、後に廻つて元結を切り、兜下地に取繕ひ、御胡簶よ御弓よと、立廻れば馬之丞、籠手差しながら此方に向ひ、「有るにつけても世の中ほど、實

は、數の定まる事ならねば、餘の者ならば召抱へん、わが姪ながら此後は、たとへ局へ來ると
も、對面はなし難し」ト言放ち給ひければ、琵琶之助は押返し、更に言ふべき言葉もなく、す
ご〳〵屋敷へ戻りければ、妻の司は出迎へ、「石堂殿より桂樹を、婦妻に申請ひたしと、御留守
の程に使者到來、娘に其由語りし處、兎も角もとの答ゆゑ、返事は是より申入れんと、使者
は先刻かへしよ」ト、聞いて大いに打喜び、「馬之丞とは似合の年頃、家柄といひ不足はあらじ、
夫こそ宜けれ」ト早速に、結納それかれ取極め、此由披露に及びければ、例のさがなき浮世人、
また是を聞付けて、昔の事ども知れる者、馬之丞と桂樹は、初はわりなき中なる故、光氏君と
のいたづらを、知れども男は忘兼ね、人の譏もつゆ知らず、頓て朝夕側に置き、哀れに契るを
かしさよ」ト、ひそ〳〵語合ひけるが、これらは更に耳にもとめず、文月になりて呼迎へ、三々九
度の儀式も終り、作法亂さぬ床盃、二人竝ぶを里付の、糸路は屏風の陰よりして、つら〳〵顏
を打まもり、馬之丞の樣形、淸らに見ゆれど及びなき、君の姿の花の宴、夕立つ雨の蚊帳の內、
心に染みし事どもを、なほ思ひ出で給はんと、噂に聞きしを實とし、彼さへ實に桂樹は、光氏君
と契りしと、思ひ定めて心根を、察し遣るとは知らざれど、馬之丞も光氏が、琵琶之助への仲立
は、我言入れんと去りし年、言葉を固めて置きながら、物に紛れて其事なく、須磨へ下らせ給

目馴ざる、故にやあらん珍らしくて、思ひの外に氣を慰め、且は夫より物思ひを、催す種となるもあるべし。
誰言ふとなく桂樹に、光氏君の忍びく、かたらひ給ひし噂の高く、剰さへ其君は、須磨へ下らせ給ひければ、捨てられ物になりしなど、さがなき人の笑ひ草、漏聞くからに桂樹は、憂くも辛くもさまぐに、思ひくづほれ居たりしかば、琵琶之助は取分けて、寵愛の娘ゆゑ、彼が兎に角引籠り、心も浮かぬ有様を、見るに忍びずさるにても、光氏君の御心に、入りなば直に召呼ばれ、御側に置かるべきを、さもし給はであるまじき、匂の局へ忍入り、夫だにあるを書捨の、反古を我に奪はせられ、富徽の前に見せよとある、主の仰は力なく、よからぬ事と知りながら、その如く計らひしに、夫より起りて都を開かれ、不便や娘は廢物、このまゝ屋敷に置く時は、いよく浮名を流さんかと、心の中に思ひ廻らし、富徽の前の御前へ出で、「桂樹が今までの、行の憎かりしも、誘へる人のあればなり、御側室にあらずんば、義尚公の御身近く、召使はれ候とも、今は憚る事にもあらず、まづ御館へ差出さん、宜しなに申し給はれ」ト、願へど御氣色宜しからず、「光氏と事變り、義尚は心すなほに、強き程なき生ながら、斯くまで噂の高かりし、桂樹なれば側近く、召呼ばんとは言ふべからず。腰元手近く使ふ女子

しほたれていつまで須磨の浦の夏

宣ふ如く又聞えん、便も覺束なき

なんど、書すさび給ひける、その言の葉は思ひ遣るべし。巻收めて君吉を、再び近く召呼ばれ、「七條通木屋町に、星月といふ醫師のあり、故ありて其家に、今假住する花郷と、いへる女は千景の方の、腹がはりの妹にて、我にもゆかりの者なる故に、此所に來て後彼が許へ、送りし文のその返事に、

軒荒れぬしのぶも繁き袖の露

と去頃書きておこしゝが、實に〳〵垣に這懸る、葎の外は力草と、なすべきもの無き彼が身は、悲しといふも愚なり。降續きたる霖雨に、塀も垣根も所々、頽れしなんど傳聞く、道の序にあるなれば、汝都を過ぐる時、遊佐國助が許へ立寄り、しか〴〵の由を語り、かの家を繕はせよ。花郷が實の父、調太夫は此國に、あれども山名へ憚りありて、今京地へは送り難し。くれ〴〵も河原之進へ、密に傳へさて國に、戻らば阿古木へ返事、渡して宜きに傳へよ」ト、文投遣りて君吉に、御暇を賜りつ。かく何所へもそれ〴〵に、覺束なからず聞えかはし、徒然なる折節は、都より送りたる、文どもをかき集め、心々を見給ふに、常にはさしも懷しく、思はぬまでも

に馴れたる言の葉墨付、いたり深う見所あり。されども黄昏二葉の上、一節ならず再び三度、憂き目を見せしもこの阿古木の、心あやまちなるに依り、疎んじ果てて磯菜に託け、遠く放遣りたるなれば、今は更に心もとまらず。たゞ折からの文の書振、いと哀れにて其使は、かの空衣が事よりして、睦しかりし君吉なり、打捨てても置き難く、旅の疲を晴せよと、まづ二三日止め置き、伊勢はいかなる所ぞと、彼國の物語、彼にせさせて聞召し、つく〳〵と見給ふに、はや元服はしたれども、未だ若やかに氣色ある、能き侍となりければ、昔の如くわが側に、据置かんかと懇の、仰を受けて君吉は、いと有難き事に思ひ、御前は辷り出でたれど、斯く田舎びて哀れなる、住居の事にてあるなれば、間所とても多からず、侍ふ人もおのづから、物思はしき御有様、ほの見上げつゝ召使ふ、女は元より童さへ、御傍に侍らず、さぞ事足らず思さんかと、忍びて涙を落しけり。

さて光氏は阿古木の許へ、

斯く世を離るゝ事と知りなば、汐燒く浦を諸共に、眺めにいざと言はましを、今はかひなき蛤の、ふたみに別れ行方の、波路遙に隔たれど、同じ浦曲はみるめ刈る、袖にもいかで劣るべき。

十八編上

實や騒がしき程の紛れに、前の巻には書漏しつ、かの伊勢へ下りたる、阿古木の許へも忍びやかに、御使を立てられければ、彼方よりも君吉を、わざ〳〵須磨へぞ下しける。能くこそ尋ね來りしと、光氏は近く呼び、喜代之助等が無事を問ひ、阿古木の文を見給ふに、

現とは思ひ遣られぬ此程の、御住居の有樣を、聞くさへもなほ明けぬ夜の、夢かとばかり驚かれ、心惑ひて今更に、いふべき言葉も侍らず。さはさりながら年月を、過し給はで又もとの、都へ歸り咲く花も、浪路隔つる伊勢の海、我は眺めん便もなし。萬に思ひ亂れたる、世の有樣に又文して、聞えん事も遙なれば、

浮海布かる袖は乾かず浦の夏

いかになり行く我身か。

と猶くさ〴〵に書續けし、文の言葉いと多かり。實にも哀れと覺しが、打置き〳〵思ひ出づる、事を次第に書續ぎけん、白き唐紙を四五枚ばかり、巻續けたる筆遣、人より殊に媚めかしく、廓




足利
光氏

偐紫田舍源氏第十八編序

猿猴の手の長物語、およばぬ湖水の月を取らんと、山王の櫻木に、彫刻める事十八編、賣出すのも申の春、孫彦玄孫におしうつる、宇治十帖のするまでは、從弟端弟の系圖の混亂、書とり難く思へども、三間堂の佛より、御贔屓の光たのみ、三萬三千三百丁、續けるつもりで初年より、今まで恥を栫八年、是も猿には緣のある、當るといふは草紙の吉瑞、摑んで投げし蟹の甲、這ひわたる程といふ、須磨より明石の卷にうつれり。

天保丙申孟春　　柳亭種彥記

く晝となく、その俤の身に添ひて、いと堪へ難く思ひ出で、なほ忍びてや此所に、迎取らんと思す事、度々なりしが打返し、しかする時は宗入を、都へ入れじとくひとむる、手段の障ならんかと、兎に角世界静謐に、はや〳〵なさしめ給へとて、神に佛に祈誓を懸け、光氏ひとり精進にて、旦暮行ひ居たりけり。

さて須磨にては都の便を、待侘び給ふ程も無く、是等をはじめその外の、返事を取集め、良清が後追うて、のぼせ給ひし近習の武士、もて歸りたりければ、光氏それかれ見給ふに、桂樹は病と言立て、父の許へは歸りながら、まだ石堂へは輿入せず、我身の上より事起り、君には都を去られしと、人のいはんが恥かしと、おもひ歎くもいとほしと、かの糸路よりいひ送りし、返の中に卷籠めたる、桂樹が其文に、

行方を青葉につゝめ戀の山

あわたゞしく下らせ給ひ、人々の御歎、はた御住居のこと足らで、はか無く過させ給はんと、推量り侍れど、夫も是も愚なる、筆には盡し難きなど、事短く書きてあり。光氏も其心を、哀れと思ふ事もあれば、人知らず歎かれぬ。紫よりの御文は、心殊に細やかなり、御返事なれば、

哀れなる事いと多くて

くらべ見よ汐汲む袖と夜の衣

此文に取添へて、紫より送りたる、こよぎ搔卷蒲團さへ、色合紋柄淸らなり。何事もうちあがり、しとやかにして風流なるは、送りし物にもまず知れぬ。今は己もあわたゞしく、忍びて通ふ方もなし、世の騷だに無きならば、彼と二人しめやかに、在るべきものをと思ふにつけ、夜とな

藤の方にも春若丸の、力草とも後見とも、打頼みたる光氏の、隔り行きしを思ひ歎く、その様いとゞ哀れなり。この年頃の憂き思、彼方は浮名を世に流す、夫が望にありながら、此方はさすが女氣の、物の聞えのつゝましく、少しなりともなさけある、氣色を見せなば夫につけ、人の咎の出來んかと、偏に思ひ忍びつゝ、光氏の哀れげに、言ひつる事をも心強く、聞流し見過して、つらうもてなし給ひしかば、事のあれかし世に觸れんと、耳を欹だて目を瞬るが、さがなき人の常なれど、はや此方の噂をば、言出づる事も無く、止みぬる樣になりゆきしは、藤の方の愼深く、且一旦宗全に、見すべき手段のみにして、母とも賴むその人を、世に誹らするも本意ならずと、光氏も近頃は、思ひ返して人の目に、立つを憚り心に懸け、持隱しつる故ぞかしと、藤の方は其事此事、心に浮みて哀れにも、又戀しうもさまぐ〵に、思ひ亂れし折も折、須磨より來りし光氏の、御文を見給ひて、袖は涙の淵となる。

五月雨や鹽木なげきをこゝもつむ

仇し浮名にありながら、胤まで宿しゝ中なりと、一旦人に唄はれしは、宿世よりして定めある事かと思へば光氏と、淺き緣とはいかでか思はん、三絶えて久しき返なれば、常より少し細やかに、心をとゞめて書けるなるべし。

君、都へ還らせ給へよと、苦しき時の神頼み、佛にさま〴〵祈り申し、歎しつ賺しつ紫を、さま〴〵に言勵まし、やう〳〵と御文の、返事を書かせつゝ、君が旅寢の夜の衣、御羽織御袴、進らせ物を新に仕立て、積重ぬれど山里に、住む其中は世の聞え、東山へも憚りて、摺箔縫箔華やかなる、衣をば著じと豫てより、宣ひ置きし事なれば、皆色もなく寂しげなる、物のみにして此殿に、ときめき給ひし其時とは、樣變りたる心地せられ、悲しさ遣らん方もなく、朝夕出入り給ひし戸口、常に凭れて在したる、床の柱を見給ふにも、胸塞りて紫は、とかく言葉も涙のみ。鹽を踏むとか下樣の、諺などに今も言ふ、他人の中に立交り、世に鹽染みて年長し、人だにかゝる事あらば、歎かんものを是はなほ、いと若くして馴睦み、父になり母になり、いたはり扱ひ生立てて、ならはし給ひし光氏の、俄に別れ給ひしなれば、戀しと思すは道理なり。死別れしほど悲しきは、世に類無きものながら、夫は思うて返らねば、次第々々にわすれ草、生ひ行く事もありなんを、是は津の國播磨潟、國の境の須磨の浦、聞くには近き程なれど、逢見る便は絶えてなく、罪あるならば免しもあらん、自ら設けて自らの、御身を彼所へさすらへ人、さすれば是はいつまでと、限りあるべき別にも、あらぬを思へば紫の、歎は更に盡きざりけり。

き寄せ、光氏の言ひける樣、「此度の京への人は、誰をか出し立てんと思ひ、心にそれかれ撰みしが、汝を除けて外になし。まづ此文をそれ〴〵の、所へ渡してさて其後、さいつ頃鳥邊野の、蓮臺寺にて汝にさゝやき、紏の館へしのばせ置きし、村荻を誘ひて、本國伊豫へ下るべし。彼は山名に憎しみを、受けたる者にてあるなれば、在所を知らば奪取に、軍兵を差向けん。尤も紏を防禦の用意、密に手配なし置けども、たゞ事無きを計るに如かじ。とはいへ都は合戰最中、必ず伊豫へ下向を急がず、秋にもなれ冬にもなれ、便宜を待つが肝要ぞ。所々の文の返事を、受取り歸る其者は、別に後より上すべし、汝は都に匿れ居て、妹と倶に船にて下れ」ト言敎へ給ひければ、良淸は「仰の趣、かしこまり奉る」ト、御文を取收め、直に出立したりけり。京にてはこの御文、所々に見給ひつゝ、心の亂るゝ人々多かり。紫は取分けて、涙に能くも讀分け難く、そのまゝ顏に押當てて、只伏沈み泣入りて、起きも上らず只管に、思ひ焦れし有樣を、お道理なりと腰元ども、慰めんとはする者なく、みな〳〵其所へ寄集り、心細うぞ思ひける。光氏此所に在りける時、側を離さぬ手道具ども、彈鳴したるあづま琴、脫捨置きし小袖の匂、それかれにつけ今は世に、亡くなりたらん人の樣に、思し歎けば言の葉は、あらいま〳〵しと何某の、僧を賴みて加持祈禱。斯く紫が打歎く、心もしづまり且は又、もとの如くに光氏

戀しき人のいと多し。まづ紫が言葉數、多からずしてくよ〳〵と、心に思ひて歎きし樣、春若丸の愛らしく、又夕霧が頑是なく、遊びし事をはじめとし、彼方此方のしのばしき、音信を聞えんと、嵯峨の館へは取分けて、茲にいはんはうるさきまで、文細々と書認め、夫に續では藤の方へ、

汐たるゝ浦人おもへ五月雨

物思ふ身はいつといふ、分ちもあらねど此頃は、心も空も打亂れ、來し方行く先かき暮し、池の水際の增りしも、わが涙かと怪しむ。

など、哀れげに聞えあげ、さて例の桂樹は、はや石堂へ輿入の、其程も測り難く、且は心の頑ましき、富徽の前に憚あれば、糸路の許まで私の、用事ありげにもてなして、書いたる文の其中に、

此頃の徒然に、過にし方を思ふにつけて、

こりずまの浦の見る目も青葉哉

又赤松の館へは、正則夫婦夕霧丸の、乳母にまでも心を添へ、幼きを能くいたはりて、成長させてくれよかしと、さま〴〵に書盡し、給ふ言の葉思ひ遣るべし。此時に良清を、机の邊へ招

變りて世の中の、かく騷しき折ならずば、却つて面白かるべしと、かの侘好にて茶座敷を、田舍家めきて造らせたる、昔のすさびも思ひ出でつ。さてこの近き所々に、父より豫て賜りたる、領地も其所此所ありければ、夫を守らせ置き給ひし、莊屋代官などを呼出で、仁木良清始めとし、親しく仕ふる家來より、それ〴〵の用向を、言渡させ給ふにぞ、彼者等この住居を打見、斯くては御座所も端近く、御寢間もあらはなるべしとて、木工坊工檜皮葺、大勢を招集め、次の日より破れし所を、取繕はんとなしければ、光氏はまづ庭の、草を掃はせ池を穿らせ、水深う遣流し、植木など數多取寄せ、荒れたる園も時の間に、見所ある樣に造らせ、今はと心の休まるまでは、只夢心地に現ならず。此所に近き國司、郡司はいふも更なり、總て足利の幕下の武士ども、光氏君の此所へ、渡らせ給ひし由を聞き、親しきは猶常々は、疎く過ぎたる者まで も、古御所公のなたゝる御愛子、等閑にはなし難しと、亂れたる世の事なる故、忍び〳〵に心を寄せ、仕ふまつるもいと多く、旅の宿に似もつかず、人騷がしく集れども、はか〴〵しくは物語の、敵手となるべき者もなければ、知らぬ國の心地して、甚く心の結ぼれつ、斯くてはいかでか年月を、此所に過さん果敢なさやと、思ひ遣りつゝやう〳〵に、事靜まりて春もゆき、草の軒端に葺添ふる、菖蒲の根さへ霖雨の、頃にもなりて京の事、さま〴〵おもひやらるゝに

此所も昔は旅人を、逗むる宿の立續き、いと賑はしき所なりしが、近頃は甚く荒れ、家も毀ちて垣もせず、唯其庭に植置きし、一松のみ印に殘りけり。かの唐國の屈原が、江潭に放たれしも、我身の上に思ひ競べ、汀に寄する白波の、寄せては返るを打眺め、羨ましくもかへる浪哉と、打吟じ給へる樣、かの業平の歌ぞとは、誰々も知る事ながら、所柄にや珍らしく、御供に隨ふ人、皆々哀れと聞なしつ。さて此所より船に乘り、うちかへりみ給へるに、こし方の山々は、霞遙に隔りて、是や實に三千里の、外の心地もするからに、櫂の雫もわが涙も、

古鄕を峯の霞ぞ隔てける

日の長き頃なるに、追風さへ添ひければ、まだ申時ばかりに、かの浦に著き給ひぬ。さて住み給ふべき其所は、かの行平の中納言が、藻汐垂れつゝ侘ぶと答へよと、詠みける家居の邊ならん、海面は稍入りて、哀れに心凄げなる、人氣だに無き山中なり。程なく其所へ到り著き、柴を束ね竹を撓ねし、まづ垣根の樣より始めて、いと珍らかに見給ふに、書院座敷といふべき廣間も、哀れに古びし茅屋にて、葦の葉をもて葺渡しゝ、廊下めきたる所など、をかしう造りなしてあり。此所はもと鄕侍の、住家にてありけるが、其者近頃他國へ移り、空家となりけるを、光氏先に家來を下し、購めさせて置きつるなり。山里には似合しき、荒れたる住居も都には、趣

ありし故、驚き恐れて祕め匿し、我に與へぬものならん。かゝる大事を言付けしは、あゝ某が粗忽なりと、後悔なして惟吉が、妻の妹の糸路といふもの、青葉に奉公なすを幸ひ、もしさる品は見ざるやと、惟吉より問はせし處なか〳〵かゝる大事の品、女どもの見る前にて、取扱ひ給ふべき、いはれ無ければつゆ知らず、されどもお家の重寶の、類の物は御居間近き、塗籠に入れ給ふ樣子なれば、もしもや夫に籠めあらんかと、言ひつと告げぬ。夫故己が桂樹の、寢間へ忍びし其時に、糸路を賴みて導きさせ、かの塗籠に一夜隱れ、やう〳〵尋ね求めたり。琵琶之助だにこの連判、我手に入りしといふ事は、まだ氣のつかぬ趣なれば、其餘の者は猶知らず。汝これを熟覽して、忠義に見せても山名へ傾く、者の無きにもあらざれば、必ず油斷すべからず」ト、仰に國助頭を下げ、「恐れながら御用意深き、御計ひと感激せり。委細畏み奉る」ト、一巻確と懷中す。光氏床几を下立つて、「さて其事を言終れば、我又元のうかれ人。なう恐しの合戰や、はや〳〵須磨へ遁下らん。石堂さらば國助よ、紫の事くれ〴〵も、賴む〳〵」ト言ひながら、岩根の死骸を打見やり、「わが五歳の時泥藏は、妹の桔梗に殺害され、是は現在我子の矢先、惡の報は目前なり。乘物遣れ」ト急がせて、川に沿うてぞおはしける。

光氏は駕籠を早めて、其夜は難波に宿を求め、朝とく立ちて大江の岸と、いふ渡に至りけり。

り。光氏重ねて國助を、近く招きて、「わが側室花鄕の、父片攬調大夫は、かの宗全には仕へながら、我に心を寄する者、もし此後に勝元が、山名の館へ攻入るか、又は間者細作を以て、窺はんと計るとも、館の案内知るべからず、紫が手遊の、雛の家は調太夫が、造らせて贈りしにて、卽ち山名の館の圖、是を以て見る時は、案內逐一知るべきなり。其事はかの品に、添へて贈りし犬張子の、內に籠めたる片攬の、密書に詳しく記してあり」ト又懷より一卷を、取出して渡し給ひ、「是こそは宗全が、徒黨一味の連判なれ。まづ斯く身方の揃ひし上は、この宗全に一味なし、早く都へ上れよと、彼が弟明石に住む、宗入に見せんため、去年の睦月初つかた、岸高の頓五郎を、飛脚となして送る由、是もかの調太夫が、密に我に告げたる間、その日限頓五郎が、面體風俗委細に聞置き、琵琶之助を招寄せ、宗全が忍びの飛脚、頓五郎とてしかじかの、者を途にて斬つて捨て、連判狀を人知れず、我に渡せと言付しが、琵琶之助その後來り、仰に從ひ其所此所に、家來を忍ばせ頓五郎を、狐川の渡場にて、討止めては候へども、連判の一卷は、懷中にも荷物にも、これ無き由を我に告げつ。依りてつら〳〵案ずるに、琵琶之助は武に疎く、夫に居る馬之丞が、婦妻となすべき桂樹を、愛するのみにて一方の、敵を防がん器量は無し、されば密に連判を、披き見たるに我緣者、富徽の前にゆかりの者、夫に加はり





は形を正し、「君には嘸かし御退屈、御立もや」ト勸むる此方に、しづ〳〵立出る一人の老女、「私事は此小屋を、お貸し申した者なるが、音に聞くのみ光氏樣を、初て拜みし有難さ、御菓子にても捧げんと、思うたばかりで貧しい暮し、せめては御茶を一服」ト、差出せば光氏は、物をも言はず其茶碗、扇を以て打落すに、あら怪しむべし靑々と、萠立つ其所らの若草に、飜れたる茶の懸るとひとしく、色も變じて枯萎むを、見るより良淸飛懸り、老女の襟髮引摑み、「鴆毒を入れたる茶を、君にすゝむる己はしれもの、まづ何者に賴まれしか、夫より先に白狀せよ」ト責問ふを光氏押止め、「其奴めは川次郎が、實の母にて名はたしか、岩根とやらんいふ女、我に逢ひしは只一度、夜目の事にてあんなれば、よも見覺はあるまじと、近付寄つて害せんと、謀りしに疑無し。問ふに及ばす山名の味方」ト宣ふ隙に以前の早舟、再び葦間を漕來り、弓に矢番へて川次郎、窺ひ〳〵光氏を、目がけてへうと放つ矢の、楯に良淸突廻す、岩根が胸元篦深に貫き、あつとも言はず息絕ゆれば、流石に母を矢に懸けて、川次郎もはつとばかり、驚くはずみに縺るゝ足、舟の小舩を踏辷り、川へざんぶと遠近の、山の雪解に水勢も、殊更激しく腹卷に、身體自由ならざれば、浮きも揚らず其儘に、底の水屑と成行くを、見捨てて舟には馬刀助はじめ、雜兵どもはいよ〳〵あわて、力を戮せ漕立て〳〵、跡をも見ずして遁失せけ

つて語れよ」ト、いひ放ち給ふにぞ、川次郎大いに驚き、「夫にて思ひ當りし事あり、妹めはかの昔より、子供話に言傳へし、小町に等しき生付、男に逢はれぬ不具とて、婚禮なしたる其夜より、一度も枕は交さねども、思ひ焦れて迎へし女房、夫に彼奴は嫌はれしと、浮名の立つも悔しければ、離別もなさずと統淸が、密にいつぞや物語、實しからぬ事なりと、聞流して置きつるが、空衣のみか妹まで、いやはや君の早業には、某閉口仕る。統淸へのわが面晴、まづ村荻を引縛り、辛き目見せんはや舟を、返せ〱」ト氣を揉あせれば、藏人良淸つゝと出で、「汝と我とは義理ある中、されば某父の不興を、受けたる時に言葉を添へ、詫をこそなすべけれ、却つて讒言したる故、問答せんも無益ぞと、暫く影を隱しゝが、再び都へ立戻り、光氏君には新參、されども親しき御意を受け、村荻を一昨日の、夜に紛れて盜出し、影を隱して置きつれば、はや汝等の儘にはならぬ。よしや添臥なさずとも、一旦夫とよびたる統淸、命は助け給はれと、しほらしき村荻が、願を卽ち御聞濟、おしつけ搦めて三郎は、人無き島へ流しもの、其旨歸つて言はせんため、汝が命も今日は助くる。三拜なして歸れば宜し、猶も過言を吐出さば、眞ふたつにしてくれんず」ト、股立取あげ水中へ、跳入らんその有樣、恐れわなゝなき川次郎、言句も出ねば舟子ども、顏見合せて氣味わる〱、櫓を早めてぞ漕去りける。良淸

あり、娘が愛にひかされて、生害はしたれども、彼に劔を奪はせし、その頼人を明して言はず、是にて知召されよと、富士を透して簾を逆に、引上げて我に見せつ。富士は日本一の名山、夫を逆にする時は、山名が所爲と悟り知り、汝が妹村荻に、山名三郎統淸が、戀慕したるをさひはひと、彼に仔細を言含め、嫁入せて置きたれども、小烏丸の在所、いづれと言へる事を知らず。年月累ねて去年の三月、宗全が居間近き、袋棚の其中に、隱しあるのをやうく知り、似つこらしげなる懷劍と、すり換へし事の由は、密書を以て村荻より、告越しながらその劔を、我許へ送るべき、手段に又も當惑し、心願の事ありとて、太秦へ七日籠の、村荻が願を立て、彼所にて受取らんと、我も忍びて行きたるが、七日籠は女のみ、男たる身は內陣へ、漫には入り難く、手段を變へて側近く、召仕ふ花鄉と、いへる女は村荻に、面影の似たる故に、眉を拂はせ遠目には、夫かと見まがふ姿に仕立て、是も彼所へ籠らせて、密計を謀し合させ、經文讀誦のその間、傍に人あるは、心散りて妨ぞと、村荻が腰元の、女どもを遠ざけて、其隙に花鄉と、村荻は入代り、駕籠にて密に寺を出で、三筋町の忍屋にて、己がしらせを待つ間のつま琴。此所も人目の多ければ、千景の方の父壽庵が、離座敷をかりそめに、花鄉なりと僞りて、逢ひたる女は村荻にて、其時劔は取返し、疾より元の寶藏へ、納置きしと宗全に、早く歸

ん、かひ無く命を惜まれなば、二品共に破却せん、ささする時には春若殿の、御代とならざるのみならず、足利殿の御家にさへ、禁廷よりの御咎、かゝるは必定、否か應か、御返答こそ聞かまほし。いかに〳〵」ト呼はつたり。光氏は莞爾と笑ひ、「汝如きの畜生を、斬るべき刀は此所になし、安堵致してその舟を、岸へ近付けわが言ふ事、夫にて聞召さるべし。宗全が奪ひし寶は、二品共に贋物なり、勝手次第に破却なせ。」斯うばかりでは愚鈍の族、疑ひ思はん初より、逐一に語るを聞け。頓五郎馬刀助を、石堂へ仕へさせ、間者となさん宗全が、手段を某能つく知り、稻舟姫へかの鏡を、贈らんといふわが文を、わざと彼等に見せたるは、是反間の計略とも、知らずに贋の鏡を奪はせ、「今まで祕め置く愚さ」ト宣ふ間に馬刀助も、かの船中に在りけるが、此方を見遣りて吃驚し、川次郎が袖を引き、「あれ〳〵其時討たれしと、申上げたる馬之丞、いと健かにて彼所に在り。さては我々光氏に、謀られたるか」ト無念の切齒。川次郎は嘲笑ひ、「たとへ鏡は贋にもせよ、今一品の小烏丸、是は先年凌晨とて、忍びの上手の女を賴み、室町の寶藏に、納めありしを盜ませしと、宗全殿の物語。其夜の番は他人ならず、某が父喜代之助、詳しき樣子は語られねど、忍び〳〵に劍の詮議、されたる事も知つて居る、夫を贋と宣ふは、いと心得ず」ト問ひければ、光氏はまたにつこと打笑み、「その凌晨といふ女は、惡人ながら義心

十七編下

かゝる處へ水上より、矢を射る如きの早舟一艘、此方を目がけて漕來り、一反ばかり川中へ、舟を停めさせ舳の方に、突立上る川次郎、腹巻りゝしく身を堅め、光氏を遥に見遣り、大音上げて言ひけるやう、「某たび〳〵麁忽の振舞、面目なさに中川の、館も知行も差上げて、御暇をも乞はずに出奔、今では山名宗全が股肱の臣と罷成る。されども昔の主君なれば、御敵對は仕らず。元よりあなたの御生付、華奢風流に見え給ふ、夫に引かへ武道にまで、達せられしも承知ゆゑ、此所らの船を残らず隱し、此舟とても浮々と、岸へ著けねば何ぼう憎く、思召しても諺の、川向の喧嘩とやら、又御手差もなり難ければ、まづ御心を落付けて、宗全が申す趣、夫にて聞召さるべし。初め宗全心を掛けし、藤の方を義正公へ、奉られしも御計ひ、夫のみならず其方と、密通ありて擧けたる、春若殿を義尙公の、養君とせられたれば、己が胤にて光氏こそ、天下を奪ふ罪人なれ、猶此上にも何樣の、巧をなさんも測り難く、御家の寶小烏丸、玉兎の鏡の二品は、宗全密に隱し置く、先非を悔いて光氏君、只今切腹し給はゞ、寶は御所へ奉ら

氏點き給ひ、「船なくば陸より行かん。心配りに及ぶべらず。さてかねぐ〜も言ふ如く、心がかりは紫なり。是より便は御身のみ、しげ〜嵯峨を問慰め、心をつけて」ト言懸けて、差俯きて居給ふ折しも、陣鐘太鼓鬨の聲、あはやと見返る都の方、馬煙天に立昇るは、只事ならずと驚く人々。打しほたれし光氏が、頭をあげてにつこと打笑み、「山名宗全間者を以て、某都を去ると知り、折こそ宜けれと豫ての反逆、擊つて出でたるものなるべし。それぐ〜備なし置いたれば、必ず騷ぐ事なかれ」ト、言葉も終らぬ其處へ、馳戻つたる馬之丞、御前に大息吐き、「勝元此頃病氣につき、七條の下館に、引籠りてありける處へ、思ひがけ無き山名親子、手勢をもつて追取卷き、唯一揉にて攻懸る。内にも用意やしたりけん、物見門より防矢を、雨や霰と射懸けられ、寄手はかひなくひた崩れ。されども多勢の事なれば、又盛返して合戰の、眞最中と唯今家來が、馬を飛して罷越し、物語りて候」ト、申上ぐれば光氏は、床几に倚りて猶動ぜず。「勝元が所勞にて、彼所に居ると言ひしも皆、敵を欺る爲なれば、頓て晉川勝利を得ん。夫よりはまづ言ふべき大事、かの桂樹を近々に、呼迎へなば睦ましう、又悋氣して飽かるゝなと、己が言ふたと傳へよ」ト、打戲れて在しけり。

道すがらも紫が、俤のつと附添ひて、胸も塞り光氏は、忍び涙にくれ竹の、伏見の里は人目もあらんと、東寺を左に四塚より、さえだの橋を打渡り、左手に遠く秋の山、近く戀塚鳥羽畷、奈良大路とか行き〳〵て、淀川もはや近付きければ、暫く駕籠を立てさせて、向ふを屹度見給ふに、川に臨みてあやしげなる、茶店様の物をしつらひ、遊佐の定紋染めたる幕を、打廻らして置きたるは、彼所に我を待つならんと、頓て其所へ乗物を、舁入れさせ給ふにぞ、河原之進國助は、斯くと見るより側近く、立寄りて手をつかへ、「仰の通り夜前より、此所に來りしが、俄の事ゆゑ御腰を、懸けらるべき假屋の營み、はか〴〵しくも出來かね、いかになさんと馬之丞と、申談ずる其時に、此邊に住む者の由、一人の老女是を聞き、さあらば船を造るため、掛けたる小屋の候が、まだ船木をも取入れねば、夫を貸して參らせんと、即ち是へ同道せり。汚穢しくとも暫しは是へ」ト申上ぐれば乗物の、戸を開かせて立出で給ひ、「何かと心配過分の至。して馬之丞はいづれに居る」ト仰に國助膝を進め、「茲に怪しき事のあり、定めて是より御船にて、難波へ御越と存ぜしが、もと御忍の事なれば、室町御所の御船を、取出させて廻しなば、却つて御不興ならんかと、町人どもの持船を、借受けんと致せし處、御覽の如く今日に限り、只一艘の小舟も無し。馬之丞は彼方此方、その才覺に走り廻り、未だ歸り候はず」ト聞いて光

暮兼る日に引換へて、短夜早く更渡れば、忍び歩きに事かはり、甚く窶しゝ旅裝、見すぼらしげに立出でて、後を顧み給へども、言の葉小辧そのほかの、女どもも涙に暮れ、はか〴〵しくは物だに言はず。夜著引被いで起上らぬ、紫が閨の中、立戻つて差覗き、「我も出づれば月も出でたり、など見送には出で給はぬ。此事を言洩しゝ、斯く聞えて置くべきものをと、後にて悔る事あらん。一日二日たまさかに、隔つる折だに物寂しと、言ひつるものを」ト屏風を引除け、縁の端に我も居て、「此所へ〳〵」ト宣へば、紫は泣沈み、暫しが程は打臥して、身動もせず居たりしが、やう〳〵膝行出で給ふ。髪も亂れ白粉は、涙に洗ひて繕はぬ、姿も月の朧氣に、見えて常より媚かし。後には父の國助が、殘りてはあらんなれど、我もし彼所に病を受け、空しくならば彼が身は、いかにならんと心には、思へど力を落させじと、

　藤浪や春の別を知らで咲く

「その花房の延やかに、心を用ひて待ち給へ」ト、思ひたどらず淺はかに、言懸け給へば紫が、

　命にもかへて止めたし行く春を

實に〳〵さこそ思はめと、見捨て難くて躊躇ひしが、夜も明果てなば人の目に、懸るも侘しと思ひ切り、館を急ぎ出で給ひぬ。

なき影やまだ目に殘る朧月

と宣ふ後に「我君」ト、聲打潛めて呼ぶ者あり。振返り見給へば、かの新參の良淸なり。「仁木藏人待兼し、樣子はいかに」ト尋ねられ、一人の女を誘ひ出で、「仰に隨ひ山名の館へ、忍入つて妹の村荻、盜出して候」ト、御前に突遣られ、村荻は只羞らひて、顏をもあげず言葉なし。光氏彼には眼も懸けず、良淸に打向ひ、「喜代之助に勘當の、忰ありとむかしより、名は聞及びて居たれども、汝が面體知らざる故、今宵の役を言付けしは、この村荻を證人にて、實否を糺さん爲にてあり。今まで敵の間者にて、正則までも欺きし、曲者ならんも知り難しと、疑ひしはわが誤なり。さて村荻は」ト良淸の、耳に口寄せ打さゝやき、「忍ばせ置きて立歸れ、心得たるか」ト言捨てて、さて夫よりも二葉の上、かの黃昏が墓までも、暇乞ぞと打廻り、明果つる頃嵯峨の住居へ、立戾らせ給ひけり。

されば明日の曉に、いよ〳〵都を離れんと、惟吉はじめ側近く、使ひ馴れたる侍ども、新參ながら良淸を、加へて供は七八人、いと微にて旅立の、事ども密に觸流し、人には其日を確に知らさず、たゞ河原之進馬之丞、兩人のみ淀川の、小橋の邊に茶屋をしつらひ、我より前に彼所へ行き、相待ちて居るべしと、書狀を以て告遣りつ。其日は取分け紫と、物語のどかに聞え、

やれ」ト顔背け、月待出でて出で給ふ。御供にはたゞ五六人、睦ましき限りして、御馬にてぞおはしける。鳥邊野の蓮臺寺は、東山より遠くもあらねば、程無く彼所へ詣で給ふに、二十年ばかりの昔ながら、かの撫子の分れ道と、吟じ給ひし御有様、たゞ眼の前の樣に思はれ、萬の事を泣く〳〵に、聞え給へど松吹く風の、聲より外に答も無し。御墓は道の草、年々に繁くなりて、分入る程にいと露けし。折から月も雲隱れ、森の木立も木深さに、歸り出でん道も無き、心地せられて心細く、猶伏拜み居たりしが、在りしにかはらぬ花桐の、俤さやかに見え給へる、そゞろ寒き程なりけり。わづか五歳の其時に、別れしかども朝夕に、戀しと思ふ母の顔、光氏いかで見忘れべき、なう懷しと取縋れど、たゞ幻の如くにて、目に遮れども手に觸らず。花桐はつれ〴〵と、光氏の顔打まもり、「君まづ須磨へおはして後、程を圖りて宗入に、奇瑞を妾が見すべきなり、彼驚いて御身を迎へん。其時明石へ移らせ給はゞ、唯何事も御心の、儘になりなんなほ末々、目出度榮えゆき給へば、外には聞えん事もなし。妾が爲とて年忌月忌、世に有難き御弔、その功德にて天上に、果を受けたれば御心に、かけ給ふなと御所樣へも、申上げて給はれ」ト、言ふ聲ばかり雲霞、姿は消えて見えずなりぬ。母の慈愛の忝さに、光氏いよいよ涙に掻暮れ、思はず空を打眺め、

御不便加へて給はれば、人は何とも言はゞ言へ、と思ひ諦め世の噂、耳に懸けねば此頃は、辛苦も薄く身も安し。たゞ悲しきは御身の上、紫はじめ人々の、さぞ便なく思はん」ト、歎き給ふも道理と、思へどわざと打微笑み、「夫も山名を謀る爲、頓て目出たう立戻り、御目見致さん」ト、萬の事を取集め、物語りなば哀れも優り、互に名残は盡きせじと、言葉短く打答へ、暇を乞うて立ち給へば、後の方に杉生が、いつの間にやら蹲居たり。光氏は振返り、「春若丸ははや寢たるか、夫故此所へ來りしなるべし。」身は山賤となりくだり、須磨の浦邊にさまよへば、是今生の御別も、圖り難くて其方が意見、破りて今宵忍びしが、もう歸るから其樣に、顔を見詰る事は無い。今より母の御墓へ、詣るが何ぞ言傳が、あるなら言へ」ト宣へば、はつとは言へど暫くは、言葉も無くて猶豫ひつ、やう〳〵に顔をあげ、「見しはなく、あるは悲しき世の果を、御存じ無いもなか〳〵に、御心安う御座りませう。此頃中も春寒い、其折々に御廊下を、通ひながらに晝顔が、かういふ唐戸を紐にて括り、御下著ばかりで見すぼらしく、立つてお出で遊ばしたを、思ひ出して人知れず、今に涙を落しますと、左樣仰せ上げられて。其時あなたはまだお腹に。夫がかくまで嬋妍さ。今まで此世に在しなば、さぞ御寵愛遊ばして」ト後は涙に口籠れば、光氏も目をしばたゝき、「よし〳〵母に申すべし。是から久しく逢はれまい、無事で居

まして彼所へ送りけり。

明日明後日となりける暮には、花桐の墓拜まんとて、光氏は嵯峨を立出で、鳥邊野に詣で給ふ。曉かけて月出づる、頃なりければ宵闇を、さいはひにまづ東山へ忍びて立寄り、司を密に呼出し、しか〴〵の由言入れけるに、藤の方も是より猶、打絶えんを歎かはしく、思し給ひし時なれば、義正には深く包み、それ此方へとて常に住む、奥の一間に招き入れぬ。光氏嬉しさ限りなく、邊近き簾屛風の、前にしづ〳〵進寄り、「まづ餘の事は差措きつ、心柄なる罪を犯し、都を離れんその爲に、十二月すゑつかた、御產の紐を解き給ひし、春若丸を如月まで、包み置かせ給はれと、わりなき願を御聞濟み。果して此度某が、罪をさま〴〵富徽の前、言上げ給ひし其中に、是第一の不審の由。豫て設けし事なれば、わがさいはひは春若の、不幸となりて御側を、遠ざけらるゝ事もやと、夫のみ心に懸りしが、思ひもかけぬ兄義尙、養ひ取りていつぞやより、此所に間近く置かるゝは、道の誠を氏神の、守り給へる故にこそ。是よります〳〵力を盡し、仇を平げ春若丸の、世は萬歲と謠はせん。今まで仇し御名を立てし、御恩報じと儞はし、御心休め給はれ」ト、恐入つて言ひければ、藤の方は懷しげに、打見遣りて聲を濳め、「心より著し濡衣の、このまゝ朽ちも果てなんと、豫ての覺悟に引替へて、むかしに變らず義正君、

からず思ふべし。勝元は智勇兼備、是に上越す者は無けれど、宗全といふ敵を持てり。されば萬事は、河原之進國助に言付け置きぬ。たとへ隔てて住めばとて、柴には實の父、心遣はよもあるまじ。己と思ひて何事も、彼を頼まば此末に、事の足らざる事は無し。館の内は更にも言はず、外の藏町納殿、わが重寶を籠めたるまで、總て其方をはかぐしき、者と見極め置いたる間、預けて我は打立つなり。いよく心を用ひて仕へ、たとへ都に合戰の、起りたりとも驚かず、堅固に守つて居り候へ、忍びくに防禦の軍勢、手配なして置きつれば、此所は素より糺へも、敵一人も入れはせじ」ト、事細やかに言付置き、稻舟姫を初とし、花郷なんどゆかりの者へ、置土產とかなづけたる、品々を贈り給ひ、又桂樹の許へは文して、

御身まづ病と言立て、青葉の館へ一先歸り、琵琶之助にも其事を、聞え知らせて置きたれば、石堂へ輿入し、さて其後に富徽の前に、斯くと申出づべきなり。何程怒らせ給ふとも、婚姻濟みて人妻と、定まる上はせん方無く、琵琶之助を叱り懲し、給ふのみにて事濟まん。憂さも辛さも類なく、今まで思ひし事どもを、馬之丞に物語り、是よりは氣を安く、睦しやかに暮せよ。

と書認め給ひしが、富徽の前の腰元ども、もし目やつけんと道の程も、危ければ女の文の、さ

居給ふに、今までは何として、此所へは連れて來ざりし」ト、紫にのみ縺れ寄り、餘念もなげに遊ぶ中、正尙は此方にて、ゆる〳〵と光氏に、對面なして哀れなる、御物語聞え給ひ、春若丸と打連立ち、暮るゝ程に歸り給ひぬ。

光氏は須磨への下り、いよ〳〵近うなる儘に、嵯峨の館を守るべき、その人々を定め置き、倶に隨ひ行かん者、誰彼と撰出し、かの山里の住家にて、取使ふべき調度の類、蒔繪箔だみ金銀の、金具打つたる類は省き、粧ひも無き物のみ集め、白氏文集歌物語、古き書ども入れたる箱、さて琴ひとつぞ持たせ給ふ。數多の手道具華やかなる、飾のあるは身に添へず、只あやしの山賤めきて、浮世を遁るゝ設にとりなし、鎧腹卷太刀薙刀、總ての武具は豫てより、密に船にて下しゝなるべし。さて今まで召仕ひし、上下の男女は、殘らず西の亭に預け、人無き時に言の葉を、傍近く招き寄せ、「わが知行より貢の品々、取納めて此所の賄、又は糺の後見して、是より己に代らん者、誰彼と思ひし處、琵琶之助は實明ながら、たゞ事無きを圖るのみ、萬を內ばに取計ひ、はか〴〵しき性にあらず、其上時折疎忽あり。かの御心のいち早き、富徽の前の緣者といひ、旁以て跡の大事を、打賴みては置き難し。赤松の正則は、二心無き者なるが、惜いかな年老いたり。夫のみならず二葉を先立て、その代たる紫の、力となるも何とやらん、快

むづきて引退き、「初ての御目見に、御心砕きの種となる、おちまなき事申出し、賺かし御氣の結ぼれん、まづあなたへ」ト紫の、腰元女に立交り、共に傅き廣座敷へ、立出でて光氏の、御前の趣述べければ、四郎正尙打聞きて、「遠慮深き兄上の、御言葉にはありながら、背くも道にあらざれば、春若殿にはまづ是に、我は彼方へ推參なし、直々御目に懸らん」ト、此所へも度々來りしかば、案內も能く知りつ、人をも連れず光氏が、居間の方へぞ立行きける。杉生はかの戀の短冊、若君に見せ參らせ、

いつか見ん我も散行く花の京

と打吟ずれば春若は、幼心地に聞分けしか、おとなしやかに在します。杉生はなほ差寄り、「この御返は如何樣に、申しませう」ト問ひければ、春若は頑是無く、「暫し見ねさへ戀しきものを、ましてや遠く離れては、逢ひたからうと言へかし」ト、すら／＼と宣へば、あら物はかなき御返やと、哀れに見上げて杉生は、紫に打向ひ、「御聞きの如くに御返は、申上ぐべき詞もなし、物の辨別なき御身にも、心細げに思召す、御氣色もいと哀れげに、見えさせ給ふと恐れながら、仰上げられ給はれ」ト、吐息を襟の內に吐く。心を察して紫が、まづ御菓物御手遊、それ／＼と差圖して、次第に座敷へ列べさせ、機嫌を取りつ待遇せば、幼き程は馴れ安く、「好き姉上の

参らぬは、この愼みに因りてなり。萬の事は推量り、申させ給へ」ト散過ぎし、櫻の枝につけたる短册、小辨に持たせ來りしを、渡し給へば杉生は、受取りながらつく〴〵見るに、實に血筋とて爭はれぬ、藤の若枝の小紫、その婀娜さ愛らしさ、光氏君の寵しみ、給ふも道理と思ひつゝ、猶も正しくかしこまり、「御懇の御意を受け、申上ぐべき言葉もなし。御上の事を藤の方、いと慕はしく思召し、光氏君へも常々に、仰言もありしかど、赤松へ憚りの、世の聞えのと御用意深く、おそれながら叔母姪の、御續きにはありながら、御對面は今になし、押晴れての御出より、人に知らさず私が、御迎に上りませう、東山へ御忍にて、必ず御渡り遊ばしませ。さて此度は夢の樣に、君は都を御ひらき、一度見上し人さへも、惜み聞ゆるあなたの御德、ましてやたゞ今仰の通り、御誕生の其時に、父君へ初ての、御對顔にも私が、抱き申した御子樣なれば、その昔の事折々の、御有樣を思ひつゞけ、御名殘惜しさ悲しさは、なか〳〵言葉に盡されず。光氏君は御見知も、あるまじき下女はしためまで、見奉らで程經んと、思ひ歎くもいと多く、この御光に世を過す、者は猶更宮徽樣の、御身を誹りなんどして、忍び〳〵に泣合へり。さぞ御上にも」ト顔を揭げ、見れば哀れや紫は、溢るゝばかりに目に涙、受持ちながらに庭の面、打眺めつゝさもあらぬ、風情にもてなし居たりしかば、由なき事を言出でしと、

たる、かの廣座敷の次の間まで、しづ〳〵出でて邊を顧み、「若君の御乳母、杉生も來りしとか、是へ招いて逢はせて」ト、仰を受けて言の葉が、此由を通じければ、杉生急ぎ此方へ立出で、それと見るより座を下り、行儀正しく敬ふを、打見やりてにこやかに、「妾事は河原之進國助が娘の紫、思ひがけなきさいはひにて、光氏が宿の妻と、定まる上は東山、室町の兩御所へ、御目見にも出づべき筈、世の騷がしきに取紛れ、且押晴れていふ時は、正則夫婦の歎を增し、くづ折れゆかんと我君の、思ひはからせ給ふを憚り、引籠りて居たりし故、其方に逢ふは初てながら、光氏君の常々から、あの杉生といふ女子は、母花桐の侍女にて、己は御腹に居る中より、介抱になつた者と、御物語は度々ゆゑ、懷しう思うて居た。今日は能うこそまづ此方へ。座を隔てては話も爲にくい、妾に遠慮はつゆ入らぬ」ト、言ひつゝ立つて杉生が、手を執つて連來り、「光氏君は若君の、御出の趣聞かせられ正尙は此館へ、來るも今が初てならず、わが此部屋へ招き寄せ、面會せんもいと安し、幼少なれども春若は、兄義尙の養子にされ、行末は世を取らせんの、御心なりとは豫て聞く、然らば某先非を悔い、我とわが手に流され人、罪を受けたる身を持ちて、弟にもせよ甥にもせよ、ゆく〳〵は天が下を、領るべき者の目通へは、憚るべき事なりと、仰せられて妾を代。身は山賤の樣になり、近きに都を離れ侍る、東山へも

十七編上

なほ紫は光氏の、迎取らんと言ひしを疑ひ、返も無くてつと立退き、柱隱れに居隱れて、涙紛らし給へる樣、庭の櫻も花ならず、なほたぐひ無く思はれて、振捨てんもいとほしけれど、世の爲には替へ難しと、吐息と共に袖を控へ、「罪を犯して主親に、不興を受くれば明かなる、月日の影をだにも見ず、下樣の諺にも、日影者といふならずや。されば此身を安らかに、振舞ふ事も恐れあり。我に過失無けれども、富徽の前の憎みを受け、其上父の機嫌に違ひ、身を退くは罪人同然。夫に聞えを憚らず、思ふ人を誘引はゞ、是よりまさる憂き目を見て、恥に恥をや重ぬべき、なほ其事はゆる〳〵聞えん。宵より睡らず居給はゞ、御身も嘸かし疲れつらん、まづ打寢み給へかし」ト、腰元どもに言付けて、紫を閨の内へ、やう〳〵に誘はせ、日の闌るまで寢させけり。かゝる折から春若丸、正尙君の御出なりと、追々に知らすれば、まづ廣座敷へ入れ申せと、光氏は差圖なし、紫を呼覺し、言ふべき事を斯う〳〵と、教へ給へば心得て、寢卷の褻衣脱更へる、繻珍唐織白綾の、上に襲ねて邊さへ、輝くばかりの裲襠姿、春若丸を通し


朝霧
明石の上に比せ


光氏の年立源氏のごくなれバ
須广の巻ハ廿六歳なれどこの
さうしハ廿二歳の葵の巻と
廿一歳よひきわげたるこの
巻ゆゑ又一年書つゞめたれバ
今年廿四歳なり

偐紫田舍源氏第十七編序

海鼠と烏賊は形異やうなるものから、畫に寫したるは風雅なり。章魚と河豚の畫はをかしみあるうちに、西施乳はすこし惡き氣のそひて見ゆるは、毒ありといふ心からなるべし。丹魚はたじろの類は、佳肴ならざれども、畫くときは美麗しく、鮟鱇鰻鱺の美味なるも、形を畫しては其品くだれり。是その味ひは畫き難き故なり。されば須磨明石は、源氏最第一の卷ながら、是を悉く畫圖に寫さば、海邊の家に唯獨、淋し氣におはす處と、都の女は彼所よりの、文を見て歎くところの、最うるさきのみにもあらず、文章さへもその味ひを、聞えよくは寫し難く、章魚と河豚とのをかしみに、川次郎と岩根の事を、この卷中へ交肴、はたじろ丹魚の表紙をかけ、かい敷にする隈篠の、二十葉を例の如く、一折をなすになん。

天保六年乙未正月四日　　柳亭種彦記

富徽の前は中悪しき、藤の方の腹なる故、再三止め給ひしかど、義倚更に聞入れず、もしさる事よりして館の騒ぎを、引出さんかと去年よりして、東山へ別殿を、又しつらはせて春若丸を、是へ住ませ給ひければ、藤の方は更にも言はず、義正も大いに喜び、かの杉生を乳母として、付置かせ給ひしが、或時義正言ひけるは、「光氏近きに都を開き、播磨へ下る由なれば、四郎正倚春若丸、それかれ子供をわが差圖と、知らさず嵯峨の彼が館へ、暇乞に遣すべし」ト、杉生に宣ひければ、かしこまりて夫々の、仕度を頓て整へけり。めでたし〳〵。

り、「昨夜はかの赤松の、暇乞に行きたるが、例の如く過行きし、二葉の事を繰返し、打歎かれて戻るにも、戻り難くて明したり。別も近くなりたるに、一夜にもあれ仇めきし、事ゆゑ餘所に泊りしと、必ず怨み給ふな」ト、宣ふ顔を打まもり、「妾を此所へ振捨てて、須磨とやらんへ御下り、夫が何より怨めしい。父より前に逢馴れて、便とするは君ばかり。前將軍の御愛子を、婿に取りしと世の人に、ひけらす爲と聞えんかと、父國助は遠慮して、たま〱ならでは此方へ來らず。いつそ妾が御館に、居るといふ事知れぬなら、かくまで憂き目は見まじきに、今までは世に華やかに、幸ありし此身の上、繼母上の聞付けて、妬しと思し給ひし由。是よりは又打返し、母にも祖母にも別れし上、夫にまでも捨てられる、果報拙き娘ぞと、譏り給はん悲しや」ト、忍び涙に暮れたるは、實にぞ哀れの有樣なる。光氏ほつと息を吐き、「なほ播磨より戻り難く、年月を重ねなば、かの山里の憂き住居、巖の中にも迎取らん。人の思はく室町の、聞えもあれば只今は、倶に連れても下り難し。別れて居るも暫しのうち、思ひくづをれ給ひそ」ト、いとまめ〱しく慰めけり。

第十七編はこゝに次ぎて見給ふべし。

○義尙公は内君を、既にさる年迎へ給ひ、側室も數多ありながら、未だ男子の無かりしかば、

ればその歎、たとへて言はん方もなく、歸らせ給ひし其後は、皆打擧り泣合へり。
光氏は夫よりも、直に嵯峨へ歸りけるが、わが住む方の人々も、まどろまざりける氣色にて、仕へ馴れたる主君に別れ、行末いかにならんとて、世を淺ましと思へるにや、吐息つくあり泣くもあり、ところ〴〵に群居たり。御供に下るべき、近習の武士は夫々に、旅の仕度を整へんと、己が住居へ戻りしが、常よりも人目も無く、ときめき給へる御蔭を頼み、我身の出世を計りたる、國司郡司、それかれ多くありしかど、いかなる重き咎に依り、都を立退き給ふかと、怖れて此頃寄付かず、馬乘物の所せく、今まで集ひし門前の、いと寂しきを見るにつけ、世は憂きものと思ひ知りぬ。此住居にも一人二人、心をとむる程にはあらねど、側近く召使ひし、女もありしが我命、もしながらへて又此世に、歸るを待たんと思ひなば、西の亭へ移住み、紫に仕へよと、言付置きて豫てより、此所には守る人をさへ、置き給はざる定なれば、はや掃清むる者も無く、臺子の間を差覗けば、側は塵ばむ心地せられ、疊をもところ〴〵、引返して置きたりけり。わが見る中だに斯くの如し、年月たちなばいかばかり、荒れ行くならんと思ひつゝ、西の亭へ行き給へば、雨戸もさゝせず紫は、眺め明しゝ風情にて、若き女童ども、彼方此方に臥したるが、今ぞやう〳〵起出で騒ぐ、寢卷姿もをかしげなり。光氏は紫の、邊近く座に直

まに申上げ、御側仕を願はんと、存ずる中に父の上京、顔合せては勘氣の詫の、妨ならんと思ひし故、御暇を申し乞ひ、緣を求めて當館に、潜み匿れて候」ト、事細やかに述べければ、機嫌能げに打笑みつゝ、「さいはひなるかな其方には、賴むべき用も有り。聞きもしつらん川次郎は野の宮より出奔し、山名へ身を寄せありと聞く。よしさなくとも彼奴めは、奸佞邪智のしれものにて、殊には筋目も知れざる捨子、仁木の家を續くべき者、汝ならで他になし。されば言葉に出さずとも、心の中には喜代之助も、其方の行方を尋ねて居ん。伊勢へは我より言遣るべし、直に供せよ良清」ト、立出で給ふに有明の、月いとをかしう花の木の、盛は過ぎてちらほらと、殘る梢も面白き、庭の隈々霧渡り、そこはかとなく霞みあひ、秋の哀に立まされり。御見送にと花鄕も、妻戸押開け立出づるを、光氏は打まもり、前には頓てと言ひつれど、又逢ふ事はいと難しと、心に思へば顏にも顯れ、「無事で居やれ」ト只一言。物も得言はず花鄕は、取縋りつゝわつと泣く。恐多しと隔つる良清。小毬はじめ女ども、はや行き給ふと他所ながら、御名殘にと端近く、障子の隙より差覗けば、霧打はれて入方の、月いと明きにきらめき合ふ、黃金作のさしぶりは、りゝしけれども淸らなる、姿に引かれて媚かしく、物思ひなる有樣は、虎狼も泣きぬべし。ましてや是は光氏が、まだ前髪の頃よりも、見初め逢馴れ睦しき、人々な

柄も卑しからねば、加茂の神事の其時に、近習の武士の足らざるゆゑ、汝を假に召加へ、手廻にて使ひしが、いよ〳〵怜しく見えたる間、とりあげて得させんと、思ひし中に暇を乞ひ、何地へか行きたるが、此館には何故」ト、問はせ給へば猶ひれふし、言葉は無くて懐中より、一通の文取出し、御手に渡せば光氏は、訝しながら讀了り、「此者は先非を悔い、心を改め候間、此度須磨の御供に、召加へ給はれと、汝に代り正則が、心を籠めたる願書、まづ其方の素性は」ト、問はれて少し面をあげ、「遊所通ひの身持悪しく、父の勘當受けたるは、まだ部屋住の中なれば、御見知はよもあらじ、某は喜代之助が、實子にて候」ト、聞いて光氏小膝を打ち、「仁木藏人良清は、汝にてありけるか。力量は人に勝れし、武藝に達し書の道にも、暗からざりしがたゞ色に、溺れし一事の過失にて、父の不興を請けたる由は、豫て噂に聞いたる故、喜代之助に夫となく、男子は幾人もてりやと、まづ試みに問ひつれども、川次郎のみなりと、すげなく答へて藏人とも、良清とも遂に一度、言出したる事も無し。一旦久離を切つたりと、義心を立抜く彼が性質、せん方無さに捨置きし」ト仰に有難涙に暮れ、「宣ふ如く言出せし、事は變ぜぬ父の氣質、夫故久しく西國に、身を隱して候ひしが、父は伊豫へ下りし由を、聞いて再び都へ出で、兵藤太と作名して、御館にやう〳〵と、走使の御奉公、折を見合せ身の上を、あからさ

陰に生出で給ひたる、稲舟様のお歎を、想ひやられていとほし」ト、打泣く様の哀れさに、光氏も聲曇り、「さう思ふも道理ながら、我に代りて糺の館を、みつぎなすべき其人も、心がまへをなし置きたり。あれ見よ朧に雲間より、月は出づれど影暗く、晝見し庭とも思はれず、池は廣く山は木深く、心細氣の有様を、見るにつけてもわが移る、須磨の浦邊はいかばかり、寂しき所ならんかと、想ひやられて住馴れし、都を後に旅立たんは、心苦しさりながら、身の爲ばかりか世の爲に、なすとは後に顯れん。頓て目出たう對面せん」ト言ひ慰めて別れんと、し給ふ折から一人の侍、恐る〳〵御前に出で、「正則夫婦も御送に、罷出で候はんが、御門出もはや近きに、不吉の涙をこぼさんかと、差控へて御次に在り。あまり夜深き御歸り、若君様はたわいもなく、打寢まりて在すれば、せめては御目のさむるまで」ト、聞え上ぐれば立やすらひ、「さる年の秋鳥邊野に、燃えし烟を忘れかね、もしもや夫に擬ふかと、蜑の汐燒く浦見がてら、此度彼所へ下るなり。言ひたき事も數々なれど、心に餘りて言葉に盡きず、されば此儘歸りしと、小毬に申すべし。又たわい無く眠りたる、顔を熟ひ見るならば、浮世を離れがたからん、心強くも振捨てて、出行きたりと目覺めて後、言聞かせよ」ト言ひながら、かの侍をつく〴〵と、光氏は打まもり、「汝は嵯峨の館にありし、走使の名はたしか、兵藤太とか言ひし者、人

て、御迎に差上げつ。妻小毬は例の如く、歎に暮れて引籠り、此所へまゐらねば、御心を置かせられず、ありし二葉と思召し、一獻きこし召されて」ト、瓶子土器數々の、肴を捧げたりければ、光氏扇を顔に當て、「忍びて思ひし中なるを、いかにしてか知りたりけん、面目なし」ト言ひながら、實に親の子を思ふ、心を感じて打くつろぎ、「さあらば言葉に任せん」ト、當吉中垣そのほかの、女を多く前に集め、物語などせさせ給ひ、盃しば／＼廻る中に、いよ／＼夜の更けたりければ、正則はじめ人々は、皆退きてしづまりぬ。そも／＼此花鄕は、此所にてむかし光氏の、枕刀を盜取り、死なんとしたる其時に、切なる心を聞きてより、人に知らさず光氏も、あはれと思ひしものなれば、取分けて語ひ給ふを、書續けんもいとうるさし。程なく明けぬと告渡る、鐘の聲さへ打霞み、雞もしば／＼鳴きけるにぞ、あら短夜の程やとて、光氏亂れし衣紋を正し、「播磨へ下るもはや近し、夫より前に一度は、行きて逢はんと思ひしが、正則の計ひにて、今宵對面なしたれば、心殘りの事も無し。千景の方へは其方より、よしなに傳へ候へ」ト、座を立上り給ひければ、花鄕は飜れ落つる、涙見せじとゐざり出で、月を眺めて居たりしが、振返つて袂を控へ、「別は常さへ悲しきに、又の逢瀬も圖られぬ、國を隔てて山里へ、何故移らせ給ふのか。數にもあらぬ妾が身は、ともかうもならばなれ、たゞ君をのみ力草、日

いと寂しげに、打荒れたる心地して、哀れなりしが夫とは變り、銀燭を點しつれ、誰にかあらん二葉の上の、ありしに變らず粧ひし、一女を多くの腰元ども、邊に居廻り傅きたり。遠目にしかと見極めねば、光氏は眉を顰め、「我もさる年言の葉と、いへる女を二葉に似せさせ、水原を一度欺きしが、その類にやあらんずらん」ト言ひつゝ立寄りかの女が、打羞らひて翳したる、袖を引除け見給へば、去年の春花郷と、名を呼換へし綾浒なり。是はと驚き正則を、かへり見給へば目をしばたゝき、「彼中空とて我館に、勤めて居たる其時に、高直の側室にもと、言ひしを辭みて人知れず、君に心を懸けたるが、腹立たしさに追遣りつ、後にて人の語るを聞けば、千景の方の妹にて、夫より糺へ差置かれ、御不便を懸け給ふ由。二葉の上の世を早く、過させ給ひし其後は、かの中空がむかしの如く、せめて館に在るならば、夫に依りてとまり給ふ、事も稀にはあらんかと、むかし憎みし其者を、今は戀しく思へども、稻舟姫の御側に、置かるゝ中は呼戻さん、便も更に無かりしが、去年の春より星月の、住居へ折々行通ひ、彼所に泊る事もありと、聞いて嬉しく千景の方に、その由を申し乞ひ、今宵一夜さ借受けて、さてこそ御入を願ひしなり。今はや悴高直は、彼が名だにも打忘れ、心殘りはあるまじきが、暇を出しゝ女を呼寄せ、二葉の上と持囃すは、父正則は老に耄れ、物に狂ふと思はんかと、御留守の番を託け

き心も失果てて、涙も忍びがたげなり。あるじ左衛門正則も、御前に罷出で、「近きに都を振捨てて、播磨へ下らせ給ふ由、たとへば天地をさかしまに、なしても思ひ懸けざる珍事、かかる歎を聞くにつけ、命長きは恥多しと、思ひ知りて候なり。あゝ世は末にも侍るかな」ト、打しほたるれば光氏は、わざと片頬に笑を含み、「夫も是も前世の、報と思へば人をも怨まじ、世に憎まるゝも我身の科、心に濁は無きなんどと、知らず顔に打過ぎて、是より多き恥を見ぬ、その先にと思立ち、世を遁れんに定めたり。言ふまでにはあらざれど、幼き者の養育を、よしなに頼入るなり」ト、事細やかに宣へば、正則猶も膝を進め、「二葉の上の御事のみ、今に悲しび候へども、たゞ此度の事に付き、若しながらへて居給はゞ、いかに歎かん夫よりも、命短く侍りし故、かゝる果敢なき夢を見ず、過往きたるもましならんと、思ひ慰む時もあり。幼き君の我々が、老いたる中に止り給ひ、月日の多く隔たらば、君を見忘れ馴睦み、給ふまじやと何よりも、夫が悲しう候」など、互に積る物語、果し無ければ光氏は、思ひ切りて暇を告げ、立上らんとし給ふを、正則は猶袂を控へ、「夜も更けぬれば逗り給ひ、二葉の上とも御別を、惜ませられて然るべし」ト、思ひこんで願ひければ、佛間へ誘ひ行くにかと、言ふに任せてそのむかし、二葉の上の住馴れし、一間へ入りて見給ふに、近頃は

來る春も引籠り、糺の館へ行通ふ、事も稀々なりければ、光氏をのみ打頼み、心細げに哀れなる、稲舟姫は取分けて、打歎くのも哀れにて、花郷はじめ人知れぬ、心を砕くも多かりけり。藤の方も富徽の前の、もしや聞付け給ひなば、我身の爲も宜からじと、思へど心元なさに、忍びて文は度々あり。既に三月二十日あまり、都を離れ給はんの、催し頻りなりける時、太郎高直、光氏の御前に手をつかへ、「父正則申し候、去年より久しく籠らせ給ひ、御徒然に侍らん、罷出でてむかし今の、御物語も聞えたけれど、身の病の重きを言立て、室町へ出仕もせず、屈める腰を押伸べて、私の用事には、出歩くなど言はれんかと、差扣へて候なり。御館の守には、この高直を差置かれ、今日は空も打晴れたれば、密に御入を願ひたしと、申付けて候」ト、聞え上ぐれば點き給ひ、「我もさこそ思ひつれ」ト、其夜は隱れて赤松の、館へ渡り給ひけり。天鵞絨包の乗物の、古めきたるに女の樣にて、密に彼所へ入りたまへば、夕霧丸の乳母ども、暇も乞はずむかしより、仕へし者は取分けて、光氏君の御出を、珍らしがりて集ひ寄り、まづ御顔を見るにつけ、浮世の哀は心もとめぬ、若き人さへ世の常なきを、思ひ知られて涙に暮れ、夕霧丸は美しう、ざれ走りて光氏を、見るより頓て取縋れば、「久しく我は逢はざりしが、能くこそ忘れざりしよ」ト、膝に載せつ打ちまもり、是より猶も遠ざかる、事を思へば武士の、猛

遠き國の果へ、流されんも圖られず、さある時には年頃日頃、心を盡しゝ詮もなし、夫より先に我とわが、身を退かんに如くべからず。播磨の國なるかの須磨は、昔こそは人の住家も、立續きてありけれど、今は蜑の家だにも、稀々になりゆきて、里を離れ心凄ぎ、所なる由傳聞き、設けし事には在りながら、罪を犯しゝ身をもちて、人の繁くて賑はしき、住居は聞えも惡しかるべし、さればとて此都を、遠ざからんも覺束なし、明石の宗入はじめとして、西に聞えし國司、山名へ一味の者どもを、喰止めんには便宜の地、京より道も遠からず、近からずして是にます、所はあらじと心の中に、思ひ定めは定めながら、いと捨て難きは紫なり。一日二日他所他所に、明し暮して居る中さへ、いかにしてかと我も案じ、又紫も心細う、思ひし中を引離れ、かの宗全を討亡し、世は平かに治まりて、其後ならでは歸り來ず、さあれば是は幾年と、限りあるべき道にもあらねば、此世の別とならんも知らず、いつそ忍びて諸共にと、密に思ふ折もあれど、さる物寂しき海面の、浪風ならでは訪ふ人なき、浦曲に弱く育ちたる、女を引連れ行くとても、最つきほなくなか〳〵に、わが物思の種とやならんと、思ひ返して其事を、おろ〳〵語れば紫は、たとへ奈落の底にもあれ、後れじとこそ思ひしに、あら情なの御心やと、打出しては言はざれど、物によそへて歎ちつゝ、怨めし氣にぞ聞えける。兎角なす間に年も暮れ、又

らすなるべし。**榊の巻をはり**

是より先に光氏は、彼所を忍出でたりしが、歸るふりして立戻り、唐戸の陰に身を潛め、待つ聞程なく琵琶之助、夫とも知らずいそがしげに、走去るを光氏目早く、扇をあげて此所に〱と、打招かれて心づき、立寄つて聲を潛め、「娘の閨に忍ぶ間、まづ斯くなして富徽の前に、告げよと君の御仰、何の故かは存ぜねど、御口うつしを其儘に、申述べ候が、富徽の前の御腹立、以ての外にて御氣色の、怖しきまで見えたる故、よしなき事を聞えしと、義尚君の事を讃め、種々として御心の、和ぐ様に言直し、罷立ちて候」ト、投首しつゝ物語れば、光氏は打笑ひ、「さもありつらん、夫にて宜し」ト、別れんとし給ひしが、又立戻りて、「桂樹にも、わが言付にて書捨の、反古を取りしといふ事は、必ず知らす事なかれ」ト、言教へてぞ歸りける。

以下須磨の巻

富徽の前は光氏の、行みだらなりといふ、種々の證を持ち、東山へ赴きて、事の由を訴へければ、義正はその言葉を、半は疑ひ半は信じ、只何となく出仕を止め、是より館に引籠り、愼みて居るべき由、仰言のありけるにぞ、すは事成りぬと光氏は、心の中に喜びながら、只他所目には世の中を、いと煩はしくはしたなき、事のみ増るを打歎つ、様にもてなし居たりしが、かく安閑と知らず顏、つくりて暮すその中に、猶も讒言する者ありて、もしもや

てあり。此頃もかの空衣を、伊豫の國より呼上せ、野の宮の邊に置き、折々通ふと川次郎が、密に妾へ物語。花の宴の後朝には、細殿に殘しゝ扇、この曙の村雨に、御身が見出しゝ此書捨。かゝる證のある上は、打捨て難き其上に、藤の方ともさる年より、わりなき中と言ふ事は、人も知れば我も知る。初の程は光氏を、憎める者の讒言ならんと、耳にも止めず居たりしが、春若の誕生は、如月十日餘なり、藤の方はその前年、病ありて彌生より、君の宿直をなさゞれば、噂に違はず光氏が、胤ならんも圖られず。繼子憎みと世の人に、譏るゝがうたてさに、今まで言葉に出さねど、道をも法をも辨へぬ、彼を何とて義正君は、いとほしうは思すか」ト、すぐやかにすら〳〵と、宣ひ續けたりければ、琵琶之助は恐入り、「さもあれ暫し此事は、人には洩し給ふなよ、東山への言上は、猶更の事にてあり。義尙君は御心、柔和に渡らせ給ふなれば、御言葉だに添へられなば、娘の罪は宥免ありて、召仕はるゝ事もありなん。まづ内々にて桂樹を、言懲し給へよかし。夫をも聞き侍らずは、某爲すべき樣こそあれ」ト、初の體に引換へて、さま〴〵宥め言ひなせど、富徽の前は御氣色直らず、かく桂樹と一所に、住ひて人目の隙も無きに、さまで憚る氣色見えず、入込みたるは光氏が、我を輕しめ侮るなり。さはさりながら此序に、是等の證據を御目に懸け、彼を罪に落さんには、能き便にこそあんなれと、心に思ひ廻

のみにもあらず、わが御爲にも宜かるまじ。思遣無き業をのみ、爲出で給ふを捨置かるゝ、東山なる古御所の、思召こそ訝しけれ」ト、ゆる〳〵憂ひ聞えけれ。富徽の前は腹立たしき、氣色面に顯れて、「光氏の我儘は、今に初めぬ事にして、父君をさへ恐れねば、義尙をば猶更蔑り、さる年も赤松左衞門政則が娘の二葉、女は一人の子なる故、殊に寵愛したりしを、既に兄の室にもと、氣色ありしを知りながら、弟の身を持ちて、引除けて妻となし、又桂樹を義尙に、仕へさせんと思ひしも、細殿に紛入り、道ならぬ行は、光氏ばかりの罪にもあらじ。その仇心に誘れし、桂樹とてもいたづら者、親の役にてあるなれば、汝こそまづ咎むべけれ、夫を却つて光氏に、送らんなどと子の愛に、溺れし心の怠ゆゑ、その本意をも遂げずして、事の玆に及びしなり。朧月夜は只一夜、その穢のみならば、兎も角も言消して、義尙の側室にもと、あの如くに桂樹へ、多くの女を附置きて、人に劣らぬ樣にもてなし、身近く引付け置いたるに、浮れ心の光氏に、たらし込まれしいとほしさ。又光氏が人妻に、言寄るといふ世の噂、さもあらん〳〵」ト、頓て男女の帶二筋、腰元女に取出させ、「是はむかし光氏が、方違に託けて、仁木喜代之助の館に宿り、其夜さり喜代之助が、家にあらぬをさいはいに、彼が妻空衣に、忍び逢ひしと其時に、空衣が繼子なる、川次郎が窺ひ寄り、その行を憎むの餘り、取隱しゝ帶に

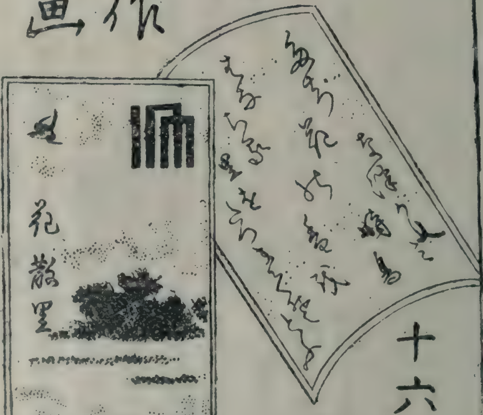
十六編　下

琵琶之助は何事も、心に思ふ事を殘さず、すら〳〵と言出づる、生付なる其上に、老いての僻の添ひければ、更に遠慮の體も無く、富徽の前の御側へ、近々と罷出で、「斯樣々々の事の候、これ御覽ぜよ此紙は、光氏君の御手なり、むかしも此所の南殿にて、櫻の宴のその夜さり、誰かは漫に這入らんと、人々心をゆるされて、唐戸を開けて置きたる故、ありそめにける事なれど、光氏君の人柄に、罪を免して桂樹を、御側仕に奉らんと、藤の花の盛にことよせ、六條へ招き參らせ、我はそしらぬ風情にもてなし、娘を逢はせし其時は、さまで心も留め給はず、されば無き名を口さがなく、人の言ひたる事にやと、打捨置けば此春も、己が館へ忍び給ひ、病に苦しむ桂樹に、種々の戲言、物陰にて能く聞きつ、夫のみならず今朝の仕儀、家來の娘なればとて、なぐさみ物にせらるゝは、あゝ目覺しき御振舞。尤も主無き女には、忍び通ふも男の例、世に無き事にもあらざれど、光氏君は日に添ひて、いと怪しからぬ御身持、人の妻にも御文を、通はしなどして氣色ある、事など人の語るを聞く。是等は取分け先の女に、疵を付くる

田舎源氏

種彦作

國貞画



十六編

下冊

鶴屋壽梓

ぞやう〳〵琵琶之助が、差覗くに心づき、やをら顔を引隱し、紛らはし給へども、匂も人に異なれば、かの轟きし雷の、光よりも著るく、琵琶之助は夫と知り、あら目覺しき振舞かなと、心の中に憤り、いと淺ましとは思へども、流石に主人の事なれば、顔と顔とを差向けて、恨言はんも憚あり、いかにかせんと氣も惑ひ、目もくるゝ心地して、物をも言はず居たりしが、頓てかの鼻紙へ、書捨て給ひし反古を掴み、氣色變りて立上れば、娘は驚き取縋る、袖を拂つて富徽の前の、新殿さして琵琶之助、あわたゞしげに立去りぬ。あまりの事に桂樹は、茫然として涙も出でず、暫くあつて光氏の、臥したる側へ摺寄りつ、「やう〳〵人目の關を踰え、戀の山路に踏迷ふ、それは浮世にある習、君は仇めく言葉だに、交し給はで何故に、人に疑受け給ふ。御身ばかりか妾まで、いかなる憂き目に逢はんか」ト、口說立て〳〵、心地死ぬべく思ひけり。光氏もいとほしう、益無き事と思ふのも、道理と思せば桂樹が、心苦しき其氣色を、言葉を盡しいろ〳〵と、言慰めてぞ居給ひける。

蚊帳をやをら膝行出でしが、其面の赧みたるを、琵琶之助つら〳〵眺め、「さてこそ今の雷に怖れ、御身は上氣したりしな。わづかの事とて捨置く時は、それより病を引出し、物怪なんど言ふものさへ、加はる時には此春の、如くに又も患むべし、はや藥をも呑み給へ。家に歸りて祈禱を言付け、札守をば送るべし」ト言ふ中に不圖桂樹の、裳に纒り薄皂の、緞子の帶の蚊帳より、引出でたるを見つけつゝ、怪しと思へば又此方に、小菊の鼻紙引散し、手習むだ書したる反古ども、屏風の下に落ちたりけり。夫も是も心得ぬ、物にこそあんなれと、打驚かれて「やよ桂樹、夫は御身の手にあらず、我に取りて見せ給へ、誰が筆ずさみか讀みて見ん」ト氣色變りて言ひけるにぞ、はつと驚き桂樹は、振返り見て我も見つけ、「夫は」トばかりにうろ〳〵と、紛らはすべき方も無く、父の不審を立てしに違はず、光氏の筆なりければ、いかゞ答へ聞えんと、我にもあらぬ心地して、身は冷汗にしとゞ濡れ、差俯いて言葉なし。かゝる折には子ながらも、さぞ恥かしと思はんと、思ひ量りて打しづめ、爲すべき樣もあるべきが、琵琶之助は性急の、生と思しくのどやかに、事を濟さん氣色は無く、子をいとほしむその餘り、子に疵つくるといふ事は、思ひも廻さず桂樹を、押除けて彼の反古を、取上げながら蚊帳の内を、つら〳〵と見入れければ、しどけなき姿にて、つゝましき樣も無く、添臥したる男もあり、今

押擧りて在りければ、光氏は出づるにも、出で難くて猶豫ふ間に、夜はほの〴〵と明果てぬ。なほ蚊帳のめぐりにも、人々繁く並居たれば、さぞ我君は胸苦しく、思すならんと御心を、察しながらに糸路水原の、ふたりも更にせん術なし。かくてやう〳〵神鳴止み、雨も少し小歇みし折、琵琶之助は案内も乞はずに、つか〳〵入來れり。是は此所より廊下つゞき、富徽の前の住み給ふ、梅の局に最前より、罷出でてありけるを、かの村雨の音の紛れに、誰々も知らざるなり。容體も繕はず、輕らかに不圖唐紙を、開けたる儘にて差覗き、「さても強き神鳴よ。氷の交りて降りたりけん、雨の音の怖しさ。心地はいかに在するか。御身は元より物怖に、打惱むが癖なれば、さぞうたてくやありつらんと、思遣りては居たれども、梅の局の廊下の戸、其所此所風に吹放ち、横しぶきにて通り難く、心ならずも御前の、宿直所に明したり。糸路その外女ども、近う參りて居たるか」など言ふその氣色の、落付かず最舌早きを、光氏は物の陰より打まもり、まづ此一間へ入果てて、さて聞えても遲くもあるまじ、我子なりとて此所の局に、迎へ給ひし桂樹に、立ちながら言ふことかはと、不圖赤松正則が、打しづまりて用意深きに、琵琶之助が輕々しきを、思ひくらべて微笑まれ、猶近々と摺寄りしは、何をか言ふと口に袖、打覆ひてぞ聞き居たる。桂樹は思ひもかけぬ、父の來たるに胸騒き、氣色や見んと最わびしう、

けるが、或時夜更けてほと〳〵と、唐戸を音なふ者のあり、誰なるらんと押開けば、つと立入るは光氏なり。邊の人に知らさじと、心を配りてやう〳〵と、奥の一間へ誘ひ參らせ、お次へそつと立戻れば、傍に立つ者のあり。さては樣子を見たりしかと、打驚きつゝつら〳〵と、差覗くに去りし夜も、仲立したる水原なれば、胸撫下して側に寄り、「朝な夕なに御顏を見てさへ飽かぬ桂樹樣、ましてや人の目を忍び、いと珍らしき御對面、引手數多の光氏樣も、仇には思召すまい」ト、打さゝやくを水原は押止め、「お前は詳しく知るまいが、此頃御出は度々ゆゑ、その氣色を知る女中がた、無いでは無けれど斯う〳〵と、富徽樣へ言上げなば、一方ならぬ御館の、騷にならうとそしらぬ顏、靑葉の殿は引離れ、御館においでなれば、光氏君が此局へ、渡らせ給ふといふ事は、思ひもかけぬ御樣子、壁に耳とかいふ諺、若き心にうか〳〵と、口走り給ふな」ト、ひそめきあひて其外の、女は大方遠ざけつ、二人宿直をしたりしが、はや曉とやと見る間に耳元へ、落つるばかりに神鳴騷ぎ、腰元どもは怖惑ひ、解けたる帶を結びもあへず、寢惚顏にて出づるもあり、耳を塞ぎ目を瞑り、或は觀音の御名を唱へ、或は天神の守を捧げ、敷居に躓き疊に辷り、此方彼方の人目も繁く、はて〳〵はひとつに集り、皆桂樹の閨近く
思しき頃、雲恐しう立重り、雨俄に降出でて、軒に礫を打つが如く、電光は欄間に輝き、あな

と忍びやかに光氏が、吟ずれば此方もやう〳〵、袖に涙を押包み、

　橘の花とはいはじ軒のつま

怨めし氣には聞ゆれど、いと珍らしき逢瀬には、ありし辛さも打忘れ、何やかやと光氏が、懐しく語ひ給ふも、思さぬ事にはあらざるべしと、思ひとりてかしめぐ〳〵と、物語りつゝ夜深きに、女は又も太秦へ、男は嵯峨へと人目を憚り、別れ〳〵に歸りけり。

花散里の卷をはり

此一段は榊の卷なり

桂樹は日に〳〵肥立ち、心清しくなりける由、富徽の前は聞き給ひ、また例の匂の局へ、呼迎へてぞ住ませける。光氏は夫も是も、心の儘に山名を謀り、都を出でん催しにや、なほ我儘に振舞ひつゝ、かの桂樹を忘れかね、わりなき樣にもてなして、心太くも匂の局へ、隙を求めて窺ひ寄り、夜もすがら歸らぬ事もあり。されども人無き其折は、戯言も宜はず、身にも覺えぬ仇し名を、何故わざと世に知らせ、給ふならんと桂樹は、怪しく思ひ且は又、富徽の前も一所に、在する座敷にありければ、夫とやしろし召さんかと、いと怖しく人知れず、心に安き間はなし。光氏は暫しの程、我に任せて置くべしと、石堂にも聞え置けば、更に憚る風情もなく、守る人多くてたはやすく、逢ひ難き女をば、いよ〳〵思ひ止み難き、心癖にてあんなれと、忍び來ること度々なり。かの赤松の腰元女、糸路も共に隨ひて、此所に泊りて在り

ト聲を沈め、やう〳〵に言出づれば、千景の方はと息をつき、折惡しく花鄕は、太秦の廣隆寺、藥師如來へ妾の病氣、早う本復する樣にと、立願したるが見給ふ如く、湯をひき髮をもあげたる故、その禮參に一昨日より、七日籠に行きたれば、戻るには間もあらん」ト聞いて光氏打點き、「其事豫て知つたる故、太秦の廣隆寺へ、迎の駕籠を遣りたれば、程なく是へ戻るべし。只密々の事なれば、人に知らさず打語ふ、所を才覺してたべ」ト、猶ひそめきて宣ふにぞ、千景の方は打笑ひ、「鐵漿をも含み眉をも拂ひ、いま花鄕は押晴ての、御側室に在りながら、夫に逢ふをさほどまで、包み給ふぞ訝しき。夫も故ある事ならん。庭を隔てしあの湯殿は、もと茶座敷に設けしに、湯槽を造り添へたれば、おふたりは御寢なられる。それ御枕御搔卷」ト指圖をしつゝ運ばするを、光氏は押止め、「聞くべき事を聞き終れば、我も戻り花鄕も、また太秦へ參る筈、燈火ばかりで餘の物は、無用なり」とて小座敷へ、移りて待てば程もなく、忍びの乘物戸口に舁寄せ、いと面はゆげに立出でしが、火影に背く光氏の、顏つれ〴〵と打まもり、むかしの事ども搔集め、思出して言葉も出でず、只さめ〴〵と打泣く時、さらば垣にて聞きたるが、此所へ慕ひて來りけん、同じ聲なる時鳥、啼きて過ぐるも哀れにて、汝も訪ふか花散る里のほとゝぎすいかに知りてかふる聲のする

住居へ行きて案内を乞はせ、其邊をつく〲見廻すに、豫て推量したるが如く、人も少く閑なり。是も心の頑ましき、富徽の前をいぶせく思ひ、病に託け引籠り、居給ふならんと哀れさを、心に歎きて佇み居る。千景の方は斯くと聞き、勿體なくも何として、此所へ渡らせ給ひしかと、端近く光氏を、迎へ出でて座敷の塵、打拂はせて誘へば、此方は病の怠りし、喜びをまづ聞え、彼方は逢はで程經たる、妹を送り給はりたる、禮を述ぶるを初とし、過來し方の物語に、早くも夏の夜の更けて、廿日の月の差昇り、いとゞ木高き影どもの、其邊小暗う見え渡り、軒端に近き橘の、薫はさつと懐しく、匂ひ合ひたる千景の方の、有樣をつく〲見るに、年は三十路を早や越えぬ、嬋妍なりといふにはあらねど、行儀正しき立振舞、更に賤しき筋はなし。されば年頃華やかなる、御覺こそなかりしかど、既に四郎の君を擧け、懐しう語らひ給ひて、いまだに寵の衰へず、「かく打揚りし人柄に、恥ぢてや兎角光氏も、口籠りつゝ花鄕の、事を現に言ひかねて、まづ他事より語出で、「思ひしよりも窶れ給はず、肥立ち給ふも遠かるまじ。併し此所に在さんには、物寂しくて御惱の、障とならんされぱとて、室町は騷がしゝ、住み給ふには東山に、上越す所はあるべからず。さぞ四郎正尚の、心許なく待侘びん」ト言ひつゝ扇を手まさぐり、「さて花鄕に對面し、密に語らふ事のあり、いづれにもあれ人無き所を、貸し給はれ」

忍ばしく、打過ぎ難くて光氏は、しばし佇立む其折しも、時鳥の只一聲、啼きて渡るも此宿を、問へよと催し顔なれば、駕籠を出口に寄せさせて、墨斗の筆を取出し、

　　葱屋とは聞えしかど

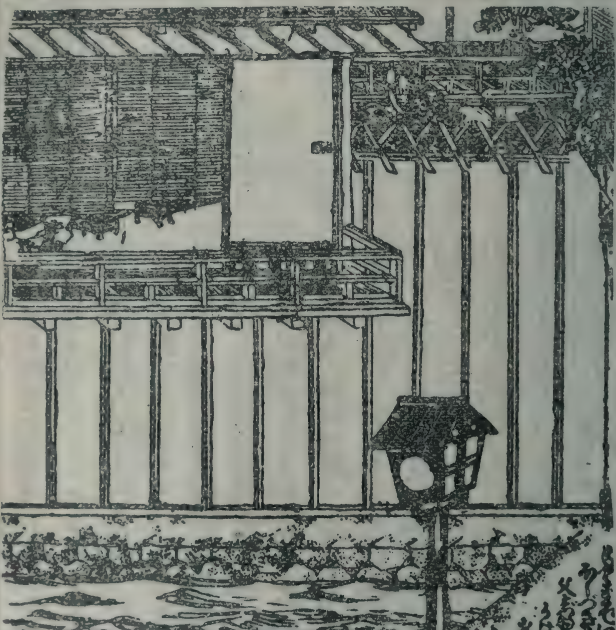
　　　忍ばれぬ宿の垣根やほとゝぎす

と疊紙へ走書、西の縁の端に居て、琴弾きたりしあの女に、渡して返事を取來れ」ト宣へば惟吉は、かしこまりて葱屋の、門差覗き窺ふに、若やかなる遊女の、物打語ひ居たりしが、むかしは君の御供にて、度々此所へ來りし故、聞知る聲もなしけるにぞ、衣紋直して氣色どり、打咳きて聲づくり、云々の由言入るれば、かの御文を遊女は、打披いて囁き合ひ、心得顔に入りけるが、暫くありて二階より、靜に下り來るけはいして、御かへりに侍る」ト、持出づる女あり、暖簾の陰に立隱れ、手をのみ此方へ差出せば、姿は能くも見え分ねど、遊女舞子の風俗ならず。惟吉は訝しく、思へど君には御覺の、有る事ならんと問ひもせず、其儘にて立歸り、件の返事を差上ぐれば、光氏は提灯の、火影に近く打披き、

言問ふを此所に待ちけりほとゝぎす

口の中にて吟じつゝ、「ウヽ宜しく〳〵」ト卷收め、又もや夫より駕籠を早め、心ざしたる星月の

も少く、不自由にこそ在すらめ、幸ひなるかな綾泙は、かの方の妹なれば、絶えて對面あらずとも、心置はなかるべしと、看病に送られしが、はや年も長けたる故、人の目立たん事を憚り、眉を落させ花鄕と、名をも呼換へさせ給ひぬ。然るに夏のはじめより、千景の方の惱も怠り、本復近きにあるべしと、花鄕より告越しければ、其樣の見まほしく、かつ花鄕も赤松の、館にありて中空と、呼びたる頃よりほのめきしを、あはれと思ひて糺へ迎へ、折節毎に戯れを、言交し給ひしかば、流石に忘れも果て給はず、彼家に行きて後、顏をも見せず見もせねば、恨みやせんと思ひいで、忍び難くて五月雨の、空珍らしう打はれたる、雲間に例の惟吉ばかり、供に連れてぞ出で給ひぬ。殊更に人目を包み、戸無駕籠にて道を急がせ、六條の程おはするに、葭簾垂籠めし、さゝやかなる二階の内に、能く鳴る琴を雲井に調べ、搔合せつゝ賑はしく、彈鳴す家のあり、耳止りて駕籠の垂、打揚げて見給へば、大なる柳の木の、追風に折靡くは、かの三筋町の廓にて、出口の柳の下蔭なり。又琴の音の聞えし方を、つく〴〵と見上ぐれば、これ忍屋の小座敷にて、むかしは宿りし揚屋なるを、思ひ出づれば夢の間に、程經にけりと歎息し、不圖振返るに遊女の、客を此所まできぬ〴〵に、送りて別るゝ故ならん、さらば垣と呼慣はす、垣は其儘ありながら、結ひも直さず竹も朽ちたり、ゆかりの人は無けれども、そゞろにむかし





ひければ、いざ歸らんとて光氏は、糸路を呼びて羽織を引掛け、「事に紛れて石堂には、まだ言はざりしが去りし年、かの頓五郎馬刀助を、欺かんとて渡したる、手紙の中に八月望の夜、玉兎の鏡を稻舟へ、贈らんと書いたるを、實と思ひし體なる故、似つこらし氣の鏡を造らせ、其夜館を出しゝかば、果して山名の家來ならん、大勢道に待伏し、奪取りしと歸りて告げつ。實と思ひて祕藏やすらん」ト物語りつゝ桂樹に、別を告げて立ち給へば、垣根の彼方に棒突鳴し、火危しといふ聲聞ゆ。これ晝ながらも掟嚴しく、時々に走使の、屋敷の内を廻るなるべし。されば外にも忍路を、守る人目もあらんかと、しづ心なく出で給ひぬ。はや門のはなやかにさしたりければ、折戸の陰に桂樹が、甚う窶れて見送りたるは、似ぬ物もなき有樣なり。

以下花散里

人知れぬ心盡しに光氏の、物思はしさはいつと無き、事なめれど斯く足利の、寶には心を懸くる者多く、世の亂の近からんと、煩はしう思せども、流石に兄を差除けて、わが儘にも計らひ難く、世の成行を餘所ながら、密に窺ひ居たりけり。

千景の方を片攪より、貰受けて養ひしは、星月壽庵といふ醫者にて、家は七條通なる、木屋町の邊にあり。春の頃より千景の方、病氣に依りて本復まで、暇を賜り星月の、住居に歸りて父壽庵の、療治を受けて居る由を、光氏は傳聞き、世に知られたる醫者にもあらねば、召仕ふ人

十六編上

暫くあつて桂樹は、面はゆげに顔を上げ、「御心配の無かりせば、操を破りて石堂殿に、何とて顔の合さるべき。仰なくとも此上は、酒をも飲まじ、悋氣もせじ、必ず見捨て給はるな」ト、人目も恥ぢず馬之丞に、取縋らんと爲したるが、何やらん不圖思ひいで、光氏の側に寄り、「これ此扇と取換へて、殘置き給ひたる、君の扇をそのあした、富徽樣の見給ひて、なみ〳〵ならぬ御腹立、枕交して打解けし、中にはあらじとことわりを、言はんとすれど我身の恥、涙に暮れてあやも無く、つい其儘に過行きしが、夫より御名を立てたるが」ト言ふを光氏押止め、「仔細ありて其時の、事も詳しく聞いたるが、名を流すのは豫ての覺悟、御身心を改めて、石堂と添はんと思はゞ、この光氏を戀慕ひ、不義する體にもてなすべし。遠からず某は、都を他所に振捨てて、行方定めぬ身となれば、夫も僅の中にてあり。最前わりなく言寄られ、自害なさんとなしたる貞心、眼前見たれば石堂も、はや此上は疑ふまじ。まつ婚姻を暫く延し、我に任せよ馬之丞」ト仰にいよ〳〵恐入り、「只兎も角も宜き樣に、尊意に隨ひ奉らん」ト、桂樹諸共言

偐紫田舎源氏第十六編序

楚辭に梅なし、萬葉に菊なし、昔の草雙子に序なし、源氏に蚊屋なし男色なし。お湯といふのがそれかも知らねど、祈禱まじなひばかりにて、藥を呑みたる事もなし。それよりも無いものは、繪冊子の趣向にて、第二編の序に記しゝ如く、紅葉の賀までの梗槩を、初はまうけて綴りしが、思ひの外に須磨明石の、浦まで船は漕つけたれど、作者の用心こゝになければ、得手に帆もあげがたく、綱手の繩の最ながくて、繪樣もおなじ事になり、行燈屏風脇息の、形さへ案じ盡し、東山の時代には、夢にも知らぬ礁枕、比翼莞筵まで畫きながら、夏の床にはうちはれて、蚊屋のなきのは淋しからんと、几帳にかへて源氏に無き、蚊帳をはじめて畫かせたる、そのことわりを昔々の、草雙紙には無き序らしきものに、書つけておくにこそ。

天保六年乙未春　　　　柳　亭　種　彦

いよ戀慕の有樣にて、つけつ廻しつ樣子を見るに、かの夜よりして只管に、馬之丞が後世を弔ひ、髮は艶よく結ひなせども、偏に心は尼法師、一休禪師の德を慕ひ、かの水中に一物ありの、言葉をかへて贊する人は、己が心の中を知らずと、此扇を楊弓の、弓にて我に射返したる、頓悟話則に感じながら、馬之丞は目に見ぬ事、人の噂を實と思ひ、我をさへ疑はんと、わが乘物にて連來り、昨夜より人知らず、小陰に忍ばせ置きつるなり。彼も目の前貞心を、見たる上は否とも言ふまじ、琵琶之助にも言聞かせ、光氏が媒妁せん。爪繰る珠數の水晶より、心は淸くなつたる桂樹、魚肉をさへ斷ちたる由、是より酒を愼みて、行末長く添遂げよ」ト、仰に兩人いちどきに、はつと御請をしたりけり。めでたし／＼。

柳亭伏してまうす この光氏塗籠に、隱るゝの一條は、藤の方にあらざれば、物語の趣ならねど、愚の筆には懲惡の、意を含みて書取り難く、桂樹にかへて綴れり。さて花散里の卷は、はづかにて終り、富徽の前の讒言にて、光氏須磨へ赴き、それより明石へ移るの條、おしつけて出板、御もとめのほど奉希候。

時、御身も圖らず彼所へ來かゝり、石堂が最期と聞き、悲歎の涙に暮れたる樣子、是も亦腰元婢に、止められて死骸を見ず、乘物へ押入れられ、歸り行く其時は、某御身の面體を、まだ知らざれば何者かと、惟吉に跡をつけさせ、窺ひ見れば琵琶之助が、館の小門へ忍びやかに、舁入れたりと歸つて告げつ。その昔石堂と、睦しかりし中なりとは、雨の夜さりの徒然に、馬之丞が物語、眠れるふりして聞置きたれば、さてはかの桂樹ならんと、爰に初めて知つたるなり。又馬之丞が横死の樣に、もてなしたるは敵の間者、頓五郎馬刀助を、退けん爲ばかりにあらず、伊勢の國に板畠の、殘黨ある事聞及び、人に知らさず某が、腹心の家來を彼所へ、差向けん計策なれば、馬之丞にこれを命じ、去年の秋まで度會郡の、陣屋を守らせ置いたるが、是へは仁木喜代之助を、下して密に呼返しつ。夫は差置き御身の上、富徽の前の姪なれば、兄義尙の内君にと、心懸け給ひし事は、さいつ頃より噂を聞く。言交したる其男は、はや亡人となりたればと、もしや心に思ひとり、その言葉に隨ひなば、わが詐よりして桂樹が、操をや破らせん、家臣と一旦契りし女と、知る人あらば兄をも笑はん。是に始ど當惑し、水原を密にかたらひて、兄義尙の風情にもてなし、かの細殿にて忍び逢ひ、馬之丞が亡魂の、乘移りたる體に見せ、御身の心を引き見しに、後悔面に顯れて、既に自害もすべき體、猶も樣子を探らんと、いよ

者も取逃し、敵の詮議の手懸も、ないて暮して其事を、忘るゝとにはあらねども、富徽樣にいろ〳〵と、勸められて恥かしい、花の宴の其夜が夢か、今日が夢か」ト口說き立て、只茫然となし居たり。光氏は打點き、「御身の瘧の落ちたるは、打驚きたるのみにもあらず、石堂に持たせしは、勅筆の短冊にて、我も去る年瘧に、苦しみし時奇特を得たり」ト言懸けて此方を見返り、「糸路は皆の者を連れ、此所を遠ざけよ。桂樹近う」ト聲を潜め、「馬之丞が存命を、さぞ不審に思ふべし、その仔細を語りて聞かせん。我故ありて敵の密書を、多く得たりし事のあり、ある、山名よりのまはし者、この光氏が近臣の、家來となして入込ませ、樣子を探らん爲にて夫を見れば石堂が、其以前召抱へし、侍岸高頓五郎、草履取の馬刀助二人は、豫て謀反の萠あり、其夜直に馬之丞を、嵯峨の館へ呼迎へ、云々の由を語り、紀へ使の途中より、我文を忘れしとて、かの頓五郎馬刀助二人を、途中よりして嵯峨へ歸し、紅葉の賀宴ありし時、己を討たんとなしたる曲者、其座に一人斬つて捨て、一人獄に繫がせ置きし、猫山三毛藏が首を刎ね、馬之丞の衣服を著せ、乘物の內へ押入れ、供は殘らず遠ざけて、いかにかすると某が、後より彼所へつけ行きて、小陰に窺ひ聞くとも知らず、二人も其所へ立戾り、元より大事に仕ふべき、主人にもあらざる故、死骸をとくと撿めねば、實と思ひて其場より、出奔せんとなしたる

氏の、差添を取上げて、拔かんとせしが顏色變り、手より礑と取落し、身中慄うて歯の根も合はず。「えゝ潔く自害して、事の趣聞えんと、思ひの外に折悪しく、死ぬも死なれぬ此惱」ト、なかば絶入る有樣に、糸路其外腰元ども、「昨日は影もおさしなされず、御機嫌の能かりしが、一昨日よりも御樣子が、悪い樣な」ト立騷ぎ、夜著を打著せ脇息を、押直しなどするを、光氏は押止め、桂樹の顏屹度眺め、「我にわりなく言寄られ、せん方盡きて自害の覺悟、天晴貞女それにてこそ、琵琶之助が娘なれ。瘧の病は思ひも懸けず、襟元より水を注がれ、又耳近く矢響の、音なんどを聞く時は、忽ち落つる事のあり、これ打驚くそのはずみに、氣を轉ずるが故なるべし。さらば御身を驚かせ、試ん」とて表に向ひ、「其品是へ」ト宣へば、はつと答へて何かは知らず、錦の袋を捧げ持ち、しづ〳〵と入來るを、桂樹ふつと顏を上げ、見れば石堂馬之丞。こはそもいかにと我をも忘れ、立てば身中も健かに、「さむけも醒めて心さへ、清しくなりしは此身の病、さては本復なしたるか。夫はともあれあなたはどうして、此世においで遊ばした。思ふ餘りの戀いさかひ、夫が高じて飽きもせず、飽かれもせぬに中絶えて、五年以前夕立の、晴間を待ちて思はずも、加茂の社家にて一夜さ明し、歸りは最早しのゝめ頃、糺河原を通りし折、誰とは知らず石堂を、討止めたりと言ふのを聞き、駕籠より飛んで出たれど、つひ其

を拂ひ、塵無き様にして置け」ト光氏君の此邊に、忍び給ふを推量し、歸し申せの言葉の謎、解けても水原は我一人、止らんとも言ひ難く、琵琶之助の後に跟き、皆打連れて行く様子、光氏は聞すまし、我をば憎しと思はんが、我子に仇なる名を立てじと、胸を摩りてそしらぬ顔、親の慈悲ほど有難き、物はあらじと思ふにも、涙は落ちて桂樹を、屏風の際より打見れば、まだ苦しげなる風情にて、父の手づから据置きし、かの果物の硯蓋、いと懐しき様なるには、心も止めず世の中を、思ひ悩めるその氣色、哀れと思へば心も惑ひ、暫し躊躇ひ居たりしが、いよいよ後悔懺悔して、實の貞女になりつるか、試さん爲にてありしかば、屏風の中に窺ひ寄り、上に端折りし桂樹の、小袖の褄を引ならせば、見かへらねども光氏が、常に好みて炷しめし、匂もそれと著じるく、まだ此所に在せしかと、その淺ましさ怖しさ、直に上著を辷らかし、ゐざり退かんとしたりしが、生憎に笄の、襟に纏ひて抜遣らず、是も宿世に定まりし、身の因果かと心憂く、只ひれふして居たりしかば、光氏猶も撓みなく、心亂れし様にもてなし、「包むとすれど我此所へ、忍びし事は人も知る、只いたづらに歸りなば、何面目に人々と、重ねて面の合さるべき」ト、萬の事を泣く〱に、恨み給へる其中に、桂樹は身を摺抜け、「何を申すも此惱、本復なしたる其上では、御宮仕は此方より、願うてなりと」ト言ひながら、側にありし光

給はゞ御惱の、妨ならんと包みしかば、桂樹は心安く、顏を洗ひ口を嗽ぎ、褥の上に直るにぞ、御心能きならんとて、腰元どもは其所此所の、物の陰に引退き、琵琶之助も此所よりは、隔てし居間に戻りつゝ、桂樹の傍は、人少なになりければ、いかに詐り此隙に、君を出し奉らん、御面影を見給ばゞ、又御惱の發らんかと、糸路水原は打さゝやき、心を配れど光氏は、猶言漏しゝ事あれば、歸る氣色は更に無く、かの塗籠の戸の細めに、開きたるをやをら押開け、屏風の狹間に入り給ふ。とは知らずして琵琶之助、硯の葢へ菓物を、盛りたるを自ら持ち、再び娘の閨へ來り、「女房司はいつぞやより、御身の病を苦に病みて、加持よ祈禱と每日々々、信心にのみ明し暮し、昨日も日暮に淸水へ、參籠なして家に在らず、この曉に歸りしが、又打返して惱みしと、語らばいよ〳〵苦や增さんと、包み隱して置きつれば、おしつけ是へ來るとも、腰元どもも心得て、必ず沙汰する事なかれ。未だ粥もまゐらぬ由、常より好むこの果物、せめては是を」ト差置きしが、不圖光氏が差添の、覆ひし袱紗を洩出でしに、目を止めて心に驚き、水原を初め室町より、桂樹に附置かるゝ、女を殘らず呼集め、「昨夜も既に言ひつる如く、胸を痛めて打惱むは、幼き時より彼が癖、物密になさゞれば、又その病の發するなり。是はあまりに人多し、御身等は暫しの間、司の方へ來るべし。糸路それかれ止りて、能く其間に座敷

原糸路は此所を、少し退き居たりしが、斯くと見るよりあわて惑ひ、種々に介抱なし、兎角扱ひ聞ゆれど、光氏は此所を出でず、憂し辛しと思ひたる、事の限りを歎つにぞ、桂樹いよ〳〵悩まさり、其氣色著ければ、人々も打驚き、お湯よ藥と立騷ぐ、腰元どもに光氏を、見せじと糸路は襖を立切り、萬の道具を納め置く、塗籠の戸の開きしを幸ひ、これへと押入れまゐらすれば、我にもあらで光氏は、息を呑んで隱るゝにぞ、心安しとさりげなき、風情に糸路は桂樹の、傍へ立歸れば、脫置き給ひし羽織のあり、これ見られてはむづかしと、振の袖にてやうやう隱し、かの塗籠へ打込みつ、胸撫下して又元の、所へ戻りて「御心地は、いかに」ト問ひつゝ不圖見れば、火影にきらめく金作の、御差添は桂樹の、褥の側に猶殘れり。是を隱さん暇も無く、鼻紙臺の袱紗を取り、打覆ひなどする中に、腰元より此由聞き、琵琶之助も此方へ來り、桂樹が樣子を見、「こは此程の瘧にあらず、幼き時に蟲を患ひ、伽する者が心つかず、怖ろしき事悲しき事、言出づるを聞くと其儘、かくの如くにありけるが、又その病の發りしなるべし。何をか彼に言聞せし。それ醫師を喚出せ。加持の僧をも請待せん。早く人を走らせよ」ト、兎角罵り立騷ぐを、光氏は塗籠にて、いと〳〵わびしと聞き居たるが、辛うじて夜明くる程に、桂樹は惱の怠り、かく光氏が塗籠に、籠りて在すは思ひも懸けず、水原糸路も此事を、若し知り

け傍の、腰元どもを遠避けて、「昨日には引かへて、お顔持の今日の宜さ、その御樣子ではすらく／＼と、御本腹遊ばす」ト、力を添へれば機嫌能く、「怖しき事悲しき事、夫をさへ忘れて居ると、さまでせつない事は無い。兎角病は苦にせずに、紛れて居るが宜いと聞き、晝は木草を眺れど、まだ春寒き夜の風、身に當りては毒なりとて、垂籠めて居る故に、いつも／＼日が暮れると、心細うなつて來る。今宵も月は出たであらう、秋の最中の冴えたより、霞籠めたが私は好。どうぞ風に當らぬ樣に、空を眺むる仕樣があらば、敎へてたべ」ト宣ふ此方に、打咳くは男の聲、「如く物は無き朧月、いざ見給へ」ト屏風の上へ、差翳しゝは楊弓の、弓もて去る年射返したる、月を描きしわが扇。思ひがけねば桂樹は、夢の樣にぞ打まもる。光氏屏風搔遣りて、懷しげに打まもり、「室町の細殿にて、思はず逢見し其時は、しかも盛りの夢見草、眠るとも無く打臥して、我は前後を更に知らず、只いたづらに起別れ、これ此扇とわが扇、取換へたるを見咎られ、覺無き名を流されて、今は言解く言葉も無し。いざ給へ寢て語らん、駕籠も釣らせて來りしぞ。木草の花を眺むるにも、此所より嵯峨は便能し。とく／＼用意」ト宣へば、桂樹はいと悲しく、「妾は浮世を捨果てて、口に稱名手には數珠、近きに尼になり侍る。免させ給へ」トばかりにて、其後言葉も涙にくれ、例の惱の胸苦しく、其所へかつぱと臥轉ぶ。水

振切る袂、水原は縋りて猶放さず、「御心と御言葉とは、いつでもあなたは裏表、色に溺れて道を背く、御性で無い事は、能う存じて居りまする。是にも何ぞ深い様子の、御座つての事ならば、無理にお止めは申しませぬ。さりながら室町より、お附の女も多ければ、私一人の才覺では、どうもお逢はせ申しにくい。はて誰ぞを」ト打案じ、頓て一人の腰元女、まだいと若きを呼出し、「是は糸路と申しまして、君の御目を懸け給ひて、今宵も御供に連れられし、惟吉が妻の妹、この館に去年から、勤めて居るこそさいはひなれば、委細は是に申して」ト、打さゝやけばまだ年は、足らはぬながらいと賢しく、目立たぬ樣に築山の、燈籠を持て來り、この燈火をしるべにと、糸路は邊へ心を配り、やう〳〵にして光氏を、紛らはして入れたりけり。人目も繁く端近なるを、空怖ろしう思ひながら、襖の陰に光氏は、立隱れて桂樹が、體を密に窺ひ見るに、年は二十を越えたれど、目元すゞしく眉匂ひ、都雅なる生なれば、未だ盛りに賑はしき、化粧したりし其人の、少し惱みて瘦々に、なりたる程のいとをかしう、重々しき方にはあらねど、媚かしう若びたる、姿は我さへ見まほしきに、かの石堂か通馴れ、嫉妬深きはうるさけれど、その顏ばせは忘れ難しと、言ひたるも實に道理ぞと、心に思ひ居たりけり。

水原はわざと光氏と、引別れて廊下を廻り、桂樹の側へ來り、お藥お粥それかれの、用に託

御患。只今は御機嫌能う、物語して在すれど、たとはゞ本をお讀みなされ、怖しとか悲しとか、御心が夫に移ると、御顏の色が忽ち變り、おさむけだちて幾重か夜著を、襲ねて召してもお慄の、止らぬのは只事ならずと、五壇とやらの御修法を、お始めなされて琵琶之助は、物忌して居られます」ト聞いて光氏打點き、「五壇といふは金剛夜叉、軍荼利、さては降三世、又大威德明王に、中央不動の法ならん、それ修するより某が、逢ひだにすれば瘧は落ちる、氣遣すな」ト入らんとする、袖を水原は引止め、「花の宴のあくる朝、君の扇を桂樹さまが、持つておいで遊ばしたを、御目にとまつて富徽樣、泣々ならぬ御腹立、要もぬけてばら〳〵と、なつたる事は其砌、申上げたをあなたには、もう御忘れなされてか。是へ渡らせ給ひし事、富徽樣のお耳に入らば、御身の爲も惡しからん、御見舞の趣は、折を見合せ私が、桂樹樣へ申します。はや〳〵御還りなされませ」ト言へど光氏聞入れず、「母花桐には五歲で別れ、富徽の前の養ひにて、ひととなりたる某なれば、此方に隔は無けれども、彼方は兎につけ角につけ、妬しと思し詰めたる事ども、人も知れば我も知る、その報をせんとてなり。下樣の言葉に言はば、憎まるゝ意趣返し、娘の如く勞り給ふ、桂樹と忍び逢ひ、わざと御腹を立たするのぢや、此身の爲にならぬも承知。五壇の修法に琵琶之助、愼み居る隙こそさいはひ、案內をせよ」ト

ば、夫も是も血筋を以て、家を治めん爲にして、そのむかし石堂と、契りし事は知り給はず、朧月夜に只一度、かの光氏と立ちたる浮名を、言止ませんとて種々に、心を盡し給ふ中、その歳も暮果てぬ。春まだ若き頃よりして、桂樹は瘧に、久しう患みたりけるが、禁厭なんど心よく、せんとて暫し父の館へ、歸りたき由願ひければ、富徽の前はこれを許し、心知りたる腰元女を、多く添へて琵琶之助が、住居へある日送りけり。

光氏例の珍らしき、隙なるを聞付けて、さる年雨夜に石堂の、物語にて青葉の館の、忍門は能く知りつ、日暮れて後に嵯峨を立出で、駕籠は後より釣らせながら、其身は衣服も殊更窶し、忍びの徒路靜やかに、彼所へ行きて門をおとなひ、「此頃水原といふ老女、富徽の前より桂樹に、附けられて此所に在りとか、さあらば語ふ事のあり、對面せん」ト言入るれば、水原はその由傳聞き、訝しながら立出でつ、夫と見るより大に驚き、「何として當館の、忍門を知召し、是まで來らせ給ひし」ト、言ふに光氏につこと笑み、「まづ其事は後にて言はん。我も一年瘧に、患みたる事のあり、思ひの外に苦しきものぞ、身につまされて桂樹の、有樣の心元なく、密に今宵來りしなり。樣子はいかに」ト問ひ給へば、水原ははつと頭を下げ、「此程は御病氣も、すこし怠り給ひぬれば、富徽樣誰々も、嬉しと思召したるが、又一昨日より打返し、二度三度の

其事は何とも言はず、父國助の身の上を、打頼める樣に聞え、只すぐよかなる返ばかり、光氏へ送りけり。

富徽の前は桂樹が、佛門に入りたるを、いと憂き事に思ひ給ひ、「青葉の館に居る故に、さる我儘の事もすなる、我許に引取り置かば、似合はぬ數珠を持たせはせじ。此方へ呼べと宣ひて、富徽の前の此頃住む、梅の局と名附けたる、座敷の奥に是も亦、その薫にて名を呼ぶか、匂の局と言慣はし、久しく人も住まざれば、塵に埋れし部屋のあり、此所をしらつはせ、桂樹を招迎へ、腰元婢數知らず、附置かせ給ひつゝ、手道具衣類に至るまで、自らのを分ち與へ、やんごとなく待なすにぞ、かの埋れたりつるも、晴々しき座敷となり、今めかしう華やぎて、見ゆれど兎角桂樹が、心の中にはさいつ年、花の宴にて散過ぎし、其人再び魂の、此世に通ひ君に添ひ、思ひの外なる事どもを、言ひたる事を忘れ難う、歎くと知らぬか光氏は、夫より度々文を送り、人傳に言寄るを、怖しくも悲しくも、此事を何卒して、思止らせ奉らんと、朝夕佛に願へども、富徽の前を憚りて、心の中に念ずるのみ、聲をあげて經をば讀まず。そもそも多くの女を集ひ、桂樹に冊かせ、人柄好くとりなして、富徽の前の憫むは、義尙既に去る年、一色郡領持廉の、娘立田を迎取り、内君は定まりけれども、その桂樹を側室となし、男の子を擧けな

づとて、贈られたるが行きて見し、折とは變りて僅の中に、猶美しうなつたのは、誰やらに似て居れば、闇の錦に我ひとり、眺めんよりはあなたにも、御目に掛けよと御意遊ばし、そして何やら此枝に」ト差出すを取上ぐる、手もさながらに焦るゝばかり、實にいみじき枝どもなれば、庭の紅葉を手折らせて、押競べて見給ふに、山のは殊に染増しける、露の心も見過し難う、不圖目のとまるに又例の、いさゝかなる文のあり、いま言の葉が此枝にと、教へしは是ならんと、紫は手づからとき、夫婦の中は隱すべき、事にもあらねばそれ讀めと、指圖に小辨は押披き、つく〴〵と打見るに、筆の運も言葉の續も、子供の樣に拾ひ書、「此程は父上に御逢ひなされ、御喜はかぎりもあるまじ。御土產には人形か、若し犬張子に侍ると、手荒には打投げ給ひそ。雀の子なら逃さぬ樣、犬吉に言付け給へ。おむづかるのが笑止に候。目出度しく」。

は續かぬ樣な」ト聞くよりはつと紅葉の色、顏にうつりて紫は、「何事も思遣、深く渡らせ給ひながら、折々は此樣な、人の嫌がるおいたづら、いつまでも子供ぢやと、思召す御心の、絕え給はぬのが恥かしい。召使ふ女子どもの、思ふ手前もあるものを」ト紅葉の枝を取上げて、うちやらんと爲たりしが、はしたなしとや思ひけん、瓶に插させて緣側の、柱の下へ押遣らせつ、

伊勢までは誰音づれん秋の風

繕ひもなく書きたれど、手はよしありて媚めきたり。夫に引かへ執念の、深きに倦じて磯菜の父は、わが兄なりとの根無事、取繕ひて下しゝが、思へば不便の身の末や」ト獨ごちつゝ紫を、住ませし西の亭へも行かず、物淋し氣に眺め居たり。ましてや旅の空はいかに、心づくしなる事多かりなん。

紫は光氏の、雲林院に留まりて、文の使のあるばかり、又御心の亂れかと、いと覺束なく思ひしに、父國助の來りし其日、光氏やう〳〵館に歸り、常より殊にしめやかに、語り聞え給ひければ、やう〳〵心も解けたるが、又かの阿古木の出立の、事に紛れて昨日今日、音信も絶えければ、御心惡うは在せぬかと、東の住居へ言の葉を、使に走らせ紫は、心も靜ならざれば、琵琶琴なんどの遊もせず、つく〴〵眺めて居給ふ處へ、言の葉は紅葉の枝、携へ持ちて立歸り、「我君樣の仰には、尋ねの如く昨日より、風邪の心地か肌寒う、引籠りては居るなれど、案ずる程な事はない。雲林院へ逗留して、少し見ぬ間に思ひなしか、紫は成人して、打鎭りて重々しく、猶嬋娟になつた樣な。風に亂るゝ蜘の糸と、返しの發句の心憎さ、何事を教へても、覺の宜い性ぢやと、お噂を遊ばして、夫は〳〵殊ない御機嫌。又この紅葉は先つ方、雲林院より山

十五編下

阿古木の母の渦浪の、亡骸を納めしは、桂川の邊なる、何某院にてありければ、空衣に其由語り、道を廻りて彼所に詣で、麗はしう仕立てたる、磯菜を墓の前に誘ひ、「是はあなたの孫なれど、身の儘ならざる住居ゆゑ、今まで顔をも見せ申さず、お言葉かけて給はれ」ト打泣けば磯菜も共に、手を合せつゝしほたれぬ。光氏より送の者ども、出立ち給ふを待付けて、門前にみち〳〵たれば、往來の人も何事ぞと、立止まる樣子を見遣り、空衣は種々に、二人を勸め言ひこしらへ、やう〳〵にして三條の、橋まで來りし其頃は、日もはや旣に暮れんとす。又惟吉を使として、光氏よりの音信あり、阿古木は取つて披き見れば、

　夕霧に振捨てゆくか鈴鹿川

　　八十瀬の波を越行かば、流石につれなき袖も濡れん。

別の印に磯菜へとて、小さき櫛の文箱にあり。空もいと暗うなり、物騷がしき程なれば、其儘に過行きつ。又の日にあふ坂の、關の彼方の宿より、返あるを光氏は、振拔きて見給ふに、

に、思止り侍るなど、盡せぬ事ども書續けつ、見るもなか〳〵涙なれば、そのまゝ袖に隱しけり。

は行通ひ、腰元女に至るまで、むかしより猶濃やかに、言葉を懸け情をかけ、夕霧丸を労りつつ、信やかに見え給ふを、世に有難き御心と、政則夫婦は打喜び、光氏に仕ふる事、今も同じ様ながら、その初娘二葉を、義尚の内君にと、富徽の前の催しありしを、聞入れずして光氏に、参らせたれば其頃より、富徽の前は政則を、宜しうも聞え給はず、その二葉は失せ義正は、東山に移りしがば、室町へ出仕の度々、心に染まぬ事のみ多く、病と言立て此程は、籠り勝にて居たりけり。

阿古木の許へ光氏より、常より文もこまやかに、衣類は更なり旅の調度、何くれと珍らしき、さまなるを贈れども、阿古木は何とも夫をば思はず、只心憂き名を流し、浅ましき身の有様を、今始めたらん様に、下りの近くなる儘に、起臥歎くかたはらに、磯菜は心いと若く、音にのみ聞く間の山、お杉お玉の小唄節、天照神の宮廻り、いつ行く事かと思ひしに、その出立の定まるを、嬉しと思ふも哀れなり。既に其日になりければ、喜代之助君吉等は、霧を拂つて朝疾く立ち、空衣は阿古木と打連れ、日の高く昇りて後、心静に出立つ折、光氏より例の文あり、磯菜が様も床しければ、参らまほしう思へども、若し御身との中らひを、知る人ありて彼方には、思ひ離れて旅立つを、打捨てられし身も恥ぢず、見送に出でたるなど、笑はれんかとやう〳〵

ば取集め、密に我に與へよ」ト是よりも亦彼方此方、千ぐさの花を眺めつゝ、嵯峨へ歸らせ給ひければ、かの西の亭の方、人多く立集ひ、常よりもいと賑はし。是は此頃、紫に、かねを含ませ髪を直し、遊佐河原之進國助が、娘なるよし表立ち、室町へ披露に及び、國助初めて當館へ、來りし故のざゝめきなり。我子といへるは私にて、今は主人の内君なれば、國助殊に行儀を正し、御目見えにとて恐る〳〵、末坐へ出でてかしこまる。紫の上しとやかに、「國助近う」と宣ふも、自然と其威備つて、はつとばかりに蹲り、やう〳〵少し頭を擡げ、打見上ぐればむかしに變り、はや大人びてその氣高さ、更に娘と思はれず。彼方も父の床しさに、瞼濡るれば此方は猶、膝に涙の玉なして、久しぶりなる對面に、心の中の嬉しさは、筆に盡さん樣もなし。實に紫の幸は、世の人々もめで聞え、取分けて言の葉は、小玉のぬしが數珠を放たず、御佛を祈られたる、その驗ならんとて、喜ぶ中に國助の、本妻はひと目だに、まだ紫を見ざれども、妬しと思ひし澤菊の、子と聞くからにいとをしとも、思はず過ぎしが光氏の、内君よとて人々に、傅かるゝ身と彼はなりぬ、己が腹に擧けし子の、夫には劣るを口惜しと、思へば心の安からず。夫は喜び妻は恨む、繪草紙にわざと設け、作りし樣なる有樣なり。

斯く此殿のときめくに、引かへて赤松の、館は兎角物寂し。二葉の上の在りしに變らず、光氏

思ひがけぬは宵の程、君の導きときは物ならずと、仰ありしは御道理ゆゑ、其事にては侍らず。不思議に親させ申せし、岩根といへるかの老女は、川次郎が實の母、斯樣々々の事どもにて、他に隱子の名乘合ひ、早百合に申上げたる通り、妾は閨を辷り出で、間所も無き假住なれば、川次郎れん隈も無く、屛風の後に身を寄せて、まどろまんとする處へ、忍んで來たる男あり、裏とは知らざれども、しどけなき寢姿を、見らるゝがいとうるさく、此上著を引掛けながら、内より口より逃出し、帶引締めて立戻れば、枝折の門のはつたりと、たちたるはづみに掛金の、懸りて押せども開かず、人を呼ばんも敲かんも、君を忍ばせ參らせたれば、聞えを憚りうつかりと、佇む中に夜は更ける、たとへ神でも佛でも、女は女だちとやら、明日まで此所を貸し給へと、辨財天の祠へ入り、唐戸を締めて置いたれば、人のありとは氣もつかず、富徽樣に仕へて居る、白糸は其方の姉、是からは斯く〳〵と、諜し合せて親子は出奔。帶を證據に言立てられ、さがなき御名を立つるのが、空怖しい」ト言ひさして、泣くか恥づるか顏に袖、打覆へば光氏も、あはれと思へどわざと打笑み、「さな思ひそよ讒言は、泥と砂との如くにて、一度は濁すとも、元より淸き水なれば、潔き名の終には流れん。さらば」ト言捨て二足三足、又立戻つて聲を低くし、「岩根とやらんが殘したる、箱なんどの其内に、若し白糸より送りたる、文のあら

吹きて、折知り顔の松蟲の、聲さへ今は泣嗄し、物思ふ事なき身にも、哀は秋にあるものを、まして阿古木は種々に、心も惑ひ氣も惑ひ、浮世の中の悲しさを、我身ひとつに集めたる、心地せられて物さへ言はず、落つる涙を我子に恥ぢ、「秋の哀は知るものを、泣く音な添へそ松蟲」ト、小唄謠うて紛らすは、聲打あげて泣くよりも、哀を添へて光氏も、聞きなしながらほのぼのと、明行く空もはしたなく、しをり出づれば野の宮の、注連の内なる細路にて、小笹茅萱のいと露けし。阿古木は心弱々と、名殘あはれと眺め遣る。植渡したる弱竹も、むら〳〵立ちし秋霧に、隔てて能くもわからねど、簾を漏れし月影に、隈なく見えし御姿は、まだ目に殘りて忘られず。實に若き人々の、君ゆゑ思はぬ身の過失、夫もさら〳〵無理ならず、かく嬋妍な御有樣、見捨てて別れ遙々と、伊勢路へ行くも娘のため、人の絆は子にまさる、物はあらじとくよ〳〵と、心の中の口說事、そのまゝ閨へ立戻り、枕も上げず打臥しけり。

光氏は立戻る、風情にもてなし小戻して、かの野の宮の柴垣の、内を窺ひ透し見て、「其所に居るのは空衣か。いつの間にかはわが刀の、下緒に結び置きたる文、人には包む大事なれば、此所にて言はんと書きたるは、覺ある御身の手跡、夫ゆゑ道より歸りしが、川次郎が事ならば、聞くに及ばぬ捨置け」ト立行き給ふ袖をひかへ、「御歸るさを危しと、弟も申上げたれど、彼等ご

の、勝手次第に計らふべし、我は徒歩にて後より歸らん、大儀とばかり宣ひ捨て、其後何の仰もなし。申上げたき事ありと、今姉上の宣ひしも、其事にこそあらんずらめ、はや直々に言上あれ。乘物急げ」と空衣の、答も待たず過行きぬ。

やう〳〵明行く空の景色、繪に寫したる樣に思はれ、光氏は欄干に、打凭れて居給ふに、この住居は野の宮より、少し小高き所なれば、かの火焚家神樂殿、結廻らしたる柴垣の、内はさながら目の下にて、殘り止まる供人の、我庭顏に遊ぶも見ゆ。阿古木は言葉に出さねど、別れかねたる風情を悟り、さしも思はぬ事をさへ、情ありげに言續け、人の心を破らぬが、光氏の常なれば、世に隔なき中らひに、實を盡して語ひつゝ、別れんとし給ひしが、又立戻つて近く寄り、「言ふべき事聞く可き事、たまの逢瀨はいと多く、聞え洩しゝ事のあり、御身に仕へ馴れたれば、片貝をも根引して、共に伊勢へ下さんとて、其事旣に整ひしが、片貝は播磨の生れ、國に老いたる母のあり、此頃甚く煩ふ由、さあらば一先古鄕へ、歸りて母の介抱なし、全快なしたる其後に、跡より伊勢へ送らんと、事急なれば御身にも、逢はせず暇を取せたり。磯菜々々」と呼出し、「我は是より引離れ、母の便は其方のみ、おとなしやかに仕へよや。頓て逢はん」ト手をとらへ、さも懷しげに又暫し、休らひ給へば明けぬとの、鐘も幽に告渡り、風冷やかに打

覗けば、思ひがけ無き君吉なり。こはそもいかにといそがはしく、問へば答もいと忙しく、「川次郎の宅に於いて、喜代之助殿某を、密に招いて宣ふは、悴が今宵の體たらく、心得ぬ事のあり、我は酒に醉ひたる樣にて、程宜き頃に打臥すべし、汝も眠りし體にもてなし、心をつけよとありし故、空寐なすとは知らずして、川次郎は只一人、小門口より忍出づるを、何所へゆくかとしりに跟き、この野の宮の瑞籬の、内に入りたる夫までは、確に知れども月影の、闇き木蔭に見失ひ、つく〴〵思ふに我々が、留守を窺ふものならんと、我も住居へ立戻り、磯菜が目覺めし體なる故、忍んで來りし者ありやと、尋ぬれば小聲になり、そは光氏君に侍るなり、母樣が恥かし氣に、見えさせ給ふが氣の毒さ、知らず顏つくりしと、賢し氣に答へし間、夫にはあらずと問返さんも、無益と思ひてあなたの常に、打臥し給ふ一間に身を寄せ、能く〴〵聞けば川次郎、姉上と思ひ違へ、光氏君を惡しざまに、罵りたるが事顯れ、逃出したる眼ざし、所詮我も是までと、思ひ詰めたる其樣子、捨置き難く御前に出で、面は人に似たれども、心は獸に劣りたる、川次郎にあんなれば、己に一味の者を語ひ、狼藉なさんも圖り難し、恐れながら御駕籠にて、まづ某が御先へ戻り、さある時には差違へ、後の憂を除かんと、申上げても我君は、更に耳にも入れ給はず、何か阿古木と書交し、打笑ひなど爲給ひつゝ、望みとあらば其方

上げて置いたるが、近年はさいはひと、富徽様の御氣に入り、初は小菊といひたれど、妾は岩根と呼ぶ故に、流れて落つる白糸と、瀧の縁にて名をかへし、その又末は川次郎と、お名乘なさるも奇遇とやら。是より御身の落著は」ト又さゝやけば又點き、「あなたが此所へ奉公も、光氏が様子を探り、白糸まで知らせん爲とか。よし〳〵然らば此帶を、差上げてさいつ年、方違のその夜の事、又候今宵も喜代之助が、留守を窺ひ忍びしなんど、取繕ひて言上げなば、光氏は密夫の科。しかし夫まで此身を隱す」ト言ひかくれば岩根は打笑み、「富徽様の御差圖にて、忍んで在する其時は、たとへ夫と知れたりとも、光氏の手ざしは叶はぬ。私は暫しの傭人、衣類とても多からねば、此儘退かんも心安し。いざ諸共に、はや〳〵」ト勸められて川次郎、「胸の動悸は治まれど、をさまり難きは其人と、知らずに主人を飽くまで惡口、探出だされ憂き恥を、見んより先にも言ふ如く、討捨てて其場で切腹。其所退き給へ」ト口には言へども、岩根が勸めをさいはひと、そこ〳〵其場を逃げ去りけり。

此時に天女廟の、唐戸を開き立出る窣衣、思案に暮れつゝ吐息を吐き、茫然として打見やる、此方の小道を光氏が、戻りと思しく忍びの乘物、心せかれて人目も厭はず、すら〳〵と走り寄り、駕籠の前に手をつかへ、「申上げたき事のあり、ゆるさせ給へ」ト乘物の、戸を押明けて差

謀計に、命を落し給はんより、外に手段は種々あり。あなたは此所の捨子ぢやと、先程のお物語、若し夫が實なら、捨ててあつたはあの邊、三月二日戊の、辰の日で巳待の夜、年強の二ツばかりと、お聞傳へはなされぬか」ト問はれてほく／＼打點き、「しかありし由父の話。まづそれよりは差當る、光氏が憤、所詮我をば捨置くまじ。今言ふ處も理なきにあらねば、山名も迂濶に賴み難い。はてどうがな」ト思案の顏、岩根は月に透し見て、「後の印と其時に、添へて有つた其品は」ト又押返して尋ねられ、屈託さなかに最うるさく、「物語には印籠が、二重なんどと書いてあれど、子を捨てる程無慈悲な親が、道具をかたはにしもせまい。己には守も帶もなく、生木綿の著物に、くるんだばかりで光氏が、今にも追人を懸けたなら、ほろ／＼破れる菅笠の、中に捨てて有つたと話、其時こそは切死」ト夫と是とをひとつに言ひ、心も空にうろ／＼眼。岩根は膝をはたと打ち、「ヲヽ、それ／＼、證據なきこそ證據なれ。もうお案じ遊ばすな、是からあなたの身の上は」ト差寄つて耳に口、打さゝやけば川次郎、聞く度々に驚きつつ、「扨はあなたが實の母人、富徽の前の腹心なる、白糸はわが姉なりとか」「さればよ今更語るのも、面目無けれど夫に別れ、育み兼たる二人の子、情なくも御身を捨て、姉は十をも越したれば、兎も角もして二三年、養ふた後あたりなる、泥藏といふ人を賴み、晝顏樣へ奉公に、差

で胸撫摩り、そろり〳〵と刀を抜き、側の石に押懸り、寐刃を合する後より、「なう殿、様子は詳しく聞取りしが、かの諺に毒喰はゞ、皿を舐れと言ふ如く、今となつて光氏が、咎をうかうか待つよりも、忍び寄つて一打と、思召すのも御道理ながら、また御思案がお若い」ト聲懸けられて月影に、能く〳〵見れば名は知らねど、顔は確に覺ある、母が伊豫より上りし時、此所にて抱へし老女なり。わが胸中を悟りしれもの、助け置いては惡しかりなん、幸ひ刀の切味を、試みんとて切つくれば、身を開いて最前の、二筋の帯目先へ突付け、「光氏を不義者に、爲すべき證據の此帯を、今の騒のその紛れ、打忘れて置かれしを、持つて來たのが御力に、なるべき印に侍るぞ。急き給はずと御胸の中、斯く言ふ岩根に包みなく、明し給へ」ト言ひければ、打點いて刀を収め、「汝が推量なしたる如く、光氏の歸りを待受け、唯一刀に切つて捨て、妹が縁もあるなれば、山名を頼んで此身を隱し」ト半分聞きさし頭振をふり、「御思案がお若いと、申したは其所の事、宗全より〳〵謀反を企て、打つて出でんと思へども、光氏君にその手段を、挫かるゝ事度々なれば、人知れず光氏を、失はんと爲す處へ、其首提げ行かれしなば、喜んで隱匿んと、思ひ給ふぞ愚なる、直に御身に繩打つて、まづ斯く〳〵と訴へ出で、表面はつくる忠臣顔に、諸侍の氣を弛ませ、底の心は手も濡さず、まづ邪魔は拂ひしと、二道懸くる

覺は無いなどと、言張り給へばそれ此所に、暗うて確に見えまいが、あなたの帶と光氏の、帶を證據にかの明方、屛風に懸けしを奪取り、父に告げんと思ひしが、主人と義理ある母の事、折こそあらめと穩便に、心の中に治めしも、元はと言へば矢張あなたを、憎からず思ふから。この罪人は光氏ひとり、主人の威光で手込同然、是非なく操を破らせたに、違は無いも疾くより承知。兎に角憎いは光氏め。な、コレ申し、まァ其樣に俯いて、御頭から夜著をすつぽり、美くしいその御髮が、亂れませう」ト取除る、とたんに光氏手を延べて、縑の衣をかなぐれば、伏籠を洩れてはつとさす、火影に驚く川次郎。光氏は悠然と、「方違に宿りし夜、わが帶の失せたるを、訝しくこそ思ひしが、汝が隱して置きたるか」ト仰に答へん言葉も無く、遁れぬ處と川次郎、忍びの鍔元くつろぐる。夫には更に目も懸け給はず、屛風の陰を差覗き、「阿古木は定めて此程より、此所にて逢ひつる事もあらん、川次郎の來りしなれば、すこしも憚る事はなし。まだ言殘せし事もあり、是へ〱」ト近く招き、問ひつ問はれつしみ〴〵と、物語してにこ〱と、笑うて在するその顏ばせ、睨まるゝより怖ろしく、川次郎は色蒼ざめ、膝わなわなと齒の根もあはず、茫然として居たりしが、何思ひけん裏口より、逃出して遠くも走らず、かの野の宮の傍なる、辨天の祠の前に、佇みて邊を窺ひ、手水鉢の水汲上げ、一口飲

この城郭も千早振、神の宮居の搦手から、忍んで見れば案の如く、人らしいものとては、藁人形も邊に居ず。さて度々も申す通り、この川次郎はもと捨子、しかも此所の辨天の、祠の前で拾取り、養育はしたれども、血を分けた子でない故、己には似ざる不忠者と、親人の數度の意見。さて某が心にも、偏屈過ぎにお生付、あゝ血を分けぬ親なれば、是非が無いと思うて居る。夫に連添ふあなたは猶更、他人と他人で義理は無し、貞女兩夫に見えずとは、大昔の譬事、近い手本はかの光氏、親の愛妾藤の方と、忍びあひしといふ事は、今誰知らぬ者もない。その光氏は卽ち主人、上を見習ふ下とやら、して見れば某が、母人を慕ふのも、筋なき事には候まじ」ト、言ひつゝ摺寄り光氏が、手をとらへて撫さすり、「さて尋常に柔かさ、光氏が手も此樣に、きやしやであつたで先年は、母上と取違へ、面目を失ひしが、こゝらに居給ふ筈もなし。まづ〳〵此宵は夫は安堵。さて其夜さり村荻と、光氏は心得て、あなたの閨へ忍んだを、歸しもされず夜明まで、さすれば疵の付いたるお體、とても濡れたる袖とやら、露の情はかけ給へ。たとへ心に染まずとも、伊勢へ下るも纔の間。これ何故物は宣はぬ、頭振るのか點くのか、闇の烏の聲なくて、あゝとんとしやうどが無い」ト一人わくせく氣を揉みあせり、につこと笑つて打點き、風呂敷包取出し、「大事の事を忘れたり、いや〳〵妾は光氏と、不義した

十五編上

纈の衣を打懸けし、伏籠に手燭を覆ひしかば、朧々と人影の、ありとは知れてさだかにも、見分かねたる屏風の内、忍び男はそろ〳〵這寄り、「なう〳〵母上々々」と、光氏を揺覺せば、さては例の川次郎と、心づけどもをかしさを、堪へてやう〳〵目の覺めし、おもむきにもてなしつ、いよ〳〵夜著を引被ぐ、光氏が枕元、慄ふ膝節踏占めつゝ、川次郎近く寄り、「たとへ繼しき中なりとも、子として親に言寄るは、道に背くと知りながら、宿世に結びし縁ならん、去る年伊豫へ下られて、手に持つ玉を取られし心地、今一度の逢瀬もと、神に佛に頼みたる、心の通じて今度の上京、久しぶりにて御顔を、見るより募る煩惱の、犬とも譏れ猫にも喩へよ、あなた故なら惡名を、受けるが却つて此身の喜び。ねびまさり給へりと、かの昔物語に、書きしも斯くやいと若き、頃にも優りて一ッづつ、お年の增すほど嬋妍な、御顔には似ぬつれなさを、恨み言はんも邊に人目。されば親人、君吉を、近々伊勢へ下らるゝ、立饗應と我家へ招き、酒を盛りて盛つぶし、跡へ廻つた今宵の計略、あゝ我ながら近年の、楠とても及ぶまじ、

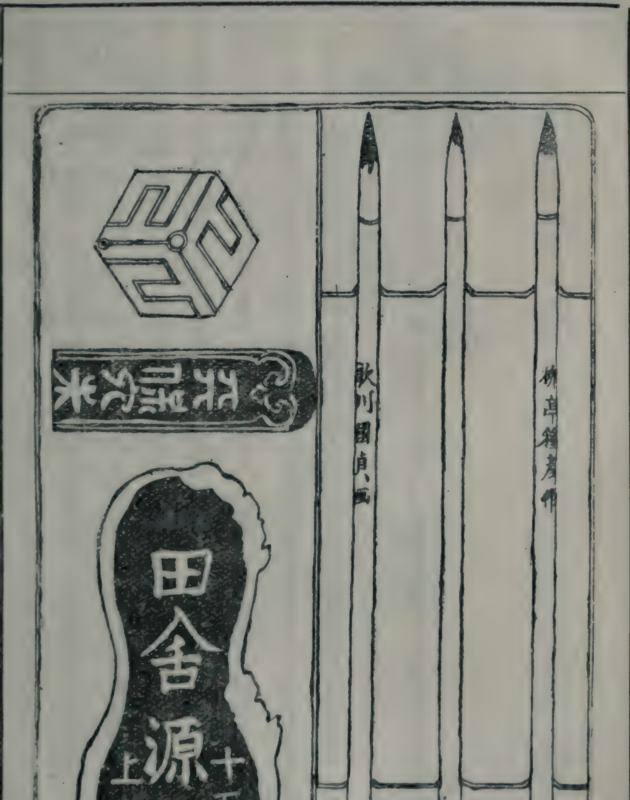

桂樹


足利光氏

偐紫田舎源氏第十五編序

倦かぬ物は菜汁、月夜に黒小袖、忠臣藏に源氏なれども、玉味噌では菜汁も喰へず、忠臣藏も下手にかたると、猪よりさきへいつさんに、聞人が迯出す鐵炮場、定九郎の名がついては、黒羽二重も木綿に劣れり。この源氏も其類にて、偐紫の和かな、表にはうつりのわるい、應仁記の隱し裏、仕立あげしは七年前。新しい時だにも、詞の艶なき田舎織、ましてや趣向の古著となり、彼の紫の色もあせ、そろ〱筋のきれかゝるを、十五編まで繼發行、色紙に書いて發句の贈答、てには違ひに揃はぬつじ褄、艶なる文を片言に、解分衣は赤ばみたる、黒小袖にも及ばずながら、是からすこし季がかはり、いつも月夜に須磨の卷、明石縮の夏ものに、移らば輕く筆も走らん。ちつとの間ぢやと衿垢の、殕を落さずその儘おきつ。

柳亭種彦


田舎源氏
十五編
上冊
歌川國貞画
柳亭種彦作
仙鶴堂

さすれば常より賑はしき、嵯峨野の錦を振捨てて、一夜は別るゝ番の蝶、神の忌垣を越え給ひ、此所へ御渡り遊ばしたを、何とて仇に思ふべき。取集めたる憂さ苛さも、その御詞に消えながら、愸ひに御顔を見て、又引別るゝ物思、空衣様が恨めしい。心に心をはぢしめて、もう御目には懸らぬと、諦めて居たものを、私には知らせもせず、いつの間にやら忍ばせ申し、かうくぢやとて岩根が知らせ。若しふた見屋のふた身なら、一人は伊勢の子に従ひ、一人は都の君の側、夫をも捨てず是にも離れず、仕様もやうは無い事か」ト思ひ亂れて伏沈み、心弱くも泣きにけり。月も雲に隱れしか、簾の隙より哀れなる、空を眺めて光氏は、吐息を吐いて居たりしが、誰とも知れず屛風の外へ、窺ひ寄る者のあり、透し見れば男なり。怪しと思ひて阿古木にさゝやき、側に忍ばせ光氏は、伏籠を取つて手燭を覆ひ、其身は夜著を引被ぎ、そら寢してこそ在しけれ。

埋れし、猶青やかなる故にこそ、神事には用ゆるならめ。我も亦その如く、風の吹く夜も音づれず、雨の降る日の徒然を、問慰めず隔つるとも、色は變らぬ心の誓、受取り給へ」ト言ひければ、阿古木はじつと打まもり、

　榊葉へ通ふとは見じ秋の風

と答ふれば光氏は、隔の簾引除けて、疊みし夜著に推凭り、阿古木の顏をつく〴〵眺め、

　野の錦捨てて榊へ蝶の來る

「香を懷しみと歌にも詠めり。かの六條に在りし時は、通ふにも心安しと、思へばさまでに懷しからず、却つて忘れし事もあり。然るに磯菜が事よりして、此所へ移住まはせて、後は喜代之助の前を恥ぢ、相逢ふ事もわが儘ならずと、愼むほど猶戀しさの、まさりこそすれいかでか劣らん。夫を榊の色なきに、其身を喩へて隔てしは、秋風なりとの歎言、怨めしさよ」ト口には言へど、二葉の上の影身に添ひ、患まし氣なる樣には引換へ、脇息に肱を凭せ、結びも止めよしたがひの、つまよと我が見返りたるを、思ひ出せばあはれも醒め、年こそ少し老けたれど、顏形は猶淸らにて、手は立竝ぶ者も無く、心も敏く生れながら、かの執念の深きこそ、上なき瑕瑾とも言ふべけれ。あな淺ましの女やと、打泣かるゝを此方には、實に慕ひ給ふかと、思ひ

噂、夫を夜更けてわざ〳〵と、此所へ御出遊ばすは、等閑ならぬ御心、夫を仇になされたら、磯菜様の御爲にも、悪しからうと空衣様が、くれ〴〵も御言傳。お顔をお直しなされるなら、お鏡をあげませう」ト、兎角扱ひ聞こゆれば、阿古木は床しさ懐しさ、飛立つ程に思へども、今は遊女の身にてもなし、浮世を思ひ離れしと、朝夕口には言ひながら、いと若々しと娘の磯菜、若し聞付けなば笑ひやせん、さればとて情なう、もてなし申すも道ならずと、氣強き樣でも猛からぬ、女心にとつおいつ、吐息つく〴〵猶豫ひしが、人の見る目を羞かしと、只此儘にしほたれて、いせをの蜑となり行かば、又白浪の立かへる、時をいつとか定むべき、笑はゞ笑へ言はゞ言へと、思ひきつて炷しめたる、伏籠の小袖引懸けつ、此方の一間へいざり出で、簾を隔てて蹲居たる、そのけはひいと心憎し。光氏わざと身をへりくだり、「伊勢へ下らば内宮外宮、宮巡りも爲給ふべし、さあらば愼み深からんと、穢れし此身を憚りて、疎々しく過行きしが、縁側の端ばかりは、許されんかと空衣が、言ひしにつきて來りしぞ」ト障子に凭れてしどけなう、衣紋も正さず居給へり。此時月は南に廻り、簾を漏れて華やかなる、影に姿の隈なく見え、にほひ更に似るもの無し。光氏はこの年月、打絶えたる事の由を、今更言はんも煩はしく、かの神垣の榊の枝を、いさゝか折りて持ちたりしを、簾の内へ差入れて、「時雨に濡れ雪に

はしく、憂身を歎つ生なるに、かゝる淋しき宮居に隣り、月日を隔てゝ我にも逢はず、嘸わびしくやありけんと、不圖はるか向ふを見るに、微に光のさしたるは、早百合が教へし火焚家ならんと、彼所へ立寄り見給ふに、此所には更に人氣もなく、果して折戸の入口あり、是こそ仁木の忍び門、夫よ〳〵と打點き、なほ火焚家の片陰に、立隱れて窺ふに、遊は皆止めたりけん、かの松風の吹合せし、調もいつの程にか途絶え、心憎く女の笑ふ、けはひなんど聞えけるが、夫さへもはや寢たりけん、打しづまりて音も無し。折こそ好けれと光氏は、足音忍んで立寄りつ、扉に佇み試みに、ほと〳〵と音なひければ、答は無くて内より開き、手燭を持つて出迎ふは、かの今參りの女ならん、岩根を傳ふ瀧の糸、黑き筋なき九十九髮、何とやらん見知ある、面ざしの老女かなと、打まもるとも彼方は知らず、「立煩はせ給はんと、心急くほど御遊の、常より今宵は夜も更けし。此所は人目も見苦しゝ、此方へ渡らせ給へ」とて、蟬の脱の空衣が、閨へ誘ひ入りければ、かの中川にて見し夢の、はかなかりしを思ひいで、光氏は默然と、物をも言はず居たりしかば、岩根は御前を直に退き、此方の一間に臥したる阿古木の、枕近く摺寄つて、「人傳の御便ばかり、もう御目に懸らぬとは、あまり一圖のお心とて、空衣樣が光氏君を、あれまでお招きなされたれば、早う御出遊ばしませ。近頃は世を憚り、御忍び歩きもなされぬ

やら顔を赧め、しとゝ汗に濡れて居た、其折と淸水で、逢うた時とは別の人、いよ〱世に馴れ何事も、能く言說くが姦ましく、言葉數の多い女、糺の事を杉生に、初告げしも彼が業、阿古木の事をもうか〱と、言はねば宜いが」ト座敷に戻り、「遁れぬ事の候」ト律師に頓て暇を乞ひ、上下の僧は更なり、米を炊ぎ柴を刈る、賤しき者に至るまで、それ〱に物を取らせ、尊き事の限を盡して、雲林院を出で給ひ、落つる日影と諸共に、西へ〱と遙なる、野邊を分入り給ひければ、猶物哀れの景色にて、秋の花は皆衰へ、淺茅が原も枯々なる、蟲の音の幽なるに、松風凄く吹合せて、その琴とも聞分け難き、糸の音色の絕え〲に、聞えたるもいと艶なり。彼こそ阿古木の爪音にて、仁木の隱家なるらめと、日は疾くに暮果てたれど、月影に透し見れば、實に荒果てたる小家にて、野の宮の西に隣り、北の方へ押廻し、茅もて葺ける門のあり。斯樣に哀れに面白き、所にてあんなる上、嵯峨より近き道なるを、など今までは來ざりしかと、過つる方の悔しうおもほえ、猶そこら打廻り、宮居の體を眺むるに、前には黑木の鳥居を立て、物はかな氣なる小柴を束ね、外の園の垣となし、彼方此方にかりそめなる、板屋を造り設けしは、飛驒の匠が手を盡しゝ、社よりは尊く見え、神々しくぞ拜まれける。禰宜、巫の類ならん、おのがどち集りつゝ、其所此所に打咳き、物言交すも能く聞ゆ。光氏は歎息なし、阿古木は常さへ物思

明日とあわたゞしく、旅の用意の調度の類、そこら邊へ取散し、僅の中の假住なれば、修繕もせず間數もなし、さればとて立ちながらと、申すもあまり本意なさに、幸ひに明後日はと、一昨日の言葉なれば、今日夕方より喜代之助、君吉を誘うて、川次郎が家に招かれ、ふた夜さばかりの泊りがけ、されば今宵は御心を、置かせらるゝ者は無し、野の宮へ御參籠と、御供の者には觸流され、あれまで御出遊ばして、宵遊の琴の音の、止むを合圖に社より、西の南に離れたる、庭燎を焚く火焚家とか、申す宮の後の折戸を、音づれ給はゞ都にて、この頃抱へし岩根といふ、老女に豫て心得させ、妾は閨より辷り出で、畏れながらその跡へ、密に誘ひ申させなば、外へは洩れん樣も無し、阿古木の心の和ぐ樣、一夜はしめ〴〵語ひ給へと、申しました」ト空衣が、長物語を落もなく、言述れば光氏點き、「吹かふ風も程近き、嵯峨の館に在りながら、かの野の宮に今まで詣でず、彼が恨むも道理なり。直樣是より彼所へ行かん」ト仰に早百合は打喜び、「左樣なら御出の趣、空衣には文にて知らせ、稻舟樣も御待兼、私は直樣に、是より糺へ歸りませう。是はしたり何より先に、申上げねばならぬ密事、いよ〳〵包む事なれば」ト近々と摺寄るにぞ、さては山名の事なるかと、光氏も身を寄せて、聞けば早百合は聲を潛め、「綾汗が宜しう」ト、につこり笑うて歸りけり。光氏も微笑みつ、「中川で我を扇ぎ、氣詰りな

烏丸、通り懸つた其時に、夏野々々と昔の名を、呼懸けられて振返れば、前度勤めた奥方空衣、やれお久しやと私が、立戻ると密なる、茶屋の奥へ呼入れて、空衣の申されまするは、先頃途にて逢ひし時、今は糺の御館に、勤めて居ると其方の話、夫なら定めて光氏君に、度々おん目に懸るであらう、なんと嵯峨の御館へ、使に行てはたもらぬかと、初よりして六條の、阿古木の事を備に語り、野中の里の別荘より、野の宮へ迎取り、近々伊勢へ發足と、定めしまではさいつ頃、文にておしらせ申したれど、此上の詳しい事は、どうも筆には書取兼る、其方は知つて居る通り、御方達の其夜さり、村荻と詐つたで、妾の閨へ御忍び、人に疑受けたる身が、空衣に侍ると、あからさまに名を名乘り、嵯峨へはどうも上りにくい、私に代つて直々に、申上げてくれよと頼。阿古木ぬしは伊勢路への、下りが近うなるにつけ、心細氣に物案じ、ときめき給ふを羨ましく、日頃思ひし二葉樣、失せ給ひたる其後に、我も君とは從弟どち、氏もさまでに劣ねば、ゆく〳〵は御本妻にも、備る心にありしかど、夫よりはかきたえて、つれなき君が御待遇、扨は彼の我一念の、怪しき事ども見給ひて、實に憂しと思すかと、自らも思ひ諦め、かつは磯菜も見捨て難く、只管に出立ち給ふ、お心とはなりたれど、せめては別に今一度、物越しばかりの對面はと、人知れず待聞え、給はる樣もあはれなれば、御入を願はんにも、はや今日

の嬋妍さは、此山寺に光を添へ、佛の面目ありなんどと、怪しの法師ばらまでも、喜び合うて其日もはや、西に傾く七ッ下り、嵯峨よりの御返事と、使に來たるは早百合なり。まづ光氏は文箱を取上げ、打開いて見給ふに、白き色紙に、

風吹けばまづぞ亂れぬ蜘の糸

むかしは小玉の手蹟に似て、艶なく見えしが朝夕に、書かはしゝかば我筆の、運を覺えて今少し、媚かしき處あり、「女には是も好からん、いと美し」ト ひとりごち、微笑みて居給ひしが、頓て袂に取隱し、「思ひがけなく何として、此所へは來りし」ト仰に早百合は手をつかへ、「申上げたき事ありて、御館へ上りし處、此程是に御渡りと、言の葉が物語り、その御返りを紫樣が、御認め遊ばして、御使の出ると聞き、これさいはひと妾が、申し乞ひて御跡を慕ひ、參りましたは深い樣子、人無き所でひそやかに」「さあらば此方へ」ト内陣の、格子の内に早百合を伴ひ、「聞召して在するは、御厨子の内の本尊ばかり、元よりも慈悲深き、佛の心にあんなれば、外へは洩し給ふまじ、心おき無く言うたが宜い」ト打戯れて宣へば、早百合も少し笑を含み、閻魔の前ならみる目かぐ鼻、めつたに油斷はならねども、此所にはそんな物も無し、木魚の口が差出ても、ほく〳〵と言ふばかり、人に告げても解るまい。一昨日の夕暮方、塒を急ぐ

違ひ、この騒に打紛れ、其日は空しく暮れけるにぞ、供の人は大方歸し、心に任せぬ浮世ぞと、
つく〴〵思ひ續くるに、歸らん事の懶くて、二三日留り居るに、哀れなる事いと多かり。庭
に媚く女郎花、まだうつろふとも見えざるに、山の紅葉は氣色立ち、野分めきて落し來る、風
身に染みてあわたゞしく、柳の葉の飜るゝさへ、所がらにや世の常無き、敎も思ひ出でられ
つ。まだ明果てず月影の、白みて殘る頃よりして、法師ばらは皆起出で、佛に閼伽を奉らんと、
花皿から〳〵と鳴しつゝ、菊の花の濃き薄き、紅葉など折散し、立廻るも餘所目には、果敢なく
見ゆれど御佛に、仕ふまつるを營みと、思ひ入る身は朝夕に、馴れて此世も寂しからず、はた
後の世は取分けて、賴もし氣なる有様を、羨ましとは思へども、ゆかりの色の心に懸り、且世
の亂の近からんと、捨果て難き身を悔みつ、思はず此所に留りて、夜を隔つれば紫の、心元な
く思ひやせんと、陸奥紙に打解けて、書き給へる文の奥に、
淺茅生の露は置きてか夜の嵐
いと烈しきに靜なる、心は無きなど細なるを、近習の武士に言付けて、密に嵯峨の館へ送り、
さて學問に長けたる法師の、ある限り召出して、論義をせさせて聞き給ひ、自らも六十卷と、
言慣したる天台の、書を披いて讀み給ひ、その覺束なき所々、說かせなどして在します、御姿

めんため、どうなる事かと今までは、大體案じて居りました」ト言ひつゝ立つて櫛笥を取出し、「久しぶりにてあげますから、御心持がお惡からう。御氣を御採み遊ばすで、御持病のお逆上が、一倍強く御髮が熱り、此まアお頭垢の出來た事は」ト髮結上ぐる其中に、光氏は藤の方の、かの書置を案より、取下して見給ふに、人目を忍び書き給へば、繕ひも無き走筆、常よりも猶あてやかに、氣高く思ひなさるゝは、父の手筋を受繼がれし、故にやあらんと稍しばし、打眺めて在せしが、恥かしき事悲しき事、人には包む事のみなれば、仇し浮名も斯く消えよと、燈明の火に打翳せば、灰となりてぞ飛散りける。かゝる處へ春若丸、遊びあきてや立戻り、「こは兄上」トおとなしく、手をつかふれば光氏も、いと懷かしげに言葉を懸け、人の聞えを憚れば、夫とは無しに藤の方を、いよ〳〵諫めこしらへて、春若丸を相輿に、乘するも過あらせじ爲と、心に言はせ目に敎へ、「能く心得よ杉生」ト、猶さま〴〵に氣を配り、事なく治めて藤の方を、東山へぞ歸しける。

そも〳〵此雲林院に、久しく籠りて在する律師は、光氏が母花桐の、ゆかりの人にてありける間、既に先にも言ふ如く、光氏しば〳〵此寺へ、詣しはこの緣に依れり。今日も亦杉生が、文の知らせを幸ひに、此所に來りて藤の方と、諸共に經を讀み、御佛を拜まんと、思ひしとは事

いたるに、唐戸を開けて膽太く、忍込んだるいたづら者と、言ひさま件のわが扇、兩手に摑んで要もばら〳〵、涙飜して顏色も、變るばかりにありける由、其座に親しき者ありて、告越したる故詳しく知れり。其後に桂樹は、髮は島田に結あげながら、振の袂に袈裟を懸け、拂子を離さず佛門に、入りしは故ある事なるを、我を慕へど忍び逢ふ、便なければ世を恨み、夫より發りし菩提心と、富徽の前は思ひ違へ、怒強くて某を、亡はんの心あり。さればいよ〳〵桂樹に、戀慕の樣にもてなさば、必定父へ讒言されん、其時を程好くはかり、我身都を立去るべし。かゝれば是まで母上に、仇し浮名を負せたれど、夫までもなく父上の、勘氣を受けんはいと易し。はや是までにて御顏を、我も見じ光氏よと、假にも言葉を懸け給ふな。氣色立ちたる中なりとも、隔つる上にも隔てなば、元より淸き心の顯れ、次第に浮名は言消さん」ト愚の筆には書取り難き、道理を正し理を責めて、說示し給ふにぞ、藤の方はやう〳〵に、思止まる氣色にて、亂れし衣紋を搔繕ひ、「女の愚痴なる心から、只一筋に思ひ詰め、恐しやあなたにまで、御難儀を懸くる處、仰に隨ひ春若の、爲を思ひて此上に、まだどの樣な憂き事の、我身の上に重るとも、今日の樣に我儘な、事は是ぎり愼しむ程に、御堪忍遊ばせや。人の見ぬ間に杉生は、此髮をあげてたも」ト聞いて胸を撫下し、「夫なら譯の無い事と、落付顏に申したは、御心を慰

して其事は、御意遊ばさぬが御疑ひ、なされぬといふ確な證據。なァ申し光氏樣」ト目まぜを心得進み寄り、「命を我に賜れと、願ひしは宗全に、不義の體を見せたる上、其座で切腹なさんがため。父の慈愛に其時は、惜しからざりし命を助かり、今つく〴〵と案ずれば、死すべき心更に無く、命が大事になりました。申さば臆病未練者と、御さげすみもあらんなれど、宗全がていたらく、いよ〳〵謀反に疑なし。其時こそは兄上の、力となるが人の道、能く〳〵道理を聞分け給へ。光氏は道に背き、父の愛妾藤の方に、忍び逢ひしといふ浮名の、誰言ふと無く聞えなば、夫を落度に我と我が、身を退きて敵を防ぐ、備も密に爲すべきが、母上此所にて御自害か、又髮を切り立退かれ、いよ〳〵不義に定まる時は、何とて某安閑と、命をながらへ居らるべきか。夫のみならず春若の、身の爲にも惡しからん。かの白糸をいぶせく思さば、追退けんはいと易し。富徽の前の妬に當る、桂樹といふ女、顏形は醜からず、心も賢き方ながら、いと蓮葉にて仇めく性、花の宴のその夜さり、我思はずも細殿にて、彼に逢見し事のあり、明行く空のあわたゞしく、扇を取換へ歸りし跡へ、富徽の前の來給ひて、彼扇をふつと見出し、忍び男は某と、いふ事を推量し、大方ならず打腹立ち、過つる年も政則が、娘二葉を義尚の、妻になさんと思ひしに、光氏樣に婚姻し、今又妬の桂樹を、その代にと思ふから、館へ引取置

も知り、面目無さに斯くなる由、書置して自害せば、愍ひに生存へて、憂目を見んより亡人と、なつての後の惡名は、斯程につらくはあるまいと、覺悟極めて居たりしが」ト言ひつゝ件の扇を取上げ、「春若の顏見たら、ありし辛さも忘られて、妾は死なれぬ死なれませぬ。未練ながらも髪を切り、河内の國道明寺に、知邊のあれば彼所へ立越え、影を隱して生存ふる、程は憂けれど行廻り、又春若に逢ふ事も、ありなんものと愚なる、心に果敢なき頼み事。斯くなり行くもその昔、山名が妾へ言寄りし、文の返事に尼になる、此身の願と僞りし、佛の罰で御座りませう。只今も申した通り、此書置に光氏と、忍逢ひたる身の罪を、今更懺悔後悔して、雲林院の佛前にて、形を變へたと羞かしい、つゆ覺無き事までも、認めて置きましたれば、御望は叶ひませう。今切捨つる此髪と、その書置を杉生に、持たせて御歸し遊ばして、父上の御不興を、お受け遊ばせ光氏様」ト兩袖顏に押當てて、聲を忍んで居たりけり。杉生ほつと息をつき、「御心狹いも程がある、何の夫なら譯ない事、白糸は宗全へ、あなたの素性を告知らせ、既に奪取らせんと、巧し者といふ事は、彼が密書を私が、人丸の社にて、拾ひ取つて差上げて、義正君は能く御存じ、其事が叶はぬ故、あなたを種々惡ざまに、言なすと思召し、おつしやる通り白糸が、光氏様の御噂を、大聲上げて言ふのは繁々、御耳へ入つたに違ひは無けれど、聞かぬ振

ぜぬ杉生も、心亂れて只うろ〳〵。光氏二人を押隔て、「御懷劍は某が、此所へ取つて置いたれば、もう立騒ぐ事はない。世を背き給ふには、深い樣子のある事ならん、御法體は愚の事、品によりなば御自害でも、お止め申さず御介錯に、罷立ち候べし。まづ母上の御胸の中、承はらん」ト進み寄る。藤の方はあはれなる、氣色に其邊を打見廻し、春若丸が捨置きたる、扇に蛇と目をとゞめ、暫く物も言はざりしが、やう〳〵に顏を上げ、「過つる年御庭の、人丸の祠にて、命をくれよとあなたの御頼、その命を今此所に、捨てんと思ひ極めても、絆となるは此扇、世に怪しみを受くるのは、豫ての覺悟の事ながら、年頃よりして御心の、いちはやき富徽の前、取分けて此頃は、その景色いと怖ろしう、室町へ行く度々に、煩はしき事宣ひしが、猶夫にても慊らずや、かの宗全を忍ばせし、長櫃を持來りし、白糸といふ女を、君の御機嫌伺ひと、東山へ日毎の使、春若君のあてやかさ、光氏樣に其儘の、夫の是のと腰元の、女をとらへて高談、君の御耳へ入れがしに、二人の浮名が言募られ、その苦しさはいかばかり。元より曇の無い事は、杉生も知つてなれば、言譯するのは易けれど、夫では折角父上の、御憎しみを受けられて、あなたが都を立退かん、御企の妨と、口惜いやら悲しいやら、ぢつと辛抱したれども、もうどうも堪へかね、命をくれよのお頼は、此所ぞとふつと心づき、光氏と不義したる、其事今は人





十四編下

藤の方は春若の、遊び相手に假托けて、邊の人を皆遠避け、文細々と書認め、花案の上に置き、念佛衆生攝取不捨と打のべて行ひつ、頓て懷劒取出し、さも美しく結揚げたる、髮振亂して根元より、押切らんと爲給へば、光氏つゝと走出で、「物に狂はせ給ふか」ト、懷劍持つ手をしつかと執る。杉生も一間にて、此場の體を窺ひしが、あなやとあわつるそのはづみ、倒るゝ障子と諸共に、轉び出でて縋りつき、「此頃は後の世の、事のみ思す御有樣、ものごと哀れの行を、しめやかに爲給ふは、心ならずと光氏樣を、御招き申して置いたれば、事の樣子が私にも、おつしやりにくく思召さば、あなたへ御話しなされませ。斯樣に俄に思ひ立ち、尼におなりなされうとは、今若君の仰の通り、あなたは御氣が違うてか」ト言はれていよ〳〵淚に暮れ、「老衰へしといふにもあらず、ましてや夫のある此身、人にも言はず我儘に、髮を切るのは狂氣とも、言ふはさら〳〵無理ならねど、何の是が今始めて、思ひ立つた事であらうぞ。御佛に申して置いた、言葉が立たぬ此所離して、妾が願を叶へてたべ」「いえ〳〵左樣はなりませぬ」ト物に動

口元目元是も亦、藤の實生は紫の、かの面ざしに其儘にて、喩はゞ蟬の脱殼と、實の蟬を見る如く、打笑む時は口の中、黑みて少し朽ちたる齒の、見ゆるもいとゞ愛らしく、女になさば宜からんと、思ほゆるまで淸らかなり。藤の方は氣を取直し、まだ辨も無き者に、詮無き事を言聞かせし、人も見つけば疑はんと、種々慰めこしらへつ、「あの廣庭でこまどりして、

今の子とろ〳〵を、中昔まではこまどりとも、雀の子取ともいふ。源氏の君、韻塞ぎを爲給ふ條に、左右にこまどりに、片わかせ給へりとあるは、此事にはあらざれど、左右に別れて、人の竝ぶ事にて、其名の似通ひたり。

遊んでおぢや」ト勸れば、機嫌直して春若丸、腰元どもを引連れて、表へ立出で給ひけり。

（十四編下冊表紙裏に）

上の巻に見えたる篇つきに、くさ〴〵の說あり。此ごとく字のつくりのみ出して、此篇いかにと問ふとき、亻にて修、氵にて源の字なりと、はやく答ふるを勝とする、たはぶれをいふとぞ。又一說、書を開きて、何篇の字にても、はやく見つけたる數の多少をもて、勝負とするともあり。篇突篇築など書けるは假字にて、篇繼なるべしといへり。

我袖にて打覆ひ、猶身を潛めて光氏は、事の樣を窺ふに、若君の御入ぞと、表の方ざゝめき渡り、腰元司を供に引連れ、春若丸は急しげに、此方のかたへ走り來れる、袴の著なし衣紋つき、いと美しうおとなびて、見ゆれど年の足らはねば、母と見るより珍しう、嬉しと覺えてひたく\〵と、むつれ寄り取縋り、舌は廻れど片言交り、何かあどなき物語、膝に上りて懷へ、手を差入れて微笑む顏、包むとすれど藤の方、我を忘れてほろく\〵と、翻るゝ涙押拭ひ、「君の御側を離れかね、室町へ行かぬ故、其方の方から東山へ、御機嫌を伺ひに、來やつた時に逢ふばかり、顏見る事は今日までも、稀々なりしが是よりは、猶とりわけて遠避り、久しく逢はぬ其中に、妾が姿の醜く變り、そして若しも逢ふたなら、御身は如何思ふぞ」ト、問掛けられて母の顏、つれづれと打まもり、「水原の樣に母樣が、どうしておなりなされませう」ト打笑みて宣へば、言ひがひなくも哀にて、「なに言やるしども無い、あの水原は年寄りて、夫で醜うなつたのぢや。彼よりは此髮も短く、身には黑い物を著て、今玄關へ取次に、出た僧の樣になると、もう打絕えて逢はれぬ」ト抱寄せて泣き給へば、若君はつと打驚き、「是からいくつ寢すると、東山へ行くのぢやと、指を折りては夫を樂み、久しく逢はぬと戀しいものを。そんな事は止めてたべ」ト涙落つれば武士の、樣でも無いと言はれんかと、人見ぬ方へ背くる顏、髮ゆらく\〵と美しく、

れば、うるさく思ひ給ふもあなた、又まへどからお子の樣に、思召しておいでゆゑ、便に思すもやつぱりあなた。御思案なされて下さりませ。豫て知召す如く、音川の館にて、御誕生の若君は、室町御所にて御養育、御方は富徽の前と、顔合するが苦しいと、たま〳〵ならでは室町へ、渡り給へる事は無し。夫故に若君に、御逢ひなさるもほんの稀々。常々から春若丸と、どうぞひとつに住みたいと、被仰るのも御尤、御氣慰めにもならうかと、御迎を上げましたれば、押附御出で御座りませう。あなたをば私が、折を見合せ密やかに、御前へ御連れ申します。まづ餘所ながら物思はしき、御顔を御覽遊ばせ」ト、聞く度々に胸潰れ、事の仔細は知らねども、我より起りし事ならんと、光氏しば〳〵吐息をつき、杉生が案内にて、屛風の陰に立隠れ、藤の方の體を見るに、實に彼が言ひしに違はず、案じ姿に打俛頭れし、額つきの淸らなるに、綠の髮の二筋三筋、態とならず亂れ懸り、簪、頭つき、衣紋の懸りに至るまで、かの紫の面影に、つゆ違ふ處なく、別の人とも思ほえず。常さへ氣高うつゝましきに、ましてや佛に念じ入り、用意深くとりなして、更に媚めく樣は無し。御前の花案には、唐大和の錦を覆ひ、經卷の玉の軸は、御燈の光に輝き、いろ〳〵の旗天蓋は、香の烟に靡くが如し。總ての飾世に亡き樣に、調へられしは眞の極樂おもひ遣られ、あないみじや尊やと、言はんとせしがわが口を、

て、雲林院に籠らせ給ひ、今日結願の日にてあり、人少なる折なれば、密に逢はせ參らせん、秋の野も見給ひながら、彼所へ渡らせ給へとあり。光氏は眉を顰め、杉生が我許へ、直に文を送りしすら、怪しき事に思ひしに、此文體はいよ〳〵訝し。敵を欺る僞にもせよ、母とも頼む其人に、しげ〳〵近附き給ふなと、中をさけたる藤の方に、わざ〳〵おのれが導きして、逢はするには仔細ぞあらん。さいはひなるかな彼寺は、我も常に往通ひ、法文なんど問聞きし、親しき法師の多くあれば、二三日彼所に泊らん。言置くまでにはあらざれども、留守の間は紫を、言慰めよと言の葉に、聞え置きて例の如く、供人も多く連れず、雲林院に詣で給ひ、靜に案内を請はせければ、杉生は出迎ひ、人無き所へ誘ひ參らせ、「文にて申上げたる通り、お心ざしとか御祈願とか、御願ひなされて此所に三日、御籠りなされた御方の、御樣子をつく〴〵と、見上げ申すに泣々の、事ではどうか無ささうな。まづ一體此春から、御胸に障ると御肴へは、假にも御箸をお附けなさらず、數珠爪繰りて朝晩の、御看經が何よりの、御慰みの樣に見え、お好なお琴に手も觸れ給はず、世を憂きものと思ひ捨て、若しもの事でもあらうかと、人にも言はれぬ心遣ひ、此所の律師をお頼みなされ、御授戒ありしは昨日の夕暮。いよ〳〵合點がゆかぬ故、此所へ招き參らせしは、品に依つたら御方へ、御意見も願ひたさ。浮名の立ちしお中な

ふりぬるは年と涙ぞ春ながら
と答ふる聲は小毬なり。おほよその歎なるべき事にはあらじ。

葵の巻をはり。是より榊の巻の俤に綴り、花散里の巻もこのうちに籠る。

足らはぬ事なき身にさへも、世の憂き事は絶えやらず、阿古木を打捨て置かんには、かの妻まじき怨の増り、夕霧丸の身にや報ひん。さればとて今更に、對面せんも恐しき、心地せられて光氏は、いとあはれ氣に書きなしゝ、文にて時々音づれつゝ、籠り勝にて室町へも、たまさかならでは出仕せず。人の目よりは心に任せ、打遊ぶ樣にもてなし、例の山名の體を窺ひ、兄義尙の政治の事など、心を配りて春も過ぎ、夏もたちまち秋風と、吹替りつゝ薄散り、萩は飜れて菊の花、咲出づる頃とぞなりにける。空衣は朝夕に、阿古木が機嫌を能く取りつ、去年の秋には伊勢の國へ、下らんと言ひつるも、一月延び二月延び、兎にも角にも定まらぬ、心癖にて一年過ぎ、紅葉もやう〳〵色めく頃、時雨の先にふり捨てて、都を立たんに取極め、其由を告げしかば、光氏いよ〳〵心安く、ある朝霧のいと深きが、次第々々に霽れ行く景色、目馴れし庭も珍らしく、欄干に肱を凭せ、打眺めて在する處へ、杉生の文なりとて、言の葉が持來れり。あら珍らし、何事をか告越しよと、まづ開きて見給ふに、藤の方此程より、御志の事ありと

賑はしくはなりつれど、また思出づる事のみ多しと、妻小毬は御目見に、罷出でず候」ト、目をしばたゝけば光氏も、何と言はん言葉も無く、そこ〳〵に立上り、二葉の上の住馴れし、座敷の方へ入り給へば、當吉中垣人々も、珍らしう見奉り、忍びあえず泣くもあり。光氏は夕霧丸を、膝に載せて打まもれば、はや智慧づきて笑ひ勝に、餘念なきのもあはれにて、屏風褥も二葉の上の、在りしに變らずしつらへて、衣桁には光氏に、參らすべき小袖羽織を、打懸けてはありながら、女のが竝ばぬが、とりわけて物淋しく、襖に畫きし鴛鴦も、思ひなしにや打しをたれ、初春ながら暖かに、池の氷の解渡り、水際の柳の靡くばかり、時を忘れぬ景色など、見る物毎に哀れなれば、言少なに光氏は、立出でんと爲給へば、中垣は手をつかへ、「年毎の例に習ひ、御服を仕立置きたれども、月頃の涙にて、色合も無く侍らんが、やつ〳〵しくとも今日ばかりは、召させ給へと小毬が、申しまする」ト取おろす、上著下著の織樣色合、世の常ならず爲盡したるを、引襲ねて著せ換へれば、若し今日此所へ立寄らずは、嘸小毬の怨むべきに、能くこそ來つれと心に思ひ、衣紋正して光氏が、

　降るは涙立つは霞か色衣

と吟じ給へば襖の此方に、

めて解けかゝる、霜降月のすゑつかた、仁木君吉御目見を、願ふ由を取次の、腰元が申すにぞ、それ此方へと召寄せ給ひ、「川次郎は止りて、當地に居れども其方は、喜代之助と諸共に、先年伊豫へ下りし故、打絶えて對面せず、文を結びし村荻の、使に遣りし儘にてあり、前髪取りて男形、見違へる程成人せし。定めて姉と諸共に、上りてならん」ト宣へば、君吉は額を摺付け、「何か仔細は存ぜねど、仰に依りて喜代之助、伊勢路へ赴き候間、伊豫の住居を取片付け、殘り無く爲終りて、後より上り候樣、申すに任せ某は、當月なかばにやう／＼到着、夫故御機嫌伺ひも、遲なはり候なり。是はあら／＼しき絹ながら、本國の名產とて、姉空衣より奉り候なり」ト卷絹を、臺に載せて恭しく、御前に差置けば、光氏は親しげに、過來し方の物語、酒賜りて君吉を、歸しゝ後にかの絹を、打開き給ひければ、御直覽と記したる、文を卷籠め置いたりけり。取上げて見給ふに、阿古木が心やう／＼解け、磯菜もろとも野の宮へ、迎取り侍るに、空衣の手蹟にて、事短く書きてあり。光氏大きに安堵なし、是よりしては物語る、事も無くて年も返りぬ。元旦には例の如く、室町へ出仕なし、東山へ參り給ひて、戻り道には赤松の、館へ立寄り給ひければ、政則急ぎ出迎へ、新らしき年とも言はず、むかしの事ども聞え出で、「內君過行き給ひしかば、世は春ながらいと寂しく、館の內は春にも似ず、君の渡らせ給へるにて、

に、誰がいつの間に爲出でけん、白銀の皿の中に、小さき餅を盛りたるを、屏風の外へ押遣りて、華足の上に載せてあり。つく〴〵と打まもり、下樣の婚禮にも、三ッ目には里づかひ、餅を送るは世の習慣。一昨日昨日紫樣に、羞かし氣の添ひたるも、是にぞ思合さるゝ。かくと傳聞き給はゞ、遊佐の殿の御安心、わけては冥土に在します、小玉樣のお喜び、にこ〳〵お笑ひ遊ばす御顏が、見える樣なと吐息をつき、嬉しきにもまづ打泣かれぬ。

後の心にくらぶれば、昔あはれと思ひたる、夫は數にもあらざりけり。光氏は斯くて後、室町の宿直だに、さぞ紫の侍わびんと、思へば心も靜ならず、一夜隔つもわびしきは、宿世よりして定まりし、緣にやあらんと我ながら、あやしの心と思ふまで、離れがたなきのみならず、富徽の前は杵樹が、佛門に入つたるも、光氏が唆し、其事遂げざる故なりと、思ひ違へて日頃に倍し、憎しと思ひ聞え給ふ、その由を水原より、密に告越したりければ、忍び歩きもつゝましう、只懶しとて引籠りつ、今は憚る事にもあらねば、遊佐國助の娘なりと、世に知らせて紫に、鐵漿を含ませ披露せんと、その用意など爲給へど、紫は有難き、事ともさまで思ひとらず、父とも兄とも打頼み、戯れ遊びし頃よりは、心置かるゝ風情にて、顏もさやかに見合せず、打側み居る有樣を、實に若々しき心やと、をかしうもいとほしうも、思ひながらに心長く、言慰

心得果てて立出でぬ。光氏は跡を見遣り、「此頃までも辨へなき、童にてありけるが、いつの程にか浮世に交り、物馴れたる言ひざまや」ト、ひとり言してまた元の、座敷へ戻れば紫は、つと脇へ立退きつ、昨日に變りてむれもつれ、親しみ寄らねば光氏も、機嫌を取兼ねこしらへわび、初めて盗み來りし時の、心地するのもいとをかしく、此所に泊りて次の日も、東の住居へ立歸らず。其夜甚う更けて後、惟吉は宣ひし、餅を造りて夫となく、古き禮を人に問ひ、銀箔押したる土器に、盛りて携へ來りしが、杉折割籠は俄ゆゑ、調ひ難くて其邊を見れば、御厨子に香合の箱のあり。手を懸けんは憚あり、さはさりながら羞しとて、若し言の葉には今宵の事を、包み給へる事もやと、妹の小辨を喚出でて、「御厨子の棚に重ねたる、その箱取りて給はれ」ト、件の餅を内に納め、「是は密に御枕元へ、參らすべき祝の物、人には沙汰し給ふな」ト、言へども小辨はまだ若く、かゝる儀式も知らざれば、怪し氣に差覗き、「小な餅が四ツ五ツ、是がなぜ又夫程に、大事な物で御座ります。此御華足はぐら〳〵して、覆りさうな」ト立つのを押止め、「これ、かへるとは忌言葉、横に寐るとか御華足が、おしづまるとか言ふが好い」ト教へてもまだ氣のつかぬ、小辨は靜に御寢間の屛風、押開けて件の餅を、差入れたるを知る人なく、夜明けて後に言の葉は、はや御目覺の體なれば、まづ御機嫌を伺はんと、御枕近く摺寄る

まだ若々しき振舞やと、思ふも更に憎からず、打まもり居る其折から、亥の子の餅を美しき、割籠に盛りて恭しく、小辨が捧げ出でたりけり。光氏夫と差圖して、紫の前に据ゑさせ、「今日は十月亥の日にて、定まれる儀式ながら、二葉に別れて某は、まだ服の内といひ、且赤松への聞えもあれば、其事は無くて止みぬ。夫は只御身ばかりの、祝に設けさせたるなれば、きこしめして女どもへ、分ちて取らせ給ふべし」ト、言ひつゝ南の縁に立出で、「惟吉々々」ト呼び給へば、はつと答へて立出づるを、膝元へ近く招き、「汝手づから餅を造り、明日の夜密に持て參れ、今宵の如く數々を、盛るには及ばぬ心得て、人に知らする事なかれ。今日は一日まだ早い」ト、打微笑みて宣ふ御氣色、惟吉は心とく、推したりけん手をつかへ、「まだ御服の内なれば、表立ちての御祝儀ならず、密に持ての仰の趣、委細承知仕る。今日は亥の子明日は子の子、御婚禮の三日目には、ゆきあひの餅を送るが、今の世の習慣なれば、古き禮にもある事ならん。さては内々日を選み、ゆかりの君とねの子の餅の、數は何程奉らん」ト、まめだち申せば光氏點き、「三ッか一ッかにてもあらん」ト聞いて惟吉小首を傾け、「三ッか一ッ」ト三分一の事にもあるまじ、ヲヽそれ〳〵、片田舎の者なんどが、七日と云ふ事を忌みて、六日一日といふに等しく、三ッと五ッの其間の、數を忌みて三ッに一ッ、添へて持てよと宣ふならんと、

が御氣に障る、事でも何ぞおつしやつてか。さうならさうと其譯を、お話しなさると私が、あなたのかはりに光氏樣を、屹度叱つて上げます」ト、寄れば寄る程衣引被き、打臥し給ふ手を取りて、「是は又怪しからぬ、何した事かと皆の者が、怪しんで居ります」ト衣著引除けて抱起せば、身うちは汗に押浸し、額髮も甚う濡れたり。言の葉猶も打微笑み、「御巨燵の今日は開初、目出度日ぢやにいみ〲しい、おむづかりでもなさつた樣な。お手水を召しまして、御膳が濟んだらお好な碁で、小辨を又いつもの樣に、負してお遣り遊ばしませ。」其中お髮はあげませう」ト、さま〲こしらへ聞ゆれど、紫は只うつとりと、心に染まぬ中ならねど、親とも兄とも此年月、賴みしものを今更に、改まりたる心地して、人は知らじと思へども、顏見らるゝも恥かしく、憂くも辛くも種々に、思ひ亂れし秋萩の、露の答もし給はねば、言の葉わざと角角しく、「曲るとやら拗るとやら、其樣に御氣むづかしい、所を御覽なされたら、光氏樣がヲヽよしく〲、夫ならもう逢ふまいとて、此所へは御出なさるまい。御機嫌お直し遊ばせ」ト、多くの女打集り、其日はひと日紫を、とり〲に慰めつ。日くれて後に光氏も、又此方へ渡り來て、まだ解け難く打側む、紫が體を悟り、常より親しく言葉を懸け、硯の箱を開き見るに、返しと思しき物は無し。されども書いて入置きたる、發句は披きて見たりけん、結びし文は解きてあり。

ぬ氣色にて、只光氏を親の如く、兄の如くに親しみ寄り、碁打偏つき貝覆ひ、元より果敢なき戯れ事の、その中にも卑しき事なく、續ぐ切る延るの法を守り、偏つきの字を見るに目早く、出し貝取り貝打亂さず、夫も是も美しき、筋を仕出で給ひければ、光氏も只初めの程は、あどなき事を愛でたりしに、今はなかなか似合しからぬ、年の程いふにもあらねば、枯れし二葉に一本を、植代へて眺めんの、心面に顯れけるを、言の葉は早くも見て取り、嬉しき中にも紫が、只遊にのみ日を暮し、夜は他愛なく宵より眠り、物淋しとて光氏の、例の忍びて出で給ひ、二葉の上に立代る、人の又もや出來んかと、更に心の安からず、夜は御足などまゐりながら、浮世語に笑を催し、兎角して光氏を、館に暫時留置きけり。

かくて或日、光氏は早く起出で、跡に紫打臥して、更に音せぬ朝あり。言の葉小辨其外の、腰元どもも心得ぬ、事に思ひて打囁き、もし御心地や常ならぬと、案じつゝも紫の、閨を密に窺へど、させる樣子も更に見えず。光氏は何やらん、筆早く書いたる文を、硯の箱の内に入れ、かの紫が起出でぬ、屛風の内へ差入れて、常の住居へ立歸りつ。兎角なす間に冬の日の、はや晝頃となりしかば、言の葉はそろそろと、枕の邊へ差寄りて、紫を差覗き、「お目は疾から覺めて居て、御氣合の悪いといふ、御顏持にも見えぬのに、なぜおひるなりなされませぬ。光氏樣

十四編上

その次の日光氏は、室町へ出仕なし、東山へ赴きつ、父兄の機嫌を伺ひ、又嵯峨に引籠り、絕えて人にも對面せず。されば是まで忍び〳〵に、通ひ給ひし所より、恨めし氣に書續けし、文にて度々驚かし、聞ゆるも多かりけり。その中にはいとをしと、思し給ふも無きにはあらねど、あはれに果敢なき事を見て、心を痛めし故ならん、いと懶くて惱ましく、日數過ぎなば歎も忘れん、其後行きて見ゆべしと、いづれへも答へつゝ、過し給へば言の葉は、二葉の上の世を早く、去頃過行き給ひしを、悲しき事には思ふものから、是より後は紫を、内君よとて人人の、册くならんと賴もしく、小辨にも言含め、ありしよりなほ紫へ、重々しげに仕へつゝ、「御鐵漿を含み給ひ、御髮の島田をも、丸髷にあげ直さば、猶愛らしく見え給はん。いつか吉日に侍らん」ト、氣色ばみたる事なんど、折々聞えて試みつ、鼠の嫁入の繪草紙を、御前に取寄せて、「三々九度の式作法、程なく此所は御腹帶、御座も輕く若樣を、擧けて末は宮參り、あなたも目出度〳〵に、早うおなり遊ばせ」ト、勸められても紫は、婚禮の事などは、見も知り給は


空衣


阿古木

偐紫田舎源氏第十四編序

十月の牡丹餅何に、板疊、意は、亥に喰ひ子に喰ひ、とは昔々の謎語なり。さて此編は彼子の子の餅、三箇の大事の一ッにて、楊名之介、宿直袋、赤本作者の知る事ならねど、略きては筋が解らず。かの謎から案じつき、亥の子の翌の子のこと晒落、宿直袋は深川の、名札のつきし痲風呂敷、さて吉原の仕舞札、身あがりしても誰樣と、當無き客の名を書くこそ、楊名之介ならめと、たしかにもうけ給はらで、物なれのさまには作れど、當れる說は三ッに一ッもなくて四册に綴りしが、かう數々にところせきさまして既に十四編。予が面なきは露知らぬ、板元はあいぎやうの、初のこゝろに日擇して、賣出すも最をこがまし。

天保乙未春　　　　柳亭種彦


田舎源氏
第十四編上冊
仙鶴堂梓
國貞画
種彦作

言ひながら、小き屏風を引除けて、つらく〵まもり給ひければ、紫は恥らひつ、打萎みて在する様、只かの叔母上藤の方に、つゆ違ふ處なし。言の葉は御夜食の、御膳を頓て御前に持出で、「御やつれの見え給ふは、久しき間の御精進、夫故にや侍らん、はや御日柄も立ちたれば」ト、春ならねども櫻鯛、鱸は松にゆかりある、目出度物のみ取揃へ、さま〴〵進め參らせけり。

へば、燈火消えて薄暗く、御前に侍ふ人々も、何とやらん心細く、野邊送より隙ありし、袖ども濡ひ渡りぬるに、光氏君は取分けてと、御心を察しけん、中垣が夕霧丸を、乳母に抱かせ参らせて、「父君へ御暇乞」ト、御側へ差付くれば、何心なき笑顔の、その美しきに光氏は、歎を忘れ立出でけり。

既に嵯峨の館にて、今日なん歸り給へると、御先觸のありしかば、書院座敷を拂ひ磨き、男女の立集ひ、今や〳〵と待聞え、ざゞめき渡るその所へ、光氏は歸り着き、乗物より立出づれば、手に手に手燭を携へて、迎へに出でたる女ども、我も〳〵と衣裝を飾り、櫛笄の玳瑁は、火影の映りて目ばゆきまで、金銀輝く平元結、兵庫勝山折柳、その程々に結あげし、髪には梅が香を散し、いづれも清氣に化粧しつ、竝居るを見るにつけ、かの赤松の腰元ども、毛卷束の色も無く、悲しき事のみ繰返し、言續けてはさと打泣き、そゞろ寒き夕の景色の、あはれなりしを思出で、西の亭へ渡り給ふに、更衣の晴にとて、皆新らしく仕立てけん、若き腰元童まで、姿を見よく整へて、鮮かに出立ちつ。紫は取分けて、美しう引繕ひ、在するを見給ひて、光氏少し心を慰め、「思ひもかけぬ事どもにて、久しう逢はざる其中に、思ひなしか丈も高く、大人らしうなりたるぞ。小袖の色は言の葉が、好にこそありつらめ、縫模樣の風流さ、心憎し」ト

に出でやらず、政則ひとり立廻り、「さあらば君のおいでの中に」ト、女どもを呼集め、二葉の上の衣服調度、形見に分與へければ、光氏は其心を察し、そゞろ悲しく其邊を見るに、當吉は親も無く、幼き時より仕へ馴れ、一入不便を受けたればと、髪を切りていと小く、締束ねしもあはれに見え、其外とても一樣の、島田に結びしばかりにて、櫛笄の飾もなく、皆一列の白小袖、人多き程猶淋しく、ありしに變る有樣を、打まもりて目をしばたゝき、「二葉の上は世を逝りぬ。物淋しとて御身等まで、ちり〴〵に暇を乞ひ、別れ行きなば政則夫婦、我も力の無くならん。是より幼なき人を見捨てず、心長く守立てて、くれるが二葉へ追善ぞ」ト、不圖燈火を眺れば、目のうち濡れて見え給ふに、實の心顯れて、ありあふ人々皆打泣き、腰元どもは言葉を揃へ、「たとへ御暇賜るとも、此御館を退かん、心は更に侍らず。只是よりはあなた樣の、御出の間遠にならんかと、夫が悲しう侍る」ト、言はれて光氏打點き、「いよ〳〵絕えず訪はん、その印には夕霧丸、此所の夫婦に預け置く」ト言ひつゝ顧み給ひければ、障子は殘らず開通り、二葉の上の住馴れし、座敷までも能く見えつ、屛風脇息褥まで、むかしの儘にありながら、其人のみは空蟬の、空しき心地し給ひて、立煩ひて在せしが、氣を取直して立出でつ、駕籠に乘らんと爲す時しも、折知り顏なる村時雨、さら〳〵と打濺ぎ、木の葉を誘ふ風の音、あわたゞしく吹拂

も名をば名乘らずして、只今是を持參り、其使は直樣に、立歸りて候」ト、差置くを見給へば、今や開かんとする菊の枝に、短冊を結付けたり。

　聞くもあはれ後るゝ人の袖の露

と、いと優に書なしゝは、疑ひもなき阿古木の筆なり。二葉の上は定まりし、命數なりとは言ひしかど、まざ〳〵と其靈の、移りしを見たりしかば、あなつれなのとぶらひや、心憂しとて傍に差置き、かの勅筆の短冊の、故を知らねば若々しき、振舞なりと人も言ひ、終に浮名を流さんかと、思ひ亂るゝ顏色を、見上げて苦しく高直が、常の如くにをかしき事、眞實なる事取交ぜて、物語に打紛らし、さま〴〵慰め聞ゆれども、兎に角に果々は、哀れに果敢なき世語に、移りては吐息をつき、「此頃風をやひきたりけん、頭痛く候」ト言紛らして立行きけり。兎角なす間に秋もたち、冬の初になりにけり。ある夕暮の事なりしが、光氏の言ひけるは、「わが忌は疾くに果てぬ。されども立日まではとて、この館に留りつ。夫を過ぎても七日々々の、佛事の事に取紛れ、思はず日數を重ねたれば、父君兄上方々も、心元なく思されん。今宵は一まづ嵯峨へ歸り、衣服を改め明日は、室町へ出仕せん」ト、暇を乞はせ給ふにぞ、小毬は此頃の、風に誘ふ木の葉より、脆き涙に咽びつゝ、又悲しさの改まり、例の如くに沈み入り、御前





暮惑ふ、その有樣を道理ぞと、見るにいよ〳〵胸塞り、そゞろに空を打眺め、

　昇りぬる煙か曇る月の影

と呟きながら赤松の、館にやう〳〵歸り著き、枕は取れど眠られず。近頃心も解懸り、猶行末は睦ましく、語はんと思ひしが、夫も詮なくなりしかと、數珠取出して手を合せ、「法界三昧普賢大士」ト、經文を靜やかに、打誦して居給ふ樣、行ひ馴れたる法師より、猶尊くぞ見えたりける。夫よりも光氏は、此所に泊りて嵯峨へも歸らず、心深く思ひ焦れ、まめやかに跡を弔ひ、夕霧丸を見給ひて、かゝる絆のなかりせば、髪を切り衣を染め、菩提の道に入らばやと、打歎きつゝふと小玉の、言ひたる事を思ひ出で、嘸此頃は紫が、淋しくやあらんかと、思ひ亂るる折もあり。夜は屏風を立廻らし、只一人打臥しつ、宿直の人はその邊に、近々とありながら、何とやらん傍淋しく、佛間には念佛の聲、曉方は殊更に、秋の哀れも增り行く、風の音のみ身に染みて、寐覺勝に明しかね、西の窓の障子を開き、高欄に押懸り、霧深く立渡る、朝ぼらけの空の氣色を、打眺めて在するに、風荒らかに吹來り、村雨驟に降出でて、はら〳〵と袖に懸れば、「雨とやなりけん雲とやなりけん、今は知らじ」トひとりごち、面杖突きて居給ふ樣、見捨てて過ぎし女の魂、必ず止りなんかしと、打まもられて高直は、御前ににじり寄り、「誰と

の夫よりも、猶淺まし氣に泣まどひ、姉もなく、妹もなく、娘は一人なるをすら、年頃淋しく思ひしが、是よりいかに爲すべきと、沈み入りて起きも上がらず。政則も日に増して、二葉の上の惱も薄く、なり行き給ふを見るからに、斯くては本腹遠からじと、心に頼みし上なれば、殊更にあわてながら、老少不定は是非なしと、小毬を叱り勵し、香を盛り華を手向け、定まる佛事の用意なんど、せさせんとしたりしが、小毬初め女ども、只管に押止め、「是まで度々物怪の、業にて息も絶々に、見えさせ給ひし事もあり、夫だにも退かば、蘇生り給はんか」ト、人のいふに隨ひて、いかめしき祈禱ども、殘る事なく仕盡して、枕なども二三日は、其儘に爲し置きけるが、次第々々に面影の、變り行き給ひければ、今は更にせん方なく、鳥邊野にぞ送りける。我子ながらも主人の内君、政則も御供しつ、此方彼方の御送り、寺々よりは念佛の、僧ども多く集りて、廣き野に所なし、夜もすがら嚴しき、儀式に罵り騷げども、果敢なき屍となりたる人を、思へばいとゞ光氏は、夢の如くに立歸る、曉深き道の邊の、草葉の露は先立ちて、もとの雫の後るゝも、終には消ゆる習なり、歎くまじとは觀ずれど、かの黄昏一人の外、かゝる事を見給はねば、類も無げに思ひ焦れ、駕籠にも乘らず行艱み、茫然として立止る。其日は八月廿餘日、打曇りたる有明の、空の景色も哀れさまさり、口に言はねど政則が、子故の闇に

其方を思ひ、此所を片時離れねば、心無しとや思はんかと、其前を憚りて、隔てて住むはいと苦し。はや安らかに子は生みぬ、心強く思ひなし、本復ありて褥を並べ、常の居間に住まふ樣、早くなりて給はれ」ト、懇に聞え置き、いと淸げに衣服を整へ、立出て給ふを二葉の上、常よりも目をとゞめ、見送りて臥し給へり。其日左衛門政則も、引續きて室町の、御所へ出仕したりしが、九月にならば九日に、菊合や催さん、十三日にはそれ〴〵にて、月見の遊やなさんなど、とり〴〵の評議にて、政則も歸り難く、光氏ととも〴〵に、その夜は御所にぞ止りける。

赤松の館には、人少にてしめやかなる、夜半ばかりの事なりけん、二葉の上は顏色變り、俄に例の胸を堰上げ、いと甚う苦しむにぞ、室町へ人を馳する、其程もなく絶入り給ひぬ。足を空に誰々も、駈戻りしが事敗れし、その後なれば途方を失ひ、素より祈禱の僧どもを、請ずべき暇もなく、只館の内の者、騷ぎあわてて柱に當り、疊に躓き駈廻り、ところ〴〵の御見舞と、使者は大勢立籠めども、誰取次ぐ者もあらず。その詮もなき魂招ひ、女の泣く聲みち〳〵て、怖しきまでに見ゆ。不具なる子をさへも、親は惡しと思はぬが、すべて浮世の慣なり、まして斯くまで顏形、打揃ひたる子を先立て、小毬更に正體なく、袖の上にて愛でたりし、玉の櫛笥

宣へば打心得、直に產屋へ誘ひ參らせ、二葉の上に打對ひ、「御顏ばせの窶れしを、耻かしと思召す、夫はあまりに若々し、御子までお擧けなされし御中、さア御逢ひ遊ばせ」ト、中垣が屏風を開け、光氏を押入るれば、此程絕えし物語、いろ〳〵聞え給ふにぞ、二葉の上も時々に、打答へなどする聲の、いと弱氣には聞ゆれど、はや亡人と見えたる姿を、思へば夢の心地して、「去頃御身が某に、言ふ事ありと此所へ招き、言葉もなくて打臥したる、其時はつと胸塞り、心亂れて後の世の、契の事さへ聞えしが、今更思へばいみ〳〵し」ト宣ひながらかの息も、絕々にありけるが、引返して脇息引寄せ、につこり打笑み惡さげに、物言懸けし事どもを、思ひ出して心憂く、「まだ物語はさま〴〵あれど、何をいうても久しき惱、疲に殘りてたゆげなれば、夫は重ねてゆる〳〵聞えん。藥の絕間なき樣に、怠らずまゐられよ」ト、心をつけて勞りつ、立出でんとしたりしが、振返つてつく〴〵見るに、人に勝りて嬋妍なる、姿の甚う弱り果て、有るか無きかの氣色にて、打臥し給へる其樣の、何とやらん苦し氣にて、亂れたる筋もなく、髮はら〳〵と枕の上に、飜れかゝるも淸らかなれば、何に足らざる事ありて、年頃さまで睦ましく、語はざりし我心の、怪しきまでに打まもられ、「東山の御機嫌を、伺ひて疾く歸らん。斯樣に朝夕御身の側に、附添ひ居らば我心の、安からんとは思へども、小毬は只幼き、子の如く

け、空に亂るゝ我魂を、結び止めよと打怨みし、其顔ばせはまだ目にありて、對面せんも怖し。御身明けなば阿古木の許へ、わが文を持行きて、猶も心を宥めてくれ」ト頓て料紙硯を取寄せ、二葉の産後の惱み烈しく、例の赤松夫婦の者、傍を離れねば、我もさすがに振捨てて、立出で難き事なんど、細々と書いたる末に、

我は戀路に身もそぼつを
袖濡るゝそれはあざみの早苗かな

巻收めて渡し給へば、空衣は心得つ、隱家へこそ歸りけれ。

二葉の上は衰へし、姿を恥ぢて光氏に、夫より對面し給はず。頃しも秋の半にて、若君生れ給ひしは、霧深く立籠めたる、夕暮にてありければ、夕霧丸とぞ名附けける。御顏ばせの美しさ、光氏君の御誕生の、其折につゆ違はず。我ほど好き婚を取り、我ほど好き孫を擧けし、武士は都にあらじとて、政則の喜びは、更に喩へん樣もなし。されども未だ二葉の上、全快なしといふにもあらねば、是のみ心に掛りけれど、いと甚う惱みたる、その疲にあるべき間、頓て爽ぎ給ふべしと、さのみは深く案じわびず、産の穢に憚るべき、日數も早く過ぎにしかば、光氏は今日初めて、室町へ赴かんと、中垣を近く呼び、しかぐ\の由を語り、「二葉に對面爲させよ」ト、

なし、まづ是へ移られてと、言慰めしにやう〳〵と、阿古木の心打解けて、九月にならば磯菜を連れ、參らう程にあの子の事、よしなに賴むと言ひながら、膝の邊の團扇を取り、我魂の浮れ出で、いつとても赤松の、館へ行く其時は、此團扇を手に持ちて、此身に懸る護摩の煙を、打拂ひなどしたりしが、けしを焚くその薰の、是へも止りて燻りたり、あまりに苦しめ給ふなと、君の御目にかくる樣、言づかりては歸りたれど、妾が伊豫より歸りしは、人に知らさぬ事なれば、仁木の妻とは名乘り難く、此頃途にて昔の腰元、夏野に逢ひしが今程は、稻舟樣に仕へ參らせ、早百合といふ由聞置きしを、思出して赤松の、此お館には妾の顏、知る者なきをさいはひに、糺よりのお使と、似つこらし氣な詐事。これ御覽遊ばせ」ト、阿古木が手馴れしかの團扇を、取出せば光氏は、燈火を近付け能く視るに、實に空衣が言ひしに違はず、驗者が彼を調ぜんとて、焚いたるけしの香染透り、ところ〴〵焦げたるに、

　袖濡るゝとは知りながら早苗かな

と、書きたる手蹟の美しさは、多くの人に勝れたれど、黃昏が投節の、をかしかりしに引換へて、此團扇は手に觸るゝもうたてく、彼所へ打捨て吐息をつき、是より阿古木を訪はざる時は、かの勅筆の短冊を、渡しゝ故と却つて恨み、一葉の爲にも惡しからん、とあつて最前我を引付

覺し、私に申す樣、今赤松の館にて、二葉の上の御產あり、しかも男の御子なりと、人々の喜び騒ぎ、儀式作法のいかめしく、賑しきその樣子、豫てはいとも危しと、言聞えしを平かにと、思へば心も只ならず、覺れば此所に在りながら、眠れば彼所へ往通ひ、我にもあらぬわが心地を、つく〲思ひ續くるに、これ見給へや此樣に、寐卷は護摩の煙に色付き、けしの匂の身に染みて、怪しき事のみ多ければ、髮を洗ひ寐卷を著換へ、試み侍れどまどろめば、猶幾度もその如し。我身ながらも疎ましきを、ましてや人の口の端に、掛らん事の恥かしやと、人には言はでくよ〲と、心ひとつに打歎けば、現か夢か定めかね、いとゞ亂れし妾が心、思遣りて給はれと、言掛けて打驚き、今若君との問はず語、名乘り出でんも恥かしさ、勅筆の短冊を、御目に掛けしが其中に、祈禱の僧ども姦しく、讀經なしゝに驚かれ、そのまゝ歸りし口惜さよ、年もふけて色香なき、此身を折々光氏君、是まで訪はせ給ひしは、眞を見せてかの短冊、取戻さんとのお心とは、知つて居ながら浮々と、夫を渡し參らせては、いよ〲逢瀬は絕果てんと、猶狂はしき樣なるを、私が押鎭め、憚りながらお心の、夫は僻に侍らん、あなた大事と思へばこそ、磯菜樣の事までも、くれ〲との御賴、まづ御言葉に隨はれ、喜代之助の下屋敷、かの野の宮と押竝び、紫野の中なれば、寂しき所に侍れど、世を忍ぶには人目も

祈念なしけるが、それかれの加護にやよりけん、後の物も平かに、事なり果てて思ひしより、悩ましき氣色もなく、生れし御子は殊更に、健かに見えければ、丹精凝し祈りたる、驗者は護摩の壇を下り、經卷を巻納め、したり顔に汗押拭ひ、急ぎ其所を退きつ。今まで心を盡したる、多くの人も安堵なし、二葉の上の御心地は、是より爽ぎ侍らんと、打擧りてぞ壽きける。兎角なす間に日は暮れぬ、五つの時計の響く頃、腰元使のひとりの女、光氏の前に手を突き、「只今糺の御館より、名を早百合とかいふ女中、若君様へ直々に、申上げたき事ありとて、あれに控へて居ります」ト聞いて、小首を打傾け、「何用有りて來りしか、心得難き事にぞある。此方へ呼べ」ト靜なる、一間へ招き見給へば、早百合にあらぬ空衣なり。思ひがけずと言はんとせしが、深き樣子のある事ならんと、思返して打笑ひ、「稲舟よりの使なるか、近う／＼」ト傍の、女どもを遠ざくれば、空衣はしとやかに、「先以まして内君には、安々と御喜び、御血心もあらせられず、男御子にて在すれば、殊更の御滿悦」ト言ふにいよ／＼不審晴れず、「二葉が安產せし事だに、御身の知らん筈はなし、殊に男子といふ事は、何者か告げたりけん」ト宣へば聲を潛め、「阿古木を何卒言宥め、少しも早く野の宮の、下屋敷へ連行かんと、今日もまた野中の里の、別莊へ音づれしが、阿古木は窓に打凭れ、前後も知らで臥してあり、暫くあつて目を

石面伏、「これ見給へ」ト懐より、取出したる錦の袋、光氏手に取り押開けば、阿古木が肌身を離さゞる、かの勅筆の短冊なり。さてはといよ〳〵怖げ立ち、見れば姿も蓮葉にて、膝も崩れ衣紋も亂れ、屏風へ背中を打持たせ、背引上げ此方を見遣り、「此内君の御惱は、受けて生れし天の命數、弱目に乘りては來れども、我が苦しめるばかりにあらず。夫に驗者を呼集め、妾が命を絶たんとは、道にあらねば驗はなし、疾く〳〵思ひ止り給へ。まだ末久しき壽を、己が怨に縮めなば、祈らせ給ふまでもなく、天の咎地の罰にて、此身も安穩なるべきや。妾が命のあるをもて、妾が業にあらざる事は、知召し給へや」ト怒の面色あらはれて、いと高らかに言ひければ、只淺ましとは世の常なり、人や近う來らんかと、光氏心も心ならず。かの祈禱の僧どもは、此騷がしきを洩聞きけん、また同音に讀經しつ、護摩の壇には鈴の響。「あな姦しや」ト兩手にて、耳を塞いで、二葉の上、夜著にもたれて俯伏し倒れ、少し聲もしづまれば、物怪の退きたるやと、小毬手づから藥を持寄り、かき起して介抱すれば、いよ〳〵その氣著るく、程なく安々産み給ひぬ。嬉しと覺す事限りなく、總て館は搖るばかり、皆々喜びざゞめきけり。されども久しく打惱み、病に疲れし上なれば、後座の事心元なく、政則夫婦はあるとあらゆる、神に佛に願を懸け、光氏は玉兎の鏡に、かの勅筆の短冊を、取添へて臺に据置き、心に

の世に長く添遂げん。親となり子となるは、殊更深き契ぞや、政則小毬夫婦にも、これぎり對面なきにはあらず、廻り〳〵て逢見る事も、ありなんものと心安く、思ひなし給へや」ト言慰むれば顔打振り、「いゝや妾は死にはせじ、今はや息も絶々の、有樣にもてなして、君を此所へ招きしは、あまりに強く祈られて、いと苦しきを暫時が程、休めんとての詐事。これ見給へ」トつと立つて、更に疲れし體もなく、裳をあつめ姿を繕ひ、轉びし脇息引起し、肱付もたせてにつこと笑ひ、「この所まで夜毎日毎、來らん心は無けれども、起きても寐ても物思ふ、誠に人の魂は、あくがれ出づる物になん」ト、さも懷し氣に言ひながら、邊見廻し息を吐き、

歎きわび空に亂るゝ我魂を結びとゞめよしたがひのつま

と、吟ずる聲なら姿なら、二葉の上とは思はれず、變りし樣のいと怪しと、能く〳〵思ひ廻らせば、只かの阿古木に紛れなし。あら淺ましや先つ頃、彼が我に言ひたるは、此所に仕ふる女の中に、阿古木が親しき者ありて、樣子を尋ね印とすべき、釋を奪はせて、さもあり氣に某を、驚かするにやあらんかと、一度は疑ひしが、今眼前にあり〳〵と、かゝる不思議を見るものかな、あな疎ましと思ひながら、猶もそしらぬ風情にて、「さ言ふは二葉に附添ひし、物怪と覺えたり、抑御身は誰なるぞ、確に言ひて聞かせよ」ト問はれて片頬に笑を含み、「名乘るも流

覺悟して、わが亡き跡の事どもを、聞え置くにやあらんずらめ。親には包む事をさへ、語りかはすは夫婦の情、此所に在りては氣も置かれんと、心に思ひて小毬に、目配しつゝ諸共に、次の間に立出づれば、祈禱の法師も皆退き、聲を鎭めて法華經を、讀み居る樣はなほ尊し。光氏は近く寄り、「邊に憚る人もなし、何事にもあれ宣へ」ト、言ひつゝつく〴〵打見るに、いと長くふさやかなる、髪をひとつに束ねて引結ひ、白き單衣に白き帶、姿にひかれて夫さへも、色ある衣より華やかにて、腹はいと高う脹み、打惱みて臥したる樣、ゆかりなき人だにも、此體を打見なば、あはれと思ひて心も亂れん、ましてや若き時よりして、親の結びし妹脊中、悲しさ喩へん方もなく、心地惑ひて蹲居たる、光氏の袖をとらへ、「あな苦し。心憂き目を見せ給ふ、怨めしさよ」トばかりにて、物もえ言はず泣き給ふ。常には行儀正しくし、恥かし氣にもてなして、我袖を引寄する、事なんどは爲ざりしが、あら訝しと光氏は、心に思ひて摺寄る顔、いとたよ〳〵と打見上げ、涙はら〳〵飜るゝ樣を、見るにいよ〳〵胸塞り、あまりに痛く泣きければ、所詮亡き身と覺悟して、跡へ殘れる親達の、歎を思ひ且は又、我に名殘を惜むかと、思へば胸も張裂くる、涙呑込み光氏が、「何事にもせよ深く案じ、氣を痛むるは病の障、御身はさまでの煩ならず、頓て本復し給はん。假令いかなる事ありとも、必ず心に懸け給ふな、あ

其事を打囁き、野中の里へ室衣を、遣して見せ給ふに、阿古木は重き病にあらねど、そこはかとなく煩ひて、只しどもなく怪しき事を、一人つぶやきほけ〳〵と、心浮れて定まらず、打惱みてある由を、仁木より告越しければ、光氏もせん術なく、思はず月日を過しけり。

二葉の上の御産には、まだ程もあらんとて、御物怪の事をのみ、館の者は打案じ、油斷してありけるが、俄にその氣色ありて、打惱み給ひければ、政則夫婦はいふも更なり、人々もあわて惑ひ、かの御祈禱の法師ばらは、今こそ殊に御大事と、護摩壇に上るもあり、經卷を披くもあり、おの〳〵法のあらん限り、丹精を盡しに盡して、責懸け〳〵祈りけれど、例の執念き物怪ひとつ、更に動く氣色なきは、世に珍らしき靈なるかなと、名高き驗者も持惱みぬ。されど斯くまで調ぜられ、少しは御身を退きしか、今まで心苦し氣に、打臥し居たる二葉の上、面を上げて目を開き、「あら姦しの般若聲、光氏君に申したき、事の數々侍るなり。久しく惱みて聲も嗄れ、騷がしうては言ふ事も、御聞取れ遊ばすまい、暫し祈禱を止めさせて」ト宣へば政則小毬、打心得て立廻らす、屏風の内へ光氏を、頓て誘ひ參らすれば、二葉の上ははら〳〵と、落つる涙を搔拭ひ、さも懷し氣におん顏を、見遣りながらに物をも言はず、息も絶ゆ氣に俯伏し倒れ、今を限りの有樣を、見るに目も暮れ心も消え、流石の政則氣も亂れ、さてこそ二葉は

十三編 下

二葉の上の日毎の苦しみ、阿古木の怨といふ事を、館の者は知らざれども、生靈の業なりとは、その樣著く顯れければ、世に知られたる驗者を多く、赤松政則招き寄せ、しか〴〵の由を告げ、祈禱の事ども賴みければ、驗者はおの〳〵口を揃へ、「さばかり執ねき生靈は、容易くは退かず、あなたを調じて命を取り、此方を助け參らするが、是法の習慣なり」とて、頓て護摩の壇を構へ、北に向けて本尊を懸け、荆棘のある華を供じ、男木女木の燃立つ中に、けわんのけしを打燻れば、その薫一間に滿ち、火は飛散り煙は闇く、振立つる鈴の音、凛々と響き渡り、いかなる天魔の所爲なりとも、降伏すべくぞ見えたりける。光氏一人は阿古木の思と、確に知りてはありながら、夢に浮れて通ふと言ひし、かの魂の此所にやあらんと、物語るのも怖しく、今又護摩の法力にて、命を絶たば執念の、いよ〳〵まさりて忽ちに、二葉を冥途へ誘ひやせんと、心の中には思へども、止むるにも止め難く、紫野の野の宮へ、阿古木を早く移し遣り、空衣を附置きて、磯菜を厚く勞りなば、彼が心の解けもやせんと、喜代之助を密に招き、

はありながら只一言、母と呼ばせし事もなく、年頃萬憂きといふ、憂きは此身に積みたれど、斯くまでつらく悲しき事は、今まで覺え侍らずト、涙に其身も浮くばかり、歎けば聞き居る光氏は、あはれとも怖しとも、心地惑ひて默然と、差俯いてありけるが、兎にも角にも言宥め、阿古木が心の和ぐ時は、二葉の上の煩は、自然と平癒なすべしと、言葉を盡し理を盡し、さま〴〵に言諭し、思ひの外に秋の夜も、明くるに近き鐘の聲、さらばとて別を告げ、立出で給ふ朝ぼらけに、此所は人目もあらざれば、阿古木は髪をも取上げず、亂れし姿の儘ながら、片貝に手を引かれし、枝折の戸口へ立出づつ、駕籠をつらせて徒路より、歸らせ給ふ御有様、つれづれと打見送り、なほ振離れて伊勢の國へ、下らん事は思ひ返し、只うつかりと佇みけり。

き人の、いと淸らにて在する所へ、行くかと思へば常々に、變りて心猛々しく、かの內君を引寄せて、打かなぐる事度々なり。この曉に見し夢も、彼所へ行きて內君の、顏つれ〴〵と眺むれば、頻りに嫉く又例の、ひたふる心起り來て、襟髮取つて膝に押付け、ひきまさぐると思ひしが、妾が袖に內君の、插し給ひし簪の、引かゝりて傍へ、からりと落つる音に驚き、目覺めて見れば夢なれど、その簪はこれ此所の、枕のもとに現にあり。是にて侍る」と取出すを、光氏手に取り打見れば、二葉が好みのかざし草、疑ひもなく夫なれば、身の毛よだつて物をも言はず。阿古木は又も淚に暮れ、「思ひより外なる物は心にて、此身を捨てて我魂の、彼所に浮れ行きつるか、現ともなき折々の、あるを怪しく思ひしなり。さまで無き事をさへ、言立つるは人の口、まして此事世に洩れなば、さがなき名をや立てられん。死しての後に怨を殘し、人を苦しめなんどするは、物語にも見えたれど、夫をだにも罪深き、あら怖ろしの心やと、笑ひし者が淺ましや、其身は此世に在りながら、さる疎ましき事をして、人に嘲り譏らるゝは、過世の業にや侍らん。とは言ひながら夢に行き、夢にて人をさいなむは、思ひ止る樣もなし。つれなき君に露ほども、心を懸けじと愼まば、自らに止みもせん。あゝ夫とてもうたてやな、是より絕えて思はじと、思ふも物を思ふなり。父を亡ひ母にも別れ、便にすべき者もなく、子

か」トまづ打かすめて何となく、心を引きて見給へば、阿古木はにつこり打わらひ、「何の怨もなき父上、その靈魂が内君を、苦しめ給はん謂はなし、夫こそ妾が業ならめ。此年頃は憎しとも、さまで思はで居たりしが、果敢なき駕籠の爭ひより、心動きてこの怨、いつの世にかは晴さんと、只茫然と物思ふ、わが魂のあくがれ出で、二葉樣に添行きけんと、思ひ知らるゝ事のあり。此身は此所に在りながら、ついぞ見もせぬ赤松の、館の樣子は能く知れり。一昨日昨日と打續き、東山より御見舞、折の菓子を二葉樣が、三ッ取りてきこしめし、跡は御厨子の二重目の、棚へ載せて置き給ふ。その前の日の花桶に、插したのは桔梗と龍膽、お床の左に今朝もあり。又内君の母上と、見ゆる人がくよ〳〵と、義正公より絶間なく、御使も度々に、御祈禱の事さへも、仰せ給はる忝なさ、夫につけてもいとほしき、身なれば隨分養生して、快くなりてよと、打泣く側に腰元ども、世の中に二葉樣を、惜まぬ者は一人もない、その恩でも遠からず、御本復遊ばすと、打ざゝめきしは、昨日の夕暮。あゝ淺ましきはこの阿古木、母は氏ある人にもせよ、今は廓に此勤、只身一ッの憂き歎き、夫より外に世の人を、惡しかれなどとは思はねど、さきにも既に聞えし如く、駕籠の簾を引ちぎり、恥見せられたる祭の後、只一節に世を憂しと、思ひ浮れし其心、鎭まり難き故にやあらん、打まどろめば其夢に、かの内君と思し





の、いとほしう思ひなされ、近々と側に寄り、「心地はいかに在するぞ。日外よりの御身の惱、知らざるにては無けれども、二葉も春の末よりして、何と無く打患み、少し怠る樣なりしが、此頃又も打返し、いと苦し氣に侍るなり。彼は元より心に叶ふ、妻といふにもあらざれど、その親達のこと〴〵しく、歎かるゝを見るからに、振捨てても出で難く、其上に此鞍馬は、旅めきて遙々の、道の程には若し人の、目に懸らんかと忍ばしく、それかれに打紛れ、心の外に音信も、爲ずして過ぎたる我罪は、免してよや」ト懇に、語ひ聞え給ひければ、阿古木は涙押拭ひ、「二葉樣のお煩、夫故問はぬとおつしやるは、又例のかつこけぐさ。とは思へども六條に、かはりて遠い別莊まで、尋ね給ひし嬉しさよ。よし御心に染まずとも、彼方は正しく御本妻、殊に今では御懷姙、御大切に遊ばして、ほかへとては御心の、移らぬも無理ならず。夫を待つのは我ながら、おろかしさよと此頃は、諦めて居るものを、なか〳〵今宵の仰にて、物思や勝らんか」ト顏を背けて常よりも、心苦しきその氣色、乘りたる駕籠を打破られ、無念に思ふも道理と、思へば哀れに見なされて、「二葉が病の日にそひて、快くなり行かば、度々も來らんが、彼が患は生靈、物怪の類にて、いと苦し氣に侍るを、引放ちても出で難く、御身の父の寂寞阿闍梨の、靈なんどと言ふ者の、あれどもさして印もなし、夫は元より根なし事。あゝ何者の業なる

いつまで殘りて在すべき、彼方は夜毎に變る枕、夫程深き執念の、遊女にあらん道理はなし」ト思ひも寄らぬ有樣にて、物語を外へ移し、「先程其方が持參した、虫籠、御菓子、秋の花、くさ〴〵を差上げしに、御紛になつて能いと、殊の外なるお喜び。今すや〳〵と御まどろみ、御目が覺めたら御樣子を、御前へ出てうかゞやし」ト引連れ奥へ入りにけり。

阿古木も心地常ならずと、引籠り居たりけるが、久しく廓にときめきて、主人も彼ゆゑ年々に、多くの金を得たる上、年期の程も僅なれば、心の儘に遊ばせて、客を迎へる事を勸めず、靜なる所へ移らば、氣の保養にもなるべしとて、鞍馬の野中の別莊へ、此頃送り遣りたる由、光氏仄に傳へ聞き、かの篠清が小毬に、言ひつる事は知らざれど、二葉の上の煩は、もしや彼が怨かと、光氏も心の中に、豫て疑ひ居たりしかば、惟吉ばかりを供に連れ、思起して野中の里へ、至りし頃は秋の日の、はや西山に入果てて、いと闇うなりたれど、一度通ひし道なれば、覺ある流に添ひ、確に此所と内を見やれば、折よくも片貝が、門の邊に佇み居て、「いかなる風に吹かれてか、此方へ靡き給ひしならん」ト直に打連れ入りければ、案内を乞ふまでもなく、頓て臥床へ打通り、阿古木の體をつく〴〵見るに、さまで姿は衰へねど、物思ひの亂れにや、目は打潤み鬢の毛の、そゝけしをも取揚げず、此方を見遣りて言葉もなく、涙をほろりと翻しゝ樣

も夫では無さゝうな。疑はしいはあの嵯峨の、御館へ名も知らさず、御迎へなされた彼の女、一入に御不便を、御懸け遊す世の噂、夫がもしや」ト紫が、年いと若く添臥も、まだせぬ中と知らざれば、ざよめき騒ぐを高直の、妻篠濤は（この篠濤は、柏木の衛門の母上四の君に比す。源氏物語に、行狀の詳しからざる人ゆゑ、此草紙にも、まれ〳〵ならでは出でず）次の間より、立出でて押止め、「誰が聞くまいものでもない、密に言や」ト母の側、摺寄りて手をつかへ、「只今皆へお尋ねに、就いて妾が心當は、加茂の祭の折からに、二葉樣の御召なされた、御乘物の妨と、打破られし戸無駕籠、乘つて居たのは阿古木とて、六條に名高き遊君、忍び〳〵に若君の、御情受けし者の由、高直殿の侍が、其時彼所に在合せ、始終を見たりしが、此者は若君の、御供について六條へ、行きたる事も侍る故、阿古木の顏をも能く覺え、いとほしとは見ながらも、せん方なさに知らず顏、作りて居たと物語。數多の人に傅かるゝ、内君樣の御勢、羨ましいとわが駕籠を、打毀されし無念さと、凝固りしその思が、かゝるまいものでもない。」「御心を添へられませ」ト聞いて小毬片頰に笑み、「氏素性も無き流の身、黄金を積めば思はぬ人をも、思ふと見するが遊女の慣、若君樣もひと花の、眺に散りて御心の、

も見せねど、又片時も離れやらぬ、一ッの物の侍るなり。執念き氣色顯れて、朧氣ならぬ窮鬼、此生靈は私等に、なか〳〵移るさまならねば、年の程方角も、確に夫と指し難し。お心當も侍らば、お言宥め遊ばせ」ト、やがて暇を乞ければ、卷絹結綿數多の祿を、取らせて巫を歸しけり。

光氏は夫よりも德高く名の聞えし、僧を請じて祈らせければ、かのむね〳〵しからざる生靈、死靈も大方退きけれど、梓巫の言ひしに違はず、かのひとつの窮鬼は、二葉の上に附纏ひ、言葉少き常には引換へ、分ちも知れぬそゞろ言を、言竝べては打笑ひ、又終日に物言はず、何事を案ずるにか、つく〴〵と打泣きて、をり〳〵胸を堰上げつ、あら堪へ難やと口には言はねど、苦しき樣の顯れければ、斯くては如何あるべきと、小毬は見るに悲しく、すこし病の怠りし、樣子を窺ひ腰元どもを、密なる一間に集め、邊を憚り聲を潛め、「二葉の上の御惱、生靈の業なりとは、宣ふ事にも知らるゝ故、占方の上手を呼び、占はせても確に指し、聞えおつる事もなし。光氏君を戀慕ふ、女の怨と思はるゝが、誰であらうか心々、包まず言うて見やいの」ト、問はれて當吉進出で、「我君樣の御通ひ所、此所彼所といふ中に、紀においでの稻舟樣」ト言ひかくるを中垣が、「いえ〳〵あなたは御器量の、惡い上に愚しい、御生といふ取沙汰なれば、どう

苦患止む時なし。あら苦しや」トかつぱと伏す。光氏更に合點行かず、「して〳〵御身は何者」ト急がはしく尋ねられ、巫は再び面をあげ、「名にも似ず夜こそ萎め晝顏と、いひしは妾が事なり」ト、只茫然となし居たり。風月は入替り、「妾は荻に置く露の、消えたる魂にはあらざれど、君の爲とて直ならぬ、歪む心の弓取に、つらい悲しい枕添、思ふ中をば中川の、水の逆さに流れ行く、野越え山越え海を越え、今まで遠く隔りし、唐の鏡は歸來て、見ゆる時もありながら、浮名もよしや蘆垣の、近き邊に住みながら、そよとの風の音信も、なくて過行く果敢なさを、不便と思し給はれ」ト、口說き立つれば光氏は、夫ぞと思ひ當りけん、打點頭きてぞ居給ひける。是より姊妹交る〴〵、或は謀反を企てて、打亡され政則に、怨ある者の類、或は母の小毬が、まだ若きその時に、悋氣よりして科もなく、追拂ひたる女なんど、此程より二葉の上を、惱せたる窮鬼、多くの物怪出來り、さま〴〵に名乘しつ、皆立去りて二人の巫は、我身に戻り姿を改め、光氏に打向ひ、「只今までは何事を、申したるか私どもは、聊か覺はなけれども、此弓の弦音に、曳かれて寄來し人々は、さまで怨も深からねど、御身の弱りに添ひたるにて、皆むね〳〵しき者にはあらず。茲に一つの御大事、申すも恐多けれど、內君樣の御有樣、先程つら〳〵伺ふに、なか〳〵梓の弓にも乘らず、只御身に附添ひ居て、さまでに苦しき目を

は彼所へ立出で、邊の人の漏聞かば、宜からぬ事もあらんかと、腰元どもを遙に遠避け、「いでいで語れ」ト宣へば、二人の巫は心得て、神下しとかいふものを、さら〳〵と言終り、梓の弓を打鳴し、目を押眠りて居たりしが、人の魂や移りけん、風月は涙を浮かめ、光氏を打眺め、「妾は元より覺悟して、此世を逝れば夢ほども、人を怨まん筈はなし。まだ其上に有難き、清水寺の法の聲、跡弔ひて給はれば、天道に果を得ん事、近くにあれど淺ましや、まだ絶え難き輪廻の絆、御顔ばせの見まほしく、恐れ多くも二葉樣の、御身に添ひし今までの、科を免して給はれ」ト打泣く聲色形さへ、此世に再び黄昏が、生れ出でたる心地して、なつかしくや思しけん、光氏は目をしばたゝき、「御身が生みたる娘ありと、いまはに母の物語、何所に居るか知らせて」ト問はせ給へば差俯むき、「今申さずともその行方は、後には知召す事あらん」ト猶何やらん言はんとするを、姉の花鳥が突除けて、目の中血走り息を吐き、「己が罪己を責め、人を怨むは道ならねど、二葉の上の煩ひは、弱目に乘りて出來れり。人たがへなり過ちすなと、其時聲は立てたれど、夜著にて口を押へられ、聞えざりしや一刀に、差透されて無慘の最期。元はといへば汝の母、御寵愛を笠に著て、あまりといへば蔑、その無念さに唐戸の掛金、括りし紐は文車の、廻る因果にありながら、身寄の者も絶果てて、香華手向くる人もなく、地獄の

と聞え給へば紫も、

青柳やさだめぬ露の落ち所

と見するともなく鼻紙へ、書付けて在するさま、はや人の妻めきて、見ゆれど年の若ければ、あどけなうして愛らしく、斯様なる戯に、世の憂き事を打紛らし、程なく夏も過行きけり。

夏の末には二葉の上、心地爽やぐさまなりしが、秋風立ちて打返し、此頃甚く煩ひければ、父母はいふも更なり、高直夫婦誰々も、打歎く事大方ならず。光氏は初より、睦ましき中にもあらねど、かの御鏡の徳にや依りけん、やう／＼に心も解け、且只ならぬ身となりて、夫よりの患なれば、心苦しさ限りなく、初子の顔を安らかに、見せしめ給へと神に祈り、思ひ歎きて赤松の、館にのみ明し暮し、時々ならでは嵯峨へ歸らず、忍び歩きの事なんどは、久しく絶えて看病に、心を用ひて側に附添ひ、二葉の上の體を見るに、是なみ／＼の病にあらず、物怪の業ならんと、我も思ひ人も言へば、まづ彼が身に添ふは、誰が怨といふを知り、其後驗者に言附けて、追退けんと心を定め、大原に人を遣し、梓巫二人を招けり。

此二人は姉妹にて、姉の名を花鳥といひ、妹を風月と呼なして、都に知らざる者もなく、不思議を顯す巫なり。さて姉妹はしとやかに、二葉の上の樣子を伺ひ、一間所を退くにぞ、光氏

招き寄せ、「あら髪のしなやかさ、常よりも清らかに、見ゆるとは引換へて、額も襟も初生毛のまゝ、幼き時より剃刀の、嫌ひな性と言の葉が、常々噂に言ひたるが、未だ癖の直らずや。爪取よしと暦にも、記して今日は吉日なり。髪を分けて中剃も、剃らねば逆上て病も發り、髪も嘸かし結ひにくからん。皆の者をも思ひの儘に、つくり立てて遊ばん」ト、言ひつゝ此方を振返り、「女中衆〳〵」ト、呼立て給へば言の葉小辨、訝しながら「はい」ト答へ、出づれば光氏打笑ひ、「今呼びたるは紫の、御附の女中の事にてあり」ト犬吉はじめ相手の童、皆打集め言の葉に、それ〳〵と差圖して、芥子の殼めく僅なる、髪へ髱の添を入れ、片外しに結直させ、又は長き前髪の、先を削いで二ツに分け、額にきつと角を入れ、若衆の如くつくらせつ。或は雀の尾に繼いで、下髪のをかしげなる、袴を穿かせ袿を著せ、童の姿に似合はぬを、打見やりつゝ興に入り、紫はわが手づから、額を垂れて粧はんと、剃果てて髪を解分け、「あまりなるまで多き事よ。綠と褒め柳に稱へ、いと長きと言ふ人も、額髪は少し短く、後毛はあるものなり。その筋もなく揃ひたり」ト剃煩ひて打眺め、暫くして中を押分け、程よく切りて剃果てつ。「是にて結ひよくなりつらん、言の葉それ」ト件の髪を、渡しながら光氏が、

生行かば我ひとり見ん柳哉

に振離れ、伊勢へ下るもお心細し、いとしい人の秋風に、吹立てられて散行きしと、世間の者の笑ひやせん、さりとていつまで此廓に、住果てんとは猶思さず、起きても寝ても其事ばかり。たとへば釣する浮子の樣に、彼方へ流れ此方へ漂ひ、お心が浮いて居て、定まらぬ故あの御病氣。その慰めに立出でし、加茂の川浪荒き瀨に、立騒いだる事よりして、いとゞ浮世に倦果てしと、亂れし儘にて髪をもあげず、闇き閨に引籠り、そゞろ言のみ宣ひて、更にしやうども侍らず」ト、語るに光氏眉を顰め、「まづ試に某が、阿古木の心になりて言はん。磯菜に附きて伊勢國へ、我下らんと言ひたりとも、光氏こそは止むべけれ、然るを却つて勸めしは、夫をしほに疎ましき、我を遠くへ追遣らん、手段と彼が思ひしならん。其事御身に言ひつるか」ト問はせ給へば片貝は、打笑みて只點きつ。光氏猶も膝を寄せ、「夫こそ心の僻見と言はめ、父もなく身寄もなき、一人の我子に數ならぬ、我身をいかで見かへんと、思ふよりして斯くは言ひつ、嵯峨の住家へ迎へんは、元より易き事なれど、館の女の交りは、物むづかしとて承引せず、都に長く居らんとならば、何所にもあれ阿古木の望に、任せて家をも造らせん。夫等の事を心に懸けず、氣の保養こそ專一なれ。能く傳へて」ト口には言へど、兎に角阿古木が直ならぬ、心に倦じて嵯峨へ歸り、例の心慰めに、西の亭へ赴きつ、紫が美しげに、粧ひたてて在するを、打笑みて

じ人の恨を受けぬ様、御用心を遊ばせ」ト、かの駕籠の爭ひを、手眞似仕方に打まなび、聞え上ぐればいとほしう、心に思ふか吐息をつき、「二葉は詞多からず、何事をも打しづめ、すげなき樣に見ゆれども、情も恥も知る者なり。此光氏がゆかりぞと、夢ほどなりと知るならば、いかでかつれなき事をせさせん。夫とは心つかずとも、互に忍ぶ物見の場、さほど手荒き振舞を、打捨てては置くまじきが、はやり男の若侍、彼が制止を用ひぬなるべし。」阿古木は流の女ながら、昔はよしある者なりと、姿の華美に引換へて、打上りたる心の中に、さぞ口惜しと思ひつらん。伊勢へ下す妨に、なりもせん」ト打嘱き、歸らせ給ひけりとなん。

わざと日を經て光氏は、ひる下る頃よりして、三筋町の揚屋へ赴き、何氣なき風情にて、かの阿古木を招きけるが、心地悪しとて引籠り、家内の者にも逢はずとて、片貝が出來れり。其日は少し夏めきて、光氏は緣の端に、立出でて居たりしが、片貝を近く招き、「病氣の體はいかゞぞ」ト、しめやかに問ひ給へば、片貝は打萎れ、「少しの事をも心に懸け、物案じ爲給ふが、阿古木樣のお生付、夫が高じてお煩ひ、元はと言へばあなたから。年も遙にふけた上、浮節繁き川竹の、流に沈み果てたる身、末長うお情を、懸けては所詮下さるまいと、思切つては居給へど、今更

十三編上

かくて水原は光氏の、膝元へ摺寄りて、聲打潜め言ひける樣、「私も忍びやかに、今日の祭を見物せんと、一條の大宮なる、馬場の邊へ行きたりしが、所もなく立込みて、暫らく駕籠を立煩ひ、やう〳〵に一叢の、森を後に乘物を、止めて居たる其前に、二挺竝べて下したは、町の者が物見遊山に、乘り步く戸無駕籠。折節に二葉樣も、その所へ御駕籠を向けられ、差出てある戸無駕籠が、御邪魔になるとて御家來が、制されても道を知らぬ、駕籠舁どもは口答、憎い奴めと打擲かれ、二挺の駕籠も粉微塵、垂も簾もひきちぎり、私の乘物へ、打懸けて御同勢は、其所を過ぎて向ふの方に、折敷いておいでの時、あなた樣の御歸り。かの破られたる駕籠より出でしは、六條の傾城にて、怨がましき獨言。乘物の中に居て、心をとめて能く聞けば、忍び〳〵に通ひ給ふと、世に噂する阿古木とやら。今日の人とは其人に、代りて只今妾が、書いて御目に懸けたる發句、人の翳せる葵ゆゑ、御本妻の二葉樣、夫ゆゑ胸を焦す者の、ありと言ふのを餘所ながら、おしらせ申すにお心の、つかざる樣子は最前の、事をば知召さゞるなら

婆深切なり。

天保五年甲午春

柳亭種彦記

修紫田舍源氏第十三編序

山名蟹澤入道千句連歌の序に、「扇の繪に女のかた畫きたるを、源氏の意か伊勢物語の意かと、疑ふ事ありしを、花鳥風月といひけん巫女、梓によせて問ひしかば、六條の齋宮の母御息所の名のりてあらはれたりといふ事は、無下に近き作物語なるべし」といふ事あり。是序は康正二年に、桃華老人の書かせ給ひしなり。この花鳥風月と題冊子、今もまれ〳〵に傳はれり（大本慶安三年印行　小本貞享年鱗形屋板）。こゝに宣ひし如く、花鳥（姉なり）風月（妹なり）といふ神子をまねき、繪を梓にかけて問ふとき、業平光源氏、物語に見えたる女房ども、かはる〴〵神子にうつり、さま〴〵の問答し、側に掛置きし、鏡に人々の面影の、あらはるゝといふ事を綴りたり。按に、この二種の物語の大意を、兒女なんどに知らせんとての業なるべし。さればこの巻の、「もののけ、いきすだまなどいふもの多く出來て、さま〴〵の名のりする」といふ條に、彼花鳥風月の、神子をかり用ひたり。こゝにそれを理るは、田舍源氏の註釋めきて、最袁許のわざに似たれど、四百年に近き古書の、花鳥風月の反古になるが歎はしく、いはゆる老

ん事のあり、暫しが間此方へ」ト、人なき所へ誘ひけり。

り打笑ひ、「取逆上て御出の樣子、まづ其儘に〳〵」ト押止めて供人に、それ〳〵と差圖しつ、損はれたる戸無駕籠、假に繩もて結びつけ、やう〳〵に繕はせ、片貝を夫に乘せ、其身は跡に引殘り、心靜に歸りけるとぞ。

光氏直に室町へ赴き、今日の神事恙なく、濟みたる由を言上し、退出んとし給ひしが、今日の祭を忍びやかに、見物したる腰元ども、とある所につどひ集り、其事此事姦しく、物語るが不圖耳に止り、前の神事の棧敷より、物騷がしげなる渡りかなと、立止りて居給ふに、窓より扇を差出し、光氏を招き寄せ、「此所にやは休ひ給はぬ、御座を設け侍らん」ト聞えたり。打かすめて言ひたれば、聲は誰とも聞分け難く、扇に見知のあらんかと、引寄せて見給へば、

身は燃ゆれ人のかざせる葵ゆゑ
今日の人に代りて

とあり。句の意は更に分らねど、手蹟をよく〳〵思ひ出づれば、かの水原に紛れなし。猶若々しく身を持なし、實の心を悟られなと、去頃教へ置きたる故、御厩の葵の根もなき事を、戲れに言ひつるならんと、扇をそのまゝ投戻し、「誰にあふひを願ひやすらん、高直か、片攬か」ト、はしたなう言捨てて、歸らんと爲給へば、水原は其儘走出で、「浮たる事には侍らず、密に申さ

の様に思うても、御辭はない道理。此様に申しては、御氣に障るか知らねども、今おつしやつたはほんのお僻見。さア〳〵お歸りなされませ」ト言慰めても茫然と、阿古木は立ちて藻拔の殼、生靈とかいふ物の、此時よりして二葉の上に、附添ひ行くとは我も知らず、人は猶更しら綾の、裳の塵を打拂ひ、亂れし衣紋搔整ひ、かひ〴〵し氣に片貝は、阿古木が姿を引繕ひ、駕籠に乘せんとなしたりしが、垂も簾も引放ち、傍の乘物へ、打懸けてありければ、「何方かは知らねども、最前より御乘物が、是に下してあつたれば、樣子は言はずと御覽の通り、荒くれしい物を打掛け、御乘物を汚せしは、此方の業ではなけれども、定めし内へも塵埃、お氣の毒や」ト詫びながら、取らんとすれば聲懸けて、「イヤまづ待つて」ト乘物の、戸を引明けて立出づるは、賤しからざる老いたる女、「思ひがけなき事どもにて、御難儀察し入りました。破れしながら其方のは、取繕はゞ乘れもせん、此方は屋根も微塵に碎け、お歸りの用には立つまい。とあつて町の女中と變り、廓模樣の華美姿、三筋町へは遙々の、道の人目も煩はし。慮外ながら姿が駕籠で、送らせて參らせん、必ず氣遣し給ふな」トやがて阿古木が手を取つて、磯菜諸共乘物へ、移し乘せて樣々に、介抱すれば片貝は、夢見し心地嬉しくて、「お近付でもない者を、思ひがけない御信實。モシ、御禮をおつしやつて」ト言へど阿古木は只うつかり。老女はにつこ

過ぐれど、立渡したる乘物の、簾の隙間を尻目にかけ、打微笑みつゝ見るもあり。赤松のは殊更に夫と著くて暫しが程、馬を駐めて立ち給へば、御供の人々は、皆々頭を地に付けて、打畏まり控へたり。光氏はにつこと笑ひ、「今朝出でつる夫までは、何の用意も無かりしが、思ひがけなく能う是まで。いよ〳〵氣色の好きなるべし、跡より靜に歸られよ」トまめだちて渡り給ふ。遙に隔てし森の蔭、宣ふ事は聞えねど、阿古木は見るに堪兼ねてや、恥も人目も打忘れ、裳の土に汚るゝも、厭はず其方へ二足三足、歩み出でてすつくと立ち、「二葉も君とは從姉妹どち、妾も同じ事ながら、父は果敢なき破戒の僧、孝行ゆゑとは言ひながら、終に此身も世に零落れ、遊女となりし悲しさは、言はゞ家來に等しき者に、乘りたる駕籠を打破られ、恥見せられたる無念さよ。突入れられしは森の蔭、木草も繁る笹の隈、篠隈川にあらねども、いま若君の駒止めて、暫しの間しめ〳〵と、二葉の上の傅きには、何か仰のありながら、妾が方は影だにも、見ずにつれなく過ぎ給ふ。添臥したは變らねど、定まる妻と仇枕、身の憂き程を思ひ知る。その報には二葉の上、其方にも思ひ知らせん」ト人目も包まずはら〳〵と、涙溢せば片貝が、「お腹の立つはお道理ながら、此所は遙に隔たれば、光氏樣の御心の、つかぬのは御尤、よし又夫と御存じでも、これ此樣に蓮葉な姿、彼方は御馬で御行列、人の思はく御供の手前、ど





なし。阿古木は人にも知られし身の、顔まもらるゝも恥かしく、又悔しくも身を慄はし、何の爲にか來つらんと、思ふに今更かひもなく、繁りし木立に隔てられ、練行く祭は見えわかず。されば此儘歸らんと、すれども前は人込にて、通り出でん隙もなし。ためらふ中に祭は濟みぬ。光氏君の御歸に、はや程はあらじなど、邊の者の言ふを聞き、流石に辛き其人の、御前渡りは見まほしく、心弱くも待ちにけり。

光氏は事果てて、靜に馬を乘出す。近習の者さへ華やかに、姿形を目ばゆく整へ、世に傅かれ給へる樣、木草も靡く風情なり。是を見んとて都鄙の老若、或は覆面市女笠、壺折姿なんどいふ、賤しからぬ女もあり。或は世をも背ける尼の、群集に壓されて押倒され、打轉びつゝ物見るは、形にも似ず憎さよと、常には人の言ふめれど、今日は實に道理ぞと、咎むる者も更になし。襤褸を纏ふ賤男まで、おのれが顔の歪むも知らず、打笑みつゝ手を合せ、額に當てて拜むもあり。光氏更に目も懸けぬ、田舍武士の娘さへ、心の限り粧ひつ、六尺袖をひらめかし、棧敷の端へ立出でて、つれ〴〵と打まもるは、見んとや思ふ見られんとや、思ふ心の中のをかしく、彼方には駕籠の戸を、押開けて伊達染の、裳をわざと打亂し、こなたには簾を捲き、若き女の寄聚り、聞惡きまでとり〴〵に、噂をしつゝ愛であへり。光氏は何事も、知らず顔に打

美なる模様に白綾の、褄を重ねて清らかなり。是はかの二見屋の、阿古木が日頃の物思ひを、慰めんとて出でたるにて、今一挺は片貝と、禿の磯菜が合乗なり。二葉の上の先走、「それ見苦し取除けよ」ト言へども廓の駕籠舁は、さらに立去る氣色もなく、醉過ぎたる上にやあらん、から〳〵と嘲笑ひ、「譜代の主人の大切も、一日乘りたる旦那の大事も、さまで變りし事はなし。此駕籠ありても往來の、支障といふにもあらじ。向ひの方を通られよ」ト口強くて手も付けさせず。侍大いに打腹立ち、「誰とか思ふ今日の御警固、光氏公の内君なるぞ。神事の場にあらずんば、斬捨にもすべき奴、辛き目見せて追拂へ」ト大勢一度に取卷いたり。おとなしき老臣は、眉を顰めて聲を懸け、「此方とても忍の御出、手荒くすな」ト制すれども、はやり雄の若侍、更に耳にも聽入れず、かの廓の駕籠舁四人を、おもふさまに打擲なし、なほ厭足らずや思ひけん、戸無駕籠の垂も簾も、ずん〳〵に引ちぎり、誰とも知れぬ傍の、乘物の屋根へ打懸け、どよみを作つてどつと笑ひ、繁りし森の片陰へ、二挺の駕籠は突入れて、二葉の上の乘物を、守護して靜に打過ぎけり。打擲かれし駕籠舁ども、なほ懲ずまに追はんとするを、駕籠より轉落ちたる片貝、あわて惑ひて引止め、此方を見れば阿古木の乘りし、駕籠は棒さへ押折られ、言ふべき詞も涙に暮れ、只うろ〳〵としやうどなき、磯菜を膝に抱きあげ、吐息つくよりせん方

は物陰にて、さゞめき言ふを聞取りてや、しとやかに立出でつ、我子ながらも主人の內君、手はつかへねど慇懃に、「御心地も宜しき樣子、いかにも彼等が言ふ通り、女子ばかり連立たば、道の程も淋しくて、面白い事もあるまい。御乘物を靜やかに、舁かせて御出なされたら、却つて御氣も晴れまして、御保養にもなりませう」ト言はれてやう〳〵二葉の上、「夫なら髮を揃へて」ト仰に皆々打喜び、それ御鏡臺御手水の、御湯を早うと言ふもあり、彼是衣服を撰出し、伏籠に伽羅を焚くもあり、或は御供を觸流す。俄の事ゆゑ上を下、稍時移りて支度も調ひ、豫ての設と見せざるとて、つき〴〵の女どもは、さまで衣裝に綺羅を飾らず、二葉の上の乘物へは、かべしろをりて引廻し、誰とも知らさず練出す。實に其日の賑ひは、一條の大路さへ、過ぎる道なく立騷ぎ、所々の棧敷は、心々に架渡し、今日を晴と著飾りし、小袖の模樣帶の綾、夫さへも能き見物なり。兎角なす間に日もたけて、二葉の上の乘物は、宮居近く行きたりしが、此所には猶人目を忍ぶ、彼方の奧方、彼所の娘、乘物の內より見んと、蒔繪鋲打天鵞絨包、きらびやかに引續き、二葉の上の乘物を、立つべき隙のなかりしかば、光に進みし侍ども、それ〳〵と差圖して、差除けさする其中に、戸無駕籠とか言慣はす、筵を垂れて窓めく所に、簾を懸けしが二挺あり、寠れたるけはひに引換へ、溢出づる小袖の裾は、金銀の糸持て縫ひ、華

馬にて打たせ、渡り給ふが舊例なれど、義尙君は去頃より、御心地常ならず、させる事にはあらざれど、名代として某に、參れよとは豫ての仰。さりながら御身の惱、心元なく思ふが故、今まで御請せざりしが、昨日今日は取分けて、顏色も常に變らず、心地よげなる樣なれば、我は彼所へ赴きて、夕暮には歸らん」ト言慰めて出で給へば、邊にさむらふ女子ども、御見送にと立上り、稍程ありて御前に歸り、當吉中垣なんどいふ、二葉の上の氣に入りの、腰元どもが口口に、「光氏樣の御服を召換へ、御馬にめしたるその立派さ、御小袖の色御袴の、紋柄の御好まで、人に優りて美しく、御馬の鞍の梨地より、御顏がてら〳〵光る君と、誰知らぬ者はない。この中垣も御警固の、御行例を拜見に、今日ひるからのお暇を、かね〴〵願うて置いたれど、ならう事ならあなた樣の、御供を致して參つたら」ト言ふを當吉引取つて、「只今彼が申す通り、私どもが連立ちて、人に隱れてこそ〳〵と、見上げ申したばかりでは、張合もなく榮もない。さア御支度を遊ばしませ。舟漕ぐ男や山賤まで、光氏君を拜まんと、遠い國から女房や、子を連れて來る者さへある、それをまア御本妻の、あなたが御覽なされぬは、あまりと云へば本意ない事」ト勸められても常にさへ、物見遊山は嫌ひにて、進みて行かぬ二葉の上、まして此頃惱ましく、たゞならぬ身にありければ、思ひもかけぬ風情にて、只打笑みて答はなし。母小毬

に、御身も彼所へ下り給へと、言葉を盡して言ひければ、阿古木も兎に角光氏が、頼もしげなき振舞を、心に歎きし折といひ、愁ひ都に居る故に、たまく\の逢瀬はありて、却つて思ひの種ともなりぬ、幼き者を手離して、知らぬ人と知らぬ國へ、移し遣らんも心苦しく、されば夫に假託けて、倶に彼所へ至りなば、光氏の音信も、顔見る事も絶果てて、却つて辛苦もなからんかと、心の中には思ひながら、初にも言ふ如く、疑深き性ゆゑ、年の明けて此廓を、出づるも程なき事なれば、只此儘に捨置きてと、承引く氣色はなかりけり。

光氏は二葉の上が、年頃心の打解けぬを、いと憂き事と思ひしかば、去頃ふと心付き、玉兎の鏡の裏を摺り、守なりとて贈り置き、自らはかの鏡を、肌身に添へて居たりしかば、その奇特にや彼方より、睦しく語ひより、恨がましや事をも聞えず、今こそやうく\親々の、許して妻と思ひして、心安くやなりつらめ、光氏は赤松の、館にのみありけるが、此程より二葉の上、心苦しと打惱み、萬に付けて心細氣の、有様に見えたりしが、月を重ねて其事しるく、病は次第に怠りければ、光氏は珍しう、嬉しきものから初産は、とりわけ大事のことなりとて、加持祈禱などせさせつゝ、はや腹帶の祝も近き、卯月なかばの事なりしが、朝疾く起きて光氏は、二葉の上に打向ひ、「今日は中の酉の日にて、加茂の御生の祭なり、奉幣使警固の爲、時の武將も

二編の序にことわりし例の如く、此所は間にて、以下は癸の卷のおもかげなり。

義尚天が下を治め、世の中變りて其後は、年も心も改まり、光氏は差出でて、事を爲さんも懶く覺え、忍び歩きもつゝましう、引籠りてのみ在りければ、六條の郷糺の館、其方此方に光氏が、音信絶えしを歎くもあるべし。さる程に義正は、東山に住馴れて、位に在りし中とは引換へ、藤の方のみ側を離れず、たゞ下々の夫婦の樣に、いと睦しくし給へば、富徽の前は彼所へ行き、立並んで住まはんも、心疾しう思すにや、義尚の後見とて、室町にのみ在しければ、藤の方は憚る人なう、心安氣に琵琶琴なんど、折節の遊に隙なく、義正は茶道を好み、古き器古き掛軸を、國々より求め出し、風流の座敷をしつらへ、世の響くばかりせさせ給ひつ、萬心に足らざる事なく、いと目出度は見えながら、只藤の方の生み給ひし、御子を春若丸と名付け、義尚おのれが嫡子と披露し、生立ち行かば世を讓らん、その設にて室町に、留置きたれば見る事も、稀々なるのみ朝夕に、戀しう思ひ給ひけり。

又空衣は夫より、告こしゝ文に驚き、支度を調へ伊豫を立ち、遙々の海山越え、此頃竊に京へ著き、かの野の宮の傍なる、下屋敷に隱れ住み、光氏君の仰の趣、喜代之助より詳しく聞き、三筋町へ赴きて、二見屋の阿古木に逢ひ、禿の磯菜を斬しが程、伊勢の國へ誘はん、願はくは諸共

言出づるも恥しけれど、我へ心を懸けしをさいはひ、取返さんと手を摧けど、なか〳〵しぶとき生付、錦に針を包むと言はんか、茨に咲きし櫻と言はんか、眉目とは變る心の中。かの古寺にて黃昏が、氣絕なしゝも彼が恨。是より後も何事を、爲出さんも計り難く、いかにならんと持あぐむ、折にさいはひ磯菜といふ、娘ありとて何時になき、涙に暮れての物語、その石卷の前齋は、わが兄なりと跡方なき、僞を言竝べ、斯う〳〵こしらへ置きたれば、空衣を呼上せ、彼等親子を誘はせ、諸共伊勢へ下つてくれ。磯菜に不便を加へなば、我子にひかれて氣も挫けん。辛く當りて今彼が、憤を惹出しなば、勅筆の短冊に、過のあるのみならず、家の恥をや觸れ歩かん。夫故都を遠ざくる、思案は是より外になし」トありし事ども落もなく、繰返して宣へば、喜代之助小首を傾け、「そは輕きに似て輕からず、未だ阿古木は廓の内に」「されば爾が野の宮の、かたはらの下屋敷を、思出でて其所へ、假住させんと思へども、兎に角未だに承引せず」ト當惑面に顯れければ、喜代之助はわざと打笑み、「女は女どちとやら、仰の如く空衣を、人に知らさず呼迎へ、其後事を計ふべし、御心に掛け給ふな。都に在りし時だにも、常には住まぬ下屋敷、荒れたき儘に荒れつらん。翌日より其邊を取繕ひ、某は又伊豫へ、歸國なしたる體にもてなし、直に彼所へ忍び居て、折々御機嫌伺ふべし」ト日くれて後歸りけり。

れ待兼し此方へ」ト、人なき所へ打招き、絶えて久しき物語、思ひ出づる事のみ多くて、暫く時を移しゝが、さて光氏の言ひけるは、「先つ年淩晨が、古寺にて自害の時、簾を以ての謎々は、解けても難き富士の雪、まだ手に入らぬ小烏丸。さりながらその有所は、慥に夫と知りながら、劍の詮議と言ひなして、汝を伊豫へ下しゝは、宗入初め西國武士、宗全に加はりなば、夫を防がん爲なりしが、夫より火急の大事あり。去頃水原といふ老女、數多得させし敵の密書、夫をつら〱打見るに、先年亡びし伊勢の國司、板畠則知が、一族未だ彼所にあり、赤松則祐則久兩人、播摩國に忍びしが、是も密に伊勢地へ赴き、より〱味方を語らふ文體、捨置かれじと我近臣の、影を隱して直に下し、度會郡に陣屋を營み、守らせては置きつれど、彼者武術は達しながら、年若ゆゑに安心ならず。なんぢこのまゝ都に留り、妻子の迎を伊豫へ遣し、打揃ひなば伊勢へ赴き、かの陣屋に移住み、怪しき事もあらんには、早速我に知らせよ」ト仰を聞いて喜代之助、妻子を誘ふまでもなし、某一人發足せん」ト言ふを止めて光氏は、少し面を打赧め、「方違の其時に、物越に見受けしが、爾が妻の空衣とか、おとなしやかなる品形、殊に利發の性の由、是にも密に賴む仔細は、六條の三筋町に、阿古木と云へる遊女あり、家出ありしわが叔母上、渦浪の實は娘、斯樣々々の事どもにて、當家の寶物筆の、短冊をも彼が持てり。

　世に知らぬ心地こそすれ水の月
ト吟じ終りて傍なる、揚弓の弓を取上げ、かの扇を打番へ、「讃する人はなほ知らず」トいひさま此方へ射返したり。其聲はまがひもなき、朧月夜にありければ、をかしきものから後には、阿古木があとより跟來り、窺ひ寄るに驚かれ、詞も無くて別れけり。

　花の宴の巻をはり

足利殿の幕下に、一色郡領持廉といふ者あり、男女二人の子を持てり、兄は左京廣廉とて、義正公の昵近なりしが、色黒く髯むく／＼と生ひたりとて、廣廉といふ者なく、髯廉と諢名せり。其妹立田と云ふは、かの髯がちの兄には引替へ、眉目麗しく心賢く、詩歌管絃の道にさへ、疎からざる由聞えければ、是も或雲客を、立田が假の親として、忝なくも義尙公の、內君に定りつ。其年の冬とやらん、義正公は東山の、銀閣へ移らせ給ひ、義尙公を武將と仰ぎ、いよ／＼世界無異を歌へば、富徽の前のいちはやき、御心も和ぐべしと、ひそめき言ふもありしなるべし。されぱや御代を譲られたる、その壽を申さんとて、國司郡司、皆々京都へ參著せり。かの伊豫へ下りたる、仁木喜代之助も是に就き、急ぎ上京したりしかば、まづ室町の御所へ參り、直に嵯峨の館へ赴き、この由を言ひ入れければ、光氏も今御所より下り、裝束も脱かざりしが、「そ

て、さやかに夫とわかばこそ。光氏心やいられけん、其儘二階へ驅上り、「我も此家の客なるが連はいづれも大上戸、いたく酒を強ひられて、その座敷には堪られず、憚りながら此陰へ、暫し置きて給はれ」ト衣桁に懸けし小袖の裾を、引被ぎ給ひければ、桂樹の腰元ども、打驚きしや振返り、「女子ばかりの其中へ、無遠慮な人ではある」ト咎むる氣色を透し見るに、重々しうはあらねども、此所の廓の風俗ならず、空薫物の薫滿ち、楊弓の矢の打散りしは、今めかしき遊を好む、女にこそあらんずらめと、奥ゆかしう思ひなされ、弓張月はいづれならんと、彼方此方と見渡せども、かの朧夜に只一度、言葉を交しゝのみなれば、慥に夫と定め難く、いよいよ醉ひたる樣にもてなし、

　文が遣りたや室町筋へ、取りや違へて世の人に遣るな、月の彼の樣の手に渡せ。

ト踊唄を謠ひければ、「怪しうも春秋を、とり違へたるしが山かな」ト打笑ふは其心を、更に知らぬ腰元なるべし。猶つら〱と見渡すに、始よりして物をも言はず、床の柱に寄掛りて、水晶の數珠を爪繰り、何やらん時々に、打歎くけはひするが、心得難く思はれければ、やをら衣桁の小袖を引のけ、かの取換へし扇を差出し、要を摘みて其女の、膝の傍に投やれば、靜に女は扇を取上げ、

十二編　下

「幸ひなるかな野の宮の、傍に先つ年、伊豫へ下りし喜代之助が、下屋敷のありと聞く、住荒してはあるべけれど、物寂しくて暫しが程、隱れ住むには其所こそ宜からめ。いかに〳〵」ト虛事眞、取交ぜいふとは阿古木は知らず、兄と添臥した女と、是より逢瀨の絕えもやせん、我子の出世は嬉しけれど、又今更に引別れ、伊勢路へ下るが悲しさに、物をも言はず差俯く。光氏氣色を見て取りて、「思ひがけ無き事なる故、直に答もなし兼つらん、磯菜にも能く言聞かせ、文にて跡より言ひおこせ」ト言流して席を退き、二階を下りて緣側傳ひ、東の方の戶口に寄り、打詠むれば藤棚は、此方の庭にも懸渡し、風に靡きて花房の、妻戶に當るを見んとてか、二階の障子を開渡し、人々の出で居たり。顏は見えねど振袖の、模樣は目立つ館風、揚屋には似合しからずと、かの藤の方の住み給ふ、園の事など思出で、佇むところへ高直は、急がはしく次より立出で、光氏の袖を引き、「扇に描きし月の行方を、見定めて候なり、あの二階に」ト指させば、「なに月の出でたるとや。心も空になるは」とて、見上ぐれども打垂れし、簾の霞に隔り

北山へ閑居ありしが、程なく眞に世を去り給ふと、我も仄に傳聞けり。其磯菜こそ兄上の、忘形見に紛れなし。此方へ〳〵」ト身近く寄せ、つれ〴〵と打まもり、「今まで心附かざりしが、阿古木の顔に生寫し、眉目といひ筋目といひ、打捨置くべきものにはあらず、此子は今日より我に得させよ、悪き様には計らはじ。さりながら廓にありて、人も面を見知りつらん、まづ一旦は影を隠し、成長なして呼戻し、近臣のその中にも、家柄人柄正しき者を、撰んで妻に送るべし。その忍ばせて置く所は、はて何所に」ト思案を廻し、「ヲヽそれ〳〵伊勢の國、渡會郡の陣屋には、わが腹心の者を置けり、是を指して下らすべし。たしか御身の幼名は、いせと言ひしと物語、其子も伊勢に假住し、さかゆく末をみた扇、あふぐに加護の無からんや。宮居を拜すに便宜の地、心もとなく思ひなば、其方も共に行くがよい。併し彼所へ下るのは、まだ急ぐべき事にもあらず、只此廓をば片時も早く、立去るに如くはなし」

墮落の僧、世の交の疎ければ、二度の煙も立兼て、妾は十四の春よりして、石巻の前齋と、いふ人へ妾奉公。此者は奥州の、鄕士なりしが右の手を、くじきて刀も持ち難く、仕官の望を思ひ絶え、山の姿水の流は、都に超したる景色なしと、北山邊に假住居。妾は其年姙りて、十五で産みしは此磯菜、かの前齋の貢にて、父母をも安く過せしが、不幸にして彼人も、世を早く過ぎ給ひ、此子を連れて家に歸り、行く程もなく父も病死、形見の金も使ひ失ひ、昔に彌増す貧苦の上、又苦を重ねて母渦浪、風の心地と打臥し給ひ、次第に重る樣ながら、今は藥をまゐらせん、手段に盡きて此廓へ、身を沈めたる黄金にて、心の儘に養生し、一旦本復ありしかど、母も今では世に亡人、此子の便は妾ばかり。されば今も宣ふ如く、身受なして得させんと、仰は度々ありしかど、此磯菜をも諸共にと、聞え難くて花も散る、此身も恥ぢず憂き勤。君はやう〳〵今年でお二十、妾は遙に年も長け、まだ其上に此樣な、娘を持ちしと知り給はゞ、いよ〳〵厭ひ給はんかと、わがあだ心の恥かしや」ト磯菜を膝に抱上げ、顏をも上げず泣き居たり。聞く度々に光氏は、深く驚く氣色にもてなし、「思ひがけなき事を聞けり、その前齋といふものは、腹こそ變れわが兄にて、義正公まだ御代を、治め給はぬはるか前、筋なき女に湯殿にて、戲れ給ひて擧けし御子、右の腕の利かざる故、武門の交思ひ絶え、早世されしと言觸し、

ら、異見の仕樣もあらうかと、親の愚痴から起つた事、必ず笑うてくれられな」ト只手を合せて拜まぬばかり、賴めば太郎高直も、琵琶之助が心中を、察しやりて顏色和らげ、「夫こそは最易し、宜しき樣に計らはん、心を安んじ待ち給へ」ト座敷へこそは通りけれ。

西の方の高樓に、光氏は席を設け、阿古木を初め數多の遊女、藝子なんども居流れて、高欄を背中にしつゝ、琴胡弓とり〴〵に、物の音どもを調合せ、いと面白う遊びしが、夜も少し更行く程に、光氏いたう醉惱める、有樣にもてなしければ、枕搔卷それ〴〵に、心を添へて退きつ、阿古木の外に人なければ、邊を顧み聲を潛め、「去る年心を付けられし、玉兎の鏡は義勝公、竊に隱置かれしにて、再び家に戻りたり。又勅筆の短冊は、御身が肌身に付置けば、我手にあるも同然にて、只此上は小烏丸、かの劒だに取返せば、三ツの寶は全く揃へり。心懸りは御身の上、人は知らじと言ひながら、足利の血筋の者、廓に置くが歎かはしく、身受なさんと言ひつれど、幼き時より我儘に、身を持なして今更に、武家の交むづかしと、今日までも承引かず、夜每に變る枕の數、末は夫婦と語ひし、男のあらば仲立せん、包まず語り聞かせよ」ト言はれて阿古木は溜息つき、磯菜々々と禿を呼び、「苦しき海に譬へたる、廓に浮々世を送る、ほだしといふは此磯菜、今まで隱せし身の上の、昔を言ふは恥かしけれど、豫ても知召す如く、父は母ゆゑ

めし柏之助が、「祕藏にあらう」ト言ふを打消し、目に角立つてなほ詰寄り、「いや、其事を聞きはせぬ、光氏君に面目を、失はせまゐらせし、今宵の仕方が合點ゆかぬ。さア其譯を」ト急立つを、押鎭めて小聲になり、「ハテ是から言はねば譯が知れぬ。ひとり娘を甘やかし、異見もせぬゆゑ桂樹が、日頃から蓮葉な身持、常々心に懸りしが、あとの月御所樣の、花の宴より歸りて後、夜に紛れて家を脱出で、世界に其名の轟く大德、一休禪師の許へ行き、尼になしてと願ひしかど、禪師更に許し給はず、糺の遊女地獄といふは、廓に在りて座禪觀法、されば佛の道に入るは、姿形に依るべからずと、送り返し給ひしが、夫より只管無情を感じ、數珠を離さず魚肉を喰はず、僅な間に顏も瘦せ、斯くては病氣になりもやせんと、蓮葉の身持を案じたる、昔戀しく夫婦の歎。此頃聞けば其夜さり、光氏君と細殿にて、忍び逢ひしと云ふ噂。もしや果敢なき夢を見て、及ばぬ事と身を歎き、夫故の發心かと、思ふよりして今宵の催し、保養の爲と桂樹を、無理に勸めて連來り、遊女や舞子を呼集め、日頃好き揚弓の、道具を宅より取寄せて、東の方のあの二階で、遊ばせて置いた程に、折を見合せ光氏君を、只何となく桂樹が、側へ誘ひまゐらせて、娘が素振を窺ひて、窃に我へ知らせてたべ。我々づくでいふ時は、光氏君は其許の、妹婿なり桂樹は、姪に等しき續がら、その仲立をと言ふではない、若し世の噂が眞な

めかしう、青葉の館と思はれず、何とやらん覺ありと、猶つくぐ〜と打まもれば、三筋町の二見屋の、廣庭に造花の、藤の棚を架渡し、景色を變へて見せたるなり。琵琶之助は打笑ひ、「汚穢しき我宿へ、いかでか御入を願ふべき。花もなべての花ならず、色美しきと聞えしは、此所を指しての事にてあり。外は散りても猶盛の、櫻も兩木候」とて、片貝阿古木を呼出し、「某お側に附添ひなば、御氣詰りにあらん間、はやく〜二階へ誘ひまゐらせ、言付け置いたる御肴にて、御酒一獻」ト勸められ、光氏もにっこと打笑み、「無念や汝が謀に、陷りて不覺をとれり。百萬騎の大敵に、圍まれしより最苦しく、兜を脱いで降參せり。殿してはや來れ」ト言捨て二人に誘はれ、頓て座敷へ打通れば、枝折戸の陰よりして、太郎高直ずつと出で、「樣子あれば此揚屋へ、今宵來れと貴殿の文通、其使と打連立ち、最前是へ來かゝりて、仔細はあれにて聞いたるが、阿古木の許へ若君の、折々通はせ給ふのは、何かは知らねど底深き、御所存のある事にて、遊女風情の色に溺るゝ、御本性にあらずとは、貴殿も兼て知らるゝならん。さすれば君のお忍び歩きは、知らず顏にもてなすべきを、何故にか此所へ、態々誘ひ給しぞ」ト問懸られて琵琶之助、默然たる顏を上げ、「血の餘とて老いての後、儲けたる子は可愛きと、諺にはいふなれど、我子不便と思ふのは、老も若きも隔はなし。桂樹は某が、十八才の時の娘。和殿も定

言ひつゝ文箱差出せば、光氏は其書翰を開き、再び父の前に出で、「此頃一日琵琶之助に、對面なしたる其時に、某へ申す樣、わが下屋敷の園の中に、花もなべての花ならず、色美しく房は長く、世に類なき藤のあり、盛の頃に藤の花の、宴を催し候はん、必ず渡らせ給ふべし、御出なくは口惜しと、くれ〴〵も言ひたるが、花も程好くなりたる間、此者どもを供に連れ、今より彼所へ來れよと、迎への人をおこせたり」ト件の手紙を見せければ、義正は打笑ひ、「おのれが園の花房を、いと長々と褒めたるは、したり顔にてをかしきぞや。類なきといふ藤は、赤くや咲く黄にや咲く、早う彼所へ行きて見よ。琵琶之助が妻師は、富徽が實の妹にて、汝に附置く高直の、女房は又琵琶之助が、妹にてあるなれば、緣といひ殊には舊臣、よも疎略にはなすまじ」ト仰に光氏辷り出で、粧を引繕ひ、道行く中に日は暮果て、待たるゝ程に渡り給ふ。琵琶之助は出迎へ、御乘物は此方へと、庭口より舁入れさせ、有難き御來駕の、一禮述べて土に手をつき、乘物の戸を引開くれば、唐綾の羽織小袖、態とあざれて袴は穿かず、よしや作の細身の大小、蠟色に櫻の蒔繪鞘、大盡姿の艶きたるに、花の匂も消おされて、興も覺むべき有樣なり。光氏邊をつく〴〵見るに、實に彼が告げしに違はず、藤は今を盛にて、燈籠の火を數多揭げ、さながら晝の如くなれば、殘る隈なる見渡さるゝに、磨立てたる高殿の、造り樣の今

に倒れて前後も知らず、目覺めて見れば傍に、猶去りやらず女は居れり。さすればさまで某を、猒ふとは見えぬものから、遂に其名を明して言はず、何とて言を通はすべき、樣をば敎へずなりぬらんと、心懸に思ふなり」ト問はせ給ふも馬之丞が、世に亡魂の御身に添ひ、彼に心の留れるなるべし。高直は扇を取上げ、今宣ひし事どもを、つく〴〵思廻らすは、琵琶之助の娘の桂樹、昨日歌舞伎の舞をかなで、裝束のまゝ醉倒れし、噂を聞けば夫ならんと、大方は推したれど、去る年雨夜に馬之丞が、物語りし事もあり、且は内々義尙公の、内君にとの御催し、その上に琵琶之助と、緣組みたれば小舅の、夫こそ娘に候なれと、あからさまにも言ひ難く、「扇は見知らず候へども、惟吉諸共おん館の、歸を窺ひ見定めて、扇の主の名は密に、申上げ候べし」ト夫より直に光氏の、御供に從ひつゝ、室町御所へ參りければ、光氏も御宴の事に、紛れて其日は暮しけり。

夢の間に、この如月も過行きぬ。かくて彌生の二十日餘り、光氏はひる頃より、室町の館に赴き、父義正の機嫌を窺ひ、次へ立出で茶を打呑み、休息なして居る處へ、近習の侍罷出で、「青葉琵琶之助が家來大勢、只今此所へ罷越し、若君へ此書翰を、奉らんと最前に、嵯峨へ罷出でたる處、是に渡らせ給ふと聞き、御跡慕ひて候と、御玄關に控へて居れり。如何計らひ申さん」ト、

の色麗しく、裏の白きに猶榮あり。其色の濃き方に、上にかすめる月を描きて、水に映りし心ばへ、ありふれたる繪様ながら、懐しうもてなしたり。弓張月と言ひし様、心に掛れば筆を取り、

世に知らぬ心こそすれ水の月

と書付けて置く處へ、高直御前に罷出で、「私父左衛門政則、今朝早く御所へ出で、君に申上ぐる様、僕は義教公の、御時より御三代、御家に仕へたれど、此度ほどに詩歌は更なり、能囃子物の音も、好く整ほりて聞く者さへ、さながら命を延るばかり、面白かりし事は覺えず、昨日の御宴にとりわけて、光氏君の櫻狩、我を忘れて立上り、翁もほと／＼舞出づべき、心地なんし侍ると、聞え上ぐれば義正公、御機嫌殊に麗しく、大内の大宴には、すべて後宴といふ事あり、畏けれども夫に學び、今日も花見て遊ばんと、仰を受けて御迎へに、只今參り候」ト聞いて光氏打點き、「頓て我も出仕せん。まづ其前に問ふ事あり」ト膝元近く招き寄せ、かの扇を前に置き、「汝是を見知りたりや。昨夜月の明きに浮れ、思はずも富徽の前の、住ませ給ふ細殿に、佇みて見入るれば、白綾に緋の袴、夫に似合はず蓮葉にて、斯様々々の女に逢へり。館に仕ふる風俗ならねば、富徽の前の身寄なるべし。言葉を懸けんと思ふ中、眠るともなく某は、彼所

元の所に桂樹は、立ちも立たれずうつかりと、御跡見送る後より、白糸水原を誘ひて、富徽の前は立出で給ひ、「義尚一人庭に殘り、月を詠めて居る由を、是なる水原が知らせし故、夫とはなしに桂樹を」ト言懸けて此方を見返り、「何恥かしき事はない、卯月になれば打ひろめて、義尚と婚禮さする。妾は昨夜宿直ながら、其事の氣に懸り、今朝は早う退いて來て、何かの事は水原に聞く」ト言ひつゝ見れば桂樹が、心の中の恥しさに、赤らむ顏をうち覆ふ、扇は富士に三保の浦、目を留めてはつと驚き、「ヤヽ、是は昨日御所樣が、是で舞へと光氏へ、賜りし舞扇」ト宣ふ側へ水原はすり寄り、「どれ〳〵御見せ遊ばしませ。ヲヽ、私も慥に覺、さては夜目にて召物の、對なを夫と見違へて、この唐戸を態と開置き、引入れたのは光氏樣」ト呆れてはたと取落す、扇を取上げ富徽の前、突立上つて齒嚙をなし、「言ふ樣もないいたづら者、御愛子なるを笠にきて、兄をも母をも蔑、今に思ひ知らせて」ト無念の拳に握詰め、思はず扇の要はばらばら。「あゝモシ夫は」ト桂樹が、言ふもいはれぬ我身の恥、只泣伏して居たりけり。

光氏は館へ歸り、打臥したれど寢入られず、かの樞戸は何として、昨夜は閉さで置きたるならん。夫につけても藤の方の、住居は造も奧深く、通ひ口の嚴しきも、心を用ひて下々まで、日頃掟の行屆く、故にこそあるらめと、淺まなりしに思ひくらべ、取替へしかの扇を見れば、濃紫

光氏君の所業なりと、御難儀の懸るは必定、眞に心を改めなば、只此儘に立別れ、館の者に怪ませよ。弟と不義をせし女を、よもや兄の内君にと、重ねては人も勸めず、富徽の前も此事は、思止り給ふべし。よしや浮名の立たば立て、光氏君と添臥を、眞にしたるにあらざれば、我への操は立つならずや。是より後は我魂の、折々毎に若君へ、通ひて御身を慕はせまゐらせ、義尙君との中をば斷たん。あれ〳〵四方に亂れ鳥、冥途の迎繁ければ、さらば」ト言捨て伏すかとすれば、光氏は起上り、夢の覺めたる有樣にて、邊を見ればかの女は、思ひ亂れし氣色にて、涙に暮れて側にあり。「醉心地や例ならざりけん、思はず此所にまどろみて、何事をも知らざりし。御身は如何なる者にかある、名乘り給へ」ト言ひければ、桂樹は涕打かみ、

恥かしや弓張月の水の影

貞を破つて二挺の弓を、引かんとしたる過を、言ふとは光氏氣も付かず、早白々と明行けば、人々も起騷ぎ、昨日の遊の面白きに、寢忘しなど口々に、言ざゝめきて行違ふ、氣色もしるくて何事を、問はんも心あわたゞしく、後に其名を知るべき印に、扇ばかりを取替へて、立出で給へば局々の、戸は早殘らず開渡し、光氏君が又例の、お忍び歩きとつきしろひ、見咎めながらむづかしと、空寢を爲たるもありしなるべし。

えしを問へと言掛けし、わが發句にも心付かず、浮世に狂ふいたづら者、許さん事は口惜しきに、是まで現れ出でたるぞ」ト面色變つて立上がれば、女はぞつと怖氣立ち、たゞ淺ましく呆れたる、樣にて詞も無かりけり。此方はほつと吐息をつき、「やよ桂樹、夫婦といふにはあらねども、祇園會の其時より、忍び〳〵に言語ひ、飽かぬ別をなしたるは、酒に亂れて悋氣深く、人も知つたるお家の近臣、琵琶之助が娘に似合はず、物見遊山に供人も、僅にやつして出で歩き、蓮葉な身持の故ぞかし。其心だに改めなば、表向より迎へんと、言ひしをよもや忘れはせまじ。富徽の前は自らの、姪ゆゑおん身に不便を加へ、義尙公の內君にと、私に仰はありながら、流石に我への義理を思ひ、今まで得心せざりしが、去年の夏某が、糺で殺害されし時、緣盡きずして思はずも、御身彼所へ行懸り、悲歎の涙に暮れたれど、去る者は日々に疎しと、早その歎は忘果て、此頃水原や白糸に、勸められて世にも居ぬ、人に操を立てんより、足利殿の內君と、傅かれんこそ增しならめと、遂にさもしい心となり、最前あなたを透見して、遠目といひ殊に又、對の御服を召したる故、義尙君と思違へ、樞戸を開置きて、光氏君を引入れしな。若し某が生存へて、此世に在らば其時は、汝何と言譯する」トじり〳〵と詰寄せられ、桂樹は物をも言はず、御佩刀に手を打懸くれば、扇を以て拂のけ、「此場で自害する時は、

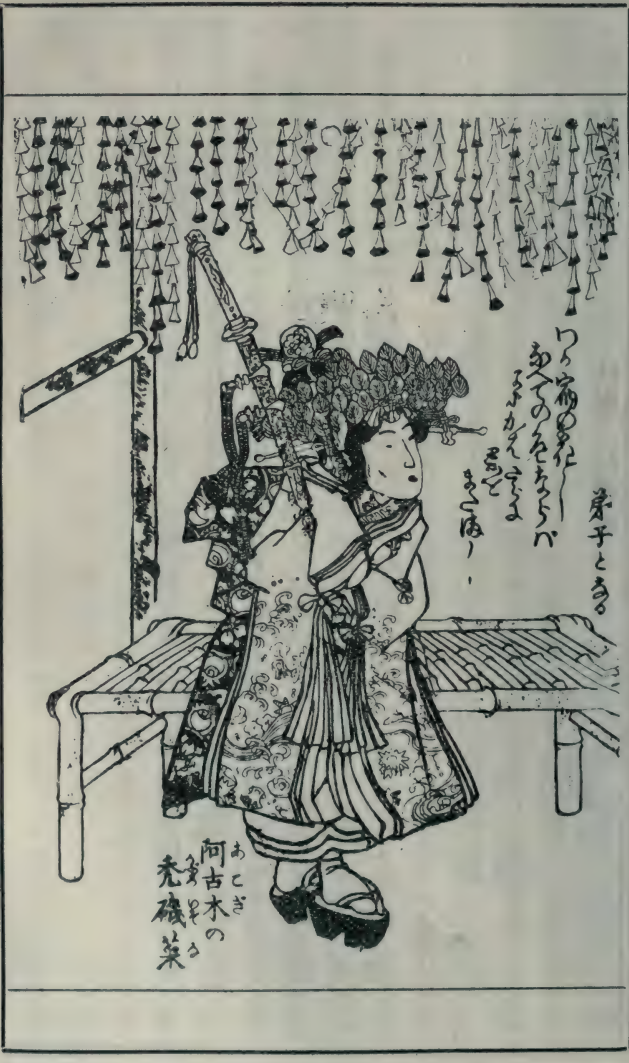
の袴を穿きて居れり。あら目馴れざる姿かな、何者ならんと身を潜め、猶も様子を窺ふと、彼方の女は心附かず、是も甚く酒に醉臥し、今日の覺めしと思しくて、袴は取つて高欄に投掛け、手を清め口を嗽ぐ。その間に光氏は、かの女の持て來りし、手拭を取隱せば、頓て其邊を尋ね巡り、人ある事を初て知り、打驚きし氣色にて、「其所に居るのは何者ぞ」ト、問へば光氏笑を含み、「疎み給へる者にもあらじ」ト少し前へにじり出で、

　問へかしな糺の露の草の原

ト言ひさまに戸は押閉てつ。女は胸も轟きて、戰く〳〵「あれ此所に」ト聲を立つるを押鎭め、「我は人に許されて、常に此邊へ來る者なり。されば人を呼びたりとも、夫を厭ひて歸りはせじ。さまでにわびしと思はれそ、忍びて語らん事のあり」ト宣ふ聲も泣々の、人にあらぬ姿形、女はつれ〴〵打まもり、心に思ふ事もやあらん、只若うたをやぎて、強き心も知らぬ様に、こは〴〵しくは待遇さず。光氏何とか思ひけん、女をはたと突飛し、ぢろりと見やる目の中血走り、「我を誰とか思ふらん。此世を去りし馬之丞、汝に恨を言はんとて、恐多くも光氏君の、此御姿をかりの世に、何れか殘止まらん、老木の花は咲殘り、若木の蕾はまづ落つる、老少不定は世の常ながら、まだ廿歳を多くも越えず、刃に掛つて果敢なき最期、糺河原の露霜と、消

十二編上

夜いたう更けてなん、花の宴の事果てける。富徽の前は義正の、宿直にとて席を立ち、藤の方義尙も、それ〴〵歸らせ給ひぬれば、今まで騷がしかりけるも、俄に長閑になりぬるに、月いと明う差出でて、をかしき景色を光氏は、程好き酒の醉心地に、見過し難く覺えければ、只ひとり庭に立出で、藤の方の住み給ふ、廊を忍びて窺ひ步くに、人々も打休みて、物音絕えて無かりしかば、寶の鏡水原の事、斯樣に思ひがけぬ程に、若しさりぬべき隙もあらば、藤の方へ聞えんと、立寄り給へど杉生司を、語ふべき戶口も閉したり、打歎きて人丸の、宮を拜して築山を、此方の方へ越えくれば、富徽の前の住居なり。何心なく細殿に、立寄りて打見れば、通口は開きてあり。かの宿置の留守ならん、人少なるけはひにて、奧の方の樞戶も、押開きしまゝ人音せず。斯樣な事にて世の中の、過失は爲るぞかしと、やをら昇りて差覗くに、人は皆寐ねたるなるべし、折から若うをかし氣なる、聲して扇を彈き鳴し、「朧月夜にしくものぞなき」ト謠ひながら、此方の方へ步み來る女あり。光氏つく〴〵透し見るに、白綾の小袖を重ね、緋


阿古木の禿磯菜


琵琶之助の娘
桂樹一休禅師の

修紫田舎源氏十二編序

實にいかさまに作替へても、源氏まがひの繪草紙は、葵と僞る蔓苧にて、其卷までは及びもなし。夕顔に至りなば、それかと寄りて視る人なく、若紫の色あせて、なつかしからぬ末摘花、紅葉の賀にて狂言の、事悉盡きんと推量り、既に前に引あげし、車爭ひの段にいたり、はやりたるが最悔しう、何に書きつらんと思ふにかひなし。されば彼車の牛を、馬道ならぬ三筋町の、罾の駕籠に乘かへても、筆は走らず口は硬く、おとなしき人々は、斯くなんせそと教ふれども、是は左様に世に傳ふる、冊子にもあらずとて、校合の手もふれさせず、網代のすこし馴顔に、物も見で綴りしなれば、表紙なども押折られ、すゞろなる簀箱のおくにおしやられて、紙魚の御物にならんかと、中々心盡しなり。

天保五年甲午正月　　柳亭種彦記

彼方の座敷に數多の女、光氏の聲を漏聞き、「あのお窓の目隱しの、隙からあれ〳〵お姿が」ト立騷ぐその中に、歌舞妓も已に果てければ、富徽の前はかの娘を、舞の衣裳の儘にて誘ひ、窓より窺ひ給へども、夕暮といひ殊には遠目、能くも見えねど何やらん、打囁いてかの娘に、教へ給へば藤の方、又若君の御事を、惡しざまにや宣ふらん、など斯くまでは憎み給ふ。とは言ひながら血を分けし、我子と言ふにもあらざるに、又若君をいとほしむ、己が心も怪しやと、自ら思ひ返すとは、富徽の前は氣も附かず、元の席へ立戻れば、藤の方はかの娘に、盃をさし給ふに、元より酒は好むとおぼしく、人も強ひぬに數盃を重ね、後にはいたく醉ひしにや、舌も縺れ行儀も頽れ、足はしどろに立上り、やう〳〵次へ辷り出で、袴も脱がず天冠の、曲みしまゝにて臥しければ、富徽の前は溜息つき、いと憂き氣色に見えけるにぞ、藤の方は氣の毒さ、白けし座敷をくろめんと、又盃を取上げて、浮世語に打紛らし、暫く時をぞ移しける。

この廣座敷の右の方、廊下口の唐戸を閉し、庭は築地に隔てたれば、花は一目に見えながら、男と面を合さねば、此一間を方々の、遊覽の席と定めつ。富徽の前は藤の方の、御子を擧けてときめけるを、安からずは思ひながら、かゝる折にはいつとても、親しげにもてなして、「今日は天氣も麗かなれば、貝覆ひ十種香の、氣の結ぼるゝ遊よりと、招き置いたる女あり、召使といふにはあらねど、妾とは親しき者。是が舞は幸若節、今樣などとは事變り、出雲の國より五條に登りし、お國といふが弟子となり、歌舞妓と稱へる俳優にて、なか〳〵興あるものなり」ト、宣へば藤の方、「夫は何より珍しい。杉生司もお緣へ出て、拜見しや」トいふ中に、「それ〳〵」ト富徽の前、差圖につれてかの娘、天冠を頭に頂き、御前へ立出でて、手を盡してぞ舞ふたりける。

やう〳〵入日になる程に、此方の間にても太郎高直、遊佐の國助始めとし、日頃能を好める者、樣々に興を添へ、いと面白くは見ゆるものから、紅葉の御賀の其時の、維茂には比べ難く、其折思し出でられて、義尙庭の櫻を折り、手を取つて光氏を、せちに責めさせ給ひければ、遁れ難く立上り、「いで〳〵花をくまふよ」ト櫻狩を只一さし、氣色ばかり舞ひ給へるに、似るべきものなく見えにけり。

の御所、今年は常より暖にて、今を盛のその景色、繪に寫すとも寫しえじ、さながら雪かと誤つばかり、築山は只白妙にて、或は泉水に影をうつして、魚も櫻の梢を潛り、或は築地に咲溢れ、行來の人も雲を踏む、日は能く晴れて空の景色、囀る鳥の聲々も、心地よげにぞ聞えける。義尙光氏始とし、文學に達したる、近臣多く打集ひ、探韻を賜りて、おの〳〵詩を案ずるに、光氏は、「春と云ふ字を、探取りて候」ト宣ふ聲さへ人に勝れ、立上りて賢げなり。兄義尙もその生、淸らかにして武道のみか、和漢の書にいと精し。されども才に誇らざるを、奥ゆかしげに見せんとや、萬の事を押しづめ、聲遣にも心を用ひ、もの〳〵しげに持成したり。其餘の人は晴々と、曇なき庭に立出で、うち列るも恥かしくて、臆し勝に見ゆるも多かり。漸く詩も作り果て、亂舞の遊に移りし時、赤松左衞門政則を、光氏は近く呼び、「去年正月二日の朝、御身の我に得させたる、袴の模樣の麗しさに、晴の折に用ひんと、仕舞はせ置きしが兄上にも、去頃同じ綾にて作り、進らせし由を聞き、申合せて小袖まで、今日一對に著せしかば、斯くはやしに列りても、一入榮ある心地して、滿足なり」トありければ、はつとばかりに頭を下げ、「怪しくやつれ見所なき、模樣には候へども、召させ給へる人柄に、依りては艶にも見ゆるなり。有難き仰を請け、恐入つて候」ト額に汗して苦しげなり。





ひ。しかし家來は狼狽へて、皆逃去りし樣子なれば、うか〳〵此所に居る時は、その連坐にて我々が、身にも詮議の懸るべし。早く山名のお館へ、立歸つて此事を、申上げんと言ひければ、馬刀助は打點き、「それ宜からん〳〵。この稻舟への光氏が、文には何を書きたる」ト、かはたれ時のまだ暗きに、提灯に透し見て、

家の寶玉兎の鏡、今宵不思議に手に入つたり。此鏡は義勝公より、そなたへ形見の品なれば、此秋八月良夜には、必ず返し參らせん。

「ふウ、玉の兎の緣をとり、月見に返す其鏡を、道にて此方へしめこの兎、差上ぐるものならば、宗全樣には御滿足。夫もよし是もよし。あゝ不便なは馬之丞、年若ながら武道に達し、力もありとの世の噂、夫に似合はず身體はこな〳〵、石堂どころか瓦堂、さて〳〵もろい死樣」ト二人一度に高笑ひ。折から來かゝる忍駕籠、中にはわつと女の泣聲、「石堂樣は御最期とや、そりや眞か」ト言ひながら、轉び出でしは色よき娘。此方の二人は吃驚敗亡、顏見られじと提灯の、火を吹消して跡くらませ、足に任せて逃行きけり。

以下は花の宴のおもかげに編めり。此次の年にて、光氏二十才の春なり。

如月の二十日餘り、義正公は室町の、南表の廣座敷に、櫻の宴をせさせ給ふ。その名の薫る花

北へ折れ、道を急がせ既にはや、加茂の宮居も近づく頃、乗物を暫したてさせ、かの頓五郎を近く呼び、「稲舟姫へ我君より、密事の御用を承り、既に是まで来りしが、何とかしけん君のお文を、御次の間の違棚へ、載置きて忘れたり、是なくては行きても詮なし。大儀ながら其方は、御館へ今より戻り、斯様々々に言入れて、受取りて来るべし。其中は駕を留め、我は是にて待合さん」ト馬刀助を供に連れさせ、早く〳〵とせり立てれば、頓五郎心得て、遙々嵯峨の館へ帰り、其由を言入れて、件の文箱を受取りつ、又もや彼處へ立戻る。其頃ははや横雲たなびき、曉天近くなりにけり。然るに最前石堂が、駕を留めし邊には、絶えて人氣のあらざれば、頓五郎そこらを見廻し、さてはわが遲きを待詫び、姫君の御館へ、行かせ給ふものならんと、心に察して糺の小橋を、渡らんとなしけるが、あら怪しむべし主人の乗物、轅も折れ戸も破れ、河原表に捨置きて、隨ふ供人さらになく、邊に血しほ滴りて、草葉もあけに染なしたり。只事ならずと近くより、駕の戸押除け差覗けば、あら無慘やな馬之丞、五體は續く所もなく、首さへも掻落し、持去りし體なれば、頓五郎は呆れ果て、暫し詞もなかりしが、馬刀助を木陰へ招き、「汝も我も宗全樣の、仰を受けて光氏の、樣子を探らんその爲に、石堂の館に奉公。何者の所爲かは知らねども、馬之丞が此最期は、手も濡さずに敵を一人、討取りたるにてもつけの幸

ト高直に、言付けやつて此方を見返り、「言の葉は指圖して、水原の床をとらせてやれ。高直と怪しい素振、己にふつと見咎められ、面目ないやら最前から、俯いて物をも言はぬ。若い中はあの樣に、恥かしいが女の情。いま一人も其方は知つて」ト仰に言の葉心づき、「珍しい綾浮さん、其所はあんまり端近な。水原さんも御一緒に、まあ〳〵此方へ。最前は、二葉樣の眞似をして、若君樣の仰でも、何か今では面目ない。紅さん早百合さん、何方〳〵もお達者で。綾浮さんに逢うたのは、ほんにいつの儘ぢややら」ト其方此方を打交ぜて、是より三人の物語は、うるさくてなん書漏せる。

此夜石堂馬之丞は、己が館に在りけるが、夜半ばかりに光氏君の、御直書到來して、何事ならんと披き見るに、

其方近年召抱へし、侍岸高頓五郎、同く小斷馬刀助の、兩人を何となく、供の中へ加へ入れ、只今館へ來るべし。仔細は直に言はん。

とあり。訝しながら支度を調へ、駕を早めて嵯峨へ赴き、「石堂參上仕つる」ト申入るれば光氏は、眠もやらずおはせしが、是へ通せと寢間へ招き、邊の人を遠ざけて、囁ける事半時餘り。馬之丞は、「仰の趣、畏り候」ト御前を辷り出で、乘物に乘移り、「此駕直に紅へやれ」ト東を望み

これより心を飜へし、忠を盡さば調太夫が、心も自然と和ぐべし。猶おだめいたる姿につくり、高直にも戲れよ、我にも親しく言寄る樣に、もてなして本心に、立返りしと悟られな」ト言諭し給ひければ、綾浮痞を撫下し、「その御鏡が夫ほどに、大事のお家の寶とも、今まではゆめ〳〵知らず、一間に忍んで母の惡事、聞いて驚く事ばかり。どうなる事ぞと思ひの外、今に始めぬ御仁心。母樣お前もお禮を」ト勸められても今更に、何と言ふべき詞もなく、たゞ手を合せ伏拜み、有難淚にくれにけり。光氏は機嫌よく、「綾浮が此鏡にて、顏を直して居るのをも、物陰よりは見たりしが、よもや寶が其方の手に、あらうとも思はねば、我も心の附かざりし。高直、水原も知る通り、父君はいぬる年、鹿が谷の北に當つて、別壯の地を撰み、高殿を建てられしが、襖屛風の類を皆、銀箔にて押したりとて、人銀閣と是を唱へ、遊覽の地と仕給ふより、東山殿と稱す。卽ち此所を閑居と定め、兄義尙に世を讓り、給はんの御心づかひ、近うなりし時に望み、三ツの寶のその一ツ、家に歸りてまづ安堵。又高直に言付けて、水原の懷中搜らんと、解ほどきたる其時に、縹の帶の中絕えて、落ちたる密書の事につき、馬之丞に言ふ事あり。言の葉はいづれに居る、料紙硯」ト宣へば、「あい」ト答へて持出づる、顏を光氏打まもり、「もう眉毛を拂ふたな、よい手廻し」ト戲れながら、何事やらん書認め、「此書狀を石堂の、館へ早く」

らるゝのみならず、義理ある姉は義正公の、愛妾の數ならずや。我山名へ入込みしは、彼が謀反の樣子を探り、君へ注進せん爲なり、なんの女の怜悧げにと、いよ〳〵罪に罪を重ね、立ちも立たれず取繕るも、裳を拂つて突出され、涙ながらに御館へ、歸りし後につく〴〵と、思ひ廻せは廻すほど、我と我身に愛想が盡き、恐多い若君へ、戲れ事を言懸けしは、年にも恥ぢず主に對ひ、いたづらな女めと、御憤を引出し、御手打になりたい願。取交したる密書には、お役に立つのもあらうかと、後にて御目に留るため、守袋の裡につめ、猶その餘りはこの如く、帶の縫目の糸をたち、中に隱して置きつるなり。然るに最前高直殿、妾が守を取られし樣子、さては此身の惡事の段々、はや知召すものならんと、思ふ折から御館へ、御使に參れと仰是さいはひと綾浮が、暫の中のお暇を、糺へ願ひて呼寄せたは、その御鏡を差上げよと、言付け置いて御佩刀の、銹となるべき妾の覺悟、思ひ懸ない高直殿の、刀が木太刀であつた故、生恥を晒したも、お主の寳を盜取り、敵に降りし天の罰。只此上のお情には、その差添を高直殿、貸してたべ」とぞ泣居たる。光氏は打點き、「木太刀と知らず我腹へ、突立てたれば言譯に、自害なしたも同じ事、敵へ內通した罪は、早消えたれば死ぬには及ばぬ。今までよりも白糸に、いよ〳〵親しき體に見せ、心を許させ置くがよい。夫について此光氏、又施すべき計策あり。

の仲立せし、人より四ツで別れし娘、成人なして赤松殿に、仕へ申すの由を聞き、飛立つばかり嬉しくて、直に彼方へ尋ね行き、この綾泙が其頃は、まだ中空と言ひし時、久しぶりにて親子の名乘。夫よりは折節に、忍び〳〵に逢ひながら、とこの山なるいさや川、いさと答へて我名をば、必す人に漏すなと、口固めして置いたれば、親子の外に此事を、知つたる者は絶えて無し。去年の彌生はじめつかた、いつもの通り密に逢ひ、娘の顔をつく〴〵見れば、物思はしき風情にて、やゝともすれば涙を落し、常の樣には話もせず、何ぞ樣子のある事か、私には隱す事は無いと、賺して問へば及びなき、あなた樣を戀焦れ、此願叶はずばと、命も惜まぬ覺悟の體。恥をも忘れ現在の、母に語るは能く〳〵な、事であらうと不便に思ひ、いろ〳〵と言慰め、夫ならば大切に、是を肌身に附けて居ると、望が願ふと其御鏡、渡して置いたは子の可愛さ。不思議な事でお情を、彼が受けしも御鏡の、定めて威徳で御座りませう。さて其後に噂を聞けば、調太夫は山名へ奉公。妾も敵に内通し、夫を功に又元の、夫婦にならんと今までの、御恩も忘れ血を分けた、娘をさへ袖にして、白糸より取入りて、有る事ない事宗全へ、是まで告げしは幾度か。愚なる身の淺ましさ、したり顔にて人をも頼まず、調太夫が堀川の、住居へ直に尋ね行き、まづ斯う〳〵と告げしかば、調太夫大に怒り、おのれが娘は光氏君、お目懸け

が夫には段々、深い樣子の御座る事、その先へ死去りし、妻といひしは御所樣の、お目懸けらるゝ千景の方を、産落したる先妻にて、綾泙を擧けたる、後妻は此水原。女心の淺ましさ、繼子を憎みし其上に、悋氣深いが妾の性、調太夫はもてあぐみ、先妻の子は養女にやり、綾泙が四つの年、私をも遂に離別。後悔先に立たずとやら、目の覺めたやうになり、心も屹度改めます、娘不便と思すなら、呼返して給はれと、いろ〱詫言したれども、もう四ツでは乳も要らぬ、己が一人で育てると、聞入なければ是非もなく、夫より方々彷徨ひて、稻舟樣へ宮仕。その御鏡を持つ者は、思ふ男に添はるゝと、お物語を承はり、盜取りしは調太夫と、元の女夫になりたさ故。綾泙を産んだ時、妾が年はもう四十、花なき顏が此上に、うつろひ行かば猶更に、呼返してもくれまいと、紅白粉で粧ひしが、お館中の噂となり、年にも恥ぢぬとつきしろひ、女中仲間の笑草。老いての後は思ふ樣に、立働きも儘ならねば、朋輩の嬲もの、慰みものになつて居ると、御奉公も勤めよいと、心の中に合點して、是此樣に華やかな、姿を今に改めず。又懲ずまに一昨年も、調太夫と親しく語る、人を賴みて今は早、互に登りし老の坂、せめては文を取交し、力となりて給はれと、書認めて送りしが、昔に變らぬ一徹者、一旦離別をした女の、文を見るべき道理はなしと、封をも切らず突戾され、重ねて言はん詞もなし。其時文

類あるべき錦にあらず。さてこそいよ〳〵盗賊は、汝なれと思ひ定め、腰元女を二葉に偽させ、取寄せてつく〴〵見るに、袋の錦は眞にて、中の鏡は似も付かぬ、今行はるゝ角鏡。又この錦と思ひ違へ、室町にて高直が、盗取つたる汝が守の、其中には白糸と、取交したる數通の文、山名へ心を寄する文體。夫のみならず今帶の、中より溢れし數多の密書、太秦裂の袋のみ、留置きて御鏡は、早宗全へ渡せしか。抑汝は誰が娘、誰が妻にて年久しく、紀の館に仕へながら、主恩を打忘れ、敵に一味なしたるぞ。我には何の恨かある。又今更に生害と、覺悟を極めし汝が胸中、訝しき事にぞある。高直と言合せ、今宵たはけをつくせしは、それらの筋を詮議の爲、包まず語れ、いざ聞かん」ト辯舌淀まず言流せば、水原はほつと息を吐き、「仰の通り御鏡を、盗んだは妾が仕業、今宵お返し申さんと、用意致して置きました。お受取遊ばせ」ト此方の一間に折向ひ、「さあ其品を上げたがよい」ト呼ばれて「はい」ト綾浮が、玉兎の鏡を恭しく、捧げ出づれば光氏は、燈火近づけとつくと見、「是こそ實に寶の御鏡、何として綾浮が」トいよいよ疑晴れざりけり。水原は面目なげ首し、差附いて居たりしが、やう〳〵に顏を上げ、「いへば言ふ程我身の恥、言はねば叶はぬ此場のしぎ、事長けれど一通、お聞きなされて下さりまし。此所に居る綾浮が、父の片攬調大夫、子供を殘して女房は、先立ちしと綾浮より、聞え上げし

して置かれしにて、盗賊の所爲ならずと察し、糺へ赴き人なき時、稲舟に問ひければ、姫が答へて言ひける樣、仰の如く其鏡は、父君の御形見、是を肌身に添置かば、必ず思ふ男に添遂げ、安らかに子を産みて、身に思はざる幸來り、如意寶珠にも劣らぬ守、故に其方にとらすると、仰せ置かれし事どもは、乳人が妾へ物語、人の難儀を救ふのが、御追善にもならんかと、その如く裏をすり、懐姙の女に與へ、是まで度々試みしが、皆いと安く産落し、産後に惱む者もなし、然ればいよ〳〵大切に、打臥す時も手箱に入れ、枕近く置きたるが、いつの間にか鶴龜を、鐫付けし常の鏡と入れかへ、その御鏡は先年紛失、今は裏をすりたるが、三枚四枚殘るばかりと、聞いて我も力を失ひ、して盗賊の手掛は、有りや無しやと押返し、問へば稲舟又答へて、只今も申す如く、妾が側を離さねば、腰元にふだん居る、女子の仕業に疑なし、合點のゆかぬはあの水原、妾が鏡を出す度、手を合せては伏拜み、又は額にさゝげ持ち、何やら祈念をなす樣子、もしや彼が心を懸け、取隱しゝかと物語。夫故に此光氏、いつぞやより戀に假託け、戯れ寄つて汝が樣子、窺ひ見れば案に違はず、取落したる此錦は、太秦裂といふにてあり。わが先祖尊氏公、洛西太秦廣隆寺の、聖徳太子を信仰あり、數度の戰に打勝ちしも、是皇太子の加護なりとて、彼寺に傳はりし、此錦の裂を乞受け、玉兎の鏡の袋を作り、納め置かれし品なれば、

數通の密書、高直は手早に取上げ、「御覽の如く水原の懷中、詮議なして候へども、夫とおぼしき物もなし。この書通にこそ故あらめ」ト差出すその中に、何思ひけん落ちたる刀、水原は取つて我腹へ、突立てんとなしければ、ほつきと折れて身に通らず。此方の一間に立隱れ、樣子を聞居し綾汗が、喫驚なして我をも忘れ、駈出でんとなしたるが、刀の折れて水原の身に、過なきに再び驚き、仔細あらんと押しづめ、なほも窺ひ居たりけり。高直は茫然たる、水原が側へ近く立寄り、「仰を受けたる事ながら、假にも君へ刃向ふ太刀、眞劍は恐ありと、夫こそは能狂言に、用ひる木太刀の箔置なれ。夫で腹は切れまい切れまい。我君いかゞ計ひ申さん」ト申上ぐれば光氏は、心靜に件の密書、彼方此方を打披き、悠然として水原に對ひ、「何かは知らねど捨身の覺悟、死は一旦にして易しといふ、はて死にたくば何時でも死なれる。まづとつくりと心を靜め、わが言ふ事を聞きたる後、汝が事をもゆる〳〵聞かん。足利の先祖より、傳る寶三品あり、故ありて殘らず紛失。その中に小烏丸、勅筆の短册は、未だ我手に入らざれども、有所は確に探り知れり。只玉兎の鏡のみ、詮議の手懸なかりし處、紀の館に安産の、守ある由傳聞き、藤の方御懷胎の其折から、杉生を使として、稻舟にかの守を乞求め、何心なく開き見れば、紙にすりしは立浪に、兎の形三日の月、寶の鏡の裏の模樣。さては伯父君義勝公、取隱

にも光氏君を、如何にするぞと悲しくて、慄ひ〳〵高直が、裳を取つてひかへたり。光氏はしどけなき、姿を恥ぢてやかの疊みし、屏風をおさへて楯となし、はひ隱れて顏をも出さず。高直は目を見張り、いよ〳〵怒れる氣色にもてなし、今宵忍んで來らんと、わが言ひつる其時は、しか〴〵と返事もせず、外の男を引入れて、これ見よがしのいたづら女、覺悟なせ」ト言ひさまに、刀拔持ち振上ぐれば、水原ははつと飛退きつゝ、「ア、我君樣〳〵、情に命を助けて」ト手を摺合せ伏拜む。娘の中かさなくとも、女盛にあらんには、哀れと人も見なさんが、齒は脱けて詞は漏り、顏はしわみて艶氣もなく、やうやく二十の內と外、若き男の其中にて、物怖したる其樣は、梅と櫻の二幅對、墨畫の枯木を其中へ、懸けたる如くに似合しからず。光氏は、つと立出で、打笑ひつゝ高直が、刀を拔きたる腕をとらへ、したゝかに爪りければ、刀はからりと捨てながら、猶笑をば押包み、恐ろしげなる顏色を、水原はこは〴〵後へ退り、亂れし裳を搔寄せて、脱捨置きし帷子を、引寄せて著んとするを、高直は、つと捕へ、更に宥さん樣子も無く、じりゝ〳〵と詰寄つて、「命惜くば助けてやらん、その代には下帷子も、剝取つて肌を顯し、恥かゝせてくれんず」ト水原が寐卷の帶をとき、脱がせんとなしければ、脱かじと此方は爭ひて、引あふ中に縫糸の、絕えもやしつらんかの帶に、綻切れてほろ〳〵と、中より溢るゝ

君ならば開けて來ませよそのつま戸トうたひ添へたり。叩くともよも開けじと、厭ふが女の常なるに、夫に變りて蓮葉なる、振舞は興醒めながら、心に思ふ事あれば、其儘には過行き難く、此方よりもはしたなく、戲ばみたる事どもを、言懸け給へば水原は嬉しく、「濡衣さへも憎からぬ、人のきせしは嬉しきを」ト、いと馴れ顏に寄添ひけり。折しも太郎高直は、水原が日頃の行の、訝しきを見顯さんと、息を呑んで窺へば、我より先に光氏君は、忍んで彼所の部屋にあり。時分は好しと心に點き、まづ水原を驚かし、樣子を探つて見るべしと、咳きしつゝ今閉てし、障子をほと〳〵音なへば、光氏は不圖是を聞つけ、高直なりとは思ひも懸けぬ、趣にもてなしつゝ、「さては水原は我館に、忍男の有るならん、其方の年と比べなば、誰かは知らねどおとなしき、人にこそあるべけれ。夫に似合はぬ我姿を、見つけられんは最恥かし。來べき宵にはさゝがにの、蜘蛛の振舞あるべきに、その印を我には告げず、憂き目を見する憎さよ」ト囁きながら脫ぎかけし、羽織を取つて屛風の後へ、隱れ給へば高直は、をかしさをやう〳〵堪へ、かの屛風に手を懸けて、ばたばたと疊寄せ、邊を蹴立てて騷がする。水原は前にも言ふ如く、年は旣に老いたれども、風流に身を持なし、かゝる難儀は昔より、身に覺ある事にやあらん、斯くまで心あわたゞしき、其中

十一編下

風冷やかに打吹きて、やゝ更行く程に人々も、皆眠れる氣色なれば、光氏はやをら起出で、寐卷のまゝの肌寒きに、衣桁の羽織引下し、やう〳〵に忍出で、女どもの常にすむ、局の方を心ざし、長廊下を彼方此方、佇みありき居たりしが、糸の音色の哀れげに、聞ゆるがふと耳に留り、向の方を打見れば、言の葉が部屋と思しく、障子を一間押開けて、夫に背中を打もたせ、

山城の、こまの邊の姥瓜を、ちぎりに來ませ。やれ、こまの邊の姥瓜を。

ト此頃はやる隆達節を、聲をかしう唄ひつゝ、かた撥の音色ほのかに、彈き居たるは彼の水原なり。肌著ばかりに媚きたる、姿形は若々しく、例の事にはありながら、年に似氣なき樣なりと、光氏が聞居ると、知るや知らずや彈止みて、懐へ手を差入れ、襟に顔を半かくし、溜息はつと吐きたるは、何をか物を思へると、心の中に打笑まれ、

月の夜に誰がさしたよこのつま戸

ト忍びやかに光氏は、うたひながら立寄れば、水原は其方を尻目に眺め、

なたの御用に立ちますか」ト差出せば光氏取上げ、「覺ある太秦錦、ヲヽこれにこそ〳〵。是を此方へ取上ぐれば、二葉になつて居るには及ばぬ、氣が詰るなら振袖を、脱いで明日は眉をも取れ。して又水原はどれに居る」ト問はせ給へば高直差出で、「最前の仰の如く、詮議を遂げんと存ぜし故、今宵は卽ち言の葉の、部屋に留めて置きたるが、夫についてをかしきは、今言の葉が其品を、受納むると先よしと、心の緩みし體に見え、近う〳〵と始に言ひし、詞とは引變り、今夜お前は私の部屋に、泊つて行きな、といひかくるを、はつと思ひて目ませで教へ、お心遣遊ばすな、女中の局に水原をば、留むる支度もなし置きたり。先入らせられましと、其場を兎角取繕ひ、輕々しからぬ樣、藤の方の御文も、私が受取つて、此所に持ちて候」ト差上ぐれば光氏は、取る手遲しと打開くに、詞は無くて、

　撫子や露のゆかりのながめ草

とばかり仄に書きさしたり。思ひ懸けなき返事に、胸打騷ぎて嬉しけれど、さらぬ風情に卷をさめ、高直には何やらん、なほ密計を言敎へ、まづ打休み給ひけり。

ずは遊ぶがよい。氣に入りの犬吉は、宵から見えぬが何所にゐる」ト言慰むる其折から、高直と打連立ち、言の葉は歸り來て、「まうし／＼若君樣、あなた樣の仰の通り、身にもそぐはぬ此振袖、帶の締め樣身のこなし、髮の飾も華やかに、さし飾つて赤松の、姫君らしく拵へて、歩みぶりをもしとやかに、褥の上に斯うちやんと、直ると頓て高直殿が、勿體らしく水原に向ひ、今日折よく二葉の上、此お館に御入にて、お目見え仰付けらるゝと、言はるゝと水原は驚き、夫は思ひも懸けぬ幸ひ、有難い儀と男の樣に、四角四面に挨拶し、恐る／＼に斯ういふ身で、這出づるをかしさ。三筋町の神林の、鵓の玉に生寫し、祝儀を貰ひに出た樣なと、思はずふつと吹出すを、やつと耐へて眞面目になり、聞及んだ水原とは、其方の事か苦しうない、近う／＼と言うたれば、はつとばかりに蹲踞り、暫くあつて顏を上げ、何ぢやか知らぬがむづかしい、事を言うては叩頭をし、又少し振仰向き、しやべつては叩頭をする、其中の長さ／＼。退屈はする氣は詰る、脇の下から冷汗が、流れるのを辛抱して、宜い程に應接ひ、其方の所持の鏡袋は、世に珍しい錦と聞く、手本にして妾が帶を、織らせたう思ふ程に、暫し貸してとお口うつしの、通りに申出しましたれば、水原は暫く考へて、いかにしてか御前樣の、御耳へ入りましたか、大切の品なれど、直の仰は否み難しと、惜しさうに懷中より、出して渡した此裂が、あ

ず上手めきたり。さて紫は琴を押遣り、小辨と共に繪草紙を、取出して見居たりければ、光氏は言の葉の、樣子いかにと立たんとするを、又何所へか行き給ふと、紫は心細く、草紙見さして俯しに、倒れ臥すを光氏は、哀れと思ひて側へ寄り、いと美しく溢れ懸る、鬢の髮を搔撫でて、「己が館に居ぬ時は、戀しくや思すか」ト問はせ給へば點くばかり、物も言はねば猶すり寄り、「我も一日逢はざれば、心もとなく思へども、打捨置かば世の亂と、なるべき大事のある間、斯くはさまよひ歩くなり。御身の成人して後は、外へは更に行くまじきぞ。此頃心を碎くのも、世を靜にして末長く、添遂げん爲にてあり、恨めしとな思しそ」ト細々語らひ聞ゆれば、流石に心恥かしく、答は無くてつい膝に、倚懸りしまゝ眠りけり。光氏は手を鳴し、夜食の膳を取寄せて、紫をゆり覺し、「今宵は館に用もあり、又もや雨も降出でん、雲行も暗ければ、はや他へ行く心はなし。我も直に此所へ寐ん、御身も共にしたゝめずや」ト聞いて紫胸おち著き、心も解けて膳に對ひ、箸をば取れど何とやら、氣むづかし氣にろく／＼に、物を食はぬを打見やり、「物も食べたうないならば、其所へ小辨に床をとらせ、先へやすみや」ト光氏に、勸められても其後にて、忍んで出行き給ふかと、疑はしくて寢もやらず。光氏は笑を含み、「禁裏の宿直さては又、父君の召にもあれ、其方の夫ほど案じるを、見捨てていかで行くべきぞ。眠氣がつか

言の葉は興さめ顏、「どうして、夫が私に」ト言ふを光氏打消して、「其方を此所へ呼ぶ前に、人の目に立たぬ樣、眉毛は旣に拂はせたれど、此春より又眉毛を、剃らずに置けと言付けたは、水原を招いで彼品を、奪はせんとの豫ての心算。簪は紫ので、大方は間に合はふ、振袖の帷子は、ゆきたけの合ふ樣に、用意して早置いた。男では角が立つ、さも有りさうに柔かく、其方が言うたら實と思ひ、うつかりと渡すであらう。さあ早う支度しや」ト小辨を呼んで帶帷子、取出させ給ひければ、言の葉はせん方なく、手早に鏡臺引寄せて、華やかに粧ひつ、帷子取つて著替る隙に、光氏は高直を、側近く招き寄せ、「汝も隨分油斷なく、斯樣々々に計らへ」トひそ〳〵聲に言含め、言の葉諸共追立やり、後見送つて座に戾り、「さぞ紫は退屈ならん。小辨、其琴此所へもて」ト押直させて光氏は、雲井の調子に搔合せ、差遣り給へば紫は、今日の恨は晴れねども、いと美しう引鳴し、小き手にはありながら、おしいろの音も能くすみて、いと愛らしく見えければ、笛吹鳴して其所に斷く、此所はかうこそ彈くものなれと、敎へ給ふにむづかしく、調べ難き所さへ、ひとわたりにて習取り、末賴もしう見えけるにぞ、光氏はわが思の、叶ふ樣なる心地しつ、「此頃唄ふ柴垣、菅笠、獅子踊などいふ物は、名はにくく聞ゆれど、をかしき節よ」ト面白う、笛吹すまし給ひければ、夫について搔合する、まだ手づかひは若けれど、拍子違は

目を細め、つれなき人の忘れ草、あなたの心に随ふが、いつそ優しとは思へども、どういふ因果か其人が、わしや忘られぬと涙を流し、白粉はとゞろはげ、いよ〳〵二目と見られねども、斯くては果てじと心を勵し、今宵是に泊りなば、夜更けて後に忍ぶべしと、背打叩けばにつこりと、笑ひし顔は目について、今夜眠らば魘れん。つれなき人とは我君の、御身の上と覺えたり、壓の強い奴などと、下様に云ふ烏滸の者、いかに計らひ申さん」ト聞いて光氏打喜び、「此方より迎へをやらんと、思ふに幸ひ、ヲヽよし〳〵。これ言の葉、今聞く通り水原といふは、早六十に近き老女、それに似合はぬ色好み、我へも心を懸けしと思しく、戯れ寄りし其時に、懐より落せしは、わが久しく尋ぬる錦、能く見留めんと思ふ間に、水原は慌て押隠し、足早に迯去りぬ。夫故是なる高直に、言付け置きて今日暮方、彼が持ちたる守袋を、盗取らせて能く見れば、金襴の紛ひ織、わが望の品にはあらじ。元より大事の物なれば、肌身を離す謂もなし、さては常々人に隱し、帯の間へ差込み置く、鏡袋が夫なるべしと、心は附けど我々には、奪取るべき手段なし。水原は紲の館に在りて、いぬる年より室町へ、召させられたる者なれど、此館へも來るははじめて、赤松の屋敷なんどは、門をくゞりし事もなし。されば二葉に對面せず、其方の顔をも知らざれば、まづ斯くなして彼が持つ、鏡袋を取つてくれ」と耳に口よせ囁けば、

憎い事、誰に習うて口馴れし。指南をしたか言の葉」ト仰につこり打笑ひ、「是は又迷惑な、紫樣も辨の、無いお年と云うでもなし、お氣の揉めるも御尤、幼馴染と紅花染は、色が褪めても黄が殘ると、なげ節にも唄ふ通り、二葉樣とは久しい御緣、三筋町へのお忍び歩き、糺もたゞして見たならば、どうやら怪しい詞のあやなぎ、ゆかりの色の藤の花、あゝでかうでと人の噂。このお子樣が私で、御覽遊ばせ御所樣へも、赤松樣へも連立たねば、お一人は遣り申さぬ。ほんに齒痒い事だらけ」ト疊叩いて腹立聲。「これ〳〵己があやまつた。紫をたしなませて、くれるであらうと思ひの外、ほふかい悋氣に此光氏、返答も殆ど當惑。あれ〳〵誰やら人が來る、靜にしや」ト留むる折から、太郎高直罷出で、手をつきしまゝ詞もなく、稍暫く打笑ひ、やう〳〵に顏を上げ、「重ねて水原に面會なさば、實に彼へ戀慕と見せ、言寄るべしと此夕暮、道すがらの君の仰、私と較べなば、四十も違ふ老女房、御馬前に捨つる命は、露塵ほども惜からねど、此事ばかりは身に取つて、なんばう苦しく候ゆゑ、何卒水原が頓死するか、さなくば是より逢はざる樣、神を祈りし詮もなく、藤の方のお使に、只今彼が罷越し、このお館へは始めてなれど、夫に似合はね仕こなし顏、今宵は一宿願ふとやら、お座敷へ押直り、悠々とした面の憎さ。併も嚴命もだし難く、近く居寄りて樣々に、戲れ懸れば誠と心得、例の窪みし

し、暫く詠め居たりしが、

撫子を見るに置きけり袖の露

と光氏が文の奥に、書載せたる發句を吟じ、小膝を打つてにつこり笑ひ、「このお返事を上げるには、願うてもない好い便」ト筆早に書認め、かの水原を呼出し、「此文を嵯峨へ持行き、光氏君に進らせ給へ。夜も更行くかさなくとも、御用もあらば若君の、お館へ今宵は宿り、明日戻りても苦しうないと、御所樣の御差圖、急いで支度なされまし」ト聞いて水原はわが願ひ、今宵こそは叶はめと、悦びながら出行きけり。

夕立の名殘涼しき宵のほど、光氏はしどけなき、姿をとりも繕はず、笛を取出で懷しう、吹すさびつゝ細殿を、傳ひて心慰めに、西の亭へ赴きつ、差覗き給へれば、紫はかの撫子の、露に濡れたる風情して、言の葉に添臥したる、其樣の美しさ、愛敬は溢るゝ樣にて、尻目に此方を見やりながら、光氏の今朝よりして、音づれざるを打腹立ち、背差向けて物をも言はず。光氏緣の柱にもたれ、此方へ〳〵と打招けど、身動きもせず振返り、「ひとつとや、人に物を思はせて〳〵」ト手毬唄を口ずさひ、振の袖にて口元を、覆ふ姿はこまざくれ、馴顏も又美しく、光氏はにこやかに、「ふたつとや、ふたり寐る夜の繁々にて、あかるゝよりは增しならん。其樣に

つかず、「今の二人が物語、遠く忍びて居たりし故、事の樣子は聞留めねど、水原は鬢に置く霜の、消えて花香のなき身を恥ぢず、言寄る心のいとほしさ、情あり氣に打答へ、光氏は歸りしなるべし。御身は只夫となく、光氏がつれ〴〵を、問慰むる文をかき、その使に水原を呼び、夜も更行かば嵯峨の館へ、今宵は泊りて明日早く、歸り來れと言付くべし。一夜彼所に宿らせなば、かのしれ者何をか爲出し、うるさき事よと光氏が、逃隱るゝも一興ならん」ト機嫌よげに宣ふにぞ、藤の方はやう〳〵と、心落著き笑を含み、「管絃の折はいつとても、男の中へ立交り、琵琶はとりわけ水原には、優る人なき上手なれば、若君の好いお慰み。只今申付けませう。妾がいつもの拙き筆、御前に執るも憚りな」ト直にお次へ辷り出で、料紙硯を取寄する。折から例の腰元司、「走り來つて聲を潜め、「最前に夕立の、降出したる其時分、光氏樣がつゝくりと、お庭を詠めて御座りましたが、私をお側へ召され、何となく靑み渡る、其中に常夏の、華やかに咲いたる事よ、折りて參れとおつしやる故、そのまゝ手折りて露を拂ひ、差上げましたら此樣に、何やらお文を結び付け、折もあらばあなた樣の、御覽に入れて愛らしき、この花片へ塵ばかり、お返事取つて參れよと、密の仰に侍る」ト差出せば此方にも、物いと哀れに思ひ知る、事のみ繁き折なれば、まづ打置かず取上げて、書きたまふ事多かるべし、繰返し卷返

廓下の此方も奥殿へ、通ふ道にてありければ、義正は藤の方、其外數多の女を引連れ、廣座敷へ出でんとして、何心なく窓の障子の、中より彼方を差覗けば、水原が只管光氏を、捕へて何やら打泣く體、をかしき事ぞと振返り、藤の方を招き寄せ、諸共に始終を見終り、頓て設の席に直り、義正は聲を潛め、「若きに似合はず光氏は、女につれなき生れ故、二葉と中の睦しからずと、心に案じ居たりしが、今の樣子を打見れば、情を知らぬ者にもあらず。さはさりながら水原とは、似合はしからぬ年の程、いと訝しき事にぞある。此所に居流れし、腰元づかひの女には、見苦しからぬも多くあり、夫に心を留めざるは、若き女は目に馴れて、珍しからずや思ふらん。虛實は知らねど去頃より、嵯峨の館へ人知れず、女を迎取りしといふ、風聞高く赤松の、館にも聞傳へ、二葉を始め附々の、女も妬く思ふ由、我耳へも入つたる故、捨置き難く光氏を、密に招いで次第を語り、人に恨を受けざる樣、此後心懸くべしと、教訓なしゝ其時に、畏まり候と、答へしのみにて座を退き、かの女は何者とも、樣子は我に告げざりしが、今日の體を倩見るに、夫も是も只一時の、戯にして光氏は、眞に心の打亂るゝ、本性にはあるべからず。御身は如何に思すや」ト問はせ給へば藤の方、我身の胸の苦しさを、試み給ふものなるかと、思へば答ふる詞もなく、「仰の通りに侍らん」ト、只差俯き居たりけり。義正夫とも心

御手に懸けてお刀の、錆となるのが私の願、どうぞ殺して給はれ」ト恨みかけ口説きたて、俯し倒れ泣叫ぶ。此時太郎高直は、水原の聲を聞附けて、小陰に窺ひ居たりしが、折こそ宜けれと抜足に、水原の後へ立廻り、背負守とか言慣はす、帶を結びし其間へ、挾みし守へ手を懸けて、紐引解いて取上げれど、泣くづをれしを光氏が、介抱すると心得て、水原は更に是を知らず。高直は光氏と、顔見合せて笑を隱し、少し後へ引退き、今來る樣に廊下の板を、どう〳〵と踏鳴せば、水原は別に人ある事を、やう〳〵に心附き、流石に顔を打赧め、袖打翳して迯行くを、高直は遙に見送り、「後姿は二十山、前に對へば田子の浦、浪の寄せくる額にも、恥ぢる樣なきいたづら者、御側近く寄せ給はゞ、思ひの外の事なりと、嘲る者も候べし。又彼が守袋、折あらば取隱し、得させよとの御仰、便宜なくて等閑に、今日まては打過ぎしが、今水原が前後も忘れ、歎くをさいはひ其隙を、見すまして奪取つたり。抑君はこの守を、何にかせさせ給ふならん」ト不審顔に差出せば、光氏守を手に取上げ、「二重鶴のまがひ織、是には何の用もなし。いつぞや確に見留しは、鏡袋にありけるならん。夫を此方へ取る手段は、まづ斯う〳〵」ト高直の、耳に口よせ打囁き、猶も水原を詐かる計策、道すがら物語らん。サア供せよ」ト光氏は、嵯峨の館へ歸りけり。

郭公　來鳴くを聞けば大あらきの森こそ夏の宿なりけれ

と知家も讀みたれば、扇に書きし此森の、下臥願ふ者もあらん。戀は姿に依るものかは、さなきそト言ふ中も、似合しからぬ戯を、邊の人や見附けんと、心苦しく立たんとするを、水原は厭ふ氣色もなく、

來て見よやさかり過ぎたる姥櫻

ト言ふ樣もいと馴れ顔に媚きたり。光氏はます〳〵興さめ、立つも立たれずつれ〴〵と、水原の顔を打まもり、

手折りなば人や咎めん姥櫻

よしや老木にあればとて、誰か其儘見過さん、されば今まで詠めたる、人の咎も煩はし、枯れて花なき枝ながら、詞に花を持たせつゝ、遁れ出でんと仕給ふを、水原は慌てて引止め、「髪の縁も冬柳、雪を頂く此年まで、斯くもつれなく待遇され、物を思ひし事はなし。老いての後の身の恥を、不便と思し給はれ」ト打歎かれて持餘し、「夫には折もまた有らんと、思ひながらの橋柱、絶ゆるも人目ある故ぞ」ト引放せば猶縋付き、「人目に中の絶ゆるとは、そりやあなたのお詐、その橋柱朽果てて、古ぬる我身を厭うての、事とは合點しながらも、思ひ切られぬ身

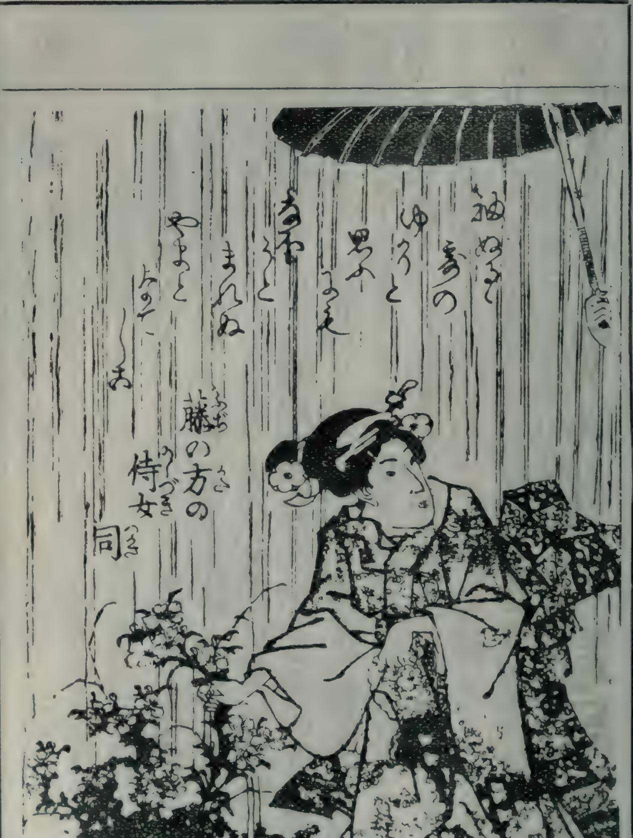
り清げに出立ちたる、水原の樣をつく〴〵見るに、薄き額は眞菰墨に、黑々と際を取り、鬢簑髱を入れたりけん、房やかに髪を結ひなし、肌に著たる紅を、見せんためにや最薄き、帷子を上に引懸け、模樣の好み帶の色、皆今樣にて若々しく、いと華やかなる粧なれば、年にも恥ぢぬ姿かなと、懷しからずは思ふものから、心の中は如何なりけん、例の嬲りて遊ばんと、邊に人の無きのを幸ひ、言葉も懸けず光氏は、やをら水原が帷子の、裾を捕へて打笑みつゝ、引驚かし給ひければ、色美しき扇を開き、差翳して顏を隱し、此方をぢろり見返りたる、目の皮は強く黑く、落窪みて穢げなり。衣裳のみかは扇の繪さへ、華々しくて似合しからず。何をか書けると光氏は、頓て我扇を拔取り、「男に顏を差向けて、まもらるゝを恥ぢ思はゞ、夫にて覆へ」ト投出し、かの扇と取替へ見るに、赤き色は持つ手へも、映るばかりに色濃きに、小高き森を綠靑にて、靑々と塗隱し、森の下草老いぬればと、その傍に書きたるは、水原が筆と思しくて、よしある手とは見えながら、筆艶もなく古めきたり。光氏いよ〳〵心にをかしく、

　大あらきの森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし

との古歌の二三の句を、書きすさびて置きつるは、若草ならでは刈る人なく、馬にかひても喜ばずと、老いたる其身を草に譬へ、思を懸くる人の無きを、打歎いたる述懷ならんが、

十一編上

室町殿の御身近く侍ふ、水原といへる女ありけり。彼は久しく糺に在りて、稻舟姬の傅きなりしが。男の髮を上げる事を、能く手馴れし由聞えければ、去る年よりして御所へ召され、義正公にぞ仕へける。年の程は五十の上を、七ッ八ッ越えたれども、人柄は賤からず、心も賢き方ながら、あだめきたる生にて、髮の飾衣裳のあや、若やかに粧ひつ、小笹の霰萩の露、觸らば落ちん風情なるを、光氏日頃目を留め、娘を早く舉けなば、曾孫をも持つべき年なるに、かく心の亂るゝは、いと訝しき事に思ひ、戲れごとを言懸けて、試み給ふにかの水原は、嬉しさ面に現れて、似合しからぬ中なりとは、思ひも寄らぬ風情なれば、光氏は呆れながら、かゝる樣も又をかしく、折節物など言ひつれど、若し人の漏聞かば、斯く古めかしき女に戲れ、狂氣せしかと笑ひやせんと、此頃は遠けて、傍へも寄せざりければ、水原はいとゞ光氏が、辛き心を打歎き、くよ〳〵案じ居たりけり。さて一日、水原は奧へ召させられ、義正公の御髮を、例の通りに上げはてて、長廊下へ差懸り、部屋へ退かんとする折から、光氏は不圖行合ひたり。常よ


藤の方の侍女
同


足利光氏

修紫田舎源氏第十一編序

梅が咲けかしイヨ八重梅が、枝を手折るふりしてかならずござせ、トサさまをまねく。夢になりとも逢ひたや見たや、浮世ぢやな。稀に逢ふ夜は現か夢か、かたる間もなきサンサ短夜や。よしなの思ひ、浮世ぢやな。松の葉元禄十六年印本に載せたる、八重梅といふ曲子なり。昔は流行れし唱歌とおぼしく、俳諧柳の水元禄十三年撰の文に、冬枯し聲に八重梅を薫せ、云々。又古今我集寶永年間寫本酌にたつ毎に八重梅、二上りに八重梅、うたふその八重梅を」といふ事見えたり。是に錄して序にかふるは、たゞ梅の花の色のごと三笠山のをとめと、風俗歌を源氏のうたひ給ひし事をまなびて、十編の尾に光氏が、梅がさけかしイヨ八重梅がと、此小歌にひきかへしゆゑにてあり。

天保五年甲午春　柳亭種彦記

光氏君をも彼の様に、幼い時から御寵愛、兄君をさへ差越して、世を讓らんと遊ばしたれど、富徽様を始とし、人々も其事は、承引せぬゆゑ是非もなく、嵯峨の館に置き申すを、今もつて御所様は、心苦しく思召す、其折から今度又、夫に似た子が御誕生、御成人の其後は、又お館の騒がしい、事が大方起るであらう」ト邊を更に憚らぬ、高聲を光氏は、さすが憎しと思ひければ、我漏聞きしと彼等に知らせ、物懲させせんと聲打揚げ、「花が咲けかし、イヨ八重梅が」ト唄ひすさびて出で給ふを、をかしき聲ぞと女ども、皆立出でて見送りけり。

と、笑へる顏の美しきに、我身ながらも此兒に、似たらんには憎からぬ、幼だちにて有りしならんと、心奢のするにつけ、母花桐の事をさへ、思出して見上ぐれば、義正は猶かの兒と、光氏の面を見較べ、餘念もなげの有樣なれば、愚なる身を斯くまでも、愛し給はる父君の、其御心に背かんと、態と浮名を世に流すは、如何なる因果にあるやらんと、心地もさながらかき亂る、樣なれば御前を立ち、常に通はぬ長廊下へ、ふと行懸りて何氣なく、差覗いて見給ふに、此所は富徽の前の、傅きの女どもが、集る部屋と覺しくて、かの白糸が眞中に、押直りて指折り數へ、「藤の方の今度の御產、一ト月延びたにした處が、四月からで無ければ合はぬ。御添臥は二月限、もう其頃は音川の、館へ歸りて住み給へば、怪しい事ぢや」ト打笑へば、一人の女が差出でて、「噂に違はず光氏樣の、お子に彼は極つた。紛れの無い御顏付、あれ程似申したを、思ひ懸ない事なれば、御所樣はお氣が付かず、何でもよい子は此樣な、ものと思うておいでの樣子、他目に見るも齒痒い」ト口々語るを光氏は、漏聞くからに豫てより、覺悟の上には有りながら、今更に最苦しく、面の色も變るべき、心地なしつゝ忍びゐる。又彼方には藤の方、積る思ひのやる方なき、胸の中を光氏に、密に語聞かせんとや、後よりひそ〳〵來りしが、これも襖に立隱れ、我身の上を聞くせつなさ、汗も流れて戻るにも、戻り難くて佇みけり。夫とは

御顔ばせ、珍らしき程似申して」トまだ若やかなる心から、辨へもなく言出づるに、はつと思ひて杉生は、袖を引いて押止むるを、光氏は見ず聞かぬ、風情にもてなし歸りけり。

四月になりて藤の方、室町へ歸り給へり。義正始めて其子を見るに、誕生ありてまだやう〳〵、三月目なれど其程に、較べては形も大きく、智慧づきのいと早くて、起返りなどもしつ、顔の樣子は光氏が、生れ出でし其時の、有樣につゆ違はず、同じ光に見えければ、瑕無き玉の思ひして、その喜び面に現れ、眞は花滿中將の、忘形見の藤の方、その腹に生れたれば、母の素性も恥かしからじと、寵愛する事大方ならず。光氏この由聞くよりも、直樣に御所へ赴き、藤の方の産後の惱、名殘なくさわやぎ給ひ、歸られたる祝を、表立ちて杉生の、許まで文にて言遣りけるが、折よく義正彼所に在りて、かの幼子を傅きの、女に抱かせ立出で給ひ、「ヲヽ光氏か、能くこそ〳〵。我數多の子は持ちしかど、産屋を離れて日を經らず、かゝる程より旦暮に、見たるは御身のみにてあり。思ひなしにや此子の顔、いと能く其方に似たる故、猶いとほしく思ふなり。幼き中は何の兒も、かゝるものにや有らん」とて、只管愛し給ひければ、光氏ははつとばかり、恐ろしくも忝なくも、嬉しくも哀れにも、さま〳〵に思ひ亂れ、落つる涙を押隱し、手遊の振鼓を、差翳してつく〴〵見れば、かの幼子は夫に目の、移りやすらんにこ〳〵

れり。いで其御子を我に見せよ。様子を直に言上せん」ト言ふのを聞きて杉生は、少し進みて面を上げ、「生れ給ひてお日数も、たゞざる中は清からぬ、御顔容を御目近く、見せ奉るは憚あり。夫のみならず若君の、是へお出なされし様子、もしや藤の御方が、知らせ給はゞ御産後の、御悩の障とならん。はやく御帰り遊ばせ」トいとはしたなく差放ちて、聞え上ぐれば不興気に、「夫は如何なる故なるぞ」ト問はれて聲を打潜め、「さも無き事をも言續け、疵を附くるは人の口、殊にあなたは怪しかりし、御過失を世に知らせ、浮名を漏すが御望。藤の方も其事は、能う御合點をなされてなれど、女の果敢ないお心では、いと憂き事と思し續け、はや身二ツになる上は、浮世に思ふ事もなし、いつその事に此病が、重つて妾は死にたいと、おむづかるのがいとほしく、私が申すには、光氏君の御事さへ、呪う様に富徽様が、仰せありしと紅葉見より、お歸りの後御物語、さすればあなたが此儘に、果敢なく過行き給ひなば、内君始めその附々、いと好き事と笑ひやせん、それ口惜しと思召し、はや御本復遊ばせと、お力を附けてより、お心もさわやいで、お案じ遊ばす程ではない。室町へお歸りも、もう遠からぬ中の事。お生れなされた和子様をば、その時御覧遊ばせ」トすげなき體に光氏は、言葉を盡し言ふとても、詮はあらじと暇を告げ、立上れば杉生が、後に控へし腰元司、「御誕生の若様と、光氏君の

ぬ、籬の下の紅梅は、いと早く咲く花にて、色付きしを光氏見やりて、

　紅の花は見憂きぞ梅ながら

トひとり言して何やらん、打うめきてぞ居給ひける。かの腰元の紅と、身をやつしたる眞の稲舟、假に姫と傅きゐる、門守の翁の娘、かゝる人の末々は、如何なりけんか蓬生の、巻に至りて詳しく言ふべし。

　末摘花の巻全く畢んぬ。是より紅葉の賀の巻の、說き殘したる事へ移れり。

藤の方の御懐胎、旣に師走も過ぎにしかば、此月はと杉生始め、附々は待聞え、室町にてもその設、頻なりしが氣色もなく、睦月もつれなくたち行きぬ。物の祟におはすかと、人々の言騒ぐに、藤の方は猶わびしう、いと苦しくて惱みまさり、室町へは歸りやらず、かの音川の下館に、引籠りて居たりしかば、義正の案じ大方ならず。光氏も夫とはなしに、加持祈禱などせさせけるが、其驗にや如月の、十日餘りに安々と、男御子をぞ產み給ひぬ。此所の館に附添ひゐる、人々は言ふも更なり、御所に仕ふる面々も、悅び聞えて其所此所より、使者は門に市をなし、騷がしきまで賑ひければ、光氏は其人の、絕間を窺ひ彼所へ行き、杉生に對面し、まづ平產の悅を、細々と述べて後、「如何なる樣かと父君の、覺束ながり給ふ事、昨日に今日は猶勝

さ堪へ袖をもて、口に覆ひて物言はず。紫は其故を、知らねば後に伸上り、鏡にうつる光氏の、顔を倩差覗き、「何の眞似をか仕給ふ」ト聲打揚げて笑ひければ、光氏は此方を見返り、「若し某が此様に、不具にならば如何ならん」ト問はせ給ふに紫は、眉を顰めて吐息をつき、「夫こそ悲しく侍らめ、若し染付いて落ちぬとわるい、其様な事は廢にして」ト危く思ふ氣色なれば、光氏態と紙をもて、落ちぬ程に押拭ひ、「如何にも其方の言ふ通り、元の様には白くならぬ、益なき事をなしてけり。室町の父君に、何と言譯なすべき」ト眞しやかに云ひければ、紫はいとほしき事と思ひて振袖へ、鬢水入の水をつけ、立寄りて押拭へば、光氏はにつこと笑み、「昔平仲といひし者、泣く眞似をして女に見せんと、硯水を付けたるを、女が夫と心づき、そつと墨をすりたるを、知らずに猶も目へ摺付け、顔を黒く染めたるは、墨塗といふ狂言に、まなびて今もする事なり。其様に押拭ひ、なほ〳〵紅を散らすまい。赤き物はあやかると、諺にも言ふなれば、我顔中を紅に、染なす時は平仲が、墨にも増して見苦し」ト戯れ給ふを言の葉は、をかしき妹背の御中と、思ひなしつゝ立上り、「今日は空も晴れたるに、斯く立籠めておはしなば、御心も結ぼれなん」トやをら障子を押開くれば、日は麗かに風も絶え、いつしか花は咲出でんと、心もとなき梢々、引渡したる霞の中にも、梅ははや氣色ばみ、微笑みたるも能く見え

るに、眉鮮かに額をつくり、顔いと白く頰の邊、少し紅の色を含むは、かの稻舟が鼻の赤く、匂はしきには引かへて、まだかたおひの大人とは、見えねどあてに美しう、なほ年立ちて鐵漿を、附けなばさこそと思ひやる、口元のいと愛らしく、留奇南は梅が香を散らす、縫の櫻も嫋やかに、振の袂へ枝垂れて、柳の腰に著なしゝは、てしがなといふみつの願も、さながら揃ふ思ひしつ、心苦しき事どもも、是にぞ少し忘れける。言の葉は小辨を呼び、御鏡臺から櫛筥、亂箱など取寄せさせ、光氏の御後へ、立廻れば振返り、「髮は昨日結うたれば、今日は後れを搔上げて、撫付けて置くべし」ト宣ふを心得て、御鬢ぐきのしどけなきを、理ひなどする傍に、紫は例の如く、雛遊に餘念なく、繪などかきて色どるにぞ、我も共にと光氏も、すり寄りて筆を採り、背丈は高く瘦せたる女の、姿繪をかきなして、鼻の所に紅をつけ、打置きて見給ふに、繪にかきてさへをかしげなれば、ひとり心に微笑まれ、己が影の鏡臺に、うつれるに不圖目を止め、手づから鼻を赤く染め、稻舟に比べなば、我も少しは好き顏ならん。夫だにも斯く鼻の先を、匂はしたるは見苦しきを、況て色は青白く、長き面廣き額、親しく見るより紙清が、興を醒して歸りしも、道理なりと思ひつゝ、つくぐ〵と眺むれば、言の葉はかの姫君の、姿を書き鼻を染め、御戲にそのまなびを、せさせ給ふと心は附けど、打出しては言ひ難く、をかし

是をこそ言ふべけれ。去頃一度おこせし文は、筆の尻を紅が、持添へてや書かせけん、是よりは宜かりし」ト微笑みて見給ひつ、彼箱を打開けば、絹の光澤なう古めきて、二百年ばかり前に、世に流行りたる結柴小紋の、とりわけて細かなるを、黒紅に染なして、鹿の角と山蜂を、五寸ばかりの大きさの、紋に著けたる羽織なり。淺ましと傍に投やり、かの文を廣げながら、手習ふ樣に其端へ、書付けるを言の葉が、傍より打見れば、

統淸に代りて

袖に觸れて思へばくやし紅の花

色濃きはなと見しかども

と書汚し給ひけり。言の葉は其故を、能くも知らねどかの鼻の、咎ならんと心にをかしく、投やり給ひし羽織を取つて、熟と打詠め、包の中を開かねば、如何なる品か知らざれど、かゝる物を若君の、御目に觸れしは我までも、心なしとや覺さんかと、いと恥かしく人々の、參るに驚き取隱し、「斯く淺ましく古りたる衣を、送り給ひし姬君の、御心根の訝しさよ」ト打かすめつゝ小聲に云ひ、御前を立たんとなしければ、「我も事に打紛れ、昨日よりして紫の、許を一度も音づれず、いざ諸共に行かん」とて、言の葉を引連れつ、頓て西の亭へ赴き、紫の體を見

若君へ、上げられるものかいなと、紅とかいふ若き女子が、顔を赤めて打笑へば、「さればとて光氏君の、御裝にと姫君が、態々とお取寄せ、此儘に捨置かば、お心ざしも空しからんと、綾泙がいうてなれど、其お使には私がと、言ふ者もなく逡巡ばかり。早百合がふつと心づき、此頃まではひとつに住み、親しい中の言の葉殿、此所に居るのは好い序、歸り給ふ其時にと、言づけられてせん方なう、持つて參りはまゐりながら、稻舟樣へは一方ならず、君の御不便かけ給ふと、世の噂とは大きな違ひ、三筋町の局にも、彼樣のはない御顏容、葛籠ならねど此箱も、見懸よりは重さ〳〵、化物が出やうも知れぬ。皆の者が讓合ひ、お使を厭がつたは、何ぞ譯のある事と、夫故御目に懸けぬうち、をかしき事の侍ると、申したに違ひなく、お文をお讀み遊ばすと、何かにこ〳〵おひとり笑、少しお見せ遊ばしませ」ト差覗けば光氏は、態と我身を歎言、「ひとり轉寐の夜毎々々、濡れたる袖をまき乾さん、人もなき身を此の如く、訪はるゝ事の嬉しさよ。此儘にして捨置かば、姫も悲しく思はんに、能くぞ言の葉持て來る。さりながら繰返し、吟ずれば吟ずる程、あら淺ましの發句やな。呆れて物も言ひ難し。くちなし色のはぢ紅葉と、物陰にて答へしは、綾泙が執成ならんが、此から衣は姫の手織、筆も字太に強々し。さはいへ己が心には、是を砧に打柔らげ、心を盡して仕立しものを、眞にたまの言の葉とは、

き、「わが身の事に侍らば、お蔑み遊ばすまでも、申上げも致しませうが、是は夫には引かへて」トなほ打笑ひて、「稻舟樣よりあなた樣への御文」ト懷より取出でたり。「さまで是は取隱す、物にもあらぬを事有りさうに、云ひたるは却つてをかし」ト打開いて見給ふに、陸奥にてや漉きたりけん、紙の肌も美しからず、厚く肥えて白からぬに、沈香丁子の類ならん、懷しからざる匂を焚しめ、かの强々しき艶なき手にて、やう〳〵に書果せたれば、發句も又夫について、

　　から衣つらくと君が砧かな

「あら心得ざる發句なり」ト打かたぶき給ひければ、言の葉は妹の小辨に、持たせ來りし最重き、袱紗包を取出させ、御前に差置くを、光氏頓て開き見るに、今は世に用ひざる、衣箱といふ物なり。から衣とは此事ならんと、ひとり笑して見給へば、言の葉は聲を潛め、「紫樣へ綾浮より、御手遊の類の物を、度々に進らすれど、私はまだ綾浮に、一度も逢ひたる事はなし、其禮がてら稻舟樣へ、お目見えも願ひ度、昨日紝の御舘へ、始めて上り侍りしが、興の醒めたる事と言ふは、まづ姫君の御前へ出で、御有樣を見上ぐるに、扇を額に翳させ給ひし、その外より溢れ出でし、髪のかゝりの美しさに、引かへて御鼻の、色付きたるは見るもうたてく、夢かと思ひて御次へ、辷り出づればそのお文と、此箱を中に置き、お腰元が取圍み、是をどうして

れさまさりて覺ゆるなり。姫をはじめ人々の、衣も古びて見苦しゝ」ト假に姫と傅きおく、鍵預りの娘へは、かの虎の皮ならぬ、純子三本紅絹五疋、綿までも取揃へ、宵に寒さを打歎きし、古くより仕へたる、女どもへは帯小袖、門を守る翁の爲まで、思ひやりつゝ上下の、程々を能く分ち、孰も〳〵悦ぶべき、物を數多送り遣し、人に包みて稲舟の、後見なして育まんと、心を盡すを夫と知らぬ、二葉の上の傅なんどは、又例の若君の、打解所爲を仕給ふと、ひそ〳〵語合ひたりけり。

常の一間に光氏は、長閑に詠めて居る處へ、紫を住ませ置きたる、西の亭より言の葉參れり。彼は元より添臥を、したる中にはあらざれど、鞍馬山より物言馴れ、腰元の女よりも、心安き心地して、召仕ひなどし給ひつ。此頃はとりわけて、男の髪を結覺え、夫らの事にて光氏の、呼ばざる時も折々に、御前へ出でしかば、此方にも心を置かず、彼方もさまで憚らず、近く寄りて手をつかへ、「をかしき事の侍るを、申上げぬもいかゞなれど、又聞えんも恥かし」ト微笑みて言ひやらねば、「夫は如何なる事にかあらん、三筋町に在りし時、言かはしたる男より、是非に此方へ來れよと、人に言傳け言寄りたるや、我には包む事はあらじ。物言ひかけて詞をこめ、恥らうも年によれ、いづれ仇めく事なるを、さあらぬ顏の憎さよ」ト言はれて言の葉差俯

儘に捨置きつ、紅の事懇ごろに、綾泙早百合に頼み置き、杉生にも暇を告げ、そこを立出で給ひけるが、宵に駕を寄せさせし、庭口の門なんどは、危きまでにいたう歪み、扉は朽ちて倒れたり。大方の有様は、夜目にもしるく見ゆれども、猶隠れたる事も多かり。今朝は雪も降止みて、日は高う差昇り、残りなく見渡さるゝに、哀れに淋しう荒まさり、只松の雪のみ暖かげに降積り、山里の心地して、葎の門とは斯様なる、所をこそ言ふべけれ。去年よりふと心づき、己が密に貢しも、姫を哀れと思したる、義勝君の魂魄の、導き給ふものならんと、心の中に思ひつゝ、橘の木の枝重げに、降積む雪に埋れたるを、早百合を召して拂はせ給へば、拂はぬ松も羨み顔に、己とひとり起返り、梢よりさと溢るゝ雪も、名にたつ末の松山か、空より浪の越えぬ日ぞなき、といへる歌の心も思合され、立返りて見給へば、戀ならねども我袖は、濡さじものと早百合は飛退き、打ふるひてぞ居たりける。

光氏舘へ歸りて後、惟吉に宣ふ樣、「去年より度々稻舟を、音づれたれど何時とても、夜のみ通ひて明けぬ中、忍びて歸るは知る如し。今日はたま〳〵統清を、遣過さんと思ふから、日の差出づるも厭ひなく、憩ひて立出でつ、東の雨戸を押開くに、向うなる長廊下は、屋根もなくあばれたれば、日のあし程なく差入れて、宵より積りし雪の光、さだかに見ればなか〳〵に、哀

ておはすれば、其顔容は能くも知らずと、言紛らして居るをかしさ。山名を計るその餘が、思ひ懸なき人へかゝり、心苦しくありつらん」ト言ひつゝ光氏邊を見廻し、「益もなき長物語、前より仕へし老人に、見付けられてはせん方なし。又々席を改めて、稲舟殿は腰元紅、門番の紅は、元の如くに稲舟姫」ト褥の上に押直せど、愚なる身の淺ましさ、さまで恥らふ氣色もなく、脇息引寄せ面杖つき、扇を手だまに打かへし、餘念もなげに遊び居たり。光氏は近く寄り、「此所の館へ某が、通うと人に知らする爲、折々は其方よりも、文を送りて音づれよ、足らはぬ筆も又興あり、綾浮必ず敎ゆるな」ト宣へば綾浮が、道行ぶりを光氏に、引かけて進らせながら、「いつぞや早百合がもて參りし、姫君の御文も、御代筆は致しませず、おひとりでお認め」「ヲヽ、さもあらん、强々しく、上下をきつと揃へ、男めきて書きたるは、鍵預りの彼のおやぢが、手本を姫は習ひつらん。若し統淸が又來らば、ひた〳〵と打解けず、猶ゆるしなき氣色にもてなし、つらしなと男に歎たせ、氣をもたするが戀の祕事、心得たるか稲舟」トとかう聞え給へども、例の無言に物いはねば、をかしうも哀れにも、打見やりつゝ光氏が、

　さすや朝日軒の氷柱は解けながら

ト打解けざりし心をこめ、口ずさみ給ひければ、只むゝと笑ふのみ、口重げなる風情なれば、其

文を送りしかば、引入れて逢はせしに、人々も見し如く、興醒顔に歸りし樣子、思ひ絕えんは必定なり。たとへば戀慕の事は差置き、かの人質の爲山名の館へ、盜み行くともあの女は、顏のをかしきのみならず、心も愚鈍の生付、何を問うてもしやうどなく、持てあぐみて返すならん。返すぐ〳〵も此事は、深く隱して此所に列なる、其餘の者には沙汰するな」ト說諭し給ひければ、杉生につこと打笑ひ、「紅殿を姬君とは、承りしが始めてなれど、其樣な事で有らうと、大方は推量し、お尋ね申していよ〳〵安堵。して又今まで姬君に、なつて居たあの女子は」「ありや統淸が歸る時、鍵を持つて開けに出た、門番のおやぢの娘。併し年が若過ぎれば、孫かも知れぬが何にせよ、去年まであの小家に、ひとつに住んでゐた女、鼻の先が赤いとて、誰言ふとなく紅と、仇名に呼んだを稻舟の、名にして是から姬君に、手前はなつて居るのぢやと、言聞かせたら喜んで、行儀つくつて居るをかしさ。併し心はずんと正直、己が素性を話したとて、手前達が蔑つて、彼を阿呆にしてはならぬ。今までよりも大切に、仕へて居るが家の爲。始めて彼を稻舟の、姿につくつた其時から、隨分顏は隱して居ろと、言付けては置いたれど、朝夕側に居る早百合、見ぬ事もあるまいが、去年の秋淸水で、姬の器量のどの樣ぢやと、己が問うた其時に、種瓢に目鼻とやら、取るべき方なき御有樣と、あからさまにも答へ難く、隱潛み

汀早百合其外の、腰元どもも必ずとも、此事人に漏すな」ト口固めしつ紅が、手を取つて上座へ直し、「早くも世を去り給ひたる、義勝公の御嫡女、稻舟姫にお目見え致せ」ト聞いて杉生始めとし、在合ふ人々うち驚き、「左樣なら只今まで、紅殿と朋輩の、あしらひにしたあなたが眞の」「ウ、其譯を語つて聞かせん。杉生には先つ頃も、心腹を告げつる如く、男子ならば世を取るべき、血筋にてありながら、此所に埋れて、賴もしき人も無き、有樣を見るに堪へかね、人目を包み某は、疎からず問寄りしが、宗全が事よりして、思ひ捨てては止み難き、事のみ彌出來れり。其仔細はかの統淸、常に窺ひ來る有樣、是あながちに稻舟に、心を懸くるばかりにあらず、隙を窺ひ奪ひ隱し、此姫を守立てる、樣にもてなし謀反を企て、主に刃向ふ無道者と、世に譏る人口を、且は防ぎ且は又、人質とする計策と、思ひ計りて古くより、此所に仕へて姫の面體、見知りたる女ばらは、悉く前を遠ざけ、側仕の女どもを、新に此所へ進らせよと、杉生に言付けつ、はや稻舟の年の程は、立待居待も過ぎたれども、猶若やかに見ゆるをさいはひ、まだ幼げなる腰元の、姿にやつさせ夫ぞとは、內外の者に包み置き、さて姫の代には、誰をかせんと案ぜしが、尋常の女にては、統淸が盜み出し、其後詮議もむづかしと、思案を廻らしあの如く、不具に近き女を見出し、傅かせて置きたるが、思ふに違はず繁々に、統淸

十編下

紅、此方へ走り來り、「今統淸が姫君の、御顏ばせを始めて見やり、常も圓くて大きな目を、猶見張りたるそのをかしさ、やう〳〵堪へて居ました」ト袖を口に押當てて、笑ひ轉びつ光氏に、樣子を語ればつと座を立ち、「我も襖の陰よりして、始終の事ども能く聞けり。まづ稻舟に對面せん」ト襖押開け彼所に入り、「統淸との新枕、いかなる事を語りしか、聞かせ給へ」ト寄添へど、姫は顏を打赧め、とかうの返事もなき處へ、屛風の陰より杉生は、早百合を誘ひしづかに立出で、「二度ある事は三度目に、又若君のお胸の中、承りに參りました。御物思ひのお紛れは、綾浒を此所に据置き、通ひ給ふは聞えながら、その綾浒に姫君の、御返事を認めさせ、山名三郎統淸を、このお館へ招き寄せ、あなたさへ大切に、思召して御添臥を、遊ばさぬ稻舟樣に、逢はせ給ふといふ事を、是なる早百合がいつもの通り、知らせを聞きて宵より是へ、上りまして何かの樣子は、承つて居りました。御用意深いあなたの事、よもや眞の姫君では、彼者は御座りますまい。何卒まことの稻舟樣の、御在所を承り」「ヲヽ安堵したいといふのであらう。綾

難迷惑とは、かゝる事にやあらん」など、ひとり言に打つぶやき、果し無き有様なるを、山名の供人もどかしがり、立寄りて門引開け、舁出す乗物の、簾を上げて統清も、何心なく門番の、翁の顔を打見るに、其鼻いと赤かりければ、寒しと見えつる稲舟の、面影をふと思出し、打微笑みつゝ歸りけり。

は、作りて人のもてはやせど、まだ若やかなる姫君の、裝にはいと似氣なし。されども此皮無かりせば、寒げに見ゆる顏ばせを、心苦しく見るからに、統淸とかうの言葉もなく、暫しが程は茫然と、彳みて居たりしが、今更捨てても置き難く、傍に押直り、物言懸けて試れば、只いたう恥らひつ、袖をもて口元を、覆ひ隱すも古めかしく、かの浮世又平が、畫きたる屛風の女繪に、魂入りて立出でなば、斯くもあらんと思ひ合せ、重ねて通はん心も失せはて、口に任せて戲事を、さま〴〵に言懸くれば、流石に打笑み給へる氣色、いとはしたなく姫君と、人の敬ひ冊ける、人品には似合しからず、室町殿にて捨置かるゝも、道理なりと統淸は、心の中に興を醒し、急ぎて其所を立出でけるが、宵に駕を舁入れさせし、門はまだ開けざりければ、鍵預りの者やあると、統淸が家來ども、そこらを尋ね廻りければ、雪を重げに積なして、今や倒れんとする小家より、老さらぼひて海老の如く、腰屈まりたる一人の男、顏も肌も煤けたるが、寒じと思へる氣色深く、箱めきて怪しき物に、火をほのかに入れたるを、袖ぐくみに持ち、「あら冷たや」ト足をつまだて、しぶ〳〵に出來り、「門の番は我にて候。いで開けてまるらせん」ト言ひつゝ鍵は取出せど、手は屈まり目は疎く、錠の開かぬに氣に焦ち、「娘が家に在りける中は、斯樣の時は力とも、助ともなりたるが、去年より姫君の、お側使に召呼ばれ、世にいふ有

ぬ、尻目づかひに能く見れば、まづ居丈高うして、背の長き事譬へ難し。手探りの怪しかりしが、さればよと胸塞り、ふと目の留るに是に次いで、不具と見ゆるは鼻なりけり。普賢菩薩の乘り給ふ、大白象の鼻の色は、赤き蓮華の如くなりと、佛經に見えたるも、斯くやと思ふばかりにて、淺ましきまで高やかにて、先の方少し垂れ、色付きたるは笑破れし、柘榴の實に能く似たり。面の色は降積る、雪恥かしき樣ながら、餘りに白くて青みを含み、額大きく腫れたるに、夫にも勝りて下は膨み、恐ろしきまで面長なり。姿形は痩せさらぼひ、小袖の上より肩の骨は、痛々しげに顯れて、いとほしげなる風情なれば、統淸は呆れに呆れ、何の爲にか殘りなく、見顯しけん口惜さよ。夜もすがらのさゞめ言も、今となりては胸惡き、心地はしながら珍しき、有樣なるに猶つくぐ、髮のかゝりを打見れば、世に愛でらるゝ女にも、劣るまじく綠なるを、房やかに結上げたり。著給へる物をさへ、言立つるは物いひの、さがなき樣に聞ゆれども、總て昔の物語に、まづ人の裝束を、記し留むる慣なれば、其樣をあらく言はんに、紅の綾にやあらん、緋の色さめて黃ばみたるが、猶年經りて白みたるに、打重ねしは紫の、是も幾年經しやらん、黑き色とも紛へるを、しどけなげにかいどりたり。又其上に虎の皮の、胴著といへる物を著なしつ。實にこの皮は淸らかにて、かうばしきまで美しければ、太刀のしり鞘敷革に

非なき事にあんなれと、頻に哀を催して、人知れず袖を濡し、たまの逢瀬と綾泙が、しめ〲と物語るも、只それなりに聞流し、春とはいへどまだ長き、夜すがら歎き居たりけり。辛うじて夜も明けぬる、氣色なれば起出でつ、手づから雨戸を押開けて、庭の雪を見渡すに、踏あけたる跡もなく、遙々と荒渡り、いと淋しげなる有樣にて、夜はまだ全く明けやらず、ほの暗ければ降積る、雪の光にいとゞなほ、淸らに見ゆる光氏が、姿を障子の隙間より、かの古くより仕へたる、老人どもは差覗き、身の憂き事も忘れはて、打笑みつゝ詠め居たり。此時に綾泙は、御手水の湯をもて參り、「今統淸がお寐間より、アレ〱あれへ」ト教ゆれば、光氏も身を起し、此方の一間を窺ふに、統淸は斯くとも知らず、今は本意を遂げたりと、喜ばしき有樣にて、緣の端まで立出でつ、「あら面白の雪景色、此儘歸るも心なし。姫も諸共此所へ來て、をかしき空をも見給へや。一夜にもせよ添臥したる、中に心の隔はあらじ」ト暗にて逢ひたる手探りの、心得難き事あれば、見顯さんとや思ひけん、恨み顏に言ひければ、閨の屛風を紅が、押疊んで、「姫君樣、早々あれへ出でさせ給へ。女は心美しく、人の敎へ聞ゆる事は、辭み給はぬものとやら。恥かしと思召すも、折にこそよれ山名の殿が、待つておいで遊ばす」ト勸められて稻舟は、小袖の衣紋引繕ひ、ゐざり出づれば統淸は、外の方を打詠むる、風情にもてなし唯なら

鄙ひたる限りにて、じようがちになりたる火桶を、みすぼらしげに打まとひ、風吹荒れて灯火の、消えにけるを點しもつけず。不圖黄昏が古寺にて、おそはれたりし事どもを、思ひ出でて見廻らすに、荒たる樣は劣らねど、彼所よりは座敷も狹く、此家には人げのあるに、少し心は慰めながら、何とやらん物凄く、氣色ものどやかならざるを、綾浮は心得て、屛風に圍ひし一間所に、光氏を伴ひつ、「先程文にて聞え上げし、山名統清是非ともに、今宵は忍びて來るべし、此所に隱れて事の樣を、密に窺ひ給へかし」ト言ふ程もなく紅が、慌たゞしく走り來りつ、「いかにしてか此館の、案内を知りたりけん、庭の折戸を音づるゝを、誰ならんと立出づれば、一人の男が佇み居て、我は山名統清なり、密に姫に逢はせよと、物馴顏に言寄るが、をかしけれども笑を隱し、姫君樣は物恥を、深く仕給ふお生付、言葉少に御寐なれ」ト暗きお寐間へ連れて行き、押入れて立退けば、流石に男もつぎほなく、もぢ〳〵として居る樣子、密に御覽遊ばせ」ト勸められても光氏は、點くばかり動きもせず、「彼方よりは我方の、見えぬ樣に襖を閉切り、明日の朝彼が歸りを、透見して慰まん」ト頓て閨を設けさせ、枕はとれども始にも、記すが如きの荒館、柱の曲み戸のひづみ、やゝともすれば風を吹入れ、降る間に解くる春の雪、軒端漏來る滴の音の、耳に付きて眠られず。代をも治めん姫なるを、斯く埋れて過行くは、是

れて宿直ばかり。用が無いので足腰が、猶かいだるうて堪へにくい。哀れに寒き年なる哉。なまなか命長ければ、かゝる世にも逢ふなり」トしめ〴〵と打泣けば、その傍より差出でしは、今降る雪を頭につみ、猶老屈りし女が答へて、「其事よ〴〵、義勝公の在せし時より、此御館に勤めたれど、室町御所とは事變り、常には人の出入もなく、淋しき事ぞと歎きしが、斯くても過ぐれば過ぐるものを、歎きし昔の戀しさよ」ト飛立ちぬべく身慄ひするを、一人の女が押止め、「光氏樣が姫君を、憐み給ひて彼の樣に、若き女子を抱へられ、お側へ付けて置かるれば、お前や私の身の勤は、樂になつたを喜ばず、御前へ出るを止められたと、歎くのは冥加ない。たしなんだが宜さゝうな」ト言ふのも聞かず老いたる女、火鉢引寄せ吐息をつき、「羨ましいは水原殿、前度からして此所の勤、私どもと同じ年頃、はや六十に近けれど、男の髪を結ふ事が、上手な故に御所樣の、お髪を上げに去年から、室町へあがられて、今程はよい身の上。夫に引かへ浮々と、此所に居る程老人と、若き者には蔑られ、花も咲かざる枯木の枝、焚木となるこそ増しならめ」ト憂へあへるを聞き給ふも、片腹いたしと立退きて、今來る樣に光氏は、打咳きつ唐紙を、ほと〴〵と打叩けば、誰ぞやと咎むる彼女の、聲を綾汗早くも聞きつけ、夫と猜して火を取直し、直に唐紙押開けて、入れ奉れば光氏は、今物語しつる女を、近々と打見るに、

ければ、光氏半讀さして、打笑ひつゝ膝をうち、「教へし如くに綾浮が、統淸を釣寄するとな。彼より先に我も行き、事のやうを窺はん。返事に及ばず、使は歸せ」ト直に供の用意を調へ、糺へこそは赴きけれ。

道の程にて日は暮れぬ。空の景色物凄く、雪掻たれていみじう降りけり。例の如く表立ちて、案内も乞はず庭口より、やをら内に入り給へど、夫とは誰も心付かず、打解けたる女どもの、眠りこけたる枕元を、打またぎて唐紙の、間より差覗けど、稲舟は能くも見えず、御簾屏風の竹も折り、糸もほつれて損ねしものから、亂りがはしく押やらず、昔の儘に立繞し、紅早百合四五人の、腰元どもがつい居たり。不圖此方を見返れば、かの昔より此館に、久しく仕へし女ども、煤けたる白無垢に、幅いとせばく穢げなる、帯の兩端押垂れて、吉彌風に結びたる、腰つきの頑なしく、流石に櫛を押立てて、をかしく插したる額つき、田舎の祭に巫女なんどが、練出したる姿に似たり。おの〳〵立ちて懸盤折敷、取出して打向ひ、天目茶碗皿の類は、皆唐土の物なれども、ひゞ破缺けて見所なく、數々のそへも置かず、飯打食ひつゝ物語る。かゝる果敢なげなる有樣を、親しく見るは始めてなれば、興醒めながら光氏は、猶も窺ひ居るとは知らず、中にも老たる女がいふ、「いかなる事か去年より、姫君樣の御前へ、出る事を止められ、遠く離

ば政則笑ひて、「さる折には此綾より、遙に優る物もあるべし。是は只目馴れぬ様の、模様なれば」ト言ひつゝも、強て穿かせまゐらすれば、光氏は我姿を見返り、「兄義尚も此の如くの、袴の模様を好まれたれば、一領進らせたし、何れに求められたるか」ト問はせ給へば謹んで、「是は有難き御意にてあり、義尚君にも此の如く、調じて近きに奉らん。叉其綾の模様を寫せし、扇も作らせ置きたり」ト政則頓て取出し、光氏の腰にさゝせ、出行き給ふ後影を、つく〴〵と打詠め、たまさかにもあれ斯くばかり、優にやさしき若君を、いはゞ婿ぞと我館へ、出入させて見奉るは、人と生れし詮こそあれと、心の中に思ひけり。

嵯峨の館へ藤なみの、ゆかりの色の紫を、迎取り給ひてより、その愛らしさに光氏は、心曳かれて六條の、阿古木をだにも久しく訪はず、まして糺の荒館は、思ひ捨つるといふにはあらねど、只其儘にすぎ行きしが、正月七日の夕さり方、「糺よりの御使が、是持て参り候」ト惟吉が文箱の紐を、解ほどきて差出せば、光氏取つて打開くに、是綾汻が文にてあり、

此頃は猶繁々に、三郎統清文を通はせ、姫君に言寄る様の、心得ぬ事もあれば、今宵忍びておはせよかしと、妾より詐りて、返事を

したるなんど細々と書きしるし、去年より絶えて音づれの、無き恨をも返す〴〵、取交ぜて聞え

ふなるべしと、心おかれてありしより、疎々しげの有樣を、光氏夫とは猜しながら、知らぬ樣にもてなして、浮世語りに打紛らし、戯れ言など宣へば、流石に心強からず、只よき程に答など、し給ふ樣はなみ〲の、人には遙に立優り、光氏よりも四ッばかり、年上なれば殘りなく、開きし花の盛りにて、何に足らはぬ事のなき、姿をつれ〲打まもり、世の亂れんとなすを防ぐ、計策なりと知らざれば、あまりに我がけしからぬ、すき心と思ふより、斯く恨むるも道理ぞと、心の底に思ひ知り、種々に言慰め、其夜は此所に宿りけり。

赤松左衞門政則も、娘二葉と光氏の、其中の睦しからず、賴もしげなき御心を、つらしと常には思ひながら、打對ひて光氏の、顏容を見る時は、忽ちに恨も忘れ、心を盡して傅きけるが、明れば二日の朝まだきに、光氏は起出でて、伏籠にかけし小袖を取寄せ、著替んとなす時に、政則は物陰より、此體を差覗き、西陣の名高き織屋が、手を盡したる綾の袴を、手づからに持て來り、光氏の衣紋を直し、小袖の後引繕ひ、たぷやかに著せまゐらせ、只履物をとらぬばかりに、まめやかに仕ふるも、主を敬ふのみならず、子にひかさるゝ親の心は、最哀れなるものなりけり。光氏はかの袴を見やり、「こは美しき綾にてあり。去頃紅葉の賀宴の折、かゝる袴を調ぜんと、尋ねたれども遂に得ず。此後も又左樣の催、あらん時に用ひん」ト打置き給へ

出入る女子ども、わが男とて傅くは、多くは見にくき顏形、我は若くて美しき、夫を持てりと心の中に、始めて思ひ知りたるは、幼き樣でもひとつづつ、年の數添ふしるしなめり。頓て雛は差置いて、褥に戻れば言の葉は、眉刷紅筆取出し、涙に洗ひし紫の、顏を再び粧ひつ、つれ〴〵と打まもり、をかしき世をも見つるかな、元國司の御胤ながら、一旦苦界に陷りて、末には多くの客を迎へ、肌を穢さん身なりしを、上なき人に思はれて、榮華に過させ給へるは、小玉のぬしが旦暮に、御身の上を苦にし給ひ、絶えず念佛經陀羅尼、信心されし御佛の、しるしを現すものなるか。さはさりながら赤松の、二葉の上を始めとし、其所や彼所のお忍び歩き、頓て大人び給ひなば、夫や彼やにむづかしき、事の起りてお心の、揉める種とやなりもせん。されど幼き此程を、わりなく思ひ給へるは、最頼もしげなりかしと、心の中に言の葉も、樣々案じ居たりける。

光氏は室町の、御所より直に赤松の、館へ退出給ひけり。二葉の上は例の如く、表向のみ麗しく、心の底は美しき、氣色もなきが苦しければ、人なき隙に光氏は、二葉の上の袖を捕へ、「年も既に改まれり、御身も心を改めて、今年は打解け給ひなば、いかに嬉しからん」など、樣々聞え給へども、嵯峨の館へ女を迎へ、傅き給ふと聞きしより、我をば捨てて本妻に、夫を仕給

心得難し。そも此密書をこめたる犬箱、何れよりか送りし」ト言の葉に問ひ給へば、すり寄つて手をつかへ、「雛の座敷は綾浮の、父が造らせ候とて、その犬張子諸共に、いつぞや私のお館より、紫様のお手遊と、綾浮が進らせたれど、中に手紙のある事は、今まで心付かざりし」ト答ふる中に光氏は、件の密書をしづやかに、讀了りて打點き、懐へ確とをさめ、紫の背を掻撫でて、「心なしの犬吉が、悪い事しをつたの、今に近習へ言付けて、元の通りに繕はせん。今日は目出度日にてあり、泣くものではない、機嫌直しや」ト言捨て表へ立出で給へば、待設けたる數多の供人、前後左右を打圍み、行列美々しく行き給ふを、人々もろとも紫も、はしまで出でて見送りしが、元の所へ立歸り、光氏君と名づけたる、かの人形を取下し、雛道具の乘物へ、乘せて相手の童を呼び、「犬吉はお挾箱、お長柄傘は小辨が持ちや。さア室町へ光氏様の、おいで遊ばす處ぢや」ト立騒げば言の葉は、興さめ顔に押留め、「若君の仰の通り、ひとつお年もめしたれば、少しは大人びさせ給へ。十に餘れば雛遊は、せざるものとか世にも言ふ、あなたは夫の早ある御身、行義正しく遊ばす筈。夫にマア其様に、遊にばかり打掛り、お髪を上げる中さへも、ちやんとなされず身動きばかり。ちとお嗜み遊ばせ」ト恥かしめられ紫は、袖の振を顔にあて、只戯れと思ひしが、さては眞に光氏君は、我夫にてありけるか。常々

十編上

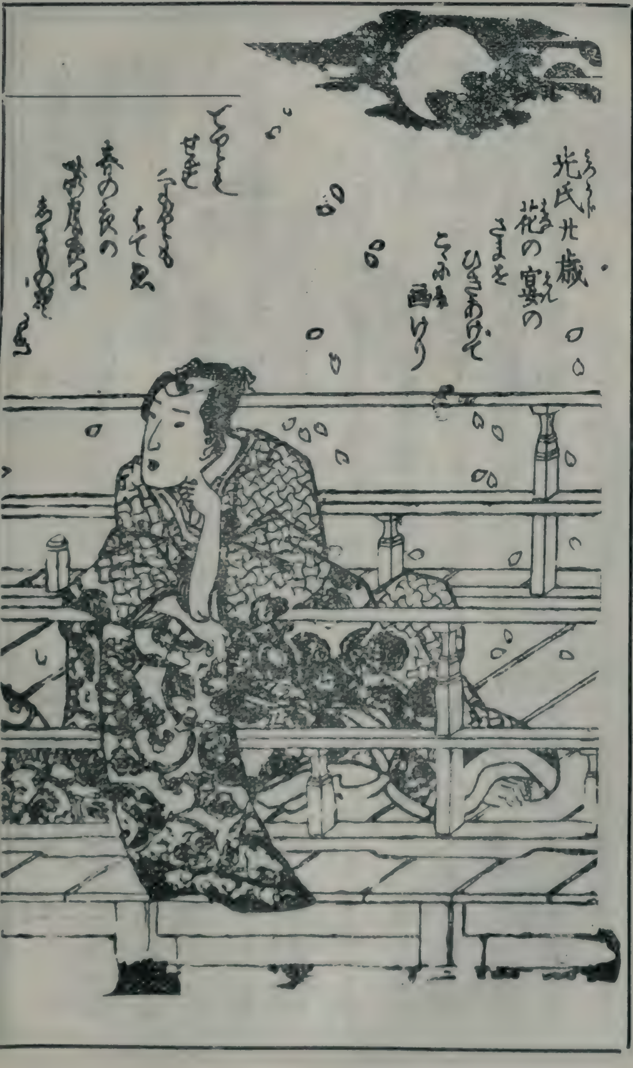
其年も既に暮れて、日の朝とぞなりにける。まだ曉の頃よりも、光氏は起出でつ、梳り湯をひきて、裝束華やかに改め、元旦の壽に、まづ室町へ赴かんと、立出でながら紫を、住ませ置きたる西の邸を、差覗いて見給ふに、紫が祖母小玉の服も、母方ゆゑに三月を限り、早くも昨日晦日に、其事の果てたれば、紅山吹おのが名の、ゆかりの色の紫なんど、色々の衣打重ね、姿をかしう引繕ひ、三尺の御厨子一揃に、いつしか雛を押列べ、また小く座敷書院のかゝりを、造り集めし雛の家と、いふ物を飾り立て、犬吉小辨其外の、童子を相手に所狹く、遊び廣げて居たりけり。光氏は打笑みて、「ひとつ年をとりたれば、今日よりはおとなしう、なりたるならん」ト愛敬づき、いへども答へず涙ぐみ、「犬吉が鬼は外、福は内の眞似をして、是程大事にして置いた、雛の家を毀しをつた、今繕うて居る處。あれ、犬張子がじろ〱と、私の顏を見る樣な。犬吉の犬の字と、思へば是も憎らしい」ト咎なき物へやつ當り、取つて投ぐれば蓋と實と、破るゝ中より溢れ出づる、文を光氏手に取上げ、「光氏君御内覽、それがしとは

て温くせん。板元は湯屋の亭主、作者は湯番に異ならず。どうでもかうでも這入人が、多ければよいまでにして、一家の作と見識ぶつても、戸棚ががらりと空いてゐては、眠氣がさして居たゝまれず。十能で運ぶ消炭に、當りつゞけにしたいが願ひ。されば御客樣方の、御意にかなふやうにと、井戸ならねども彫をあらため、竹の箍で板の間の、摺仕立を綺麗にして、新米糠の袋入、隨分出精つかまつり、明年休の札を掛ず、紙拂底に付直あげといふ場を、こたえた代りに、現金湯は、御承知のうへ御買入可被下候。

天保癸巳初春　　　　　　　　柳亭種彦敬白

この編は、まづ紅葉の賀の巻にならひて、光氏が十九才の元旦の事より記し、末摘花の巻へもどり、その巻全くをはりて又、もみぢの賀の巻へかへる。


桂樹
朧月夜の
内侍に比せ
あの冊子にそれ


光氏廿歳
花の宴の
さまを
ひきあけて
こゝに
画けり

修紫田舍源氏十編序

熱湯好湯番にいへらく、湯は熱くして置くこそよけれ、うめれば何時でも温くなる。温湯好湯番にいへらく、湯は温くして置くこそよけれ、沸せば何時でも熱くなる。是に似たりし事のあり、初めてこの田舍源氏を、作いでんとなしたる刻、老たる友人予に曰く、いかにも源氏の條をくづさず、なるべき程は詞をも、其儘用ひて書き給へ、源氏を讀まざる童子の、少しは助となる事ならん。若き友人予に曰く、源氏の條を翻案して、歌舞伎狂言淨瑠璃の、趣に綴り給へ、源氏を讀まざる者やはある。予思ふに、源氏の如く書けと教へし老人は、熱湯好なり。狂言、歌舞伎の樣に綴れと、すゝめし人は、温湯好なり。是にまどひて初編の草稿、幾度か書なほし、まづ若き人の意見につき、泥藏の物語、人丸堂の無言場、温く仕込んで置いたれど、標題の源氏がさめて、水にならうと卷々の、詞をそろ〳〵折くべて、去年今年と沸しかけ、既に十編に及びしが、この湯の加減未分らず。赤本にはうつらぬ詞が多くて、熱くて讀み憂く覺さば、仙鶴堂を叩き給へ、次の編より狂言の水をうめ

つるもお家の爲なるを、深く恥ぢしは妾が過、身のいたづらになりぬべき、夫も定まる因緣づく、人も語れ浮名もたて、はや是からは厭ひはせじ」ト涙落せば光氏も、見上ぐる目元打うるみ、假にも親子と言交せし、夫も果敢なき契やと、思ひ亂れて亂れ鳥、曉近く立別れ、かたみ歎は盡きせぬなるべし。

を致しませう。綾汻殿はお返事を」「ハイ、何やかやで遲なはり、姫君樣もお待兼。さア御一緒に」ト暇を乞ひ、二人は其座を退きけり。藤の方は憂身の上、思ひ續けて稍暫し、差俯いておはせしが、やう〳〵に涙を止め、「紅葉の御賀の其時は、危い事であつたれど、さいはひにお怪我もなう。紫はすこやかで」ト取まぜて問ひ給へば、少し前へ進み出で、「紫を引取りし、其事は内々の、者にも暫し知らさじと、西の方に離れたる、茶屋を座敷にしつらはせ、人を撰みて附置けば、惟吉の其外は、何人を迎へしかと、皆訝しく思ふなり。我も旦暮彼所へ行き、今まで他に住ませたる、娘を呼びたる心にて、萬の事を習ひ教へ、好き物思ひの忘れ草、いとすこやかには候へど、只過行きし祖母小玉の、事をとかく忘れ兼ね、打泣きなんどする事あり。夫も某館にある、其中は紛るれど、山名の手段を挫かんと、其事に暇なく、暮るれば出づる其時は、跡を慕ひて涙ぐむ、夫を見るのも胸塞り、母の無き子を持ちたる思、忍び歩きも靜なる、心は更に侍らず」トかの紫を愛する體、詞の中に現れければ、幼き者を斯くまでもと、怪しきものから嬉しさの、笑を含んで藤の方、君のお側に見習はゞ、さぞ紫は心だて、立振舞もやさ方に、生立ちゆかん喜ばしさ。小玉の法事も懇に、せさせ給ふと傳へ聞き、夫には心殘りもなし。只悲しきは綾汻に、今宣ひし此身の上。さはさりながら杉生も、今言ふ如く女の道を、捨

り、夫は聞えて居るけれど、外に忠義の仕様もあらう。たとへさうでないにもせよ、浮名の立つたお二人を、媒妁する事はない、悋氣しても宜い筈と、戯言まじりに私が、綾泙殿の小袖を著て、お方の御服を此樣に、綾泙へ著せまして、さて御前に打對ひ、薄暗がりにて光氏君へ、あなた樣の樣に見せ、聲をも夫と知れぬため、打かすめて閑雅に、紫樣の御事を、綾泙に問はせなば、若君へお直にあひ、お聞きなさるも同じ事、さすれば人も疑はじと、申上げたら打笑み給ひ、夫ならば斯う〳〵言へと、お口うつしを綾泙どの、能う覺えては來られたなれど、思ひ懸なく宗全の、事より起りて綾泙どのの、知らぬ事を問ひ懸けられ、どう言うて宜いやらと、うぢ〳〵されたがをかしさに、つい笑出しました。いつぞや糺のお館で、綾泙どのを稲舟樣と、私に思はせて、お欺しなされたその代り、下樣の諺に、二度ある事は三度とやら、斯ういふ事が又一度は、何處ぞでは御座りませう。さいはひ藤の御方も、後から忍んで光氏樣の、おつしやる事を聞かうとて、彼所においで遊ばします。さア〳〵お逢ひ遊ばせ」ト傾て誘ひまゐらせて、光氏の身近くなほし、「今綾泙に仰の趣、名を流すのもお家の爲と、承はれば理に迫り、もう御異見も致しませぬ。お床をとつて上げませう。只富徽樣始めとし、そのつきづきの者どもに、識らせ申すが口惜い」ト落つる涙の顏背け、「部屋へ下つて又明朝、お目見え

なたが此屋敷へ、おいでなされた其時に、定めて又四月の樣に、忍びてお逢ひなされたい、お心と見た故に、早くお歸り遊ばす樣、御異見を申上げ、千景の方へお使に、表までは出でたれど、あなたの事が心もとなく、裏御門から取つて返し、御前に出でた其時に、藤の方のおつしやるは、糺からお使に、さつき來たあの綾汘、其方はいつぞや逢うたとやら、妾は今日が始めてなれど、いと親しげに物語り、私事は光氏樣の、御不便にあづかる者、何事に依りませず、密な御用もあるならば、お心を置かせられず、仰せられて下さりませと、深切に言ふた故、先つ頃紫とて、まだ年のたらはぬ娘、嵯峨へ迎へ給ひしと、人の噂に聞いたるが、若し知つてかと問うたれば、其夜の事は見たやうに、綾汘が詳しい話、聞いても何やら落著かず、ちと譯あつて其娘は、妾が身寄の物なれば、後の樣子が聞きたいと、言流して稻舟樣へ、お返事を書認め、今歸したとの御物語。私は手を淸めに、立つて參つた其後へ、綾汘殿が立返られ、藤の方のお側へ寄り、光氏樣をそこ〳〵の、所へ忍ばせ置きました、憚りながら私が、此小袖を上にめし、あなた樣とは見えぬ樣に、隱れておいで遊ばせと、帶を解いて著せまする、樣子を陰でとつくと見、づつと出でて押止め、いえ〳〵夫はなりますまい、卯月にお逢ひなされてから、彌よからぬ噂はつのる。綾汘殿は若君に、一方ならぬお惠を、受けられたゆゑ御恩送

如何といふに、宗全彌討つて出でん、其時に兄を差置き、怜悧げにト某が、切平げんも本意にあらず、とあつて餘所に眺めては、弓矢とる身の詮もなし。故に彼を誅伐せん、手段は昔川勝元へ、悉く言付け置き、我は播磨の國へ赴き、宗全に一味せん、奴ばらをくひとめん。とは思へども常々に、申す如きの父の愛子、もし過もあらんかとて、軍にも出し給はず、他國へ下るは猶更もつて、許し給はぬ其時は、身の恥のみか家の恥、かのお命を捨て給へと、願置きしは此時節。いさゝか二人の浮名を包まず、此方より言觸し、母とひとしき其人と、密通なして妊らせしと、父上聞召されなば、何程にこの光氏を、不便と思召されても、よもや家には置かれまじ。其時には都を退き、心の儘に計策を、施すべく思ふなり。一旦我に下された、命を惜み給ふか」ト席を打つて恥しむれば、はつとばかりに差詰り、答なければ光氏は、猶せきたちて膝を進め、「御承引なき其時は、切腹なすより外はなし。いかに〳〵」ト執へる手を、振拂つて逃のけば、後の方にてくつ〳〵と、笑ひながらに燈籠へ、打懸けし衣取のけて、差出す火光に能く見れば、藤の方と思ひたる、裲襠姿は綾浮にて、夫を誘ひ來りしは、思ひ懸なき杉生なり。光氏は呆れ果て、詞もなくて打まもる、側へ杉生差寄りて、「戯れも事によれど、お腹の立つかは知らねども、此事は妾が計ひ、綾浮殿に罪はなし、後でお叱り遊ばすな。最前あ

が、側へ頓て押直せば、留奇南の薫はつと散り、闇にも輝く縫小袖。夫と悟つて、「母上か、御懐しや」ト宣へば、此方は深く忍ぶと覺しく、有るか無きかの細聲にて、「紫を呼迎へ、いたはり給ふは嬉しけれど、噂に聞けば二葉の上、此事を洩聞かれ、此頃嵯峨の館へは、女を迎へ給ふとて、腰元婢の女子まで、言罵りて騒ぐとやら」ト後は宣ふ詞も聞えず。光氏は吐息をつき、「されば其事にて候なり、まだ年のゆかざる事も、あなたの姪といふ事も、知らねば我があだ〳〵しき、心と怨むも道理ながら、その怨を打出し、言出しなば斯う〳〵と、我もうらなく語ひて、言慰めんと思へども、只うはべのみ淸らかにて、心の底に濁ある、二葉が性にもてあぐみ、思はぬ方に遊び歩き、かゝる恨も受くるなり。さはいへ父のゆるせし妻、何とて疎み思はんや。わが實ある心と中を、二葉も悟り知るならば、遂には思直さんと、夫を頼みに過行きぬ。偖母上にも恨あり、先つ年室町の、人丸堂にて御目に懸り、我を實の子の如く、可愛と思召されなば、お命を賜はれと、申上げしを聞すまれ、忍び逢瀬を宗全に、見咎められて諸共に、自害せんとなしたるを、人々に止められ、思はず命はながらへたれど、まことの契は無きにもせよ、早二人とも穢れし體。夫に何ぞや此度の、御懐胎より世の人の、彌疑ひさゞめくを、いと憂き事と思召し、心解けざる御氣色。なぜありしより親しくなし、浮名を立てては給はらぬ。其事を

る其事は、この如月に忍び行き、我とつくと見極めたり。屢文を送りなば、御身その返事をかき、彼を糺へおびき寄せ、云々して慰まん」ト耳に口よせ打さゝやき、立歸らんとし給へば、綾浯は又引止め、「君には何のしるしも無く、此所を過行き給ふか」トいはれて光氏立止り、「何のしるしも無くてとは」「いゝえお隱し遊ばすな、此所へおいでなされたは、腰元どもを欺りて、確に藤の御方に、逢ひたい君の思召、そのしるしもなくすごくと、過行き給ふがおいとしさ、今宵お逢はせ申しませう。先程奥に居つた時、君の來らせ給ひしを、女中方が差覗き、見る度毎に若君は、猶婀娜になり給ふと、立騷ぐを聞召し、屛風の隙よりほの見給ふ、藤の方の御顏はぜ、床しと思ず御氣色にて、互に盡きぬ御思。若し事が破れたら、申譯には私が、自害して死にまする。君ゆゑ捨てん覺悟の命、君の惠に助けられ、又君ゆゑに捨てるは本望。あれなるお庭の小座敷の、裏手の方へ斯うく」トひそくと敎へつゝ、奥の方へ入りければ、光氏は心得て、歸る樣にもてなしつ、庭の切戸を打廻り、彼所に隱れて息をのみ、今やくと待つ程に、暫くあつて足音を、忍びつゝ來る者あり、と見れば二人の女先へ立ちしが、燈籠に何やらん打覆ひ、手に引提げしばかりにて、此所には外に燈火もなく、朧げながらつくゞ見るに、衣の色合帶の紋、綾浯に疑なし。手を引き誘ひ來りたる、女に何か打囁き、物をも言はず光氏

如く、人傳ならでも物言交し、常にお側に居たりしが、求めて人の疑うけ、疎く過行く果敢なさよと、思ひ亂るゝ光氏の、顏を杉生差覗き、「尼刈萱が若君の、御身代に討たれしも、此お屋敷より戻りがけ、さういふ事もあるまいが、只用心に若くはなし。日も暮れたればお館へ、早早お歸り遊ばしませ。私事は千景樣へ、お使に上ります。御機嫌よう」ト座を退き、しづしづと出行けば、光氏もつきほなく、「度々もまゐらんが、さまでの事の無き時は、自からに怠りつ、我身に應ずる御用もあらば、仰越され候へと、能く傳へて」トすげなくも、立出でんとなしければ、「若君樣〳〵」ト呼びつゝ出づるを何者ぞと、振返りて見給へば、思ひがけなき綾泙なり。「何の故に此屋敷へ」ト問れて下座へ引下り、「稻舟樣の御使、御返事を頂いて、只今糺へ歸る處。さいはひ君へ少しも早く、差上げくれよとある人より、言づかりたる此一通、御覽なされて下さりませ」ト差出すを取上げて、口の中にて讀み終り、「皆の者は送りに及ばぬ、奥へ戻れ」ト腰元を、退かせて小聲になり、

「此頃山名三郎統淸、稻舟姫へ文を送り、手に入れんと計るなり。是もひとつの手段なれば、御油斷ある可からず候。

と姓名は記さねど、此密書こそ其方の父、調太夫が送りしならめ。統淸兼て稻舟に、心を懸く

に似て子にあらず、眞の枕を交さねば、妾に似て妾にあらず、是はいと樣變りたる、傅き草なりと、光氏は思ひけり。

末摘花、紅葉の賀を、まじへて作りし若紫の巻は、全く爰に終る。

此頃藤の方は、又音川の下館に、移り住ませ給ひければ、光氏は密に逢ひ、打語ふべき事もあり又其樣も床しうて、隙もやあるとかの邊を、窺ひ歩り給ひつゝ、つく〴〵と思す樣、杉生は何とやらん、我を疑ふ體なる故、腰元司をなづけおき、折節文をば進らせしが、忍び逢ふべき手段には、年まだ若くて頼み難し、いかにかせんとある夕暮、何となく案内を乞はせ、彼所へ至り給ひけるに、杉生司名も知らぬ、女ども數多いで、三指ついて對面し、表だちて待遇しければ、是は餘所〳〵しき振舞やと、安からずは思ひながら、打沈めて藤の方の、樣子なんどを問ふ程に、音川勝元御前に出で、「今日晝頃より此屋敷へ、罷越して候が、只今御所より急のお召。さりながら若君の、來らせ給ふと承はり、其儘出仕も憚りあれば、お目見得致し候」ト慇懃に述べければ、「ヲヽ、打絶えて逢はざりし、物語るべき事多けれども、お召とあらば取急がん、其中嵯峨の館へ來よ」ト仰に猶も頭を下げ、「然らば君は此所に、ゆる〳〵と御休息。藤の方へお暇乞、申上げて參らん」ト奥の方へ立行くを、羨ましげに打まもり、昔は實の母の

と色美しき紫の、紙に小く書なして、紫に見せ給ひ、「御身も此所へ書きてよ」ト勧められて差俯き、「まだ能うは書かず」とて、見上げたるが美しければ、光氏も打微笑み、「能く書かぬとて書かざるは、却つて人も憎むなり。いで教へん」ト宣へば、いと恥かしげに筆取上げ、何やらん書なして、「書損ひつ」ト振袖の、袂に隠す手を差入れ、無理に取りて見給ふに、

　ゆかりとは何のゆかりぞ菫草

筆の運びは幼けれど、柔かに書なしたるは、行末のたのもしく、小玉の手跡に能く似たり。若き人の手を習はゞ、今様に移るべしと、打詠めつゝおはしけり。

斯くて日數を經る程に、紫は住馴れて、犬吉始め室町より、來りし童兒どもと、思ふ事なく遊びつゝ、京極に在りつる時、光氏君とて傅きし、人形を取寄せて、雛と共に飾りなんどなしければ、言の葉も此體を見て、やう／＼安堵の思ひをしつ。紫は光氏を、親の如くに思ひなし實の父の國助は、此頃折々逢ひたるのみにて、傍にて生立たねば、戀慕ふ様もなく、只光氏は館におはせず、淋しき夕暮なんどには、小玉の事を思ひ出で、打泣く事も有りけるが、夫も光氏歸來れば、喜ばしげに出迎へ、いと親しく打語ひ、共に遊び共に臥して、更に恥らふ氣色もなし。實の子にてあらんには、斯く成長して父親と、共に添臥すものにもあらず。されば子

氣と言ひしは詐、その一言を聞かん爲。早々歸れ」ト言捨てて、一間所へ入りて見れば、紫は夜の物に、打纏はれて臥して居たり。相手なくては淋しからんと、少き童の愛らしきを、撰りておこし給ふべしと、室町へ言ひやりつ。雀を迯して紫に、叱られたる犬吉をも、連來れよと惟吉を、三筋町へ迎ひに走せ、光氏は立寄つて、「日は高う差昇りぬ、いざ起きずや」トゆり覺せば、やうやうに起出づる、かの紫の姿を見るに、小玉が服の中なれば、華やかならぬ染小袖の、打なへたるを引かけつ、何心なく打笑める、其顔の美しさに、光氏も打笑まれ、「いざ是よりはわが常に、住める座敷に移るべし」ト先に立ちて行き給へば、紫は其後に付き、東の方へ至り見るに、霜枯の前栽も、蠹ける樣にて面白く、見も知らぬ下髮に、つぼなり姿こきまぜて、隙なく女の行かう樣、をかしき所に來つるよと、心の中に思ひながら、珍らしき屏風の繪など、見つゝ慰め居たりけり。

兎角なす間に其所此所より、相手の子供も集りければ、珍らしき手遊の、樣々なるを取寄せさせ、馴れなつけんと思ふから、其身も共に遊びゐて、室町へも赴かず、繪習ふ手本になるべき繪など、をかしげにかき集め、

武藏野に唉けばゆかりか草藤も

ぜず、紫さまと一筋に、思ひて御供致せしなり。其故を申さんに、仔細あつて拙者めは、君に大恩受けたる者、その御恩を送らんと、樣々心を砕きし處、此節山名宗全が、謀反の企頻りにて、諸浪人をかり入るゝ、是さいはひと是に加はり、入込んだるは密計を、盡く聞きすまし君の御不便かけ給ふ、女に親しき者あれば、夫より密に其事を、告げ奉らん爲にてあり。また此度紫さまの、迎への役を乞受けしは、まづ供人に聞かするため、言の葉を驚かし、奪取るさまにもてなし、此所へ誘ひ參らせ、偖宗全が館へ歸り、今度巧みし事どもを、何者か漏しけん、光氏早く是を知り、かの紫をば取隱し、僞物を渡せし故、連歸つては物笑と、嵯峨へ直に引立てゆき、思ふ樣に嘲弄し、門の裡へ突入れて、罷り歸つて候と、言ひ欺かんと存ぜしが、石堂殿と入替へて、置かせられたる御明智、某如きが怜悧げに、御迎へに來らんより、佞人ばらを差越して、辛き目に出逢はさば、お心もはれ石堂殿も、よき慰に候べきを、却つて赤面仕る」ト恐入つてぞ蹲踞る。光氏ほく〳〵打點き、「何かは知らねど紫と、思ひて我へ渡せしば、過分々々」ト振返り、「早百合來れ」ト呼出し、「その大小を彼へ渡し、はや紫を引取りたれは、御身も此所に用はなし、元の如くに糺へ歸り、稻舟に仕ふべし。綾浮が病氣にて、人少にあるべし」ト聞いて驚く調太夫、「なに綾浮は病氣とや」ト言ふ顔光氏ぢろりと見遣り、「いや、彼が病

傾け思案にくれ、「河原之進が紫を、我へ送る程ならば、家來をやりて言の葉を、驚かさん筈もなし。はて訝しき事にぞある」ト言ふに早百合がすり寄つて、「お迎へに參つたる、片攪の調太夫、あのお切戸の外面まで、附添ひて參りしが、石堂樣が乘物から、お出なさるを透し見て横手を拍つて驚いた、樣子で控へて居りまする。彼者を召しまして、仔細をお尋ね遊ばしませ」ト勸められて、「それよく〳〵、餘りに屈して心付かず、其者呼べ」ト仰の下、おづ〳〵這出る調太夫、刀脇差投出し、「お腰元がた暫く夫を」トにじり寄るを見やり給ひ、「我に手對なさゞる證、帶劍を渡せしは、邊の者を遠避けて、直々密事を告げんとなるべし。石堂始め女子ども、次へ退き休息せよ。調太夫とやら、近う〳〵」ト其身も緣の端へ立出で、「遊佐の家來と言ひしは詐、汝山名の間者にて、人質のため紫を、奪はん巧と思ひし故、今見し如く石堂を、入替へて乘せつるなり。汝夫を知るならば、引包んで討取らん、備をこそなすべけれ。又其事を心づかず、紫なりと思ひなば、館へ誘ひ行くべきに、乘物の儘某へ、渡せし事こそ心得ね。我豫じめ推量して、山名父子の奸計を、是まで度々挫しが、一たびも其圖を外さず、只此一條のみ思ふに違へり。いかに〳〵」ト宣へば、調太夫平伏し、「某山名の家來にて、人質に奪はん段々、御賢察の通りなれば、くど〳〵と申すに及ばず。又此駕へ御家臣の、乘られし事はゆめ〳〵存





れて、寢るは幼い中の事、最早さういふ年でもなし、女は人の詞を背かず、いかにも心安らかに、持つこそ宜けれ」ト敎へられ、何と答へん詞もなく、袖をまさぐり差俯く。言の葉も只うろ〳〵と、明行く儘に見渡せば、書院高殿亭座敷、その結構は更にもいはず、庭の砂子も白玉を、重ねたる樣に見え、輝き渡る心地して、寢亂れ髮のはしたなき、己が姿は恥かしけれど、既に先にも言ふ如く、此所はたま〳〵來る客を、款待すために造りたる、離座敷にあるなれば、女の居らぬに心緩み、そろ〳〵庭へ立出でて、向ふの方を打見やる。折から切戸を靜に開き、女乘物かき入れて、陸尺は辷り出でぬ。誰が此所へ來りしかと、何心なく差覗けば、駕に添ひしは早百合と小辨。言の葉は走寄り、「お前方も紫樣の、お伽に後からござんしたか。彼所においで遊ばす」ト詞をかくるを光氏せいし、「樣子あつて其者には、某が問ふ事あり。言の葉は紫を、誘ひて次へたて」ト追遣る中に乘物の、戸を引開けて馬之丞、力もなげに立出でつ、御前に手をつかへ、「仰に從ひ彼所に赴き、待つ間程なく遊佐の迎と、かの調太夫が來りしかば、御覽の通り此駕へ、人に知らさず乘移り、鏖殺になさんづと、思ひの外に山名の館へ、舁行かん體もなく、遊佐の館へは猶更戻らず、北へ〳〵と行先は、何所ならんと躊躇ふ中、案の外なる君の御所、こゝへ送りし彼が胸中、一ゑん合點まゐらず」ト申上ぐれば流石の光氏、小首を

九編　下

いと夜の長き頃なれば、東も未だ白まぬ中に、嵯峨の館へ帰り給ひ、駕をば直に庭口より、西の方に引離れし、座敷の縁に舁寄せさせ、光氏はいと輕らかに、紫を掻抱き、乘物より出しければ、言の葉も續いて出で、其所ら邊を打見廻し、「とんと夢を見た樣な、私は是からは、どう致すので御座ります」トべつたり坐れば光氏をかしく、「紫をはや迎取れば、其方にはさまで用もない、歸りたくば送らせん、心任せにするがよい」ト言はれて流石行かれもせず、かの人質とやら怖ろしき、憂目をや見給はんと、案じに胸も靜ならず、左にも右にも賴もしき、小玉に後れ紫の、詮なき運を思ひやり、落つる涙を始めての、興入なるにいみ〳〵しと、やう〳〵こたへ居たりけり。此所は光氏が、常に住まざる座敷ゆゑ、衝立屏風も無かりければ、是らを始め夜の物、枕の類を惟吉に、言付けて取寄せさせ、假に邊を引繕ひ、「紫も是へ來て、まづ緩々と休むがよい」トいと馴々しく宣ふが、何とやらん恐ろしく、身は慄はるれど聲立てて、流石に泣きも出されず、「言の葉と共に寢ん」ト言ふ聲のいと若し。光氏は打笑ひ、「乳母腰元に抱か

に、いかにかせさせ給ふぞ」ト、言へば光氏振返り、「此所へは繁々通ひ難く、覺束なく思ふが故、心安き所へ置かん。其方も共に來れよかし」ト聞いて言の葉猶放さず、「此頃申上げし如く、紫さまの父上は、人も名を知る國司、さすれば此事聞えて後は、ともかうもなり侍らん。周章しく連退き給ひ、父上明日にもおはしなば、何とか申し開かん」ト聞いて光氏打微笑み、「よし何者の胤にもせよ、一たん遊女となつたる紫、その身代を償ひおき、連行くを誰かはこばまん。御身は此所に用あらば、後より來れ」ト駕籠を寄せさせ、紫を打乘すれば、道理に迫つて言の葉も、今は止めん詞もなく、遊佐の館へ紫が、始めて行かん晴著にと、昨夜縫置きし小袖を引下げ、自らも又寐卷を脱捨て、上著下著を手早に著替へ、帶ぐる〳〵と卷きながら、庭へ下りれば光氏は、それ〳〵と指揮して、かの紫の乘物へ、言の葉をも共に乘せ、惟吉が馬引寄せさせ、其身は是へ乘移り、手綱かいくり歸りけり。

め、「紫様は前後も知らず、お靜まつて後座ります。何と思うて今時分、三筋町のお歸りか、夫にしても餘りに夜深」ト言ふを光氏引取つて、「紫を父の元へ、明日は送ると傳聞く、其先に只一言、いひ聞け置かん事ありて」ト宣ふ顏を打まもり、「何の事かは知らねども、見給ふ如きあどなきお性、はか〴〵しいお返事を、なさる事では有るまい」ト打笑ひつゝ言の葉が、言ふを聞捨て光氏は、入らんとするを押止め、「此所の間には女子ども、枕を外す夜著ふみやる、打解姿で寐て居るを、お目に觸れるも憚りな」ト縋る袂を光氏は、振拂つて襖をあけ、「紫はまだ目が覺めぬか、どれ〳〵己が起してやらう。日はもうとくに差昇る、此朝霧の深いも知らで、寐てる事があるものか」トまだ夜深きを僞りて、閨の屛風を押遣りつ、なに心なく眠りゐる、紫をゆり覺せば、側に臥したる小辨はふつと、目を打開いて怪しとは、見たれどやとも聲をば立てず。紫は父國助の、迎へに來ると寐おびれて、思ひ違へつすや〳〵と、猶打眠る髮搔上げ、「いざ御供を仕らん。父君の仰をうけ、御使に參りたり」ト宣ふ聲の父ならねば、紫は始めて驚き、あな恐しと迯げんとせしが、ふと其人の顏を見るに、かの恥しと思ひたる、光氏にてありければ、少し怖さも打忘れ、衣著引被ぐを搔抱き、「父も我も同じ人ぞ、さのみに疎み給ふな」ト誘ひ出でんと爲たりければ、言の葉は又縋付き、「思ひやりなき御程とは、常々聞え置きたる

所へ忍ばせ置くを、捜り知つて奪取らん、奸計に疑なし。我は夜明けぬ其中に、言の葉諸共紫を、嵯峨の館へ連歸らん。汝は後に止りゐて、調太夫が迎への乘物、座敷まで舁上げさせ、乳人なんどと合輿の、樣にもてなし人知れず、汝夫へ乘移り、山名の屋敷へ舁行かば、乘物を踏碎き、迎への奴ばら切捨てよ。併し彼者國助が、實に家來にあらんには、遊佐の館へ歸るべし、其時は荒氣を出さず、國助に面會し、眞もつて紫を、人質になすにあらず、光氏思に堪へ兼て、貰ひ受しと神妙に、斷りて立歸れ。その駕添はこの早百合、汝油斷を致すな」ト猶言敎へ給ひければ、「かしこまり候」とて、二人は御前を退きけり。

光氏さらぬ風情にて、又琴を引寄せつ、搔鳴し居たりしに、二葉の上はまた例の、澁々に一間を出で、「夜もいかう更けたるに、休ませ給へ」ト聞えければ、「いや、我は嵯峨の館にて、急になすべき事ありしを、今思出したり。其用を調へて、立歸り來るべし」ト言紛らして出で給ふを、心解けねば二葉の上、今宵は此所にと止めもせず、夜中ばかりの事なる故、腰元どもも光氏の、歸りは更に知らざりけり。

光氏彼所に赴き、門打叩かせ給ひければ、何心なく下男、おうと答へて開けたるに、やをら乘物舁入れさせ、惟吉が雨戸を鳴し、打咳けば言の葉が、聞知して出來り、光に透して此方を詠

しに疑ひなし、さすれば彼方へ渡しなば、まだ分別も知らぬ娘、如何なる憂目を見んも知れずと、最哀れなる物語を、種々にしたりしかば、言の葉は大いに驚き、如何にせんと泣惑ふを、調太夫押止め、夜も明けなば迎へに來ん、歎いて人に氣どられなと、約束なして立歸れば、言の葉は急がはしく、紫さまの前へ出で、父上の御許へ、明日は誘ひ參らせん、大人しやかになし給へ、光氏君の若し是へ、今宵忍びておはすとも、物の序に稚なく、此事聞えさせ給ふな、夫が障となる時は、お側に付いて居る者の、越度なりと父君に、さいなまれ侍らんと、言ふのは何とも思召さす、遊んでおいてなされます。紫樣へもそれ程に、口がためして置きながら、惟吉殿に浮々と、言の葉が言出したは、流石女の淺はかと、をかしくもあり何した事か、樣子は知らず此事を、申上げに參りし」ト聞いて光氏につこと笑ひ、「さもあらん〳〵、欺られては口惜しよ。その先に彼奴ばらの、計策の裏をかき、あゝ高直は折惡く、室町へ宿居の留守、いかにせまし」ト手を打組み、思案に暮るゝその折から、かの石堂馬之丞、御機嫌いかゞと入來れば、「ヲヽ好い處へ馬之丞、頼みたき事こそあれ」ト耳に口を差寄せて、稍暫く密き給ひ、「なかの片攬調太夫は、必定山名のまはし者、鞍馬の山にて國助が、娘の遊女になつたる事を、宗全に語りし故、元より奸智の深き宗全、是こそは好き人質なれと、其娘の行方を尋ね、某彼

先の程紫の、許へ使に走らせたる、惟吉が歸來れり。二葉の上は彼らに逢はんも、物うしとて入りければ、光氏、惟吉近く召寄せ、その有樣を問ひ給ふに、聲を潛めて答ふる樣、「いと怪しき事こそあれ、御文を持てまゐり、言の葉に渡したれど、常の如くに讀みもなさず、紫樣の父上より、明けなば迎へ給はんと、仰せ越され侍れば、いと〱心慌たゞし、此頃久しく住馴れし、この蓬生を離れんも、流石に今は心細し、俄の事故此樣に、何も彼も取散しと、詞少にしか〲とは、某をあしらはず、縫物なんどを取急ぐ、樣子は譯のあるべき事と、返事を乞はず其儘に、立歸り候」ト聞いて光氏眉を顰め、「いつぞやの夜國助が、立聞なすと推量し、態と親しく紫と、添臥す樣を見せたる故、彼も心を安んじて、歸りし事は其方も知る、さすれば今更紫を、迎取るべき筈もなし」ト暫しが程打案じ、「夫よ〱」ト小膝を打ち、「何は兎もあれ人手に渡さば、盜出でんに事難し。夜更けて後彼處へ行かん、乘物の用意なし、汝は馬にて後より續け」「承はりぬ」ト惟吉が、立去ると引違へ、慌たゞしげに早百合が來り、「仰に從ひ紫さまの、御側に附從ひ、心を付けて侍りしが、今日夕暮がた國助殿の、家來片攬調太夫と、いふ者來つて言の葉と、密に語るを何事かと、障子の隙より窺へば、かの調太夫小聲になり、能く能く世間の噂を聞くに、光氏君は紫を、眞に愛し給ふにあらず、人質のため鞍馬にて、身請され

ト書いてあり。常には人の疑はんと、返事はせざりしが、今日の舞の面白さを、只見過さんも
堪へ難くや、懐の紅筆にて、
　袖ふると見るや紅葉の唐錦
　　大方には
　　　あなかしこ
と書捨てて投やりければ、かの司袖に隠して走り出で、惟吉にこそ渡しけれ。惟吉は受取つて、
急がはしく立歸り、直に御前に罷出で、差上げ申せば光氏君、「いと珍しき返事」ト云ひつゝ、開
いて讀下し、等閑には見ざりしを、大方にはとほのめかし、青海波は唐土より、傳へたる樂なる
故、唐錦とは爲られしならん、女の身にて唐土の、樂の道まで詳しきは、あら奥懷し父上の、彼
をば富徽と同じ樣に、人々も傅けよと、宣ひしも實に道理なりと、心の中に微笑まれ、佛經を
讀む如く、兩手にさゝげて打廣げ、暫し詠めて居給ひけり。
光氏ある日、赤松の館へ行きけるが、例の二葉の上は直に對面も仕給はず、人々に勸められ、や
うく\に立出でながら、打背けて親げに、物語をもなさゞれば、光氏はむづかしと、吾妻琴をす
ががきて、ひたちには田をこそつくれといふ歌を、聲はいと媚きて、謠ひすさびて居給ふ處へ、

めきし、心を深く恥らひけり。
義尙光氏兩人が、危かりしに興盡きて、義正は道を急がせ、室町へ歸りしが、何れもいさゝか過なく、殊には愛子の光氏が、武勇の程を間近く見て、又喜びも大方ならず、機嫌よげに打休み、今宵宿直に侍りし、藤の方を近く招き、「今日の舞は青海波に、事皆盡きて其外には、目も移らざる心地せり。御身は如何見たりし」トしめやかに問ひ給へば、もし若君と語ひし、事もあるかと試に、斯く宣ふやと胸轟き、答も直には聞えにくく、「殊に勝れておはせし」ト詞少に差俯く。義正は心も付かず、「相手に出でたる高直も、あながち惡しといふにはあらず、舞の樣手づかひなんど、國司の子は又格別。今の世に名を得たる、舞の師匠は上手なれど、只何となくのどかやに、媚く姿は高直こそ、却つて彼師に勝るらめ。富徽の前を誘ひしは、御身に見せん爲なり」ト物語りつゝ打眠る。折柄來る腰元司、屛風の中を差覗き、ひそ〳〵と打招けば、何事かはと藤の方、靜に其所を立退きつ、此方へ來れば件の腰元、帶の間に打はさみし、結文を取出す。訝しながら藤の方、押開いて詠むれば、光氏の手跡にて、

物思ふ身は世に知らぬ、みだり心地に侍りしを、人はいかにか見給ふらん。

心知るや袖打振りし村時雨

深き仇あつて、密に討取るものならば、武士に取立てえさせんと、聞くと其儘味方に加はり、草履摑の僕と共に、音川の館より、御歸るさを待伏して、只一刀に討つて捨て、又も以前の御家臣に、見咎められてかの僕は、其所に敢なくなりしかど、二人は難なく迯果せ、仕濟し顔に立歸り、先斯く〳〵と告げければ、さる人大きに打喜び、猶も様子を聞糺せば、打止めたるは刈萱とか、いふ尼にて有りける由、さすがに我も犬獄も、面目なさに其所を立退き、左やせん右やと思ふ折、今日の事ども詳しく聞き、警固に紛れ入込みしは、言までもなく君を弑し、武士にならんと思うてなり、言ふべき事も是限り、疾く〳〵首を刎られよと、語はれたる其人の、姓名は白狀せず。猶も糺問致さんや」ト伺ひ申せば打笑み給ひ、「彼ら如きを頼とし、我を討たんとする程の、臆病者の姓名は、聞くに及ばぬ、捨ておけ。さて折角の紅葉の御賀、思懸なき騒動にて、人は興も醒めつらんが、我は今日程惟茂を、快く舞ひたる事は、今まで一度も無かりしなり。御身の勤めし尺八の、能は見物にありける」など、かの紫の所縁ぞと、思ひ給うて睦しく、いと細やかに様々の、物語したりしかば、國助も光氏の、常より殊に懐しう、打解けたりし顔ばせの、婀娜なるを打眺め、我若し女にあるならば、此若君に宮仕を、願はんものをと見惚れつゝ、紫の事思ひ出で、わが婿がねにもひとしき君、娘は果報いみじきものと、始めて己が色





糺問せよ」ト突やり給へば、「承はりぬ」ト遊佐の國助、引立て行くに目も懸けず、うたひ「忽ち鬼神をしたがへ給ふ、威勢の程こそ恐ろしけれ」ト悠然と舞納め、幕屋の中へ引取りけり。内君方々は言ふもさらなり、義正も此騒には、穩かならざりければ、直に歸館を促され、道の程も覺束なし、光氏も共々に」歸るべき由宣ひけれども、「我は後に止りて、かの曲者に同類ありや、樣子を見極め候べし」ト、其詞に從はず、方丈に一人殘り、「かの曲者は如何にぞ」ト問ひもやらずに盃取上げ、閃く月にはら〳〵と、散しく紅葉打詠め、刃に血しほを濺ぎたる、景色は見えずのどやかに、暫し發句を打案じ、硯を乞うて懷紙へ、さら〳〵と書終り、惟吉を呼出し、「汝今より御所へ行き、司といへるまだ若き、腰元を某が、豫て語ひ置いたれば、夫を呼出し此文を、人知れず藤の方へ、進らす樣に計らふべし。杉生には沙汰するな」ト追遣り給ふ其所へ、遊佐の國助御前に出で、「仰に從ひ曲者を、嚴しく詮議致せし處、彼は猫山三毛藏とて、北國の浪人者、最前君の御手を下され、討つて捨て給ひたる、犬嶽むく平と牒し合せ、或は騙兒或は盜賊、都を横行したりしが、先年舞の指南する、凌晨に語はれ、君の忍ばせ給ふを見定め、打取らんとなしたるが、壁を毀ちて落失せ給ひ、剩へ御家臣の、何とか言ひし若者に、投附けられ踏飛され、辛き目にいであひたる、その無念忘れ難き、折にさいはひさる人が、君に

是をこそとて勸めけれ。左右なすまに、日も西山に傾きければ、「夫よからん」ト義正の、仰に從ひ光氏は、烏帽子をきなし太刀を佩き、惟茂の姿に出立ち、義尙は袿をまとひ、結帽子を結下げ、「是は此邊に住む女にて候」ト打出し、或は謠ひ或は舞ひ、小高き紅葉の蔭にして、吹立てたる笛の音は、松風の響にあひ、眞の深山颪と聞え、いろ〳〵に散亂るゝ、木の葉の中より粧ひ飾り、「我は平の惟茂なり」ト輝き出でたる其樣は、いと恐ろしきまでに見ゆ。此時日は既に暮れかゝり、景色ばかり打しぐれて、空物凄くなりたるも、能の感應なるべしと、片唾を飲んで見物す。時に怪しや警固の中より、鬼の假面にて面を隱せし、曲者二人飛んで出で、義尙光氏二人を目懸け、切つて懸れば近習の武士、すは事こそと刀押取り、面々彼所へ馳集る。其時光氏少しも騷がず、身をかはして曲者の、襟髮攫んで取つて投げ、足下に踏まへて動せず、又一人が打懸るを、腕首攫んでぐつと捻上げ、「やれ仰山なり、靜まれ〳〵。まづ兄上をば父君の、御側へ誘ひまゐらせ、傅いて居るべきなり。我は是より一人にて、いで〳〵舞うて見せ申さん。目出度御代の遊にまで、眞劔帶する武士のたしなみ、切味見せん」ト聲張揚げ、うたひ「南無や八幡大菩薩と、心に念じ劍を拔いて、待かけ給へば微塵になさんと、飛んで懸るを飛違ひ、むずと組み、鬼神の眞中刺通し」ト一人の曲者切つて捨て、一人を搦捕り、「誰かある此者を、

あら心うき仰やと、耳に止めて附從ふ、女は此方を見返れば、藤の方は光氏と、親き中と人も知り、我も心の恥かしさに、富徽の前の女ども、もし我顏をまもるかと、此面白さも身にしまず、只夢心地に見居たりけり。富徽の前は尻目に見やり、「藤の方は三月より、心地惡しとて引籠り、君の宿直をし給はず、音川の下館へ、下られたるは卯月の頃、さすれば君の御胤を、宿されたのは如月にて、數へて見れば九月、嘸かし御身も重からんに、今日はようこそ是まで」トいはれて猶も胸苦しく、答ふる言葉もなき折から、木の葉下しといふ琵琶の、撥音繁く彼方に聞え、次の舞の始りぞと、人々の立騷ぐに、打紛らして藤の方、さらぬ風情にもてなしたり。程なく舞臺へ練出でし、千景の方の腹なりし、かの四郎正倘が、まだ童にて櫻人と、いふ今樣を舞ひたるは、かの光氏が靑海波に、差次ぎての見物なり。それに付けても光氏の、能く敎へ給ひけるとて、人の目をも驚かせ、義正初め千景の方の、心をも喜ばせ、斯く人々の褒めのゝしる、光氏君の昔の世は、いかばかりかの善根を、なし給ひし故なるかと、床しがりつゝざゝめきけり。是らに面白さは盡きにければ、こと醒しとや笑はれんと、續いて舞はんといふ者なく、芝居破り（芝居破りは今切狂言といふ程の事なり。慶長中の物の本に見えたれば、猶古き俗語なるべし）は義倘と、光氏の兩人にて、折に合ひたる紅葉狩の、能を勸めん定めなれば、

中にもかの光氏は、樂の道に精しく、舞にも妙を得たるに依り、はるか昔唐土より、この日の本へ傳へたる、青海波をこそ舞ふたりけれ。是は二人連舞に、なすべき樂にてありければ、赤松太郎高直ぞ、御相手を勤めける。彼も世に聞えたる、國司の嫡子といひ、顔形もなみ〳〵の、人には遙か立まさり、いと風流なる男ながら、かの光氏と立列びては、花の傍の深山木なり。入方の日影さやかにさしたるに、樂の聲まさり、同じ舞の足踏も、光氏はいと長閑にて、打笑み給ふ目元清しく、常よりも光差添ひ、插頭の紅葉いたう散過ぎ、顔の匂にけおされたる心地すれば、菊の花を折り來り、遊佐の國助さし替へけり。さる嬋妍なる光氏が、姿に菊のいろいろ映ひ、えならぬを翳しつゝ、聲打揚げて謠ひなどし給へるは、佛の國に有りと聞く、迦陵頻伽も斯くやらんと、面白く又哀れなるに、聞く人涙を落しけり。さて光氏は謠ひ了り、袖打直せば待設けし、樂の聲賑しく、手を盡したるいりあやの程そゞろ寒く、此世の物とも思はれず。物見知るまじき下人などの、木の下岩隱れ、木の葉にうづもれて見るたるさへ、思はずどよみをつくり、聲を揚げてぞ褒めたりける。富徽の前は此舞を、つくぐ〳〵詠めてにつこり笑ひ、「人には缺目の有るこそよけれと、諺にも言慣はす。文武は元より此樣な、遊業まで長けたる光氏、若死か神隱しか、さうした事でも無ければよい」ト口には褒めて心には、呪詛する如く宣ふを、

九編　上

義正公富徽の前、義尙光氏始めとして、昵近外樣の面々まで、殘る人なく、東福寺に集ひければ、今日はおの〳〵心を屈せず、思ひの儘に酒うち飮み、紅葉狩なすべき旨、義正公より觸れられけるにぞ、或は方丈の座敷に集り、或は庭に打こぞり、筵をはしらせ毛氈を敷連ね、酒盛して遊びしが、冬の日のいと短くて、はや晝さがる頃になりぬ。此時に義正は、豫て棧敷に設置きし、通天橋に御座を移され、左の方は富徽の前、押竝んで藤の方、其外數多の女ども、所せましと居流れたり。右の方は屛風を以て、其間を押圍ひ、義尙が席と定め、少し下つて光氏は、おとなしやかにぞ控へける。廻廊には諸士の大勢、星の如くに列りつ。義正は下知を傳へ、「用意も最早調ひつらん、それ〳〵」ト宣へば、「仰畏み候」とて、何れも衣裳に綺羅を飾り、能今樣を盡したる、舞どもくさ〴〵多くあり。その鼓の聲太鼓の音、實に世を響かす遊なり。遊佐河原之進國助は、尺八の能を勸め、石堂馬之丞は、浮世忘れの今樣を奏で、其他の者どもも、豫てそれ〴〵の師を撰び、此程より引籠り、能く習ひ浮めしかば、何れも愚なるのはあらず。

偐紫田舎源氏第九編序

今は昔の田舎荘子は、葆にすだく蟲の、物語になぞらへて、よく人を教誡しつ。蚯蚓に骨あり、蛙に力あり、未學の者の爭かおよばん。これも昔の田舎談議は、狐の夜話、雑長持ともろともに流行はれ、十方世界の穴を穿ち、一切衆生の頤を解き、彌陀の利劍に睡魔を拂へり。それより後の田舎芝居は、とん〳〵ぜりふの筆ばしり、をかしき事のかぎりを盡し、腹筋のより〳〵に、もてはやしゝを思出で、やがて此草紙にも、田舎といふ名はかうぶらすれど、人を教道く力も無く、人を笑す才もなし。前にも引書に著したる、雛鶴紅白なんど號ふ、はかなき冊子の拾ひ書、紫女七論の七編まで、やう〳〵去年刊行成り、今年は八編九品の淨土、源氏供養竟宴までは、思ひもよらぬ拙作ながら、せめてふるき常言の、三月庭訓須磨源氏、明石の巻までたち消の、せぬやうにと油をのせ、燈心おさへで書たつること斯くの如し。

天保癸己初春　　柳亭種彦

て廻廊を棧敷とし、法堂をまくやと定めつ。是らの事は光氏が、昨日より此所に來り、悉く差圖なし、總て用意ぞ整ひけるゝ

何と書くとも、我も文を送らん」ト頓て机は引寄せしが、「是持て行け」ト早百合に渡し給ひけり。

腰元づかひを遣すと、言置きて歸るべし。ともかの幼き、心には見分けまじと、只目を附くべき愛らしき、繪をかきなして、

十月十日あまり、東福寺の紅葉盛りにて、殊に此頃春めきて、麗かなる日の打續けば、明日なん賀宴あるべきと、室町殿より觸れられける。尋常ならず面白かるべき、此遊を富徽の前を始めとし、御方々の見給はぬを、口惜しがり給ひければ、義正も藤の方に、見せざるが殘おほく、さあらば明日は諸共に、何れも彼所へ行くべしと、俄にその用意を調へ、義正父子は東雲の、頃よりして館を立出で、夜も全く明けて後、富徽の前藤の方、其外寵を蒙りし、女乘物うち續き、いと華々しく南をさし、東へ折れてねり行けり。

抑惠日山東福寺は、大和大路に聞えたる、一二の橋の間にあり、法堂より山上の、傳衣閣へ廻り行く、廊の下に流あり、此所をわたる廻廊は、橋の如くに造りし故、是を通天橋といふ。橋下を洗玉磵と呼ぶは、岩に當つて玉なす水の、潔きを云ふなるべし。此邊に數多立てる、紅葉の今を盛にて、錦を晒すに異ならず。さて今日の結構は、洗玉磵の其上に、廣き舞臺を打渡し、通天橋に御簾をかけしは、義正始め富徽の前、方々の是よりして、物見給はん設にて、總

音もせず君はそれより遠砧

ト能くも聞えぬ發句を添へ、年經て色の變りたる、紫の半切紙へ、手は男めきてこは〴〵しく、上下そろへて散しもせず、拾書したりければ、見る詮なくて其儘うち置き、早百合を御の側まで近附け、わが忍びしを杉生に、知らせて憂目を見せたる報、是より汝は糺へかへさず、送り遣す所こそあれ。紫とてまだ幼き、遊女をひとり云々の、事にて此春身請なし、忍ばせて置きつるが、斯樣々々の事どもにて、彼は人手に渡し難し、とあつて祖母の忌の中は、まづ此所に置き給へと、言の葉がたつての願、言破らんも不便ゆゑ、その儘に歸りしが、心許なく思ふなり。御身今より彼所につかへ、怪しき事もあらんには、密に我へ告知らせよ。御身の代の腰元づかひは、是より糺へ送り遣し、仔細あつて早百合は暫く、留置くよしを稻舟の、許へ詳しく我より言はん」ト宣ふを聞き終りて、「そは輕からぬ大事ながら、仰は背き侍らじ。愚なる身の心の限り、是より仕へまゐらせん」ト答ふれば光氏喜び、「怜悧き性に見えつれども、元は流の女の言の葉、此事必ずさたするな」ト繰返し〳〵、敎へ給ふ其所へ、惟吉は小辨を誘ひ、御後より立歸り、「是こそ先程申上げし、言の葉が妹なれ」ト聞え上ぐれば點き給ひ、「其娘とこれ此所にをる、早百合を誘ひ京極へ、汝は直に取つて返し、人少にて紫が、淋き樣に見えたる故、

てまゐる時、折節こゝに立寄りて、様子を見るにまだ年は、十六七に候はんが、いと〳〵恰悧き性といひ、殊には君の恵を受けし、言の葉の妹なれば、たとへば密事を聞いたりとも、外へは漏れじと存ぜし故、御扇を印に出し、此所にて待合せ、奉らんとは申せしなり」ト聞いて光氏笑はせ給ひ、「汝も最早成人したれば、忍び女を住まする家かと、思ふよりして妹が門と、押當に吟ぜしが、戀にはあらで言の葉が、妹の門にてありけるか。その小辨とやら紫が、遊び相手によかるべし。父か母かあるならん、望みほど黄金を與へ、連來れよ」ト言捨てて、明行く空にははしたなき、姿を人に見られじと、駕を急がせ給ひけり。

光氏は館へ歸り、紫がまだ幼氣にて、をかしかりつる事なんど、思ひ出して一人打笑み、「暫しが程まどろみつ、日高う起出でんと仕給ふ折から、早百合が來り、「けしからぬ御朝寝、昨夜どれへぞおいで遊ばし、そのお疲れで」ト言ふを打消し、「いや心安きひとり寐の、床ゆゑ心緩びてなり。糺よりか」ト宣へば、「はい何れへも寄りませず、直に是へ上りました。いつぞや君のおいでの後、お文をお上げ遊ばせと、口々お勸め申しても、姫君樣は恥かしく、思召してや遅なはり、やう〳〵是へ」ト差出せば、「又例の綾泙が、教へて書かせしものならん」ト光氏手にとり見給ふに、

ト吟じつゝ、門の戸を打叩かせ給ひければ、是なん合圖と覺しくて、中より惟吉立出づれば、光氏は小聲になり、「昨夜の樣子を探知り、わが渡したる此扇を、目印として此所に、待合すべき手管を違へず、大儀々々」ト近く呼寄せ、偖かの門にて見懸けたる、怪の女乘物は、推量したるに違なく、遊佐國助にてありつらん。其故はわが打通りし、座敷に落置いたるは、是この如く男扇、泥にて書いたる遊佐の紋。また紫が父上の、道より戻り給ひしかと、言ひたるにて能く知つたり」ト宣へば手をつかへ、「仰に從ひ乘物の、後につけ行き窺ふに、宣ふ如くかの國助、君の來らせ給ひしを、彼も認めて取つて返し、秋草茂りし前栽へ、身を隱して樣子を窺ひ、君のお寢間に入り給ひ、御物語し給ふ間に、言の葉を呼出し、國助の言ひけるやう、山名宗全謀反を企て、我を味方に附けんとす、其事を光氏君、聞召されて紫を、某が娘と知り、人質のため誘ひ給ふと、今宵までは思ひしが、さにはあらで幼氣なる、立振舞の御心に、叶ひて愛し給ふ樣子、あら有難き事にてあり。此後來らせ給ひなば、心を盡して款待しまゐらせ、娘をいかにも言拵へ、彼方へ渡し奉つれと、喜び顏にて歸りしまで、後につきて聞取りたり。又此家は三筋町の、廓通ひをする者が、休らふ茶屋に候が、此所の娘は小辨とて、言の葉が妹なり。鞍馬の山の別莊にて、彼を身請の其時に、來合せて居たりしかば、詞を交し其後も、御文なども





たり。夜一夜風は吹荒れて、空の氣色も穩かならず、言の葉始めつきぐは、覺束なさに屏風の外に、打集りて居たりしが、「若君の宣ふ如く、斯く物凄き夜なんどは、心細くや思すべき。おなじくは御年の、よろしき程にて在しまし、彼方へ行かせ給ひなば、長閑に住ませ給はんものを」ト密語きあへるを光氏は、聞かぬ樣に起出でつ、「風少し吹止みたれば、夜は深けれどいざ歸らん。哀れに住める有樣を、親しく見つれば猶更に、片時こゝには置き難し、且暮ながむる所へ渡さん。住馴れしとは言ひながら、我さへ凄き此家に、能く物怖をせざりしよ」ト宣へば言の葉が、「小玉樣のお四十九日、過ぎなば御館へ迎へ給へ。夫までには御物心、少しは附かせらるゝ樣に、妾が教へまゐらせん」ト答へれば光氏は、打點きつゝすやくと、眠りこけたる紫を、搔撫でて別をつけ、返り見勝に出で給ひぬ。

光氏は夫よりも、館の方へは立歸らず、かの六條へ忍びく、通ひし道へ赴きつ、乘物は待たせ置き、彼方此方と浮れ歩き、「霧わたりてまだほの暗く、遠目には見分け難し、扇を竿に結下げ、門へ出せし所やある、能く見てまゐれ」ト近習の武士に、言付け給へば心得て、そこら邊を走り廻り、「あの家にこそ候なれ」ト教へ申せば近く立寄り、朝霧の離にしるし妹が門

懸るも美しさに、掻撫でつゝ手をとれば、常には親しからざる人の、斯く近付くが恐ろしくや、「ねなんと言へるものを」とて、一間の中へ引入れば、後につきて光氏も、其儘共に辷り入り、「疎み給ふな今よりは、我こそ思ふ人なれ」ト言ふ聲聞いて言の葉は、心の中の安からず、「先程も申せし如く、御心はまだ幼くて、何と仰のあるとても、かひなき事に侍らん」トいと苦しげに言ひければ、光氏は打微笑み、「我は幼き娘を一人、擧けし心に慰むのみ、心ざしの深さ淺さは、生立てての後見るべし」ト宣ふ折しも時ならぬ、霰さら〳〵降出でて、物凄き夜の様なれば、光氏邊を打見廻し、かく人少にあらんには、心細くや思ふべき。人々も紫の、側近う寄りて寢よ、雨戸もさせよ」ト馴れ顏に、屏風の中へ入り給へば、思ひ懸なき振舞を、言の葉は呆れながら、聲打立てて騒ぐべき、事にもあらねば轟く胸を、撫下してぞ居たりける。紫はいと恐ろしう、いかならんと身も戰かれ、そゞろ寒げに美しき、雪の肌も降來たる、霰の如く身の毛だち、俯し居れば光氏は、夜の物におしくゝみ、寄添ひてにこやかに、「嵯峨の館へ來給へよ、彼所は庭もいと廣く、鬼わたしするもよし、美しき繪も數多あり、雛遊びを常にする、相手も多き所ぞ」トまだ大人びぬ紫が、心につくべき事を撰り、様々に言ひ給ふ、そのけはひのいと懷しきに、始めの怖さは忘るれども、流石によくは寢も入らず、身じろきのみして臥居

て末々は、いかならんとも疑はず、嬉しき事にはあるなれど、只紫が年よりも、いと幼くて若君と、似合しからぬが氣懸りなと、果敢なくならせ給ふまで、其事ばかり宣ひし」ト語れば光氏顏を上げ、「さいつ頃も言ひし如く、その幼氣なる有樣を、憐れに懷しう思ふなり。人傳ならで今宵こそ、彼に心を語らめ」ト宣ふ此方に紫は、小玉の事を慕ひわび、泣寢に臥して居たりしが、あの袴著しお姿の、嬋妍なるなど腰元の、女が言ふを寐耳に聞き、父國助の來りしと、思ひ違へて起出でつ、「言の葉よ、袴召してと腰元の、今言ひたるは父上が、道より歸來ませしか」ト、いと愛らしき聲にて呼び、走り來つて言の葉に、ひた〳〵と寄添へば、光氏は打見やり、「イヤ父君にはあらずとも、思ひ捨つべき人にもあらず。此所へ〳〵」ト宣ふを、恥かしがりし其人の、聲とさすがに聞なして、よしなき事を言ひたりと、顏打背け、「眠たきに、いざ言の葉よ連れてゆけ」ト打紛らせば光氏は、少し面に笑を含み、「など今更に隱るゝぞ、わが此膝を枕にし、サア眠たくば寢るがよい。此方へ〳〵」ト打招けば、言の葉も打笑みつゝ、「背丈は延びて見え給へど、御覽の通りの頑是なさ、七ツか八ツのお子の樣で、とんとたわいが御座りませぬ」ト言ひつゝ側へ差寄すれど、さのみは恥らふ氣色も見えず、何心なくつい居たる、紫が姿形、光氏つく〴〵打見るに、寢卷の衣のなよやかに、艷々としてふさやかなる、髮少し打亂れ、衿へ

を訪はんと、忍びやかに出で給ひ、駕を急がせ行く程に、早彼家に近附くをり、怪しげなる女乘物、向の方より舁來り、光氏のおはするを、見るより駕の垂を下し、つと横道へきれ行くにぞ、光氏是を見咎めてや、惟吉を近く招き、何事かは密々と、囁き合ひて目印に、是もて行けと扇を渡し、彼の乘物の後を追はせ、其身はさらぬ風情して、頓て門へ立入り給ふに、見しよりも猶荒增り、人少なる有樣なれば、幼心に紫の、嘸恐ろしとや思ふらんと、打案じつゝ呟き給ふを、言の葉は聞付けて、平常の一間へ御座を設け、小玉がはかなき有樣など、打泣きつつ操返し〳〵言出づれば、光氏も袖を濡し、言出でん詞もなく、默然として居たりけり。言の葉は涕打かみ、「君には申上ぐるなと、口固はせられしかど、紫樣の父上は、何某殿とて國司、是に在すと聞附けて、館へ迎へ給はんと、仰越されし其時に、小玉樣が密々と、妾へ宣ふは、世を過去りし我娘、此紫を產みたるは、何某殿の妾にて、彼所へ送りやる時は、其奥方とは繼しき中、殊には心かたましく、悋氣深き性にて、子も二三人おはす由、夫と交らば紫は、妾腹とて蔑られん、何事をも辨へぬ、幼き程か扨は又、成長なして人の氣を、汲知る程なら宜けれども、その中空なる年頃ゆゑ、彼所へ送る心はなしと、歎き給ふも無理ならず、なさぬ中ゆゑさがなき名を、世に唱はるゝはある慣、若君樣の有難き、仰の程を言出し給ひ、御戲に

取つて抱き寄せ、「いか程思ひ歎くとも、世に亡人はその詮なし。在家を知らねば今までこそ、便もなさで過しゝが、我だにあれば御身の上、悪き様には計らはじ」ト様々に賺し聞え、夕暮方になりければ、いざ歸らんと立上るを、心細しと思ひてや、目を擦赤め紫は、裳に縋り放たねば、國助も打泣きて、「さな歎きそよ別るゝとも、近きに館へ迎へん」ト立出づる後影、名殘惜げに打見やり、是より繊しき母に仕へ、辛苦やせんと言ふ事は、年足らはねば思ひもやらず、只年頃にまつはりて、片時側を離れざりし、小玉の事のみ戀慕ひ、幼心に胸塞がり、いつもの様に遊びもやらず、晝は紛るゝ事あれども、夕暮方はいつとても、思ひくづをれ居たりしかば、斯くてはいかで過し給はん、哀の事やと慰め兼ね、言の葉は持てあぐみ、共に袖をぞ絞りける。

神無月に至りなば、紅葉の賀宴あるべしと、その催頻りにて、能今様に長けたる者を、夫彼撰み給ひければ、光氏は暇なく、彼の若草をも暫しが程、音づれざりしを思出で、文書認めふりはへて、彼所へ使を走らせけるに、小玉は過ぎつる二十日の程、遂に空しくなりたりと、言の葉の返事に、細々と聞えければ、光氏は是を見て、母花桐に後れたる、其悲しさを思出で、我身の上に引比べ、幼心に戀ひやすらん、不便の事やと紫が、有様の心許なく、一まづ彼所

物古りて、荒増りたる此家に、斯くてはいかで住果つべき、近き中に紫は、わが方に誘はん。家にも二人の子をもてり、諸共に遊びなば、少しは紛るゝ事もあるべし。とは思へども光氏君、許多の黄金を積ませられ、廓を出し給ひしを、連行かんも憚あり。とあつて黄金を我がもとり、償ひたりとも若君の、受納めは仕給ふまじ、此事殆ど當惑せり。先夫よりは差當り、小玉が果敢なくなりたるを、君には知召されしや」ト問はれて言の葉膝を進め、「久しぶりにて今日晝頃、光氏様より御文ゆゑ、其御返事に私から、詳しく申上げました」ト語る折しも紫は、父の聲を聞つけて、走出づれば國助は、膝の邊へ近く寄せ、斯くなる事と知るならば、疾に館へ迎取り、母の許にて生立てなば、よしや繼しき中なりとも、一入不便もまさらんに、澤菊小玉が世を去りて、寄邊なき故せん方つき、呼迎へしと思ひやせん、夫のみ心苦し」ト吐息をつけば言の葉は、涙を拂ひ聲打潛め、「お心細く侍らんが、暫しはこゝに住ませ給ひ、人の目顔も能く悟り、御物心つきて後、迎へ給はゞ奥様の、御いとほしみも深かるべし。此頃はとりわけて、小玉様の御事を、夜晝戀しう思召し、お髪を上ぐるもうるさがり、御膳もろくに召上らず、これお手までが細りし」ト又も涙に暮れければ、國助つく〴〵打見るに、實に言の葉が言うたる如く、髪も亂れて面痩せたるが、猶美しく著なしたる、小袖の古りてなへたるを、哀れげに思ひなし、手を

さん道理はなしと、言慰めて赤松の、館を出し忍ばせ置き、名を綾泙と呼變させ、我は知らぬ樣にもてなし、御身が此所の腰元づかひの、女を尋ぬる其時に、彼をも夫に加へしは、稲舟姫と添臥すさまに、見すべき豫ての手段なり。さる故此所を小暗くなし、眞の姫は腰元に、打紛れて辷り出でつ。此事を能く知る者は、久しく此所に仕へ馴れし、紅ばかりにあんなれば、早百合を始め其外の、腰元どもには沙汰するな。例の己が好心と、思はせよ、譏らせよ」ト語り給へば光氏の、今に始めぬ事ながら、用意深きを杉生は、深く感じて退きければ、光氏は暫し熟睡み、まだ夜深きに立出でぬ。早百合は夫と聞附けたれど、知り顔ならじと打臥して、御送にとも聲つくらず、此方もいと忍びやかに、歸らせ給ひけりとなん。

遊佐河原之進國助は、光氏が猜せし如く、密に娘紫を、見まほしくて姿をかへ、忍びやかに六條の、小玉が住居へ折節音づれ、紫も馴親しみ、睦しく語らひしが、小玉は九月廿日の程、遂に空しくなりたりと、言の葉より告越しければ、國助は打驚き、其儘行かんと思ひしかど、室町御所への出仕繁く、五七日過ぎて後、漸く少しの暇を得、女乗物かき寄せさせ、密に是へ乗移り、直に彼所に至りければ、言の葉は一間へ請じ、哀れなりける小玉の樣を、言出しつゝ泣きければ、國助も目をしばたゝき、涙見せじと物淋しき、邊の樣を見渡して、「いと廣けれど

げねど、夫とは見えぬ蓮葉の姿、世馴れぬ人とも思はれぬ、其上どうやら見た様な」ト打案じつゝ膝を打ち、「ヲヽそれ〳〵、名はたしか綾浮とて、早百合と共にお館へ、召抱へしお腰元」ト言懸ければ光氏は、打點きて近く差寄り、「此女は元中空とて、二葉の上の傅なりしが、太郎高直まだ妻を、迎へざりし其以前、妾になさんと言ひつれども、願ある身と承引かず、程經て後に某へ、心を懸けて送らんと、竊に書いたる玉章を、小毬に見出され、あすは館を拂はんと、押込め置きし部屋を脱出で、わが寢間へ忍び來り、枕刀を盗取り、自害と覺悟極めし體に、押止めて樣子を問へば、此女の父何某は、筑紫方の武士なりしが、仔細あつて浪人し、其頃二人の娘をもてり。然るに其妻みまかりて、未だ年もたらはぬ娘を、二人までは養ひ難く、姉をば人にやりたるが、廻り〳〵て父上の、側室となりてさいつ年、四郎正倚を擧けたる、千景の方即ち是なり。其妹は是なる中空。右の事ども詳しく聞き、つら〳〵思ふに姉千景は、室町御所にて傅かれ、妹は家臣の高直が、本妻にもあらばこそ、側室とならんは口惜しと、思ふよりして高直が、心には背きしならん。それはともあれ彼が父は、堀川邊にいと微に、世を送れども我こそは、千景が實の父なれと、御所へ名乘りて出でざるは、一たん養女に遣りたる、其人に義を立ててなり。其義者の娘といひ、殊には父の御胤を、宿しゝ女の妹の中空、我ゆゑ殺

し。夫故竊に御身を頼み、側づかへの女を抱へ、少しはときめく樣ながら是この如く荒れたる儘、館を修造の沙汰もなし。母花桐の名殘とて、此光氏を父上の、いとほしみ給ふ事は、今更言はずと知る如く、元義尙を差越して、家をも繼がせ給ふべき、御氣色ありしに驚かれ、浮れ人とはなつたるなり。其愛子たる光氏が、通ふと聞召されなば、稻舟姬を父上の、よも疎略には仕給はじ。然る時は自から、世の謗をも防がんと、斯く計らひしぞ神かけて、わが色好みの故ならず」ト言へば杉生打微笑み、「宣ふ事は道に似て、道に背きし處あり。仰の如く御兄上義尙君を差除き、あなたに御世を讓らんの、義正公に御氣色ありとは、今も噂を言止まず、稻舟樣は取分けて、世を治め給ふべき、御身にてあるならずや。下樣の世話にいふ、媒鳥とやらんに姬をして、あれ光氏こそ天が下を、望むと人に言はれなば、夫をば何とか言解き給ふ。よしさなくとも御本妻の、はや定まりし御身にて、おいとこ同士にはありながら、前將軍の御胤を、遊び物と仕給ふが、人の道とは言難し。押附わざに姬君の、御身を穢し給ひしは、何の言譯し給ふとも、御過失に侍る」ト、憚る色なく言放てば、光氏につこと打笑ひ、「否とよ、姬の身は穢さず。夫へ出て杉生に、安堵させせよ」ト夜著取除け、つき遣り給ふ女の顏、つく〴〵と打まもり、「姬君樣はいつとても、扇を額に打かざし、物つゝましく仕給へば、お顏は能くも見上

に假託けて、此お館へ私も、始めて上りて樣子を見定め、藤の方のお願と、御所樣へ申上げ、お側使の女子どもを、都の町より撰出し、御事缺の無き樣に、取繕ひしは改めて、今申さずと兼てより、あなたには能う御存じ。夫程大事の稻舟樣と、御添臥は何事ぞ、御本心とは思はれず。彼の琴の音を聞召せし、其折に姫君を、見初め給ひて夫となく、恩をほどこし我戀を、叶へんといふお心か、餘りにさもしき御振舞。十七日の夕さり方、淸水寺より戻りがけ、茶屋の緣に腰打懸け、何心なく差覗く、奧には君と早百合と二人、何事をか宣ふと、立隱れて詳しく聞取り、元より早百合は此所許の、お館へ上げる時、私が見出したる、女子なれば知りたる中、歸る處を呼留め、光氏君がお館へ、忍び給ひし其時に、必ず妾へ知らせよと、約束固めて今宵ぞと、音づれ聞くと其儘に、お次へ參りて宵よりの、樣子は見屆け侍る」ト言葉は水の流るゝ如く、さら〳〵と言流せば、光氏は吐息をつき、「我が潔き心の程を、告げんとすれば恰悧げに、父の行善からぬを、擧ぐるに似たり如何せん。かゝる筋には過ぎつる年も、當惑したる事のあり、人にな漏しそ竊に語らん。御身が今も某が、口眞似をしつる如く、稻舟は伯父の嫡女、成長の後婚を定め、世を讓らんが父上の、兄を敬ふ道にてあり。よし夫までの事はなくとも、莊園數多つけらるべきを、斯く押込めて置かせらるゝは、父君の怠りにて、世に譏る者いと多

八編　下

既に先にも記しゝ如く、稲舟姫は物恥を、深くし給ふ性ゆゑ、障子を隔てゝ光氏に、物語し給ふ時、燈火を遠避けたれば、あいろも分かぬ薄暗がり、思ひも寄らぬ杉生が、さし足しつゝ窺ひ寄り、「光氏君、我君」ト呼覺しつゝ袖をもて、光を包みし雲洞を、差附くれども起きも上らず、「ヲ、杉生か用あらば、夜明けて後館へ來よ、其時聞かん」ト言捨てゝ、其儘眠る手をとらへ、「心得難き御有樣、妾が申すを一通り、聞かせ給へ」ト引起せば、光氏は眠たげに、「天下の大事か、父の仰か、夫より外に夜明まで、待たれぬ用はよもあらじ。早々語れ」トいふ顏を、つく〲と打まもり、「君さいつ頃妾を召され、加茂の社へ詣でし歸り、糺が原を過ぎたりしに、荒たる館に琴の調、耳を留めてよく聞けば、我家に傳へし祕曲、あら心得ずと密に問へば、稲舟の住むよしなり、彼は我伯父義勝の、忘形見にあるなれば、斯く荒果てゝ人けも無き、館へすゑ置き給へるは、父義正の過失なり、とはいへ兄の義尚を、差置きて父君を、諫めんも又憚あり、汝宜しく計らへと、妾へ密に宣ひしを、よもや忘れはし給はじ。夫故にこそ藤の方の、御産の守

氏はつと立上り、隔の障子をやをら引開け、内に入りつゝ傍なる、夜の物引被ぎ、姫に添臥したりけり。腰元どもは打驚き、うたてき事とは思ひながら、世に類なき光氏の、姿に恥ちてはしたなく、聲をも皆々立兼ねて、さる御心なき姫君の、俄の事にて恥かしく、我にもあらず打歎き、給はん事のいとほしさと、思ひながらに早百合を始め、知らぬ顏にてわが部屋へ、ひそひそ辷り出でにけり。

光氏は、聞かぬ樣にもてなしつ、心の中に思ふ樣、わがいとこ女にはありながら、世をも治めん血筋の姫、浮世に馴れてざればみたる、女よりは却つて床しく、一間の樣子を窺へば、綾浮に勸められ、隔の障子へ最近く、稻舟はすり寄りしか、衣の香はつと薫りけるに、さればよと光氏も、障子の許へゐざり寄り、年頃おもひ渡る樣を、細々と言續くれど、内には絶えて答もなし。吐息つく〴〵打歎き、

蝶のしどまに負けて秋の蟬

ト俳諧の句を言懸けたり。是は此頃の童子遊に、とうしまに鐘つくと言ひて、何にても打鳴し、其後に物を言はず、物言ふ者を負とする、戲れのありしかば、聲なき蝶に負けて鳴く、我身を蟬に譬へしなり。稻舟は是にさへ、更に答をし給はねば、綾浮側より差寄りて、

入相やくちなし色のはぢ紅葉

ト若やかに蓮葉なる、聲して姫にはあらぬ樣に、吟じ上ぐれば稻舟の、人柄には物馴れて、詭ばみたる言ひ樣と、思ひながらに光氏は、綾浮なりとは心付かず、いと珍しき聲を聞き、なかなか口も閉りつと、猶もさま〴〵言葉を盡し、をかしき樣にも信やかにも、搔口說き給へども、その詮もなく稻舟の、答なければ若し外に、通馴れたる人もやあると、妬ましく思ひけん、光

奥の間へ、ゐざり入らんとし給ふも、初々しげに見えければ、早百合はにつこり打笑ひ、「親のありて大事にかけ、傅く中は年長けても、若々しきは女子の常。あなたは便のない御身、世に出で給ふ掛橋と、なる事もござりませう」ト教へられて姫君は、強くも人の言ふ事を、辭み給はぬ性ゆゑ、「聞けと云はゞ聞きもせん、燈火はのけて其仕切」ト宣へば早百合は心得、間の障子を強くさし、「光氏君に蓮葉なる、御振舞はよもあらじ」トいひなす中に紅は、次の間に褥を持出で、光氏君の御座を設け、引退けば此方の間には、綾汗が立廻り、はやしつらへたる稲舟だ、夜の物を押疊み、是も褥に敷換へつ。「今宵は丁度折もよく、年の長けたる女子どもは、夕まどひして部屋へ退き、お側に居るは私始め、若きものが二三人、光る君と世の人に、愛でられ給ふ光氏様と、床しがりて彼様に、立騒いで居りまする。お髪の亂れも搔上げて、いざ是を召しませ」ト色よき帷子取出し、きせ換申せど稲舟は、彼の人ゆかしき氣色もなく、箇様の時に言語らふ、詞は夢にも知らざれば、最つゝましげに仕切の障子を、少し隔てゝつい居たり。腰元どもは打集ひ、障子の隙より光氏を、差覗いてつくぐ\見るに、清き性の其上に、物好したる單の衣を、嫋かしからず著なし、扇に肘を凭せし様は、心ある人にこそ、見せまほしなどさゞめきあひ、若し姫君に逢そめ給ひ、末の遂げざる其時は、御物思のまさらんと、密めきいふを

押止め、「我は荒たる其簀子に、たゞずまほしく思ふなり。又物恥をなすとやらんが、女子めかしく却つてゆかし。必ず首尾よく計らへ」ト口固めして立別れ、嵯峨の館へ歸りけりとぞ。

同じ八月二十日あまり、宵過るまで待たるゝ月は、まだ山の端の白みも見えず、星の光ばかりさやけく、松の梢を吹く風の、音もさながら心細く、稻舟は寢もやらで、物思ふ樣したりければ、好き折かなと早百合は思ひ、文書認め光氏の、許へ斯くと告げしかば、例の忍びておはしたり。月はやう／＼差出でて、荒れたる籬の悚ましきを、打詠めて彳めば、内には早百合が夫ぞと悟り、琴を持出で押直し、勸められて稻舟は、音色ほのかに搔鳴す、其手遣の今樣ならぬを、いかにか聞かせ給ふらん、今少し花々しき、彈べ樣もあらんものをと、早百合は心に思ひけり。人目も無ければ光氏は、心安く内に入り、「早百合／＼」ト呼び給へば、走り出でて打ささやき、綾汘と申す腰元、怜悧者に侍るから、仰の趣竊に傳へ、今宵の事は彼の女子、取まかなふ筈なれば、是に暫し待ち給へ」ト立歸りて稻舟の、側近くすり寄つて、「此頃竊に聞えたる、光氏君の來ませしなり。何程に申しても、あなたのお聞入なき事は、直に傳へまゐらせしが、夫なら己が直にあひ、言聞かせんとお出の樣子、なにとか云ひて歸し申さん。先物越にて光氏君の、仰の程を聞食せ」ト言はれて稻舟恥かしく、「男に物を言ひ樣は、知らぬものを」ト

し、折れ殘りたる隱の方に、立寄りてふと見れば、元より立てる男あり、誰ならん心懸けたる、好者ありと驚かれ、なほ月影の暗きにつき、立隱れて能く見れば、山名三郎統淸なり。元より彼は風流に、心を寄せる者ならねば、彼の琴の音に聞ついて、立てるにてはあるべからず、心を懸けし仁木の娘、村荻を妻としたれば、すき心とも思はれず、故こそあらめ我なりと、知られじものと拔足に、歩み退きつゝ月影も、雲隱れたる道の程、笛吹すさみて歸りしが、哀れげなりつる住居の樣、琴の音色を思ひ續け、忘るゝとにはあらざれど、瘧病に惱まされ、其儘に捨置きつ。彼統淸より姫の許へ、人して言寄る事はなきや」ト仰に早百合は小首を傾け、「此頃此方彼方より、御文はありしかど、何れも〳〵返事を、せさせ給ひし事はなし。その先方は何所とも、聞定めん樣はなし」ト聞いて光氏打案じ、「度々文して言寄らば、遂には靡く事のあらん。宜なに姫を欺りて、我を逢はせてくれよかし、心焦れのせらるゝは」ト推返し〳〵、言葉を盡して責め給へば、早百合はいとゞ胸苦しく、なか〳〵なる導きして、わが過失になりもやせん、さは去りながら若君の、斯くまめやかに宣ふを、聞入れざらんも憚ありと、漸に心を定め、「始にも申せし如く、物つゝみし給へば、あからさまの御對面は、思ひもよらぬ事なれど、物越に聞えん程は、取つくろひて參らせん。淺茅分くる人も絶えたる御館へ」ト言懸くるを光氏は

詠めて居る處へ、かの紅とやらんにや、腰元使の女來り、物の音の勝るべき、宵の程に侍るかし、いざ一手遊ばしてと、頓て琴を持出でければ、其儘ほのかに搔鳴すは、さばかり深き手にはあらねど、聞にくくも無かりしなり。其中にかの腰元、わが忍ぶをや見出しけん、思ひの外に月も更け、曇勝に侍るとて、障子を閉して辷り出で、今一曲とも勸めねば、能くも聞きえず止みたるなり。此事姫にほのめかせ、同くは近き程にて、我に立聞せさせよ」ト宣ふ顏を心憎く、早百合は見上げて打笑ひ、「過ぎつる年も空衣が、閨に誘ひまゐらせしは、私なりと疑受け、歸らせ給ひし其後にて、言懲されたる事もあり。稻舟樣の御琴は、さほど御心盡されて、聞召す程にはあらじ。今に變らぬお忍び歩き、お疲を御所樣の、若しや御目に留りなば、何とか仰せあるべき」ト聞ゆれば光氏は、行かんとせしが立歸り、早百合の背中をしとゝ打ち、「是らの事をあだ〳〵しき、振舞と云はんには、女の罪は猶深し。その色めきたる姿にて、浮世男の心を迷はせ、佛參に假託けて、忍び逢瀨は何所ぞや。中川で逢ひし折は、言葉を懸けても顏打赧め、しか〴〵答もせざりしが、誰に習うて斯くばかり、浮世には馴れたるぞ、事の序に語れよ」ト言はれて早百合は恥かしと、顏打背けて物云はず。光氏彌小聲になり、「問ふべき事を忘れたり。今物語したりし如く、糺の館へ忍びし夜、彼所をやをら立出でて、透垣の只少

の、御代參に清水へ、只今參詣致します」ト聞いて光氏膝を打ち、「そは幸の事にぞある、密に語らふ事あれども、此所は往來の人目もあり、此方へ來よ」ト傍なる、茶屋の座敷の奧深く、物靜なる所へ誘ひ、光氏早百合が身近く寄り、「紅の館は義勝公、世に在します時だにも、時々ならでは通ひ給はず、人氣少き所なりしが、今は殊更荒まさり、物凄じき體なるを、夫を憂しともいひやらず、靜に住める稻舟が、心の中も訝しく、又顏容はいかなる樣ぞ、哀れにゆかしく思ふなり」ト事あり氣に問ひ給へば、早百合は聲を打潛め、「姬君樣は物恥を、常々し給ふお性にて、暑き日とても取はなし、端居なんどはし給はず、かい潛みて在すれば、私どもは物越に、御物語致すばかり、御顏容は能くも見上げず、お側に親く仕るは、紅といふ前方より、勤め馴れたる女子一人、只琴をのみ明暮の、語らひ人とはし給ふ」ト言ふに光氏笑を含み、「琴酒詩を三ツの友と、樂天はいひつれど、詩は女にはこは〴〵しく、酒は猶更うたてくあらん。稻舟の父たりし、義勝公も琴を好かれ、妙術を得られし由、其血筋を受繼がば、音色も嘸と推計り、頻に夫が聞かまほしく、此如月の頃なりし、いざよふ月のおぼろ〳〵、道を忍びて某も、實は彼所へ行きたるが、咎むる人の無かりしかば、遙々と庭を廻り、內の樣子を窺ひ見るに、閨と覺しき小暗き所に、稻舟は只一人、晝の儘にて障子も閉さず、梅の花の盛なるを、打

いかなる女なれば、斯くまで思し給ふやらん」ト かの老僧に咎められ、何と答へん詞も無く、そこ〳〵に暇を乞ひ、心慰む方もやと、堂の舞臺に立出でて、遠近を見渡すに、向ふよりくる女あり、色白うして目元清しく、眉は此頃拂ひしか、其跡のいと青やかにて、色好みなる若人と、見るより心に微笑まれ、いざや嬲りて遊ばんと、光氏頓て聲をかけ、「我は田舍の者なるが、是よりうたの中山へは、何程の道かある」ト問はせ給へば此方を見返り、「思ひも懸けぬ光氏君、何地へ渡らせ給ひしぞ。年月たてば妾をば、御覺も侍るまじ。其昔は若君も、召使ひなどし給ひし」ト懷し氣にいひければ、光氏つく〴〵打まもり、「何とやらん面影の、ヲヽ思出したり、空衣が腰元づかひ、名はたしか夏野とやらん」「能うお覺え遊ばして」ト猶ありし夜の事なんど、しめ〴〵と言出づれば、かの村荻が空衣と、火影に姿もみだれごを、打解けたりし其樣の、又見まほしくや光氏は、差俯いて居たりしが、稍ありて面を上げ、「空衣は夫と共に、さる年伊豫へ下りしが、汝は何れに仕へてゐる」ト問はれて猶も近く寄り、「仰の如く本國へ、お移り遊ばす其時に、お供を願ふ筈なれども、老いたる父を都に殘し、引離るゝも悲しさに、せん方なくお暇願ひ、親の元に侍りしが、さいつ頃稲舟樣の、お側使を御尋ね、願うてもなき事なりと、父の勸めに又再び、姫君樣へ御奉公、名をば早百合と改めて、今は糺のお館勤。今日は稲舟樣

樣と夫々の、役者を用ひず其道を、常に好む家臣を撰び、御身、義尙はいふに及ばず、幼けれども正尙にも、指南なして舞はせて見せよ。はや此事は昨日の夜、當館には觸れたりし」ト仰を聞いて光氏は、「委細かしこみ候」ト御前を退きつゝ、かの黃昏が佛事のことの、心には懸りながら、直樣館も出で難く、とある所を見給ふに、かの紅葉の賀宴の催、人々興ある事に思ひ、廣座敷に集りて、俄に舞を習ふもあり、或は篳篥尺八の、笛なんどを取出し、大聲に吹上げつつ、或は太鼓を高欄の、下へまろばし寄懸けて、手づからに打鳴し、物の音色も常よりは、耳姦しく遊びざゝめき、最せはぐ〳〵しき樣なれば、我身を盜みて光氏は、ふと館へも歸り難く、心ならずも留まりて、十七日になりにけり。今日は觀音の緣日なれば、淸水寺へ參詣せんと、光氏は暇を乞ひ、例の供人僅にやつし、直にかの御寺へ詣で、忍びての事なれば、黃昏親子の名を包み、何人なりとも宣はず、只心ざす人の爲とて、佛の飾經を始め、布施料なんど數多をさめ、讀經をせさせつゝ、此寺には光氏が、幼き時に學問の、師と賴みたる睦しき、老いたる僧のありけるに、斯樣々々の事なりとて、はかなき樣になり行きたる、親子の上を夫となく、物語したりければ、今は歌舞の菩薩と生れ、阿彌陀佛の御前にて、舞奏でてゐる山を、いと哀れげなる諷誦の文に、書出でて讀上ぐれば、包むとすれど光氏の、淚こぼるゝ顏打まもり、「抑

へ連行き、迎取りて來るべし」ト千景の方に宣ひけるにぞ、「仰畏み候」とて、その次の日四郎の君を、我が乘物へ乘せまゐらせ、忍びやかに音川の、下館に赴きつ、藤の方に對面し、義正公の等閑ならぬ、お心の程を告げ、「此若君の朝夕に、藤の方の見え給はぬ、我をも彼所へ連行けよと、むづかり給ふもいと悲し」ト詞を盡して聞えけり。既に先にも記しゝ如く、庭の築山一つを隔て、富徽の前と住まはんも、いとむくつけくは思ひながら、千景の方の心ざしも、振捨て難く四郎の君の、迎へも憚多ければ、近きに御所へ上らんと、直よかに言うけなし、酒肴を設けつゝ、夜に入るまで饗し歸し、文月になりて後、漸く御所へぞ歸りける。義正は藤の方を、いと珍しく側へ近附け、限なき思ひの程を、物語りつゝ打見るに、腹は少し膨かにて、打惱み面瘦せたる、實に似る物なく嬋娟なるに、彌あはれは勝りしなるべし。

光氏は去頃より、嵯峨の館へ引籠り、閑に思ひ續くるに、碓の音砧の音も、耳につきて聞惡かりし、夫さへ戀しう思出でられ、程なく八月十五日、かの自害せし黃昏が、一周忌とぞなりにける。其佛事もせまほしけれど、今日は壽く日にてあれば、先室町に至りけるに、父義正は膝元近く、光氏を招き寄せ、「我世をとりて幾年か、斯く穩かに治まるこそ、此上も無き喜びなれ。さるに依りて通天の、紅葉の盛なるを待ち、彼所に賀宴の酒を汲まん。其時は樂を始め、能今

八編　上

義正が側室多きが中に、千景の方と聞えしは、眉目麗しきといふにはあらねど、其性いと柔しく、心を用ひて仕へければ、義正も不便を加へ、既に男の御子を擧け、四郎正倚と名のり、今年は早七才なり。

第二編目の初に斷りし如く、義正の側室數多ありて、男女の子を多く生めり。其度々に記さんには、讀み給ふに煩はし。故に其折其子に用ある時、詳しく是を説さとせり。今千景の方四郎の君の、二人の事を語出づるも、即ち先に斷りし例なり。

是のみに限らず、七編目に記したる、赤松高直柏之助を擧けて後、程なく男女の子をもてり。又惟吉が妻を娶るの類も、その度々に書付けず、誰の妻、誰の子、いくつばかりと、末々に、用ある時に著すべし。

此正倚を藤の方、一方ならず愛しみ、膝元をはなち給はず、千景の方ともとりわけて、その中睦しかりしかば、義正はふと心づき、藤の方の音川より、歸りこぬ由を語り、「御身、四郎を彼所


光氏十八歳 七編と同年
義勝の嫡女
稲舟姫


稲舟の侍女
花里

修紫田舍源氏第八編序

紫式部は觀音の化身なりとぞ。されば源氏物語に出づる女に、揚柳のしなやかなるあれば、寶珠の光の輝くあり、弓の張ある、劍のするどき、其趣は異なれども、いづれも〳〵手どりなるは、千手の御名に因るもの歟。予は田舍に由緣ある、馬頭を一向信ずれども、口は強く筆は走らず、机にかゝり面杖つき、彼如意輪の姿にて、どのやうに考へても、念彼觀音の力にさへ、下手變上手の誓はなく、戸帳の錦をおりだすべき、腸を持たざる身は、田舍木綿が精一杯、若紫と紅葉の賀、末つむ花の横竪が、ひとつになりたる格子島、第六編より十編九編、四五反續きの長尺に、なほ織餘りは石山の、鉦の緒にや掛けて祈らん。

柳亭種彦誌

天保四年癸巳發春


偐紫田舎源氏
種彦作
國貞画
癸巳春發兌
八編
上冊
仙隺堂梓

の方聞及ばれ、是を受けんと杉生を、彼所へ使にやりたるが、杉生はかの荒果てて、人少なる館の體を、始めて見て心に驚き、哀れに住ませ給ふ由を、藤の方に物語り、義正へも聞え上げ、まづ御側にて召使ふ、女をまゐらせ給ふべし、これ藤の方の願なりと、遂に其事取繕ひ、都の町を尋ね求め、綾汻早百合なんどいふ、腰元づかひに似合しき、眉目よく若き女を集め、稲舟姫へぞ送りける。

上に、刈萱が果てたるを、聞召されていよ〳〵重り、打臥してのみ在すると、思ひの外に御胤を、宿し給ひし御氣色ぞ」トいふに義正大に喜び、猶も使を日に日に馳せ、御所へ迎へ給へども、藤の方は心進まず、今までだにも寵愛の、深しと妬む富徽の前、斯くと聞きなば又如何なる、憂目を見んと思ひわび、わづらはしさも彌增り、御所へ歸り給はねば、義正は心許なく、自ら文を送り給へど、心地あしとて一條の、返事さへし給はず、只鬱々と過しけり。

爰に又稻舟姬といふありけり、是は義正の兄義勝の嫡女なり。義勝世をとる事僅三年、いと若くして身まかりぬ、これ稻舟が生れし年なり。義勝は此娘のみ、外に男子のなかりしかば、弟義正世を治め、花の御所とてときめくを、見るに附けても稻舟は、父義勝の世に在さば、あの如くならんものをと、戀しさ悲しさやる方なく、世を憂き物に思ひきり、尼にならんと願へども、義正流石に夫をば許さず、されど何所へ緣邊を、取結ばんの沙汰もなく、只埋木となり行きて、糺の森の邊とやらんに、空しく月日を送りけり。此所は義勝が、將軍たりし其時に、遊興の爲にとて、造り磨きし館ながら、荒れたき儘に荒まさり、物凄さいはん方なく、附從ふ者どもも、義勝に仕へたる、古人どもにあんなれば、頭は白く腰屈り、物の用に立つべくも見えず、只紅といと若き、腰元一人あるのみなり。此稻舟がいと尊き、産の守を持てる由、藤

刈萱は、につこと笑ふが此世の名殘、敢なく息は絶果てたり。光氏不便と見やりながら、件の印籠取上げて、高直に打對ひ、「阿古木がしらせ刈萱の、物語にて汚名もうけず、目出度返る此印籠、卷繪にかきしは柏の若葉、汝男子を擧げし由、柏之助と名づくべし」ト仰にはつと高直は、印籠受取り押頂き、頭を砂にすり附けたり。猶光氏は刈萱が、野邊の送の事なんど、細々と命じて後、杉生を呼出し、「藤の方に此事を、密に聞え上ぐべし」ト、ありし事ども語り聞かせ、かの刈萱が書置を、捜し求めて渡しつゝ、殘る事なく取まかなひ、館へ歸りけるとなん。

夜も程なく明けければ、藤の方に杉生は、ありし事ども物語るに、大方ならず驚き給ひ、不便の事にてありけるとて、かの書置は涙にくれ、繰返せども見も分らず、其儘泣寢にふし暮しつ、此歎にや惱ましさも、次第にまさる心地して、室町よりは疾く館へ、立歸れよと御使、頻りなれども思ひも立たず、皐月も過ぎて水無月の、暑き程には起きも上らず。されども重き病にあらねば、湯をひき髮は取上ぐれど、左に右心うき立たず、心地の常と異なれば、如何なるにかと人知れず、思ひ惱みて居たりしが、湯殿なんどに親くつかふる、腰元輩が氣色を見咎め、はや三月にもなり給はん、最しるき程なりと、密めき言ふを聞附けて、杉生は夫となく、心をつけて窺うに、いよ〳〵紛れのなかりしかば、室町の御所へ赴き、「藤の方は御心地、惱ましき其

絶えなり。高直耳に口をよせ、「御身を討ちし此奴めは、いかなる者ぞ」トかの首を、差附くればぢろりと見やり、「名は知らねども山名の忰三郎の草履取、鞍馬へ君のおいでの時、お供の中へ紛れ行き、其印籠を盗みし男。迯去つたりし二人の者は、犬竹猫山なんどとて、近頃山名へ抱へし浪人。とゞめを刺さず歸りし故、是らの事まで聞え置き、彌思ひおく事なし。なう若君、妾が知らせを眞と思ひ、笠をもとらず面をも、見極めざれば宗全へ、君を討ちしと告ぐるは必定、されば暫く御身を隱し、世の成行を見給へ」トいへば光氏涙を拂ひ、「夢占形を問ひし時、藤の方には恙なし、御身に災あらんとは、山名が我をねらふ由を、餘所ながら告げたるならん。さては山名の家來ども、此邊を徘徊するは、藤の方を奪取らん、企と思ひの外、我を討たん手段よな。あら事をかし」ト打笑ひ、「ヤヨ刈萱、惡に強き其者は、必ず善にも強しと聞く、其身ばかりか兄嫂の、前非を悔いて我に代り、此所に討たれて死せんとは、アヽ有難き志。思ひ違へといひながら、現在兄を殺せし其方、非命に死するが卽ち天道、此世に造りし罪を果さば、未來は淨土に生るべし。假令いか程計るとも、宗全ごときに暗々と、討たるべき某ならず、心殘さず成佛せよ」ト腰より笛を取出し、吹すさみ給ひければ、此所の隅々彼所の隈々、數多の同勢立出でて、先に進みし惟吉が、「はや御歸館」ト促したり。「アヽ勇しゝ」ト

逭出でたれども、君の幼き御時に、切害せんとなしたる御罰、忽ち廻つて兄を殺し、あら恐しと心を改め、後世を願ふの其外は、憂世の事は耳にも留めず、行ひすましゝ尼の身が、黄金を山に積みたりとて、非道に與する心はなし。さはさりながら此事を、君に告げんも誓ひたる、佛の御罰も恐しく、案じにくれたる折にさいはひ、宵にあなたが杉生に、宣ふ事をもれ聞いて、藤の方の御前に、直に誘ひまゐらせ置き、妾は其場を立去りて、山名の館へ走りゆき、今夜七つの鐘をあひづ、しか〴〵の小門より、光氏を只一人、騙して歸さん其時に、討取り給へと預りし、印籠を返せしかば、宗全は大に喜び、誰をかやらんと暫く案じ、かの三人を呼出し、言付くるのを見終りて、又もや此所へ立歸り、君の姿に出立ちて、御身代に立ちたるは、わが口づから言はずして、君を討たんと計る者、あるを知らせん爲にてあり。されば佛に誓も破らず、此世に劒の呵責をうけ、未來は極樂往生せん。アヽまだ君は花桐樣の、お腹に宿りておはせし頃、兄泥藏が敵對まゐらせ、妾は今も言ひたる如く、お五つの時うたんと計り、又兄嫁の凌晨も、古寺にての正なき振舞、身寄の者が三人まで、君に刃對ひまゐらせし、夫らの罪は御身に代り、妾が死にて宥させ給へ。命を捨てのお媒人と、宵に言ひしも斯くなる覺悟。詳しき事は書置に、書認めてお羽織の、袂に入れて置いたれば、後にて御覽遊ばせ」ト言ふ息もはや絶え

き手傷といふにもあらず、心を確に持ち給へ」ト抱き起され吐息をつき、「此尼を宗全の、館へ去頃招き寄せ、其座にゐたは晝顔殿に、仕へし時の朋輩小菊、今の名は白糸とて、富徽の前のお腰元。さて宗全が言出すは、藤の方病氣につき、保養の爲とて背川の、下屋敷に此頃住めり、されば光氏好き隙ぞと、彼所へ忍び來らん時、汝密に彼を殺し、此印籠を捨置くべし、然する時は高直が、所業に極り赤松の、家は忽ち滅亡せん、其虚に乘じて事を計り、我望を遂しなば、褒美に黄金を與へんと、聞いてはつと驚きながら、言がひもなき此尼を、頼まんよりは手の者を、など差向けて光氏を、討ち給はぬと何げなく、云へば宗全頭をふり、彼には忍びの供人あり、殊には怜悧き性といひ、迂濶に手だしは成り難しと、言かけるを引取る白糸、此方は眞の善心に、立歸りしと光氏君、心をゆるして居給へば、お庭の隅か座敷の暗がり、忍びのお供も入り難き、隙を窺ひだまし討、事を計るに便よし、夫故あなたのお頼みと、取持顔は私に、まだ邪曲な志、殘つて居様と白糸が、推量しての皆計ひ。否といはゞと目を配り、二人は詰寄る絶體絶命。此所で暗々死なんより、仕様もあらんと當座のがれ、仰に從ひ若君を、討取つて上げませうと、いへども更に心を許さず、汝が口より光氏へ、若し此事を漏しなば、忽ち地獄へ墮つべしと、あらゆる佛を誓に立て、誓紙を書けよと詞詰、夫も是非なく望に任せ、其場は

木が送りし玉章を、徒然の夜に打見れば、この光氏が乗物を、彼所へかきて行きたる男、赤松太郎が印籠を、盗取つて打笑みたる、其面付のたゞならねば、必ず心を附け給へ、此事詳しく片貝が、見たりと密に言おこせり。思ふに斯くいふ光氏を、失はんと計る者、是らの品を盗ませ置き、證據に落して心を惑はせ、同士打なさせんなどとは、小兒童の戯れ同然、太郎を疑ふ事なかれ。夫よりはまづ差當り、不便なるは尼刈萱、いま石堂も言ひつる如く、何の故にか我に代り、果敢なき最後は遂げたるぞ」ト吐息と共に打見やる、向ふの方より太郎高直、鮮血滴る首引提げ、頓て御前に跪づき、産の穢を憚りて、御身近くはつかへねども、今宵も遠く守護なせしが、忍び姿の三人連、怪しと見とめて後につき、聞くとも知らず一人が、光氏君を打止めしと、廣言吐くは虚言と、思ひながらもいみ〳〵しく、刀背うちに打据ゑて、搦めとらんと思ひの外、手元狂ひて首うち落し、剰さへ其暇に、殘りの二人は迯失せたり。今に始めぬ粗忽の事ども、申し開かん詞もなし」ト言ひつゝふつと刈萱が、死骸を見やりて再び驚き、「是は〳〵いかに」と立寄れば、刈萱やう〳〵目を開き、霜に痛める蟲よりも、いと〳〵細き聲をはり、「先刻から物が言うたうても、舌も強りて聲も出ず、心で唱へし念佛の、其功力にや苦痛も薄らぎ、やれ〳〵嬉しや若君樣、樣子が申上られます」ト顔上げたげに蠢けば、石堂は聲を勵し、「深

とする折柄、忍び姿の武士兩人、小陰を立出で聲を密め、「もし手に餘らば助太刀せんと、樣子を窺ひゐたりしが、驚き入つたる汝の働、最早息も絶えたる樣子、とゞめを刺すにも及ぶまじ。向ふより來るあの火影、人目に懸らぬ其中に、早立退かん」ト密語きあひ、何所ともなく立去りぬ。かゝる處へ提灯照させ、來かゝる石堂馬之丞、件の死骸に躓く僕、火影にすかして大に驚き、「羽織は唐綾大小は、金造に桐の紋、疑ひもなく光氏君、此所にあへなき御死骸」トいへども騒がぬ馬之丞、「我々始め數多の御家臣、人に知らさず忍びの御供、その御迎も待たずして、いかでか歸り給ふべき。是には樣子のある事ならん、まづ靜まれ」トする〱と、立寄つて笠取退け、「思ひ懸なき尼刈萱、何ゆゑ君の御姿に、似せたるならん」ト目を配り、落ちたる印籠拾上げ、「拍の若葉は若君の、御好みにて調ぜし蒔繪、この印籠はさいつ頃、高直へ下されしが、何とて此所には落散りけん。高直は四五日さき、妻が平産したりとて、今宵のお供に加はらず。コリヤ〱家來其方は、赤松の館へ行き、高直殿を若君の、急のお召と言入れて、同道なして立歸れ。我は此場の事どもを、申上げん」ト立つ折から、「ヤレ其使しばし待て、いふ事あり」ト聲を懸け、長刀かい込み立出る光氏。「さては始終の事どもを、聞召されて候か」ト遙下つて馬之丞、手をつかふれば點き給ひ、「鞍馬山より歸るさに、五葉の松に結び添へ、阿古

は病に苦み、今引放して紫を、我へ送るを厭へる體、是も道理と強ても迎へず。されども其儘捨置かば、國助來つて紫を、奪ひ行かんも計り難く、忍の人は附置けども、いと怪しきは言の葉が、かの國助を色白にて、淸らかなりと褒めたる由を、腰元どもに紫が、語るを某洩れ聞いたり。思ふに國助隙を窺ひ、忍び來りしものならん。然らざれば言の葉が、彼を見知れる所謂なし。左にも右にも紫を、迎取らんに如くはなし」ト宣へば藤の方、「今まで名だにも知らざれど、父の御目を懸けられし、小玉は所縁の無きにもあらず、あなたへ早く紫を、進らす樣に妾より、明けなば文を送らん」など、猶しめ〴〵との物語、眞の母と子の如く、仇めく事のなかりしかば、屛風の陰に息をのみ、樣子を聞居る杉生は、此頃中より光氏を、疑ひたるを心に恥ぢ、密に辷り出でにけり。

くらぶの山に宿るとも、いかでか語り盡すべき、生憎なる短夜にて、早くも響く曉の、鐘に光氏うち驚き、網笠被りて只一人、見咎められじと忍路の、小門を開き立出づる、此方に一人の大男、手拭にて面を隱し、窺ひ寄つて光氏の、肩先下りに肋へかけ、二ツになれとぞ切下げける。うんとも言はず倒るゝを、足にて踏しめ嘲笑ひ、「世の噂には似もつかず、惜言がひなき者にてあり。只一刀に果敢なき最期、心安し」ト懷より、取出す一品傍へ捨置き、止めを刺さん

と思ひ寢に、怪しき夢の續きしかば、四五日以前刈萱に、逢ひたる時に夢を語り、藤の方に過失の、有りもやせんと問ひければ、彼暫く考へて、藤の方には恙なし、却つて御身に災あらん、愼み給へと思ひも懸けぬ、夢占方に打驚き、否我夢にはあらずかし、人の夢を語りしなり、此事人に漏すなと、言紛らして置きつるが、彼其時に豫じめ、我胸中を知りたる故、疑はずして此所へ、先に導きしたりしならん。夫はともあれ又密に、聞えべき事こそあれ、三筋町の忘八やが、頓て遊女になすべきと、祕藏の少女に紫とて、年はやう〱十二、その面影の美しさ、御顏容に能く似たり、あら訝しと思ひしが、「彼が祖母小玉といふは、元は刈藻と呼なして、花滿のお家に仕へ、其時あなたの父上が、御情を懸けられて、儲けし娘の產みたるが、かの紫に候へば、姪に當らせ給ふなり」トありし事ども物語れば、藤の方深く驚き、「今まで夢にも知らざりし、腹こそかはれ妾が姉上、父の形見にありながら、夫と知らねば尋ねもせず、早此世には在せぬとや、せめて所緣の紫に、逢はせ給へ」ト言ひければ、光氏は猶すり寄り、「其夜圖らず國助と、宗全が彼所へ來り、斯樣々々の物語を、忍び聞きしは天の與と、かの紫に附添ひゐる、言の葉といふ遊君諸共、直に身請をなしたるは、かの宗全に國助を、同心させざる當座の人質。又一つには川竹の、流にあなたのお血統を、沈めん事の歎かはしさ。然るに小玉

一人、憂身を歎く風情して、机にもたれ居給ひしが、光氏を見るよりも、さながら夢の心地しつ、覺悟の上とは言ひながら、かの宗全に見咎められ、淺ましかりし事なんど、思ひ出して恐ろしくも、又嬉しくも心地惑ひ、更に言ふべき事も知らず、只恥かしげにもてなしたり。光氏も藤の方の、世の女には似もつかず、嬋妍なるを見るにつけ、母花桐も斯くありしや、今までおはさば紫の、ごとき妹もあらんなど、かひなき事を思ひ續け、涙に暮れて居たりしかば、刈萱何か打點き、其場を靜かに立去りぬ。暫くあつて藤の方、「御笛の音を物陰に、もれ聞く事は常ながら、お目に懸るは三年越。去頃よりの御煩ひ、瘧病にて身も痛く、衰へさせ給ひしと、杉生が物語、如何と案じ暮せしが、斯く健になり給ひ、喜ばしさ」ト懷しう、物言ひながら打解けず。光氏は手をつかへ、「我身の病は僅の事、此程よりの御患、心ならず思ひしが、窶れ給はぬ御顔を、拜して漸く安堵せり。偖何よりや語り出でん、先室町より此館へ、移らせ給ひし其夜より、宗全の家來共、忍び〳〵に此邊を、徘徊なす事確に聞けり。是母上に宗全が、執心未だ去りやらぬか、又父君の寵愛深く、我も人なき其時は、母の如く傅く事を、知りたる故に奪ひ隱し、謀反を起さん其時に、人質とする計略ならんと、思ふよりして某が、彌〳〵あなたへ戀慕と見せ、夜毎此邊をさまよひしは、是を防がん爲にてあり。晝は嵯峨の館に歸り、うつら〳〵

給へ」ト言ふのもきかず、「なに刈萱が來て居るとや、夫こそは幸なれ。此頃も我夢を、占はせたる事のあり、其方が我を疑はゞ、彼を頼みて母上の、お目に掛らん、そこ退け」ト駈入り給ふを止むる杉生、「左樣ならば此事を、申上げてあなたにも、逢はんと仰あつた上。まづ〳〵お待ち遊ばせ」ト爭ふ物音聞付けて、立出づる尼刈萱、「さ程に思召す事なら、逢はせまして上げませう。杉生どのは御所樣の、重き仰を受けられて、藤の方のお介添、若しもの事がある時はと、案じらるゝも道理ながら、お心正しい光氏君、たとへあなたと御寢なつても、猥の無いのは知れてある。若し此事が顯れて、お咎のある其時は、妾が命を差上げます。今宵の事は杉生殿、この刈萱に打任せ、知らぬ振して部屋へ下り、休んでござれ」ト勸められ、杉生はもじ〳〵と、心許なく思へども、強て止めん言葉もなく、思案しつゝも入りければ、光氏は打喜び、「少しも早く」ト急くのを止め、「宜からぬ事と知りながら、思し亂れし其樣も、いと道理と見ゆるから、命を捨てのお仲立、人目に懸らぬその爲に、お身のまはりは言ふに及ばず、お太刀刀も私へ、お渡しなされて姿をやつし、是斯う〳〵」ト密語けば、夫こそ心安けれと、下著に帶を引しめて、渡せば刈萱心得て、光氏の羽織袴、搔集めもて先にたち、案内知りし緣傳ひ、光氏は暗がりを、辿る〳〵も刈萱に、導きせられてやう〳〵と、一間に至れば折よくも、藤の方は只

藤の方悩み給ふ事ありて、音川の下館に、此頃移住みしかば、義正公の案じ大方ならず、庭に咲いたる花なんど、使にもたせてその病氣を、訪ひ給ふ事日毎なり。光氏も此體を見て、心ならずは思ふものから、藤の方に逢はんには、折こそ好けれとつく〳〵と、晝は館に詠め暮し、暮るれば彼所へ立入りて、「藤の方に我を逢はせよ、密に語らふ事あり」ト、杉生を彼所此所、せめ歩き給へども、既に去る年宗全に、見すべき手段にありながら、猥がはしき振舞の、ありし御身が今更に、あなたへ近付き給ひなば、宜からぬ御名の立ちもやせんと、更に承引なさゞれば、光氏は心悶え、或夜空も打曇り、月なき頃の暗きをさいはひ、庭口の門番を、如何にしてか欺罔りけん、築山の植込まで、やう〳〵忍入つたりしが、枝折戸あけて杉生は、お泉水にて鳴いたる蛙、聲を止めしは訝しと、手燭携へ出來れば、光氏は其袂をひかへ、「今宵は是非に」ト言ひけるにぞ、杉生は呆れ果て、「誰が許していつの間に、此所まで忍來給ひしぞ。御病氣のお加持のため、尼刈萱が毎夜々〳〵、お側に参つて居ります。日に掛らぬ中少しも早く、歸らせ

りと、我は思へる顔ばせにて、立寄る處を女ども、やう〳〵に抱止め、「さあらば今より光氏君の、御子にならせ給ふべし」ト密語かれて紫は、顔打赧めて答なし。此方の間には光氏が、いとをかしとは聞き給へど、言の葉始め人々の、苦しと思へる樣なれば、聞かぬ樣にもてなしつ、「返す返すも小玉が病氣、いたはるべし」ト懇に、言の葉へ言置きて、立出でながら去るにても、彼らが言ふに違ひなく、いと幼げなる紫が、振舞にはあんなれど、心の儘に教へなば、生怜悧には勝らんと、心の中に思ひつゝ、乘物へ乘移り、硯の墨を磨流し、

雛鶴の聲は何所ぞ八重霞

と殊更幼く書なして、さゝやかに引結び、直に彼所へ送りければ、言の葉が受取りて、「あなたのお目にとまるため、可愛らしきお結文、讀よき樣に一字つゝ、拾ひ書の美しさ。あすから是をお手本に、お手習遊ばしませ」ト紫にこそ渡しけれ。

聞え上げん。迎への雲の紫と、いふ名にも似ず佛の國に、ゆく坊はあの子一人。勿體なくも光氏君、自ら訪はせ給ひたる、忝なさを妾に代り、お禮をあの子が言ふ程なら、心殘りはあるまじ」ト此方へ知らする獨語。元より狹き住居なれば、いと絶え〲に苦しげなる、聲さへ聞えて哀れなり。光氏漫に涙を浮め、「何とて未だ幼き人を、斯く戀ふるかと我心を、我と不審に思ふなり。弓矢の神を誓に立て、行末長く見捨てはせじ。せめては彼が稚なき、一聲なりと聞かんには、ふりはへ來るかひもあり。何所にゐるぞ」ト言の葉に、問はせ給へば打微笑み、「いつぞやも鞍馬にて、小玉樣が仰の如く、背丈は延びて見え給へど、お年よりは幼きお生、晝の遊におくたびれ、初夜の鐘も聞くや聞かず、前後も知らず御寢なつて、あすまでお目は覺めませぬ」ト若し光氏に逢はせなば、其儘誘ひ行かんかと、言くろむる折彼方より、人の駈來る足音して、「婆樣よ、鞍馬にて、逢ひ奉つりし光氏君、座敷へ來ておはするを、など見給はぬ」ト紫が、言ふを小玉に附添ふ女、はつと驚き袖を引き、目にて知らせつ紫が、言葉を止めても止まらず。「いや光氏君のお顏を見ると、心地惡さも忘るゝと、婆樣の宣ひし、夫故おしらせ申すのぢや。此頃も言の葉が、あなたの父上國助樣も、お色白にて淸らかなれど、光氏樣は夫よりも、遙に勝つた御器量と、褒めたは皆も聞いたであらう。あの障子から透見しや」ト賢き事を言ひた

そよぐも最侘しく、行くべき邊は六條にて、嵯峨よりなれば程遠き、心地せられて乘物の、簾を巻いて見給ふに、荒たる家の物古し、木立の暗き所あり、例のお供に離れぬ惟吉、「是こそ小玉が住居なれ、此頃お文をもて參り、寢間まで至り候が、かの小玉いたう弱り、筆さへ取れずと御返事は、言の業に書かせたり。全快すべき體には見えず」ト聞いて光氏眉を顰め、「あはれの事や、など其時、某には告げざるぞ。さ程の事と知るならば、とくにも訪ねてとらせんに。是へ態と來りたる、體にもてなし案內せよ」ト仰に惟吉畏り、斯くと內へ言入るれば、言の葉は驚きて、「小玉樣は此日頃、賴み少くなり給へば、君の來らせ給ひても、御對面は叶ふまじ。さは言ひながら此儘に、歸し申すも恐あり、見苦しけれど」ト南の座敷、引繕へば光氏は、靜やかに打通り、「常に心に絕えねども、稚なしとて紫を、迯るを厭ひ給ふ故、度々音信なさんのも、いとうるさくや思はんかと、疎々しく過行きて、さ程に病の重りしとは、ゆめ〳〵我は知らざりし。覺束なさよ」ト宣へば、襖を隔てて小玉の聲、「此月のはじめつかた、胸苦しさも打忘れ、嬉しと思ふ間もなく、又打返して枕だに、上げ難き程弱り行き、賴み少くなり侍る。斯くて妾が亡き後は、今宣ひし幼き人、外に賴まん陰はなし。その若草の生出づる、程を待ちつゝ手に摘みて、お側使の女子の數に、召加へて給はれかし。お禮は草葉の陰よりして、ゆる〳〵其時

「御刀を汚すのは、恐れ多き事ながら、御手に懸りし心にて、是で死なせて給はれ」ト言ふまに拏とり鞘に納め、「死なで叶はぬ事なれば、介錯もしてとらすべし、心を落つけ某に、樣子を語れ、いざ聞かん」ト言はれてやう〳〵涙を止め、邊の聞えを憚りて、すり寄り〳〵聲を潛め、打密語けば光氏は、聞く事每に打笑ひ、「心狹きは女の常と、世の譬にもいふなれど、餘りにあど無き事にてあり。父義正の御胤を、宿せし女の所緣とあれば、彌もつて聞捨ならず、まづ〳〵我に任せよ」ト何かひそ〳〵宣へば、萎れし花に打水の、うつて變りて中空が、嬉しさ顏に現れけり。なほ此事は八編目に說分るを見給かへし。

小玉が住居は六條の、京極の邊なり。光氏度々文を通はせ、紫を嵯峨の館へ、呼迎へんとなしけれども、小玉が病日に增し重り、年のたらはぬ紫を、一人は進らせ難しとて、とにもかくにも承引かず。さらばせめて紫の、返事なりとも見まほしと、惟吉をして言送れど、いろはの假名もはか〴〵しく、續けて書得ぬ幼き筆を、見せ申さんも恥かしと、言の葉よりして言おこし、是も言葉に從はねば、光氏もてあぐみ、卯月も半になりけるが、此頃阿古木は三筋町に、歸り住む由噂に聞き、彼をも其儘捨置きては、かの勅筆の短冊の、かへる期更になかるべしと、ある時月のをかしき夜、思ひ立ちて出でたるに、俄に村雲覆ひ重なり、時雨めきて卯花降し、打

づつと寄つて件の文、さら〳〵と押開き、「焦るゝ心を知召せと、始めて送る此文章、君の御目に觸れぬ間に、取落せしは主人の罰、明けなば屋敷を追拂はん」ト一間の中に押込められ、中空悲しさやる方なく、愁ひの事仕出して、君のお顏を餘所ながら、見る事さへもならぬかと、打歎きてぞ臥したりける。

光氏は寐もやらず、夜著に凭れて居たりしが、二葉の上は顏だに見せず、一人さま〴〵思ひ亂れ、遊佐河原之進國助は、醜からざる男ながら、淸らなりといふにもあらぬに、その娘の紫は、叔母藤の方に好くも似て、美しうは生れしや。夫も彼も眞弓の前の、面影をや受繼ぎけん。アヽ阿古木より何とかして、かの勅筆の短冊を、取戻さんと心の中に、深くも案じ入りながら、今朝阿古木より五葉の松に、附けて送りし文取出し、繰返し見て小首を傾け、浮たる事と思ひの外、艶書によそへて我へのしらせ、是も故ある事ならんと、懷に押入れつ、枕を取らんとしたりしが、屏風の外にさし足して、枕刀を拔く者あり。すは曲者よとねぶりたる、風情にもてなし窺へば、琵琶彈かせたる中空なり。何をかすると息をもせず、猶も樣子を見るぞとは、心も附かず中空は、上著の小袖行燈へ、ひらりと打かけ小暗なし、盜みし刀に袖押卷き、自害せんとしたりしかば、光氏やをら夜著はねのけ、ずつと寄りて押止れば、此方ははつと打驚き、

折々毎に光氏を、見やる目元の只ならず、媚く姿を居ながれたる、腰元どもは早くも見とめ、指さししつゝ打笑へば、光氏は眠たげに、もてなして立上り、「大儀にありし、明日又聞かん。休めく〱」ト言捨てて、臥床に入らせ給ひけり。

中空は琵琶押やり、辷り出でんとなしたる處へ、奥方小毬立出でて、「中空には問ふ事あり、此方へ來よ」ト小座敷の、人なき所へ誘ひ行き、「最前座敷へ出づる時、其方の袖より溢れし文、誰にやるとて書きたるぞ」ト目先へづつと突付けられ、中空さつと顏打赤め、答なければ小毬は、すこし聲を荒らげて、「親の口より言出でん、詞にはあらざれど、去りし年倅高直、其方に心を懸けたる由、密に告ぐる者のあり、まだ其頃は高直も、一人住にてあるなれば、これさいはひと其方をよび、今宵よりして高直の、側近く仕へよと、言聞かせたら喜ばんと、思ひの外に私は、立願ありて男の肌は、一生ふらじと潔く、言ひたるをはや忘れしか。知つての通り去年の春、青葉琵琶之助の末の妹を、高直の嫁に迎へ、夫婦の中の睦しく、はや妊りて產月に、程近ければ其方なんどの、事は思ひも出すまいが、光氏君と語らひしと、高直が漏聞かば、心よくは思ふまじ。二葉の上は猶の事、主の主たる光氏君を、唆かしたるいたづら者、言譯あらば言ひてみよ」ト道理を盡して恥しむる、後の方に思ひも懸けぬ、主人政則始終を聞き

ふなる、女のいへる事にてあり、親と〳〵が許したる、夫婦の中には似合しからず。年頃日頃隔ある、御身の心を思ひ直させ、睦しく語らんと、さま〴〵心を盡せども、もと我を疎むより、出でたることはせん方なし」ト座を立上りしその所へ、太郎高直恭しく、盃をもて出でつ、「御病氣の名残なく、癒らせ給ひし御祝、まづひとつきこしめせ」ト山を尋ね海を求め、珍しき物の限り、御前に列ねければ、是を便に光氏は、また元の座に直り、暫しが間酒汲交し、先に思はず言過し、しらけし座敷をくろめんと、高麗笛を取寄せさせ、元來上手にありければ、いと面白う吹きけるが、笛を止めてあたりを見廻し、「二葉が側で召使ふ、琵琶能く彈ける何とかいふ、女ありしが爰には居らず、如何なせし」ト問ければ、太郎高直にじり出で、「夫こそは中空と、申す女に候なれ。呼出し申さん」とて、座を退きしが程ありて、かの中空は出來り、遙末座に手をついて、「御用もや」ト伺へば、「是へ〳〵」ト光氏は、膝元へ近く呼び、まづ盃を賜びければ、はつとばかりに中空は、さも嬉しげに一つほし、立たんとするを引止め、「汝が琵琶を彈きたるを、この如月のはじめつかた、物の蔭にて聞きたるが、中々をかしき手つきなり。何ぞ一句語りて聞かせよ、我も高麗笛吹合さん」ト仰は恐入りながら、辭するも不興と思ひけん、頓て琵琶をもて來り、「お笑ひを催すため」ト笑を含んで祕曲を盡し、搔鳴して居たりしが、

を乗せまゐらせ、其身は高直諸共に、乗物の左右につき、室町御所を立出でぬ。光氏は睦ましからぬ、二葉の上の許なれば、さまで心は進まねども、又政則の深切を、捨つべきにもあらざれば、否みもやらずおはしけるが、久しく見ぬ間に赤松の、館は新に造りかへ、玉の臺に磨きしつらひ、手道具なんどに至るまで、淸らかなるをぞ調へたる。二葉の上は又例の、物恥をなす生なれば、部屋の中に隱れゐて、直に對面し給はず。政則妻の小毬とも〴〵、「早く彼所へ行き給へ、光氏君の御出なり」ト勸められてやう〳〵と、其席には列りながら、褥の上に容を正し、只繪にかきたる女の如く、身じろぎもせず笑ひもせず、麗しくのみもてなしければ、光氏心の中に思ふ、昨日見たりし山路の、物語をなしたりとて、心よくは答もなすまじ、など年月の重なる程、心の隔のまさるならんと、態とにつこと打笑ひ、「など折々は打解けし、樣をも見せて給はらぬ。我堪へ難う煩ひしを、如何とだにも問ひもせず、その疎々しき振舞は、常のことにて珍しからねど、猶怨めしう思ふなれ」ト聞え給へば二葉の上、暫くあつて顏を上げ、「野山の花をかり暮し、妾は如何になりしかと、問はせ給ひし事もなし、問はぬは辛きものぞとは、夫にて思し知り給へ」ト目尻にぢつと見やりたる、顏いと氣高う美しゝ。光氏は吐息をつき、「アヽ、稀々に言出る、詞も夫は角々し。問はぬは辛しと恨むるは、遊君舞子さては又、忍び〳〵に通

来りし枕琴、自ら取つて光氏が、膝の下に押直し、「是を一手遊して、同じくは山の鳥をも、驚かし給へかし」ト勧められて額をうち、「快しとは言ひながら、思はぬ事にかゝはりて、熟睡もせず夜を明し、いと堪へ難き心地なり」ト言ひつゝ強て否まんも、憎かるべきとや思ひけん、暫が間かき鳴し、「いざ帰らん」ト立上り、阿古木は更なり忍屋の、家内の者への贈物、都へ取りに遣しければ、高直に心得させ、庭はく男子に至るまで、それ〴〵に物をとらせ、立出給ふ後影、阿古木はあかず口惜しと、涙落して見送りけり。

光氏はまづ室町へ赴き、父義正の前に出で、「鞍間の寺にいと尊き、聖のすむ山承はり、彼所へ密に尋ね行き、かの加持をうけたる処、瘧の病立所に、全快いたし候」ト、阿古木のことは押包み、此頃よりの物語を、聞え給へば義正は、光氏の顔形、衰へたるを打見やり、安からずは思ひながら、心清しくなりしを喜び、「そは有難き事にこそ。大内にも聞えなば、七高山の阿闍梨にも、なるべき者にあんなれ」トつゆ詐りと知らざれば、尊がりてぞ居給ひける。此時赤松政則も、御前に在りけるが、光氏の前に手をつき、「悴太郎高直諸共、御迎に参らんと、既に支度は調へたれど、忍びやかの御出ゆゑ、さし扣へてこれに在り。是よりは又珍しく、我方に至らせ給ひ、ひと日ふた日は長閑に、やすませらるゝが然るべし。恐れながら」トわが麾に、光氏

石堂馬之丞、太郎高直さきに進み、御迎の人々參り、「不思議の呪受けさせられ、御煩の速かに、怠らせ給ひし由」トとり〴〵に喜びを、聞え上ぐれば馬之丞、少し御前に進出で、「いと珍しき御遊山、斯樣なお供に某を、召連させ給はぬは、何過失の候やらん」ト恨み顏に言ひけれど、光氏は答もなく、惱める樣にて傍なる、岩に肘を打凭せ、倚居給へる其姿、實に類なく嬋妍なり。阿古木は瑠璃の壺めきし、こつぶとかいふ杯を、光氏に進らせて、「思懸なく優曇華の、花まちえたる昨日の逢瀨、再びいつか開かん」ト寄添へば微笑みて、「山の姿水の流心とまりて此邊は、いと立うくはおもへども、何所へ行くとも知らさずして、館をまよひ出でたれば、父君斯くと聞かれんには、覺束なくや思ひ給はん。其事恐れ多ければ、今歸るとも此花の、盛過さず音づれん、

風よりは先に來て見ん山櫻

ト宣ふ風情聲づかひ、目もあやなるに阿古木はさすが、止むるにも止め難く、

櫻には目こそ移らね花の顏

ト打泣くを片貝が、人に見せじと光氏の、扇を取つて打鳴し、「人の心と花の露、濡れにぞ濡れしびん水の」ト小唄うたうて紛らすにぞ、阿古木もやう〳〵心づき、袖に淚を搔拂ひ、持たせ

七編上

曉方になりければ、彼方の堂の内ならん、經讀む聲のいと尊く、山颪につきて聞え、瀧の音に響き合ひたり。光氏姿引繕ひ、忍屋を立出でつ、遙々と見渡すに、明ゆく空は霞渡り、山の小鳥の囀りあひ、名も知らぬ木草の花ども、いろ〳〵に散交り、錦をしけるに異ならず。遙向ふの山の上に、鹿の彳み歩くなど、珍しく見給ふに、身の悩ましさも紛れ果てぬ。かゝる折から二見屋の、阿古木は片貝始めとし、新造禿引連れて、むら〳〵と走り來つ、「あれより直にお館へ、歸らせ給ふと詐りて、忍屋におはせし由、そのお恨を長々と、書續けたる此文を、密に人の見ぬ處で、御覽なされてお返事を、松の小枝に附けたるは、浮氣な時雨が濡かけても、操を變へず色變へぬ、私が心」ト五葉の松に、結び添へたる玉章を、差出せば片貝は、光氏の側へ寄り、「今を盛の花の蔭、暫は此所で御酒一獻、それ〳〵此所へ」ト言ひければ、用意させたる提重に、谷の底まで尋ねけん、いと珍しき菓物を、取添へて持運び、此所こそ好けれと落來る水も、風情ありげの瀧のもと、岩に隱れて緣せし、苔の上に並居つゝ、盃を廻らす處へ、かの

偐紫田舎源氏第七編序

他人の猿似の猿源氏、鰯煮た鍋にはあらねど、此巻を書さして、初より繰かへすに、それかれ似たる事多し。まづ花桐と杉生は、尾上お初の仕打に似たり。藤の方と光氏の、忍逢ふ一條は、鎗の權三の趣あり。空衣と村荻の、閨房の違ひは大經師、お三茂兵衛に髣髴たり。阿古木が魂の古寺にて、黄昏を驚かすは、近年流行の怪談狂言、焼酎火より明く無い、源氏を翻して繪草紙とは、湖水に浮んだ月とすつぽん、眞暗になる仕掛の燭臺、闇に礫の七編續、彼猿源氏が商ひし、鰯の異名にゆかりある、若紫の燒直し。嗚呼辨慶にさしすてて、棚守となりてや廢らむ。

柳亭種彦誌

天保三年壬辰孟陽

如く立居さへ、心に任せぬ此身の病、さすれば君のお館へ、共に行かんも力なし。さいはひ六條近き邊に、妾が家は荒果てて、住む人なければ其儘に、捨置きたるを取繕ひ、此煩の癒るまで、彼所に住ませ給はれ」ト願へば光氏尤もと、望にまかせて惟吉に、猶細やかに差圖なし、其身は人目を憚れば、夜明けて後より歸らんと、元の臥床へ入りにけり。

惟吉は心得て、疾に臥したる紫を、ゆり覺させつ華麗なる、廓姿は人目に立たんと、内の遊女を語ひて、言の葉が髪結直させ、かの紫は武家風の、娘の出立に取繕ひ、衣裳も夫彼華麗ならぬ、模樣を撰りて著せ申し、小玉は座敷の中よりして、駕に乘すべき用意を調へ、惟吉は恰悧げに、小玉の心を休めんと、「まだ大人にも成り給はぬ、あの孫君を是程まで、慕ひ給ふは過世より、能く／＼深き御契、行末榮え給ふべし」ト聞くにとも／＼言の葉が、嬉しさ面に現れて、紫に打向ひ、「宵に見たりし光氏樣の、あなたは今より嫁御寮」ト言はれて顏をさと赤め、片頰に笑を含みつゝ、京の住居に移りて後、繪をかき雛遊にも、中に眉目よき人形を、光氏君と名を呼ひて、淸らなる衣打著せて、傅き給ひけりとなん。

源氏物語に、若紫は十ばかりとあり、故ありて十二ばかりと作りかへたり。

りて、惟吉歸り候」ト密に申せば光氏は、是へと近く招きよせ、「此家の主の望に倍し、黃金を積みて紫は、言ふに及ばず今まで彼に、從ふ遊女も有らんには、遊び相手に夫もろとも、身請なして我より先、汝は京へ連歸れ。必ず人に知られな」ト追遣り給へば夫とは知らず、小玉はそろ〳〵にじり寄り、「お笑草に」ト差置いたる、返しの發句を光氏は、手に取上げて打見るに、

　咲くをまて頓て深山の苔の花

ト美しき手を其儘に、取繕はず書なしたり。光氏小玉を邊に近寄せ、「御身の孫も幼くて、早くも母に後れしとか。我も僅に五歲の夏、母花桐に別れしかば、身につまされて不便なり。只管我に送るべし」ト返すぐ〳〵言ひければ、小玉は目の內打潤み、「彼子が最早年頃なら、嘸や喜び候はんが、最前も申す通り、まだ其心幼さに、直にお請もなし難し」ト答も同じ樣なれば、光氏は本意なげに、差俯いて居る處へ、言の葉が走り來り、「光氏樣の御家來、惟吉殿とかいふお方が、紫樣と私の身の代、はや渡されて根引がすみ、夜明けぬ中に人知れず、都へお連れなさるゝとて、お駕も其所の庭先へ、あれ舁入れて來る樣子」ト告ぐれば小玉が打驚き、「斯くまで厚きお心ざし、否まん樣はなけれども、彼子は妾を力草、放ちやらんもいと悲しく、見給ふ

若草を見初めて置くや袖の露

と鼻紙に書付けて、「斯くと彼方に傳へよ」ト言の葉に渡しければ、猶訝しげに小首を傾け、「若草といふ太夫衆は、三筋町には聞及ばず、斯様な事を聞分けん、人の此邊にない事は、あなたも豫て御存じならん。是は誰にか見せません」ト問へば光氏笑を含み、心に思ふ事ありて、言ひたるならんと推量り、「彼方へ持て」ト宣へば、其儘立つて言の葉が、小玉に此由言ひければ、やゝ暫く打吟じ、「此若草とは紫の、まだいと若きを譬へしお發句、妾に我に得させよと、最前仰ありしかど、年も足らはぬその上に、殊に幼き生にて、御添臥には程もありと、彼方のお前に呼出さず。如何なる間にか見給ひし、背丈は延びて見ゆるから、發句の心は聞分けんと、彼へ下さるお筆の跡、遅なはらぬ中お返しは、妾が孫の代りに」ト其傍に書付くれば、言の葉は聲を潜め、「世に隱れなき光氏君に、思はれ給ふは紫様の、願うてもなき御身の幸、人傳よりは其お返し、直にお持ちなされませ。お前は若きお身でもなし、光氏様のお膝の上、もたれておいでなされても、たが疑はう様はない」ト勸めに小玉は打點き、膝行寄らんとなしたるが、何か光氏ひそ〳〵と、近習の武士に私語く體、小玉は暫し躊躇ひて、襖の陰に控へけり。さる程に惟吉は、室町御所へ引返し、頓て野中へ立戻り、かの光氏の閨近く、「仰の黄金を受取

を敲てて、「今うつ鐘は初夜にやあらん、次第に弱る此身の病氣、頼みまゐらす阿彌陀佛、讀經なしたる其後に、又も御目に懸らん」ト手を打鳴して遊女を呼よせ、光氏の閨を設け、小玉は次へ立去りけり。

光氏心地も惱ましきに、雨少し打そゝぎ、山風冷かに吹來り、筧の水の音高く、少し眠たげなる投節の、絶え〴〵に聞ゆるも、所がらにや却つて凄く、物思ひなき人だにも、最哀れとや聞きなさんに、況て樣々光氏は、思ひ廻らす事あれば、閨へ入れどもまどろまれず、初夜の鐘とは言ひしかど、夜も太う更けにけり。小玉の住まふ部屋の中、物いふ者はあらざれど、まだ人の寢ぬ氣色にて、机の上に引鳴す、數珠の音さへ仄に聞え、數多の遊女が打そよめく、そのおとなひも賤からず。程近ければ光氏は、屛風を少し引開けつ、扇を取りて寢ながらに、疊をほと〳〵打鳴せば、言の葉が聞付けて、答なしつゝ出來るに、光氏態と枕をとり、物もいはねば訝しげに、「召し給へると思ひしは、聞違にて侍るか」ト見廻し行くを引止め、「小玉は先に彌陀經を、讀みにとて行きつるが、佛の誓に引變へて、我は其方へ導かず、いつまで暗き此閨に、迷はせ置く」ト いと若う、あでなる聲にて宣へば、言の葉は恥かしげに、「何所へ導きまゐらせん、いと心得ず」ト聞ゆれば、光氏は起上り、「打付なりと思はんも、道理ながら」ト硯をこひ

氏猶も近く寄り、「そは幸ひの事にてあり、其孫我に得させんや。某は早十八歳、似氣なき程と思されんが、心の儘に敎へたて、成人させて見まほしゝ。音響にも聞きつらん、二葉といへる本妻は、はや疾に定りたれど、彼は我より年もまし、其上心打解けぬ、生立ゆゑ睦しからず、父赤松の館に置きて、折節毎に通ふのみ、我は嵯峨野にひとり住。さすれば其子を連行くとも、誰かは咎めん心にな、懸け給ひそ」と聞えければ、小玉は猶も恐入り、「いと有難き仰の程、嬉しといはんも憚あり。さりながら孫紫は、十二になれど其心、まだ無下にいはけなく、今より連行き給ふとも、御慰になりはせじ。お年の違ひは六ッ七ッ、女はふけ行く者なれば、年を積みたる其後は、遙に孫より君の方、若やぎ見えさせ給ふべし。似氣なき故に言ふにはあらず、今三年程待ち給へ」ト細やかに答へければ、光氏は打微笑み、「抑女といふ者は、浮世の人にもてなされ、大人には成るものと聞く。其幼氣なる擧動を、却つて床しく思ふなり。斯くまで望むも夢聊か、浮たる心に言ふにはあらず、母にも勝りて某を、御寵愛たまはりたる、藤の方の所縁と聞き、此所に置かんが歎かはしく、是信實に聞ゆるなり」ト詞を盡して宣へば、小玉は暫く思案にくれ、「さほどに思し給はらば、紫の父何某へも、事の仔細を告げて後、仰に從ひまゐらせん」トすぐよかに言ひければ、若き心に光氏も、耻かしくてや能くも聞えず。小玉は耳

ト次へ立ちてしかぐ〵と、言ふに小玉は眉を顰め、「光氏樣の六條へ、忍んで御出ありし時、態と妾は座敷を避け、お目に懸りし事はなし。さはさりながら彼方より、仰あるのを否むも恐れ、只今夫へ參らん」ト言ふも程なき所なれば、漏聞ゆれど光氏は、さらぬ風情に打紛らし、「密に小玉へ某が、物語るべき事のあり、皆の者には暫しの間、まづ此所を遠避けて」ト只一人にて待ち給ふ。程なく小玉は次の間より、膝行出でしが身の程を、恥ぢてや少し又退き、手をつかふれば光氏は、態と親しく打笑ひ、「過ぎつる夜半にありく〵と、我此所を夢に見たり。御身の娘と覺しくて、最嬋姸なる一人の女、傍に侍りしが、樣子を聞けば某の、母とも賴む藤の方の、血筋の者と打聞きて、驚きながらに覺めて後、いとく〵怪しく思ひながら、事に紛れて問ひもせず、今日思はずもこゝに來り、見れば見る程夢に見し、所に少しも違ひなし。させる娘を持てりや」トかの垣間見を悟られじと、孫と知りつゝ娘と取なし、なほも確に知らまほしく、夢に事寄せ問ひ給へば、小玉は驚き淚にくれ、「妾も娘を持ちたりしが、早くも此世を去り行きて、形見に殘すは孫一人、是も女に侍りて、今年やうやく十二なり。身に恥ぢ人に恥づるから、深く包みて素性を語らず、血筋を糺さば其孫は、宣ふ如く藤の方の、姪にや當らせ給はんか。君の御夢物語、いと怪しきに絆されて、實を明し侍る」ト恥入る氣はひの見えければ、光





も、打連立ちて出來り、「六條の普請の中、此所に居るとは光樣の、知つて居ながら知らぬ振。サァござんせ」ト手を取れば、「エ丶まんがちな」ト傍から、一人が差出す文取上げ、「當月十日過からして、瘧を病ひ堪へ難く、人の敎で二見屋へ、呪には來たれども、直らぬ時は物笑と、態と今まで忍びたり。我六條へ通ひ行き、揚屋に夢を結びし時、此荵屋の遊女をも、迎へし事はありつれど、馴染重ねし者はなし、心得難き此文」ト繰開いて火影に透し、

同じ柴の庵なれど、少しは涼しき水の流も、御覽ぜさせん。

トロの中、讀みつゝ遊女に誘はれ、切戸の内へ入りにけり。光氏邊を打見るに、同じ木草にありながら、心を用ひて植渡し、月なき夜なれば殊更に、點しつれたる燈籠の、火影は庭の遣水に、輝きつれて最明く、よしありげなる廣座敷、南表を淸げにしつらひ、そら炷物心憎く、薫合ひたる名香の匂も邊に光氏が、おひ風の最異れば、家の遊びも自から、心遣を爲べかめり。光氏も先の程、遊女どもが事々しく、我を見んとてざゝきしを、垣の外にて聞きしかば、見劣なさんもつゝましく、顏を背けて言ひけるは、「我六條へ通ひし折、此所の遊女を預り守る、名を小玉とか呼ぶ老女に、面會なしたる事のあり、今も此家に在らんには、我に逢はせよ問ふ事あり」ト尋ね給へば言の葉が、「小玉主には此頃病氣、お逢ひなさるかなさらぬか、其程は知らねども、仰は傳へ申さん」

碎く此宗全、貴殿も力を添へられよ」ト わが邪を押隠し、詞を飾りて勸むるを、夫と推量なしたりけん、國助につこと打笑ひ、「そは輕からぬ一大事、篤と思案を廻らして、是より返答致すべし。まづ差當る娘の事」ト立行く棠を引捕へ、「息女の事は内證づく、今宵に限りし事にはあらず。此方の陰謀聞きながら、承引なければ是非もなし、其座は立たせぬ國助」トきつぱ廻して詰寄るにぞ、河原之進は持餘し、「さあらば是より館に歸り、譜代の郎黨家僕に、委細の事を言聞けん」ト聞いて宗全顏色は、和らげながら心を緩さず、「ヤア家來共遊佐殿を、警固なせよ」ト呼はつて、中に取籠め嚴重に、麓へこそは下りけれ。

光氏は小蔭を立出で、ほつとばかりに吐息をつき、「たまさか館を出でぬるだに、思ひの外の事を聞け。かの國助は家富みて、家臣の面々多く持てり、かの宗全に與せんには、彌もつて世の亂。アヽ如何にせん〳〵」ト暫し默して居たりしが、光氏何か心に點き、「夫よ〳〵」ト小膝をうち、「惟吉來れ」ト近く招き、「我思ふ仔細有りて、今宵は是なる惣屋へ、押て宿を求むべし。汝はひとまづ二見屋へ、立戻つて光氏は、俄に餘儀なき事有つて、直樣嵯峨へ歸りしと、言拵へて殘り居る、僕を引連れ室町の、館に馳行き黃金を請取り、最前見つる紫とか、呼べる少女の身代を、此家の主に渡すべし。國助に先越されな」ト急がせ給ふ此方より、かの惣屋の遊女ど

に座を構へ、まづ宗全の言ひけるは、「密に語ふ事ありて、御邊の館へ至りし處、急用あつて夕暮より、此鞍馬へと聞くと其儘、後より追付き折よく面會。密事を人に漏らさじと、家來は遠く待たせたれば、邊に人なき此山中。まあ御邊には何用あつて、此所へは來られし」ト問はれて國助打點き、「元より入魂の其許へ、包み隱さん樣はなし、某先年澤菊と、いへる女の許へ通ひ、女子を一人擧けしが、女房の悋氣のうるさく、養育金を與へ置き、其後便もなさゞる處、かの澤菊は病死なし、家衰へてせん術なく、娘は遊女に身を賣りて、この野中なる葱屋とか呼ぶ、別莊にある由を、かの澤菊が母よりして、密に我へ告越したれば、腹はともあれ我胤を、遊女になさんは本意にあらず、態と夜に入り忍び來て、久しぶりにて娘に逢ひ、身代金を主に渡し、連歸らんと思ふ故、見らるゝ如く供人も、僅にやつして來りしが、何か貴殿の慌しく、此國助の後を追ひ」ト言懸くるを引取る宗全、「おゝ夫にこそ仔細あれ、御邊もかねぐ\知る如く、義正公には其以前、御世を譲らん御男子なく、義勝公の嫡女たる、稻舟殿へ婿君を、迎へて國家を譲らん契約。其後義尙光氏始め、數多の男子を擧けられ、かの稻舟は打捨てて、有るか無きかの微の住居。是みな音川勝元が、計ひなるを世の人は、夫と知らずに義正公を、非道と譏らす口惜さ。ゆゑにより〳〵味方を語ひ、音川一家を打亡し、世の禍を除かんと、心を

て差俯き、膝に涙の露落ちて、縫の模様の山吹も、枝重げなる風情なるべし。かゝる處へ言の葉が、灯火かゝげて彼方より、急がはしげに走り來つ、「此上の二見屋の別莊へ、光氏樣、瘧病の呪に、來らせ給ふと云ふ噂、折節は此荵屋へも、御出ありしと聞きながら、私は一度もお目に懸らぬ。光る君と世にのゝしる、お顏がどうぞ拜みたい」ト打ざゞめけば追々に、立出づる新造ども、「ほんに彼方はいつとても、座敷ぎりのお歸り故、誰と定めた相方の、太夫さんはなけれども、私等はよう知つて居る。假の宿の草筵、お馴染がひに此方へと、お文を上げうぢやあるまいか」ト口々いふを小玉は打聞き、「思ひも懸けぬ光氏君、折も折とて我身の上、問はず語りに怪しげな、此樣人や見つらん」ト、簾下して入りければ、垣の外には光氏が、思懸なく哀れなる、人を見つると少し退き、腹はかはれど彼少女は、藤の方の姪なれば、顏の似たるも道理なり。如何にかせんとゝつおいつ、心の中に案ずる折、供に連れたる惟吉が、向ふの方を屹と見やり、「あれ〳〵坂を登り來る、彼の提燈は山名の紋、供人數多從へて、此所へ來るは訝し」トいはれて光氏心づき、「何樣深き故あるべし、忍び姿を見られな」ト惟吉共に山徑の、隈に隱れて息をのみ、樣子を窺ひ給ひけり。

程なく山名宗全は、遊佐河原之進國助と、打連立ちて只二人、星の明をしるべにて、芝生の上

悪からじと、その望には任せたれど、かの國助の本妻は、悋氣強き性ゆゑ、娘は彼方へ送り難く、妾が許へ留置きて、室町御所の宿直と詐り、折節毎に國助殿、通ひ馴れたる其中に、擧けし娘は御身ぞや。包むとすれど本妻の、詳しく是を聞知りて、遂には二人が中を割かれ、其方を養育すべしとて、些の黄金は送られしが、夫よりふつに便なく、又も世渡る手段を失ひ、詮方つきて此祖母は、此所の遊女を預り護る、鴇といへる果敢ない奉公。其時小玉と名もかへつ、辛苦に辛苦がをり重り、其方も知つて居やる通り、風の心地と澤菊が、打臥したるは三年越、重る病にはて〳〵は、藥を飲まさん手段につき、其方を此所の遊女に賣り、その黄金にて心の限り、養生は加へたれど、その詮もなく澤菊は、朝の霜と萎れゆき、殘る所縁の小紫、何卒金を調へて、憂き川竹の流には、沈めじものと朝夕に、思ひし事も仇となり、此身も次第に弱り行き、膈とやらいふ此難病、邊に人のなき時は、數珠爪繰りて後の世を、助け給へと御佛を、念じながらに片時も、忘れ難きは御身の事、妾が果敢なく成行かば、如何になりなん不便やと、恥も義理をも捨果てて、密に遊佐の國助殿へ、事の樣子を告遣りたれば、迎への人の來るべし。若し遊佐殿へ行き給はゞ、國助樣の本妻を、實の母と此方より、慕ひ申さば彼方にも、さまで憎みは仕給はじ」トいみじう泣くを光氏は、すゞろ悲うまもり居る。紫は言出でん、詞もなく

にいつまでも、子供の樣に惡あがき、ちと嗜んだが好いわいの。若し此祖母が死んだなら、誰を便に生立たんと、夫が黄泉の障ぞや。言の葉はじめ皆の者は、どこへか遊びに立つて行き、さいはひ邊に人もなし、今まで包みし此身の素性、語るを能く〳〵聞き給へ。私の父は浪人ながら、元は槍をもつかせた家、其頃妾は刈藻とよび、町家へ嫁入するよりはと、緣を求めて花滿の、中將樣へ腰元奉公、ふとお湯殿にてお情受け、懷胎なしたる折も折、義教公の妹ぎみ、眞弓の方と御緣組、はや近々に花滿の、御家へお輿を入れらるべき、その催し頻なれば、妾を密に召させられ、一先親の家へ戻り、產落したる其上にて、仕樣もあらんと懷姙は、人に漏さずお暇賜り、里へ下りて程なく平產、玉の樣なる女の子、名は澤菊と呼びつるが、卽ち御身の母にてあり。花滿樣より其頃は、密に黄金を賜りて、世はいと安く過ぎながら、世間の聞えを憚りて、眞弓の方は言ふに及ばず、家僕さへも其事を、知るは僅に三四人。あゝ情なや其中に、些かの過にて、花滿樣の御家沒落、勅勘の身とならせられ、程なく此世を去り給ひ、妾が父も其頃病死。便に思ふは娘の澤菊、親子二人でうか〳〵と、五年六年は暮せしかど、つひに世渡る方便なく、いかになさんと思ふ折、足利殿の昵近に、遊佐河原之進國助と呼なす武士が澤菊を、見初て妾になさんと望み、かの人莊園廣くもち、家僕郞黨數多あれば、娘が行末

猶も様子を聞き給ふ。紫は曇りごえ、「此頃飼ひたる雀の子、ふせごの中に馴んだを、犬吉が逃しをつた。捕へて返しや」ト口をし顔。若き遊女が傍より、「又心なしが悪戯して、紫さんに叱られ居る。やう〳〵に馴附いたものを、どちらの方へ逃したぞ。烏などが見附けたら、一口に喰うであらう」ト共に歎くは紫の、後見にとて附置ける、言の葉とよぶ新造なり。老女は悩める額を打ち、「アヽいつまでも子供の様に、眞に困つた子ではある。斯して起きては居るものの、私は疾から膈の病、夫をば何の苦にもせず、雀を慕ふ稚なさ。むかし何とか名高き遊女、其頃は世に珍しき、しま鵯といふ鳥を、客の許より貰ひしが、丁度わが身が廓にゐて、故郷を慕ふ如く、嘸此鳥も籠につながれ、雲井を戀しう思はんと、籠を開いて逃せしとか。御身も頓て憂き勤、わが身の上に引あてて、野山の鳥を籠に苦しめ、罪うる事な仕給ひそ」ト諫め聞えて膝近く、こちへ〳〵と打招かれ、あいと答へてつい居たる、顔麗はしく粧はぬ、眉匂やかに打けむり、年長けゆかんその様の、ゆかしき人と光氏が、猶目を留め見給ふに、藤の方の面差に、最好く似たるは不思議ぞと、彌小柴に身を寄せて、事の様をぞ聞居たる。老女はやをら紫の、鬢の解れを掻撫でつ、「髪結ふ事もうるさがり、つい取上げて置き給へど、あら美しの御髪や。御身の年では早おとなび、男の好悪目を著けて、姿形も取つくろう、今の浮世

六編　下

いかにも〳〵打解けし、様には光氏もてなしながら、茨と添臥す思にて、更に心の安まらず。阿古木は積る思を晴し、心緩みて打眠る、隙を窺ひ光氏は、ひとり彼所を忍出で、やう〳〵外方へ立出づるに、日はまだ全く暮れやらず、人々は歸したれば、惟吉ばかり御供にて、かの忍屋の小柴垣、立寄りて覗き給へば、軒の簾を少しあげ、心惱める風情にて、中の柱にもたれしは、四十あまりの老いたる女、身は細々と痩せたれど、目の中すゞしく色白く、是凡人とは見えざる側に、若き遊女の二人ばかり、さては禿の出つ入りつ、遊べる中に年の程、十二ばかりと思しきが、山吹縫ひし振袖の、なれたるを著て走り來る、その顏形の美くしさ、生さき見えて傍に、數多群居る遊女も、此少女には似もつかず、是なん末は太夫とよぶ、遊女になさんと忍屋が、娘の如く祕藏して、名を紫と呼なしつ、髮は扇を廣げたる、形に前へかへしゝは、銀杏結と世に言ふめり。涙に顏をすり赤め、立てるを老女が打招き、「禿どもとの爭か、何で腹を立つたのぢや」ト言ひつゝ打見る其顏の、似かよひたるは此老女の、子にやあらんと光氏は、

光氏。「さらば妾が願を叶へ、行末ながく添臥して、僞ならぬ御心」「見せたらんには其短册」「如何にも君に進らせん」ト尻目に見やれば光氏は、吐息と共に打點き、思案に暮れてぞ居たりける。

御供の人々は、離座數に酒打飲み、日も夕暮となりける時、川を隔てて引船の、片貝は手を打叩き、「今宵は是に御泊り、惟吉のみを殘し置き、みな歸れよと若君の、仰なり」ト傳へければ、赤松太郎は脫捨てし、袴羽織を引かけつゝ、そこら邊をかい探り、「若君より下されたる、印籠を失ひつ、土筆狩せし其時に、庭へ落せしものなるべし。はや黃昏となりたれば、今は見るとも詮なからん、夜明けて後に惟吉殿、尋ね出してたまはれ」ト皆打連れて歸りけり。

我身ながらも狂氣の如く、人の詞の耳へも入らず、病氣と僞り打臥したる、其夜の夢にわが魂は、五條の家へ浮れ行き、我物顏に其家の娘、君と添寢の羨しく、我を捨置き素性も知れぬ、女と語らひ給ふこそ、怨めしけれと言ひつるは、正しく現に覺えたり。其後揚屋で手拭は、さゝげながらに打付けて、心の程も聞え難く、かの朝霧の晴間だに、待たで戻らせ給ひたる、御後影見送りつゝ、身は空蟬のもぬけのから、此身は廓に在りながら、魂はお側を去りやらず。月見の夜半にかの娘を、誘ひ出でさせ給ひたる、其夜も君が幻に、附添ひ行きて何所か知らず、荒たる寺の客殿にて、妬の炎燃えそふる、切籠のかげより物をもいはず、はたと睨みし我姿、かの娘には見えたるか、氣絶なしゝと思寐の、眠は覺めて其後の、事は知らねど此頃より、君の病もわが思、此所へ導く爲にやあらん」ト聞いて光氏怖氣だち、さては二葉の執念と、思ひし五條の我夢も、かの古寺にて黄昏が、氣を失ひしも阿古木が思、執念深き女かなと、思へばいはん詞もなく、默然として居たりしかば、阿古木は片頰に笑を含み、「斯くまで慕ふ姿が深切、不便の者とは思さずして、恐ろしげなる御眼尻、元より色香なき上に、遙に年も立勝れば、厭ひ給ふも道理ぞや。恥と知りつゝ恥を語り、望の叶はぬものならば、此短册を引裂捨て、自害せんより外はなし」ト隱し持つたる懷劍拔持ち、左に短册引摑めば、「ヤレ早まりそ」ト止むる

ひありげに朝顏の、淺縹なる手拭を、持出でたるは僥倖と、思へど傍に片貝が、いその見る目を憚りて、取らで過ぎ憂き籬によそへ、戀慕の發句に言紛らし、其場は空く戻りしが、又もふしぎに廻り逢ひ、彌駭く勅筆の、其短冊を所持なすは、必ず深き故あらん」ト問はるゝ中に目に餘る、涙を阿古木は振拂ひ、「今宣ひしあなたの姨君、渦浪の御方は、寂寞阿闍梨といふ法師と、密會ひて懷姙し、人に面を合せ難く、館を忍出で給ひ、產落されしが此阿古木。始めは伊勢と名を呼びし、幼き時に父母とも、此世を早く去り給ひ、遂に流の憂き勤。母樣故に父上の、一旦墮落は仕給へども、呪し覺えたる幼方の、行を傳へうけ、父母樣の形見なる、此勅筆の德により、過ぎつる年も瘧病、世に行はれし其時に、人の病苦を救ひしを、聞召されて今日此所へ、君にも來らせ給ひしなるべし。元たらちねの恥なれば、素性は深く包みしかど、包み難きは戀慕の道。あら妾ほど執念の、恐ろしき者はなし、恥かしながら聞給へ。去年の夏客と打連れ、五條の邊を過ぎつる折、烏瓜とかいふ花の、咲いたる門へ駕をおろさせ、立出で給ひし君の姿、一目見るより思ひしみ、あれは何所の御方と、問へば妾と打連れし、廓の者が君を見知り、あれこそは光氏君、忍び〳〵に六條へも、來らせ給ふと物語。さては噂に兼て聞く、二葉の上の殿なるか、此阿古木ともいとこ同士、思ひつめたる念力にて、一度は枕を交さんと、

公へ、紫宸殿にて賜はりたる、三ッの寶は盡く、失ひながら小烏丸のみ、專ら詮議仕給ひて、二ッの寶は捨置かるゝ、お心根の訝しさよ」トいはれて光氏大に驚き、「斯く詳しく知る上は、包むに由なし、仔細を語らん。同じ寶の中ながら、玉兎の鏡はわが伯父なる、義勝將軍たりし時、紛失したれば今更に、尋ね求めん便なし。又勅筆の短冊は、渦浪とてわが姨上、故ありて家出の時、携へられしと聞くのみにて、此二ッの失せたるは、此光氏が生れも出でぬ、其先なれば打出でて、詮議をなさば父義正、兄義尙を某が、蔑にするに似たり。小烏丸は我一人、家を護りてありし夜に、奪取られし其上に、此物なくては兄上の、代をとられん事最難し。さすれば兄に家國を、讓るを妬んで隱せしなんど、疑はれんも耻かし」ト言ふを阿古木が押止め、「そは御心のひがみなり、實に家を大切と、思ひ給はゞ三ッとも、搜し出して父上に、進らせ給ふが御孝心。外は知らねど勅筆の、其短冊の在所は妾が」「夫は何所」ト急たつ光氏、阿古木は騷ぐ氣色なく、「最前あなたにかざしたる、守が卽ち其短冊」「フム據の病の忽ちに、心清しくなつたるは、すりや勅筆の德なるか。我も御身に問ふ事あり、去年の秋六條の、揚屋に宿りてほの〴〵と、明けゆく庭を眺めながら、襖を隔てて聞きつれば、山名親子を亡母の、家來すぢよと打歎きし、御身の素性を其時に、聞かまほしく思ひしが、言寄る便もなかりし折、思

のゝ氣の若君に、附添ふ樣に見ますれば、なほも靜な所にて、ま一度加持して參らせん。いざ此方へ」ト言ひければ、高直惟吉口を揃へ、「さあらば再び二見屋へ、歸らせ給へ」ト勸むるにぞ、「かゝる旅寐もをかしからん、今日は是にて日を暮し、夜にも入りなば曉に、立歸らん」ト宣ひて、元の竹戸を入りければ、片貝は先にたち、「お加持の間お供の方は、是にてゆる〳〵待ち給へ」ト流に臨みし崖造り、丸木の緣に毛氈を、布渡したる亭に誘ひ、豫て用意の酒肴、新造禿に持運ばせ、「我君樣にはまづあれへ」ト幾間か隔てし奧座敷に、導きせられて光氏は、其所らあたりを見廻すに、まだ晝さがる頃なれど、障子の外に簾を垂れ、日うけに屏風を廻らしたれば、小暗き一間に唐大和の、錦の布團しき重ね、しつらふ閨に只一人、阿古木は衿に顏さし入れ、物思はしき姿して、起きもやらず寐もやらず、夜著にもたれて居たりしかば、光氏不審に思ひながら、「御身の守の奇特にて、今日は病を忘れたり。猶も加持してたまはれ」ト宣ふ中に片貝は、態と其場を立去りぬ。阿古木は顏を振上げて、物をもいはず光氏の、袖をとらへて身近く引寄せ、「君に問ふべき事のあり、抑〳〵足利將軍には、忝くも大内より、三ツの寶を下し給ふ、其一ツは小烏丸、この御劍は日にたとへ、又其一ツは玉兎の明鏡、この御鏡は月に比し、月日の如く世を照し、政事に私あるべからずと、是に御製の短册を、添へて御先祖尊氏

似たる哉。「かゝる所に住む人は、世にうき事は有るまじ」ト仰を聞きて侍ふ人々、「此所は都に遠からねば、眺も淺く候なり。遠國他國の海山の、景色を御覽ぜさせ給はゞ、御氣はあがらせ給ふべし」ト、淺間の煙富士の雪、又は遙けき西の國、浦々磯邊の有樣を、代る〴〵に物語り、その紛れにや日は闌くれど、光氏、今日は病を忘れ、用意の竹筒割子を取寄せ、盃しば〳〵廻りて後、太郎高直又いふ樣、「なほ近き所には、明石の浦こそ勝れたれ、海の表を廣々と、見渡したる其景色、いと豐なる所に候。かの先に聞えつる、山名の弟が執權と、なるべき望を失ひて、此所に引籠り、再び都へ歸らじと、頭もおろして宗入と、名乘ながらに奧まりたる、山にも住まで海面に、臨みて館を造りしは、人離なる山里は、心凄しとまだ若き、妻子の言ひし故にやあらん」ト語るををかしと打笑み給ひ、「其娘は」ト問ひ給ふに、高直少し口籠り、「海の底までいと深う、思入りしが水底に、おふるみるめもむづかしく、靡く氣色のなかりしかば、海龍王の后にせんと、言嬲つて歸りしのみ、其後絶えて噂を聞かず。恥見せられたる其事の、まだ御耳に留りゐて、ほと〳〵赤面仕る」トまた盃をぞすゝめける。其時光氏言ひけるは、「いつもの時刻は過ぎたれども、寒さも覺えず身も熱らず、さきの寺の威德にて、瘧は落ちしと覺えたり。いざ歸らん」ト立つ折から、阿古木に附添ふ引船の、片貝が走來つ、「太夫すの申します、御も

くほどに、日は高くさし上りぬ。阿古木は立つて袋戸の、中に件の守を納め、「美々しく構へし館にのみ、籠らせ給ひし御身には、片山里の荒果てし、風情もさながら珍しく、眺め給はゞ結ぼれし、御氣も開き侍るべし。其所らあたりを打巡り、又もや此所へわたらせ給へ。猶も加持して參らせん」ト聞え上ぐれば光氏は、「夫こそいと〳〵興あらめ」ト、前の竹戸を立出でて、見渡し給ふに此邊は、總て小高き所なれば、麓につゞく賤家の、現に見ゆる其中に、同じ樣なる柴垣ながら、最麗しう仕渡して、淸げに構へし廊下傳ひ、木立もよしある風情なるは、「何人の住むにか」ト問はせ給へば近習の武士、彼所へ行きて立戻り、「僕に樣子を尋ねし處、これも同じ六條の、遊の長の別莊にて、荵屋とか呼びつる由、三筋町の本宅は、此頃普請にかゝりしかど、未だ全く建揃はず、夫ゆゑ遊女を引連れて、家内殘らずこの所に、住ふ由に候」トいふのを聞きて高直惟吉、「さもあらんか、をかしげなる、女子供に若き人、禿も共に打交り、川邊に下りて水を汲み、垣根に倚りて花を折る」「彼所にこそは嬋妍なる、遊女も見ゆれ」ト口々に、言ひつゝ下りて覗くもあり。光氏はさと開く、扇に顔を打おほひ、「その荵やの忍び〳〵、假寐の夢を結びたれば、我を見知る者もあらん。あら恥かしき人のすむ、所にこそはあんなれ」ト後の山に深く入り、京の方を見給ふに、四方の梢もそこはかと、霞わたりて立昇る、煙は繪にも

そぐが如く、日毎々々に寒氣だち、果には身中熱り出で、その苦みの堪へ難し。夫ゆゑ態と曉の、霧を犯して來りしが、時刻延びては其詮なし。とく來れよ」ト九折の、路を下りてやう〳〵に、彼別莊に尋ねつき、日を留めて見給ふに、くろぎの門に竹戸をたて、二見屋といふ札をかけたり。是なんめりと太郎を召し、「誰とも知らせず此家へ、まづ案内を乞ふべし」ト仰をうけて門に立寄り、しか〴〵の由いひ入るれば、そはいと易き事なりとて、さも淸げなる花筵、座敷にしかせて光氏を、やがて彼所へ請じつゝ、とばかりありて一人の遊君、輝くばかりに粧ひて、しづ〳〵と立出づれば、光氏わざと手をつかへ、慇懃に敬ひ給ふを、かの遊君は打笑ひ、「いかほど窶し給ふとも、世に隱れなき御有樣、いかで見違へ侍るべき。かゝる山家の奥までも、尋ね給ひし嬉しさ」トいふ顏、倩うち見れば、これ去りし年六條の、揚屋に假寢したりし時、朝顏染めし手拭を、もて出でつる阿古木なり。こは〳〵思ひかけずとて、驚く光氏恭しく、阿古木は錦の袋に入れし、守を頓て携へ出で、「此身は賤しき遊女ながら、こは有難き物にぞある。信をこらして頂き給へ」ト羞恥かしき手を延べて、額の上に差附けられ、光氏思はずはつと平伏し、暫くあつて言ひけるは、「あら〳〵不思議やその守、頭の上にかざすと齊しく、身を盤石にて壓さるゝ如く、忽ち心涼しくなりしは、いと〳〵尊き事なり」とて、なほあまたたび叩頭

どが騒がしき、所に飽きて此野中に、別莊とか名づけたる、下屋敷を構へおけり。その中にふた見屋と、呼なす者は大家にて、彼が抱への遊君に、貴き守を持つ者あり。こぞの夏も瘧の病、都にはやりて落兼たる、人々是を聞傳へ、かの遊君に呪を、受けて全快したりし由は、世に能く知れる處なり。その遊女も此程より、病氣に依りて野中なる、別莊に籠りゐて、座敷の外へも出でずとやらん。まづ御試に此者を、是へ召されて御覽もや」ト聞えければ打笑み給ひ、「座敷の外へ出でずといはゞ、呼ぶともたやすく來るまじ。如何はせん忍びやかに、某彼所へ赴かん」ト例の惟吉、赤松太郎高直を始め、いと睦しき近習の武士、四五人ばかり供につれ、其次の日の曉に、館を立出で給ひけり。

野中の里と聞えしは、加茂の社ありの池、小町寺を打過ぎて、稍深う入る所なり。其日は彌生晦日なれば、都の花の盛はすぎ、半は雪とふりしかど、山の櫻は盛にて、色ある雲をわけ登れば、霞をかしう引渡し、峯は高く巖は深く、寺の樣さへ哀れなり。かゝる所を見習はねば、光氏はいと〳〵興に入り、暫し佇みおはせし處へ、太郎高直道に遲れ、跡を慕ひて御前に參り、「所の者に尋ねしかば、野中の里といふ邊は、是より遙麓の由、某始めお供の者、此邊の案内を知らざる故、思はぬ道に彷徨ひたり」ト申上ぐれば光氏君、「我晝過る頃よりは、衿より水をそ

六編上

塒もとめし鴉瓜、夕の露と凋みたる、花の姿を光氏は、年月ふれど思ひ忘れず、彼に似たらん女もがなと、なほ懲ずまに浮れ歩き、みめよき娘のありと聞きては、或は文にてほのめかし、或は人して言寄り給ひ、かの空衣の打解けざりし、閨の姿を思ひ出で、又村荻をさりぬべき、風の便に驚かし、只色好みの浮れ人と、世に譏られて名劒の、在所を只管尋ねつゝ、猫川山名の確執より、世の騒とやなりなんと、密に心を痛めけり。今年光氏十八歳、彌生なかばの頃よりして、瘧疾にわづらひぬ。是俗にいふ瘧にて、加持呪の効もなく、僅の程に衰へければ、父義正は更にもいはず、藤の方は大方ならず、案じながらも世の聞えを、憚り思ひてあからさまに、對面はし給はず、側使の杉生を、使となして日毎々々、病を問はせ給ひけるが、或時杉生光氏の、機嫌を窺ひ言ひける樣、「此都より北山の、鞍馬寺の麓なる、野中の里といふ所は、市原野より遠からず、直に登れば二の瀬、貴船、お横に折れよば藥王坂、鞍馬川の流に沿ひ、いと景色好き所に侍る。されば六條三筋町に、遊女を數多抱置き、客を迎へて世渡と、爲す者なん



義勝の女
稲舟
末摘花
比せ


朧月の夜忍びて稲舟乃琴を聞
光氏十八歳

偐紫田舍源氏第六編序

朱雀の細道ひらけざる往古の花街は、六條にありとなん。其六條から案じつゝ、御息所と朝顏の歌奉りし中將と、何がし寺の行人と、三役兼たる三筋町、あるひは伊勢の御息所と、見えたるよりして二見屋の、阿古木と號す遊女につくり、仕掛文庫の九折、鞍馬の麓の別莊とは、かけはなれたる趣向ながら、いづれの巻をひらいても、花や紅葉の總模樣、鹿子入のきつとした、姿ばかりを畫きなば、どれがどれやら疑の、やの字結の帶のみならんと、箱せこの角なるを、和らかき御簾紙に、くるんで掛た胴〆も、梯子揚屋の別坂、伊勢に緣ある川崎音頭を、彼催馬樂の葛城に、かへて書きしは拍ならす、扇の音より最はかなき、草册子のゆゑにこそ。

天保三年壬辰春　　柳亭種彥

て、いよ〳〵十月朔日頃、本國伊豫へ赴くよし、告來り候」ト申上ぐれば打笑み給ひ、「姉空衣に餞別せん」ト插櫛扇に打交て、わざとがましくさいつ頃、持歸り給ひたる、袷の衣を取出で給ひ、「又村荻は山名の三郎、統淸へ嫁する由、喜代之助に聞置きたり、彼には是をとらすべし」ト、高やかなる荻を手折らせ、文をつけてぞ賜はりぬ。これ村荻はせい高く、且は其名に因みてなるべし。君吉仁木の館へ至り、かの品々を差出せば、村荻ふみを押戴き、繰開くその奥に、

夫と知らば仄に告げよ荻の風

吟じ終りて、「御返は、たゞ口早きばかりぞ」ト書き認むるを君吉は、受納めて又元の、嵯峨の御館へ立戻り、さゝげ申せば光氏は、其儘とつて見給ふに、

した荻のくつる思ひや秋の暮

手は悪げなるをざればみ書いたり。さりし頃の文の違を、思出でらるゝなるべし。かくて後村荻は、統淸の妻になりぬ。是又操を捨つるにあらず、後々に物語るべし。めでたし〳〵。

由聞えけり。ある夕暮の靜なるに、空の景色も哀れに見え、庭の千草と諸共に、蟲の音までも鳴きかれて、紅葉やう〳〵色づくを、一人見渡し居給へば、竹の中に鵤といふ鳥の太聲に、鳴く音も折から耳に留り、かの古寺にて黄昏が、梟の聲を聞き、いと恐しと思ひたる、有樣なんどを思し出で、眺めがちに居給ふ處へ、刈萱の尼參れり。側近く招き寄せ、「惟吉が家の者には、凌晨が問ひつるとも、必ず答ふる事なかれと、口がためして置きたるに、何とてわが名は漏せし」ト言懲し給ひて後、「かの泥藏のわが母を、切害なさんと企みたる、其時に黄昏は、三歲なる由凌晨が、いまはの際に物語れり。其頃未だ某は、胎内にありしなれば、黄昏今年は十九なるべし。由なき者に彼が母、黨せし故に非業の死、いと〳〵不便に思ふなり。さて黄昏は女子を、擧けし由も其時聞けり。我に密に得さすべし、養ひてとらせん」ト仰に刈萱頭をさげ、「こは冥加なき事ながら、妾とても當夏までは、凌晨の在所も知らず、年月疎く過行きて、此頃四五度行通ひ、一昨年の冬黄昏も、女子を平産したりしが、西の京へ預けしと、聞きたるばかりにその在家、詳しくは知りはんべらず。親子の者の生害は、かの寺を預りもつ、法師の具に物語れり。そも如何なれば妾が身寄は、一人ならず二人まで、君に敵對奉つりし、罪恐しく候」ト、恐入つてぞ蹲る。かゝる處へ君吉は、御前へ罷出で、「喜代之助事姉衣、私をも引倶し

は今に纒へども、鮮血に染みしむら紅葉、散れば錦も芥川、誘ひ出せし事までも、思ひ續けて茫然たる、心を察して喜代之助、蒲簾にて黄昏が、死骸を其儘押くるめば、緑の髪もこぼれ出で、纏ふすかしのふじのねや、年も十九かはたち山、不死の藥もかひなくて、其峯よりも立昇る、煙となさんがいとほしさ、目もくれ惑ひ淺ましう、暫し彳みおはせしが、鉦鼓の聲の耳に入り、頭を回らし見給へば、向の板屋の傍なる、堂に御燈明ほのかにすき、態と聲をば立てずして、念佛するのは預りの、法師ならんと呼出し、二人が遺骸懇に、取置くべき由宣ふうち、遙に鷄の聲聞ゆ。喜代之助かしこまり、「夜は明方と早なりぬ、歸らせ給へ」ト聞ゆれば、光氏は頷き給ひ、「今宵の中に凌晨を、捕へて詮議をなさんず用意、人數は此所を遠巻せり。合圖はおれなる魚板の響。こゝへ彼等を呼集へ、いざ歸らん」ト悠々と、庭へ下立ちそれ〴〵と、差圖に仁木心得て、軒の魚板を打鳴せば、はや入方の月影に、煌き渡る飾馬、赤松音川初めとし、供の大勢群草を、押別け〳〵廣庭へ、星の如くに列なりて、君のお立と觸流せば、光氏馬にひらりと跨り、乘出す道の露けさに、朝霧深く立罩めて、惑ふ心は輪廻の絆、手綱かいくり明はなるる、程の紛れに嵯峨の館へ、馬を早めて歸りけり。

此日よりして光氏は、心地惡しとて引籠り、人に對面し給はず、漸く九月廿日の程に、全快の

かせてくれ」ト前後正體なき惑ふ。此時仁木は次へ立ち、人目なければ光氏は、やをら立寄り黄昏を、抱上げて見給ふに、たゞ冷に冷入りて、息はとくに絶果てたり。短かりける契ぞと、袖を顔に押當てて、忍び涙にくれ給ふ。折から仁木喜代之助、隱し置きたる大小手挾み、形を改め出來れば、光氏は立退きて、さらぬ體にておはします。仁木はきつと手をつかへ、「無用の問答あらんより、何とて女に寶劍の、行方は問はせ給はぬぞ」ト伺ひ申せば笑はせ給ひ、「男優りの丈夫の魂、一旦いはじと誓ひたる、其人の名を問ひたりとも、あからさまに答ふべきや、夫こそ却つて無益の問答。ヤア凌晨、其心を察せし故、我も問はじ汝もいはじ、只よそながら知らせよ」ト呼かけ給へば手負はほゝゑみ、「娘をいたはり孫までの、在家を問はせ給ひたる、その御心にほだされて、申したきは山々ながら、宣ふ如くに誓を立て、その恩賞の黄金にて、親子が命をつなぎし恩人、其名は明して言ひ難し、是にて知召されよや」ト かの富士山を透したる、蒲の簾を逆にとり、引立つるを光氏は、打見やつて小首を傾け、「富士は三國無雙の名山、その名山を逆に讀めば、ヲヽさもあらん〳〵」ト、宣ふ間に凌晨も、吭搔切つて死したりけり。無慘の最期と光氏は、有合ふ菅の小笠を取上げ、打被せながら背くる顔。此方には又黄昏が、眠れる如きかんばせにて、過ぎし夜すがら睦言に、君に添臥す心ぞと、取交したる光氏の、肌著

母の懺悔に罪も消え、未來はひとつ蓮に生れん、半坐を分けて待つてゐよ」ト仰に黄昏につこと打笑み、「そのお言葉が智識の引導、嬉しう成佛致します」トいふ息もはや絶々なり。光氏重ねて凌晨に、打對ひて言ひけるは、「今汝が言ひつる如く、我刈萱を呼入れし、其時桔梗と昔の名を呼び、打驚いたる御身の樣、訝しく見えたる故、其後に刈萱を、招きて樣子を尋ねんと、思ひしかどもその昔、我を討たんと企みたれば、刈萱とても烏滸の者、もし寶劍の詮議の爲、通ふなんどといふ事の、漏れもやせんと其儘に、打捨置けば泥藏の、妻子なりとは知らざりし。汝が父の滅亡は、道に背きし合戰を、起せし故の自業自得、我を恨まん樣はなけれど、女心に敵の血筋と、ねらひしも又道理なり。殊に生害なしたれば、此方に恨はさら〳〵殘らず。娘は殊更仔細を知らず、我に只管心を盡し、思ひ迫つて此自害、不便と言ふも餘りあり。せめて彼が産みたる子を、我養ひて生立てん、今は何所の家にかある」ト問はせ給へば黄昏が、「アヽ母樣の由ない事、君に聞えて給はりし。髮も直さず齒も染めぬ、私に何の子があらう。必ず言うて給はるな」トいまはの際まで身を耻ぢて、氣を揉みあせれば迸る、鮮血にむせて伏轉び、其後物も言ひやらず。母はやう〳〵膝行より、娘の手をとり涙にくれ、「妾夫婦は君の仇、其子は遂に命をかけ、君と契るも宿世の業、果は童の口號に、なりなん事の耻かしや。ま一度聲を聞

見せ給ひし、君が發句の烏瓜、小烏丸を奪ひし事、はや顯れしと心に驚き、いつぞや桔梗へ御夢の、御物語ありし時、二葉の上は嫉妬深しと、宣ひしに思出で、かの御方の小袖を打掛け、斯くの如くの姿に出立ち、怪み給ふ隙を窺ひ、討ち奉らん心なりしが、娘が自害に我慢の角も、折れてはかなき此生害、樣子は斯くの次第なり」ト痛手に屈せず物語る。娘は苦き息を吐き、「さういふ深い若君の、お心なりとはゆめ〳〵知らず、賤い此身に御不便かけ、通ひ給ふと思ふから、日に增しあなたがいとしうなり、母樣の恐しい、企を悟つて此寺まで、落延びたるが宵の程、怪き女に驚かされ、氣を失うての御介抱、又も襖を押破り、現れ出でたる鬼女の姿、恐しながらも打見れば、袿の衣は尼上より、貰うた覺の縫模樣、お聲は正しく母樣と、聞知るからに若君を、討たんと此所まで來ませしかと、思へば身もよもあられぬ悲しさ。私が自害をしたならば、お心も折れやうかと、豫て用意の剃刀にて、此身を捨てたかひもなく、母樣にもその御生害。思へば宵の村雨を、凌いだ笠に書いた文字、同行二人は親子して、冥途の旅に赴くしらせ、何の是が、二世安樂。鬼女の形は此世から、地獄の體相顯して、未來の呵責も想ひやられ、わたしや悲しい〳〵」ト、よゝとばかりに泣沈めば、光氏も目をしばたゝき、「いかなる昔の契かありけん、暫しの程に心を盡し、いたはりくれたる御身の深切、何とて憎う思ふべき。

なと考ふれば、小鳥丸を奪ひし夜、わが片袖をちぎりし人。我は顔を包みし故、其方は見知り給はねども、ほのかに照す月光に、此方はよつく覺あり。其座に在るも何とやら、物恐しき心地して、酒に假託け立出でつ。其次の朝黄昏に、呼入れさせ給ひたる、尼ごぜの顔打見れば、絶えて久しき夫の妹、桔梗殿か淩晨かと、君の歸らせ給ひし後、昔の事ども言出し、互に歎き悲みしが、其時始めて桔梗より、君の御事委く聞き、また此小袖は打敷にと、二葉の上より賜はりしが、運にかなひて黄昏が、世に出る事もあるならば、晴著にせよと其儘に、妾にとらせて歸りしぞや。其後當月はじめつ方、小鳥丸を奪はせし、彼者密に我家へ來り、汝が娘黄昏が、許へ光氏通ふ由、彼は未だ若年ながら、聰明叡智の生にて、わが大望の妨なり、密に切害なすならば、先に倍して褒美をとらせん、此事承引なさゞる時は、多勢を以て光氏始め、汝ら親子も討取らんと、言捨てて歸りしかば、つく〴〵思ふに黄昏は、君の御母花桐樣を、切害なさんと巧みたる、泥藏の娘なり、その事成就はせざれども、もし桔梗より聞き給はゞ、御添臥は叶ふまじ、さすれば末の遂げざる緣。君は我父則知を、打亡し給ひたる、義正公の公達なり、妾が爲にも當の敵、討つて本意を遂せし上、彼人より金をえて、娘は他へ嫁らさんと、其事頻にたくみたる、樣子を娘黄昏より、告げ奉りしものなるべし。其上今宵帷子の、袖に書きて

詳しく申さずとも、光氏君には能く御存じ。泥藏殿の最期の折、妻子ありとは言はれぬ由。此子を連れてはや他へ、二度の嫁入もした樣に、思はれての故なるかと、後で聞いての怨めしさ。舞の指南を世渡に、いよく後家は立通せど、身貧に迫つて黄昏が、十五の年の夏の頃、忍び妻にしたいといふ、人のあるのをさいはひに、可愛やあの子が氣にそまぬ、人を宿して添臥させ、女子一人擧けしかど、通ひし人の本妻の、悋氣強くて二人が中を、割かれて後は初孫も、養育み兼て人にやり、世の生計も成り難き、折からある人尋ね來り、汝ふしぎの忍の術を、傳へ受けたる由を聞けり、室町へ忍び入り、小烏丸の短刀を、奪取つて得させなば、褒美に是をとらせんと、目先へ黄金を突つけられ、アヽ此金だに有るならば、娘が望の衣裳も調へ、今まで辛苦をさせたる代り、氣にそむ男を持たせんと、子の可愛さに眼くらみ、先年夫泥藏を、諫めたる身が遂に又、惡に染みつゝ寶劒を、奪取つて直に渡し、五條の家を造りかへ、親子の者が身のまはり、肌を包むも皆その金。いつぞや我君惟吉の、家に至らせ給ふ道、垣根に花咲く烏瓜、手折らせ給ふ御姿を、黄昏が思ひそめ、物案じげな有樣を、夫と推量したる故、隣の樣子窺ひて、うちへ誘ひ參らせつ。まだ其折は光氏君と、いふ事は知らざれど、尋常ならぬ御方なれば、娘が爲にも惡からじと、款待し申す其所へ、是にござる仁木殿、御跡慕ひ來られしを、はて見た樣

書顏殿に奉公する、妹の桔梗の緣により、書顏殿の里使、總ての用に雇はれて、後には家來同然に、目を懸けて給はりしが、此黄昏が三ツの年、夫泥藏妾に向ひ、板畠の家に傳はる、稀代の忍の術ある由、傳へ聞きたる事あらば、敎へくれよと望みし故、父の形見と守と共に、むかし乳人が得させたる、忍の術の一卷を、取出して見せければ、夫は是を讀み終り、今こそ望は足りたれと、喜ぶ樣の訝しく、治まれる世に無用の術、何にかせさせ給ふぞと、問ひつる時に聲を潛め、義正公の愛妾、數多あるその中に、花桐と聞えしは、世に類なき美人にて、書顏殿は此女に、君の寵を奪はれて、今では有るか無きかの御身、何卒して花桐を、切害なしてくれよとある、豫ての賴は聞置きながら、忍入るべき手段なく、今まで延引したりしが、ふと御身の家板畠に、忍の術を傳へし事を、思出して此祕書の、手に入るからは今宵の中に、必ず事を仕果せんと、聞いてはつと打驚き、身貧に迫つてかくまでも、淺ましい氣になり給ふか、御身に仇もなき人を、殺さうとは何事ぞ、其上に花桐殿は、懷胎して居給ふ由、一人と思へば二人の命、平に思ひ止つてと、諫も更に聞入れず、妹のみかは我までも、恩を受けたる書顏殿の、仇は卽ち此身の仇と、遂に其夜忍入り、人違へにて書顏殿を、むざ〳〵と切害し、妾が前も面目なくてや、家へも戻らず諸國修行、五年程經て妹の桔梗が、手に懸りて果てられしは、今更

まれしぞ、語れ聞かん」ト詰寄する。かの山伏も進出で、「我は仁木喜代之助秋定といふ者なり、かの寶藏を守護の役、汝が忍入つたる夜は、目ざすも知れぬ五月闇、挑み爭ふその中に、月は出でても灰暗き、影に透して其姿、女と知れど手拭にて、頰を深く隱したれば、面體をば見極めず、突棒肩に打かけて、袖をちぎりしばかりにて、遂にやみ〳〵取逃し、證據となるべき片袖は、我君にさゝげ置き、なほ遠近を尋ね廻り、其盜賊の家とも知らず、汝が許へ至りし時、我へ密に光氏君、戸張なしたる帷子の、模樣も合ひし御物語、油斷なせそと仰をうけ、かく樣々と姿をかへ、汝が樣子を窺へば、面體こそは見知らねど、其風俗には覺あり。夫のみならず我君を、切害なさんず其結構、必ず深き故あらん、包まず白狀なすべし」ト、主從左右に詰寄すれば、凌晨は懷劍を、抑取上げて我とわが、腹へぐさと突貫き、ほつとばかりに吐息をつき、「斯くなる上は何をか包まん、此身の因果物語、事長けれども聞き給へ。妾は元橫雲とて、伊勢の國司板畠則知の娘なり。父則知謀叛を企て、金臺寺の城に籠り、義正公に亡され、生殘りしは妾ばかり。乳母一人を賴にて、大內方へ宮仕、二十ばかりの年なりけん、滋坂破門と名を呼べる、靑侍と密通なし、身ごもりたるは此黃昏。重る月に人目だち、せん方なさに大內を、二人連立ち出奔し、紀の邊に微な住居。夫は破門といふ名を包み、泥藏と改めつ、義正公の愛妾、

の曲者の隙間を窺ひ、づつとつけ入り小腕を、取るより早く捻伏せて、膝に引しき動かせず。「なう悲しや」ト黄昏が、寄るかと見ればさも無くて、わつと一聲たまぎりつ、前へかつぱと伏したりけり。「又物おぢをなしつるならん、さる恐しき物にはあらず。心かよわき女ぞ」ト言ひつつ光氏立寄つて、はつとばかりに打驚き、「やア黄昏は剃刀にて、吭のくさりを掻切りて、はや息もたえ〲なり」ト宣ふ聲に此方の山伏、「南無さん大事の人質を、えゝしなしたり〲」ト、手元緩めば曲者は、刎返して鬼女の面、かなぐり捨つれば凌晨なり。其儘娘を抱きあげ、「これ此樣な恐しい、巧をするも何卒して、其方に出世をさせたさ故。誰を恨みて此生害、情ない事してくれた」ト騒ぎ惑へば光氏は、急がはしく進み寄り、「ヤア凌晨、よつく聞け。形は鬼女に扮しても、舞の足どり備へしは、汝ならんと思ひしかど、此所へ來るこそさいはひなれ、捕へて詮議をなさんずと、ためらふ中に思ひも懸けぬ、黄昏が此自殺。仔細も尋ね問ひたけれど、まづ差當つて室町の、寶藏へ忍入り、小烏丸の寶劍を、奪取つたる盗賊は、必定汝に極つたり。證據といふは戸帳の帷子、檜扇の大模樣、片袖足らぬを惟吉の、母の病氣を問ひつる折、確にみとめて此家へ宿り、詳しく事を糺さんと、思ふにさいはひ汝の迎へ、娘に馴れて今宵まで、心をつけて窺へども、はや寶劍は人に渡し、家に祕め置く體ならず。もと何者に頼





ぞと、疎ません手段よな。但しは我に怨あつてか、包まず語れ」ト宣へば、怪しの女は頭をふり、「さな宣ひそ月日にそひ、浮れ心の君ゆゑに、身は朝顔の日影まつ、有様よりも猶はかなし。昨日の花は今日の夢、悟りえぬのは女の常、浮世はうしの小車の、廻る報を知れや知れ」ト、手にもつ鐵杖投捨てて、懐劍ひらりと拔かざし、光氏目がけ突懸くる。黄昏は宵の程、怪みを見て其儘に、氣を取失ひし氣色に引かへ、恐げもなく有合ふ菅笠、押取り上げて光氏を、後に圍うて立隔たる。鬼女はいよ〳〵氣をいらち、「妨げせそ」ト引のくる。折しも彼所の疊を刎のけ、現れ出でたる一人の山伏、胎金兩部の峰をわけ、七峰の露を拂ひし、篠懸を身に打纏ひ、不淨をへだつる忍辱の、袈裟を肩に引かけつ、手には赤木の苛高數珠、爪繰り〳〵立寄つて、鬼女のよわ腰しつかと執らへ、「沙婆電光の界には、うらむべき人もなく、悲むべき身もあらざるに、悟れや悟れ」ト引すゆる、其手を早くも拂ひのけ、「いゝや悟らじ身のうさに、人の恨の猶添ひて、忘れもやらぬわが思、晴すは今宵の中にあり。せめては敵の枝葉をさり、父の忘執はらさん」ト、又駈寄れば、「これ待つて」ト、身をも厭はず止むる黄昏。山伏はつゝと寄り、「嫐打の振舞と、思ひの外に我君に、仇する曲者、そこのけ」ト ぢりり〳〵とつけ廻し、討たせじ討たんと爭ふ三人。光氏は傍に、敢て驚く氣色もなく、只悠然とまもり居る。山伏は目を配り、か

五編　下

光氏は黄昏を、諫めこしらへ給ひつゝ、物すさまじき客殿に、只二人おはせしが、既に夜半も過ぎにけん、風荒々しく吹すさび、松の響木深く聞え、梟の嗄びたる、聲に鳴くさへ物寂し。折から又も襖に畫く、御所車を蹴破りて、鬼女の姿ぞ現れける。枯木に齊しき角を振立て、鐵杖とつてはつたと睨み、「三ツの車に法の道、火宅の門を出づるといふ、佛の敎引かへて、襖の紙も破れ車、やる方無きこそ悲しけれ。倶に眺めし花の春、ふたり遊びし月の秋、比翼と語ひ連理と契りし、その言の葉も仇となり、摘む人もなき早蕨の、もえ出で初し思ひの露、かゝる怨を晴さんとて、是まで現れ出でたるを、いかなる者とか思召す、君の寵愛衰へし、二葉の上の怨靈なり」ト丈なる髪を振亂し、つツくと立てば光氏は、からくと打笑ひ、「遙むかし某の、大臣とやらんを南殿の、鬼の出でて劫せし、例は傳へ聞きたれども、心得難きその出立、身に打著たるは某が、物好したる二葉の上が、小袖の模樣に紛れはあらじ。さては二葉に意趣ある者、その衣を得たるをさいはひ、鬼女の形に出立ちて、この光氏を驚かせ、嫉妬深き女

失あらせはせじ。あの渡殿より灯火の、此方へ來るは預りの、僧が迎に來れるなるべし。かの僧我を光氏と、よく知る樣にあるなれば、連添ふ御身が腑詮なき、體を見せて笑はれな」ト言ひはげまされ黃昏は、やう〳〵に力を得て、胸撫下す其所へ、件の僧は出來り、「いつの間にかは火も消えて、嘸わびしくこそ思すらめ。座敷の塵を拂はせたれば、此方へ來らせ給ふべし」ト先へ立ちて案內なし、客殿と思しき所へ、ふたりを頓て誘ひたり。今までありし所と引かへ、淸げにはしつらひたれど、雨の漏は幾條か、繪襖に染透り、布引の瀧の如く、引手は落ちて月影の、其所彼所へ映る樣は、かの姨捨の田每に似たり。僧は兎角取まかなひ、急ぎ御粥菓物などを進らせつ、「いづれより上らせ給ふや、御履物の見えざるは」ト立騷ぐ樣子なれど、跣にて來りしと、聞えんも恥かしく、言紛らし給へども、僧はいよ〳〵心をそへ、「まづ御笠は是に置き候はん」ト、持出でながら書いたる文字を、訝しげに打眺め、黃昏が足の泥を、拭ひ捨てたる前垂まで、取揃へつゝ屛風にて、一間所を構ふるにぞ、光氏は額に汗し、「今宵はことなう疲れたり、日の闌けて後起出でん、夫まではゆる〳〵と、まづやすみ候べし」トやうやく僧を退けけり。

いと疎ましき所ぞと、立切る障子の透間漏る、風に燈火屢またゝき、屛風の破れに閃く紙は、尾花ならねど何とやらん、我を招く心地して、いと深々たる折に不思議や、影の如くに一人の女、忽然として姿を現し、光氏をきつと見やり、「君が假寐の五條の夢、その折も言ひつる如く、妾を捨置き素性も知れぬ、女を誘ひ給ふこそ、恨めしけれ」ト言ふ聲は、耳に殘りて消失せぬ。昔々の物語に、かゝる類は聞きたれど、目の前に見る事は、いと珍かに怪しくて、黄昏はいかにぞと、見返り給へば傍に、俯臥に臥しゐたり。何とかしけんと心騒ぎ、かき起さんと爲給へば、なよ〳〵として息もせず。さては今の怪しき姿、彼が目にも見えたる故、氣を失ひしと覺えたり。こは何とせん〳〵と、心惑ひて立つゝ居つ、軒に懸けたる燈籠の、火も消えたれば文目も知れず。「誰かある燈火もて」ト手を叩き給へども、木靈の應ふるばかりなれば、障子雨戸を蹴開きて、月の光を便にて、搔搜り給ひつゝ、位牌に供へし茶を取下し、顏にそゝぎて呼活け給へば、黄昏やう〳〵心づき、「光氏君にてましますか。誰とは知らねど幻に、見えたる女の姿が方を、きつと尻目に見おこせたる、その顏の恐しさ、氣を取失ひしが其後の、事をば更に覺えず」ト戰き伏せば光氏は、力を添へんと聲をはげませ、「かゝる荒れたる所には、狐などいふ獸の、人を劫さんとて、かゝる不思議をなす事あり。某此所に在るなれば、御身に過


娘黄昏


光氏黄昏を古寺へいざなひし図

るが、負目を請はれ姉を誘ひ、今宵家を出でたるが、遷化し給ふ住僧に、親しかりしを思ひいで、一夜の宿を乞はんため、此所へ尋ねて來れり」ト詞を飾り宣へども、今此寺を預りもつ、僧はさる年住持と共に、室町の御所に出で、よく光氏を見知りたれば、飛退りて敬ひまゐらせ、「思ひがけざる御光來、座敷へ請じ奉つらんが、屋根も疎になりたれば、最前の村雨の、なほ强くや降出でんと、疊を殘らずあげ置きたり。さりながら雨もやみ、最早降るべき體ならねば、御座を構ふる夫までは、暫し是にて待たせ給へ」ト、本堂の傍なる、小暗き所へ誘ひて、其身は急ぎ立去りぬ。黄昏は心弱く、物おぢをなす生なれば、あら恐しの所やと、光氏につと寄添ひて、「あれ誰やらん足音を、ひし〳〵と踏鳴し、後の方より來るなり」ト、物もおぼえず戰き居る。光氏は打笑ひ、「夫ぞ心の迷なる。庫裏の方こそ人は住め、此所へは誰か來るべき。我にしかと寄添ひ居よ。さて御身に問ふべきは、かくまでうらなく語らひながら、今まで夫と素性を明さず、父は何とか言ひたる」ト問ひ給へば吐息をつき、「宿も定めぬあまの子の、名乘いでんも恥かし」ト、仄に言ひて猶しば〳〵、後の方を見返るにぞ、光氏立つて雨戸を開き、「暗きを凄く思ひなば、此方へ來よ」ト諸共に、端の方へ出で給へば、月皎々と照まさり、庭の草木は物ふりて、見所もなく生茂り、池も水草にうづもれて、垣根は嵐に倒れ臥し、只遙々と秋の野ら、

早く是を身に纏ひ、松の梢を踏しめ〳〵、いと輕らかに黄昏を、抱き下して手に手をとり、足に任せて行きたりしが、向の方より凌晨が、むくつけき男を誘ひ、歸來るを早くも認め、折しも月は村雲に、影薄暗きをさいはひと、傍に忍びてやり過し、猶も人無き野中の細道、薄萱原押分け〳〵、此所は何所と白妙の、衣擣つらん砧の聲、微に聞えて雁も、遠く雲井に鳴交し、風少しうち吹きたるに、月皎々と照りながら、村雨さつと降出づれば、道の傍に安置せし、地藏菩薩のめしたる笠を、是も奇縁と光氏は、押取つて打被ぎ、「これ此笠に二世安樂、同行二人と書いてあり、此世のみかは後の世も、ふたり樂しく暮さなん、心細くな思しそ」ト、力を添へつゝ宣へども、かゝる徒路を光氏は、つひに習はせ給はねば、如何はせんと心まどひ、黄昏はとりわけて、越方の事行末を、思ひ續けて降來る、雨にも勝る袖の露、絞り兼つゝ佇めり。光氏は向ふの方、ちらめく火影に目を留め、「チ、あれこそは某の、院と聞えし大寺なり、我と親しき住持の僧は、とくに果てて住む者なく、荒果てしと聞きつるが、猶預りの法師はあらん。一先今宵は彼所へ宿り、明けなば嵯峨へ伴ふべし」トかの凌晨が推量に、違はず他に道なければ、ふたり彼所に辿りつき、荒たる門の忍草、露けき庭を分入りて、黄金造の二腰は、蒲の簾に押くるみ、こゝを守れる者やあると、呼出して宣ふやう、「某は室町へ、出入をなす町人な

「生捕つて褒美の金と、揉出して來た力瘤、をさめる思案は此奴めを、しめ上げて光氏の、落行く先を白狀させん。かゝる騷に高いびき、落付顏をはり曲めん」ト打つてかゝればむつくと起き、身をかはして筋斗をうたせ、二人を遙に投退けて、つと立上りて聲勵ませ、「ヤア凌晨とやらん確に聞け。我こそ足利恩顧の侍、赤松太郎高直なれ。光氏君が輕々しく、こゝらへ一人おはすべきか、家臣の面々人知れず、家を圍んで宿直の番。心得難き汝の體、詮議をなせとの仰をうけ、多勢を以て遠巻したれば、迯隱れん道はなし。其上娘黃昏は、人質として光氏君、誘ひて出で給へば、所詮かなはぬ其身の素性、包まず語れ」ト言ふひまに、投附けられたる惡者ばら、又起上つてむさぶりつく。打放さんは易けれど、夫も無益と差込む手さき、高直とつて捻伏せ〳〵、膝にひつしき動せず。凌晨怒面にあらはれ、「今戻りくる道すがら、顏を隱せし二人連、合點ゆかずと思ひしかど、折しも月の雲隱れ、夫と見とめず打過ぎしが、あれこそ娘と光氏ならめ。田圃づたひの一筋道、落行く先は野中の古寺。夫よ〳〵」トひとりごち、納戸の内へ駈入りて、ひとつの包を小脇に抱へ、宙を飛んでぞ馳出でける。

光氏は凌晨が、家にあらぬをさいはひと、閨の後の壁を毀ち、立去らんとなしけるが、身はいたう窶したれど、黃金造の太刀刀、月の光に煌めきて、人めにや懸らんと、軒の簾を引下し、手

かと、路を紛らし給ふ故、夫と知らじと思せども、人のけはひ手摸りにも、尋常ならぬお方とは、とくに猜せし其上に、私は幼い時なれば、つゆ見知らねど刈萱は、もと母上の身寄の人、あれこそ光氏様なりと、語り聞かせ給ひし由。此頃私へ母様の、おつしやらぬ其前は、隣で問ひても惟吉へ、口がためして置き給へば、よもやあなたを室町の、若君様とは思ひも懸けず、聞いた時の勿體なさ。かゝる伏屋へ折毎に、訪ひ音づれて給はるは、疎ならぬ御情と、思へば御身がなほ大切。親の悪事をあからさまに、告げんは道にあらねども、君の御名の母上に、漏れて此家にまし〳〵ては、もの恐しき事のあり」トなほも涙に暮れければ、光氏實にもと微笑まれ、打戯れて言ひけるは、「我は年ふる狐なり、誑られ給へかし」ト閨の屏風を引廻し、其後聲もなかりけり。

暫くあつて凌晨は、こゝら邊に名をえたる、あぶれものを打語らひ、ひそ〳〵わが家へ立戻り、耳より耳に囁きあひ、黠き〳〵兩人の、あぶれものは荒らかに、寢所の屏風をかなぐれば、黄昏は在らずして、さも悠然と一人の若者、高枕して臥し居たり。「ヤア娘も見えず光氏も、影を隱して見馴れぬ男。フウ後の壁を毀ちしは、さてこそ娘黄昏が、光氏の情にほだされ、わが密計を漏せしならめ。あら腹立や無念や」ト拳を握り立つたりけり。あぶれものも興をさまし、

より、取出して投げやれば、凌晨は訝しげにつく〴〵見、「ほんに是に違はない、檜扇の模様の上に、何やら書いて」ト火影にすかし、

よりてこそ夫かとも見め烏瓜

ト打吟じつゝはつとばかり、打驚きしが思ひ直し、さあらぬ體に笑に紛らし、「疾に破れて仕舞うた袖が、有らう筈はなけれども、この戴いた似た切を、縫合せて置いたなら、時代物の帷子と、金だして買ふ人もあらう。ヲヽその金で思出した、金の御嶽の彌勒講、今宵は行かねばならぬ約束。夜半には戻ります、ゆるりとお寢みなされませ。南無當來の導師」とぞ、拜みながらに出でて行く。娘は母の後影、見送りながらはらはらと、涙おとせば光氏は、やをら近く差寄りて、「今凌晨が唱へしは、大和の國金峯山に、いますといふ佛の御名、某と御身の中は、此世ばかりの事にはあらず、未來をかけて見捨てはせじ、彌勒の世まで契るべし。かくまで人を思ひしむ、事は今までなかりしが、よく〳〵深き緣ならん。人目を憚り隔おく、其夜はいねても眠られず。今宵は御身を誘ひて、人知れず此家を立退き、心安き所にて、長閑にふたり暮さんと、豫て用意もなし置きたり。何をか怨みてその涙」ト尋ね給へば黄昏は、やう〳〵に顏をあげ、「其名を明させ給はぬ故、御歸るさに人を添へ、御在家を見極めんと、思へど君はそこは

五編　上

白く哀れに咲きたりし、桓根の花を光氏は、忘れ難くて五條の家に、又宿りしが黄昏は、物思はしき氣色にて、差俯きてしかぐに、物も言ひえず目の中に、涙を含み居たりけり。しばく通ひし上なれば、いとくうらなく語らひしが、今更彼がもてなしを、光氏不審に思へども、打出でても問ひやらず。凌晨は常に變らず、愛敬づきて物打いひ、娘に臥床をしつらはせ、その傍の燈火にて、己が寢卷の袷衣、つゞれを刺してぞ居たりける。折しも八月十五夜にて、隈なき月は疎なる、板屋の透に影もれて、常には遠く聞き給ひし、壁のなかなるきりぐすも、枕の邊に喧しく、寢られぬ儘に光氏は、ふつと彼處を打見やり、「凌晨が側にある、その帷子の解わけは、始めて是へ宿りし時、板戸に張りてありしならん」ト問ひ給へば打笑ひ、「私も若い時は、大内方に輕い奉公、その時分の是でも晴衣、帷子も諸共に、年がよつて片袖は、破れて仕舞うて搔卷の、裏にやせんの心あて、娘に張らせて置きました」ト何心なく答ふれば、光氏は起出でて、「檜扇の大形を、摺箔したる昔帷子、破れてしまうた片袖は、是であらう」ト懐

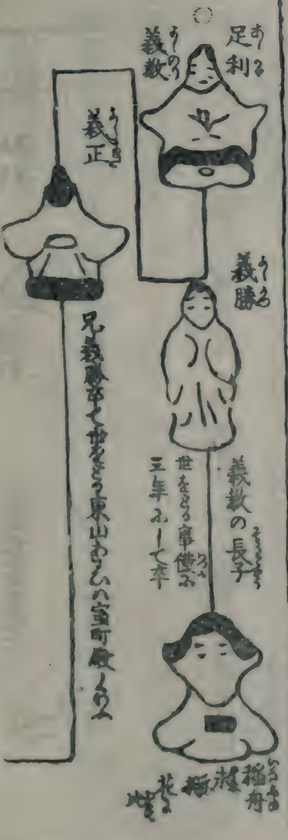
偐紫田舎源氏系圖


澪浪
小鉄
寂寞
阿闍梨と
密通して出奔
六条三筋町の遊女
阿古木
六条の御息所
二葉の上
冨樫之介養女
赤松正則の妻
義教の妹
花満中将の妻
音川持之の養女
猪名野谷
足利太郎
義尚
次郎

彼土人形を系圖のかたちに並べたるハ三人か四人ン從父弟の提雛に倣ど
果ハ自安にしてさへ寫し出しハ学者の眞似を更なるさぐる楽屋の体を
わらんべまじりて嗚呼三文ンが智恵をよせ一文ン系圖と是をいはん歟

文政十四年辛卯春發販

柳亭種彦誌



修紫田舍源氏第五編序

源氏物語に出づる人、四百九十餘人ありとぞ。原來はかなき繪草紙に、斯くまで多き人數を、漏さず編まんは最難く、用なきは悉略きつ。しかのみならず二役三役を、一人で勤むる事多し。まづ義教は一院と先帝との事を兼ね、蒜喰指くひ朧月夜の內侍を一人の事となす。此類あまたあり。又葵上、末摘花、六條の御息所に譬へたる三人を、源氏に比したる光氏の、從父兄弟に作るの類は、予一時の戲れにて、源氏の系圖と大きに異なり。さればとて今新に、系圖を作るも最もの憂く、よし作りしとて視る人なし。昔ある淨瑠璃作者、一文人形といふ物にて、手摺へ掛ての木偶數を、工風なしゝを思出し、机の上を假舞臺

かに住みなし、禿の裾の露けげに、庭に咲きたつ秋草の、花に交れる其様は、菱川が繪にかゝまほしと、打眺めゐたりしが、隣座敷の物語、村荻と言ひつる名の、ふと耳に留りしより、障子へ近く身をよせて、ありし事ども聞終り、山名親子を亡母の、家來筋と打歎きし、遊君の素性をも、問はまほしきのみならず、室町の所縁ぞと、我を言ひしも心にくく、思せど言寄る便もなく、「手水々々」ト呼び給へど、答ふる者のなかりしを、好きさいはひと片貝が、盥湯注をまゐらすれば、阿古木はいとゞおもはゆげに、手拭とつて差出すを、光氏つく〴〵見給ふに、折に合ひたる七草を、縫ものしたる袷を著なし、締扱の帯鮓かに、引ゆひたる腰つきは、爽かに媚いたる、かの手拭に朝顔を、染めたりければ、

朝顔や折らで過ぎうき離かな

「如何すべき」ト手をとれば、阿古木も馴れて口早く、

朝霧の晴間をまてよ花を見ば

夜も明はなれければ、御迎に惟吉が馬を奉り、其日は歸らせたまひけり。

惡逆無道の山名の悴。身は遊君になり下れど、いかで枕を交すべき」ト腹立つまゝに聲高く、涙に暮るれば片貝も、深き樣子は知らねども、諸共に打萎れ、「その山名と宣ふは、室町樣のたしか御家來。ほんにその室町で、思出したはいつぞやより、この揚屋へ通ひ給ふ、光樣とかお名を呼んで、御容貌のよい若殿樣、いかなる譯か相方を、定めてお呼びも遊ばさず、たま〳〵お呼びなされても、閨へお入なされる時は、皆歸して只御一人。酒も飲まずに多くの人を、集めて己が樣々の、物語をお聞きなさるが、お慰ぢやとおつしやる由。あなたもたしか室町の、所緣のお方といふ取沙汰。あなたはお逢ひ遊ばしてか」ト問はれて阿古木は吐息をつき、「あからさまにまだお目に、懸りし事はなけれども、淸水詣の下向道、五條の邊で見初めまゐらせ、妾は年もふけ過ぎて、似合しからず思へども、其面影が目の前に、今もあり〳〵現にも、夢にも更に忘られず」ト涙ぐむ顏片貝は、差覗いて聲を密め、「さういふ噂を聞いた故、今の樣に申したは、お心をひき見る爲。さいはひに光樣は、隣座敷に只お一人。くよ〳〵思召さうより、丁度好い間ぢや、サア早う」ト進められて胸轟き、衣桁の衣を引下し、寐亂れ姿取つくろひ、樣子を窺ひ居たりけり。

光氏は只一人、此方の緣に肘枕、廓は狹き所なれど、さすが揚屋は夫にも似ず、樹立前栽のど

村荻といふ者に、御心をかけ給ひ、娶らんとし給へど、其事未だ調はず、此阿古木が村荻殿に、面容の似たる故、忘草にもならんかと、通ひ給ふといふ事は、とくに知りて侍るなり。今にも庭へ村荻を、移植ゑ給ひなば、取捨てられて忘草、かれ〴〵になりゆく時、打歎きてもかひなしと、思へば添臥す心はなし」ト さら〳〵と言流され、客は返さん詞なく、「身に覺なき虚事を、誰が作りて漏しけん」ト言紛らして歸りしかば、片貝暫し思案なし、「眞の名さへも包める人の、身の上をかくまでも、知らせ給ひし訝しさよ」ト問へば阿古木はにつこと打笑み、「始めて逢ひし其時より、身をたかぶりて人を卑め、憎さげなる男ぞと、思へばつれなくもてなしても、又懲ずまに通ひくる、一夜の酒の醉紛れ、かの村荻へ送らんとて、あの客が書置きし、文を臥床へ落せしを、取上げて密に見れば、

御身に顏の似かよひし、阿古木の許へ通ふにて、深き思ひは知れよ。なんどと、始め婦妻になさんとて、言入れし事までも、細々と書いてあり。又友達よりあの客の、許へおこせし狀の上に、統淸殿へと書いたるにぞ、さてこそあれは山名の三郎、心曲める宗全が、子と知るよりも猶うるさく、面を合すも胸惡し。此世におはせぬ母樣の、家來筋なる其上に、

くまき散らし、誇顔なる者ありしが、彌生の末よりしげ〳〵に、阿古木を揚屋へ招きしが、いかなる事か此客には、睦しく詞も交さず、つれなくのみもてなしければ、此方は更にとけ難き、阿古木が樣に思ひ亂れ、心を盡して通ひつゝ、いつも比翼になぞらへたる、席の上には臥しながら、連理と契は交しもやらず、只一人のみ閨に捨置き、何地行きけん阿古木は見えず。浦に引くてふ網ならねど、度重なれば顯れて、人の諫も聞入れず、客は猶しも思ひ捨てず、又も彼所に訪ひ音づれ、秋の夜長を只一人、明すと知らず曳船と、廓言葉に言習はす、若き遊女片貝は、寢惚顏にて走り來つ、窓の格子を一間あけ、「いつの間にやら東も白み、今朝の霧の下りた事は」ト獨語して閨の屏風、引やりて差覗き、「太夫さんは何所へやら」ト尋ねに立つを寢ぶたげなる、氣色にて客は押止め、「人めを包む廓通ひ、顏を見せじと夜深になり、人を靜めて來る故に昔話の化物と、我を太夫は思うてか、來る夜も〳〵寄り付かねど、心の解くる夫までは、ひとり寢るのも豫ての覺悟、たゞ此儘に打捨てゝ」ト立歸らんとなしければ、物のかげより窺ふ阿古木、いと疎ましく思へども、せめては門まで送らんと、出來るを件の客は、手を取つて彼所に引据ゑ、「今片貝にも言ふ如く、恨とは思はねど、心に染まぬ人なりとも、打解け語るは遊女の慣、かくまでつらくもてなすには、必ず深き故あるべし、包まず語りて聞かせよ」ト言葉

二葉が一念なるべし。あら顔見るも恐しけれど、病氣と聞きて其儘に、打捨て置かんも本意ならず。いで赤松へ赴かん」ト帶締め直し立上れば、刈萱は不審顔、「表にお供も見えぬ樣子」「いやいや隣の惟吉が、所へ駕も待たせて置いた。黄昏、さらば此頃に」ト立出で給へば障子の陰、樣子を立聞く母凌晨、立出でて手をつかへ、「せめて娘が不束な、手前で薄茶一服」ト言ひつゝつくづく刈萱の、顔を眺めて打驚き、「お前はたしか桔梗樣」ト思懸なき昔の名を、言ひかけられて此方もびつくり、「さういふお前は凌晨樣。まづ〳〵思懸ない」ト二人手に手を取交し、涙に暮るゝは故こそあらめと、思へど光氏問ひもせず、夫より直に赤松の、館に到り見給ひしが、二葉の上の煩は、させる事にもあらざれば、又其所彼所と浮れ歩き、折節毎に此所の宿も、訪ひ音づれ給ひければ、黄昏いよ〳〵思ひを通はせ、兎角する間に秋にもなりぬ。其程の事はくだくだしければ書き漏しつ。

此頃六條三筋町に、其名を阿古木と呼びて、いとときめきし遊女あり、年は二十を三ツ四ツ越え、盛は少し過ぎたれども、今も昔の色香うせず、訪寄る客は數多なり。その中に年の頃、二十ばかりの侍にて、夜深に來り朝とく歸り、人目を忍ぶ樣に見え、其名を人の問ふ時は、只「統」とのみ呼ぶべしと、あからさまに名乘らねば、統の殿〳〵と、廓にて呼慣はし、黄金を多

「あわたゞしげなお面もち、何ぞあなたへ急の御用、お側に居てはお話の、お邪魔にならう。黄昏は、忘れた戸張剝して疊みや。私はよい酒を、とつて參つて上げませう」ト二人は其座を立去りけり。喜代之助近くすり寄り、「仰に從ひ湯治と披露し、京近なる田舍々々を、尋ね廻り候へども、かつもつて手懸なく、せん方盡きて今日歸洛、直樣御館へ參りし處、惟吉が母の病氣、御尋ねの由承はり、すなはち隣家へ罷越し、又ぞろ是まで御跡を、慕ひて推參致せしは、豫て御內意うけたる如く、病氣と言立てお暇賜はり、足手纏の村萩は、婦妻におこせと言入れし、山名の一子、三郎統清の許へ嫁らせ、妻空衣が父にて候、土橋政長といひし者は、疾にみまかり家も絕え、戻す親戚も候はねば、彼をば本國伊豫まで引俱し、拙者は夫より國々を、遍歷なして寶劍の」ト言ふを光氏扇で押へ、囁き給へば喜代之助、聞く事每に打驚き、「夫こそ疑ふ處はなし、直に某引捕へ」ト立つを引止めあたりを見給ひ、「急いては事を仕損ずる、コレかう〳〵」ト密々聲。「然らば若君お一人にて、今宵は是に御一宿」「汝は隣家で明くるを待て」「委細承知仕る。夫にはつかざる事ながら、某が留守の中、君方違にお入の由、其夜御茶の通には、村萩を差出せと、仰ありしが折惡く、清水寺へ參籠の、娘の代に妻空衣、其名を詐り出でたるが、事顯れて君に對し、面目なき由我に告げ、自害もなさんず樣子なれば、大事の前の小

漏れくる火の影は、螢よりけに哀れなり。黄昏も出迎へ、簾の陰に誘ひ申し、親子とりぐ〲欵待すにぞ、光氏は目馴れざる、住居の樣も珍しく、彼方此方を打眺め、「最前表に憩ふ折、板戸を二ッ組合せ、上より衣を張りたるが、あれ〲表に今もあり、あれは何ぞ」ト問ひ給へば、凌晨は二階より、表の方を透し見て、「黄昏があなたに浮れ、忘れて夜干にしたさうな。秋も近いに夜露に濡らし、だいなしになつたであらう。あれは私の古帷子、戸張というて下々では、致す事でござります」ト打笑へば光氏は、扇を以て拍子取り、「わいへんは、戸張帳をも垂れたれば」ト謠ふを凌晨引取つて、「ソリヤ催馬樂の謠物、その戸張とは綾錦の、たれ衣の事なれば、あの戸張ではなけれども、わいへんとは我家の、事ぢやと云へば唄ひかへて、我家は戸張てふをも干したれば、大君來ませ聟にせん。御肴には何よけん、鮑榮螺甲贏よけん。私が唄ひますると、小唄の節になりまする。聟にせんとは幸先よし、御肴には娘が三味線、磯馴小唄の貝盡し、鮑榮螺甲贏かけて、騷いでお聞かせ申すばかり、御馳走はなけれども、今宵は一夜、なア黄昏」「夫ぢやというて見苦しい、私が臥床へ勿體ない」ト物恥かしげに言ふけはひ、まだ世を知らぬ樣ならねど、いと若々しく愛らしゝ。折から表に咳きして、「若君是におはするよし、喜代之助只今歸洛」ト直に二階へ打通れば、凌晨はためつすがめつ、喜代之助をまもり詰め、

も存ぜず。折節若き女子ども、出入いたす様子にて、其團扇をさゝげしは、たしか娘に候」ト、聞いてほく／＼點き給ひ、人の手馴れてかけ香の、匂染みたるかの團扇を、懐しげに打ながめ、月の小唄の一節に、御心や留りけん、「此團扇には尋ぬべき、仔細のあれば此邊の、様子を詳しく知る者を、とく呼び參れ」ト宣ふが、端近なれば御聲の、表に漏れて聞えけん、「其樣子は私が、直に申上げませう。御免遊ばし下されまし」トいと馴々しく年の頃、四十ばかりと思しき女、會釋なしつゝ打通り、「私は四月頃、お隣へ引越しました、凌晨と申す者。あなたへ團扇を上げたのは、黄昏といふ一人娘。むだ書のその小唄が、お目に留つて彼が仕合。お名は聞いて居りますれど、惟吉様にはしみ／＼と、お目に懸るは今宵初めて。私は女子供へ、舞の指南が浮世わたり。娘は近頃琉球より、傳をうけた三味線と、いふ物を教へますれば、うへつ方のお耳馴れず、拙い業が又却つて、お慰にもなりませう。夫は疾に世を去りて、只今では寡ずみ、お氣遣な者はない。穢けれどもお客様を、お連れ申して參る樣、娘もくれ／＼申しました」ト聞いて光氏うち微笑み、「夫こそは一興なれ、直に御身の家へ行かん。サア凌晨とやら案内」ト立出で給へば惟吉は、こは輕々しき御有様と、思へど若き身の程を、顧つゝも詞に出さず。件の女の後につき、光氏は先に見し、あげ戸を潛り立入れば、二階の簾は皆下して、隙を

「門の鍵を置き失ひ、かく騒しき街中へ、置きまゐらせし無禮の段。しかしあなたを光氏君と、存ぜし者は候まじ。いざ御供」ト門の内、駕舁入るれば此方の娘、心ありげに見送りつ、只うつかりと佇めり。

光氏内に入り給へば、病に疲れし惟吉の、母はやう〳〵起上り、「髪をおろし容をかへ、憚あれば御館へ參らず、絶えてお顔を拜まざりしが、五戒を有ちし德顯れ、伏屋に至らせ給ひしは、阿彌陀佛の來迎ぞや。是を此世の思出に、彼世へ赴き侍らん」ト、さも嬉しげに言ひければ、光氏は涙にくれ、「其有樣をつら〳〵見るに、さまで重き病にあらず、心確にもちなして、養生加へ本復なし、まだ年若き惟吉が、世に出づるをも見はつべし。心に障ある時は、佛の國へ到り難し。病のおこたる加持祈禱は、わが祈願所にてせさせん」なんど、いと懇に力をそへ、病床を立出で給ひ、惟吉に紙燭を點させ、隣の娘が與へたる、團扇を取りて見給へば、

君の光を月かと思ひ浮れいでたる烏瓜

なげ節の唱歌をひとうた、面白う書きたるが、思ひの外に美しき、筆のすさみに心動き、「この西隣に住みなすは、いかなる者ぞ」ト問ひ給へば、惟吉答へて云へる樣、「君の知召す如く、久しぶりにて某が、此家へ罷歸りしは、母の病氣の故にして、其事にのみ取紛れ、隣の事は能く





本意にあらず。案内せよ」ト仰すれば、「然らばお駕籠の儘ながら」ト戹を入りて門の戸を、開けんとすれど門に、錠を下してありけるにぞ、急がはしげに惟吉は、鍵持てこんと走り行く。光氏は駕籠の簾打かけて、大路の樣を見渡し給ふに、此家の傍に、板垣を疎にしなして、緣先の障子はくわらりと押開き、蒲の簾いと白う、涼しげなるに女のすき影、笑ふ聲など聞えければ、いかなる者の集るならん、われとは見知る者あらじと、駕籠より下りて差覗けば、座敷も二階も奥深からず、物はかなき住居にて、古帷子の解分を、板戸へ張りしを立寄せたる、垣根も折戸も青やかに、心地よげに這かゝれる、蔓に白き花のみぞ、己ひとりが笑の眉、「開きしは何なるか」ト問はせ給へば駕舁く男、「あれこそは烏瓜、其名は黑き鳥めきて、花は白く實は赤く、かゝいるぶせき垣根にのみ、咲き候」ト答ふるにぞ、「實に此邊は小家がち、打よろぼひし軒のつま、這まつはれるは口惜しの、花の契や一房を、折りもて參れ」ト宣へば、彼男は心得て、此押上げたる網戸の内へ立入れば、年の頃二十に足らぬ顏よき娘、黄なるすゞしの前掛し、花にも優る雪の肌、白き團扇に打招き、「是に載せて上げ給へ、花は露けくとが〳〵しき、蔓の茨が美しい、あなたのお手にさはらう」トさもおもはゆげに立出づる。折から隣の門の戸を、開いて惟吉罷出で、夫と見るより立寄つて、娘の持ちし團扇の儘、花を受取り御前へ持ち、

はん手前もあり、かくまで幼き心ばえ、君もよしとは思すまじ」ト恥かしめられ君吉は、右に左に苦しけれど、事の破れし其上は、言譯せんも無益なりと、差俯いて答もせず、かの御筆ずさみ取出せば、さすがに取りて打吟じ、いせをのあまの捨衣、とり隠し給ひしかと、思へば心恥かしく、かのたゝう紙の端つかたへ、

　空蟬の羽もかくやらん袖の露

と書いつけるを、村荻は物の陰より見たりしかど、何所の文と問ひもせず、遊び狂うて居たりけり。是にも深き故由あり、なほ末々に物語るべし。

　空蟬の巻終り、是よりは夕顔の巻のおもかげに綴れり。

光氏は只管に、浮世狂ひに假託けて、寶の劒を詮議せんと、心を千々に砕けども、夫と思へる事もなし。猶も人の繁き所へ、立入らんには如くべからずと、六條三筋町といへる廓へ、忍び歩きの頃なりしが、かの惟吉が母強く病ひ、尼になりける由を聞き、さらば彼を訪ねんと、五條の家に赴きて、門前に駕をとめ、人して斯くと言はせ給へば、惟吉慌てて出迎へ、「此程母の病氣につき、暫しお暇蒙りて、御館へも罷出ず、思懸なき御來駕」ト頭を大地にすり付くれば、「いやとよ、汝が母の乳房を、含みて我は成長せり。病に臥すと聞きながら、打捨置くは

四編 下

夫よりも光氏は、嵯峨の館へ歸り給ひ、君吉を近く呼び、「方違の其夜より、村荻と詐りしは、姉空衣にてあるならん。一方ならずいとほしむ、汝までが包み隱し、我に不義の行を、せさせんと爲したるは、いかに幼ければとて、心附かざる事どもぞ」ト言懲し給ひければ、道理につまりて君吉は、答も更に聞え上げず。光氏は空衣が、閨に殘せし薄衣を、袖に隱して歸りしを、取出して打眺め、「返すゝも何故に、娘と欺り昨夜まで、仇に心を盡させし、あら心根の憎さよ」ト爪彈をなし給ひ、眠られぬまゝに硯を取寄せ、文にはあらで鼻紙へ、手習ふ樣に書すさみ、

　蟬の空其身はどこに鳴いてゐる

打捨て給ふを君吉は、懷中にひき入れて、御前を退けども、いかなる故にか村荻には、御言づけも無かりしとぞ。夫より直に君吉は、中川の館へ赴き、奧の一間へ打通れば、姉空衣は、待ちつけて、夫と見るより側へ呼寄せ、「我にも知らせず若君を、何とて誘ひまゐらせし。人の思

ず、「今言ひつる事どもを、必ず人に沙汰するな、さらぬ風情にもてなせよ」ト、何にかあらん村荻に、くれ〴〵も言知らせ、君吉連れて庭口より、立出で給へば目の疎き、老いたる女が起合せ、「そこへおはすは誰なる」トけうとき聲に咎められ、物むづかしと君吉が、「夜半なれども用ありて、表へ出づるは我なり」ト言ひつゝ君をまづ先へ、出し申せば曉近き、月は限なく差出でて、かの光氏の影さすを、以前の老女が透し見て、「まだ一人おはするは、ヲヽ夏野どのにてありけるか。此頃までは子供なりしが、丈の高くなられた事は。君吉様も今のまに、彼様に成人遊ばさう。アヽ夫までは生きられまい。夏野殿は卒衣様の、お部屋に今までござつてか。此四五日は腹をやみ、下へ行くのが近いゆゑ、年寄りては猶難儀。あら腹痛や〳〵」トわが目の疎きに光氏を、夏野と思ひ違へてや、ひとりつぶやき行過ぐれば、その間に辛うじて、遁れ出でさせ給ひけり。

に懸りし事はなけれど、あなたは正しく光氏君、この村荻をばいつの間に、お目に留りて有難い、御文に私が、をさない筆で返事、夫を御覽遊ばして、今宵は兄の留守なれば、お越ありしは冥加ない。此所に寢て居給ひたる、母樣のおはせぬは、おいでの樣子を夫ぞと悟り、母樣の此枕を、あなたへとおつしやらぬ、ばかりについと氣を通し」ト言さして顔打あかめ、袖打おほふ其姿、世の中をまだ能くも見ぬ、娘の樣にはざればみたり。光氏心に思ふ樣、さては去頃村荻と、言ひし女は空衣にて、夫とも知らず宵の程、垣間見たりし此娘が、村荻にてありしよな。何の故にか我を詐り、其身は度々憂目を見、われにも物を思はせし、あら心得ずと思せども、打出でて村荻に、かくと言はんもいとほしく、「御身を見んとて去りし頃、方違に來つれども、何所にかはひ隱れ、影をだに見せざりし、その恨を言はんとて、今宵忍びて來りし」など、言紛らし給ひければ、いと若やかなる心には、眞と思ひし風情にて、猶恥かしげの立添ひて、差俯いて居たりけり。

君吉ふつと目を覺し、そら寐なさんと思ひの外、眞に眠りし愚さよ。君はいかになし給ふか、まづ姉上へ此事を、知らさんものと急がはしく、彼所へ來れば村荻と、思ひも懸けぬ光氏君。さては姉の詐の、漏れたるならんと悲しくて、うぢ〳〵すれば光氏は、それには更に目も懸け

とは誰あつて、知る者更になかりけり。さて空衣は先刻により、君吉の聲を聞き、又若君の御文を、持來しならんと胸轟き、夫の歸りし其上にて、事の仔細を包まず語り、詐り申せし言譯には、とやせんかくやと氣を痛め、いと寢苦しく目も合はず、何心なく村荻が、よくまどろみしが羨ましく、顏をもたげて打見やれば、皆靜まりし小夜半に、怪しやさら〳〵衣の音、よしの障子に隔りて、火は灰暗くて見えわかねど、此方へみじろき寄る人影、もしや夫かと淺ましく、其夜は殊に暑かりければ、上にかけたる練絹の、袷をやをら脱捨てつ、肌著のすゞし單衣にて、裳の方へ辷りいで、壁に身をよせ息もせず。光氏は搜寄り、たゞ一人臥したるを、心安しと寄添へば、ありしけはひに引かへて、手も膨かに顏も肥え、枕は傍に搔遣りて、つゝましげなき寢姿を、怪しや是は變りしと、見返る此方に空衣が、さし足しつゝ逃出でんと、開る障子に差込む火影、互に見交す顏と顏。「ヤア村荻、鐵漿を含みて眉毛を拂ひ」「君にもいつか御元服」「さては夫を持ちたるか」ト訝かる光氏その隙に、影を隱して空衣は、何地へ行きけん見えずなりぬ。

今光氏が村荻と、呼びつる聲の寢耳に入り、娘はやう〳〵目を覺し、呆れたる氣色なりしが、つく〴〵御顏打まもり、夫と推量したりけん、俄に裳かき合せ、衣紋つくろひ手をつかへ、「御目

四五目、夫ならさまでの負はない。まだ有るか尋ねてみん」トつと立上つて打ふるふ、裳に雪の未開紅、留奇南の薫はつと散り、浮世に馴れし立振舞、浮きたる心のある男子は、是をも好しと思ふらんと、かく女どち打解けし、有樣なんどの垣間見は、まだ爲給はねば珍しくも、又をかしくも思しけん、猶身を潛めておはせしが、内より人の出來るけはひ、見つけられじと光氏は、立去らんと爲給ふ處へ、君吉急ぎ走り來り、「人目繁くて御出の、樣子は未だ申出でず、又こそ折も候はめ、今宵は御歸館遊ばせ」トすゝめを光氏聞入れず、兎角する間に彼方には、碁を打果てしとおぼしくて、笑ぞよめき人々の、立別るゝけはいして、「君吉樣〳〵、どれにお出なされます、此お切戸は閉めまする」ト扉をならす夏野が聲。君吉驚き振返る、袖を光氏引止め、「折戸を鎖したる體にもてなし、汝は早く内に入り、よく計へ」ト宣ふを、聞くと其儘縁に上り、姉に樣子を語らんと、行くを夏野が押隔て、「村荻樣と諸共に、姉君樣ははやおやすみ、御用があらば明日の朝、お早うお逢ひ遊ばしませ。あなたのお床は風の入る、お窓の下へとりました」ト誘ひ行けばせん方なく、暫が間そら寢して、其後事を計らんと、心は確に持ちなせど、幼き者のしどなくて、枕をとるよりいち早く、眠こけつゝたわいなし。光氏はいと敏く、先に夏野が呼びつる折、かの君吉が後に附き、座敷の内へ忍入り、疊寄せたる屛風の陰へ、這ひ隱る

ば、やをら内に忍入り、塀に懸けたる簾より、彼方の座敷を見通せば、屏風も側に押疊み、火を近う點したり。柱の方に寄添ふは、かの人ならんとよく見るに、水色の帷子ならん、紅梅練の裏つけしを、前深く打合せ、髪のかゝりも華美ならず、手はやせ〳〵と姿形、尋常にして差對ふ、人にも顔はつゝましげに、腮を衿に差入れて、俯きがちにもてなしたり。今一人は東に向きて、殘る所もなく見えたり。桔梗染の薄物を、さもしどけなく引纒ひ、腰引結へる紅も、ちらめくばかりに乳の下まで、胸もあらはに押寛け、色いと白う肥太り、髪ふさやかに結上げて、額衿元淸らに見え、目元口元愛敬づき、いと華やかなる形にて、惡き所はあらざれど、心靜にもてなさば、猶も懐しく見ゆべきと、是を眞の村荻とは、夢にも知らず光氏は、心の中に思しけり。碁をうち果てて此所はだめ、そこにも一目と言ふさへも、村荻はせはしなく、こぼす碁石を空衣は、取上げて押靜め、「まづ待ち給へ、そこは繼手、こゝのわたりは劫にこそ」ト言ふをも更に聞入れず、「否々、今度も私が負、此隅の地があなたは大きい。一、二、三、四、五、六」ト指を折りつゝ數ふる樣、手鞠の唄に異ならず、蓮葉に見えてわが戀ふる、鮮かならぬ姿こそ、却つてゆかしと光氏は、ひとり心に打笑まれ、猶目を止めて見たまひぬ。村荻は賑はしく、愛敬づきたるわが顔を、己もよしと思へる樣に、聲を放ちて打笑ひ、「これまだ此所にもはまが

君の是ぎりに、思切り給ふやう、事を分け理を盡し、書かれしならんと思ひし故、喜びて歸りしが、さては操を捨て給ふや。さある時には今までの、恩を仇にて喜代之助へ、此身も等しく義理立たずと、思案にくるゝを光氏は、夫とも更に心附かず、はや疾く〳〵と夕闇の、道たど〳〵しきその紛れ、「君吉來れ」ト乘物へ、手をとり無理に押入れて、其身も共に乘移り、門など鎖さぬ其前にと、急がし立てて行く程なく、仁木の館に至りしかば、「姉上へ用あつて、罷通り候」ト君吉に乘物の、内より言はせ給ふにぞ、幼き者の事なれば、門番は禮儀もせず、咎めもやらでやす〳〵と、庭口より忍入り、軈て駕籠より下立ちたまひ、「我は是にてしらせをまたん、其方は密に計へ」ト仰に君吉せん方なく、切戸を叩けば夏野は内より、「誰そ」ト答へて立出づるに、此方はさらぬ風情して、「この熱いのに緣先の、障子は何故に閉したのぢや」トといふ顏夏野は打眺め、「是は〳〵君吉樣、思懸ない所からお出。姉君樣が最前より、碁をお打ち遊ばすに、燈火へ風が當ると、夫で此所をば閉めました」ト言ひつゝ手にもつ燈籠に、道を照せば君吉は、直に座敷へ打通り、窺ひ見れば空衣と、村荻二人盤に對ひ、餘念もなげなる其風情、光氏君のいでの樣子、夫と知らさん便もなく、折こそあらめと次の間に、身を隱してぞ居たりける。光氏は今夏野が、言ひつる事を仄に聞き、碁を打つ態を見ばやとおぼし、切戸は其儘鎖さゞれ

ておいで成されたれど、否それは娘ぢやと、さすがにあなたもおつしやりかね、ひよんな事で遣りつ返しつ、私が目に懸らぬと、とんと果はつかぬ處」ト言ひつゝ又も文繰返し、「どうも合點のゆかぬのは、いつぞやつれなうもてなしたと、お恨みの數々は、此身に覺は無い事ながら、村荻といふ名のあれば、紛るゝ事はよもあらじ。光る君と世にうたふ、若君よりの御文とは、身の冥加に叶ひし事」ト、御返事筆ばやに、書認むれば夏野は驚き、去りし夜すがら空衣が、閨の事ども微聞けば、夫は正しく人違ひと、思へど目の前村荻が、喜ぶ樣に斯くぞとは、言出で難くためらふうち、御返事書きをはり、君吉呼びて手に渡せば、姉の文ぞと心得て、急がはしげに赤松の、館へこそは歸りけれ。

光氏の元服の、儀式はさる年既に濟みぬ、さるゆゑに此度は、人にも知らさず前髮を、密に拂はせ姿形も、下士の樣に出立ち、ある時かの君吉を、ほとり近く招き給ひ、「いつぞや其方の持歸りし、村荻が返事には、兄川次郎が室町へ、宿直の留守に忍び來よ、後には女どちなれば、語らふにいと易しと、言おこせし故いつぞはと、待わたりしが今宵こそ、かの川次郎が室町に、侍ふ由を聞置きたれ、汝が常の乘物へ、我をも乘せて忍ばせよ。はや前髮をも取りたれば、さまで人目に立ちはせじ」ト仰にはつと君吉は、心の底に打驚き、姉空衣が返事には、若

此お文、見る人なしとて返せとは、夫はあなたが御無體な」ト泣かぬばかりに言ひければ、道理に責められ空衣は、何と返さん詞もなく、奥の一間へ逃入るを、急きにせいて追行く君吉。「やれ待ち給へ」ト村荻が、障子閉切り立塞がり、「いつにない顔赧めて、母様となに諍ひ、様子を聞かせて下さんせ」ト言ひつゝ落散る文取上げ、「此文體は慥に艶書、幼い人がこんな事、取次するものでは無い」ト押宥むる村荻の、詞も更に耳へ入らず、「様子あつて姉上へ、光氏君より下さる御文、それ返してたまはれ」ト取らんとするを村萩は、袖に隠してにつこと笑ひ、「母上のお返事は、私が貰うて上げる程に、おまへはまづ小座敷に、それまで待つてござんせ」ト言ふのは合點ゆかねども、押返して問はれもせず、吐息と共に君吉は、其座を立ちて次へ行く。村荻あたり見廻して、料紙硯を取出し、墨すり流すその所へ、何心なく來かゝる夏野、「お熱いのに何へのお文、もう黄昏でお暗からう、お手燭を上げませう」ト聲懸けられて振返り、「久しう居やる其方には、何も隠す事はない。君吉様が此のお文を、持つてござつて母様へ、上げやう、いゝや取るまいと、爭うてござる様子を、遠目に見た故お二人の、おつしやる事は聞えねど、何した譯かとお止め申し、取上げてつく〴〵見れば、あて名の所へ散し書、風に靡かぬ村荻の、許へとあるは光氏様より、私の所へ來たお文。年の行かぬあのお子が、取違へて母様へ、持つ

村荻を思初め、閨まで忍び行きたれども、只つれなくのみもてなされ、今に思ひ絶えがした。此文を密に渡し、返事を乞ひて來るべし。ゆめ〱人にな漏らしそ」ト仰に君吉訝しく、「その村荻と宣ふは、喜代之助が娘なるが、如何なる隙にか御目にとまり」ト言懸くるを打消して、「いかに年が行かぬとて、はや其方は忘れしか。盃代りに與へし枇杷は、村荻が我に得させしにて、其時姉と呼びたる故、始めの程は汝をも、喜代之助が末の子と、思ひ違へを村荻が、言解きしにあらざるや」ト仰を聞いて君吉は、其夜姉の空衣が、村荻なりと詐りしを、思出しは出しながら、あからさまにも言ひ難く、せん方なけ首御前をたち、仁木の館へ立歸り、姉空衣の部屋に入り、ありし事ども詳しく語り、件の御文差出せば、空衣は淺ましさに、涙溢れて君吉が、思はん事も恥かしく、我身のかげに御文を、打展けて讀み了り、元の如くに卷納め、「かゝる文は見る人なしと、申上げてはや再び、館へ歸る事なかれ」ト言捨てて立たんとする、姉の裳を引止め、「現在夫のある御身へ、道ならぬお文使は、何ほう苦しけれど、方違に御出の夜、村荻と名を詐りし、夫を眞と思召す、君に御無理は少しもない。とはいへ貞女の道を背き、お返事あれとの事にはあらず、何卒君の是かぎりに、思召切り給ふ、御思案なされて下されかし。年も行かぬ私を、召入れられて光氏君、いと懷しく語らひ給ひ、仰を受けたる

四編上

夫よりも光氏は、嵯峨の館へ移りしが、二葉の上より此程は、絶えて渡り給はぬ由を、文にて恨み聞えければ、心には染まねども、父の許せし妻なれば、流石に捨ても置き難く、又赤松の館へ赴き、四五日此所におはせしが、中川の宿にて、村荻と思ひ違へ、既に閨まで忍び行きし、空衣が事をのみ、思ひ忘るゝ隙もなく、人知らず胸を痛め、言傳やらん便なきを、恨み歎ちて居給ふ處へ、仁木川次郎は君吉を、誘ひて御前へ出で、「嵯峨の御館へ參りし處、君は是にと承はり、直さま推參致せしは、是に居る幼き者を、差上げたき故にてあり。父喜代之助は今もつて、歸宅致さず候らへども、有難き仰の趣、母空衣が承はり、彼には實の弟の事、夫に申す迄もなく、直さまお側へ差置かれ、お役には立たずとも、せめてはお茶の通ひなりと、勤めさせたき願の段、くれぐ〵申聞けたり」ト事細やかに空衣が、心の程を聞えければ、是さいはひの媒と、光氏密に打喜び、川次郎には暇を賜はり、かの君吉は是よりして、傍を放ち給はず、我子の如くいたはりつゝ、光氏密に宣ふやう、「汝に言ふのも恥かしけれど、我方違に宿りし其夜、

頓食の味もなく、夜延仕事に埋火の、灰は虚空に散らしても、更に詞の花も咲かず、わるい處が殿樣の、御目にはいつて叱られても、しやうこりもなく是で四編目、矢鱈闇くも雲がくれ、それで一期さかえるまで、年々春毎編を次ぐべし。

文政十四年辛卯孟春　　柳亭種彦記

修紫田舎源氏第四編序

源氏物語に數本あり、俊房本を黄表紙ととなへ、定家本を靑表紙といふ。黄とはかゝる草雙子を、今おしなべて如此よべり。ふるくは赤本黒本ありて、其因なきにあらず。桐壺の發語に曰く、いづれのおほん時にか。花咲かせの書だしに、昔々あつたとさ。頗る其意の似かよひたり。こかァどゥこだ、かち〳〵山、火打に緣の石山にて、式部が書きし、昔ばなし、今に殘るは湖水にうつる、月の兎の大手がら。それは土船、此は浮舟。鼠の娶入は廿日の前、猫の仲人は女三の宮。いぬきが迯しゝ舌切雀、末摘花の古葛籠、化物の出る御物怪、見越入道明石の入道、慳貪ばゝア惡后、桃園式部桃太郞。横に行くのが蟹合戰、横におすのが車あらそひ、牛の屎にて辷りやせん。されば彼物語を大綱となし、今様の繪雙子に、うつさばなどかうつらざらんと、近江の君の口拍手、舌頓しやべりて予獨、日本一の黍團子、いつぱい喰はせた狸汁、うまい趣向とおもへども、折櫃こものはさておきて、

移れる夫までは、まづ愼まん」トしづ〳〵と、庭へ下立つ御けはひ。空衣は心せき、帶箱よりしめ替を、手に任せて引廻し、座敷へ出づればさつと明るく、はや引渡す山かづら、人の見んのを憚りて、切戸口まで御見送り、「御機嫌よう」ト見合す顔、はたと柴折戸たて切るにぞ、光氏君はうつとりと、隔つる關の心地しつ、光をさまる有明の、月は眞白に影殘り、なか〳〵をかしき曙も、思ひある身は心も留らず、返り見がちに出で給ひぬ。

此三編は末々の、趣向を設けんとての作なれば、讀み給ふに煩はしく、いさゝか興の無かりしなるべし。まづ馬之丞の物語は、花の宴にて說分くべし。赤松太郎の物語は、明石の巻を綴らん設なり。又小烏丸の盜賊の事は、此次夕顔の巻に詳しく述べたれば、此編を見給ひし人、をかしからずとて捨て給はず、末々を求め給はらん事を、謹みて願ふになん。

も鳴きつるに、いつまで物を思はす」ト寄添ひ給へば空衣は、もし此樣の喜代之助の、夢にや見んと恐しく、所詮君を詐りし、此身の咎を書殘し、夫の歸りし其後に、生害せんと心を定め、衣紋繕ひきつと居直り、「數ならぬ身に侍れど、まこと御心懸け給はゞ、御側へ進らせよと、父に仰を賜はる筈、亂りがはしき此閨へ、輕々しきお忍びは、更に眞と思はれじ」ト詞けはひもたをやかに、强き心を持ちたれば、風にしなへる弱竹の、折りも折られず光氏君、「兄川次郎は承引なれど、父に言はぬはわが誤。さはさりながら珍しき、つらき心の女かな」ト言捨てて此方を見返り、「誰かある著換もて」ト仰に夏野が恭しく、廣蓋を持出づれば、空衣さつと顏赧らめ、彼が何とか思ふらんと、流るゝまでに汗になり、惱ましげなる其風情。屏風の外に川次郎、そろ〳〵と窺ひ寄り、著換はおつて解捨てし、光氏が帶盜取り、廊下の隈へぞ隱れ居る。とも知らずして腰元夏野、御帶をさゝげんと、見れども〳〵かいくれなし。折から鷄もしば〳〵鳴き、「御乘物を舁入れよ」ト、庭前に聲すれば、心慌てて新しく、調じ置きたる喜代之助が、帶を持出で御代に、渡し申せば引結び、立出で給ふに空衣も、寢みだれ姿取つくろひ、衣桁の帶を取らんとするに、いかゞしけん是もなし。重ね〴〵に訝しく、尋ぬる中に君吉誘ひ、奥より立出る川次郎、「斯樣に急がせ給はずと、今朝は御酒一献」トすゝめ申せば會釋あり、「嵯峨へ

ト息の下にぞ答へける。光氏は詐りて、彼が心をひき見んと、猶傍を去り給はず、「人違へとは怨めしゝ。御身を某見初しは、山名三郎統清より、遙以前の事なるが、はや統清と契を結び、夫故つれなくもてなすや。さらば包まず言知らせよ、密に頼む事のあり。頭ふるのはさにてもなきか。川次郎が樣子を見れば、汝の母の空衣も、此邊に臥したるならんが、たとへ母が聞いたりとも、主なき女に其主が、慕ひ寄るのを強ちに、不義者なりとも叱るまじ。さァ〳〵何ぢや」ト背うち叩き、いよ〳〵打とけ給ふにぞ、空衣心に思ふ樣、今更眞は喜代之助が、女房なりと言はんには、主を詐りうき恥を、見せしなんどと御怒、此身ばかりか義理のある、川次郎まで憂目や見ん、又村荻になり果せ、忍男を持ちたりと、此場を遁るゝ其時は、繼しき娘に濡衣を、著するも佗しと一筋に、□つらくもてなし參らせなば、君の恨を蒙つて、夫とはなしに我夫へ、御憎しみぞ懸るべき、とあつて操は破られず、こは何とせん悲しやと、千々に胸をぞ碎きける。あゝ空衣が身の災難、もとは主君を戲れに、詐りしより起りしにて、よき世の人の戒なり。腰元夏野は先により、此所へ來合せしが、思ひも寄らぬ事どもにて、かなぐり退けんも若君なり、よしさなくとも此事を、人に知らさんうたてさに、息を呑んでぞ忍びゐる。空衣が打泣くさま、あはれと見れど光氏は、容しもやらで解けかるゝ、帶も結ばず肘枕、「最早鷄

閨もる火影に御顔を、見上げて其儘平伏しつゝ「夢なら覺めよ」トつぶやき居る。光氏は柔かに、「さはさりながら賢きも、愚なるのも迷ふは戀、われも最前其方へ、妄に手折らじなんどとて、誓を立てしも打忘れ、村荻を思初め、夫故是まで忍びたり。若しも御目に留りなば、家の面目此上なしと、汝の願は叶ひしぞ。曉方には迎に來よ」ト言捨て障子押開き、立入り給ふ閨のうち。夫こそ母の空衣と、今更言はん樣もなく、妬まし顔にて、「有難き仕合なり」とぞ平伏す。光氏は只管に、村荻と思違へ、さまで憚る氣色もなく、櫛笥鏡臺取亂せし、其中を分入り給へば、夜著打被ぎて只一人、ちひさやかにぞ臥しゐたる。上なる衣を押やるまで、湯浴なして腰元の、來れるならんと思ふから、目もさだかには覺めやらず。光氏さすが聲を潛め、「召し給ふに從ひて、夏野がしげりに參りたり。丈高く生延びしは、まだ花咲かぬ男郎花、詠めはなくとも村荻の、根締に床へ活け給へ」ト聞いて空衣心地惑ひ、こは何とせん悲しやと、物におびゆる心地して、あつとばかりに起上る、面に夜著の打おほひ、音にも立てず戰ひ居る。光氏近くすり寄つて、「かく打つけに深からぬ、心の程と思されんが、年頃思ひわたりたる、心の中を知らせんとて、態とこの家へ方違、かゝる逢瀬を待ちたるは、淺くはあらじ」トおにがみも、荒立つまじき御けはひ。さすがに爰に人ありと、言罵らんもはしたなく、「人違へにこそ侍らめ」

こを退き音も無し。光氏心に打點き、さては娘の村荻は、障子の中へ筋かひに、臥したるならんと隔の杉戸、まづ試みに開け給へば、彼方よりは掛金を、さょずやきりょと開きけり。心安しと忍寄る。夫とは夢にも知らばこそ、道に背ける川次郎、義理ある母の空衣に、心を懸けて口説けども、假にも我子と呼ぶ者に、いかでか枕を交すべき、言懲されても懲ずまに、父の留守なる其上に、今宵の騒をさいはひと、足音忍ぶ廊下口、光氏と袖すり合ひ、暗き火影にありながら、母の好みの湯帷子、白地に紺の大形を、夫と認めて空衣が、手を清めにや出でつらんと、心に喜び手をとれば、いと細やかにて柔かきを、いかんぞ男と思ふべき、「母上今宵はわが恥を、申して聞かせまるらせん。己元來捨子にて、此家へ拾取られしなれば、父といふのも名のみなり、其上に親人は、室町御所にて寶劍を、奪取られて切腹なし、果て給はねばならぬ御身。まだいと若き母上の、後家たて給はん夫よりも、血筋も無ければ障もなき、この川次郎と末長く添遂げ給へ」トしなだれそばへ、さま〲に言寄るを、光氏をかしと思召し、物をも更に宣はず、とらへたる手を其儘に、空衣が臥床ちかく、誘ひ給へば川次郎、偖こそ母の心とけ、今宵は首尾を仕果せしと、喜ぶ足も地につかず、よろめき來るを突放ち、「母は義理ある中なれば、ひとつ家には住みながら、親しく詞も交さじと、誰やら最前言ひけるが」ト仰にはつと打驚き、

村荻を姉々と、常から申し習はして、なア君吉」ト言知らせば、元より賢き生ゆゑ、姉の最前振袖を、著換ながらの物語、思出して手をつかへ、「わたくし事は土橋政長が末の忰、父政長病死致し、寄邊なく罷成り、是へ嫁したる姉を便り、父とも兄とも喜代之助を、力に成長仕る」トおとなしやかに述べければ、光氏殆ど感じ入り、「そのしとやかなる詞つき、かほばせまでも村荻に、能く似かよひて嬋娟なるは、假にも姉と呼びたる緣か。喜代之助が戻りなば、この君吉を貰ひうけ、身近へ使ふ人にせん。盃代り」ト御前の菓物、手づから取つて賜はれば、はつとばかりに三人は、有難涙に暮れにけり。折から響くねよとの鐘、御供の人々は、渡殿より流れ出づる、泉にのぞきて酒酌交し、皆醉進みて正體なし。光氏も其座敷へ、直に假臥し給へば、空衣は夏野をよび、御寢巻にと新しき、湯帷子を著せまゐらせ、御前を下りて靜まりぬ。光氏はとげても寢られず、暫くあつて目を覺し、北の障子の彼方にて、人のけはひのなしけるを、やをら起きて立聞き給へば、先に見えたる君吉が、聲と覺しく密やかに、「何所にお在しますぞ」ト問ふ。「姉は此所へ臥したるが、只一人にて物淋し。夏野は君のお側にて、しとゞ汗に濡れたりとて、湯を浴ひに行きたるが、是へ來て諸共に、ねよと早う傳へよ」ト眠たげに言捨てて、夜の物引被ぎ、顔引入れつる聲聞ゆ。君吉は「あな暗し」ト、燈火をやかゝげけん、そ

は、女の部屋と思しくて、若き聲ども憎からず。さすがに忍びて笑ふ體、覗き給へど透間はなし。さゞめき言ふを何事と、耳をとゞめて聞き給へば、皆みづからの身の上なり。枯れたる聲のをかしきにて、「まだいと若き御身にて、お年の長けたる二葉の上、御本妻に定まりて、嘸お氣詰」ト言ふもあり、「さはさりながら折々の、お忍び歩きはありなん」ト、寬ぎがましく語るにぞ、かゝる序に藤の方と、あられぬ浮名や漏さんと、胸塞がりて又元の、座敷へ歸らせ給ふ處へ、衣の音などさら〳〵と、立出づる空衣は、振袖姿しとやかに、「わたくし事は村荻とて、喜代之助が娘にはんべるなり。折角の御入に、御精進と承はり、外に上げます品もなく、麁末なれども御果物、お取り遊ばし下さりませ」ト愛敬づきたるかほばせを、光氏つく〴〵打眺め、「聞きしに優る嬋妍さ、喜代之助も嘸かし祕藏。今宵はふしぎの對面」ト是を始めに物語、し給ふ中に空衣は、「夏野々々」ト腰元を、呼出して少し退き、「お暑からうにお後から、若君をあふいでるや」ト團扇を取つて差出せば、次間より立出る君吉、「姉樣夫は私に、仰付られ下さりませ」ト言はれてはつと空衣も、川次郎も手に冷汗。光氏何の氣も附かず、「やう〳〵年は十二三、可愛らしいうまれつき。喜代之助は何も〳〵、よい子を持つて羨ましい」ト仰を空衣打紛らし、「此者は君吉とて、母空衣が末の弟、まづ私には叔父ながら、年頃が似合はぬ故、この

は、清水へ籠にゆき、明日ならでは歸るまい」ト聞いて驚く川次郎、「それ腰元の夏野は居るか、妹の迎ひに、早う〳〵」ト急立つを母は押止め、「折角の娘の願ごめ、妨げんも心なし。殊にはもう黄昏時、今から人を走らせても、御出の間には合ひ兼る。世の人毎に光る君と、音に聞えし御有樣、見奉つるにさいはひな、村荻が振袖を、私が著替て眉をも造り、娘ぢやと欺つて、御通ひを勤むる中は、其方も眞の妹の樣に、詞を下げて言うたがよい」ト聞いて大きに打喜び、「成程〳〵、あなたをも妹をも、お見知なければ、夫こそは最屈竟、序の事に御髷をも、直して若やぐ母上の、お顔を見るのが樂みな」ト其用意をぞなしたりける。程なく庭の切戸より、緣先へ駕舁入れさせ、立出でたまふ光氏君。川次郎恐る〳〵、御迎に罷出で、常の臥房に程近き、東表の座敷を拂ひ、是へ移しまゐらすれば、光氏は機嫌よく、のどやかに眺め給ふに、泉水の水潔く、螢繁く飛まがひ、田舍めきたる柴垣して、前栽も何となく、心を留めて植渡し、風いと涼しく吹さそひ、そこはかとなき蟲の聲、いと風情ある住家なり。川次郎は自ら立つて、燈籠を數多かけそへ、灯火を赤くかゝげ、「御盃はや持てよ」ト急がし立つるを止め給ひ、「神の祟を恐れ愼み、方違の宿なれば、今宵は酒も飲むまじきに、只打捨てて」ト庭へ下り、彼方此方を見給ふに、西に向きたる小座敷に、火を點したるすき影の、障子の紙より漏りたる

長が、中の娘に候なり。父の許へ嫁したるは、漸く二年ばかり前、同じ程なる年頃にて、似合しからず候」ト嘲り笑ふを猜し給ひ、「汝はよき母持ちたるよな、世は定なき其中にも、實にも女の過世ほど、浮べるものは又あらじ。兄義尙が側室にもと、願ひし娘を年ふけし、喜代之助へは送りしならん。定めて彼を不便と思ひ、主人の如くに汝が父は、傅くならん」ト戲れ給へば川次郎、吐息をつき、「其事にて候なり、年老いて後色好みの、名や立てられんと存ずれども、父を諫めん折もなく、世の人口の恐しさに、ひとつ家には住みながら、母空衣と某は、親しく物だに申さず」トわが邪曲を押隱す、詞と知らず光氏は、わが身の上と聞違へ、少し面を赧らめ給ひ、「喜代之助が留守なれば、我も今宵空衣に、對面せんは憚あり、村荻は主なき花、とはいへ猥に手折はせじ、茶の通ひに」ト戲れ給へば、恐入つて畏り、「不束なる妹ながら、もしも御目に留りなば、願うてもなき家の面目。まづ御先へ罷越し、庭の塵をも拂はせん」ト暇申して退出す。

川次郎は急がはしく己が館へ馳歸り、母に對つて言ひけるは、「方違に光氏君、今宵此家へ御一宿、早御出に間もあるまじ。父上の御留守ゆゑ、あなたへは憚りて、御對面なきとの事。お茶の通ひは村荻に、申付けよと直の仰」ト立騷げば母空衣、「思ひも懸けぬ俄の事、折惡く村荻

難き御意ながら、父喜代之助は四五日前、有馬へ湯治に罷越し、後には若き女子ども、殊にはせばき所といひ、無禮の事も候はん」ト辭するを容す氣色なく、「その人近き所こそ、却つて嬉しく思ふなれ、女遠き旅寢には、物恐ろしき心地やせん。たゞ其屏風の後にて、一夜の夢を結びたし。してその若き女子とは、誰々の事をか言ふ」ト尋ね給へば川次郎、「されば候、村荻とて、一人の妹を持ちたるが、しどけなき生立ゆゑ、君の渡らせ給ひなば、つゝましけなく立騒がん。其上母の空衣も、年いと若く候へば、召使ふ腰元婢、主人を遊相手と思ひ、取締もなき有樣を、見せまゐらすも恐あり」ト頭を疊にすり附くれば、光氏少し打案じ、「その村荻とやらんには、山名宗全の一子三郎統清、心を懸けしと聞きたるが、未だ緣をば結ばずや」ト問ひ給へば訝しげに、「かゝる事を何人か、早くも聞え上げつらん。仰の如く三郎統清、嵐山の花見の時、妹村荻を見初しとて、妻にくれよと度々の使。されども管領晉川と、その中惡き宗全を、緣者に持たんは憚ありと、父喜代之助今以て、承引は仕らず」ト川次郎が詞のはし〴〵、光氏とつくと胸に納め、「思ひ懸なき障にて、統清は嘸本意無からん。まづ夫は差置きて、汝が母をいと若しと、言ひつるもまた訝しゝ。空衣とか呼びたるは、土橋政長の娘にて、眉目〃しき生ゆゑ、兄義尙へ先つ年、奉公を望みしが、もし其女にはあらざるか」ト聲を潛めて宣へば、「仰の如く政

人も僅にやつし、賤が伏家、葎の宿、所定めず浮れ歩き、何とぞ詮議し出さん」ト懇に宣へば、喜代之助涙を拂ひ、「仰に隨ひ切腹は、思ひ止まり候べし。君に辛苦をかけ申すも、元はといへばわが過失。まづ明日より有馬へ湯治に、赴きしと申觸し、洛外近き田舍あたりを、尋ね廻りて若し夫と、思しき事の候はゞ、早速注進仕らん」ト差添鞘にぞ納めける。光氏は打點き、「所詮今夜の騷動は、包みても包み難し。其箱のあるこそさいはひ、我似つこらしき劍を求め、寶藏へ納め置き、曲者は入りしかど、寶劍は恙なしと、一たん人の騷がしきを、靜めて後に喜代之助は、妻子を具して立退くべし。惟吉も此事を、必ず人に漏すな」ト口がためして寶劍の、箱取納め入り給ふ。

又の日に光氏は、仁木喜代之助の悴、川次郎を近く招き、「父上嵯峨に工を遣し、間島の館を造られしが、事みてざる中後室は、空しき煙と立昇り、今空館と成つたる間、我彼所を居宅にせんと、心構は調ひたれど、今年はこの室町より、金神に當れる故、假に一夜他所へ移り、夫より嵯峨へ赴けよと、博士の詞も捨て難く、その方違は何れにせんと、夫彼思ひ廻らすに、汝が父の構へたる、中川とやらんの家は、水堰入れて涼しき由、駕ながら庭前へ、舁入れさせんも心やすく、いと好き所と聞及ぶ。今宵一夜を明させよ」ト聞いてはつと手をつかへ、「コハ有

へ惟吉の、しらせに光氏馳來り、「夫に居るは仁木よな、樣子如何に」ト問ひ給へば、はつとばかりに畏り、「小烏丸の名劔を、奪取らんと御寶藏へ、忍込んだる曲者の、顏は見えねどたしかに女、打取らんは易けれど、搦めて詮議仕らんと存じの外に、手練の曲者、此片袖のみ引斷り、取逃しては候へど、某に見咎められ、叶はじとや思ひけん、寶劔は箱のまゝ、これ此所に捨置きたり」ト聞いて光氏眉を顰め、「父兄の留守を知り、女の身にて寶藏へ、忍込んだる大膽不敵。さほどの者が盗みし寶劔、捨てて迯げん故はなし。見咎められし其時はと、はや寶劔は取隱し、箱の中には有るまじ」ト宣ふ詞に驚く仁木、件の箱の紐とく〳〵、打返し〳〵、「仰の通り是は空箱。なむ三寶」ト差添を拔放して覺悟の體。「汝は何で切腹する」「仰までも候はず、御寶藏を守護の拙者」「腹切れば在所が知れるか、周章ずと思案致せ」ト言ひつゝ後を見返りて、「惟吉も來てをるか、その手燭是へもて」トちぎれし片袖取上げて、「檜扇の散し模樣、摺箔したる昔帷子うゝ」ト何やら心に點き、懷へしつかと納め、「コレ仁木、汝も兼て知る如く、足利の繼目には、無くてかなはぬ小烏丸の、あの御劍、兄義尙に足利の、家督を繼がさぬその爲に、此光氏が隱せしと、疑はれんも影護し。汝は本國伊豫國へ、病氣に依つて引籠ると、願を立てて諸國を廻り、寶劔の在所を尋ねよ。我は好色者なりと、浮名の立ちしも却つて僥倖、供

寶藏へ忍入り、名劍の箱盜取り、人は白地の手拭に、顏を隱して立出る處へ、通り合せし夜廻が、怪しと見てとり合圖の柏子木。すは事こそと其處此處より、馳集りし數多の組子、脱さじやらじと取圍む。折から雨やみ雲散りて、仄に照す月あかり、顏はさだかに見えねども、いと尋常なるつまはづれ、摺銷したる帷子は、慥に女と覺えたり。シヤ何程の事あらん、搦め取れやと一時に、かゝる組子を右左、とつては投退け踏飛し、女に似合はぬ手練の早業。「油斷するな」ト聲をかけ、突棒刺股打振り〳〵、捫つて取らんと突出せば、身を潛めて掻くゞり、裾を拂へば跳越え、脇差ひらりと拔かざし、切立てられて組子ども、いひがひなくも皆ちり〴〵、迯ぐるを追はず白刃を納め、につこと笑つて悠々と、行く先塞ぐは今宵の番、仁木喜代之助といふ者なり。女はぢろりと打見やり、帶引上げて二足三足、戻るをつけいる喜代之助、足に觸りし突棒を、蹶上げてひらりと打かくる。女も心得身をかはし、行かんとせしが突棒に、帷子の袖打絡はれ、思はず後へたぢ〳〵〳〵。仁木は其儘捻伏んと、猶も撓まず引く力、帷子の袖さらりとさけ、尻居にはつたと倒るれば、女は前へよろ〳〵〳〵、よろめくはづみに寶劍の、箱をからりと取落し、取らんとするを透さぬ仁木、手取にせんと組付けば、女もしれものさそくをふみ、蝶鳥なんどの飛ぶ如く、身を跳らせて高塀を、ひらりと越えてぞ失せたりける。かゝる處

三編　下

光氏閨に入りながら、眠りもやらず思案にくれ、手を拱きてひとり言、「今石堂の物語、通ひし女の名は言はねど、琵琶之助の娘とあれば、富徽の前の血筋ある、あの桂樹に疑なし。富徽の前は去頃より、彼を深く愛せられ、詞に出し給はねど、兄義尙に娶さん、御心なりとはとつく猜し、より〱心をつけ見るに、桂樹が身の行、なか〱もつて足利の、嫁と呼ぶべき者にあらず。案に違はず石堂と、密會なしたるいたづら女。あからさまに言ふ時は、義理ある母を譏すに似たり、言はざる時は大切な、兄を浮世の物笑ひ。あゝいかにせん〱」ト歎息なして居給ふ處へ、惟吉慌て馳來り、「只今御前を下りし處、表の方騒がしく、鎗よ太刀よと犇く聲聲、コハ何事と馳出づれば、御庭前の寶藏へ、曲者忍び入つたりとて、宿直の士上を下、其騒動大方ならず。少しも早く告げ申さんと、詳しき事は見止めず」ト大息ついて訴ふれば、光氏はつと打驚き、枕刀を取るより早く、彼所へ馳行き給ひけり。其夜は義正義尙親子、禁裏宿直の留守なりしが、斯くと知つてや忍びの曲者、篠を束ねて降る雨の、暗きをさいはひ庭前の、

等と等しき御幕下、青葉琵琶之助なり」ト語るに態と光氏は、虚眠して居給ひけり。高直は急がはしく、馬之丞の袖をひき、御次へ辷り出で、「疎忽に物を言ひ給ふな、琵琶之助の妻司は、富徽の前の御妹、貴殿の通ひし桂樹は、若君達とはおいとこ同士、いぬる年富徽の前、その桂樹を召させられ、舞を御覧遊ばされ、留置き給はん御心なれど、言はるゝ如きの氣質の娘、御殿に居らんは氣づまりとて、父の館へ歸りしなり。此頃は又奥殿へ、逗留なしてありと聞く、重ねて噂仕給ふな」ト言懲されて馬之丞、額の汗を押拭ひ、「あゝ知らざりし〳〵」ト後悔してこそ居たりけれ。光氏は目を打開き、「石堂の話を聞さし、思はずとろ〳〵まどろみたり。惟吉は若年ゆゑ、かゝる筋の物語は、をかしとも思ふまじ、さぞ眠からん、はや行て寐よ。石堂赤松あす逢はん」ト、閨へぞ入らせ給ひける。

でんとするを、娘はずんと立上り、わがむなづくしを確と取り、涙と共に恨の數々〱、繰返し繰返し、詞も淀まず言立てられ、某もあぐみ果て、漸く其手を振放し、娘に似合はず雛の膳の、淺葱膾や喰ひたりけん、息さへかをりて堪へ難し、その臭の失せたる時、又こそ來めと嘲る程に、娘はます〱憤り、又起上つてむさぶり附く、あらうるさやと有合ふ花の、枝押取つて打懸れば、伏籠を持つてはつしと受止め、組んづほぐれつする中に、是御覽ぜよ某が、指先を喰切つたり。その痛さ堪へ難けれど、たゞに止まんも口惜く、わが指は先屈り、蝮指とか言ふなれば、

　蛇喰ふと聞けば恐し雉子の聲

斯く言懸けしに娘も打泣きて、

　早蕨の手をわかるゝや

ト言さしながら、下の五文字を案ずる中に迯歸り、其後いかになりしか知らず。酒だに過せばつながぬ船の、浮れ心となるとも知らず、心を盡せしわが愚さ。赤松殿が宗入を、嬲つて遊び給ひしこそ、是には遙にましならめ。武士の娘に似合はぬ蓮葉さ、眞に興は醒めたれど、そのかほばせの麗しさは、今も目前にあるが如し」ト言ひかけて聲を潛め、「その娘の父と言ふは、某





るにはいと易し。馴るゝに從ひ此娘、年に似合はぬいたづら者、舞子遊女の身持にて、まだ其上に悋氣強く、恨みかこつの其外には、絶えてをかしき節も無く、後には夫がうるさくなり、妻に娶らん心も失せしを、彼も夫を猜しけん、表向より媒妁を、頼みて親へ言入れよと、逢ふ度々に催す程に、某の言ひけるは、忍びて語ふ中だにも、かくまで妬み腹立つが、御身の癖にてあるなれば、呼迎へて添ふ時は、いかばかりかと推量られ、夫が今より恐しと、聞きも果てずに目をいらゝげ、悋氣は女の常にして、もとは男を大切と、思ふ誠にはんべるに、夫を厭ひ給ふこそ、あら心得ねといきまきつゝ、果は互に打腹立ち、枕もとらずに別れしよりは、娘は絶えて文をもおこさず、此方よりも音づれず、やゝ日數も押移り、彌生はじめの事なりしが、櫻狩の歸りがけ、花の枝を打かたげ、微醉紛れに娘の事を、思出してゆかしうなり、烏丸の屋敷へ赴き、兼て覺えし忍路より、立入りて窺ふに、伏籠になのきを薫らせて、人待顔の體なれば、さてはいまだにわが事を、忘れざりしか可愛やと、やをら障子を押開けば、娘は一人短檠を、膝の邊に近附けて、文を書きて居たりしが、我を尻目に打見やり、來ませしかとも言ひやらで、そしらぬ風情に墨摺流し、案じ姿の横顔は、常よりも猶麗しく、少し憎さも立添ひて、さいつ頃も言ひたる如く、悋氣をだに愼まば、直に館へ呼迎へん、さもなくば是限りぞと言捨てて、出

外、うつて變りし御戯、拙者の功名手柄の程、さらばお話し申上げん。高直殿も聞置かれ、重ねておくれを取り給ふな。去年水無月祇園會の、同じ棧敷に年の頃、十六ばかりと思しき娘、形風俗の蓮葉さを、白拍子かとよく見れば、腰元婢附從ふ、女は殘らず屋敷風、まづその娘のとりまはし、男を見ても恥らはず、少しざればみ過ぎたれど、嬋娟にして愛敬あり、觸らば落ちん萩の露、拾はゞ消えん小笹の霰、雪の肌もあらはなる、薄物單衣に紅を、裳にけだせし立姿、某が魂は、はや振袖の脇あけより、かの懷へ乘入りしか、藻脱の空の心地して、茫然としてゐたりしが、斯くては果てじと其娘が、連來りし腰元の、賢氣なるに物言ひかけ、酒をすゝめて親み寄り、心の中を言知らせ、祇園祭の番附の、傍にありしを取り、其裏へ山鉾の、名を言撰してさら〱と、墨つき仄に書いたりしが、始の程は忘れたり、見初し緣の行者山、龍車に對ふかまきり山、所詮及ばぬ戀山と、ことわり山をも知りながら、身は船鉾のこがれより、今更思ひ絶えがたし、よしや主ある花盜人と、我に浮名の立たば立て、あし刈山の惡からぬ、御返りを待つに候、あゝいつか西へ傾く月鉾を歎き、未明に鳴かぬ鷄鉾を、恨む逢瀬もあれかしなど、いと〱拙きもぢり口の、文を送り候が、ふしぎにも此戀叶ひ、夫より折々忍行く、娘の住居は烏丸、棟門高き屋敷なるが、直に庭への通ひ路、小き門を開置きて、忍寄

て宗入大いに喜び、「そも〳〵娘朝霧は、顔麗しきのみにもあらず、手は拙からず走書、織縫ふ業は龍田姫、七夕妻にもつゆ劣らず、定めて御邊は大内の、御侍にさぶらふべし、娘が器量の叡聞に、達せし段は出入の、者より豫て聞置きたり、女御更衣に供へん事、とくより己が願なり、直に連立ち參内せんと、喜ぶ處へ某が、妻にせんとも言出で難く、所詮わが手に入らざる上は、嬲つてくれんと、仰の如く、勅諚には候へども、龍王よりの勅諚にて、龍の都の使となり、小姑は乙姫とて、浦島太郎の後家一人、外に厄介候はず、御承知ならば明石の浦へ、娘御共に入水あれと、後をも見ずして迯げ候」トまことと虚事取交ぜて、申上ぐるを打聞き給ひ、君もをかしと笑み給ふ。かゝる所へ馬之丞、御前へ罷出で、「最前より御機嫌を、伺はんとは存ぜしかど、赤松がお伽話の妨げと、お次にて差扣へ候」ト手をつかゆれば點き給ひ、「汝に賴まん仔細あり、假令いかなる事なりとも、わが詞は背かじとの、誓言聞かん」トありければ、はつとばかりに頭をさげ、「こは心得ぬ御仰、御先祖尊氏公御代より、姓名も改めず、代々石堂馬之丞、命を是で召さるゝとも、何とて違背仕らん」ト詞すゞしく言ひければ、光氏につこと打笑み給ひ、「おゝさもあらんさもさうづ。汝も祇園の祭の時、女を見初し事ある由、高直が懺悔の序、包まず語れ」ト宣へば、馬之丞も打笑ひ、「あまり御氣色鋭き故、いかなる大事と思ひの

こせしなるべし、又此文は斯くなるべし」ト法師の談義を說く如く、一辯に任せて述べけるにぞ、尤もさこそと思すもあり、又ひが事と思すもありて、すこし歎も打紛れ、光氏重ねて宣ふ樣、「家臣も多き其中に、汝はとりわけ隔なく、互に包む事をも語り、世に睦ましく思ひしが、ふしぎに二葉と緣を結べば、いよ〱親しき中となる。かゝる序に珍しき、物語もあるならば、我に聞かせよ、ゆめ聊か漏しはせじ」ト仰すれば、高直少し打案じ、「元より無骨の性なれば、女の馴れん樣はなし、己が恥を見せられたる、懺悔を聞かせ奉らん。此正月太宰府へ、御代參の歸路、播磨に知己の候へば、明石の浦に逗留なし、人丸の社にて、年はやう〱十三四、田舍に目馴れぬ嬋妍なる、娘を見初て忘れ難く、所の者に承はれば、かの宗全が弟の宗入、彼所に久しく居宅を構へ、それが祕藏の娘にて、名は朝霧と申す由、宗入方へ出入の者、此娘だに褒むる時は、酒好には酒を飲ませ、餅好には餅を與へ、寒きといへば風呂へ入れ、暑きと言へば水へ入れ、いろ〱馳走なすと聞き、さあらばあくまで褒めそやし、某婦妻に貰はんと、かの宗入に對面し、態とあられぬ名をなのり、まづ他事に假託けて、息女の器量を聞及ばれ、貰受けんと言ふ人あり、我も去頃ほの見しが、繪に寫せる楊貴妃は、美しけれど唐めいたり、吉祥天女は佛臭し、なか〱息女に譬へん者、凡そ天地の中になしと、詞を巧に褒めければ、果し

斯く健かに若君の、生立ち給ふを見まゐらせ、夫を娘に語り聞かせ、喜ぶ顔を樂みに、あのよへ參り候」ト終に果敢なくなりければ、光氏は更にもいはず、義正もこの由聞き、歎く事大方ならず。斯くてあるべき事ならねば、鳥邊野に骸を納め、花桐と押竝べて、新に墳をぞ築かせける。光氏は二葉の上を、其儘赤松の館へ据置き、未だ迎取り給はず、かゝる歎に取紛れ、ただ室町にのみ引籠り、絶えて音信し給はねば、二葉の上は恨めしくも、妬ましくも思ひながら、珍らしき帷子、美しき袴の類を、光氏に送りまゐらせ、兄高直は夜毎々々、御伽にぞ出立ちける。頃は五月なかばにて、霖雨晴間なく降續き、光氏の住ませ給ふ、座敷も常よりしめやかにて、徒然なる宵の程、惟吉のみ御伽にて、切燈臺を近附けさせ、經を讀みて居給ふ處へ、例の赤松太郎高直、御機嫌を伺はんと、御前へ罷出で、膝行寄つて言ひけるは、「去頃世を去り給ひたる、後室の菩提のため、御讀經はさる事なれど、斯くては御心いよ〳〵結ぼれ、御煩を引出さん。その一卷も終りなば、をかしき草子を御覽じて、御心晴し給ふべし」ト、あたりの御厨子を搔撈り、いろ〳〵の本取出し、「爰に好き物見出でたり、堀川の院の書かせ給へる、艶書合の候なり」ト高らかに讀出せば、光氏の讀經も、高直の聲にけおされ、せん方なく机を押やり、打微笑みて在すれば、仕濟したりと高直は、扇を笏に押取つて、「此文はしか〴〵の、女よりお

背かじと、媚く事を嫌ふより、愛敬薄く情なく見え、其上年も長けたれば、光氏更に心にそまず、たま／＼ならでは赤松の、館へ宿り仕給はず、室町にのみ在せしが、はや奥殿へ立入らねば、藤の方とは面も合さず、しらぶる琴の爪音の、漏聞ゆるに耳を敲て、藤の方と父上と、眞はいとこの御なからひ、我と二葉も又それと、血筋は同じ事ながら、姿かほばせのみならず、心の中も斯くばかり、違ふものかと人知れず、此方を疎み彼方をば、浮きたる心にあらざれど、母に似たりし面影を、見まほしくこそ思しけれ。又義正は光氏に、元服の作法をせさせ、二葉の上を妻と定め、目出度事のみ續くにつけ、花桐此世に在らんには、さこそ嬉しく思ふらめと、昔の歎を繰返し、密に袖を絞りしが、せめては母の後室を、心よく住ませんと、嵯峨野に數多の工を遣し、館を造り改めぬ。元より木立ものふりて、山の姿川の流、面白き所なるを、池を廣くし橋を渡し、なほ景色を添へさせたるに、夫を詠めも果てぬまに、後室は甚く煩ひ、賴みずくなになりける由、光氏は聞くと齊しく、急ぎ彼所へ至り見るに、杉生はじめ尼刈萱、やまうの床に附添ひて、いと悲氣なる有樣なりしが、後室は光氏の、來れるを見てにつこと打笑み、「君を擧けし花桐の、何所にあるか心元なく、尋ね行きたき願の叶ひ、今こそ冥土へ赴くなれ。彼が死したる其時に、同じ煙と立昇らぬ、身を悔みしも十年あまり、生ながらへしさいはひに、

君の、御添臥に妹を進らせ、兄高直も御側に、召使はれ候やう」ト思ひ込うで願ひしかば、義正機嫌麗しく、「汝が妻の小毬は、胤腹同じ某の、妹にはありながら、高麗國より來りし相人、此女子家に置き給はゞ、災害あらんと言へるに因り、父義教公心に懸け、富樫之介へ養女に賜はり、其後汝へ嫁したるなれば、夫が娘の二葉とは、光氏は從弟同士、彼と夫婦になす時は、父義教も未來にて、さこそ喜び給ふらめ。まだ二葉をば見ずといへど、姿かんばせ麗しく、心賢こき性と聞く。さいはひ公卿に親しきあれば、夫を二葉が親と賴み、今宵よりして光氏が、本妻となすべし」ト仰を聞きて赤松左衛門、喜びの餘りにや、つと廣庭へ下り立つて、扇おつとり舞奏で、再び御前にかしこまり、「さあらば古き例に慣ひ、若君を某が、館へ御供仕らん」ト御許を蒙れば、光氏も否むに由なく、その夜直に赤松の、館へまかで給ひけるが、兼て用意や爲し置きけん、婚禮の式作法、珍らしきまで取まかなひ、娘ながらも光氏の、本妻と定まりし、二葉を上座へ直し置き、左衛門正則妻小毬、太郎高直諸共に、はるか末座へ辷り下り、敬ひ傅きこれよりは、二葉の上とぞ呼びたりける。前にも度々斷る如く、光氏は十七歲、まだ初花の莟める姿、二葉はその年二十一、夏の柳のふけ過ぎし、眉恥かしくこの君には、似合しからずと自らも、心に思ひ煩ひけり。嫉妬は女の常なれど、二葉の上は能く愼み、只管道に

三編　上

既に前に記しゝ如く、光氏のかんばせ淸らかなるに依り、世の人光る君と呼びたるが、その名こと〴〵く高く、色好みの由を言罵りければ、嵯峨の後室は聞くに忍びず、より〳〵是を諫むれども、光氏は只打笑ひ、「我行を正しくせば、藤の方との密通は、富徽の前の妬に依り、山名の怒を引出し、夫を防がん手段ぞと、包みし事の漏れやせん。たゞ故もなく父君の、側室と忍びし烏滸の者と、嘲らるゝこそ望なれ」ト、人の物いひさがなきも、更に厭へる氣色なく、浮世に狂ひ給ひけり。年もはや立かへり、光氏は十七歳、元服をなし給ふが、足利の舊例ながら、綠の如き前髪を、剃落さんもまだ咲かぬ、花を散らせる思ひして、人々の惜める由、義正公も聞及ばれ、只まろ額にすみを入れ、その儀式のみ營みけり。さて、其日の樣は嫡子たる、義尙が元服の、式作法にもおとさせ給はず、赤松左衞門正則は、家臣ながらも舊家なれば、烏帽子親の役にさへられ、既にことぶき終りて後、左衞門は猶威義を繕ひ、義正公に申す樣、「君にも知召す如く、某に二人の子あり、兄を太郎高直と名づけ、妹を二葉とよび候。今よりしては若

偐紫田舎源氏第三編序

全部引書目録

源氏提要　源氏小鏡　十帖源氏　をさな源氏

源氏鬢鏡　紅白源氏　雛鶴源氏　若草源氏

源氏若竹　風流源氏物語　新橋姫物語（一名都の辰巳）

以下浄瑠璃

源氏六條通　弘徽殿うはなり討　葵の上

弘徽殿鵜羽産家　謠曲數種

俳諧源氏（予若年の頃何の意なく讀みたるが今もとむれども未得）

文政（庚寅春發行　辛卯春再彫）　柳亭種彦記

今日限り。是より浮世を氣儘に廻り、一生此身は好色者の、浮名を取りて義理のある、富徽の前の計ひは、包むが道の道なるべし」ト父の御前へ一禮し、座を立ち給へば義正公、「やれ待て光氏言ふ事あり、兄義尙を乘越えさせ、御身に家を讓りたき、我念今に去り難し。夫を察して宗全が、事ありしをさいはひに、藤の方に戀慕と見せ、是より身持を惰弱となし、此義正に疎んぜられ、兄義尙に家國を、讓らすべき心よな」ト宣ふ言葉を聞流し、立出で給へば後室も、杉生も心を安んじ、御前を直に退きけり。めでたし〳〵。

言ふべき事も後や先、我身はつゆちり惜しからじ、光氏様のお命を、助くる思案はない事か」ト正體も無く泣き給ふ。義正始終聞き了り、「花桐が事にては、道理を失ひ人々の、怨を受けしに懲りもせず、藤の方の愛に溺れ、かゝる難儀を引出す、わが愚さをいかにせん」ト屢〻歎息したりしかば、光氏はかぶりを振り、「さな宣ひそ宗全が、心を懸けしと聞きながら、館へ迎へ入れたるは、是某が過なり。夫のみならず宗全を、欺く手段と言ひながら、現在父の愛妾と、忍逢ひたる我が越度。切腹仰附られて」ト願ふを義正嘗て許さず、「我子ながらも斯くばかり、道を立てたる汝を殺し、おめ〳〵ながらへ居らるべきか。御身死なば我も死なん。いかに〳〵」ト宣へば、はつとばかりに光氏の、當惑顔を見てとる後室、「今宵の事を知る者は、五人の外には宗全ばかり、諺にも言ふ通り、人の噂も七十五日、たとへ彼が此事を、觸れ歩いても今のまに、お二人様の浮名は消ゆる。よしさうなくとも塵ほども、曇り霞みはない御身、此儘こゝで果て給はば、偖こそ山名の言ふに違はず、密通なりとの惡名を、受けるは豫ての御覺悟ながら、父上様の御身の恥、思ひ廻らし給はれ」ト道理に詰められ光氏は、やう〳〵に打點き、「後室の言ふ如く、山名だに不義者と、思うて歸れば今こゝで、切腹するにも及ぶまい」ト聞いて喜ぶ杉生、後室、藤の方にも安堵の思。光氏衣紋掻繕ひ、「はや大人にも成つたれば、奥殿へ立入りて、女の交ひ

る時は家の騷動、打捨て難き大事の密書、我手に入りしは天の惠と、隱遊の謀、庭の隅々女ばら、駈走るのに驚かされ、忍の者は寄附かず。なほ其事を藤の方に、物語なしたる上、しやうもやうも有らんかと、人無き處をさいはひと、人丸の社に忍び、はからず聞取る今宵の巧、いよいよ火急に迫りし大事。さる故に艷書になぞらへ、其書置に委細を記し、藤の方へ送り置き、富徽の前の贈物、此長持に宗全が、隱れ忍ぶと知つたる故、態とみだらの擧動は、わが子も同じ此光氏と、不義する體を見せんには、たとへいかほど宗全が、懸戀なしたる女でも、愛も醒め興も醒め、戀慕ふ氣も醒果てなば、自然晉川勝元を、怨むる念も晴るべしと、思ふに違はず宗全が、惡口なしたる其中に、たとへ今更藤の方、帶紐解かんと言ひたりとも、我承引をなさじとて、某をもあくまでに、言罵りて歸りし上は、心安しと思ふから、切腹なさんとなしたる時、縋止むる後室に、怪我させまじと厭ひしより、暫し此世に止まりて、我に義理ある富徽の前を、讒言めきし物語、人にな漏し給ひそ」ト言葉急しく述べらるゝ。藤の方も顏振上げ、「光氏樣の仰の通り、その書置を送り給ひ、密に妾へ宜ふは、斯樣々々に計ひて、不義者になつてたべ、我は其座に切腹し、御身に難は懸けまじと、思へど無名を立てられて、ながらへ難き事あらば、命を捨てよと御賴。宗全が怒強く、此身ゆゑに騷動を、引出さぬ其先と、心は急かれ氣はのぼせ、

に拾ひし文、後にて見れば白糸が、富徽様へ送りし密書」ト言ふに義正言葉を續ぎ、「その密書を杉生が、今朝わが前に持參なし、まづ斯く〳〵との物語、打驚きつゝつら〳〵見るに、宗全へ白糸が、藤の方の素性を通じ、奪取らする工の段々。今宵俄に富徽の前、我を只管招きしは、故あるべしと宜き程より、影を隱して忍び來り、仔細はあれにて聞きたるが、心得難き此場の樣子、藤の方へ光氏が、今朝送りたる文にこそ、その故由はあるならめ」ト言ひつゝ軈て義正は、藤の方の懐中へ、手を差入れて取出す一通。「あゝ、夫は妾が死んでの後、御覽されて下さりませ」ト言ふを押止め件の文、義正さつと振開き、「何々、父君へ申殘すの條々、光氏。ふウすりや此書置を殘し置き、切腹なさん豫ての覺悟」「仰までも候はず、命を捨つる概略を、死後に御目に觸れんため、昨夜認め置いたるが、夫と知召さるゝ上は、最早包まん樣もなし、その章御覽までもなく、委細言上致さん」ト、衣紋を正しかしこまり、「御寵愛深かりし、わが母花桐死して後、世を憂きものと思召し、政事さへ疎略に、成行き給ふが歎かはしく、面影似たる藤の方、呼迎へ進らせなば、夫に移りて花桐を、慕ひ給へる御心の、失せもやせんと思ひたる、某がこゝろざし、却つて御身の仇となり、藤の方のみ只管に、御情を蒙る故、富徽の前の嫉の炎、薪に油の白糸が、宗全へ内通し、昨日の夜忍を入れ、藤の方を奪取り、音川山名確執と、成つた

た女、素性を包み名を變へて、側室とされたは主人の無道、たとへ是へござつても、言譯はござるまい。夫程心を盡された、藤の方は又格別、義利の有る光氏殿に不便を加へ、抱いてまで寐ると言ふのは、貞女々々。勝元に言入れた其時、承引されたなら此恥辱は、斯く申す宗全が身に受ける處、不得心なが却つて仕合。どれお暇申さう」ト口に任せて嘲哢し、疊蹴立てて歸りけり。光氏はにつこと笑ひ、「最早浮世に用は無し、いで潔く切腹せん」ト差添ひらりと脱ぎかけし、袖に押卷き坐を占れば、藤の方涙を拂ひ、「浮名を立てられ譏られても、男子は人も容すべし、女の道を背くから、兼て覺悟はまづかう」ト、用意の懐劍取出せば、「やれ誰かある、あれとめよ」ト一間の中より聲を懸け、立出で給ふ義正公。こけつ轉びつ杉生と、共に馳出る後室が、「まづ〳〵待つて」ト兩人が、白刃持つ手に縋付き、「樣子も言はずに此お覺悟、尸の恥といふ事に、お心つかぬか光氏樣」と諫め止むる後室の、顔つく〴〵と打眺め、「母にも同じ其人と、密通なしたる犬畜生、死後まで人に疎んぜられ、譏られるのが此身の願」「とは又なぜに何した譯」ト不審の後室杉生も、藤の方の持ち給ふ、懐劍やう〳〵捥取つて、「昨日嵯峨野のお使から、戻つて見れば女中ばかり、何方もおいで成されぬ故、お庭の隈々尋ね廻り、お築山なる人丸の、社へ思はず行懸り、端々聞取る若君の、お物語の不審さに、差出す雪洞打落され、かゝぐる手先

いや妾は音川の、妹とやらでは無いわいの」「へ、恍けても知つて居る。此文覺があらうがの」ト取出して目先へ突つけ、「一生夫は持たぬとある、是はしかも此方の直筆。兄勝元と牒合はせ、名も改めて主人の側室、櫛笄の此麗やか、どこで是が尼法師。己が慾に耽つてか、但しは兄の臆病者、主人の權威に恐れてか。いづれの道にも此宗全を、うつけになせしが憎さ故、謀を廻らして、富徽の前の贈物、草子と詐り忍込み、藤の方を奪取り、勝元はじめ主君にも、鬱憤いはんと思の外、子も同然の光氏殿と、此爲體に戀もさめ、もう其方から手をついて、今まで有りし事をわび、心に從ひ帶紐を、解かうと言つても己が厭だ。これ若殿、日頃から花桐殿に、似たとやらで母上と、慕うてござると言ふ噂、夫に何ぞや我君の、留守を窺ひ忍込み、取附き引附き正體も、泣きつ笑ひつ口說事、不義もふぎ、此方は畜生。義正公に隨へば、とりもなほさず家來の宗全、夫にかくまで惡口され、無念とは思さずや、口惜くは言譯あれ。人に對つて犬猫が、詞の無いは道理々々。似合うた樣に尾を卷込み、首うなだれて四足を縮め、屈んでござれ」トはつたと蹴る。音に驚き奥の間より、思もかけぬ義正公、立出で給へば藤の方、あわてふためき立身で隱し、「此所へ御出遊しては、御身の大事となりもやせん、まづ／＼お待ち遊ばせ」ト押やり／＼閉切る襖。宗全夫と早くも知り、「家來が先へ心を懸け、婦妻になさんとし

種籠置きはんべれば、いづれなりともお目馴れぬ、草子を御覽遊ばす樣との、御口上に候」ト申上ぐればしとやかに、「思召しよせられて、珍しき草子の數々、お禮は明日此方よりと、よきに傳へ給はれ」ト白糸を歸しやり、何か心に打案じ、ひとり閨にぞ入りにける。藤の方は過越方、行末の事おもひやり、眠りもやらぬ閨の中、時の太鼓の聞ゆるは、はや丑みつの頃やらん、雨戸もくらず障子を開け、壺前栽を見る樣に、打紛らしつ空焚の、薫をしるべに忍寄る、光氏はおづ〳〵と、屛風搔やり聲細め、「母上樣、今朝程上げし私の、文を御覽遊ばしてか」「ヲヽ讀んだ時のその驚き、是程までに深切なと、心で泣いてその文は、肌身に添へて持つて居る」「さやうなら私の、戀を叶へて下さりますか」「叶へる心で女子どもは、遠くへ寢させて私一人、閨しつらはせて待つて居た。道に背くも其方の爲、命捨つるは兼ての覺悟。さアこち寄つて寢しや」ト手を取り給へば光氏は、聲打曇り目を瞬き、「水より淸い御身をば、私故に濁らせます。此世ばかりか前世から、結置いたる惡緣と、思へばいとゞ悲しきを、富徽の前の別殿には、面白さうに鼓の音。夫に引かへあなたにも」「其方もともに憂苦勞」抱寄せつゝ泣き給ふ。「不義者見つけた動くな」ト、長持の蓋刎退けて、ずつと出でたる山名宗全。二人ははつと迯げんと爲る、衿髮左右の手に摑み、ぐつと引据ゑどうと坐し、「音川の妹御猪名野谷、久しうて逢ひ申す」「いや

寄を心なく、伽にしたのは妾が過失、富徽の前の住み給ふ、奥殿へ我君樣、今夜はお泊り遊ばす由、私ももう寢やう程に、後室はやすむがよい」ト宣へば目をしばたゝき、「まだやう〳〵五ツ過、短い夜にも寢覺する、老の身で今頃から、眠いとは存じませねど、恐れ多き事ながら、此世を去りし花桐に、かくまで似させ給ふものかと、見上げ申す度々に、むかし戀しくこの涙、由ない事を申出し、お遊びの妨げと、ならんよりは御免を蒙り、杉生が部屋へ參り、休息致して又明朝、おめ見えを致しませう」トしを〳〵立つて行く影を、藤の方は打眺め、「面影ばかりか花桐に、憂苦勞まで似た此身」ト言ひかけて此方を見返り、「今宵は少し樣子があつて、妾一人此所へ寢させ、皆の者は勝手次第、部屋へ歸つて休むがよい」ト閨しつらはする其處へ、腰元一人走りきたり、「富徽樣より急の御用と、何やら大きな箱を持たせ、白糸がお使に參りました」ト言ひければ、「夫はいつぞや守の札、差上げる其時に、前後を爭ひ杉生と、中のよからぬ女子よの。顏を見るのもうとましからう、杉生は次へ立ち、使は是へ」ト藤の方、仰を取次ぐ腰元と、打連立ちて白糸は、四尺あまりの車長持、御前に曳かせて遙に下り、「今宵は御所樣此方へお渡り、嘸徒然と存じられ、此長持の其中へは、源氏、萬葉、伊勢物語、しどら、おちくぼ、きやうたら、八島、高館、和田酒盛、阿彌陀のむねわり十二段、歌書、物語、舞、淨瑠璃、種

い、お命をくださりませ」ト拔放す、白刃の下を動きもやらず、「はて、しねならば死にもせう、仰山に騒がずと、譯を靜に言ふがよい」「はゝアさすが祖父の御血筋、適れの御魂、そのお心に惚れました、抱かれて寢て下さりませ。さ、さ、驚きは御尤、親に不義を仕懸るからは、生きてゐぬのは元より覺悟、お命を下されと申したのは、此戀が叶はぬ時は諸共に」ト寄添ひ給へば藤の方、につこりと打笑み給ひ、「世界に女も無い樣に、道に背いて妾へ戀慕、何ぞ是には深い樣子が」「其事はあからさまに、どうも今は申されぬ、心のたけを文に書き、そつとお渡し申しませう。成程是では尤もぢやと、思召したらあすの夜は」「忍んで來やれ逢うてやらう」ト宣ふ後に聞居る杉生、袖に隱せし雪洞を、差出す火影に見合す顏、はつと驚き差添の、刀背にて光氏雪洞を、其儘はたと打落す、はづみに袂をこぼるゝ密書、杉生手早に拾取る、途端に山名の忍の者、組まんと寄るを藤の方、ひらりと外して突やるを、捕つて押へて光氏が、ぐつと突込む氷の刃、うんとも言はず忍の者、其儘そこに倒伏し、言葉は無くて三人は、別れ〳〵になりにけり。

その次の夜藤の方は、嵯峨の後室杉生はじめ、數多の女を伽として、物語しておはせしが、後室何とか思ひけん、目に持つ涙を藤の方、早くも心づき給ひ、「あれ後室は眠いさうな、年





の者に奪はすも、はや此上はまどろしゝ。我君樣をあすの夜は、妾が方へお招き申し、舞をお目に懸くる中、宗全を呼寄せて、唐櫃の中へ隱し、妾が贈物なりと、藤の方へ遣しなば、元より氣早のあの山名、奪取るか手に懸くるか、藤の方のなりゆきは、彼が心に任せて見ん。いざ女子どもの氣の付かぬ、其隙に立去らん」ト白糸引連れ富徽の前、館へ歸り給ひけり。後は松風吹添ひて、御燈の光影薄く、いと深々たる社の中、斗帳撥げて立出る光氏、ほつとばかりに吐息をつき、「隱遊に思はずも、いよ〳〵聞取る館の大事。昨日ふしぎに白糸が、落せし文を拾ひしも、日頃信ずる神の德、あら忝なや有難や」ト伏拜みつゝ懷より、手遊の笛取出し、合圖と思しく吹鳴せば、供をも連れず藤の方、築山の細道を、廻りてあたりを窺ひ窺ひ、「光氏樣、笛の音を聞いたなら、人に知らさず此社へ、忍んで來よとのお捻状、袂へ入れ給ひし故、いかなる事かと氣遣はしく、最前より泉水の、土橋を渡り身を潛め」「さア御待遠をば察しながら、いよ〳〵火急に迫つた大事」「ヤ」「いや大事ない、私の傍へお寄り遊ばしませ。今めかしき事ながら、此光氏を眞實に、かはゆうあなたは思召すか」「あの、此子とした事が、人の居ぬ其時は、私も實の子のあしらひ、其方とても深切に、母よ〳〵と慕ふもの、いとしうなうて何とせう」「左樣なら私が、戴きたい物がある」「ヲヽ何なりとやらうわいな」「外でもな

公御出があつても、一言のおつしやり方は無い道理と、有る事無い事取交ぜて、口に任せて申シたを、もとより思慮なき宗全なれば、いよ／＼怒の齒を噛鳴し、其儀にてあるならば、忍の者を遣して、藤の方を奪取らせ、證據を此方に隱置き、其後に勝元を、招寄せて恥かゝせん。しなに依つたら義正も、主人とは言はさぬと、用意頻に立騒ぐを、私が押止め、せいては事を仕損ずる、義正公の禁廷へ、宿直の留守を待ち給へと、牒合せて立歸り、今宵參内ある由を、昨夜密に告げしかば、宗全方より忍の者、妾が方まで來りし處、もし其事の漏れたるか、藤の方に附隨ふ、腰元婢の女ども、夕暮頃より立騒ぎ、庭の隈々廣敷の隅々、尋ね廻る樣子なれば、忍び寄るべき隙もなし。此事詳しく書認め、あなた樣へ差上げんと、堅く封じて置いたるが、何所へか取落し、心懸りにはんべる」ト細々とこそ語りけれ。富徽の前打點き、「其方は元小菊とて、晝顏の召使、なれども、元より妾が腹心、一旦館を拂ひしは、人に夫と知らさぬため、年月たちて名も改め、呼戻しての腰元使、今に始めぬ汝が働。すりや藤の方素性を殘らず」「はい、四年以前、光氏樣と勝元殿の物語、衝立の陰へ隱れ、詳しく聞いて居りましたが、まことは花滿中將の、忘形見の藤の方、母御前は前將軍、義敎公の御妹、義正公とは御従兄弟同士、公立ちていふ時は、素性はあなたに優つてある」「ウヽそれなれば猶の事、館に置いては心懸、忍

ばかり供に連れ、庭とはいへど築山を、遙に廻りて程離れし、かの人丸の社に詣で、社壇に暫し休らひ給ひ、「なウ白糸、座敷の中は人目も多く、密事は文にし取交せど、此所には誰も聞人はなし。殊に今宵は桂樹が、舞にみとるゝ女子ども、妾が居ぬのに氣は附くまじ。まづゆる〳〵と樣子を語りや」ト問ひ給へば白糸はかしこまり、「日頃からあなた樣が、うとましく思召す藤の方を、手も濡さず失ふ手段に、山名の屋敷へ此頃參り、宗全へ直に逢ひて、私がまづ申出しまするは、義正公の寵愛ある藤の方を、雲客の娘といふは跡無き僞、あなたのお心懸けられし、勝元が妹の猪名野谷、夫と知つては居給へど、勝元が恐しさに、知らぬ顔してお在るやと、まづその心をひきみるに、案の如く宗全は、怒の顔色顯れて、いぬる年猪名野谷より、尼法師とも姿をかへ、一生夫は持たじといふ、文を送らせ其後に、死したりと言ひたるは、密に君に奉り、妹の寵をかさにきて、ます〳〵權威に誇らんと、勝元が工よな、いで〳〵思ひ知らさんと、直に飛んでも出づべき勢、仕濟したりと近く寄り、さな宣ひそ強ちに、勝元ばかりの業にもあらず、あなたが兼て御執心、文を通はし給ひし事も、義正公は能く御存じ、それ故に名も呼變へ、夫と素性を顯さぬは、皆我君の御計ひ。家來の戀慕した女を、騙して妾に遊ばすとは、あまり無法な成され方。たとへばあなたが藤の方を、奪取つて寐てござる處へ、我君義正

の子の、惟吉のみを供に連れ、さも大きなる唐櫃を、女どもに擔はせて、急はしげに入來り、「父上參内なし給ひ、嘸徒然に在すべし。富徽の前は何とかいふ、舞まふ女を召し給ひ、鼓の調太鼓の音、あれ築山の木魅に響き、手に取る如く賑しきに、など此方には斯くばかり、打沈りて居給ふぞ。嵯峨野に在す後室も、呼迎へ申さんと、杉生を遣りたれば、打連立ちて歸るべし。さて夫までに女どもに、祿をとらせて遊ばんと、此唐櫃を持たせたり。ソレ惟吉、中の品を取出せ」「はつ」ト答へて唐櫃の、蓋を開いて持出づる、をりうづこものどんしきに、鷹を据ゑたる若衆の繪、天兒ひい〱風車、連木擂盆綾錦、堆く積上ぐれば、藤の方打笑ひ、「是は大方、福引とかいふ戲に、取らする品々、女ども隨分と、神や佛を信心して、好い物を頂きや」ト宣へば頭を掉り、「いや〱さいふ事ならず、此館より庭を限り、この光氏が隱るゝ間、尋出した女には、望の品を取らすべし」ト言ふ顏眺めて藤の方、「もうあなたはお十六、隱遊はおとなげなし」ト止めても止まらず「皆來い」ト、呼立てられて腰元ども、返事も得たりかしこ此所、探して運よく光氏を、捕へて錦を貰ふも有り、柱に當り緣より落ち、笑ひどよめき暫が程、上を下へと立騷ぐ。かくて日のはや入果てしが、何所に隱れ忍びけん、光氏更に行方なし。腰元どもも尋ねわび、やう〱にして靜まりけり。同じその日の暮六ツ過、富徽の前は腰元の、白糸

二編 下

富徽の前の住み給ふ、奥殿へはさる頃より、義正絶えて渡り給はず、嫡子義尚をり毎に、音づれ聞ゆるばかりにて、光氏さへも藤の方に、馴親みて自から、疎々しくなりければ、富徽の前はその妬さを、つゆ面には顯さず、琵琶、琴、雙六など、さま〴〵の遊をして、明し暮させ給ひけるが、それさへ今は仕盡して、目馴れぬ遊もあれかしと、思ふにさいはひ富徽の前、此館に嫁して後、妹の產みたる娘あり、名を桂樹と呼なして、今樣小唄を聲よく唄ひ、舞をまひ鼓を打ち、年は待宵ほどなれど、其性蓮葉なれば、よく人に馴れ浮世に馴れ、興ある由を聞及ばれ此者を招寄せ、徒然を慰めんと、人を馳せて呼迎へ、始めて對面し給ふに、聞きしに違はずおとなしき、方にはあらねど顏容も、淸らかにして愛敬づき、いと〳〵賢しく見えければ、わが膝元に据置きて、行儀作法を敎へなば、ゆく〳〵は義尚の、妻となすとも恥かしからじと、心の中に思しけり。其日は義正禁廷の、宿直の役を蒙りて、次の日ならでは歸られじと、未の刻に出でければ、藤の方の住み給ふ、此方の館は靜にて、はや暮近くなつたりしが、光氏は乳母

り出で、ありし事ども言上ぐれば、義尙につこと笑はせ給ひ、「めん〳〵に仕ふる主人を、大切と存ずるは、尤なる事ながら、なんの別しても無い事を、仰山に髮まで亂し、面體變へて見苦しい。此以後屹度愼まうぞ。互に恨の無い樣に、兩人一時に其守を、予が前に持參せよ。さア此の如く右左の、手に請取れば言分あるまじ、必ず意恨に思ふな」ト座を立つて入り給へば、二人は何の言葉なく、西と東へ別れしが、是よりしては藤の方、富徵の前との御交情、いよ〳〵不和とぞ成りにける。

に、あやまりましたとひいて行きや」「ホヽヽヽさう言やる白糸が、模様も丁度花車、落花微塵にされぬ先、片寄つて居やるがよい」「こりやをかしい、理を非にまげる口車」「イヤ其方のが横車。コレ此裲襠は君より拜領、よしばむ網代の綾の裏、過失あつたら容赦はせぬ」ト左右に別れ帯引しめ、三寶とつて白糸が、打つて懸るを身をかはし、衿髮取つて引寄する。轉びながらに杉生の、裾を拂へばはつたりと、尻居に倒るゝ其暇に、馳出す白糸杉生は、ひらりと起きて帯の端、摑んで後へ引戻す。遣らじ行かんと爭ふうち、帯め解けてくる〳〵、脛もあらはにしどけなき、姿となりて白糸は、行くも行かれず杉生に、むさぶり付くを取つて押へ、膝押懸けて動かせず。白糸せん方なみだ聲、「あれ狼藉者、出合へ〳〵」ト呼はる聲を聞付けて、驚きあわて數多の女、追々爰に馳付けしが、最屓々々の心より、杉生に力を添へ、又白糸が荷擔人して、或は打合ひ摑み合ひ、更に正體なかりけり。此騷動の漏聞え、義尙君は近習の武士、引連れて立出で給ひ、「やれ、はしたなし靜まれ」ト宣ふ聲に白糸杉生、はつとばかりに飛退れば、殘の女は一人立ち、二人三人散失せて、皆こそ〳〵と立つて行く。義尙は欣然と、「先刻より父上は、光氏を召連れられ、築山に勸請せし、人丸の社へ參詣、さるに依つて此騷、お耳に入らぬはさいはひ〳〵。さア一人づつ夫へ出て、仔細を申せ」トありければ、兩人おづ〳〵にぢ

樣に心得よと、兼ての仰は聞いても居やらう。遲く來たのが其方の不祥、先へはやらぬ」ト杉生が、入代るを又突退け、「小袖の模樣かなんぞの樣に、雲客の姫君ぢやと、言廣めたる紛者、藤の方の女中には、相應な杉生どの、成上りの身の上では、式作法をば知りやるまい。又あんまり差出ると、魚の腸で小袖を穢し、戸を閉籠めてうろ〳〵と、泣顏するを笑うてやる」ト嘲笑ふ顏つく〴〵見やり、「あぢな事を知つてゐる、其方は何やら見た樣な。ヲ、それ〳〵、眉を拂つて顏變り、十年餘り逢はぬ故、今までは氣が附かなんだが、さう言やるので思出した、晝顏殿の召仕、其方は小菊であらうがの。桔梗と共にお館を、拂はれたといふ噂、何して此所に。こりや大方晝顏殿に、惡智惠がかひ足らいで、富徽樣へ又取入つての工ぢやな。人の事を成上りと、いやる其方もやつぱり元は」ト言ひかくるを打消す白糸、「はて其以前は兎も角も、今では内君富徽樣の、御身近く勤むる女子、此位のお使を、仕損じては此身ばかりか、内君樣の御耻辱」「夫は此方も同じ事、藤の方にお退はとらせぬ」「見事其方が私より」「先へ通つて見せませう」ト行かんとするを立閉がる、「邪魔しやんな」ト肩先を、摑んで引けば振拂ふ、はづみに二人が三寶を、一度に落して打驚き、取らんと差出す手先をとらへ、白糸きつと打見やり、「杉生が裲襠の、縫の模樣は御所車、推して通ると轅も榻も、打折り引裂きかなぐり捨て、憂目を見やらぬ其先

つる由。今音川の娘も包み、素性も慥に顯さず、宮仕をなさんには、いよく人にあなづられ、いかなる恥を見んかとて、始めは承引なさゞりしが、かくては一生埋木に、朽ちや果てんと傅の、人々に進められ、かつは主命背き難く、藤の方と名を改め、遂に其意に任せしが、果して内君富徽の前の、角々しき擧動に、胸安からざる事度々なれども、心ばせさへ花桐に、能く似通ひておはせしかば、つゆ内君の仰に背かず、二年三年は何事なく、明し暮して居給ひけり。折しも彌生なかばなりしが、杉生御前へ立出でて、雷避の御守、加茂の社家より差上げしと、三寶に取載せて、傍へ据置けば、藤の方押頂き、「是こそは幸なれ、我君樣も雷はお嫌ひ、早う上げますお使には、そなた直に御前へ行きや」ト仰を受けて杉生は、部屋に下りて衣服を改め、義正公の住み給ふ、奥殿さしてしづくと、歩む廊下の後より、「杉生殿、まア待つた」ト聲懸けられて振返り、「其方は内君富徽の前樣に仕へまゐらす、アヽ何とか、ウヽ白糸どのとかいふ女中、丁度私と同じ樣に、三寶へ載せたるは」「加茂の社の雷の守、年毎に内君より、今日差上げるがお家の吉例。其方は誰が差圖にて、その守をば上げやるぞ」「はて知れた事を問はしやんす、この杉生が仕へ申す、藤の方の命を受け」「そんなら妾が後からおぢや」ト引退けて行かんとする、白糸が袖引止め、「藤の方はお客分、餘の女中とは違うてある、何事にても内君と、同じ

宗全も、夫と心は附くべからず。必ず人に漏しそ」ト懇に宜へば、勝元漸く承諾し、屋敷へこそは歸りけれ。

さきに刈萱が物語を、義正は漏聞きて、かの猪名野谷を見まほしく、心の中に思ひしが、光氏早く是を察し、事既に調ひければ、義正は大に喜び、富徽の前の住み給ふ、奥殿と築山を、隔し庭に館を造り、密に是へ迎へけるが、折しも砌の松が枝に、纏ひし藤の盛なれば、取敢ず其名をも、藤の方とぞ呼なしける。實に刈萱が言ひしに違はず、その面差怪しきまで、花桐に似たりければ、義正は花桐を、忘るゝにはあらねども、おのづから心移り、又光氏は杉生なんどが、斯くも似させ給ふものかと、言ひざゝめくを聞くからに、母に逢ひし思にて、暫しも側を離れやらず、人なき折には母上とて、睦み寄り給ふにぞ、藤の方も日に添ひて、いとほしき事限りなく、起臥さへも共になし、偏に眞の子の如し。杉生は是を見て、死したる主人のまた此世に、歸來ませし心地にて、喜ぶ事限りなく、いとまめやかに仕へつゝ、此殿次第に賑ひければ、富徽の前は見聞くにつけ、またもや物を思はする、女こそ出來しと、藤の方と中よからず、打添へては光氏も、憎き者にぞ思しける。勝元妹の猪名野谷に、光氏君の仰の趣、始めて傳へし其時に、猪名野谷心に思ふ樣、むかし花桐時めきし、時だに人の妬を受け、さまざま憂目を見

の例あれど、他の女中と一列に、お寝間の伽には進らせ難し。さて又ひとつの難儀といふは、山名持豊入道宗全、わが宅へ來りし時、酒興の上にて奥の間まで、遠慮もなく打通り、あわて隱るゝ猪名野谷の、孃をとらへ引止め、噂に聞いたる妹御よな、奥も死んでやもめずみ、わが婦妻に賜はれと、無禮至極の體たらく。妹と同じ年頃なる、孫を持ちたる老法師、たゞ座興とのみ思ひしに、其後妹へ文を送り、我方へは使者を以て、たび〱の彼が催促。妹は聞くもうたてくて、尼法師とも態を變へ、一生夫は持たじといふ、誓を立てし身なりとて、つれなき返事を送りし由。今君の御威勢強く、敵し難くて宗全も、從ふさまにはもてなせど、誠は無道の不敵者、御添臥に猪名野谷を、奉つりしと聞くならば、恨を含みて宗全が、必ず事を引出さん。此儀に當惑仕る」ト密々語る始より、富徽の前の腰元白糸、襖の陰に聞居たるが、何か心に打點き、猶も摺寄り摺寄つて、身を潛めてぞ窺ひ居る。光氏暫し打案じ、「思懸なき猪名野谷が、素性を聞きてはなみ〱の、側室と席を一列に、呼迎へんは憚あり、さらば別に館を造り、賓客の如くなし、冊き人も內君に、優り劣らず進らせなば、よし本妻にあらずとも、汝が父の遺命を、背くといふにも當るべからず。又猪名野谷といふ事は、深く隱して名を呼變へ、ある雲客の娘なりと、此方にては披露せん。汝が家には妹が、死したりと訴へなば、邪智深き

入れ、有難き御意なれど、あなたはまだお十三、猪名野谷ははや十九、御成長のその中には、年も闌けていとゞさへ、鄙びし上に花も散り」ト言かくれば光氏は、赧らむ顔を扇に覆ひ、「アアこれ〳〵、己にくれといふではない。知つての通り、己を產んだ花桐は、父上の殊の外なるお氣にいり、此世を去りし其後も、彼が事を思し出され、歎かせ給ふが痛はしさ、代る〳〵女どもを、お寢間近くへ差置いても、お心移りし體は見えず。其方妹猪名野谷は、かの花桐に似たる由、さるに依つて父上の、お忘草にもならうかと、進らせたき秘密の賴み。まつた母の面影に、似たと聞いたで己も見たい。思案の體は不得心か。さア〳〵どうぢや」ト問ひかけられ、勝元はつと頭を下げ、「花桐殿をば御遊の時、遠眼に見たるのみなれば、確には覺えねど、若君樣のおかほばせ、恐れながら妹に其儘。さすれば過ぎし花桐殿に、似たと言ふのも無理ならねど、返す〴〵も何者か、かくまで精しく見極めて、申上げけん訝しさよ。まづ夫は暫く置き、さほどに厚き思召、早速お請も致したけれど、爰に二ツの難儀あり、そのひとつは、かの猪名野谷、某實の妹ならず、前の將軍義教公の御妹御、眞弓の方と申せしが、花滿中將へ嫁し給ひ、設けたまひし御子なり。些かの過失にて、花滿の家沒落、某が父音川持之、見るに忍びず養ひ取り、大切に致せよと、此勝元へもくれ〴〵遺言。義正公とは御從兄弟同士、御本妻にはそ

しに映る我顔を、つく〴〵と打眺め、「皆の者が花桐に、似た〳〵といやる故、鏡に對ひて我顔を、見るのがお目に懸る心。わづか五つの年なれば、朧に覺えて居るばかり。反魂香といふ物が、眞にあらば今一度、どうぞ逢ひたい〳〵」トむづかり給へば刈萱は、少し御前へ進出で、「イヤ御案じ遊ばすな、反魂香よりまだ慥に、逢はせまする仕樣がある。私が此頃の假住は清瀧川、十日ばかり前のこと、供人は俏したれど、輝くばかりの女乘物、草庵の庭へ舁入れ、此頃少し不例なれば、加持してたべと駕添の、女に先へ言入れさせ、かの乘物の中よりも、立出で給ひし上﨟の、顔容なら風俗なら、花桐樣に少しも違はず。歸りの時に供の僕を、賺して問へば、管領音川勝元殿の妹御、名は猪名野谷と申す由、未だ鐵漿も含まれず、花桐樣が若君を、お産みなされたお年ばへ。おかほしろには此者を、召されて御覽遊ばしませ」ト聞いて光氏大に喜び、「ヲヽ夫こそは幸なれ、勝元は出仕して、未だ館に在るなれば、はや〳〵是へ參れと申せ。三人は次へ立ち、休息せよ」とぞ宣ひける。管領音川勝元は、光氏君のお召と聞き、何事やらんと取る物も、取敢ずして立出れば、光氏は聲をかけ、「密に問ひたき事ありて、あたりの人は遠ざけたり。これへ〳〵」ト近く招き、「其方の妹に、猪名野谷とか名を呼ぶは、眉目形の勝れし由、側使に得させよ」ト宣へば、莞爾と笑ひ、「不束なる妹が事、何者かお耳へ

物蔭より窺ひ見ん。やア光氏は何れに居る」ト呼はり給ふ聲の下、はつと立出で手をつかへ、「杉生が言上の趣はお次にて、承はつて居りました。父上はまづ奥へ」ト進め申して座に居代り、「刈萱が來りしとは、珍らしや、はや是へ」ト仰に杉生座を立つて、刈萱後室二人を誘ひ、恐る〳〵立出づれば、光氏つく〴〵と刈萱を打見やり、「天運盡きず其方の、刃を脱れて斯く成長。後室の恵にて、髪を拂ひしその日より、諸國修行を爲したる由、奇特々々」ト宣へば、「はつ」トばかりに刈萱は、恐入つて蹲る。光氏重ねて、花桐の母を傍近く招き、「今まで嵯峨の後室と、呼來りしがそも御身の、名は何と言ひたるぞ」ト問はれて少し打微笑み、「今は我名も忘るゝ程、老耄ひし身となれば、たゞ一口に婆となりと、仰せられて下さりませ」「イヤ夫なれば名をとらせう、その切髪をくる〳〵と、ちひさく卷いてゐやるから、是からさまきと付くがよい。以來己が呼ぶのには、婆のさまきと言はうけれど、夫ではあまり長い故、てにはのの字ときの字を略し、婆さま〳〵、ヲヽ是で呼ようて、好い名ぢや」ト仰に後室はつとばかり、有難涙にくれにけり。刈萱すこし顔を上げ、「あゝおつしやるお聲色、お口元ならお目元なら、花桐樣に生寫。後室樣、杉生どの、むかしが思出されて、悲しう思召しませう」ト言はれて二人は顔見合せ、涙見せじと一時に、吐息つく〴〵光氏も、みづ

弓馬手習書の道、琴笛舞の類まで、漏るゝ事なく學ばせ給ふに、兄義倘にも立優り、こと〴〵く習ひうかめ、末頼もしくぞ見えにける。次郎の君、はや十三に成り給ひければ、光といふ字を冠らせ、光氏と名乗るべしと、父義正より言下し、近きに元服あるべしと、その用意専らなり。或時杉生、義正の御前に罷出で、「今日は花桐様の御忌日にて侍る故、蓮臺寺へ參詣致し、嵯峨の間島の後室方へ、夫より立寄り候に、思ひがけなき尼刈萱、九年が間諸國を廻り、此度鞍馬の麓とやらんに、草の庵を營みて、むかし命を助けたる、後室にその禮を、述べん爲に來りしと、しめ〴〵と物語り、桔梗と言ひし其時の、面影は更になく、瘦衰へて殊勝の姿、道徳も長けたる由、むかしの恨は消果てて、私もそゞろに落涙。かの尼の申すには、昨日今日の様なれど、指折りみれば若君様、はや今年はお十三、思ひ違へて勿體ない、切害なさんとした時は、わづかお年はおいつゝなりしが、お寢間へ忍ぶ足音を、聞知り給ひし御聰明、御顔容も淸らかに、近頃は光る君と、世に稱すると承はる、今生の思出に、御目見を願ひたいと、涙を溢して頼みし故、嵯峨の後室諸共に、私部屋まで誘ひし」ト申上ぐれば義正は、機嫌よげに打點き、「其夜の事は後室より、詳かに聞置きたり。光氏を害さんと、爲したるは憎けれど、晝顔には忠臣者、殊に惡念發起して、姿を變へし上からは、此世を去りし花桐も、今は恨の晴れつらん。其者是

ば呼ばずして、光る君とぞ稱へける。七つの年學問始ありけるが、一を聞いて萬を知るの器量顯れければ、義正の喜悦大方ならず、ある時富徽の前の方へ渡り給ひ、「今改めて言ふべき事にはあらねど、次郎は既に五つの年、花桐に別れたれば、御身の外に誰をか賴まん。然るにその中親しからず。必竟これ常に離れて居る故なれば、今より御身の傍に据置き、兄義尙と諸共に、物學あそびをもせさせくれよ」ト仰せければ、富徽の前うちほゝゑみ、「君の寵を蒙りし、花桐の產みたるなれば、兄義尙を差越して、家をや讓り給はんかと、疑ひ思ふ心より、今まで次郎を疎みしが、その御心だに無きならば、なぜかは隔て候べき」ト心の底を包みもやらず、打出して宣ふにぞ、義正額の汗を拭ひ、「いぬる年花桐が、四十九日に當れる夜、彼が家に止めし修行者、次郎を相して言ひけるは、此兒德は備へたれど、家を繼がさば世を亂さん、謹むべし〳〵と、懇に諭せし由を、花桐の母より聞き、其後名ある陰陽師に、たび〳〵次郎を占はするに、かの修業者の言ひしに違はず。一旦彼を家督にと、思ひし己が過失を、とく改めて足利の、世嗣は兄の義尙と、心の中に定めたり。疑晴して是よりは、次郎をいたはり給はれよ」ト世に睦しく宣まへば、富徽の前打喜び、「御心安く思召せ、次郎が顏の愛らしさ、よし仇敵の子なりとも、誰か憎しみ思ふべき」ト、夫よりは次郎の君を、片時も側を放ち給はず、それ〳〵の師を招き、

寢間の違ひで主同然の、人を殺した因果が廻り、又も臥床の間違で、妹の刃で死ぬるも因緣。是さへいへばもう此世に、思ひ置く事更になし」ト心緩めばがつくりと、其儘息は絶えにけり。「私も共に」ト刈萱が、懷劍取らんと立寄るを、「それ杉生止めよ」ト後室は近く寄り、「兄が末期の物語、聞いて恨は晴れたであらう。花桐のみか此母まで、罪なき者を討たんとした、其言譯には妾が手に、懸りて死するが道なるを、自害せんとはそりや吾儘」「成程あやまり入りました、御尤なおつしやりかた、お長刀を穢さんより、私がその懷劍で」ト手を打合せ覺悟の體。「ヲヽしほらしい」ト後室は、懷劍取上げ刈萱が、髻根より切拂ひ、「主の爲には親をも討つ、兄とはいへど晝顏を、切害したる泥藏を、手に懸けたるは過ならず。さいはひ爰に鉦撞木、兄の姿をその儘に、寫して女のおひ聖、諸國修行の身となりて、亡き人々の菩提をとや」ト仰にはつと有難泣、はや遠近に亂れ鷄、さすがに永き秋の夜も、曉近くなりにけり。

是より先に富徽の前、女君を産み給ふ。是この次郎の妹なり。其外の側室にも、近年御子を持ちたるあり、その母の名その子の名を、ひとつ〴〵に記さんには、讀み給ふに煩はし。末々にその子の事を、言ひ出づる時說分くべし。

年月經るに從ひ、次郎の君の顏容いよ〳〵淸く、光り輝くばかりなりければ、人々次郎の名を

二編　上

其時後室打點き、「ヲヽしんびやうなる刈萱が白狀。兄泥藏とやらんにも、妹とおなじ心にて、此家へは來りしか」ト問はれて手負は目を見開き、「いや／＼全く左樣の事ならず、是妹、念願かなひて御主人の、敵は討つた、喜べ／＼。晝顏殿を殺したは、この兄ぢや泥藏だ。後室樣へ申シます。妹を上げた其縁で、晝顏が里の使や何くれと、常に出入りて家來同然。或時晝顏私を、人無き所へ招寄せ、あの花桐に寵を奪はれ、今ではあるか無きかのみ、何卒彼を亡者に、してくれまいかと密の頼み、事調へば妹も我も、出世を頼み忍入り、たしか此所ぞと給襖の、模樣を見れば亂れ桐、仕濟したりと夜具越に、たつた一突跡を暗まし、夜明けて聞けば其晝間、部屋とへやとが入代り、我手に懸しは晝顏殿。アヽ惡い事はせぬものと、惡念爰に發起して、夫より諸國を打廻り、久しぶりにて都へ出で、泊り合せた此家の內、看經しながら障子越、杉生が物語、聞いてさては此位牌が、花桐殿でありけるか、生きてござる其時に、殺さうとした己が回向、何とてあの世で受けられうと、思へば頻りに物凄く、夜著打被いで臥したるが、

修紫田舎源氏二編序

全本四冊
仙鶴堂梓

室町御所を大内に比し、足利光氏といふつくり名して、光君になぞらへ、都の事を編りながら、田舎の字を冠けたるは、詞の鄙びし故なりけり。されば源氏に竪横あり、この冊子には又間あり。初編四冊は桐壺の半にして筆を止め、今此編は同巻の殘れるよりして、帚木の間の事を著しつ。葵の巻の車をひきあげ、歌舞伎、繰り、物語、三ツが一ツになつたる繪雙紙。すゑはねのこの餅につく、趣向に盡きたらつきた時と、まづ紅葉賀の淨瑠璃まで、腹のうちにて稿し、序幕に次だ新狂言。こゝがしどまの無言ぢや〳〵。

文政庚寅春發行
辛卯春再彫

柳亭種彦誌

の桔梗が懷劍を、袖に隱して此お家を、目懸けて來るは心得ずと、籠より下りてとつて返し、後を跟けて障子越、樣子は聞いて居りました。サア尋常に樣子をいや」と問詰められて顏を上げ、「もう何をか包みませう。杉生殿の言うた通り、元は桔梗と申した者。主人靑顏非業の死は、日頃から中惡しき、花桐が仕業なりと、人も言へば我も思ひ、主人の敵花桐を、のめ〳〵置くが口惜さ、罪に陷さん計略も、事成らずして館を拂はれ、五年このかた跟狙へど、たま〳〵の物詣も、同勢數多從へば、近寄る事も情なや、遂には此世に亡人と、なりては討たん敵もなし、せめては其母其子なりと、討つて未來の御主人へ、手向んものと此家へ奉公。其夜よりして此劍、懷にして深更に、お寢間をそつと窺へば、聰明叡智の若君の、御心にや徹しけん、わつと言うては魘え給ふ、其聲に驚きて、本意を遂せぬその中に、明日は館へ御歸りと、聞いていよいよ心急き、とつおいつの思案最中、後室樣は夫とも知らず、己が代りに花桐が、墓へ參れとおつしやりつけ、石になつても主人の敵、足を向くるも穢らはしく、供の僕は是よりして、遂電せよと金を與へ、道にて一人夜を更し、勝手は知れた此寢間へ、燈火吹消し忍入り、探る手先に當つた切髮、あなたと思うて只一突。火影に見れば五年以前、別れし兄の泥藏殿。敵はうたで現在の、兄を殺せし此身の不運。サア御存分に遊ばせ」ト惡びれもせず控へけり。

め、しを〳〵として歸りけり。後室は後見送り、「召使うた女の中に、しほらしいはあの杉生。ヲヽ女と云へば刈萱は、なぜ戻らぬことぢややら。斯うして待つても居られまい。鉦鼓の音の止んだのは、回向が果てて修行者も、もう休まれたものであらう。どれ私も納戸へいて、和子樣のお添臥。コレ女子ども、あなたのお目の覺めぬやう、お布團どもおかけ申しや」ト打連れ納戸へ入りにけり。暫くあつて修行者の、臥したる一間に魂ぎる聲、襖障子の倒るゝ音、只事ならずと後室は、用意の長刀掻込んで、窺ひ給へど燈火は、消えてあいろも見えばこそ。「やア盜賊の入つたるぞ。手燭々々」ト呼はり給ふ、聲に驚きてん〴〵に、掲出でたる燈火に、よく〳〵見れば新參の、腰元刈萱修行者の、臥したる上に乘かゝり、咽をぐすと懷劍にて、突貫いてぞ居たりける。「すは曲者よ」ト犇く人々。刈萱さまで周章ず、火影にとつくと修行者の、顏を見やりて始て驚き、「思ひがけなき、コリヤ兄上」はつとばかりに差俯く。氣丈の後室飛かゝり、長刀杖に刈萱が、裳を押へて動せず。「さいはひ吭は外れた樣子、手負をいたはりとらすべし。サア刈萱、心得がたき此有樣、包まず語れ」ト懷劍を、拂ひ落して突放され、よろめく處を杉生が、走り入つて捕つて押へ、「此女は晝顏殿の、召使はれし桔梗といふ者、そのむかし花桐樣を廊下へ閉籠め、御難儀を懸けたも確に是が仕業。今私がお暇頂き、駕にて歸る向ふから、こ

高く生上り、月影ばかり八重葎に、さはらでさし入るこの伏屋に、若君をなが〳〵と、置きまゐらせんは勿體なし。夜も明果てなばお迎の、人をば早く賜はるべし。仰を背くに似たれども、子を先だてて憂目をみる、妾は御前へ恐あり。只朝夕に持佛へ對ひ、涙ぞ老の友なる」ト、鼻打かめば杉生も、目を擦赤め聲曇り、「御所樣にもその如く、一間所に籠らせ給ひ、今まで我身の行に、曲れる事はせざりしが、花桐ゆゑには世の人の、怨を受けしも宿世の緣、片時側を放すのも、懶かりしも斯くばかり、短き契の故かとて、御膳も進まず奥殿へ、絶えて渡らせ給はねば、死しての後まで人々の、胸を痛ます女ぞと、富徽の方は思すよし。イヤとやかうと申すうち、夜も早更しけはひなれば、とくお返事を遊ばせ」ト進められて涙を拂ひ、御返事さらさらと、書認めて差出せば、杉生は受取りて、暇乞ひつゝ下立てば、早くも月は山の端に、入る方の空澄渡り、すゞしき風の音づれて、蟲の聲々鳴盡し、いとゞ哀を催され、離れ難くて杉生は、暫し軒端に彳めり。後室は、つと立上り、御廚子に殘る花桐が、櫛笄を取出し、せめては是を遺物とも、見倣せよかしと差出し、

　　鈴蟲の猶ふり添へつ袖の露

打吟じつゝ背くる顏。心を察して杉生も、差俯きて言葉なく、涙に絞る袖袂、遺物の品々請納

歸れ〳〵とおつしやる故、せん方なく室町樣へ、上ると何やら御用も繁く、お見舞も申しませぬ。ヲヽ和子樣は御機嫌よう、御眠なつてでござりますの。さて御所樣には夕月夜の、面白き景色を眺めてましませしが、私をお呼びなされ、斯ういふ時は花桐と、琴彈合せ歌を詠み、遊びしことの思出され、一入彼がなつかしい。又義尙を見るにつけ、次郎はいかにしたるぞと、戀しさも彌まさる。明日は早々あなたと共に、上るやうにと其外に、仰せられたき數々は、あたりの人めを思召す、お顏を猜して詳しくは、承はらずに參りました」ト御文を差出せば、後室は押頂き、「歎き暮して目も疎く、讀みえんことも覺束なし。されども君の御威光の、光に照して拜さん」ト靜やかに繰開き、

程經らば紛れもせんとまち過す、月日に添へていと忘れ難きは、わりなきわざになん。幼き人はいかにか、形見と思へばいよ〳〵見まくほし。

など細々と書かせ給ひて、

宮城野の小萩はいかに秋の風

讀みも果てずに涙にむせび、暫く詞もなかりしが、稍あつて顏を上げ、「夫知義世を去りても、娘の恥と思ふから、見苦しからず住なしゝが、日數重なる物思に、庭の塵だにとらせねば、草は

鳴し、若君の顔打見やり、「はッて氣高き生付。我高麗國の相人に、口傳を請しは三年以前、未だかゝる相を見ず。正しく此兒、天が下しるべき德は備へながら、しかする時は世の姤、人の恨に家國の、亂を遂に引出さん、只その位に即く人の、後見となり給はゞ、德隱れなく名の秀で、榮え給ふに疑なし。斯程の兒の輕々しく、此所邊に在するは、心得難し」ト問ひければ、後室は押包み、「なんのたかで私が孫、世を治むるの位のとは、思ひも寄らぬ事ながら、今言ひ給ひし百分一、運があつても此子の仕合。まア〳〵夫は差置いて、今もお話申した通り、此頃からの夜毎のふしぎ。ゆうべまで此婆が、抱いて寐たのはあれ彼所の、佛壇の次の小座敷、逆さ柱のある家や、梛木の下に臥す時は、大人もおびゆるものぢやとやら。今宵は私が納戸の内へ、一間を變へ臥させませう。修行者殿には今までの、此子の寐間へ試みに、今宵眠んで下さりませ」「いやもう、逆さ柱が千本あつても、野に伏し山に寐た身體、ちつとも厭ひは致しませぬ。けふも十里餘りの路、殊の外疲れました。御回向濟んだら次の間で」「ゆる〳〵お休みなされませ。それ女子ども御案內」「斯うおいでなされませ」ト襖閉切り入りにけり。表の方に人の來る氣色は誰そと後室は、月の光に透し見て、「やゝ杉生ではないかいの」「はい、後室樣、是においで遊しますか、嘸お淋しうございませう。私は此方に居つて、御介抱も致したけれど、若君樣が手前達は

ながら娘の墓へ、名代に參つてたも」「あの花桐樣とやらの」「おいのウ、鳥邊野の蓮臺寺、供に附けてやる男が、所は知つてゐる。提燈持たせて早うゆきや」「はい」とはいへどうぢ〳〵と、座を立兼ねしが何やらん、心に點き、「左樣なら是から直に」ト抱帶、しめつゝ供の男を呼び、思案しながら出でて行く。後室空を打仰ぎ、「あゝ秋の日の短かさ、もう暮るに間もあるまい。和子樣はお眠氣さうな、お床にはまだ早からう。これ女子共〳〵、彼所の搔卷取つてきて、假におねかし申して置きや」ト膝より移す折からに、鉦鼓の音も澄渡り、諸國を廻る修行者の、門にイみ回向なす。「ヲヽさいはひ」ト後室は、女どもして呼入れさせ、「今日は娘の四十九日、麁末の非時を進らせん、苦しからずは此所に一夜、明させ給へ」トありければ、修行者は打喜び、「佛事を營み給ふ日に、參り合すもふしぎの奇緣。さあらば仰に從ひて、一夜の惠蒙らん」ト、座に打通れば後室は、「まづお茶菓子を持つておぢや。夕暮から野分立ち、肌寒いのに其緣の、障子をば閉したがよい」ト心附けて修行者の、邊近く座を構へ、「餘念もなう是此所に、寢て居るは私が孫、何した事か四五日此かた、每夜々々物に魘はれ、わつと聲立て起上り、暫しが間氣もつかねば、一方ならぬ私が苦勞、靈佛靈社を拜まれた、その數珠を頂かせ、加持してとらせて下さりませ」ト賴めば修行者打點き、「夫は何より易いこと」ト言ひつゝ口に呪文を唱へ、數珠さら〳〵と擦

き給へば、其儘膝に抱上げ、「いたいけな事おつしやる、娘の事が思出され、悲しうてなりませぬ。野邊送する時も、棺へ納めてしまうても、矢張死んだと思はれず、灰に成つたを見るならば、あきらめることもやと、鳥邊野まで送つたれど、乘物から落ちさうなと、人々に止められ、歸つて今に花桐が、そこらに笑うて居る樣な。同じ煙となりもせず、何の因果で生存らへ、この悲みはする事ぞ」と歎き給へば若君も、言葉はなくて諸袖を、顏に押當て泣噦り。後室やうやう氣を取直し、「あゝひよんな事言出して、あなたを猶々泣かせました。御所樣の仰にて、内君樣同樣な、お位を法名へ下さつたれば、死んでも滿足。さア御機嫌お直し遊ばしませ。最妾も泣きませぬ。これ刈萱、今和子樣のおつしやる通り、御所よりのお附の者は、皆彼方がお戻しなされ、お側に女子が少いから、其方は抱へた新參、漸く四五日ゐやる故、何にも樣子は知るまいが、和子を生んだ妾の娘は、御所樣のお氣にいり、妬み猜みで惡う言うた、朋輩もあつたれど、死んでの後は彼樣な、氣立のよい者は無いと、今では結句褒むるといふ事。其方も若いが人は只、心從順に持つがよい。アヽ妾とした事が、馴染もない其方に異見、年寄の癖ぢやと思ひ、腹立ててくれやるな」ト言ふに刈萱手をつかへ、「何の腹を立ちませう、有難うござります。左樣なら若君樣、あすはいよ〳〵室町へ」「ヲヽ、お歸りなさる。夫に附き妾は種々用もあり、大儀

へず、茫然として在せしが、稍あつて涙を拂ひ、「あゝ過りし花桐が、最期は歎きて返らぬこと。我汝は次郎を嵯峨へ伴ひ、死顔なりと今一度、名殘に彼に見せて後、暫し其家に留置くべし。我勅命を蒙りて、蟇目の式を禁裏にて、勤むること近きにあれば、我子ながらも忌服ある、次郎は館に置き難し。尤も七歳未滿の者、今は佛忌のさたなけれど、是舊禮に據るなり」ト、供人命じて次郎の君を、嵯峨野へ送り給ひけり。

さらでも秋の夕暮は、淋しき嵯峨の片邊、千草に啣く蟲ならで、泣きつゝ明す花桐が、母は丹波の郡領たる、間島知義が後室なり。知義早く世を去りて、丹波の住居を此所に移し、室町御所の女のみ、力となしつゝ暮せしが、幸にして義正の、寵を蒙り胤を宿し、喜ぶかひも夏の野の、草葉の露と消果てて、はや夢の間に七々日、露けき秋となりにける。次郎の君は此家の腰元、刈萱誘ひ立出で給ひ、後室に打向ひ、「母樣の忌も明日かぎり、夫故に父上より、館へ戻れと昨日御使。お側に居るも今宵ばかり、お名殘惜しう存じます」トしとやかに述べ給へば、後室はつと恐入り、「難有いお詞なれど、下世話に申す腹は借物、義正公の若君が、郡領づれの妻や子を、母上の婆樣のと、必ずともにおつしやるな」「いへ〳〵夫ぢやに依つて館から、附の者をば皆歸し、此所には誰も聞手はない。おりや何時までも祖母樣に、抱かれて寢たい」ト泣

へども、さほどに願はゞ是非もなし、今日より名ある驗者に言付け、病氣快氣の修法をせさせん、心確に養生せよ。又奧富徽の外許さゞる乘物を、今より汝にとらする間、せめては夫を故郷へ、飾る錦と思ひなし、徐に嵯峨へ赴くべし。とく〳〵次郎を呼出し、花桐に逢はせよ」ト、仰に傅おち乳人、誘ひ申せば花桐は、少し御前へにじり出で、「恐ながら」ト抱上げ、是を名殘と思ふより、暫しが程は御顏を、守り詰めて吐息と共に、

撫子に振返りけり別れ道

ト俳諧の句を小聲に吟じ、言ひたき事はありながら、人目を憚り詞なく、息も絶えつゝ歎きしが、かくては果てじと若君を、御座に直して顏を上げ、「君が情の下かげに、露の命の消えやらずば、又こそ御目に懸らめ」ト、見返りがちに立出づれば、義正は胸苦しく、其夜は更に睡眠まず。「かくまで病に疲れし體、乘物の裡だにも心許なく思ふなり。嵯峨に歸りし其後は、いかなる樣子か見て參れ」ト近習の武士を早馬にて、急がせ給ふと引違へ、腰元杉生遽しく、嵯峨より歸りて御前へ出で、義正公を見るよりも、物も得言はず伏轉べば、「こは氣遣はし、歎かずと仔細を語れ」ト義正公の、仰にやう〳〵心付き、「夜半を過る頃よりして、俄に病重り給ひ、御藥祈禱の驗もなく、早くも消果て給ひし」ト、聲の限に泣叫べは、義正はつと心迷ひ、夢とも思ひ辨

倘を差置きて、彼に家を繼がすべき、結構ありとの風説は、全く人の讒言なり、心にな懸け給ひそ」ト、しめ〴〵と仰せければ、富徽の前も疑解け、人々を呼集ひ、盃を上げ給ひけり。

かくて後も義正、花桐を愛する事猶思ひ止まらず、人の恨み譏りをも、憚らせ給はねば、遂には富徽の前と、妹脊の交情疎々しくなりもて行き、重ねては諌の詞をも入れず。あゝ人に物思はする女かなとて、是より花桐を、富徽の前も大方ならず、妬き者にぞ思しける。

其年の夏、花桐ふと風の心地と打臥せしが、一日腰元の女に助けられ、やう〳〵御前に出でて申しけるは、「去る頃よりの妾が病氣、里へ下りてゆる〳〵と、保養をなさんと願うたれど、夫程の煩は、汝には常にある事なれば、まづ暫時試みよと、仰に從ひ止まりしが、日々に重りて五六日、以前よりは身も弱り、もはや本復おもひもよらず。嵯峨野の母も部屋までは、度々參りてお暇を、少しも早う願ふ樣、くれ〴〵申置きましたれば、お聞分あそばして、嵯峨野へお戻し下さらば、此上もなき御恵、偏に願ひ上げます」ト言ふさへもいと苦しげに、嫋々とせし其姿、譬へていはゞ太液の、芙蓉の花の日に凋み、未央の柳秋風に、痛める樣に似通ひて、涙勝なる物思、目元ははれて面痩せて、なほ嬋妍に美しゝ。義正も胸塞がり、「終に逝くべき冥途の道、夫さへ後れ先だたじと、契りしことも仇となり、成行く果を見屆けぬは、心苦しく思

妾少し氣色を損じ、そちが手跡と小菊より、聞きしと言ひしは皆詐、其以前より朋輩なれば、彼には密事を語りつらんと、まづ試に問ひけるなり。誠は織女へ奉る、此歌と比べ見て、大方は推したれど、確なる事知らざる故、妾も共に花桐に、恨ある體に見せしを、眞と思ひてみづから白狀、主人の仇を報ぜんと、心ざしはしをらしけれど、花桐はその性、心正しく道を守り、かゝる非道をなす者ならず、書顏が最期には、必ず深き故ありて、敵は外にあるべきなり。其方達を館に置かば、又何事をか仕出さんと、叱りつ宥めつ其夜の中に、桔梗小菊の兩人は、密に暇を出したれば、妾より外知る人なし。是等の事は婢女の、思ひ違へといひながら、其元は我君の、花桐のみを御寵愛、夫よりも引出す怨み妬み。抑花桐あの次郎を、娠りてより何事も、妾に勝りて傅き給ひ、産のまかなひ宮詣、いま袴著のことぶきまで、兄義尙にも立越えて、華やかになし給へば、或は怨み或は疑ひ、家子郎黨、兄弟、二つに分るその時は、家の亂れは國の禍、そこに御心付かざるか。かく申せばとてゆめいさゝか、妾が妬みにあらざる證は、そのにせ文の主を糺し、花桐に無き名を負せず、心一つに納めしにて、知らせ給へ」ト席を打ち、涙と共に諫むるにぞ、義正後悔面に現れ、「花桐は父を亡ひ、世に便なき者なれば、不便と思ふ心より、人の恨世の譏に、心付かざるわが愚さ、御身に面を向け難し。兄義

手跡には似も付かず、偖は彼に意趣ある者、此文をこしらへて、菓子樣の物を包み、狆に與へて妾が目に觸れ、花桐を無實の罪に、落さん巧と心付き、二度三度繰返し、よく其手風を考ふれば、晝顏が手跡に似たり。されども彼は世になき人、若や彼に手本を乞ひ、夫を習ひし者やあると、まづこの事は押包み、館にあるとあらゆる女、婢水仕に至るまで、七夕へ奉る歌を書いてえさせよと、一人も漏さず取集め、その文と照し合せ、夫か是かと能くみれば、桔梗といへる婢が、書いたる歌と同じ筆。偖こそと其者の、素姓を密に尋ぬれば、元晝顏に仕へし女、晝顏はかなくなりて後、朋輩小菊と諸共に、まだ此館に在りと聞き、まづ小菊を先へ招き、一間の中へ押込め置き、重ねて桔梗を呼出し、此文は其方が、書いたる事ははや小菊を、騙し尋ねて聞き置きたり、そちが古主晝顏を、人知らず殺せしは、花桐が所業と思ひ、その花桐を罪に落し、主の恨を晴さんとは、賴もしい心ざし、妾とても寵を奪はれ、男子をさへ設けし花桐、何とて心よかるべき、愈そちに晝顏の、仇を報はん心あらば、迂遠なる僞筆より、妾に力を添へてくれ、花桐に憂目を見する、工夫は兼て做し置いたりと、密やかに囁けば、女心に實と思ひ、かく顯はれし上からは、何かは包み侍るべき、賴み聞えし晝顏は、枯れて咲きでる花桐が、日頃よりの妬ましさ、小菊が申上げたる通り、私の所業ぞと、事細やかにかたるを聞き、

ぎの性なれば、彌生中旬に急がし立て、其儀式を行ひ給ふ。衣服調度の美を盡したる、總ての結構、義尙の袴著の例にも優りてみえければ、こは道ならぬ事なりと、世に譏る者多かりけり。富徽の前は聞くに忍びず、今は是非なしあからさまに、君を諫め申さんとて、御前へ渡り給ふ。御側に侍ひける、花桐かくと見るよりも、遙に退き敬ひ申せば、次郎の君も席を下り、いたいけしたる手をつかへ、頭を下げて在するにぞ、富徽の前機嫌よく、「是は〳〵おとなしゆう、さア手つかずと此所へおぢや。花桐も息災で」ト言流して御前に對ひ、「御酒宴さなかも顧ず、妾が推して參りしは、密に申上ぐる仔細、暫の間この若諸共、皆の者は次へ立ち、休息しや」ト人を避け、近くすり寄り懐中より、一通の文取出し、「是御覽遊ばせ」ト差置き給へば義正は、不審ながら押開き、

かね〴〵賴みまゐらせし通り、御兄義尙君を不具なる身ともなし、我子次郎の君を以て、家を繼がせ給はる樣、御修法賴みまゐらせ候。

宛名は破れて院の字ばかり、わざと名書の處も割き、我子とあるのに花桐が、文としらせて疑を、引出す爲の全く僞筆。「されば其事にて侍るなり、申しいだすは始めてなれど、去年文月上旬、手飼の狆が其文に、戯れそばゆるを思はずも、取上げて心に驚き、よく〳〵見れば花桐が、

間、夫まで家臣の面々は、たゞ次郎の君と申すべし」とぞ宣ひける。
是よりして義正、此子を愛する事大方ならざるにより、今までは花桐を、輕しめたる家子郎黨に至るまで、俄に花桐を敬ふ事、さながら内君に等し。かくては嫡子義尙を乘越え、足利の家は此次郎の君や繼ぎ給はんかと、眉を顰むる者少からず、義正も其意なきにしもあらず見え給へば、内君富徽の前は胸いと安からず、心の中に思すやう、死したる晝顏われに對ひ、君の寵愛他に異なる花桐の懷胎が、若し男子なる時は、大事ならんと言懸けしを、只讒言とのみ思ひ、其儘に言消したるが、今こそ思ひ當つたれ。あら心憂やとて、折に觸れ、物によそへて義正を、屢々諫め給ひければ、道理に責められ義正は、心苦しさ限りなし。花桐は取分けて、心かよわき性なれば、そのうさ辛さいはん方なく、君の寵愛蒙らずばと、なか〳〵なる物思をぞしたりける。
かくて月日に關守なく、次郎の君は早五歳にぞなり給ひ、年よりは大人しく、その淸き事は、白き玉に匂を留めたるが如く、日頃花桐を憎し妬しと思ひたる女までも、此君を見る時は、思はずも打笑まれ、我抱き進らせん、いや我こそと爭ふほど、愛らしく生立ち給ひぬ。
御袴著のことぶきは、霜降月になし給ふが、世の常の習慣なれど、義正公はかゝる事にこと急

初編　下

花桐、晝顔が部屋に移りて後は、奥殿へ近き故に、通路の憂もなく、安堵の思をなしけるが、かの杉生が主人に仕ふるのまめやかなるを、義正も殆ど感じ、是より腰元の女となし、今までの如く花桐が傅と仕給ひぬ。さて程なく花桐は月滿ちて、いと安らかに男子をぞ產みたりける。義正いと心許なくて、產屋近く至り給ひければ、杉生は心得て、急ぎ若君を抱きて見せ參らすに、淸き事玉の如く、世に珍かなる容なりければ、義正の喜大方ならず、猶花桐の心地を尋ね給ひけるにぞ、杉生いよ〳〵畏り、「御血心露ばかりも候はず、かくてはすが〳〵と肥立ち給ふべきの間、御心安らかに在すべし。御產の後、密に仰ある樣は、君の御情を蒙りし女も數多候ふ中に、かく目出度男子を設けしは、前の世よりの契や深かりけん、嬉しき時の涙は、猶止めかぬるものぞとて、御袖も朽つるばかりなり」ト申しければ、義正は打笑ませ給ひ、「既に家を讓るべき、男子は富徵が產みたるあり、幼けれども嫡子なれば、わが一字を讓り義尙と名乘らす。然れども彼一人にて最心細く思ひしに、今幸に此子を得たり。名は追つて沙汰すべきの

戸と共に轉入る。「やれ驚く事なかれ」ト宣ふ聲は義正公、左に手燭右の手に、枕の刀携へて、悠然として立ち給へば、「輕々しきこの御有樣、何故あつて」ト花桐は、はつとばかりに飛退り、敬ひ申せば杉生も、隱るゝ隈なくうろ〳〵と、只身を震はし蹲まる。義正につこと打笑み給ひ、「今宵に限り夜更くれども、其方の來ぬが訝しく、忍び來りし唐戸口、内より深紅の紐にこま結び、解かんとすれど紙捻にて、八重九重に絡みたれば、いとむづかしきに心焦られ、刀を拔いて切つたりしが、その光にて驚きつらん。又冴え返る此夜寒に、肌薄な其姿、故こそあらめ」ト言ひ給へば、「はつ」トお請は仕ながらも、人に罪をや負せんと、口籠りつゝ花桐が、うちつく後に杉生は、耐へ兼ねてやそろ〳〵這出で、「憚ながら申上げます。主人の通ふ此廊下へ、あの通り魚の腸や、汚物を引散し、夫に衣服の穢れたを、取換に私が、歸りました其内に、兩方の戸を閉切つて、難儀を懸けた惡戯者、屹度御詮議遊ばして」ト言ふを花桐打消して、「是はしたり、又者の身も顧ず、恐多い。申上げて好い事なら私が言ふ、退つてゐや」ト叱り付けられ「はい〳〵」ト、青菜にしを〳〵立去るを、義正軈て呼止め、「あゝ大事ない、そこに居ろ。小性も連れず只一人、爰へ來たのは己も私、常とは違ふ、花桐も其樣に叱りやんな。コレ誰かある、晝顏に言聞すべき事のあり、早う是へ連れてこい」ト呼はり給ふを物影に、隱れ忍びし桔梗が

ても、人に恨は少しもない。コレ杉生、はしたなう聲立ちやんな。此花桐を御寵愛、夫に誇つて召使ふ、女子までが我儘なと、私が名まで出しやんな」ト言教ゆるも杉戸越。「夫ぢやと言うてあなた様、さうなさつて何時までも」「はて夜が明けたら誰ぞ見附けて、開けてくれる夫までは、今度の御會の兼題の、歌でも案じて見やうわいな」「まァ滅想な事おつしやりまし、春の夜寒にお小袖一つ」「いや寒うはない。其様に氣を揉まずとも、歸つて休みや。もう物いやんな、若し人が聞咎めては、みづからの恥をしらする様なもの。合點がいたか」ト又元の唐戸の、傍へ立戻り、再び言葉もあらざれば、杉生力なげ首し、是も隔の杉戸にもたれ、内の様子を窺ひゐる。

次第に更くる鐘の聲、鏗々として物凄く、折節その夜は嵐して、唐戸やり戸の透間漏る、風は衿より裳より、肌に通り身も冷えて、しぼめる姿花桐は、茫然として居たりしが、はや丑みつと覺しき頃、油盡きてか渡殿の、燈籠殘らず消失せて、あいろも更に見えわかず。女の細き心より、是や冥途に有りと聞く、暗穴道に迷ひしかと、思へばいとゞ怖氣だち、口の中にて觀音の、御名を唱へて居る折から、彼所にはつたと物音して、開く唐戸に漏れくる火影、嬉しや誰ぞとよらんとすれば、きらりと閃めく白刃の光。あつとばかりに花桐が、魂ぎる聲を聞くよりも、南無三主人の身の上と、驚く杉生一生懸命、碎けよ破れよと打叩けば、敷居外れて轉けかゝる、杉

が、「旦那様、夫において遊ばすか。私が戻らぬうち、誰やらこゝのお杉戸へ、錠を下して這入られぬ」ト言ふに偖はと花桐は、裳かゝげて氣味わるく〳〵、此方へ立寄り聲を潜め、「是はしたり其様に、はしたなう叩きやんな。お唐戸も誰やらが、内から閉めて彼方へも、通られぬ様にしたは、私を嬲る悪戯であらう」ト聞いて杉生胸もやく〳〵、「御所様の御寵愛を、猜みをつてなんぞと言ふと、旦那様を困らす悪戯。一體あなたがおとなしい、お性質ゆゑ何事も、控目になさるから、好い事と思ひをつて、えゝまア如何したら腹が癒やう。内端になさるゝも事による、かういふ時には以後のみせしめ、御所様へ聞える程、大きな聲をなされませ」トあせるほど猶おとなしく、「同じ奉公する中にも、皆歴々の息女達、もつとも私も丹波の郡司、間島知義が娘なれど、不幸にして父様は、世を早くなし給ひ、母様ばかりを力草、夫さへ今は知つての通り、嵯峨の邊に微なお住居。其中にも私へは、心附けて下されども、世に時めける親を持つ、朋輩の心では、此花桐を人がましう、思はれぬのは皆道理、此身を恥ぢて退かぬ、それが憎さにすどの憂目、疾から心附いた故、折節毎の里住居、其儘にお暇を、願はうとは思うたれど、賤しい私に御不便かけ、勿體ない我君様の、お心に絆されて、又二つには母様の、私が流浪の身とならば、猶お力があるまいと、思ひ直して宮仕。たとへ此上どのやうな、憂恥を晒し

へ出づるには、此わたどのより外にはない。あちらは杉戸、こちらは唐戸、序のことにかうして」トひそ〱聲に晝顔が、言含めるを二人の女、にこ〱顔に打點き、その用意をぞしたりける。かくとは夢にも白小袖、肌著上著を絓りて、花桐はしづ〱と、通ふ廊下の唐戸口、供の女子の杉生が、立止りて手に持ちし、雪洞の灯に邊を見廻し、「まアお待ち遊ばしませ。何やら否な臭がする。ゑへ汚い、旦那様のお裲やお小袖のお裾に、べつたり著いたのは、たしか魚の腸さうな。何してこゝに溢れてゐた」と立騒げども花桐は、さまで驚く氣色もなく、「臊さい臭がした故に、鼻をば袖で覆うたれど、裾の穢れは氣が付かぬ。此儘では上られまい」ト立戻るを押止め、「あれ〱御覧遊ばしませ、お廊下は一面に、譯もなう穢れてゐる。お召替は私が、直に取つて參りませう」「ヲヽそんなら大儀ながらさうしてたも」も半分聞かず行かんとするを呼止め、「コレ杉生、もう裾の穢れたに氣が付いては、少しの間も著てゐるは穢うてならぬ。これをば持つて歸つてたも」ト帯引解けば杉生は、小袖の褄を打返し、「濡れたのはお下召と、お袿の裾ばかり、お上召は綺麗なれば、お寒からうが少しの間、是を召して」トかひがひしく、小袖を肩に打懸けつ、火光に透して爪立足、飛越え〱立戻る。花桐は唐戸を開け、内にて待たんと立寄つて、押せども〱開かばこそ。こは心えずと躊躇ふ折、立戻つたる杉生

願。其方も早うお胤を宿しや」ト片頰につこと打笑ひ、見返りもせず入りたまへば、晝顔は茫然と、返さん言葉も投首して、案じに暮るゝ後より、「モシ旦那樣〳〵、何へおいでお遊ばした、お迎には參つたれど、わたくし共はお目通へ、出る事ならぬお聲故、差控へて居りました。もう日も入つて暗いのに、さアお歸り」ト勸められ、晝顔は何げなう、「ヲヽ小菊桔梗、よう氣が付いた。供しや」ト部屋へ歸れど心のもや〳〵、二人の女子を側へ近づけ、「先刻樣子は聞いたであらう。邪魔になる花桐を、遠ざけるには富徽樣の、お心を動かすが、近道と思ふから、言葉を巧に言上げたが、返つて御意に背いた樣子。こりや如何したらよからう」ト聞いて小菊がずつと出で、「成程聞いて居りました。明けても花桐暮れても花桐、あなたを始め他の女中は、ほんにほんにあり詮なし、さぞお腹が立ちませう。花桐樣は此前の、廊下を通つていつもお上り、たしか先刻お迎の、女子も行つた樣子なれば、もう程はあるまいに、何ぞ道へ惡戲して、恥をかかせて笑草。桔梗ちゐを振つて見や」トせな打叩けば飲込顏、「ヲヽ丁度よい物がある、拵へ溜た魚の腸、あれを廊下へ撒散し、花桐樣の著物の裾、暗闇でひかせたら、後では猫が飛付いて、何所も彼所も搔きむしり、旦那樣の意趣返、斑や虎がしてくれやう。コレ小菊、この盤臺を手傳うて、ださうではあるまいか」ト立騷ぐを押靜め、「あゝこれ高い、靜にしや。なるほど御前

致さねばならぬが道、陰言をいふやうなれど、それを知らぬはあの花桐、とりわけて御所様の、御寵愛を鼻にかけ、人を人とも思はぬ顔付、なんぞといふと病氣々々と、里へ下つて出養生、ほんに遠いが花の香と、諺にいふ通り、お側にゐるがたま〳〵ゆゑ、なほ御不便が重つて、お胤をも宿した様子、わが病身をば棚へ上げ、勿體ないあなた様や、私共が妬み猜みで、呪咀でも致す様に、讒言を申す取沙汰。毎夜々々花桐が、召されて通る度々に、私が部屋の前、尻目にかけて肩で風、旋風より恐しい、あの風で切られたら、古暦でもなほるまい」ト口の剱刃とぎたてて、鴛鴦の中さく言葉の綾、胸のもつれを繰掛けても、よらず觸らぬ富徽の前、「成程其方のいやる通り、人目に立つ程花桐は、わが君様のお氣にいり。唐土玄宗皇帝は、楊貴妃を寵愛し、夫より國の亂れしと、古き書にもみえたれば、その事をさへ思合せ、恐れながら御意見を、申さうかとも思うたれど、ひとつの賴は花桐は、心やさしき性質、あれに限りて讒言を、言ふやうな事はない。人を人とも思はぬの、尻目にかけて通るのとは、それは其方の心のひがみ」「いへ〳〵左様おつしやりますな。花桐が懷胎が、男子でござりますと、夫に誇つていよいよ我儘」「はて味な先繰して、其方はいかい苦勞性。足利の御代取は、妾が産んだ若子ばかり。それではいよ〳〵心強い。誰が産んだお子にもせよ、御所様のお血筋で、家を繼ぐのが妾が

偐紫田舍源氏

初編　上

柳亭種彦著

花の都の室町に、花を飾りし一構、花の御所とて時めきつ、旭の登る勢に、文字も緣ある東山、義正公の北の方、富徽の前と聞えしは、九國四國に隱れなき、大内爲滿が女にて、すでに去る年御產の紐、安らかに解きたまひ、男子設け給ひしかば、昔にいやまし人々の、尊敬大方ならざりけり。頃は睦月の下旬、ついまつ十種香貝おほひ、さま〴〵遊を仕盡して、月はなけれど黃昏の、空の景色を詠めんと、腰元の童女のみ、二人みたりを供につれ、庭の外方を打廻り、しばし彳み居給ひけり。「もうし〳〵內君樣、お庭の內とは申しながら、ろく〳〵お供の女中もなく、殊に夕暮、おあぶない」トいふに驚き振返り、「さういやるは晝顏か、ほんにまァ御所樣の、お日懸らるゝ女子共も、多い中でそなたほど、妾を勞る者はない」ト仰に猶もすり寄つて、「御意の通り私はじめ、御所樣のお寢間の端を、穢しまする女子共は、なほ〳〵あなたを大切に、

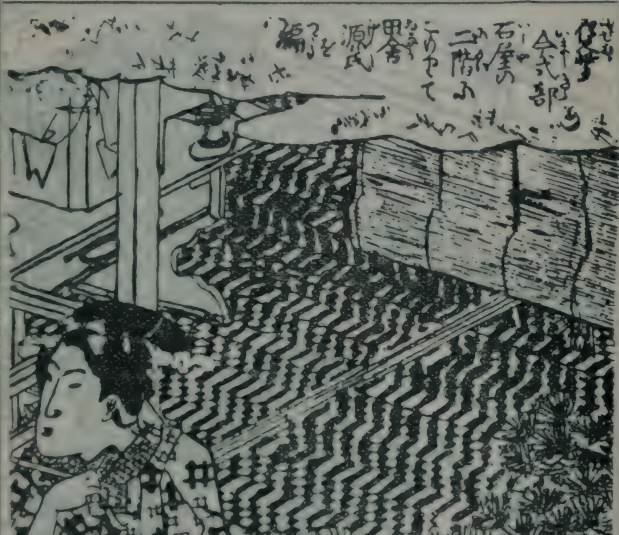

足利次郎光氏
光君不比


足利義正の別室
藤の方
藤壺の宮に比


長恨歌
春宵苦短
日高起
義正の愛妾
桐壺の更衣に比


東山義正公
桐壺の帝に比




石屋の二階にこもりて
田舎源氏を編る


紫式部上東門院のいとまをうけ
江州石山寺に参籠して源氏

婦女子の心遣ひ[illegible]を[illegible]縁を[illegible]体裁[illegible]草紙
うすの[illegible]白の宿[illegible]月ごろ[illegible]一家[illegible]八九分
當る[illegible]錦絵[illegible]知音[illegible]観音[illegible]
さして物語[illegible]屋の二階に仮住して[illegible]八月十日[illegible]海[illegible]より
うたゝね[illegible]草紙五十四帖[illegible]書[illegible]
とるに足らぬ草紙をわざと[illegible]紫式部の天台の深理を極め[illegible]
[illegible]の東の中に六道輪廻の因縁[illegible]書[illegible]式部の
然るに[illegible]仏の[illegible]
三観[illegible]一部八巻 錢の相場と思ひたる[illegible]賎[illegible]源氏の[illegible]
草[illegible]貴賎上下を[illegible]人[illegible]

文政十二年己丑正月發販
十三年庚寅二月再板　柳亭種彦記

一

大江戸の真中日本橋に近き式部小路といふ所によしと媚る女あり其名は
お藤と呼び女なりき初元結の頃より書籍を好み殊に読本の類を読むすべて人
家を立んと紫式部と呼ぶ人有自らも婦女の身を顧み源氏の俤を
聞る源氏物語に似たる文体を作らんと旦夕心に懸けしが書ども昔語りの草子のおもむきを
よまず歌を二十年より旋頭歌まで家のまのとの物語を知る人もなかりければ
筆とる事も得で只空しく嘆く人あり女なども仮字の物語を知る可きもなく然れど其人は
此を幸と要を摘みて若草の紅白雛鶴髪貫鏡小鏡の名など照して
意味解せて便よきやう十帖源氏よりもまた読えなすものに左言父の狂名を
書房まちとく読み過ぎて離遊に見ゆると所千代まで絵合を取て間違に二番煎
若草と新田節十帖源氏を浄瑠璃本の物草太郎と推量て未だ行はぬ葵
村上後妻討のうち白浪ともあれ略そのうちにこそ物語は今先にその筋を


江州石山寺什寶紫式部古硯
文政己丑新彫初編上
田舎源氏
柳亭種彦作
歌川國貞画
仙鶴堂梓


初編上

修紫田舍源氏　上　目錄

して、簡約奇警を眼目としたる黄表紙文學が、漸く讀本即ち歴史小說と接近し來りて、其內容の複雜を致せるものに過ぎず。而して其每葉插畫と文詞と相俟つて始めて趣味の津々たるを得るに至りては、黄表紙の類と聊か異なる事なく、これ實に此種草雙紙文學の最大特色なりとす。されば本文庫黄表紙十種の如く、每頁寫眞板となすの、最も完全なる覆刻法たる事いふ迄もなけれど、頁數の制限は到底之を許すべくもあらず。今玆に之を採錄するに當りては、只忠實に本文を校訂して、一句一語の過誤なからん事を期し、又、假名に妥當の漢字を配し、句讀を加へ、會話に鉤識を施し、以て通讀の便宜を圖れるのみ。若し夫れ原本の面影に至りては、本文中に併せ覆刻したる包紙繪、表紙繪、表紙裏繪、口繪、本文等の若干の插畫によりて、一斑に其全豹を推知するを得んか。

本書の校訂と校正とは專ら星野亮太郎氏の手に成れり。記して謝意を表す。

大正四年三月

校訂者　塚本哲三

なり、小説としての趣味も立場も、彼と相距る甚だ遠きものといふべく、彼は專ら個性心情の描寫に長じ、これは事件の變動推移を以て讀者を喜ばせんとするもの也。さはれ其よく彼が如き古雅の文を俗化し來りて、たとへ輪郭的にもせよ、皮相的にもせよ、事態人物彼と相表裏交涉して、巧に之を換骨奪胎し得たるの手腕は、大に之を推奬せざるを得ず。種彦の述作百を以て數ふべく、而して田舍源氏と、正本製と、晩年の作邯鄲諸國物語とは、其最も著名なるもの也。

草雙紙の合卷は文化三年式亭三馬が、「淺草觀音利益仇討雷太郎强惡物語」十卷を上梓するに當り、五冊宛を合綴して前後二編に製本せしめたるを初とすといふ。赤本黄表紙等の草雙紙は、一卷必ず五丁にして、短きは一卷長きも三卷に過ぎず、寬政の末よりは五冊物もやゝ行はれ、享和に入りては六卷物七卷物九卷物等の出づるありしも、なほ一卷每に別册として表紙貼外題を添へたるものなりしに、三馬の此擧ありて以來、この種の製本專ら世に行はれて、五枚一册の黄表紙仕立は漸く其絕を絕つに至れる也。要するに合卷とはもと製本上の名に

きた思へば實に才難しといふべし。

種彦が戲作は元より衣食の爲めに非ずして、謂はゞ一個の道樂仕事なり。而して其物事に甚だ器用にして而も凝性なる彼の性格は、文辭の末にも構圖の上にも、遺憾なく現じ來りて、道樂をしていよ〳〵道樂ならしめたるの觀なくんばあらず。そのこれあるが爲めに、文、畫と相俟つて、此種の作品に大成功を得たるものともいふべからん。殊に其婦女童幼の間に喜ばれたる事に至りては、殆んど他に其類を見ず、彼が病中田舍源氏の續稿の絕えん事を憂へて、爲に祈禱を行ひたる奧女中すらありきといふの一事に徵するも、如何に其流行の盛なりしかを窺ひ知るべし。田舍源氏が爾く流行を致せる一因として數ふべきは、源氏物語の如き、其名の最も人口に膾炙して、而も容易に讀過し得べからざる大文學が、面白く氣樂に讀み得るに至れりとの讀者の觀念これなるべし。種彦が其讀者心理を巧に操縱して、自作の聲價を高からしむるの料としたるは、爭ふべからざる事實なるべしといへども、而も田舍源氏は、單に源氏物語の輪郭的飜案、皮相的模倣たるに過ぎずして、其文致は更

西村屋與八板）時好に稱ひて、數種相續て出でたり、此合卷文を少くして畫を旨とす、其畫精妙、本文に勝れり、又文政十三年の春の新板、田舍源氏といふ合卷冊子、世評喋がしき迄に行はれたり（鶴屋板）、こも畫は國貞にて、其繪ます〳〵妙なれば也、既に數篇におよべり（但二十張合卷二冊を一編とす）、是をもて當今臭草紙の巨擘と稱せらる、其身に於ても自負甚しといふ、此人させる學力も無けれど、狂才は餘の作者の白眉たること、世の婦幼の許する所也、聞くに舊き義太夫本數十種を藏弆して戲作の種とし、且西鶴が浮世本八文字舍本などをも多く藏めたりと云ふ、さもあらんか、思ふに元祿年間より源氏ものがたりを無下に俗文につゞり、更に婦女の玩び物とせしも多かり、そは女五經あかしもの語五冊（延寶九年の印本也）、風流源氏（元祿中の古板也）、若草源氏（寶永三年の印本也）、雛鶴源氏（右の後篇なり）、猿源氏（享保三年の印本、江島生島の事をほのめかしく作り設けたるなり）、此餘なほあるべし、田舍源氏は竊に是等のを父母として作り設けたるなるべし、本を得知らで末を取るは流れての世の常なれば、きのふけふは某源氏など云ふ中本物さへ出でて、種彦の舉に倣ふもありと聞きにき、かばかりの作者にだにも及ぶものな

緒言

修紫田舍源氏三十八篇を收め、分ちて上下二卷となす。

田舍源氏は柳亭種彥の作に係り、草雙紙合卷中の翹楚白眉として最も人口に膾炙せるもの、其初編は文政十二年正月を以て發販せられ、其三十八編は天保六年の春世に出づ、而して三十九編まきばしらの卷を豫告せるまゝにて筆を絕てり。其後一筆菴可候が其由緣都廼俤を出して之が後篇と稱せる類なきにあらざれども、今凡て之を採らず。

種彥は本名を高屋彥四郎知久といひ、世々幕府に仕へて祿二百石を食み、文才に長じ、又繪畫、俳諧、狂歌をよくし、最初筆を黃表紙洒落本等に染めしが、後專ら草雙紙の合卷を作述し、遂に其一派の巨擘棟梁として、永く德川文學史の一角に其榮名を貽すに至れり。近世物之本江戶作者部類の筆者種彥が事を敍して曰く、

高屋氏、下谷御徒町御先手組屋敷內に借地して住めり、初は讀本をのみ綴りしが、文化の季の頃より、讀本を綴らず、草雙紙の作を旨とせり、文化丙子の新板、正本製(シヤウホンジタテ)といふ合卷物(歌川國貞畫、

偐紫田舎源氏

上

